泡鳴全集

第三卷

0

目次

鶴子

一

京都四條通りの有名な紅屋の娘と生れ、器量がいいところを見込まれて、○本願寺の御殿にあがつたのが緣となり、當時の執行所長として羽振りのよかつた眞下了得といふ學者的な僧の後妻になつた靜子――

先妻の子が二人ばかりあつたが、それはいぢめ拔いて追ひ出してしまつた。自分の實子に濱子と云ふ姉と鶴子といふ妹とがある。先妻の子を家から離れさせるのには、妻にあまい了得の異存はないので、何の苦もなかつたが、靜子――了得の妻――自身の實子である鶴子に關しては、いつも家庭に波瀾があつた。妹の方は生れると直ぐ、母の虛榮心と贅澤遊びとの犧牲になつて、車屋か何かのうちに里子にやられ、六歳になつてから、やうやく家に歸つたので、初めからわが家にはなつかなかつた。

姉の濱子はおとなしい方なので、妹の鶴子によくいぢめられた。それが姉妹とも、十代になつてからも、さうだ。母はそれを見兼て姉の方の肩を持つと、強情な妹は一層執念深くあばれ出す。

『お母さんはいつでも姉さんの肩ばかり持たはる』とすねるのだ。『織子どすさかい、なア。』
『織子！』と、母は行きつまるのが常だ。先妻の子をすべて追ひ出してしまつたのが、自分の世間から惡く云はれるもとになつてゐるのを知つてゐるからである。

靜子はいつもその申し譯らしいことを出入りの人々に云つて聽かせる。出入りの人々はすべて靜子によつて了得に取り入り、了得によつてまた本願寺に取り入らうとしてゐたものばかりだ。靜子の心を迎へる爲めに、その話が出るたんびに、特別に濱子を讃め、鶴子のことは餘りよく云はない。それを靜子はいい證據にして、鶴子を責める。

『財務部の川邊さんもさう云ふた、出入り商人の桝本さんもかう云ふた』と並べ立てると、今度は了得が鶴子の肩を持つて、その母をたしなめる。靜子のたぶさをつかんで、引きずりまはすことなどが度々あつた。然しこれは、兩子に對する愛の爭ひと云ふよりも、靜子に對する嫉妬からであつたといふ評判だ。

かの女は別に浮氣ツぽいところはない。が、然し生れつきの美人は、女好きの多い本願寺の關係者並に出入りのもの仲間のおほ評判であつた。なかには、事情を知つて、了得の心を焚きつける徒らものもあつた。靜子はそれを知つてゐるから、ぶたれやうが、引きずられやうが平氣で、直ぐその跡で絹物の不斷着の襟を正し、琴に向つて、『長恨歌』などを彈じてゐた。

本願寺では、法主をのぞいて、眞下了得ほどえらいものはなかつたし、世間一般でも、その名聲とその富有な生活とを羨んでゐた。たださへ豪傑肌の男が、自由に權勢を振るへるままに、したい放題をした。出るには必らず馬車、家にゐてはまた立派な衣食。子供までがそれを當り前のことにして、氣儘のし放題であつた。鶴子の如きは、殊に人に對して高くとまつてゐたばかりでなく、親や兄弟に對してもわが儘一方に育つて來た。

『その代り、鶴ちやんは正直やけれど、濱子さんは人が惡い』と云ふ親戚知人間の定評であつた。實際、姉の方は曾て男子に許したことはなく、自分の美を誇つて、却つて、ただ男子を迷はすのを樂しみにしてゐた樣だが、妹は、母が父と温泉などへ行つた留守が度かさなる間に、家の書生僧の田口巖と出來合つてしまつた。それが爲めに大悶着があつた末、巖嶽が出入りをとめられたこともある。

わが儘ものの集りなる家庭は他人の知らない亂脈の狀態になつてゐて、お互ひの間のみならず、他人に對しても邪推が行はれ、靜子も濱子も、少しでも自分の意が通らないと、さういふ筈がないと思ひ込み、きツと誰れか邪魔をするのだ。きツとこちらの云ふ通りにしないからだなどと、恨み言を云ふ。

了得が淸國へ巡回し、北京のホテルの長い梯子の絕頂からころげ落ちて死んだ時でも、決して了得自身が惡かつたのではない、――渠はその時泥醉してゐて、腰がふらついて、獨り手に落つこちたの

だが――敵があつて、つき落したのだとした。さうでなければ、いくら醉つてゐても、そばにつき添つてゐる者があるから、助ける筈だと。今に至るまで、さう信じてゐるし、また人にもさう話してゐる。

了得は金錢に淡白であつたから、殆ど蓄財などはしてなかつた。その上、權勢に附隨してゐただけの門弟や出入りの人々がぱつたり足を向けなくなつてから、眞下の門前には草が生えるばかり、收入の道は絕えてしまつた。それでも、なほ元の執行長眞下了得の家であるといふ氣位が高く、いい衣物を着て、いい食物を食し、靜子自身がさきになつて、毎日、お化粧や彈琴などを怠つたことがない。

『あんた、そないなことばツかりしてて、行く末をどう思ふてゐやはる』と里かたから注意されても、なか／＼その注意を取りあげないので、親しい親類でさへ、相手にしなくなつた。

『お化け屋敷見たいどす、な』といふ評判が立つた。荒れてだだツ廣い邸宅にたつた三人の女づれが――而も凄い程めかし込んで――住んでゐたからである。そして馬を賣り、馬車を賣り、馬丁に暇をやり、結構な什物を喰つてしまひ、その邸宅その物も人手に渡つた時には、もう、何ほどの現金も殘らなかつた。うまいことばかり云つて入り込んでゐた骨董屋や口錢取りに、家道具を殆ど全く自由にされてしまつた。

『けたいな人達や、なア』と氣がついた時は、もう追ツつかなかつた。いよ／＼窮して來たので、靜

子は自分の家の元の執事で、今は東京で某佛教雜誌を出してゐる增子憲行といふ人に泣きつき出した。增子も、止むを得ず、故了得に世話になつた弟子共から醵金でもして、眞下家の維持が出來る樣に奔走して見ようといふ（然しおぼつかないがと心では思つた）返事をした。

すると、直ぐ、案內もなく東京へ引ツ越して來た。十二月も餘日がすくなくなつた頃で、京都にゐれば、諸方への歲暮などの費用もかかるから早く來たと云ふわけであつた。

『今日、本鄕西片町へ落ちつき候』といふ通知が來た翌日、增子が兎に角訪問して見ると、四十四五歲の後家さんがおほ肌ぬぎになつて、お化粧をしてゐる最中だ。狹い家のことであるから、娘が障子を明けると、土間から直ぐそれがよく見える。渠はあがり兼て、躊躇してゐると、

『けふは、な、增子、これから芝居に行くのやさかい、またどうぞ來ておくれやす。』

『左樣で御座いますか』と答へて、增子はそこを出たが、そんな遊びが出來るのでは、困ると云つてもまださう困つてゐるのではあるまいと思つた。そして渠が三日ほど經て行つて見ると、その家は空家になつて、『かしや』札が張つてあつた。渠は狐にでもだまされてゐる樣な氣がした。

すると、年が明けて、一月の中旬になつて、またハガキが今度は青山から來て、鳥渡來てくれろとある。增子はしぶ〳〵ながら出て行くと、青山一丁目で、赤阪見附の方から來た電車を下りて、直ぐその線路と練兵場との間にある一廓內の細い橫町に這入り、枳殼垣根の中に三軒長屋があつて、一軒

は鍛冶屋、一軒は桶屋、その眞ン中の一軒だ。格子戸を這入ると、直ぐ八疊の座敷で、他はその横に二疊の間が臺どころにつゞいてあるだけだ。後家さんは誰れか知らない娘の子に琴を敎へてゐた。

『まア、ようこそ――まア、あがつて一服しておくれやす――』

お稽古が濟んで、その子が歸つてしまうと、靜子は琴を紙張りの壁に立てかけ、坐わり直しての挨拶だ。

『こなひだは、わざ〳〵來ておくれやしたけれど、忙しいもんどしたさかい、なア――その後一度、伺はう思てますけれど、矢ツ張り忙しなうて、な――琴の師匠になりまして、もう、一人二人來やはるので御座います。』

『それは兎に角結構なことです』と、增子は答へた。『で、お孃さん方はどうなさつてをります？』

『あの、濱子は、な、おとなしうもあり、また琴もよく出來るさかい、うちに置いて、わたしの手傳ひをさせる樣にしとりますが、鶴子の方はうちへ置いても仕やうがないさかい、あの、あんたもよう知つての、保險會社の田島にやつて置きます。』

『それは、また――』

『いや、增子、恩知らずの薄情ものが多い世の中にも、あの田島だけは感心な人や。こなひだも御年始に來て、な、お父さんにはいろ〳〵御世話になつたて、な――それ、眞宗保險と合併問題の時や――

御恩返しに鶴子の世話をしてやると云やはつた。』
『奥さんがさう云ふ思し召しなら、わたくしの方で別に申しあげることも御座りませんけれど、あの田島なら、決してそんなしほらしい考へから鶴子さんをお世話しようと云ふのでは御座りますまい――』
『そんなら、どう云ふわけどす？』
『さア、あの仁は――女にかけては、目がないのです。』
『へえ』と、びツくりして、『そんなことかい、な？　以前にも、そないなことがあつた。中田とかいふ子爵さんから養女にもろてやる云ふさかい、よう調べて見ると、目かけになるのやさうで――鶴子はおこつてしもて、ことわりました。――けれど、な、增子、どうせあんなやくたいな子やさかい、今度は、もう、死んだとおもてやつて置けばええやないか？』
『ですから、わたくしは何も申しますまい、その代り、跡で何ごとが起らうが、それをわたくしの方へ持つて來て貰うては困ります。』
『そりや何も云やせんさかい、な』と、靜子は二疊へ行つて、茶を入れて來て、『あの釀金のことはどないどすか？』
『それもです』と、增子は少し言葉尻を强くして、『奥さんの樣に氣儘、勝手では困ります。』

『どう勝手どす、な?』
『どうと申して、まだ成功するかせんか分らんのに、無斷で京都の方を引き拂うたり、西片町へ落ちつきなさるかと思ふと、いつのまにかこちらへ御移轉なさつたり、――から云ふことでは、とても、わたくし達はお世話出來かねますが――』
『そりやわたしが惡う御座いました。これから、何でもあんたに相談します。あんたに醵金を奔走でもして貰はんと、な、うちの暮しが立たんさかい、な――』
『成功するかどうか分りませんが、奔走はせんことはありません。』
『賴みます――ここへ引ツ越しましたのも、あの時、芝居に行て、歩兵の大尉とかしてゐやはる人のお母さんに出會ひましてな、自分も琴の師匠をしてゐやはるので、わたしにもそれになれ。それには青山邊がええと、親切に云ふてくらはりましたさかい、急に引き移りましたので御座います。』
『それも結構で御座りましよう。然し奥さん、申しあげて置きますが、今では、もとの御身分でないのですから、贅澤はおやめになつた方がよろしう御座ります。』
『それは、もう、よう承知どす。御覽の通り、こないな狹くるしい家に這入りまして、娘だけは仕やうが御座りませんけれど、わたしなどは成るべく御化粧一つせん樣にしとります。』
『では、兎も角、奔走は致して見ます』と、増子は立ちあがつた。そして、土間に下りて下駄をはく。

静子は見送つて來て濟まないと云ふ樣な顏つきでもぢ〳〵してゐたが、

『あ、鳥渡待つておくれやす』と云つて立ちあがる。眞向ふにある戸棚を明け、その中に這入り、紅葉のかたの附いた唐紙を半ば締めたが、その中で何か引き裂く樣な音がばり〳〵する。それを聽いてゐた増子、心では、前にも狐に化かされた樣な氣をさせられたのを思ひ出し、いよ〳〵不思議なことをする奧さんだ。ます〳〵滑稽なことを見せる後家さんだ、と樣に考へた。

すると、静子は、手に一枚の寫眞――寫眞帳からいま引き裂いたのである――を持つて出て來て、

『これは、な、ロンドンと云ふところから送つてもろた寫眞どすが、な、あんたのお子のおもちやにでも一つ持て返つてくらはれ』とさし出す。

『何だ、つまらんものを』と思つたが、折角呉れようと云ふのだから、『ありがたう御座ります』と受け取つて、別れた。

増子憲行はもと執事であつたと云ふ關係から、眞下の遺族の爲めに、兎に角、亡くなつた先生のおもな弟子ども三四人に醵金の相談をして見た。然しどの弟子も、どの弟子も同じ樣なことを云つて賛成しない。からだ――

『先生には無論世話になつたが、あんなわが儘な、氣違ひ同志見たいな家族の責任を受けるのはいやだ。』

増子は、自分の受け合つて見たことが不首尾なのにほと〳〵閉口した上、自分をもとの様な關係で取り扱ふのが餘り面白くもないので、眞下家へ成るべく近よらない樣になつた。

二

田島といふ保險屋へ行つた鶴子は、女にかけては有名な田島に自由にされてゐたと思つてる人もある。また、まだ全く、京都にゐる嚴獄と手が切れないから、田島の自由にならないので、返されたのだとも云はれる。兎に角、また家に歸つて來た。

かの女は、父がゐる頃からして、これまでにも、いろんな家へ養女の如くしてやられたことがある。また、女書生の樣にしてよその家にゐたこともある。それはただにかの女を好かない母の仕わざばかりではない――かの女が母や姉と喧嘩した時などは、自分から出て行つて、世話になる家を見つけたこともあるくらゐだ。然し、どこでも、どこでも、そこの主人か、家族か、書生かと衝突して歸つて來る。『また、どうして歸つたの』と、丁度獨りで琴の稽古をよその子にさせてゐた姉の濱子が糺問する。度々のことであるから、輕蔑の氣味もあるし、また困つた子だといふ心配もあるし、少し聲がするど過ぎた。すると、そこに坐わつた鶴子もたださへむかつくところだと云はないばかりに目に角を立て、荒い聲で、

『どうしてでもよろしい、あんたの知つたことやおへん。』

『さう』と、濱子はわざと聲を和らげ、よその子の手まへ、目に見えてゐる衝突を避けた。

全體、鶴子と云ふのは本名ではない——痩せて、すらりと脊が高いのが鶴に似てゐると云つて、子供の時から亡父がさう呼び慣してゐたのが、家族以外にも通り名となつてしまつた。それが佛頂づらをして、しなもなくつツ立つてゐたが、急に二疊の茶の間に行つたかと思ふと、わざとどたりとそのからだを横に投げた。その勢ひで、火鉢にかかつてゐる鐵瓶が五德をはづれて、灰神樂をあげた。

濱子が氣づいて、琴の手をやめ、立つて行つて見ると、火鉢から灰けむりが立つてゐるそばに、妹は、田島で拵らへて貰つたお召の小袖に繻珍の丸帶をつけたまま、平氣で、横になつてゐる。默つて、鐵瓶を直して置いて、濱子はお稽古をすませた。

習ひ子が歸つて行つた跡で、濱子は琴に向つたままじツと考へてゐると、一月下旬の夕がた近い寒さと家の見じめな狀態とが同時に自分の心にまで泌み込んで來る。そして妹がまたうちにゐるのを母が發見すると、また〳〵家に一騷動起きるだらうと思つて、それが厭で、厭でたまらない。こなひだ中から起つてゐる緣談も、乘り氣になつて聞けないのは、どうせ大した見込みのあるところではなし、その上妹のことや家の成り行きを考へるからであると思ふ。きのふからの洗ひ髮も長く垂れたままで、かき上げる氣にならない。そこへ、

『今歸りました』と、母の靜子が土間からあがつて來て、濱子と琴を隔てて斜に相對するところへ坐わる。

『寒うおしたやろ。』

『寒かつたことは寒かつたけれど、な、うれしいのは、向ふの醫者さん云ふのはなか〳〵結構に暮してゐやはるさうや。』

『もう、そんな話やめておくれやす――わたしはどうでもよろしうおす。』

『またそないなこと云ふて、あんたも鶴子のやうに氣儘どすか？』

『どうせ、これまでに碌な縁談はなかつたやおへんか？』

『それが、な、今度のはええさかい、な――それに、な、木村先生のとこへ行たら、鶴子を女優にしたらええ云やはつた。あの子は自分で女優になりたい云ふたさうや。』

『ふん』と、鼻で笑つて、『本人が望みなら、望み通りにした方が落つくどすやろ。』

『さうや、な。田島さんとこも餘り面白ない評判やし、あの子も厭や云ふてたさうやさかい、また歸つて來るか知れへん、な。』

『もう、歸つてます』と、濱子は二疊の方を尻目に見る。

『ええ！』母はたちまち目を四角にして、驚き且怒つて立ちあがつた。濱子はそ知らぬ風をして額に

垂れて來る髮の毛を手で後ろにまはし、立つて琴を持ちあげる。その細い、白い、華奢な手へ、裏庭の障子の破れからのぞく日の光が當つて、こツちへ來いと云つてゐる樣なのを、すげなく振りそむいて、寂しい後ろ姿を見せる。壁に琴を立てかけるのである。

母は、また、その室――家族の食堂、寢間、兼應接室である室――の疊を蹴立てて、

『どこにをるのや、鶴子は』と叫んで、わざとけたたましく二疊の障子を明ける。障子はすべつて、ぱたりと柱にぶつかつたので、挨拶はしないつもりの鶴子も驚いて、寢ころんでゐながら半身を起した。そこへ母が又あびせかける、『何で歸つて來た？』

『うちどすさかい』と、直ぐ激した聲をふくれた面から出して、鶴子はまた横になつてしまう。

『何や――あんたの樣な人はどこへでも行て貰ひます。』

『行きまへん！』

『行て貰ひます！』

『行きまへん！』

『何で行かん？』

『默れ！』鶴子は亡父の口調を眞似るでもなく眞似て、母が手をかけようとするのを足ではねのけ、

『あんたの物やない――お父さんのうちどす。』

『お父さんが死なはツたら、わたしが代りどす。』

『えろおすな、代りが出來ますか？』

『出來るさかい、あんたは行て貰ひます。』

『行きまへん、うちどす！』

『わたしが置きまへん、出て行け！』足踏みをして母はつッ立つたまま、娘のづう〳〵しくも海老の様に曲りなりにころがつて、横に手を重ねてゐるのを見おろしてゐたが、かツとなつたあたまがそれだけでは滿足出來なくなつて、『さア、出て行け、出て行け』と、片手を捕へて引きずり起さうとする。

鶴子は、細い割りには發達し切つたからだの重みをじツと持たせて、なか〳〵動かない。色の白い鼻筋に添つて青味がかつた目を凝らして、母の赤くなつた顔をにらんでゐる。

母はます〳〵躍起となつて、力一杯娘の手を引くと、娘のおもみは肩まであがる。それを怒つて、鶴子は懸命に振り拂ひ、

『こら、くそ婆ア』と足で蹴飛ばし、また元の通りころがつてしまう。『くそ婆ア！ 色氣違ひ！』

姉は隣室を片づけながらそツと注意してゐたが、たまり兼て、聲をかける、

『お母さん、こちらへお出でやす。』

『仕様のない子や、なア』と、母も二疊の間を出て來る。

『ほたらかしてお置きやす、構とると、外聞が惡い』と、濱子は云つたが、心の一面では、母が、父在世の時は、いい年になつてまでも、父と共にとち狂つてゐたのを、妹も見てゐて、まだ忘れてゐないのだ、な、と思ふ。

『どうしてやろか、なア、ほんまに?』

『かもてをれば、今晩中もかかります。』

『困つた子や』と、母は八疊の眞ン中に坐わり込む。濱子もそのそばに坐わる。

障子にうつるゆふ日の光で、母の目までが据わつてゐるのが見える。それを見て濱子も急に目の色が變つた。

『ああ、お酒臭い、なア』と、母は部屋を見まわす。

『またお母さんはお父さんのことを思ひ出さはつた』と、濱子は身ぶるひして、

『うちには誰れもお酒を飲むものはありやしまへん。』

『それでも臭い!臭い!』

『今までわたしばかりゐたのどす。お母さんは時々そないなこと云やはるけれど、お父さんが亡くならはつてからは、お酒と云ふものは一滴もうちへ入れたことはおへん。』

『それでも臭いやないか?』

『鶴子が飲んで來るわけもないし――』

『鶴子やおへん！』

『では、わたしが飲んだ云やはりますか』と、濱子は思ひもかけないので、むッとして、横を向く。

『あほらしい！』

『それでも、臭いのはどうした』と、母は濱子の顔を追ふて、問ひつめようとする勢ひだ。

濱子は自分のおちつきを破れば、家庭はまた一時亂脈になつて、二三日はきッと三すくみの樣なにらみ合ひを現ずるのを知つてゐるから、身づから氣をしづめて仕事箱を取り出し、縫ひ物を始める。

この一家族はすべて、今でも、木綿物を着たことがない。然し京都から持つて來た衣物が段々質屋へ運ばれて行くのに思ひ及ぶと、濱子はこの末どうなつて行くのだらうと考へずにはゐられなくなつた。

三

そこへ尋ねて來たのは、木村笛村と云ふ琴曲家で――眞下未亡人もこの人に就て奥許しを取らうとして、時々稽古をして貰ひに行くことになつてゐる。優しい琴を彈く人物には似合はず、堅肥りに肥つて、腹などは布袋の樣に飛び出してゐる。然し不斷の衣物がまた天平式のくくり袖、くくり袴で、帽子もその時代の冠見た樣なのをつけてゐるので、却つてつり合が取れて、さう見にくくはない。鶴

子も、この笛村が京都にゐる頃、一度學僕として、渠の家にゐたが、他の男書生と組み打ちの喧嘩をして、飛び出したのだ。

『まア、先生』と、靜子は氣色ばんでゐた顏つきを急に一變して、迎へに出て、『さア、どうぞお通りやしとくれやす』と、丁寧にあがり口に手をついてお辭儀をする。

笛村も會釋しながら古風な靴を脫ぎ、おもいからだをもちあげて座敷へ通る。そして、

『先刻は失禮致しました』と、鳥渡首を下げるも苦しさうな挨拶だ。

『わたしこそ失禮致しまして、なア、先生』靜子は、わざとらしい追從顏に追從聲を添えて、渠と相對して坐わる。濱子は挨拶をしてから直ぐ茶を汲みに立つ。

『先生、わたしの留守に、鶴子がまた歸つて來まして、なア』と、靜子は少し訴へる樣な調子になる。

『さうどすか』と、笛村も京都口調で受けて、鳥渡意外らしい樣子をしたが、『それも尤もか知れまへん――いややと云ふてたから。わしも、なア、お母さん、けふは鶴子さんのことで來ました。先刻も鳥渡云ふた通り、どうです、鶴子さんを女優にしたら?』

『わたしも、な、今、先生のお話を濱子に云ふてたところどす。濱子も、本人が望みなら、さうさせたらええ云ふてます。』

『あんたも』と、笛村は茶を持つて來た濱子に向ひ、『異存はありまへん、な』と念を押した。

『わたし、別に異存はありまへん』と、濱子は歯ぎれよく答へて、『けれど、先生、鶴子にそんな見込みが御座りませうか？』

『そりや、ありますとも』と、笑ひながら、『稽古さへすれば、な。』

『その稽古が』と、濱子も笑ひにつり込まれながら、『出來まひようか、あんな頑固な人で？』

『そやさかい、本人の覺悟を突止めて置かねばならん』と、笛村は答へて、既に大體の方針は決めてあることを語る。渠の家で一二度鶴子も會つたことのある、濱子はまたその小説を讀んだことがある文學者住田弦月、この人に全權を依賴すると共に、全責任を持つて貰つて音樂同好會の演劇部研究生にすることが出來ること。女にかけては、これも餘りずぼらでないとは云へないが、そんなことを心配してゐては駄目だから、そこは鶴子の意志如何にまかせて置いて、兎に角女優の研究をやる決心がつけば、一度鶴子をつれて行つて、同好會に紹介する樣に相談はまとまつてゐること、などである。

『さうなつたら』と、濱子は、疑ひ深い目を笛村に向けて、『鶴子はどこにゐる樣になりますやろか、なア？』

『そりや、その』と、笛村は事もなげに、『弦月君が責任を持つて吳れるのどす。』

『食べることは勿論のことやろけれど、衣裳などのこともどすか？』

『無論です――弦月君は、將來脚本を書きたいので女優を育てゝ置きたいのや、以前、藝者を受け出

して、それに仕立てよとしたのやけれど、それは失敗した。眞面目に女優になつて呉れる人を求めてるのや。』

『結構どす、な』と、靜子は一も二もなく喜んだ色を見せる。

『お母さんは』と、濱子は少し氣色ばみ、『何でも鶴子さへゐん樣になれば、ええ思てやはるけれど、向ふの人が途中から世話することが出來ん云ふて來やはつたら、どうします――鶴子は出來そてたひのすたり者になつてしまひますやろに？』

『その心配は入らんことや、濱ちやん』と、笛村はさえぎつて、『弦月君の資力がつゞかん時は、同好會から補助して貰ふ道もあるさうや。』

『いツそ、その方がよう御座いましよう。』

『それも、な』と、笛村はなだめる樣に、『わしは考へとるのや。兎も角、さういふ心配は入らんさかい、鶴ちやんを呼で決心のあるところを聽いて見たら、どうや！』

『それがええ』と、母はやわらかに濱子を返り見て、『呼んで來やはれ。』

『鶴ちやん』と、しぶ〳〵濱子は二疊の方を見て呼ぶ。

然し返事がない。再び呼んでも同じことだ。

『鶴子』と、今度は母が角立つた聲を出し、『木村先生が來てゐやはりますさかい、鳥渡挨拶に來や

はれ。』

それでも姿を見せない。

變に間の悪い様な顔をして、笛村が濱子を見るので、濱子は氣の毒に思ひ、立ち上つて二疊へ行く。立つたまま、鶴子が横に倒れて、ふて腐つてゐる耳もとに口を持つて行き、先生がかの女の爲めに來て呉れたのだから、鳥渡顔を出せと勸める。鶴子は、話の意味も聽えてゐたので、もう、分つてゐると云はないばかりだ。母と姉との面當てにもツとぐづツてやらうと思つてゐて、なか／＼動かない。姉が無理にも引き起さうとする手を振り拂つたので、濱子もそのまま引ッ返して來て、

『あきまへん！』

『そないな不埒なことはあらへん、わしが引き出します』と、笛村が入れ違ひに行き、『さア、どうや、鶴ちやん、鳥渡來やはれ』と、引き起した。

鶴子は矢ツ張りすねた風で姉のそばに坐わつたが、笛村がもとの坐から、

『どうや、鶴ちやん、そないにふて腐つては困るやないか』と、なだめる様になじる。

それで、かの女は鳥渡微笑したが、また元の如く固くなる。

『どうやと云ふのや』と、母も少し折れて出て、『先生があんたを女優にしてやろ云やはるのに――あんたもなりたい云ふたさうやないか？』

矢ツ張り返事がない。

『鶴ちやん』と、また笛村、『わたしが弦月先生に、もう、あら方承知して貰ろたさかい、けふは、幸ひ、田島から歸つて來たのなら、いよ〳〵女優の研究をするつもりか、どうか、あんたの決心を聽きたいのや。』

『あんたの決心一つで、先生が都合ようして吳らはります』と、母も返事を迫る。

『決心を聽かんと、わしも周旋しにくいさかい、な。』

『先生の云やはる通りやさかい――』

『鶴ちやん』と、濱子も妹の方を見て、『あんたほんまに女優になりたいの？』

鶴子は意地惡さうに姉の顏を見たばかりで、まだ返事をしない。

暫く坐は白けてゐたが、笛村は一層やわらかに笑ひをふくみて、

『どうや、た？　やつて見る氣か？　わしがいまお母さん達に云ふてたことは聽えたやろ？』

『…………』だだツ子の樣に無言でうなづく。

『それで、やつて見る氣か？』

『…………』また無言でうなづく。

『そんなら、ええ。跡はわしが引き受けた』と、笛村は笑ひに碎けて、『あんたの樣に脊が高うて美人

なら、人に後れを取るわけはない。たゞ研究を積んで行けばええのや。』
『その研究が』と、濱子はまた心配さうに、『うまく出來まひよか？』
『出來んことがあるものか』と、笛村は少し聲を荒くし、『決心さへあつたら、二年なり三年なり、勉強するのやさかい――然しその間にでも、お母さんなり、濱子さんなり、親類なりから故障が出たら困るさかい、鶴ちやんの一身は充分研究にまかすと云ふ證書を、證人を立てて、書いて貰ひたいと云ふことや。』
『それは尤もどす。』母は膝をのり出して、『證人はあの增子にさせますさかい――』
『增子君がやつて吳れますか？』
『あれに相談すれば』と、濱子が返事をして、『いやとは云はしまへんけれど、鶴子のことどすさかい、いつ心が變るか知れやへん――その時は』と、母の方を反省させる樣に見て、『途中まで世話して吳らはつたお方にすまんやおへんか？』
『それで、わしが本人のしツかりした決心を聽いて置くのや。――鶴ちやん、その邊は承知やろ、な？』
鶴子は、姉の云ひ分が癪にさはつたばかりに、今度は明らかに、笛村に向つて、
『はい』と、答へる。
『面白い、面白い』と、笛村は興に入り、『おい、鶴ちやん』と、鶴子の長い膝を輕くたでて、『あんた

が立派な女優になつたら、わしらを馬鹿にするやろ、な——金の指輪を二つも三つも嵌めて、さ、二頭馬車に乘つて——』

鶴子は初めて優しい笑ひを見せる。

『そないになつたら』と、母も所天在世時代の樣子を思ひ起し、『お父さんの家をあんたが起した云ふものや。』

『さうやとも！』笛村はます〳〵奬勵の意をふくめて、『その時はわしらがたんと金を借りに行きます。』

『さうや、な』と、母も笑ふ。

ただ一人うはつかないのは濱子で、おもてには愛想笑ひをしてゐるが、鶴子より年うへだけに、父の時代の贅澤三昧が鶴子よりも深く身に沁み込んでゐて、再びそんな時代に會へるか、どうか、それを考へると心細い。妹がもし成功したとて、母はいいだらうが、自分はその世話になる氣は少しもない。それかと云つて、今母が運びかけてゐる緣談が自分を滿足させて吳れるものらしくも思へない。

且、家のことを考へると、ただから居喰ひをして、その日その日を暮してゐるばかりだ。

笛村が明日鶴子をつれて弦月の家に行く樣にするから、その用意をしてゐるよと云ひ置いて歸つた跡で、母がまた目に角を立てて茶道具をかたづける。それを見ない振りで、濱子は裏の障子を明けて、

栫の様な小庭へゆふ暮の墨色が染め出されるのを空しくながめてゐた。

鶴子はまた鶴子で、二疊の間へ飛び込み、再び元の通りにころがつてしまつた。

四

笛村の解釋に據れば、鶴子の強情は家庭の情態が惡いばかりではなく、年頃になつてまだ男を知らないからと云ふことだ。折さへあらば、それを知らしてやり給へとは、弦月にも勸めたことである。笛村も、弦月も、鶴子に書生俳の嚴嶽があつたのはまだ知らないので――而もかの女は、今でも、嚴嶽の優しい文句を京都から受けつつあるが、

『この貧乏小僧め』と云つて、いつもそれには殆ど頓着してゐないくらゐだ。

弦月にはまた妻子がある。然し家の廣い爲めに鶴子にその一室を占領させ、將來の自作脚本上場の便を思つて、鶴子の生活一切を苦しい間にも引受けようとするのである。また、渠は出來ることならかの女の愛をも買つて置きたいといふ野心は、笛村の注意までもなく、持つてゐた。

女藝人を自由に驅使するには、そのからだまでも自由にして置いた方が都合いいことは、弦月も他の經驗者等と同樣、よく知つてゐる。然しまたさう行かない場合もあるのを知つてゐる。渠が曾て受け出したといふ藝者は、自由にしてから、女優になることを納得させたが、いよ／＼女優になる場合

は、他人の妻にしてしまはなければならない事情があつた。それでも渠は世話するつもりであつた。ところが、今回のも、もし鶴子にして有妻者に關係する樣なことがあらば、それは弦月自身の關係であつて貰ひたいのは充分だが、かの女が藝に於て發達し、自己の情に於て墮落することがあるか、どうかも、まだ分らない時である。

渠は、兎に角、篩村と濱子とから鶴子を假りに渡された日の夕方から、かの女を連れて芝公園のそばなる音樂同好會へ行つた。前以つてうち合せをして置いた同會の常任理事、杉本博士がまだ來てゐないので、下の一室にひかへてゐると、やがて博士がやつて來て弦月を別室に呼び込むだ。

『けさ、佛教雜誌の增子君から電話で』と、博士は葉卷をくはへながら、いつもの輕い調子で、『弦月君がかう〳〵云ふ話を運ばしてゐるが、同好會の方は實際承知であるか、どうかと聽かれたのです。』

『そりやア、却つて』と、弦月は勇んで、『よかつたです。何だか僕が曖昧なことを云つて、女ばかりの眞下一家をだましてゐると思はれると、迷惑ですから。』

『無論、實際ですから、その話は今進行してゐると答へて置きましたが、どう云ふ關係なのですか？』

『なアに、今晚いよ〳〵話が決れば、あの人が證人になつて、僕の方に依賴證書を入れるのです。』

『さうだ。その必要はありませう——然し鳥渡君に聽いて置きたいことがあるのですが——あの婦人に君は關係ないでしような？』

『關係!』と、弦月は胸をそらす。
『もしあるなら、初めからさう云つて貰はないと、この會では、正當の婦人でなければ出入させないことになつてゐるので――』
『無論、ありません、さ』と、弦月は答へる、内心では、然し、多少恥かしい樣な氣がして。
『實は、僕もそれで困つてゐることがあるのです。』博士は正直な口調で、『あの僕が踊りのモデルに養成してゐる濱野孃ですが、あれを僕がこツそり妾にしてゐるといふ評判を立てたものがあるではないか? そんなことを』と、笑ひ出しながら、
『云はれちやア、僕も困るのだ。澤山の紳士諸君の前で、踊りのモデルとして見られるのに、さう見すぼらしいなりもさせて置けないから、僕の方ですべて衣類なども注意してやるが、僕はそんな卑劣な事實があるのであれに金をかけてやるのではない。』
『そりやア、無論、分つてゐるだらうに、ね。』
『それがです』と、少し意地の惡い微笑になり、『ここに、一人のものが、あれに小當りに當つて見たと考へて見給へ――誰れと名はさして云ひませんが――それが、まア、はねつけられたのだ。』
『なるほど。』
『おれの云ふことを聽かないのは、きツと杉本と云ふ立派な旦那がついてゐるからだらうと、まア、

かう云つたわけ、さ、ね。』

『は、は、はア！』

『けれども、そんなことを云はれては、僕が困る。痛くもない腹を探られるので――第一、考へて見ても分らうぢやアないか、自分がもし關係してゐるものなら、それを諸君の前で見せ物同然に誰れがしようぞだ。』

『そりやア、尤もです。』

『兎に角、僕のことはそれで濟んだか、直ぐその跡へまたそんな問題が起ると、紹介する僕ばかりの迷惑でなく、會員としての君自身も困るだらうから、前以つて念を押して置くのです。』

『大丈夫ですよ。』にや／＼笑ひながら、弦月は強い様に答へた。そして、心では、今晩歸りがけに、鶴子に對して、そんな評判を立てられることがあるかも知れないから、その時の覺悟を確めて置く必要があると思ふ。

『それぢやア、まア、おもな人に紹介しますから』と、博士は弦月に鶴子を伴はせて二階にあがつて行く。鶴子は、昨晩、弦月に伴はれて博士の宅へ行つて、博士には會つてゐる。

段をあがつた直ぐそばの部屋では、まだ踊りの師匠が來ないので、前に習つたところをお浚ひかたがた、博士の書生が三味線を彈き、モデルの濱野爲子が『關の戶』の女を踊つてゐる。

鶴子は、はしご段をあがる時、三味の音を聽いて先づ身が縮む様に感じたが、モデルが立派な衣裳をつけて、多くの人々の前で素踊りをしてゐるのを瞥見した時には。心が一層おちけづいてしまつた。そのまた次ぎの室で、河東節の稽古が初まつてゐるわきを通つて、三階にあがり、そこの廣間で演劇部のおも立つた人々に紹介される。

年寄つた人は、いい研究生を得たのはわれ〳〵の仕合せで、弦月の骨折を感謝すると云ふ。然しさう老いてゐない人のうちには、ひそかににツこりと微笑してゐるものもある。その微笑が弦月にはいやな意味に取れると同時に、また下等だと思はれた。

『兎も角も、今晩は、簡單な舞踏をやつて御覧なさい。』博士は弦月に鶴子を伴はせて、小じんまりした隣室に入れ、同好會の幹事からして、同會が傳播に努めてゐる國風舞踏を習はせる。

『手は實に單純なもので』と、幹事は形をやり出さうとすると、

『まア、歌の文句から初め給へ』と、博士は自分で引き取り、『たとへば、「木曾の御嶽山は夏でも寒い。袷やりたや、足袋オ添へて」と踊ると、そのあとで皆がトコセ、キナヨ、ドンドンと囃すのです。まア、御覧なさい。』洋服姿で踊り出すと、鶴子は烏渡微笑したが、直ぐまた顏の筋肉を引きしめてしまう。『キソーノ、オンタケサンワ、ナツデモサムイ。アーワセ、キセタヤ、もう一度繰返して、アーワセ、キセタヤ、タビヨソヘテ』と、急に左に身をかた向けると同時に、右の足を前から左の方に出す。

『まア、かうしたものですから、幹事さんからよくおそはつて御覽なさい。』渠は鶴子に會釋して、そこを出た。

幹事と弦月とは二人して鶴子にそれを敎へながら、一室に輪をゑがいて、くるくるまはつてゐる。然し鶴子の態度は、不慣れなところへ來て、不慣れなことをするのでいぢけてゐるからでもあらうが、不斷の强情を思ひ起させるほど固い。手を上げ下げしたり、足を運んだりする工合が、兎角直線的になつて、圓滑に行かないので、トコセ、キナヨ、ドン〳〵と踏みとどまつて、垂れた兩手を打つところも、どうしても、音が出ない。無論、他の二人と一緒に歌ふこともしないのだ。

『いつまでも、これでは困るが』と、弦月はひそかに心配する。然し忠實な幹事は、博士の命令を守つて、倦むこともなくつづけてゐる。餘り氣の毒になつて來たので、弦月は鶴子に

『もう、よく呑み込めたでしようから、歌つて、やつて御覽なさい』と云つたが、矢ッ張り、目を鳥渡渠に向けただけで、かの女のからだはゆるまない。

『初めは誰れでも氣が引けて、聲が出ませんが』と、幹事は人慣れた口調で、『やがて面白くなつて來ます。』

暫くそこで休んでゐるうちに、隣室での演劇部の研究會も終り、下二階の踊り並にその見學もすんでしまつた。

『どうです』と、杉本博士がにこ〱して這入つて來た。
『まア、手ほどきだけはすみました』と、幹事は答へる。
『氣が引けてゐるのかして』と、弦月は鶴子の顏を見て、『どうも、まだうまく行きません。』博士にかう取り爲して、あとで幹事が不利益な報告でもすることがあつたら、その辯解にもならうと云ふつもりで、挨拶する。
『ぢやア、一つ、木曾の御嶽さんを初めましようか、ね。』博士は隣室の廣間を開かせ、『さア、皆來た、皆來た』と、段の下り口から下の方へ呼ばはる。
三味線彈きは三味線を持つてあがつて來る。歌ひ手は譜を持つて來る。紳士の踊り手には、博士等を初め、某省の高等官、銀行の頭取、會社の副社長、大商店の顧問、新聞記者などがある。けふは目に立つ細君連、娘達は殆ど來てゐないが、モデル濱野と幹事の夫人との立派な服裝が鶴子にはたまらなくなつた。
『お父さんさへ生きてゐやはつたら、あんな人達に負けやへん』といふ反感が起ると同時に、現今の自分の不自由を見透かされる樣な氣がしたのだ。今自分の着てゐるものはあれらにも劣らないか知らないが、ここへつづけて來るとしては、明日も明後日も、同じ物をつけてゐなければならない。それが最もつらいと思ふと、女達が大膽に多くの男達と共に踊る御嶽さんなどが、如何にもつまらなく思

はれてならない。歸れるなら、直ぐにも歸りたくなつた。

そんなことばかり鶴子が考へてゐるうち、

『初まり！』と、誰れかが云ふ。集つたものはすべて圓く並ぶ。眞ン中の五十燭電燈の下に座わつた三味線彈きと歌ひ手とは調子を揃へて『木曾の御嶽さん』が初まる。

『さア、やりましよう』と、弦月も進まなささうな鶴子を促して仲間に這入る。

踊り手すべてがあげるトコセ、キナヨ、ドン／＼の囃し聲がうまく揃ふ時もあるし、また揃はない時もある。中には、甚だ頓狂な聲を出してゐるのもある。この實際を知つたら、もう、鶴子もさうおぢけづいてゐるには及ぶまいと弦月には思はれるのだが、矢ツ張りかの女は活動してゐないのだ。渠の次ぎについて、段々まはつて來ることは來るが、渠自身も踊つてゐるので、樣子がはツきりとは分らない。然し渠の正面に當る濱野孃の相變らず活潑なのが見える。それに對する鶴子の實際を認めたいので、弦月はそツと輪の列を脫けて、明け放つた窓の濡れ椽に腰かけた。

『まだ休むには早いぞ』と注意して、博士が弦月の前を踊つて通る次ぎへ、銀行頭取の袴が通る。また、新聞記者や會社員などの洋服や日本服が通る。それにつづいたのは幹事の細君で、

『住田さん、どうしたんです、ねえ』と、弦月に聲をかけた。

かの女と濱野孃との間から、鶴子のこちらを向いた動き振りを見ると、目は下にばかり向いて、手

や足の運びは先刻と同じ様に直線的だ。そしてそのいつもは健康らしい顔の色が、少しも動かないで電燈の光に青白く見える。如何にも美人ではあるが、本會の研究生になるだけの自由な表情が出來るか、どうか、それが弦月には第一の疑問になつた。

渠が再び輪に加はつたのは皆が大分調子づいて來た時で、この最も單純な舞踏曲についてゐる歌（すべて下等な意味を除いて選定された）十篇が數十回繰り返されてゐた。

五

その夜、弦月は、國風舞踏の調子づいた拍子と囃しとから起つた幻影に送られて、同好會を出たが、その氣持ちいい心加減も、鶴子のそこで見せた態度に思ひ及ぶと、全くどこへやら行つてしまう。『兎に角、決心を聽いた上に、あれだけ念を押し、念を押して連れて行つたにも拘らず、あんな調子では、結局、女優には不適當だと判斷されてしまうかも知れない。』また一歩進めて考へれば、かの女は行つて見たが、その場でいやになつたのかも知れない。如何に氣ままな女だと云つても、それでは人を馬鹿にしたわけだ。同好會の代表者として、杉本博士からまだ痛くもない腹を探られ、決してそんなことはないとは答へたものの、これツ切りかの女がもし顏を見せないなら、成り行き上、矢ツ張り關係があるので、遠慮したのだらうと思はれても仕方がない。

『紹介者の面目をつぶすものだ。』から考へると、まだ親しみの少い鶴子を蔑視する樣な傾きが生じ、いッそのこと、出來ることなら、女優などはどうでもいいから、無理往生にも自分に從へてしまはうかといふ氣にもなつた。

鶴子の方はまた鶴子の方で、明日も亦あんな會へ行くのかと思ふと、何だかおそろしくなつて、——眞實、女優にはなりたいのだが——もう、二度とあすこへは足を踏み入れにくい樣だ。あのトコセ、キナヨが入り口の敷居の樣に高い氣がする。

『どうしよか知らん』と迷ひながら、ただ默つて弦月の跡について行くと、渠は御成門を水路部の前に進み、角の交番のあるところを右にまがる。

慈惠病院の前面と靑松寺の森との間を行くと、ただ暗いばかりで、土地不慣れの鶴子にはどこを歩んでゐるのか少しも分らない。心細くなつて、

『まだ電車は御座りましよう？』

『電車』と、弦月はふり向いて、『けふから僕の家にゐることになつてるぢやアないか？』

『そやけれど——』

『まア、いいです。僕は腹が減つたから、肉でもやりましよう——それに、今晩、會の方から注意を受けたこともあるし、僕もまたあなたに云つて置きたいことがありますから。』から云つたものの、そ

の刹那に、渠はかの女の決心が動いたのを看破してしまつた。『歸るなら、勝手に歸れ』と云ひたいが、さうして歸したら、親達はまた自分が何か不都合なことを早速鶴子に仕向けたからだと思はれても困ると反省する。

『わたし、歸ります』と、かの女は踏みとまる。

『まア、僕につき合つて下さい――心配することはないから。』

『けれど』と、また歩みながら、『お母さんが心配してゐやはるか知れまへん。』

『お母さんは僕にあなたをまかすことになつたのではありませんか？』

『けれども、わたし、歸ります。』

『歸るなら、僕が送ります――兎に角、おつき合なさい。』

愛宕山の下を過ぎてから、渠は無理にかの女と共に常盤へあがつた。

『入らッしやい』と、弦月を知つてゐる女中が迎へに出て來たが、ついてゐる婦人のあるに氣がついて、變な目つきをして笑ふ。鶴子には、それが木曾の御嶽さんと同じ様にいやな聲であつた。そして自分を先生がどうかしようとするのではないかと思はれないでもない。

鶴子はおづ／＼弦月に從つて、二階の奥に通つたが、時刻が時刻だけに、もう客はどの部屋にもゐない様だ。且、食物を運んで來る女中がねむさうな目で二人の様子を疑ひ深く盗み見るので、ゐたたまら

ない樣な氣になる。弦月もその樣子に心が落ちつかず、一本の銚子を飮むにも氣が急がれてならない。
『歸ると云ふなら、早く引き上げますが』と、獨酌しながら、『今晩歸つてしまうのは、女優はやめだといふ意味になりますよ。』
『さうかも知れまへん』と、かの女はかしこまつてゐる。
『ぢやア、いやになつたのですか、あんまり早いぢやアないか？』から云つてわざと笑ひを見せると、
『いやでもないけれど』と、これも愛相に笑ひながら、橫を向く。
『いやでもないし、僕の家にもゐないと云ふのは、何か別にもツと望みがあるのでしよう？』
『別に、何も――』
『それぢやア、僕にやア分らない、ねえ――昨日、博士の宅へ行つてあなたを紹介し、いいと云ふので、今晩、今の會員達にも紹介したのに、もう、あなたの樣にひねくれてしまう樣では、あなたはそれでもいいか知れないが、僕の面目をどうして吳れるのです？』
弦月は不愉快さうにぐい／＼銚子を飮み乾して、最後の一杯になるまで、無言同樣に、當りさはりのない言葉を時々つづけてゐたが、顏には成るべく笑ひを見せてゐる樣に努めてゐる。
女はまた、そこを早く脫けたいばかりに、もう何も云ふことはないと云ふかの樣にあせつてゐる返事ばかりだ。然し、心では、弦月に直ぐ相當の衣服を拵へて吳れろとは云へないし、順ぐりに着かへ

て行く衣服〃數がなければ、とても、あの晴れの場へは毎日通へない。そこを何とか母に無理にも相談して見なければと考へてゐた。

弦月はまた、鶴子がどうせ駄目らしいから、この不始末な事件の跡始末をよくして、會並に鶴子の家に對してありもせぬ疑ひの殘らない様にする道を考へた。

『どうしても歸りますか?』

『へい、一度歸して貰ひます、お母さんに相談することがありますから。』

『相談するとは嘘でしよう』と、つい皮肉に出て、弦月は冷淡になつた心持ちを見せた。

『嘘やない』と、鶴子は渠の心持ちを見るひまはなく、鳥渡無邪氣に首を傾げたが、そこへ女中が出て來たので、直ぐまたつんとしてしまう。

『もう、店をしまひますが、おあつらひが御座いますなら――』

『もう、いい』と、弦月は答へる。

『では、お會計?』

『ああ』と云つて、渠が女中の微笑にまた薇微笑を持つて答へたのを、鶴子は何かの合圖ででもある様に受け取つた。そして女中が次ぎの部屋の電燈を消して、暫く何かごそ〱してゐたのを、寢床を取つてゐると思つて、身を振はし、

『わたし、歸ります』と、急に立ちかける。

『まア、お待ちなさい、勘定をしてしまはなければ』と、弦月が意外に落ちついてゐるのを見て、かの女も亦元の通りに。

　弦月には、鶴子のあわてたのが何の意味か分らなかつたが、その一瞬間に於て、かの女の眞に生き生きした表情を認めたので、すべてかう云ふ調子で行つて呉れれば、美人だけに早く藝界に成功するだらうにと思ふ。

『さア、行きましよう』と、弦月がそこを出た時は、店の下駄番は門を締めようとして待ちかまへてゐた。『まだ電車はあるだらうから、行つて見ましよう。』

『もう、よろしうおます、わたし獨りで歸ります。』

『馬鹿な！　この夜更けにあなたを獨りで歸せますか？』

『いえ、分つとりますから』と、大道の眞中で、鶴子は弦月の方を向いて別れを告げようとした。

『何と云つても、僕があなたをあづかつた以上、お母さんに手渡しするまでは保護して行きます。』

　かう云ふことを云つて、琴平前まで來ると、まだ電車があつたので、それに乘つた。青山一丁目で降りるまでは無言であつたが、降りて、眞下家の住む横丁のまがり角まで來ると、

『もう、よろしう御座ります』と、鶴子は云つて、急がうとする。

『まだ、まだ――お母さんに僕が聲をかけるまで』と應じながら、弦月はついて行く。
鶴子は、一圖に弦月が自分を引き入れる寢床を取らしたと思つてゐるから、家に歸りつくのを幸ひ、渠を蹴飛ばしてやりたくもあるのだ。もう、勝手にしろと云ふ風で、づか〳〵と家の入り口まで來て、『お母さん――お母さん――お母さん』と呼ぶ。返事がないので、少し癇走つた聲になつて、『お母さん』と高く呼ぶ。
『誰れや』と、母のしツかりした聲が聽える。弦月には、それが最後の呼びにヤツと眠りから覺めた聲とは思へなかつた。
『わたし』と、鶴子は優しく答へる。
『また何で歸つて來たんや?』母はかう叫んで、『あれだけ云ふて聽かせたのに、またか?――もう、うちへ入れん! 入れん!』
『わけがあるのどす』と、あせり出す。弦月はそのわけを聽きたかつた。
『わけがあるて』と、母の聲は少し近くなつて、『先生にことわり云ふて來たか?』
『あけて下さい!』と、いよ〳〵癇高になる。
『こら、それがなかつたら、入れまへん!』
『いや、お母さん』と、弦月が初めて、『わたくしもついて來てゐます。』

『先生もどすか？　まア、それは存じまへんで』と、母は戸を明けた。鶴子は先づ〳〵と這入つて、うちへあがつてしまひ、その姿の消えた跡に濱子がランプを持つて立つてゐる。
『どうぞお這入りやす』と、かの女は少しあきれた顏つきだ。
『まア、おあがりやす』と、母は土間に餘地をあけて立つてゐる。
弦月は、眞ともにさす光を受けながら、
『いや、もう、遲いですから、また明日あがります』と答へる。然し母の靜子が鶴子の歸つて來た故を聽きたがるので、立ちながら、その大體を簡單に話し、今晩の鶴子の樣子ではとても駄目らしいが、それは鶴子の決心がまだ充分でないからのことで、本統に決心と從順とさへあらば、會の方は何でもないのだから、話は充分に成立する見込だと云ひ置いて、渠はまた闇の中へ消えてしまつた。

六

弦月の勉強室には、鶴子の着更へか何かが赤い風呂敷につつんで殘つてゐる。それを見ると、女優養成の思ひ付きが、再び不成功に終るのを殘念に考へられた。と同時に、僅かに握りかけた玉が手中から放れて了つた樣な氣がする。そして妻には、『それ見たことか』と云はないばかりの目つきを以てにらまれるのを、不愉快に思ふ。

朝からぼんやりして考へ込んでゐると、晝過ぎになつて、木村笛村が例の天平式のでぶ〳〵したからだを運んで來た。眞下の母が、けさ、笛村の家を訪問したからである。
『君には非常な迷惑をかけた、な。』
『なに、迷惑と云つて、高が知れたことよ――女優志願の決心が確かでなかつたと云ふことを以つて、同好會へことわつてしまつたらいい、さ。』
『いや、まだ決心を棄てたと云ふのやない――あの子の考へでは、第一に、着て行く衣物が數ないから、それをどうかして呉れとお母さんにねだつとるのや。』
『へい』と、弦月は意外に思つて、『そんなことでゆふべの樣にすねてゐたのか？』
『さうだらうよ。母親が「そないなことならん」云ふたので怒り出し、ゆふべから髮を亂して、臺どころの板の間にぢかに寢ころんだ切りやさうや。』
『丸で氣狂ひだ、ねえ。』
『わざとするのやろが、よう、まア、強情に出來たもんや。』
『却つて、そんな女がうまく行くと天才になるが、ねえ――然し、あのお母さんにいくらねだつたツて出來るものぢやないのは分つてるぢやアないか？』
『そこがあの子の非常識なところで、困るのや。それで、あの未亡人がな、僕のところへ來て、君が

あの子の身のまはりまで引き受けると云ふたのは、さう云ふことも含んどるか、どうやと聽くのや。』
『そりやア、或程度までするつもりだが、また、もし僕が出來ない時は、僕の手から離れて、全く同好會の方に世話を賴んでしまつてもいいと思つてるのだが、まだ研究生の時から、さう贅澤を云つては困るよ。』
『では、君がもう一度行つて、母親の方にその通り云ふてやつたら、どうや？』
『それもよからうが、――物になるだらうか、ねえ、あんなそッ氣なしの女では？』
『そりや、分らん、な――然し君は當り方が早過ぎたんやないか？』から云つて、笛村は少し顏を赤くする』
『早過ぎたとは？』
『もう、鶴ちやんに當つて見たんやろ？』
『馬鹿なことを』と、弦月は妙な顏をしてゐる笛村を見つめ、自分も亦少しやましい點もないではないから、控へ氣味にのぼせて『そんなことはなかつた。なるほど、歸りに肉屋へはつれ込んだが、それは僕の家へ來さうもないから、今一度奬勵して見ようと思つて、――まさか、歩きながらでは、ゆツくり話せないから、さ。』
『然し』と、笛村は冷かす樣な、燒く樣な微笑をもらして、『鶴ちやんは、君等が肉を喰つてた隣室

へ、床をとらしたと云ふてたさうや。』
『そりやア失敬だ、ねえ、馬鹿にするもほどがあるぢやアないか？』弦月は躍起となり、『斷じてそんなことはない。君等が鳥渡考へて見ても分るぢやアないか？　常盤の樣な普通の肉屋で、そんなことを許して呉れようか？』
『そりやさうや』と、笛村は弦月の顏に怒りの色があらはれたのに折れて、『あの子の無經驗から來た思ひ違ひやろ。』
『餘り意外ぢやアないか？』
『まア、ええ、さ。そんなことはどうでもええから、な、もう一度行て、勸めて見給へ――お母さんの方はけふでも同じ樣に充分乘り氣になつとるのやさかい。』
『どうしても行く、さ。行つて、そんな思ひ違ひを正して置かなけりやア、僕は氣が濟まない。』少し氣をゆるめて、『お互ひに、もッといい機會が來れば、或はどんなことでも仕向けるかも知れないが、ねえ、まだそこまで行つてゐないぢやアないか』と、笑ふ。
『さうや、さうや』と、笛村も共に笑つて、二人の間の變な氣持ちは一掃された。そして、渠はどこかの華族の家へ琴の稽古に出て行つた。
弦月もやがて家を出て、青山へ行き、眞下の家を音づれると、鶴子はまだ笛村の云つた通り髮を亂

して板の間に寢た切りで——物も云はなければ、食事もしないさうだ。それが爲めか、家中が何だか殺氣を帶びてゐる樣な氣がした。

『椽の下から炭を出すのに邪魔で困ります』と、母が罪でもあばく樣な勢ひで弦月に語るのを聽いて、そばに坐わつて生眞面目にしてゐる濱子が、

『ふ、ふツ』と吹き出す。然し、また眞面目に返つて、これも何だか怒つてゐる樣に、『ほんまに困つてますの——すねると、いつでもからで御座ります。』

『さうですか』と、弦月は卷煙草を吹かしながら、『先刻、木村君から鶴子さんの御樣子は承りましたが——』

『先生、どうせ駄目どす』と、濱子がぶツきら棒に云ふ。弦月には、それが自分に當つたものか、それとも、鶴子の强情に當つたものか、まだ分らない。先づ白ばツくれて、鶴子の方に取り、

『增子君から勸めても駄目でしようか、きのふも杉本博士へこの事で電話をかけたさうですが?』

『駄目どす』と、濱子は一層ぶツきら棒に云ふ。弦月は、增子がけさ手紙をよこして、眞下家と絕交したのを知らないのだ。そのわけは、增子が例の釀金問題がさツぱり運ばないので、それをしほに餘りやつて來ないのを、眞下家では、集つた釀金をつかひ込んだのだと邪推して、他の人々にまことらしくさう吹聽したので、增子は怒つてしまつたのだ。

『あないな恩知らずは、もう寄せまへん』と、母の靜子も慳貪に云ふ。

弦月はてツきり自分に當つてゐるのだと思ひ、眞面目になつて、鶴子が事情に通じないところから來た、弦月に不利益な想像をうち消し、そんな冤罪を着せられては困ることを辯ずる。東京育ちの渠の口調が京都生れの人には非常に強く聽えたので、靜子は、

『それは、もう』と、すくんだ樣に、先生のおツしやる通りで御座ります。怒らはるのは尤もで――』

『いや、わたくしは怒つてるのぢやアないですよ』と、弦月も言葉に注意して笑ふ。

『怒つたのなら、もう、けふは來ない筈です。一つには辯解をして置きたいし、また一つには、今一度鶴子さんのお心を聽いて貰ひたいのです――衣物が足りないからとおツしやるさうですが、云つて見れば、まだ演劇の學生なのだから、そんなことを今から氣にばかりしてゐる必要はないと云づてもいいのです。』

『そりやさうどす、な』と、濱子は云つて、心の奥では、鶴子の不自由に同感なところがあつた。そして、母のすすめる緣談が不足なのに氣がますます立つて來る。

『呼んで見やはれ』と、母に命ぜられて、

『鶴ちやん。』癇高に呼んで濱子は進まないながら隣室に這入り、『住田先生どす、起きて來やはれ』と、妹のそばに行き、いきなり、引き起さうとする。

妹は怒つて姉の手を打つ。

『どうするんどす』と、姉は黄色い聲を張りあげて、また妹をうち返す。そしてとう〳〵姉妹の組みうちが初まつた。

『どうしたんや』と、母が立つて行く時には、

『痛い』と、姉が叫んで泣き出す。

『あんたがどうかしたんやろ』と、母が濱子をしかると、濱子は母に向つて泣き聲をあげて、

『あんたが皆惡いんどす！』

『何も惡いことはないやろ。』

『惡い、惡い』と、濱子は足で板の音を立てて、『こないなやくざ女をええ氣にさしとくのは惡い！』

『では、皆わたしが惡いのや』と、母も細く高い聲を出して、『どいつも、こいつも惡たればかりで―ーええ緣談があつても厭や云ふし、折角人の世話になれば直ぐもどつて來る！　親に不孝な奴らは、皆死んでしまへ！　死んでしまへ！』

『どうせ、駄目な家庭だ』と、弦月も心に叫んで、歸り腰になり、『では、お母さん、わたくしは失禮致します。』

『お氣の毒です、な』と、あわてて出て來た靜子の目を見ると、その光り工合も異樣だし、そのひと

みの据ゑどころも違つてゐた。

七

ある物を賣つたり、知り人から小錢を借りたりして、その日を送つてゐるのだ。そこへ、また、京都から嚴嶽が厄介になりに來て、鶴子を今一度自分の物にして歸らうとする。それが丁度かの女のまだ板の間の横臥をつゞけてゐる間のことで、濱は母や姉の目を盗んでは、紙切れに自分の戀を書いた物をかの女に渡すと、かの女はしまひには見もしないで引き裂いてしまふやうになつた。

濱子は半ば焼けを起して、とう／＼母の勸める醫者からの縁談を承諾する。それを知つた鶴子は、ます／＼反對に、そのふて腐れをつゞける。そして弦月が最後に來た日から、なほ一週間も板の間に寢ころんでゐるのだ。食事は、嚴嶽が持つて行つてやると、喰ふことは喰ふが、それも寢ころんだままでだ。そして持つて行かないと、ただあばれるばかりで、自分からは決して喰ひに來ようとしない。『あの板の間荒神さんは、よう病氣にならん、なア』と、母は濱子や嚴嶽を笑はせたことがある。然しそれはたツた一度のことで、家中は殆ど全く鶴子の思ひ切つた沈默につり込まれてゐる。從つて琴の稽古に來るものも、たださへ數が少いのが、その上に減じて行つて、琴の音もこの家に暫くしなくなつた。

眞下の未亡人に琴の師匠を思ひつかせ、その家をこの青山に引き移らせたと云ふ步兵大尉の母とは、同じく琴の師匠を內職にしてゐる小川滿子と云ふ。この滿子夫婦(年輩はいづれも靜子に同じほどだ)には、少し考へがあつて、靜子の僅かづつの無心に應じてゐた、乃ち、濱子をどこかいいところに世話して、多少の報酬を取らうとしたのだ。ところが、その目的物にどの口をもはねつけられてゐるのを忌々しく思つてゐるうち、ほかからの緣談がまとまつてしまつた。

然し、その代り、また鶴子の方に目をつける樣になつた。貰はれて行つたところからは歸り、女優志願も駄目だと聽いて、滿子は靜子を自家に呼び寄せ、鶴子を海月と云ふ、新橋の有名な料理屋へ養女にやることを勸めた。

『どうせ、そんなふて腐れなら』と懇意にまかせて、無遠慮に、『立派なお料理屋へやつて、旦那取りにしようと、藝者にしようと、そんことはかまはない――お金にした方がいいぢやア御坐いませんか』と、滿子は云ふ。

『ええ、ええ、もう、どうせ、やくざな子どすさかい、なア』と、靜子も答へて本氣になる。

『それには、あの、あなたも御存じの河津友子さん、なア、あの人が海月のおかみの妹さんの琴の師匠ですが』と、その友子から、海月で、別嬪なら、誰れでも養女にすると云つてゐることを滿子は聽き込んでゐるから、必らず物になると受け合ふ。

『よろしうお頼み申します』と云つて、靜子は、滿子の案じたとは思ひのほか、そは〴〵して歸つた。そしてそのことを嫁入り衣裳を縫つてゐる濱子に話すと、かの女は、どうせ碌な養女ではあるまいと思ふから、妹が行つた以上はつき合ひをしない――自分ばかりではなく、母もさうするのでなければ、不承知だと建議する。

『その方がええ、なア』と母も贊成する。

獨り反對なのは嚴獄の意見である。

然し、その話を板の間から聽いてゐた鶴子は、『なに、くそ』と云ふ意地づくりになり、珍らしくもむツくと起きあがり、八疊の間へつか〳〵とやつて來た。おほわらはの女武者と云つた樣な勢ひだ。

『お化けや、なア』と、姉は口もとまで出た。

『そのざまは何どす』と、母はをかしいので笑ひながら叱る。然しこの話を聽いて、それに故障を云ひに來た、な、と豫想した。

ところが、案外で、母や姉の説明をも聽かないうちに、

『わたし、行きます！ 早う親子、兄弟の緣を切つて貰ひまひよ！ その代り、何を云ふて來ても聽いてやらんぞ――』

から叱りつける樣に云つて、つツ立てゐるので、姉が、

『まア、坐わらはれ』と云ふ。

鶴子は默つてどたりとその場に倒れた。

八

新橋の海月のおかみをお君と云ひ、その妹をおえんと云ふ。いづれも、ラシヤメンあがりで大金を儲けたのを、料理屋につぎ込んだのだ、立派な本宅が青山にあつて、山田と云ふ。それがおえんと姉妹の老母との住ひだ。

小川の滿子に初めて連れて行かれ、あの子なら見込みがあるから貰ふとなつてから、鶴子は毎日の樣に山田の家に出入りした。そして自分の家には段々よりつかなくなつて、姉の濱子の結婚式にも出席しなかつた。

嚴嶽はまた濱子の結婚式にはのぞんだが、鶴子に止むを得ず斷念した體で、再び京都に歸つてしまつた。

さて、いよ〳〵養女の盃をすると云ふ日の晩になつて、濱子は、妹が自分の式に出なかつた意趣返しに、自分も亦來なかつたが、鶴子の母を初め、仲人の小川老夫婦、お君、おえん、その海月のゆかりのもの、師匠の河津友子などが山田の家に集つた。

式場の上座には山田の老母の席を殘して、右にお君、左におえん。右に折れて母の靜子、子の鶴子。
それに對する左りがはには、小川老夫婦に友子。それから、跡の次第がある。
やがて、大きな松を立てた島臺に、『金五百圓』と書いた目錄を添へたのを、山田の老母がうや／＼しく目八分にささげて來て、席の眞中に据ゑ、それから自分の坐に直る。
靜子は、自分がその目錄を貰ふのだと信じてゐるから、ほく／＼喜んでゐる。
小川夫婦はまた、仲人として、先づ自分達がそれを受け取り、自分達が靜子と共に分配するのだと思つてゐる。
儀式の盃が皆にまはつた後、鶴子はつッと立つて、山田の老母の前に行き、うやうやしく手をついて、
『お母さま、かうして儀式が濟みました上は、これからあなたを本統のお母さまと思ひます。また、姉さん達の云ふことはよく聽いて、きツとそむかん樣に致します。』
靜子は頻りに見守つてゐたが、わが子の鶴子にしてはなか／＼感心だと思ふ。
鶴子はまたお君の前に行き、
『姉さん、これからは何でもあなたのおツしやることは聽きますから、妹と思て下さい。』
また、おえんの前へ行つても、同じことを云ふ。
それから、また靜子の前に行き、

『お母さん、これまではいから御恩になりました。然し、これからは、親子の緣が絕えろさうやさかい、お目にかかることはないでしよけれど、おからだを大事に賴みます。』

『おう〳〵よう云ふて吳れた』と、靜子は淚をこぼして、『お前もからだを大事にして、な、よう山田のお母さんに事へなはれ。』

鶴子は靜子の顏をじろりと見たばかりで、少しも態度を崩さず、また小川夫婦の前に行き、

『小川の叔父さん、叔母さん、あんた方のお世話によつて、このたび山田家へ養女になつたのをお禮申します。』

小川老人は金の分配法をばかり考へてゐて、祿に挨拶の言葉を返さなかつたが、小川夫人の方は親切さうに乘り出して、

『まア、よう御坐いました、ねえ、鶴子さん。これから、ね、よく山田のお母さんや姉さん達に忠義をお盡しなさいよ。』

『はい、ありがたう』と云つて、鶴子は立ちあがり、島臺のそばに行つて、上座を向いて坐わる。

『さア、誰れに渡すのだらう』と、小川老人の胸が躍つた。

『早う持つてお出で』と云はないばかりに、靜子は顏をつき出して待つてゐた。すると、鶴子は相變らず眞面目な樣子をして、五百圓の目錄を手に取り、

『山田のお母さま、眞下のお母さん、おふたりにお禮を申しあげますが、これはわたしの身じたく料として頂戴致します。』

かう云つて、鶴子が懷中したので、靜子は仰天して、口をあいたまま、後ろに兩手をついた。

小川夫婦はまた眞ツ赤に怒つて、思はずからだをそらせた。

『これで儀式は』と、山田の老母は太い聲で、『首尾よく濟みましたから、皆さんどうか御自由に召しあがつて下さい。』

鶴子は悠々として自分の席につく。

小川老人は堪りかねて、山田老母の方に向つて聲をふりあげ、

『鳥渡伺ひますが、あの目錄は眞下さんなり、わたくしなりが先づ預るべき性質のものでは御坐いますまいか？』

『いや、あなた方には』と、山田の老母は肥えた胸をつき出して、『別にお禮はさしあげることになつてゐます。』

かうしたあり樣で宴會も終り、眞下未亡人、小川夫婦、河津友子などは反物一反づつを貰つて歸る。

その途中で、

『あの婆アめ、不埒ぢやアないか』と、小川老人はどなる。『中味のない目錄で胡麻化しやアがつた！』

『本統の目錄であつても、ああしたのは鶴子さんの智慧ぢや御坐いません、ね』と、滿子は答へる。

『さうやろ、な』と、靜子は云ふ、『言葉つきまで敎へてもろた樣なところがあつた。』

『然し鶴子さんはえらい――しツかりしたところがあります、ね』と、友子は云ひ添へる。

實際、えらいのかどうだか、兎に角あの五百圓を以つて、鶴子はいい旦那を取る衣裳を作つたのである。

九

鶴子は、暫く海月の養女として、多くの貴顯紳士に寵愛され、渠等と共に、自分の父がもとした樣に二頭馬車で乘りまはしてゐた。そして琴を知つてゐるのをたよりに、また三味線をも稽古してゐた。

然し半年も立たないうちに、海月の母や姉妹と喧嘩をして、獨りでそこを飛び出してしまつた。そして新橋の或藝者屋から、同じく鶴子と名乘つて、左り褄を取る樣になつた。

まだ京都なまりは拔けないが、客が住田弦月を知つてるだらうとからかふと、

『そんな人は知りまへん』と惚けるし、ぢやア、木村笛村はと聽くと、

『あの人なら、わたしの琴の先生だ、わ――けれど、いつも貧乏で、氣の毒や』と云つてるさうだ。

――(四十五年)――

巡査日記

七月一日。晴。巡査拜命。その足で横濱に歸り、磯部方を引き拂つて、直ぐまた上京。荷物とては、たツた行李が一つだ。〇區〇〇下の巡査教習所の寄宿舍に入る。

七月二日。晴。どいつもこいつも分らず屋ばかりで、同僚に話せる奴がないのがいやになつた。それに、舌の短いのでラリルレロの云へぬ人種の多いのに驚く。おれのことを『モイシタ』と呼ぶ。『おい、モイシタ君、こえかやおいどんも一緒に警察界の爲めに大いにやどう。』へん、『よどしく頼みます』だ。

七月三日。晴。けふは、教室で敎習所長と鳥渡云ひ合ひをした。渠は『巡査は不眠不休だと云ふことを知つてるか』と尋ねた。おれは、同僚が持つてをる雜誌『警眼』にさう書いてあつたのを思ひ出したが、わざと『知りません』と云つてやつた。すると、『そんなことで巡査が出來るか』と云やがつた。『出來なければ直ぐ辭職します』と答へると、『そんな短氣ではいかん。もツと本氣で勉強せよ』と來たから、『無論、勉強はいたしますが、人間は寢もしなければなりません。休すみもしなければなり

ません。不眠不休とは、巡査その物でなくて、警察といふ一つの組織がでしよう』と一本まゐらして見た。すると、渠は苦笑して、『そりやアさうだが、譬へを持つて云ふたのだ』と胡麻化しやがつた。教習所長なんて云ふても、高が位地の低い巡査あがりの警部ではないか？　おれにはまだそのえらさうな睨みも利いて來ん。

七月四日。晴。久し振りで撃劍の稽古をやつてをるので、骨節が痛む。そこへ持つて來て、下手くそな薩摩芋に膝の下を打たれて、それがめめづ張れになつた。

七月五日。雨。

七月六日。晴。おれだけは長く教習所にをる必要はないと認められ、きのふからそこを出された。所屬は○警察署で、受け持ちは○公園御成門内の交番所ぢや。芋どもがぽかんとして、羨しさうにしてをつたざまはなかつた。制服に劍をちやか〳〵さして人民に對する心ろ持ちは鳥渡乙であつた。武裝したものが武裝せんものに臨むと、おのづからおれは警察官ぢやと云ふ威嚴が出る。昔のやうな棒ツ切れをやめて、劍にしたのは大いに意味がある。然し同じ巡査の古株に意張られるのが少し面白くない。おれをあの交番の主任にして呉れると面白いのだが――きのふの朝から、けふの朝まで立ちづめてをると、不慣れの疲れが出て眠くてしようがなかつた。交替してから、寄宿舍に歸り、朝飯を喰うてから、宿を探しまわつた。仙臺屋敷の中に、二階の明き間があつたので、穢いが安いのでここに

決めた。間代は一圓五十錢。食費が七圓五十錢。おれは二十錢で、たツた九圓の生活をするのだ。クエン、クエンは生活難ぢや、社會主義ぢや。俸給の殘部を煙草、洗濯代、その他の小使にすると、女郎買ひ一つ出來る見込みはない。

一體、おれは何でこんなことをするやうになつた。〇〇川縣廳第〇部長磯部國雄の食客をしてをれば、やがてはええ地位を與へて吳れるのは分つてをつた。きやつは近々榮轉して、東京へ來たり、本省の局長ぐらゐになるのは決つてる。が、おれはきやつの細君のお雪と衝突した。お雪は一體おれの嬶アになる奴であつた。あいつが國でおれの家へ裁縫を習ひに來てをつた時、母はあいつをおれの爲めに入れようとした。あいつもおれに惚れてをつた。そのうち、あいつのおやぢが相場に失敗して、あいつは下女とまで落ちた。さうして、雇はれたのがあの磯部――その時は、國の裁判所の判事であつた――のところぢや。

お雪が鳥渡別嬪なので、物好きな磯部は手をつけてしまつた。お雪のおやぢもそれが望みであつたのだらう。おれも然しお雪のお庇で雇ひ書記を拜命したが、間もなく磯部はお雪を女房として外へ轉任してしもた。おれも國などにいつまでもくすぶつてをりたくなかつた。磯部が二三度轉任して、轉任と共にずん〱出世して、〇〇川縣へ行たと聽き、母がおれをそこへ賴つて行かしたが、お雪が元のことを忘れて澄まし込んでをるのが癪にさわつた。毎日〱仲が惡かつた。それが原因でとう〱

衝突してしもた。今ごろは、二人でおれの行くゑを心配し、おれの母に濟まんなど云ひ合ふてをるに相違ないが、もう、二度と二たびあんなものの世話になるものか？

兎に角、心祝ひに、煮しめ屋から煮しめを六錢と酒二合とを買うて來て、獨りでちびり、ちびりやつた。

疲れて外出する氣もない。明朝まではからだが自由だから、午後六時に寢床を敷いてもぐり込んだ。下のおかみさんは笑つてをつた。

七月七日。曇。

七月八日。晴。きのふは棚ばたさんであつたが、そんなことにはおかまひなしぢや。巡査も當直の間は實際不眠不休だ。が、餘りさう云ふやうに心がけてをると、詰らんことにまで注意が行て困る。きのふ、夕かた、もう薄暗くなつてから、一人の男が若い女と西洋人の夫婦がするやうに、手を組み合ふて、御成門の方からやつて來て、おれが交番さきで立つてをる前を、これ見よがしで通らうとした。餘り小憎らしかつたので、つい、

『こら〳〵』とやつて見た。これがおれの初めてのこら〳〵だ。ところが、それがまた初めての失敗であつた。

『何がこら〳〵です』と、向ふの男が立ちどまつて、突ツかかつて來やがつた。

『貴樣は、そのウ』とまでやつたが、實は、呼びとめた理由がおれにも分らなかつた。で、
『一體大道を何と心得てをる』とやつた。
『大道は大道だ。』
『その大道を、貴樣は全體不埒だぞ！』
『何が不埒です？』
『一體、そのウ風俗壞亂のやうな眞似をして歩くのが不埒だ。』
『馬鹿なことを云へ！』
『馬鹿とはどうした？　警官に向つて馬鹿とはどうした？』から怒鳴つて、うまく切り拔けようとしたが、向ふが却々承知しない。うるさくなつたから、『もう、ええから、行け〳〵』と放免してやつた。
『何が風俗壞亂だ――何がこら〳〵だ』と、こちらへ聽えるやうに云ひながら、相變らず手を組んで悠々と團扇など使ひながら、白地の浴衣のをやつ等は松の陰道へ見えなくなつた。
　女は十代らしかつたが、男はもう四十近いおやぢと見えた。夫婦ではなかつただらう。少くとも、あの女は妾であつただらう。
つい、まごつかされて、性名を聽くのを忘れてしまつた。胸の中がむしやくしやしたので、その腹いせに何か事件があれかしと待つてをると、

『鳥渡便所を拜借』と來た。こいつ、もし粗相でもしたら、うんとやツつけてやらうと、そばへ行て耳を澄ましてをつたが、無事に濟ませたらしく、而も素直に禮を云ふて立ち去りやがつた。

同僚が巡回から歸つて來たので、おれがまた巡回に出たが、生憎、何事にもぶつからなかつた。

けふは非番だから、一晝寢してから、市中をぶらついた。電車に乘つて淺草公園へ行た。勝手が分らないので、わけが分らず歩きまわつた末、電氣館と云ふ活動寫眞へ這入つて見た。大した入りなのに驚いた。おれもあないなことをやつて、一つ大儲けをしたいものぢや。そのそばの横丁で『まア、遊んでいらツしやい、遊んでらツしやい』と云ふ女がをる店が澤山並んでをるところがあつた。あれが所謂公園の淫賣宿だらうが、なぜ警察が禁止しないのだらう、不思議だ。金さへ持つてをれば、おれでも這入つて見たくなる。

歸つてから、晩酌をやつたが、下のおかみさんがやつて來て、『お酌を致しませうか』など云ふて、いろんな話をしてをつた。

就褥、午後八時。おかみさんが褥を取つて呉れた。

七月九日。晴。

七月拾日。曇、きのふ、交番所の中で椅子に腰かけ、あくびをしてをつたら、突然巡査部長がやつて來た。直立して敬禮をしたが、

『今のあくびはどうぢや？　そんなになまけてをつたら行かん』と叱りやがつた。然し、實際、眠くもなる、さ。あいつ等は五年も六年も所謂不眠不休に慣れツこになつて、神經までが痲痺してをるのぢや。おれはまだそこまで墮落してをらん。いつ飛び出すかも知れんのぢや。

けふは、東京の法律學校と云ふものを所々見て來た。『明治』でも、『中央』でも、『日本』でもええから、一つ這入つてやりたいものぢや。

どうも、女學生の風俗がよくない。袴に、茶だの、紺のやうなだのならまだええが、赤みがかつたのを穿いてをると、丸で裾をまくつて腰卷を出してをるのも同じことぢや。なぜ女學校で禁じないのだらう？　學校で禁じなければ、警察で禁じてもええ。おれが警視總監なら、直ぐさう云ふ法律を出してしまう。まだ袴ならええが、袴を穿かん女は、どうも、東京のやうな人通りの多い町を歩かせるのがよくない。ちら〳〵と赤や白の腰卷が見えるのは、實地の風俗壞亂ぢや。

歸つたら、日が暮れてをつた。床が取つてあるので、聽いて見たら、

『あなたは早く寢る人だから』と、おかみさんが云ふた。晩餐にも、命じて置かんのに酒をつけて來た。却々氣の利いたおかみさんぢや。

七月拾一日。晴。この日は、比較的に面白い事件があつた。晝間のうちのことで、增上寺の大釣り鐘のそばの裏門を拔けたところで、田舍の婆アさんが立ち小便をしてをつた。そこへおれがひよツこ

り寺内から出て來て見付けたので、
『こら』と、一喝してやつた。
『ヘツ』と、婆アさんはびツくりして、つツ立ちあがり、こちらを向いて詫びに詫びた。一緒にをつたつれの婆アさんも、一心に惡う御座いましたから、どうぞ御勘辨をと云ふた。
以後をいましめて行かせたが、小便婆アさんが紅葉館の方へ行くその後ろを見ると、尻のあたりから下へかけて、衣物が濡れてをつた。中途でやめられなかつたものと見える。道理で、をかしな顏をしてをつた。思へば不憫であつた。
七月拾二日。晴。午後四時頃、少し涼しくなつたので散歩に出かけ、愛宕下の通りを櫻田本鄕町の通りへ來ると、
『おい〳〵、森下』と呼びかけたものがある。聽いた聲だと思ふてふり向くと、磯部方で一緒に食客をしてをつた坂本だ。生意氣にも車などに乘つて意張つてゐやがると思ふたら、磯部の命令で家を見に來たのださうな。
『磯部はいよ〳〵〇〇省へ榮轉だぞ』と、きやつ、おのれが榮轉でもするやうに意張つてゐやがつた。
『貴樣は、今、何をしてをるか知らんが、轉任して來たら、詫びに來いよ。今回こそ何かうまいことがあるに決つてをる――おれも、今度は雇ひにでも、何にでもして貰ふつもりだから。』

『まア、おれが今何をしてをるか見に來い。』から云ふて、無理に坂本をおれの假寓へ連れて來た。おかみさんに金を立て換へて貰ふて、酒二升と煮しめ屋の物とを買ひ、久し振りで飲んだり、語つたり、歌ふたりした。おかみさんは下から三味線を持つて來て、それを彈いた。さうして、

『わたし、これでも長唄と端唄は隨分お稽古したんですよ』と、自慢した。

坂本は例の助平根性を出して、おかみさんの手を執つたり膝にもたれたりした。

そのうち、下の主人が歸つたので、おかみさんは下りてしまうたが、坂本は、

『おい、もツとおごれ、おごれ』と云ふ。何のことだと思ふたら、あのかみさんがおれに惚れてをると云ふのぢや。さう云はれると、さうらしい氣ぶりがなかつたでもない。親切に床は取つて呉れる。飲食物にも注意して呉れる。金を貸せと云へば、けふの如く心よく貸して呉れる。子もないので浮氣者に相違ない。大きな丸髷を結ふて、いつもしどけない風をして、肥えて丸い顏に微笑を浮べたところなどは却々愛嬌者で、而も鳥渡美人だ。

坂本は午後の十時過ぎまで飲んで、とまれと云ふたが聽かず、けふは歸らにやならぬと、それでも、あのづぼら男に似合はず、醉ツ拂つてをるのも忘れて、歸つて行つた。あのお雪にまた叱られるのであらう。

七月十三日。曇。(『晴』と一旦書いたのを消して、さう書き直してある。)けふもをかしい事件があつ

た。もう、日が暮れてから、公園内の勸工場の横手の、幼稚園前を三島町に出る細い通りを、巡回してをると、鳥渡怪しい奴が横丁から飛び出して、おれを驅け拔けた。別に走るのでもないが、變な風をして急ぐので、おれも同じ歩調でついて行つた。公園ざかひの溝橋を渡つて、三島町へ出ると、後ろをふり返り、ふり返り、とある細い横丁――と云ふても、たゞ家と家との間ぢや――へ這入つた。

おれは知らん顔をして跡からついて行き、こッそりのぞいて見ると、きやつ、しやがんで大便を垂れてをる。よく／＼したかつたのだと、見える。一昨日のこともあるから、その中途で一喝して、衣物をよごさせるのも大いに人道にもとることだから、暫くおれはきやつの出て來るのを待つてをつた。

やがて出て來やがつたが、おれのをつたのを見て、急いで逃げようとしたので、おれは、

『待て――こら』とやつた。

『へい／＼』と、きやつは立ちどまつて、こちらをふり向いた。

『貴樣は』と、實は落ち付きを失ひかけた心を沈めながら、『今何をしてをつた？』

『へい／＼。』

『云へ、何をしてをつた？』おれのこの權幕に恐れてしまうたかして、

『實は』と、おづ／＼、『大便をしてゐました。』

『何ぢや、貴樣はあすこを大便所と思ふてをるか？』

『へい〳〵。』
『掃除せい、掃除を！』
もう、仰山な人だかりになつてをつた。きやつ、困つた樣子で手をばかりもんでをつたが、
『どうぞお免しを願ひます、どうぞ、どうぞ』と跡ずさりして、最後に『どうぞ』と云ふて逃げ出した。
『こら、逃がしやせんぞ』と、おれはわれ知らず足を急がして、きやつの肩を摑んで引きもどした。
『あんなとこへ糞などしられてたまるものか』と、近處の人々はわれ勝ちに惡口雜言を重ねた。
おれは飽くまで掃除せいと命じたら、きやつ、ふところから新聞の夕刊か何かを出してうんこをそれに包んでをつた。
おれが後來をいましめて放免すると、
『どうもすみませんでした』と云ふて、それを眞面目腐つてつまんで行つた。
おれはをかしくて溜らなんだ。
七月十四日。晴。當直の間にでも、交替して歸る途中にでも、思ひ出すのはおれの家のことだ。元の士族屋敷の、古びた長屋の、太い格子窓の、穢い二階の、疊の破れ腐さつた室などは、どうでもえゝ。が、どうも、おかみさんの顏を早く見たいやうな氣が、近頃外にをつて、頻りにするやうになつ

て來た。お雪でもをればまだえゝが、近しい女と云ふては、今のところ、あれだけだからでもあらう。姉のやうな、母のやうな――その癖、おれとはおない歳ぢや。

　けさ、歸宅すると、下の主人の保險勸誘員が珍らしくまだ家にをつた。夫婦喧嘩でもしてをつたやうに、朝飯の濟んだまゝのちやぶ臺をさし挿んで、鹿爪らしく向ひ合ふてをつた。おれが這入つて行くと、

『そうれ、おまわりさんがお歸りになつた』と、おかみさんはこちらを見て微笑した。然しおれは、おまわりさんなど云はれるのがいやぢや。なぜ世間の人は警察官とでも云はないのだらう？　癪にさわつたから、何も云はんで二階へあがらうとすると、『まア、お坐わりよ、森下さん』と、おかみさんが呼びとめた。

　その無禮なやうでも愛嬌のある聲に引きつけられて、おれは、

『どうしたのです』と、二人のそばへ行つてあぐらをかいた。

『あなたは巡査だから、わたしの云ふ道理を聽いて貰ひますが、ね』と切り出した。おかみさんの訴へたことに據ると、主人は保險勸誘以外にも、いろ／＼な口を利いて、不時の口錢を儲けてをるらしい、それを女房には內證でみな自分の愉快に使うてしもた。

『不時の儲けだから、使つてしまうのもいいけれど、せめて半分はわたしの方へ貰はなければ』と云

ふのも尤もぢや。

おれはおかみさんの云ふ通りにしてやるのがよからうと説諭してから、二階へあがつた。面倒臭いよりも、腹が減つて、減つて溜らなんだのぢや。膳を運んで、おかみさんが段ばしごから顏を出した時、にツと笑ふてをつたが、何となく恐ろしいやうであつた。そしておれは、すき腹であつた爲めか、かツとのぼせた。

獨りで飯を喰つてをると、下ではまだ云ひ合ひをしてをつたやうであつたが、やがて主人は出て行た樣子であつた。

『森下さん』と云ひながら、直ぐおかみさんがあがつて來て、『お酒でも飮みましようよ、今から。』

『朝からですか？』

『ええ、わたし、癪に障つて溜らないんですもの——でも、今、少しぽツたくつてやつたから、わたしがおごりますよ。』

『それは結構です、な』と云ふて、おれは例の如く蒲團を出してもぐり込んだ。一日一晩の勤務の疲れでぐツすり寢込んでをつたのを呼び起された時は、おれのそばに用意が出來てをつた。

『さア、飮みましようよ、森下さん』と、おかみさんのあまツたれた樣子を見て、おれはまた恐ろしくもなつた。寢る前に明けたと思ふた窓の障子がいつのまにか締つてをつて、外をがら〳〵云ふて通

る車の響が暑苦しく室内に籠つたやうぢや。

『お雪ならえゝが、なア』と云ふ考へに醉ふてしもて、おれはおかみさんと何杯猪口を酬い合ふたか知らん。

いつのまにか（この副詞だけは分るが、これから數行と云ふものは書いた跡を筆者が黑く塗りこくつてある。そのうちに、『犯罪』の一語と『こないな恐ろしいこと』の片句とだけが透いて見える。）

七月十五日——二十二日。晴つゞき。出勤時間に後れたり、おかみさんに厭味を云はれたりしたことがあるが、まア、無事。

七月二十三日。晴。增上寺の山門内を巡回してをつて、ふと國での同窓藤山の妹なるお琴さんに出會ふた。が、こんな商賣をしてゐるのを國へ通知されても困るから、知らん振りをして通つてしもた。かの女は背は相變らず低いが、婦人として物になつて來やがつたわい。

七月二十七日。晴。暑くて溜らん日であつた。それに、きのふも、同僚が病氣缺勤の爲めその代理をしたので、からだが丸でへな〳〵だ。久し振りに何か面白いことでもあれかしと巡回してをつた。公園などは人通りが多いばかりで、人家のあるところが少い。それでも、一つ勸工場の後ろからかけて西の方へ行つて見た。どの家をのぞいて見ても、暑さに苦しんでをるのだらう、窓や障子が明け放しで、奧の見えるところでは、だらしのない風をしてをるのが見えた。中には、半裸體やふんどし一

つのもをつた。それでも感心におれの姿を見ると、急いで引ツ込んだり、はだを入れたりした。正直な奴も、世間にはあるものぢやと思ふた。吾々もはだかになりたいのぢやが、商賣が商賣だから、窮屈な制服に重い帶劍――汗水垂らして、そでない風でうろつきまわる苦しさは、恐らくこの經驗をしたものでなければ分るまい。

丁度、午後の巡回の時であつた、何氣なく芝園橋の袂まで行つて見ると、橋のもとに舫つてをる船の上で、年増の女がふんどし一つで一心に洗濯をしてをつた。他の人々が見てをらなんだら、おれの管轄内ではなし、無論おほ目に見のがしてやるのであつた。が、通行人どもはおれの姿を見ると、それとなく咎め立てをせいと云はんばかりぢや。

『あの風ツたらない！　女の癖に。』

『來た〳〵、おまわりさんが來た。』

『今に叱られまアす。』

丸でおれまでが見せ物の一部にでもなつたやうぢや。暑苦しさにまぎれて、橋の上までも行つて見ようと思ふて來ただけぢや。それを何ぞや、おれまでを見せ物にして見ようと云ふ公衆ぢや。如何におれでも悲觀せざるを得ない。

然しこの場合默許するわけにも行かんので、どうせ公衆の興味の的になる位なら、いツそのこと、

一つ、大けい芝居を打つてやれと決心した。
靴音のしないやうに、靜かに川岸を下りて行つて、女の後ろから、突然、大けい聲で、
『こら』とやつ付けた。心のうちではをかしくて溜らんのだが、わざとこわい顏をして睨らみ付け、
『貴樣ア はだかなどになつて、不埒な奴だ！』
『どうも濟みません』と云ふた切りで、顏を眞ッ赤にして、洗濯物を船べりへ放ッたらかして置いて、女は家形の中に逃げ込んだ。あんな女でも、まだ耻を知つてをると見える。
『やアい、馬鹿女――女馬鹿』と叫んで、見物人はどッと笑ふた。
『何がをかしい――今、わめいたのァ誰だ？』から、おれは怒鳴つて、今度は見物人の方へあがつて行かうとした。渠等は氣が早いので橋の上をばら〳〵逃げて行つた。
おれはまた元にもどつて、船の中へ乘り込んで行き、家形の前につッ立つて、女を呼び出した。かの女は急いで衣物を引ッかけてゐたが、恐れ入つて出て來ようともせず、船の底に平蜘蛛のやうにへたつて、小さくなり、眞ッ青な顏をしてをつた。暑いことも何も忘れたやうに、頻りに兩手を突いてあやまつた。けれども、そのまゝ許すわけには行かん。おれは手帳を出して、その住所氏名を控え、將來を戒めてから、引き取つた。
七月二十八日。雨。外出もせず、二階に引ッ込んでをつたら、坂本が袴などを穿き込んでやつて來や

がつた。どうしたと聽くと、いよ〳〵磯部の周旋でけふから内務省のお雇ひになつたさうぢや。日給七十錢、それでおれよりは有福になつたわけぢや。おれがをごれと云ふたが、まだ一文もないと云ふので、またおかみさんに立てかへて貰ふた。きやつは例の如く醉ツ拂つて歸つた。

坂本は、磯部からこれで獨立が出來るのだから下宿でもせいと云はれたさうぢや。まア、體のよいお拂ひ箱ぢや。おれのところに一緒に置いて呉れいと云ふたが、きやつが來ると、こちらの都合が惡い。きツと、おかみさんと〇〇〇てをるのだらうと聽いて、仕方がなかつたが、おれは飽くまで『そんな犯罪は行なはん』と云ひ張つてやつた。

然し考へて見ると恐ろしい。かの女はええ氣になつて、おれまでを顎でこき使をとしてをるが、これがあの主人に知れたら、如何に頓馬な男でも、怒らずにはをらんだらう。それがどうしても恐ろしい。この頃よく夢で喉を締められたり、寢首をかかれたりすることを見るが、何か不兇の前兆であるかも知れん。

おれもどこかへ轉宿して、かの女の顏を見んようにしよう。それにしても、坂本の勸めた通り、今一度磯部へ詫びを入れて、何かえゝところに周旋して貰を。今度の非番には、坂本の約束に從ひ、一緒に磯部の新宅へ行て、今の事情も話し、またお雪にも會ふて見よう。何とか、可とか會へば喧嘩をすれど、矢張り、お雪はおれの好きな女ぢや。

七月廿九日。曇。無事。

七月三十日。晴。交替して歸つて見ると、坂本からハガキが來てをつた。同じ區内の、而もつい近處で、南佐久間町二丁目の下宿屋に下宿したさうぢや。『穢い點に於ては、貴樣のところに勝るとも劣らないぞ』と意張つたやうに書いてある。あいつも却々面白い男ぢや。

行く道すぢだから、おれの方から出て來いと書いてあつたので、おれは少し早く夕飯を喰つてから出かけた。如何にも穢いのはおれの二階にも負けんやうであつた。その中でふんどし一つになつて飯を喰つてをつたが、あの飲み助でも遠慮は知つてをると見え、

『磯部のところへ行くのぢやから、酒はやめて置くのぢや』と云ふた。

赤坂の〇〇坂の磯部の新宅へ行つたら、丁度主人も在宅であつた。が、直ぐに公用があつて出にやならんと云ふて、鳥渡應接間――横濱のよりはずツと立派だ――で面會した。人のうちに厄介になつてをりながら、主人にも主婦にも相談せず、また何等の挨拶もせず、出て行くなど無禮極まるとあたまから叱られた。そこを坂本が幇間か何ぞのやうに、をかしな身振りをしながら、うまく取り持つて呉れた。

『まア、巡査も官吏だから、それになれたのは結構だ。官吏と云ふものは商人なぞとは違ひ、高尚なものだぞ。お前でも、坂本でも』と、あいつまでがおれの引き合に出されて、『この精神を解してゐな

いから、おれの熱心と努力とを左ほどに思ふてゐない。が、おれはこゝ數年の間に大臣になつて見せるから、その時になつて驚かないやうにしろ』と、磯部はその大抱負を語つた。

坂本は、その場で早や驚かされて、目をきよろ付かせてをつた。

『わたくしにも、一つ、何からまい口が御坐りますまいか』と、おれが云ふたら、磯部は非常に怒つた。

『巡査をしてゐりや結構ぢやないか？　まア、二三年それで辛抱出來ないやうでは、何をしても駄目だ！』から云ふて、そッけなく外出してしもた。

きやつが勢ひよく抱へ車で出て行くのをお雪と共に見送りながら、おれは、二三年が一年でも。まだ巡査をしてをらねばならんかと思ふと、情けなくなつた。

詫びに來た甲斐もないと思ふて、直ぐその足で玄關を出ようとした。

『よッさん、まア、お待ちなさい』と、お雪が命令的に呼びとめた。おれの名は吉松ぢや。おれは、突ッ立つたまま、これも突ッ立つてをるお雪の顏を見た。物は云ひたくなかつたが、つんとして奥さんらしい威嚴のあるのに打たれて、

『何ですか』と、つい、ほほ笑まざるを得なかつた。

『あんたのやうな氣短にも困りますよ。何も、わたしと云ひ合ふたからとて、直ぐうちを飛び出さん

でもえゝぢやありませんか？　直ぐ口があつたからえゝやうなものゝ、若しそれがなかつたら、わたしがわざ〳〵困らせたやうに見えて、あんたのお母さんに濟まんわけになります』と、云やアがつた。『そりや濟みませんでした』と、おれは例の如くあたまをくるりと撫でて見せた。それでお雪も例の如く笑ふてしもたけれど、おのればかりの出世の自慢をして、おれの世話を、もう、して吳れんやうな男の家へ來て、あんな奴に奥さん振られるのは、もう御免ぢや。

坂本の下宿へ引取つてから、おれは燒け半分に大いに酒を飲んだ。

七月三十一日。晴。相變らずてく〳〵と交番所へ出かけるのがいやになつて來た。何か外の仕事を見つけにやならん。これからまた出かけるのぢやが、出かける以上は、思ひ切り職權を振りまわして人民を叱り飛ばしてやるに限る。

八月一日。晴。きのふは出勤日で勘定を見なんだので、けふ、おかみさんが勘定書きを見せた。酒代や煮しめ代が多いので、とても、動きは取れん。不足分はおかみさんの立て換へにして置いて貰ろたが、その代り、こゝを轉宿することも出來んやらう。おれはまた今月も恐ろしい夢を見つゞけねばならん。それにしても、少し酒を飲むのを廢せねば、おれの會計が持つて行けん。情けないことぢや。

坂本がまたやつて來て、夜遲くまで馬鹿話をして歸つた。が、おかみさんが坂本を初めて來た時のやうに持て爲さんのを、渠は不平さうにこぼしてをつた。あいつ、燒いてゐやがるんだ。

八月二日。晴。朝、食事を運んで來たおかみさんが、坂本のことを、『いやな人ッたら、ないの、ねえ、ゆふべ鳥渡下へ來た時、うちのが氣が付かないところで、わたしの手を引ツ張つた』と云ふた。さうして見ると、あいつよりはおれの方が少しは立派な色男であると見える。又出かけるのか、色男のおまわりさんも餘り氣が利かん。

八月三日。晴。坂本來たる。

八月四日。晴。

八月五日。晴。國の母から磯部のお雪へよこした手紙を、坂本が持つて來て呉れた。巡査をしてをることを早や云ふてやつたと見える。ありがたくもない。かう云ふて聽かせて呉れい、あゝ云ふて敎へて呉れいと、母と云ふものなぞはくど〳〵しいものぢや。へん、お雪がいくら出世したツて、おれは女なぞから敎訓を聽いてをるやうな男ぢやない。二度と再び磯部の敷居をまたぐものかい？　お母さんが心配してをるから、返事を出せとお雪が云ふたさうぢやが、おれはそんな返事は出さん。

八月六日。晴。けふも終日暑かつた。おれと一緒におなじ交番にをる同僚が、年が若いので時々書生などに揚げ足を取られて閉口するのぢやが、今晩もまた失敗した。それは一人の醉漢が高聲で詩吟して歩いてをつたのを咎めたのである。すると、交番の前は忽ち人の山が出來た。醉漢は怒鳴ろ。見物人はみな醉漢の味方で、口々に勝手なことをわめき散らしてをつた。そこへおれは巡回から歸つて

來た。』一人の書生は滔々と辯じをつた。
『吾人は憲法治下の臣民である。上一天萬乘の赤子である。然るに何で無辜の良民に鐵拳を喰らはせた』と、辯舌につれて火のやうに怒つてをつた。
『どうしたわけだ』と、おれが出しや張つてよく聽いて見ると、その書生が巡査と醉漢との問答を立ち聽いてをつて、面白いとか、愉快だとか云ふたので、
『何が愉快なのだ』と、同僚は怒つて、いきなり書生のあたまをごつんとやつた。それで書生も怒つてをるのであつた。して見ると、書生の怒るのにも理由がある。こゝは一つ、おれの智慧袋を絞つて平和に解決しなくてはならんと思ふたから、極めておだやかな言葉で書生に花を持たせてやつた。
『理由は分りました。貴下の方にも理由があると思はれます。見れば、普通の人のやうでもなく、充分學識もあり、見識もある書生さんと思はれますが、どうかわたくしにおまかせ下さつて、お引取り下さいませんでしようか？』
書生はまだぐづ〳〵云ふてをつたから、
『まだ分りませんか』とおどし付けたら、
『さうです、ね、ぢやア、もう何も申しません』と云ふて、行てしもた。
馬鹿な奴ぢや、お調子者がおだてられて、嬉しがつてをると、おれは跡で同僚と共に冷笑してやつた。

八月七日。晴。坂本がまた來やがつた。おれの惡口をさん〴〵云ふておかみさんを物にしようと思ふてゐるらしい。馬鹿な奴ぢや、なア。

八月八日。晴。

八月九日。晴。坂本來訪。おれが日記を讀み返してをつたところへやつて來て、何だ、見せろと云ふた。見せて溜るものか？　あいつにはこれだけうまく言文一致は書けまいて。おれが日記を書き出したのは『日記文作法』と云ふ書物を讀んでからぢやが、から正直にやり初めたのは、新聞に出た書物の廣告文中に『僞らざる手紙』と云ふ文句があつたのを見てからのことぢや。

八月十日。晴。

八月十一日。晴。坂本來訪。餘りうるさいので、もう、やつて來んでもえゝと云ふてやつた。さう云ふてやつたら、そんな冷淡なことは云はんでもえゝぢやないか、また時機を見て自分が磯部のおやぢへ取り持つてやるつもりでをるのぢやからなどと云やがつた。然し、もう、そないなお爲めごかしの嘘八百は聽かんでもえゝ。折角の非番日をうるさくて、おれは何も出來ん。おれだとても、少しはこれから勉強もせにやならん。馬鹿話や色氣話ばかりの相手にはなつてをられん。

八月十二日。晴。きのふ買うた『實業之日本』を交番所へ持つて行つて讀んでをる時、生憎、部長が巡回して來て見付けられ、大いにお目玉を頂戴した。考へて見ると、こないな物を讀んだところで

にえらい人物になれさうでもない。公園の通りを二頭馬車なぞで通つて行く紳士や高等官を見ると、おれは自分ながら何の張り合もなくなる。丸で蟲けらも同前ぢや。おれが欝忿を漏らすのは女郎か淫賣のところばかりでだろが、それも金がないので行くことも出來ん。けふも、或小僧がその自轉車を手ばなしで乘りまわしてをつたのを見付けたので、それをわれ知らず程度を外れて叱り付けてやつた跡で氣の毒のやうな氣がした。

八月十三日。晴。きのふは日曜日だが、おれは當直であつた。坂本の奴、不埒千萬ぢや。おれの留守を見込んで朝からやつて來やがつて、おかみさんに直談判をしたさうぢや。森下にも〇〇〇なら、おれにも〇〇と云ふて、〇〇〇〇しようとまでもしたさうぢや。智慧の足らん奴は恐ろしいものぢや。〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇そないなことに立ち至るまでぐづ〳〵してをつたのは女の落ち度ぢや。

『あんたが全體少し浮氣ツぽい風をしてをるから行かんのです』と、おれはこれから人に馬鹿にされないやうにせいと戒めてやつた。

『だツて、わたしがあの坂本さんに氣を見せたりしませんわ』と云ふたが、おれがなほ眞面目に以來を戒めたので、女はおとなしく『これから氣を付けます』と誓ふた。

兎に角、無禮極まる奴だから、おれは坂本に激烈な絶交狀を送つた。

八月十四日。晴。當直。

八月十五日。晴。朝歸つて見ると、主人が下にがん張つてをつた。氣のせいか、おれを見て苦い顏をしてをるやうに見えた。おれも鳥渡胸がどき付いた。二階へあがると、坂本から辯解の手紙が來てをつた。

『貴兄もどうせ關係して居るものを、小生ばかりを責むるは無理に候はずや。兄と小生とは久しく兄弟に等し』云々。餘り勝手な熱を吹いてるやがる。兄弟なら、兄弟の物は犯すべからずと云ふこと位があいつには分らないのぢや。

こゝまで書いた時、おかみさんが膳を持つて來たが、いつもとは違ふて、つんとした顏をしてをる。おれはお雪のつんとした顏を思ひ出した。それがまた面白くないことの兆であつた。おかみさんの額には投ぐられたかして、大きいこぶも出來てをつた。

此間、坂本の爲めに大聲をあげたのが隣りへ聽え、隣りの人が怪しい噂をこゝの主人にして聽かせた。おかみさんがそれは坂本の無禮をしかけたことで、森下さんには關係のないことだと辯解した。が、主人は却々氣を廻して承知せんから、けふ、直ぐこゝを出て來れいと云ふのぢや。

『よろしい。わたしも男だから、出て呉れいと云はれるなら、直ぐ出ます。』かう云ふて朝飯を濟ますと、直ぐ下宿屋を探しに出た。おかみさんは、少し遠いところへ移る方が遊びに行くにも却つて都合

がえゝと云ふたので、新錢座に一つあつたのを約束して歸つて見ると、矢張り、主人はがん張つてをつた。そして、おれが行李と共に車に乘つてそこを出るまでも、一言の口もきかなかつた。『知らぬは亭主ばかりなり』かい？　結局、あのおかみさんから借りた金も拂はんで濟むのだらう。口どめして置いたから、こちらへは坂本もやつて來んでえゝ。

八月十六日。雨。巡回してをりながら、國のことや母のことが思はれた。自分の息子が雨の中に突ツ立つてをるざまなぞを見せたら、母は泣き出すだらうが、おれも亦泣き出したくなつた。然し何かうまいことを見付けるまでは、斷じて國へ便りはせん。

八月十七日。晴。おかみさんが尋ねて來た。金のことを催促するか思ふたが、そないなけぶりもなかつた。

八月十八日。晴。今晩も醉漢を一匹つかまへた。紳士風をしてをつただけ、癪に障つたから、放免して呉れいと泣くやうに頼むのもかまはず、まだ醉ひが醒めたとは見えんと云ふて、三時間ばかりとめて置いてやつた。

八月十九日。晴。おかみさん來訪。おれのやうな蟲けら同前のものを追ふて、十代の娘か何ぞのやうにひよい〳〵やつて來るのも隨分馬鹿な奴ぢや。向ふにをつた時は、おれが食客のやうに小いさくなつてをつたが、こちらに於ては、おれが本統の主人のやうに意張つてやる、さ。

八月二十日。晴。けふの夕方も却々暑かつた。交番の前に立つてをつたら、二臺の車が威勢よくやつて來た。ふと、氣が付くと、さきに立つてをるのは磯部であつた。少し面喰らうたが、おれは直ぐ直立の姿勢になつて敬禮をすると、きやつも眞面目にシルクハットを鳥渡取つた。が、跡の車にはお雪が乘つてをつた。これは向ふからお辭儀してにツと笑ふた。おれは何となく磯部に敬禮したのまでが阿呆らしくなつた。

おれもいツそ傲然とかまへてをればよかつた。

が、お雪もあゝして見れば却々立派な貴婦人ぢや。うまくやつてゐやがる。

然し、車が行き過ぎてから、あいつが頻りに振り返つておれの方を見てをつたところを見ると、それでも未だおれのことは思ふて呉れると見えるわい。

けれど、まだそないなことでおれの暑苦しい、汗で臭くなつたからだを救ふて呉れることは出けん。

八月二十一日。晴。またおかみさんが來たから、お雪の話をして少し法螺を吹いてやつたら、本氣になつて燒いてをつた。（以下略）

——（四十五年三月）——

ぼんち

『ほんまに、頼りない友人や、なア、人の苦しいのんもほツたらかしといて、女子にばかり相手にな
つて』と、定さんは私かに溜らなくなつた。
づん〳〵痛むあたまを、組んで後ろへまわした兩手でしツかり押さへて、大廣間の床の間を枕にし
てゐるのは、ほんの、醉つた振りをよそほつてゐるに過ぎないので。
實は、あたまの心まで痛くツて溜らないのである。
藝者も藝者だ。氣の利かない奴ばかりで、洒落を云つたり、三味をじや〳〵鳴らしたり、四人も來
てゐた癖に、誰れ一人として世話をして呉れるものがない。
『ええツ、こツちやもほツたらかして往んだろかい』とも心が激して來た。
渠は實際何が爲めにこんなところへ來たのかを考へて見た。夕飯を喰べてから、近頃おぼえ出した
玉突をやりに行くと、百點を突く長さんと八十點の繁さんとが來てゐた。
長さんはさすが上手で、繁さんの半分も行かないうちに勝つてしまつた。

定さんは上手な人に使ふて貰ふ方がいいと思つて棒を持ちかけると、横合から繁さんが出て來て、

『わたいとやりまひよ――よんぺはわたいが負けて敷島を散財したさかい、今晩はなか〳〵負けまへん。

『わたいも負けまへん。』

『ほたら、ビールだツせ。』

『よろしゅおます。』

定さんは持つた棒を置いて、翡翠の輪が付いた胸の紐をはづし、鐵色無地の絽羽織をぬぎ棄てた。そして白絽に墨色の形を染めた襦袢の兩袖を折り返し、絹立萬筋の越後縮を紋紗の角帶で結んだ腰を後ろの方へ突き出し、生眞面目な顏を緣のそばへ持つて行つた。目をぱちくり、ぱちくりさせながら、ねらひを定めて、棒を二三度しごく度毎に顏が自分の手とさき玉とを往復するその樣子が如何にもをかしいと云つて皆が笑つた。で、長さんが默笑をつづけながら椅子を離れて來て、

『そないなこツちや明きまへん。』そして定さんの尻を押して右へ寄らせ、そのからだの据ゑかたとねらひの付け方とを敎へた。

兎に角、弱い方から突き初めるのが規則だと云ふので、定さんから突き初めたが、最初の一突きも、そのやり直しも當らなかつた。三回目にうんと突いた玉は當つたが、ただの一發だツた。

『ちよツ！』定さんはわれ知らず舌打ちをして、長さんを見た。
『占め、占め』と叫んで、繁さんはねらひ寄つた。
『しツかりせんと負けまツせ。』長さんは親切らしく應援をした。
『負けたかて、よろしゆおまツさ。』から云つて、定さんは最初からの不成績を身づから辯護してゐたが、それでも最初の勝負には勝つた。それから、然し、二回つゞけて失敗した。そしてどちらからも、負けた度毎に朝日ビールを一本づつ明けた。
　二回つゞけて勝つたものが滿足さうにコツプを傾けてゐるのを見ると、殘念で〳〵溜らないので、定さんから進んで今一回を要求して、また見事に負けた。渠はつひに往生して、一息しながら、四本目のビールが半分になるのを見てゐた頃、松さんが這入つて來た。
『またけたいな奴が來よつた』と思つた。定さんから見ると、松さんは身なりが餘りよくない上に、亂髮肌の男なのが氣になつた。
『さア、ぼんちの散財だツせ』と、繁さんは連勝を誇りがにコツプを新來者にさし出した。
『ふン』と、松さんは不滿足さうに手を出してコツプを受けた。渠は既に一杯機嫌の顏をしてゐた。
『ビールやあきまへん、なア。』
『けど、なア、わたいが續けて三番勝ちましたのんや。』

『ほたら、ぼんち』と、松さんはあけたコップを下に置き、『わたいと一番七十で行きまひよか？』
『そりや無理だす。』長さんは定さんの肩を持つて呉れるやうに、
『松さんも八十で行きなはれ。』
『ええツ、負けたろ！　その代り、なア』と、棒尻を床にとんと突いて、――その響を今思ひ出すと、定さんのあたまへは一しほぴんと來るのである。『寶塚だツせ、寶塚。』
『そりや面白い。』繁さんも側から贊成した。
『ぼんち、しツかりやんなはれや。』長さんが云ひ添へたのに力を得て、定さんは一生懸命になつた。
『そないに目の色まで變へんかてええやたいか』と云つて、松さんは憎いほど落ち付いてゐた。二點、五點、七點、十點と身づからの聲で數へながら、渠は、定さんが三回もから棒を突き、二回二點と三點を取つたうちに、あがつてしまつた。
『さア、寶塚や、寶塚や！』松さんは小躍りして喜んだ。渠は長さんと繁さんとに頻りに何か耳打ちをしてゐたが、やがてうち揃つてそこを出た。
『わたいも行けまへんか』と、ボーイが云つたが、定さんがそんなに大勢は迷惑だと云ふ顔をしたので、他のもの等が遠慮して引ツ張らなかつた。
『あの時、いツそのこと、皆をことわつてしもたらよかつた』と定さんは考へて見ても、跡のまつり

で仕方がない。

江戸橋から市中の電車に乘つたが、松さんは景氣よく大きな聲を出して、相生にしようか、菱富に、しようかと皆に相談してゐた。

いづれ酒を飲む場所のことだらうから、他の人々の手前、こツそり相談すればいいのにと、定さんには何だか晴れがましく思はれた。が、松さんは人前もかまはず嬉しさうににこ付きながら、づかづかと渠の腰かけてゐるところへやつて來て、渠の意向を聽いたのである。渠は自分のおごりだから結局自分のさし圖を他のもの等が受けるのだと思つて、少々得意になつたと同時に、どこがいいのやら一向勝手が分らないのを恥辱であると思つた。そして、おど〱した。ビールも飲まなかつたのに顔に少しほてりをおぼえながら、暗にどこがいいのだと尋ねる目附きを松さんに向けた。

でも、松さんはそは〱してゐて、定さんの心持ちを判じて呉れなかつた。脊は低いが、酒樽に辨慶縞の浴衣を着せ、その腰に白縮緬の兵兒帶をしたやうなからだを釣り革にぶらさがらせ、車臺のゆれる通りにゆれながら、

『おい、どツちヤにしヨう？』

『………』定さんはこの時ほど恥かしいことはなかつた。溜りかねて坐席から立ちあがり、人々に聽えないやうに松さんの耳もとへ口を持つて行つて、『どツちやがええ？』

『そりや菱富の方が──』と、松さんは自分のよく行く方の名を云つた。
『ほたら、その方にしまひよ。』
『わたいの通りだツせ』と、また大きな聲をして松さんは他の友人を返り見た。
定さんはどちらに決つたのかを不圖おぼえ落したが、その聲で自分等の秘密を人の前であばかれたのをひやりと感じて腰を下ろした。すると、松さんはつづけて渠を見おろし、
『藝子は四人と決つたぜ。』
『藝子までも』と反問しようとしたが、口には出なかつた。そんなものまで懸けたのぢやアないと云ひたかつたのだが、兼て一度は呼んで見たいと思つてゐたものが呼べると考へると、嬉しさと恥かしさとに先づからだがすくんでしまつた。それに、行く人數だけ呼ぶのだとすれば、自分にも一名當るのだから、自分はその當つた女とどうすればいいのだらうと云ふことに考へ及んで、身ぶるひをした。

二

梅田から郊外の箕有電車に乗り換へる前に、松さんはそのそばの郵便局から今行くからそのつもりでゐて呉れいと云ふ電話をかけた。
『さすが、松さんや、なア。』定さんは、かう心で感心しながら、遠距離二十五錢の電話料を出してや

つた。

その頃には、もう、長さんや繁さんの顏にも醉ひが十分に出てゐた。それでも、最も多く目に立つほどはしやいでゐたのは松さんばかりで、どこかで飮んだ下地があつたので腰がふら／＼してゐるにも拘らず、電車の中を別々に離れた長さんのところや繁さんの前へ渡つて行つて、何か面白さうに度度耳打ちをしてゐた。そのあげくが定さんの隣りへ腰をおろして、その肩に痛いほど――實際、痛かつたが――抱き付いた。そして、わざとだらうと思へたほど醉つた振りをして、

『おい　こら、ぼんち』と、定さんをゆす振り、渠の鼻のさきへ熟柿のやうになつた圓顏を、ぬツと突き出した。『あんたにも、なア、ええ女子を世話してあげまツせ。』

定さんはそれが恥かしかつた。目をそらして、きよろ／＼と誰れとも知れない隣りの人や正面の人を見た。そして、さう云ふ人々が若しうちの人や出入りの男であつたら、直ぐおやぢや姉さんに知れてしまうだらうに――と

『おい、ぼんち、心配するな、大丈夫や。』松さんはただ無性にはしやいでゐて、長さんや繁さんが襦袢の肌ぬぎになつたのを見て、

『おらもやつたろ』と云つて。同じやうに肌をぬいだが、襦袢を着てゐなかつたので、直肌であつた。

『肌をお入れ下さい、規則ですから』と、車掌にやツつけられて、松さんがすご／＼肌を入れたのは、

定さんには氣味がよかつた。

松さんはなほしつこく定さんの肩に取りすがつて見たり、低い齒の向ふ附き利久をはいた足さきで空を蹴ツて見たりしてゐたが、そこには落ち付けないで、定さんの向ふ側の席へもどつた。その時、渠はどうした拍子か、――見てゐた定さんが思ひ出してもおかしくなるのだが、――自分の脫いで置いた麥藁帽子と隣席の人のとを取り違へ、隣席の人の被つてゐた帽子をその人のあたまから取つて自分のあたまへ上せた。

『どうした?』東京口調で怒つた隣りの人は、それを突差の間に奪ひ返した。

松さんも自分の失敗に自分でびツくりしたのか、失敬しましたとも何とも云はず、腰をあげて、自分の帽子がその脇にころがつてゐるのを探し取つた。そして默つて再びそこに腰をかけ、手なる帽子を――失敗の時と同じ手早さで――あたまに上せた。

他の友達は二人ではツはと笑ひながら、何かしやべり合つてゐたので、それに氣がつかなかつた。が、多くの乘客は東京辯の怒り聲がした方へすべての注意を向けた。中には、その時の樣子を見てゐたので、思はず吹き出したのもある。

松さんは獨り興ざめた顏をして、席をまだ定さんのそばに移し、

『暑い、なア』と云つた切り、窓から外をのぞいた。

同じ側の乘客でまたわざとらしく吹き出したものがあるが、定さんは――をかしいとは思ひながらも――笑ふだけの餘裕がなかつた。

『四人の料理に四人の藝子や。なんぼかかるやろか？　ふところには、そないに仰山錢持つてやへんのに。足らんだけは、電話でうちへ云ふて、助さんに持て來てもろたらええ。』こんなことを考へながら、何だか嬉しいやうな、おそろしいやうな、賑かなやうな、悲しいやうな氣分に往來せられて、行くさきばかりが急がれた。で、松さんと一緒に無言で外を眺めてゐると、電車が切つて進む涼しい風がほてつた顏に當つて、からだの汗臭いのをも吹き拂つて呉れる。

新淀川の鐵橋を渡る時など、向ふに焚い松をともして漁でもしてゐる光が水の上にきら〳〵と映つて、玉突屋などではとても見られない涼しさであつた。

『もう、鮎が取れるのんや、なア。』

『さうだッしやろ。』

こんなことを小さな聲で語つてるうちに、十三驛も過ぎてしまつた。

大阪の方の空がぼうッと赤くなつてゐるのが見える。あの下にうちの者や好きな女子等が、殊に、隣家の靜江さんも住んでゐるのだ、な、――そして、その空が車の向きで隱れて行くのを追ふ爲めに、定さんは窓から首を出した。そのとたん、頑固なおやにでも太い棒を以つて投られでもしたやうに、

渠のあたまをいやと云ふほどがんとやつ付けて行つたものがある。
『あぶない！』松さんの手がいつのまにか定さんのあたまをさすつてゐた。
『何や、何や？』長さんも、繁さんも、松さんの聲に驚いてやつて來た。
『あたまを柱で打ちやはツたのや。』
『怪我しやへんか？』
『したか知れへん。』松さんは定さんの無言で押さへてゐる手を無雜作に押し除けて、そのあたりを方方圓く撫でて見た。
『てんごうすな』と、定さんは云つてやりたいほどであつた。
『異狀はありませんか？』車掌もやつて來て、見舞ひを云つた。
『えらいこともないやうだす。』松さんはこの場合、かう云つて置かなければ、目的地へ行けないと思つたのだらうと、定さんは跡になつて考へられた。
『あの時直ぐ引ツ返して大阪病院にでも行たらよかつたのに――今では、もう、手後れか知れへん。』
考へて見ると、今にも自分の死が近づいてゐるのではないかと思はれる。押さへてゐるあたまが段々張れぼツたくなつて來るやうで、その張れぼツたいのは、頭蓋骨の碎けた間から、腦味噌が溢れ出たのではなからうかと。

兩手で押さへてゐても、づん〳〵あたまが痛む。が、世話役の松さんは少しも思ひやつて臭れない。おのればかりがえらさうな風をして、長さんや繁さんを番頭ででもあるかのやうに取り扱ひ、來てゐる藝者を皆までわが物にして、

『おい、ぼんち、不景氣に何ぢやい、しツかりしなはれ』もあきれてしまう。

『寶塚へ行たら、醫者に見てもろたらえゝ』と云つたではないか？　それを、終點で下りると全く忘れてしまつて、直ぐ酒だ、藝子だとさわぎ出した。

三

玉突には負けたが、一體、これは誰れのおごりだ？　皆おれの財布を當て込んでゐるのぢやアないかと定さんは憤慨すると同時に、あの時、電車の窓から首を出さなかつたらよかつたにと云ふことを祈禱のやうに繰り返してゐるのである。

電柱と云ふものは、電車軌道の兩側に立つてゐるものとばかり思つてゐた。ところが、さうでない場所もある。

『この邊と螢ケ池とは、柱が眞中に立ツとりますから、お顏を出すとあぶないです』と車掌が說明した。

定さんはそれを知らなかつた。

なぜまたこんなところへ來たのだ？ 首を出さなければよかつた。いや、電車に乘らなければよかつた。いや、玉突で懸けなければよかつた。と、かう云ふ風に考へを繰り返して見ても、柱に衝突した事實は取り返しの付けようがないので――

定さんはあの時驚きと痛さとをじツと辛抱して、窓を背にして席にもたれたまま、

『何ともおまへん』と苦笑したが、膝の上に置いて見た兩手がおのづからあたまへ行つた。すると、松さんは

『痛いか』と聽いた。

『そないに痛いことありやへん』と云ふつもりで手を膝におろし、首を左右に振つたが、いつのまにか又手を上へやつてゐる。

『痛いか』と、また同じことを松さんが聽いた。

『そないでもありやへん』と答へた切り、うるさいので、手をおろしてゐようと思つても、直ぐまたそれがあたまに行くのである。

じツとしてゐると、その痛みに堪へ切れなかつた。直ぐそばに立つてゐる眞鍮柱にあたまをもたせかけ、ひイやりする氣持ちに痛みを忘れようとして見ても、自分の呼吸が迫つて來る。からだをねぢ

つて顏を窓の枠に押し當てて見ても、いのちが縮こまつて行くやうだ。が、今から歸りたいと云ふやうな弱音も男として云ひ出せない氣がした。

『馬鹿だ、なア』と云ふ東京人の聲が車臺の隅から聽えた。また、見える限りの乘客等は、すべて目を見張つて、あざけりの顏をこちらに向けてゐる。

定さんは内と外とから押し苦しめられて、水の中から息をしに出た時のやうに、恥ぢも構はず、すツくりと立ちあがつて見たが、まだしも自分の家の隣りの靜江さんがここにゐないのを大丈夫だと思つた。飛んでもない、あの子にこんな失敗を見られたら、ここらの人と同じやうに冷遇し出して、樂しみにしてゐる云はず戀も全く物になるまい。

が、自分の意中をまだ云はず語らずのうちに、こんなことで死んでしまうのは詰らないとも思つた。そのとたん、電車が不意に大ゆれがして、足をすくひかけられた。同時に、くら／＼と目まひがして、あたりかまはずつツ伏してしまつた。

尋常に進行してゐる電車の響に背中が痛いのを感じて、再び氣が付いた時は、定さんは松さんの太つた膝の上につツ伏してゐるのであつた。その上に松さんは兩肱で頬づゑを突いてゐたらしい、それが痛くて重苦しい感じを與へた。

『苦しい、置いて吳れ』と云ふやうに背中をゆすると、松さんはその固く重みのある兩肱を離れさせ

て、兩の平手を載せた。が、なほ人臭いあツたか味が定さんの鼻のあたりに付いてゐた。
　栗は母の懐ろを出て以來、人のにほひをから近く嗅いだことはなかつた。
『これが靜江はんの膝やつたら、なア』と思ひ及ぶと、この刺戟があるだけでも松さんを懐かしい氣持ちがした。男は男で、女でないにせよ、かうして、いつまでも抱かれてゐたいものだと。
　で、かうした姿勢のまゝ、定さんは兩手をあまへたままに柔かにあたまへ持つて行つたら、松さんもその手の行つたところを撫でて呉れながら、
『ソリヤキコエマセヌーデンベヱサン』と語つてゐたが、やがて定さんの耳もとへ口を寄せて、
『しツかりしなはれ、な、行たら、女子を抱かせてやるさかい、なア。』
　低い聲ではあつたが、定さんはそれが人に聽こえたらとあわてた。そして、その聲の下から俄かにからだを起して見た。すると、松さんの隣りにゐる人が眞面目腐つた顏をしてこちらを見つめてゐた。で、定さんの手がまたあたまへ行つた。
　松さんは然しそんなことには頓着なく、その坐をつるりと拔けて、先刻から筋違ひの所へ移つて腰かけてゐる長さんと繁さんとの間に行つて、どツかり腰をおろし、窓の方に靠れたまゝ、先づ長さんを首に手をかけて引ツ張り寄せ、何か耳打ちをした。すると、長さんは松さんの手を振り切つて、
『知りまへん』と逃げ、目じりを下げて松さんを横目に見た。次ぎに又松さんは繁さんにも同じ耳打

ちをして、だらしない笑ひを呈せしめた。

『ぼんち大明神やさかい、なア』と叫んで、松さんはペツたりと背を窓の方にもたれさせ、ただにことそら嘯いて、また利久下駄の兩足で空をかたみ代りに蹴ツてゐた。

いづれ、呼ぶ女の話だらうと定さんは推察して見ないふりをしてゐたが、渠も渠等のと同じ樂しみを心に畫がいてゐればこそ、あたまの痛くて苦しいのをも辛抱して行くのであつた。

四

『けど、お父さんやお母はんに知れたら、どないしョう?』

この疑問は、定さんには、おそろしいよりも耻かしいのであつた。

『長はんとこで泊めてもろた云ふとこか』とも考へて見た。が、『行かん、行かん。往んでから醫者を呼んでもろたら、直ぐ白狀せんならん。』

最終電車に乘り後れて寶塚に泊つたと云ひ僞して置かうかとも思案して見たが、

『そや〳〵、電話をかけて、あの助さんに錢持て來い云はんならんのや!』跡で調べられたら、『藝子遊び』したと云ふ化けの皮が剝げてしまう。

『けど、あの時は、まだこゝまでせツぱ詰つてをらなんだ』と思ふと、定さんの心には、二度目に氣

が薄くなりかけた時のことが浮んだ。

じツと堪へて、自分の目をどこか一ヶ所に据ゑてゐようと思つても、その目から先きに動いて行つて、からだを靜かに落ち付けて置くことが出來なくなつた。右を向いて見た。左りを向いて見た。座わつて見た。また腰かけて見た。孰れにしても、結局は、手があたまへ行つて、行つて――

『人がおだてたかて、かまへん』と決心して、自分の手の行くままにして見たが、それも亦その儘では續いてゐなかつた。

まだしも電車が進行してゐて呉れれば、多少でも氣がまぎれてゐるが、あの石橋の分岐點で、さきの箕面行き電車に故障が出來、自分等の車臺が二十分ばかり進行を停止した時は、自分の呼吸もそこに全くとまつてしまうのではないかとまで思へた。

やツと動き出したが、今度は、また、その動き出した電車その物までが自分の苦しい呼吸をしてゐるやうに思はれて、定さんは今夜おぼえようとする藝者買ひの天罰を、前以つて、こゝに受けてゐるのだと感じて來た。

『石橋で下りたら、よかつた。』かう思へば思ふほど、息が詰るやうで――

そのうち、池田停留所へとまつた電車は發車した。と同時に、もう、辛抱がし切れなく、一時も早く下車したくなつた。で、先づ立ちあがつて、よろ〳〵しながら、松さんの前へ行つて、皆を怒らせ

ないやうに、先づ、澡に相談して見た。

『わたいだけ下りまひよか？』

『どこで？』松さんは、じッと、おどかすやうな怖ろしい目付きをして見せた。『こないな寂しいとこで下りたかて、どないしなはる？』

定さんはこの反問にいぢけた。默つて、睡い時のやうに重くなつた上目蓋をあげて、ちよツと松さんを見返したまゝ、またしぶ〳〵ともとの席へもどつた。そして、てれ隱しに窓の外を見ると、池田の小蘭山と云はれる五月山の麓に、ちらほら涼しさうな光が見え、電車はがう〳〵響きを立てゝ、猪名川の鐵橋を渡つてゐるのであつた。

『こゝまで來たら、なア』と、繁さんも松さんに贊成するやうに、

『梅田へもどるよりや、先きへ行た方が近おまッせ。』

『そないし給へ、そないし給へ。』長さんも亦ぞんざいに口を添へて、ぐた〳〵したからだを窓へもたせかけた。

『人の苦しいのんも知らんと！』から目に云はせて友を見た。あたまの痛いのは、もう、全く自分一個の問題だと分つて來た。一番親切だと思へた長さんまでがこの場合の相手にもなつて呉れなかつた。まだ皆日は淺いが、玉突で知り合になつた友人は友人だのに、揃ひも揃つて、たッた三十點の初步者

をばかり喰ひ物にして、ただおのれ等の樂しみをしたらいゝのかと云ふ、僻みも出た。
『何をしなはる』と云ふ角立つた聲が聽えたので、定さんは注意をその方に向けた。
『濟んまへん。』かう云つて、松さんは自分の下駄の片あしが渠の正面にゐる客の足もとにころがつたのを拾ひに行つた。
『阿呆かいな』と心で叫んで、定さんは松さんを初め、長さんや繁さんの至つて冷淡なのを聯想し、『わたいは死にかけてんねやで』と云つてやりたかつた。
我慢すればするほど、刻一刻に死か迫つて來るやうな氣がして來た。で、花屋敷を通過して、段々目的地へ近づいたのを知りながら、待ちかまへた——やがてこの電車から救はれるが早いか、他のもの等はうッちやらかして置いて、自分は自分で、どんな醫者でもいゝ、醫者と云ふ名の付くうちへころがり込まうと。

五

清荒神の梅林や竹藪の暗い蔭を出て、涼しく開らけた夜の空氣に、新溫泉のイルミネションが山と山との間を照らして、ぱッと皆の目を射初めた。
『さア、寶塚の終點や！』かう思つたら、然し、張り詰めてゐた精神が忽ちゆるんだので、定さんは

意識がぼうッとなつた。空氣の外、さえぎる物もないのに、溫泉裝飾の電光が見えなくなつた。そして電車の中も、自分のからだも、殆ど全く眞ッ暗に暗い。

『腦味噌が早やわたいを死ぬ方へ引ッ込むのんやないか？』ふと、總身に身ぶるひを感じた時、どんと電車のとまつた反動が來て、定さんはあたまのづん〳〵するわれに返つた。

『どなたも終點でございます。お忘れ物のないやうに。』

『來たぞ、來たぞ！』から他の三名は爭つて、立ちあがつた。そして定さんをせき立てた。が、渠は立つて渠等の手にがツくりと取りすがるより外に力が出なかつた。

『お醫者はん——呼んで——欲しい！』

『醫者がおまツしやろか？』賴りなげに云つて皆を見まわしたのは繁さんだ。

『おまツしやろ、こゝでも仰山人の來るとこだツさかいな』と云つて、長さんは車臺の出口へ集つた人のどれかに聽いて見ようとした。

『おまツさ』と、車掌は氣の毒さうに言葉を引き取つて、醫者の家のありかを說明した。

『おましたかて、——先きへ行てから呼んだかてえゝやないか？』松さんは叱り付けるやうに促した。

他の乘客等が憎々しさうに松さんの顏を見たり、冷笑するやうに定さんの樣子を熟視したりして出

で行く跡から、定さんは重苦しいからだを松さんと長さんとの肩にもたせかけた。そして改札口を出てから、餅菓子屋の角を曲り、氷屋と食道樂との向ひ合つた電燈が明るい道を殆ど夢中で歩いて、相生樓に突き當ると、

『あ、何でもこゝや』と安心しかけた。が、なほ左の方へ引ツ張られて、その隣りの門へ這入つた。

『お出でやす』と云ふ男や女の揃つて出したのが見える聲が、定さんにはどこかの遠い一齊射擊の音のやうに聽えた。そして背の低い樽男が眞ツさきにわざとらしく大股に足をあげて、式臺をあがつて行くのが、定さんの目に朦朧と映つた。その時、渠は長さんと繁さんとに助けられてあがつて行つた。

にこ〳〵して出て來た女中に松さんは先づ聲をかけた。

『おい、お菊、また來たで。』

『ようお出でやす!』お菊と呼ばれたのが笑つて、わざと大きな聲を出した。『顏見たら、來たのんは分つてまツさ――なア、旦那』と、かの女は長さんにとも繁さんにとも付かず念を押した。

『何をぬかす』と云つて、松さんは女の首に取りすがつた。

『いやア』と大きく叫んで、女は渠の手をふりもぎつて身をかはした。そして渠がまたさし延べた手をぺたりとうち拂つて、にらみ付けながら、『いたづらツ兒! やんちやはん!』

媚かしい東京語や大阪言葉と奇麗な姿とに、定さんは姉のことを思ひ出した。そして自分の、あの

姉でも、男に冗談を云はれると、こんな眞似をするのであらう。自分の隱してゐる慾望も、して見ると、遠慮には及ばない。かまうものかと、目の光までが俄かに明るくなつた。
『おい、ぼんち、大事ないか？』松さんがふり向いたので、
『大事ない』と笑つて見せた。
『ちツとア勢ひようなつたやうや、なア――おい、繁はん、大いに飮まう。』
『飮まいでかい、な？』
『あんたもしツかりしなはれ。』長さんの肩をぐいと引ッ張つて、
『玉突に勝つたんやないか？　今となつては、ぼんちがいや云ふても、わたい等が承知しまへん。なア、繁はん。』
『もツとも、もツとも！』
『どうや、ぼんち、そやないか？』
『…………』定さんはただ苦笑ひをしてゐる。
『大事ない云ふたやないか？　ぼんち』と、跡戻りをして來て、相手の肩をぽんと叩いた『しツかりしなはれ！　わたいは醉うてるやうでも、醉うてやへん。これからまだ〱飮みまッせ。』
『…………』

『返事しなはれ――えゝか？』
『よろしゆおます。わたいも飲みます。』
『面んろい、面んろい！』松さんはまた皆のさきへ立つて、わざと大股に歩いた。
長さんも繁さんも、元氣づくと同時に、定さんから手を放してしまつたので、定さんは獨りで元氣をふり起し、苦しまぎれににやにや笑つて見せながら、皆の跡から郞下を進んだ。
が、お菊は渠だけが様子が違つてゐるのを見て、踏みとどまり、
『あんたはん、どないしなはつた――そないに青い顏して？』
『定さんは何か云つて人並みの相手にならうと思つたが、矢ツ張り苦笑の間にただにや〳〵してゐる外なかつた。
『こいつは、なア』と、松さんが跡戻りして來て、『電車の柱であたまを打ちやはつたんや。』
『まア、あぶのおました、なア。』
『けど、案じたことやおまへんやうや』と長さんもふり返つて、浮付いた調子だ。
『大事おまへんか？』
『……』定さんは、うんと首をたてに振つたが、その首を振つただけでからだがふら〳〵した。
『先生呼んで來まひようか？』

『そないなことせんかて』と、松さんはまた先きに立ちながら、『藝子はんが來たら、ようなりまッさ。』
『大事ないのんなら、よろしゆおますけど、なア。』から心配さうに云ひながら、女は定さんの脊中に手を持つて行つて、渠の羽織の退け衣紋になつて、而も左りの肩からはづれさうになつてゐるのを直して呉れた。
その時、定さんの鼻に、後ろの方から、女のしみ渡るやうなにほひがした。鬢附けのにほひもまじつてゐるやうだから、あたまに結つた髮のにほひだらうとは思へたが、それを渠には女その物の慣れ慣れしさと離れて考へることが出來なくなつた。

六

眞ン中を大きな菱形に張つた天井の電燈の下へ來た時、定さんは直ぐころりと横になつて、兩手であたまを押さへてゐた。
『しツかりしなはれ、ぼんち』と、定さんの上に馬乘りになつて、兩手で肩のところを押し付けた。
『痛い、痛い！』定さんはあたまから手を放して、その兩手で疊に力を持たせながら、からだをひねつて、上の重みから免れようと藻がいた。

弱い奴ちや、なア。』松さんは立ちあがつた。そして他の二人の方に行つた。二人は温泉道の松並木が風に少しゆられてゐるのが見える手摺りのそばにあぐらをかき、全く肌ぬぎになつて、巻煙草に火をつけたり、扇子を使つたりしてゐた。で、これも亦直肌ぬぎのあぐらになつて、『どうやろ、なア、ぼんちがあんまり悪いやうなら、ぼんちだけ、どこぞ静かなとこへ寝さして置こか？』

『それもよろしゅおまん、なア。』繁さんはかう答へて、開らいた扇子をばた／＼使つた。

『けど、なア、まア、醫者に見てもろたらどうや――どもなつてをらなんだらええが――』長さんは定さんの方を見て、早くさうせいと促す様子をした。

『そや／＼、見てもろて行かなんだら、ぼんちだけに藝子はん見せたげへんのや。』かう云ひながら、松さんはまた定さんのそばへやつて來た。

　定さんは聽かない振りをして聽いてゐたのだが、三人が三人ともなぜ自分をかう退け物にしようとするのか分らなかつた。

　ここへ梅田から電話をかけた料金も、定さんの財布から出した。往復の電車賃も同じ財布からだ。それだのに、あたまが砕けたかも知れないほどの目に會つた渠をそばに置いて、車中ででも渠等ばかり面白さうにさわいでゐて、渠の苦しみを少しも思ひやつて呉れる様子は見えなかつた。そしてここへ來ると、直ぐ、松さんを初め、おのれ等が身づから出し合つて散財するかの様に幅を利かせて、『藝

子を見せたらん』とは何のことだ？　渠等は渠の金でおごつて貰ふのだが、おごり主が不意の怪我をしたのを幸ひにして、その分迄も渠等だけで占領してしまはうとするのかとも、定さんは考へて見た。
『氣の小さい奴等や、なア――わたいかて、部屋住みかて、大けえあきんどの息子や。一旦はづむ云ふたら、ちツとのことは惜しみやへん。その代りわたいも一緒に仲間入りさして貰ふ。』から憤慨した心を起したが、渠の分に當る藝者には、仲間の年順から云つてもきツと一番若いのが來るのにきまつてゐる。と、渠はふいとほほえみの目を明けた。そして松さんがそばに坐つてこちらをにこ〳〵見てゐるのに出會した。
　松さんは、定さんの樣子を、痛いのを胡麻化して苦笑してゐるものと見た。
『こら、ぼんち』と、定さんの手を押しのけるやうにしてあたまを無雜作に撫でてやりながら、『どうや、痛いか？』
『…………』定さんは、かう亂暴に取り扱はれても、そばに來て貰ふのを寧ろなつかしいやうな氣がして目に涙を湛へたが、返事にかぶりを振つた切りだ。
『醫者を呼ばんかてええか？』
『…………』矢ツ張り無言でうなづいた。
『ほたら、置きまひよ。』松さんはこちらを見つめてゐた長さん等の方へ顔を向けて、その方が餘ほど

『ええかいな、見て貰はんかて』と、長さんが心配さうに立つて來た。
『本人がええ云ふたら、ええやないか？』
『けど、なア、惡いやうなことやしたら、行かんよつて』と云ひながら、長さんも坐わつて、定さんの額に手を置いて見たり、また、來ようとする藝者に關する想像が血管にまわつて脈搏を強く打つてゐる、定さんの手頸の脈を取つて見たりした。
　定さんは却つてそれをうるさくまたわざとらしく感じた。そして松さんよりも長さん等の方がそんなことをして、わざとにも仲間を外させようと強いるのではないかと云ふまわり氣を持つた。
『痛おまツか、ぼんち』と、繁さんが椽端から聲をかけたのには返事をしなかつた。
　そこへお菊が茶を運んで來た。先づ三人集つてるところへそれを分配してから、繁さんの方へ持つて行つたが、それから定さんが横にまるまつてゐる脊中のところに坐つた。定さんのいら〱してゐる神經には、やアわりと香ばしい風が當つたやうで、渠はおのづからからだが縮みあがつた。
『惡おまん、なア、痛うては。』
『痛うない云ふてまツさ。』
『けど、なア――』

『痛うないことはないやうやけど』と、長さんは定さんのどこを見るともなく明けてゐる目を見詰めながら、『醫者よりや藝子はん見たいのんやろかい？』

『そやない！』定さんは顔を赤らめて、淡泊さうに、抗議した。そして長さん等の方から寢返りしたとたん、今度はお菊と顔を向き合せたので、急いで目をつぶつて、あたまへまわしてゐた兩手の肱で顔を蔽つた。

『藝子はん見せたら、直りまツさ』と、松さんはわけもなく云つて、椽の方へ離れて行つたのを、定さんは目で追つて、呼ぶなら早く呼べと命令したかつた。

　そして、

『どもないか、ほんまに』と、長さんがまだ心配さうに脊中へ手をかけてゐたのをも、早く離れて呉れればいいと思つた。どうせ若し病人として世話をして貰ふなら、渠等のやうな毒性のものでなく、この『ねえはん』にして貰ふ。さうしたら、藝子などは來なくてもいいのだが――

『ぼんち』と、手を肩に置いてお菊に呼ばれたのが、誰れにさう呼ばれたのよりも胸に滲みた。『どうだす、先生呼んで來まひよか？』

『もう、ええ云ふてたら、ええやないか』と、松さんは叱るやうな聲だ。そして團扇を大きくあふぎながら、『早う酒を持て、酒を持て。』

『は、はア——殿の仰せに従ひまして』と、お菊はわざと畏まつた樣子をした。
『芝居だツか』と眞顔で云ひながら、別な女中が浴衣を持つて來た。
『兎も角も、皆はん、お着かへやしたらどうだす』と、お菊が注意したので、椽がはのものが先づそのつもりになつた。
『あんた、着かへまツか』と、長さんが定さんに云つた。
『ほんまに、大事おまへんか？』また、お菊が聽いた。
『うん。』かう、定さんは答へなければならないやうな氣がしてしまつた。が、その實、お菊と云はれるこの女だけになつたら、醫者を呼んで貰ふやうに賴むつもりであつたのである。
　さうもしたいが、また甕子も見たい。
『かまへん、かまへん、成るやうに成れ』と、私かに決心して、定さんも起きあがつた。そして、長さんの後ろで、帶を解き初めた。おのづからしがんで行くその顏をお菊に見られないやうにして、橫向きでかの女に衣物を脫がせて貰ひながら、『長はんも、繁はんも、羽織も着ず、見ツともない風をして來た、なア』と考へた。

七

定さんはこの料理屋の浴衣に着かへるのが珍らしさ、嬉しさに、元氣をふり起した。そして皆が『藝子、藝子』ばかり云つてるさもしさに、自分ばかりはさうでないぞと云ふことを見せて、さツき恥かしかつた時の意趣返しでもしてやるつもりで、新溫泉へ這入つて來ようと云ひ出した。

『偉さうなこと云やはる。』松さんはかう一言のもとにはね付けて、煙草盆のそばに浴衣に改まつたあぐらをかいた。

『およしやす。新溫泉など、當り前のお湯やおまへんか？』

『それにせい、いつでもまた行けぼツさ。』かう云つて、長さんや繁さんも進まないで、ただ立つてゐた。

それではやめようと、直ぐ素直には云へなかつた、何となく、自分の位をおとすやうな氣がして。で、少しむツとして、鐵色モスリンの帶をしめがら、

『ほたら、わたい獨り行て來まひよ。』

『ぼんち』と、松さんは一層強く出て、『なんで、そないな無理云ひなはんのや？　あんたが行たら、皆ついて行かんならん。そないな世話やかさんかてええやないか？』

『うちのお湯にしときなはれ』と、お菊も口を出した。そして笑ひながら、『うちのんも新溫泉だツせ。』

『ほたら、置きまひよ。』かう云つて、松さんの方をじツと見た、あたまのづきん／＼痛むのを辛抱して、

それでも、渠の云ひ分には、定さんも膽を落ちつけた。

そして皆でざッと一あびしてから、暑いからとて、皆わざと椽へ並んだ。松並木に最も近い隅の柱を境にして、その右の板の間に長さんから松さん、左のに繁さんから定さんだ。定さんの方の列は、丁度、誰れかの山水の三幅對を懸けて、大きな松の植木鉢をあしらつた床の間に、襖をへだてて、さし向つてゐた。

『今晩は』と、入り口の襖の明きから手をついたものは、誰れも誰れも、まどゐの遠いのに驚いた。裾を曳きながら、

『とうない遠方だす、なア』と云つて來たものもあれば、

『戚があつて、なか／＼あんた方のねきへは寄れまへん』と、わざと坐敷の眞ン中につツ立つてゐたものもあつた。定さんには、それが面白いことを云ふものだと思へた。來た中で、勘七と云つて、薄藍の濃淡で龜甲形の出た紋壁透綾を着たのが、最も年若らしかつたが、それが松さんのそばへ坐わつて、渠にばかりべちや／＼しやべくり出した。そして、

『旦那、こないだのお方どないしやはりました』とか、『裸か踊り、おもしろおました、なア』とか云つた。

『おれも一つ今晩踊つたるぞ。』松さんは直肌の腕で腕まくりをする眞似をして、元氣を附けてゐた。

『あんたはよう知つてなはる仲だツか？』から、繁さんが聽いたのに答へて、
『そやとも、なア』と、松さんは勘七を兩手で引き寄せて、『なか〳〵わけのある仲やもん、なア。』
『よろしゅおました、なア』と、かの女は押さへられた肩をすくめて身をのがれ、笑ひながら、くづれた膝を整へ、元の通りに坐わり直した。
『わたい等もそないなりとおまん、なア』と云つて、長さんはさがつた目じりで自分のそばの藝者を見た。
『合ふたり、叶たりだツか？』それが氣まづい顏をしながらも答へた。そして定さんにさへ珍ころめいたと見える目鼻を動かして、『わたいメ子と云ひます、どうぞよろしう。』
『今から、もう、妥協しやはるんや困りまん、なア。』から云つて繁さんも話の相手を求めた。すると、渠のそばにゐたのがまた凉しい聲で、
『旦那、妥協やおまへん、ラツキヨウだツせ。』
『こりや、やられた。』繁さんは箸で摘んで口へ持つて行きかけた薤のやうな物を宙にまごつかせた。
松さんは相變らず勘七ばかりを相手にして、惡口を云ひ合つたり、叩き合つたりしてゐた。
定さんのそばには、初めに坐わり後れた婆々ア藝者で、顏も皺くちやな『愛助ねえちやん』と呼ばれるのが來てゐた。渠が何の洒落も云へない上に、手をあたまへ持つて行つたり、目をぱちくりさせ

たり、顔をしかめたりしてゐるので、かの女も渠にとツ付くすべがなく、たゞ渠の猪口が一二度明いた時、その跡へお酌をしただけで、他のもの等の話に調子を合はせてゐた。

渠はその藝者のふけた顔と、一番遠い場所にゐる松さんのそばの子の膝に透いて見える桃色とを時時見比べながら、何だか勝手が違ふやうに思はれた。

『年から云ふたかて、松さんがあの子を取るわけがない――また、誰れを取ると云ふことかて、錢を出すわたいが決めたらええやろ』と、私かに不平を起した。

然し定さんの目的の勘七は、『わしが國さ』と今一つ渠の分らない物とを踊つてから、他のお坐敷へ貰はれて行つた。それを渠は鳥渡行つたので、また來るのだらうとも思つたが、出て行つた時の挨拶振りでは、もう來ないのだらうかと失望し初めた。然し、あからさまにそれを誰れに尋ねて見ようと云ふ氣は、出さうと思つても出せなかつた。

折角張り詰めてゐた精神がその場にゆるんで來て、またあたまの痛みを盛り返し、それへ堪へられなくなつた。そして醉つた振りをして立ちあがつた。

『どこへ行きなはる、ぼんち?』松さんは皆と同時に定さんの方を見て、かう詰問した。

『どこへも行きやへん』と答へて、床の間の前へ行つて、床に横たへた紫檀の敷木を枕にした。

渠が『思ひ思つて歸つたろかい』と激したのはこの時だ。

八

『あんたはん、弱をおまん、なア』と云つて、例の愛助が落ち付いた聲でくくり枕を持つて來て吳れたが、それも直ぐ皆の方へ行つてしまつた。そして、三味を鳴らして、

『さア、お歌ひやし、な』と云つてゐる。それに付いて、松さんが都々一を二つ三つ續けて歌つた。

すると、繁さんが二上りだと云つて、『隅田のほとりに』とか、何とか云ふのをやつた。

『ほたら、わたいもやりまひよか』と云つて、長さんも何かやつた。

　松さんがまたやり出した時、一方では繁さんとそのそばの藝者とが何とか云ふ拳を初めた。そして繁さんが二三度負けた。

『おい、京八、おれと來い、おれと。』松さんががさつな調子でちよいは、とん〳〵などやつてゐたが、俄かにやめて、鼻で物を嗅ぐ音をわざとらしく大きくさせて、『臭い、なア、何ちや？　ヨードホルムのかざや。あんた、瘡毒だツか？』

『あほらしい』と、京八と云はれたのが凉しい聲で怒つたやうに叫んだ。

『けど、なア、くさいやないか？』

『くさいかて、瘡毒と決つたわけやおまへんがな。』

『おッちやへ行きなはれ。病人は病人の世話なとしなはれ。』
『看護婦だッかいな』と、愛助が口合ひを入れた。
『負けたさかい、そないな毒性云ふてーなアねえちやん』と、京八は笑ひながら立ちあがつて、『わたいかて、女子一匹、へん、精神がありまッさ。』
『えろおまん、なア』と、〆子がその方を見あげた。
『そないにおこんなはんな』と、松さんは猪口の酒を吸つた。
『おこりやへんけど、なア――』
『ノウ〳〵、おこるべし、おこるべし』と、愛助がけしをかけた。
『ぼんちはどこぞ惡いのんだッか』と云ひながら、京八は定さんの方に足を運んだ。
『うん』と、松さんが答へて、『どたまを電車の柱にぶつけたのんや『。
『ほんまに?』と松さんの方にふり返つて、『どたまりこぶしもない――』
『洒落なはんな』と、松さんは云つたが、愛助にも聽かれて、定さんのことを殘酷な言葉で說明し初めた。
　定さんは枕の上で、兩手であたまを押さへたまま、賑やかな方に向いてにや〳〵しながら、目を明けたり、つぶつたりしてゐたが、

『なア、ぼんち』と云はれて苦笑の目を明けた時、赤い蹴出しがちらと見えたかと思ふ間もなく、太さうな膝が渠の肱さきに坐わつた。繁さんのそばで鈴のやうな聲を以つてラッキョウの洒落を云つた女で、この女ばかりが裾も曳かず、廂髪に結つて、奥さん然と地味なお召を着てゐるのは、どうしたわけだらうと思はれた。それが皆に聽えるやうに言葉をつづけて、『すり傷にかてヨードは付けまッさ――きのふ、家族温泉へ行て、手拭ひで腰んとこをすりむいたのんや。』

『あやしいもんや――新温泉の家族風呂は、なア』と、松さんが追窮したのに、愛助が調子を合はせて、

『そりや、さまぐ\なすりむき方もおまッさかい、なア。』

『そやく\！』〆子もそれに賛成した。

『ええ人があんまり奇麗にしてやらうとおもたんやろ』と、長さんも口を出した。

『よかつた、なア』と、京八はわざと嬉しさうに手を叩いた。

『へーえ』と、入口の外で女中が返事をした。

『違ひまッせ、こッちやのことやし』と、愛助が向ふへうち消して、こちらでわざとらしくふき出した。

京八は首をすくめて、定さんににッと笑つて見せた。定さんも苦さうにだが、にッこりした。そして、ぷんと鼻さきへにほつて來る藥のにほひを、却つて香水か何ぞのやうにやさしいものと感じて、

そのにほひの主となら、この痛みを分けて、一緒に死んで貰つてもいいと云ふ氣になつた。
『痛おまッか』と云つて、やわらかい手を肩に置かれた時、梁の姉よりも別嬪と思へた顔を下からじッと見詰めて、涙に目をしよぼつかせながら、それでもかぶりを振つた。

九

外からも、二三ケ所三味や歌の聲が聽えてゐる。
明け放つた廣間へは、さッといい風が這入つて來た。
『おう、ええ風や、なア』と云つて、京八が定さんのそばを立つた時は、再び皆のものの歌さわぎが初まつてゐた。
梁の好きな子までが浮かれ出して、松さんの踊るかッぽれに合はせて、『沖の暗いのに、サッサ』などとやつてゐる。
定さんも寂しい氣がまた一しほ引き立つて來た。手をあたまから放して起きようとしたが、重い石で押さへられてゐるやうなので、再び枕の上に肱枕をした。
『どないせい、死ぬのんや。死ぬのんなら、うちの者を呼んで叱られるよか、こッそり思ひ切り樂しんで、跡の勘定だけをうちの者にさせたかてええ。』

かう考へては見たが、渠をそそる樂しみとは歌でもない。酒を飲みたいのでもない。松さん等のさわぎがどこか遠くの方で聽えるやうな氣持ちになつて來た時、定さんには電燈で明るいが然しひツそりした小間で——而も呼べば直ぐ母も姉も來るやうな安全な、然しひツそりした小間で——好きな女の膝に抱かれて、自分の死んで行くそのありさまが浮んでゐた。

が、それも暫時のことで、渠が實際の痛みを堪へる爲めに目を堅くつぶつてゐるのをおぼえると、『おい、ぼんち』と云ふ松さんの聲が最も近くにして、『不景氣に何ちやい？　ちよつとお出なはれ、相談がある。』

定さんはふら〳〵するからだを踏みこたへて、松さんについて、廣間の人々の返り見る視線の範圍を出た。そして便所への道の廊下に立つた。

『どないするのんや、寢てばツかりゐよつて？』

『…………』青い顔に、ただ口びるのさきをとがらせて顫はせながら、松さんの醉ひの出切つた赤い顔を見詰めた。

『歸る云ふたかて、もう電車がありやへんで。』

『わたいかて、歸る氣やない』と、不平たツぷりにまた口をとがらせた。

『それで占めたもんや』と云ふ風にほくそ笑みて、松さんは低い聲をつゞけた。『ほて、女子はどない

しよう？』
『さう來てこそ順當や』と心に云はせて、定さんは全く得意になつた。そして自分の女を撰べと云ふことだと合點した。でも、特に低い聲をして、云ひにくさうに答へた。
『あの――さツきに――歸つた子がええ。』
『ひえー』と、松さんはあきれてわざと跡ずさりした。『まだそないなこと聽いてやへん。あの、なア、藝子を往なそか？　じやこ寢さそか？　それとも、來とるのなり、別なのなりを皆で別々に取ろか？　それを相談するのんや。』
『わたい、知りまへんが、な、そないなこと。』
『ぷツ』と、松さんは堪え兼て、押へてゐた笑ひを吹き出した。そして廣間の入り口へ行つて首を突き出し、『おい、ぼんちゃ勘七さんに惚れてやはる！』
『うそや、うそや！』定さんはわれ知らず入り口から飛び込んだ、その脊の高いからだをつツ立てた。そして酒の醉ひが加はつて一しほ痛むあたまを兩手でかかへながら、胸に溢れる恥しさを眞顏になつて胡魔化した。『そないなこと云やへん。』
愛助は〆子と顏を見合はせて、冷笑し合つた。
『まア、きなはれ。』松さんは今度は定さんの手をぐツと引いて、つれ出した。

『人氣役者は矢張り違ひまん、なア。』定さん等二人に聽えるのを憚らず、〆子がここにゐない朋輩を羨むやうにかう云つたのには答へないで、愛助は笑ひながら叫んだ。
『わたいではどうだす、お乳をたんと飮ませてあげまッせ。』
『は、は』と、繁さんは笑つた。
『ちゝ、はゝだん、なア』と、また京八の口合ひだ。そして首をすくめて、『わたいかて、どうだす？』
『みな、あのぼんちの散財だッか？』愛助は生眞面目になつて長さんに聽いた。
『ぼんちが玉突きに負けたおごりや。』
『負けた上に、又散財だッかい、な――ええぼんちやのんに、なア。』
こんな話が聽えるのをすべて冷かしだと見て、定さんは聽かないふりをしながらも、困つたことを云つてしまつたと思つた。そして大きな目を見ひらいて、相手をただ見つめてゐた。
『あの子は、なア』と、松さんも眞面目腐つて、『わたいの聽いたところでは、毎晩旦那があつて、あかんのやさうや。』
『ほたら、もう、ええ』と云ひ切つた。そして今の失敗を回復したやうな氣がして、元の場所へ戻り、またどたりと身を横になげた。何だか松さん等が默つて勘七を歸したのがうらめしい。かの女が行けなければ、京八をと云ふ下心があつて、一刻も早く樂にこのからだを介抱して貰いたい外、何も願ふ

ところがない。が、この場合、何ことでも云ひ出せばまた失敗を重ねるかも知れないので、尋常にあたまが痛むから早く死の床へ入れて呉れいとさへ口に出せなくなつた。そしてぶり返して來たやうに痛む痛みを堪へる爲めに、床の間の方へ寢返りして、胸の中では獨りあせつて、

『やけ糞や、このままここで死んだれ』と云ふ無言の叫びをあげた。

一〇

『ほたら、もう、歸りまひよか？』長さんは先づ興さめた聲を出した。定さんが御機嫌を失つたと見たやうすだ。

『電車がおまツかいな？』繁さんは進まなささうだ。

『もう、大阪へはおまへんが、な。』かう云つて、愛助は落ち付きを失つて來たのを隱して、細い銀煙管で煙草の火をつけてゐる。

『何のこツちやい、わたいにはわけが分らん。』松さんも皆の不興に釣り込まれて、『ぼんちも男やないか、一旦はづむ云ふたら——』

『はづんでるやないか』と、定さんは後ろ向きのまま口をとがらかせた聲でこぼした。『けど、わたいは大怪我をしたのんや。』

『怪我したもんが、勘七でもないやないか？　ぼんちはわが勝手ばかり云ふて、――來やへんもんは無理やないか？』

『無理やない』と云つて、こちらへ勢ひよく向き直り、『ほたら、松さんに怪我人の世話がでけまツか？』

『わたい、看護婦やおまへん。』

男も女も一度期にわツと笑つた。定さんはまた反對に寢返りして、

『笑ひたい人はもツと笑ひなはれ！』

『ほたら』と、松さんは定さんの機嫌を取るやうに優しくなつた。

『どないしよ云ふのんや？』

『あんた等は勝手にしなはれ、わたい醫者を呼んで貰ひまひよ。』

『醫者！』松さんは今更らのやうに驚いたが、他の友人に氣の進まない相談をかけた。『ほたら、醫者を呼んでもろて、――わたい等は皆でじやこ寢しまひよか？』

『さア』と、長さんが確答しかねたのを見て、

『なんの、お錢の心配は入りやへん――どツちや道、ぼんちの持ちにしまツさ。』

『それもよろしゅおまツしやろが、なア』と、繁さんもどッち付かずの樣子だ。

『君も、お錢の心配は入りやへんで。』
『けど、なア』と、長さんがそれを受けて、『ぼんちの工合が分らんと――?』
『そやさかい、醫者を呼んで貰う云ふてるやないか?』
『呼んで見てから、また相談したらどうや?』長さんはなほ心がもぢ付いてゐた。
『ほたら、この人達に濟まんやないか?』かう云つて松さんは藝者の方を返り見て、『あんた等の都合はどうや、な? たとへ十二時過ぎてからの線香代は、わたい等で受け持つことになつても、あんた等には割前はかけまへんで。』
『どうも恐れ入ります』と、愛助は松さんの冗談を受け流して、他の子どもの顏を見た。そして暫く目話しをしてゐたが、誰もどうと口に出すものがなかつたので、かの女がまた代表者のやうになつて答へた。『さしつかへない子だけは、なア。』
『そりや、さしつかへたら仕やうがおまへん――京八さんはどうや?』
『さア――』
『さア』と、松さんもかの女の返事を眞似して、興ざめた座をつくろひながら、『〆子はんはどうや?』
『さア――』
『そりや、あかん。』松さんはてれ隱しにあたまを抱へた。すると、愛助が、

『ぼんちの眞似だツか？』

男達はそれにつれて煮え切れない笑ひを擧げた。

そこへお菊が出て來て、京八を貰つて行くことになつた。かの女は丁度よかつたと云ふ風で身がまへを初め、他の皆に挨拶してから、定さんの脊中のところで腰を下げ、渠の顏をのぞくやうにして、

『ぼんち、さいなら。』

『…………』

『さいなら――おこツてやはるのんや。』

『おこツてやへん、ゐてて欲しいのんや』と答へたかつたのだが、定さんは言葉に出しかねた。そしてこのまま死んだら、あれにもこれにも、二度と再び逢ふことが出來ないのに――『をつて呉れたらええのんに、なア』と云ふ訴へが私かに胸一杯になつた。

『今夜死ぬ。きツと死ぬ。せめて死ぬまでゐてて呉れ！』から喉もとまでは來ても、聲に出せなかつた。そして自分のからだが獨りぼツちの寂しい闇に壓搾せられて、その結果としての如く、目から自然に、とめ度なく、涙がほど走つた。

そして、心の奧まで浸み込んだヨードのにほひと涼しい聲の足音とを追つて耳をこツそりそば立てながら、自分の家は何でも不自由のない大商人だと云ふことが、この場合、女どもに認められてゐな

いのを絶望的に殘念がつた。
松さん等が話して吳れたらいいではないか？　一言耳うちして吳れたらいいではないか？　金はいくらでも貰つてやるから、一晩だけとまれ。一晩でこの男は死ぬのだから、と。

思ひやりのない友人達だ、なアー自分に容易く女を與へてやると約束したのは初めからうそで、ただそんなことを出しにして、おのれ等の勝手な飮み喰ひをしようが爲めに、自分を怪我させてまでここまで引ツ張つて來たのだらうと云ふ恨みと失望とが、心のうちで段々太いあたまをもち上げて來た。

同時に、またかう云ふ疑ひが起つた――藝子と云ふ者は、皆の云ふ通り、慾でその身を賣るのではないか？　今晩に限り、さうした樣子が見えないのは、松さん等のやうな風體の惡い人間と一緒に來たのでか知らん？

『何にせい、賑はしい夢のやうに一緒に來とつたかて、順々に影のやうに消えて行くのんや――それも、美くしい方から』と考へると、もう默つてばかりゐられなくなつた。

『さいなら』と、また例の涼しい聲が遠くの方で響くのが聽えた。すると、定さんの目の前には、はツきりと、先刻這入つて來た時の、この家の門前門內の樣子が見えた。さツさと歸つて行く奧さん風の藝子――庭掃除や下駄番の男衆――多くの女中――その中から、最もいいにほひのしたお菊――最初に歸つてしまつた薄桃色の藝子――赤い色――ヨードホルム――『さいなら、おこツてやはるのん

や。』

かう云ふ影や言葉などが、その瞬間に一度期に定さんを襲つて、渠の神經を高ぶらせた。渠の全身には、あたまの痛みと同志打ちをする、何だか知れない强い力が遠慮なく勃興した。そして、耻かしみの薄らいだ脇腹の間から、

『どないな女子でもええ』と云ふ聲が出た。この時、愛助がわざとさり氣ないふりをして、

『もう、十二時だッせ――わたい等はどないしまひよ?』

『そや、なア』と、松さんが受けて、『どうや、ぼんち?』

『………』定さんは、それでも、暫く返事が出來なかつた。が、これを最後に藝子どもがみな歸つてしまうのでは困る。胸がただどぎまぎした。渠はあたまから手を離し、思ひ切つて皆の方へ寢返りした。そして、松さんが疊の上で愛助のそばにあぐらをかいて、こちらを見てゐるのに尋ねた、『じやこ寢たら、何だす?』

『わツ、はッ、は』と、繁さんと長さんとは椽がはでまだ膳に向つてゐながら、一度に笑つた。二人とも箸を持つたままで、こちらを見てゐた。

『何がをかしい――いやしい奴ちや、なア』と、定さんは心で云つたが、おもてにはただいやな顏をした。

『あの、なア』と、松さんはほほゑみながら、小學校の先生を思ひ出させるやうな口調で、『皆と、なア、藝子はんも一緒に並んで寢るのんや、――但し、なア、手も足も出すべからずだッせ。』
『結はへときまほかい、なア。』愛助が無駄な口を出したのにつれて、〆子も亦笑ひながら、
『わたい等の方が結はへられたら往生や、なア。』
『そないな詰らんことと置きまひよ！』
『は、は、は、は』と、他の皆が揃つて笑ひを擧げた。

二

定さんは皆が自分を馬鹿にしてゐるのだと見て、ぷり／＼怒つた。そしてそれを反省して見る餘裕もないほど、あたまの痛みが辛抱し切れなくなつて來た。想像にせよ、うその影にせよ、それが目の前にちらついて、隱れた慾望をそそつて晃れる間は、何となく痛みのもたせ柱があるやうであつたが、その柱も亦渠のあたまにぶつかつた柱であつたのが溜らなく殘念だ。
『二重の衝突！』かう云ふ考へに思ひ及んだ時、定さんの女に對する情が全くあたまの痛みに變つて、腹のどん底まで通つて、からだ中を煮えくり返す。そして、一坐が互ひに興ざめて默つてゐる廣間を、あたまをしツかり兩手で抱いたまま、ころげ廻つて泣き叫んだ。

『醫者を呼んで呉れ！　醫者を呼んで呉れ！』

松さん等は渠を少しでも落ち付かせようと努めて、酒の醉ひは全くそこ退けになつてしまつた。藝者どもはまた魂消てしまつて、皆そこ〳〵に引きさがつた。

碁を打ちに行つてまだ歸らないと云ふ醫者を探し當てて、店のものが連れて來た。そしてそれに病人の云ふ通りあたまのいやに張れぼッたい容態を云つて、よく診察して貰ふと、

『もう、手後れやさかい』と獨り言のやうに云つて、顏を青ざめて、病人の寢かされてゐる小部屋を出て行つた。

それでも、皆は醫者が何か取りに行つたのだらうと思つた。で、定さんのまわりを取りまいてゐる友人や、店のかみさんや、お菊、その他の女中は、心配の餘り、別に言葉を出さないでゐた。

『うん、うん』とばかり、定さんは呻つてゐる。

やがて醫者が手に持つて來たコップの物を定さんに飲ませた。が、定さんは半分ばかり飲んでから、それをつッ返し、苦しさうな聲で、

『水は――入らん――藥を』と云つた。

醫者はこの言葉を聽いてをののき顫へた。が、それをまぎらせる爲めに、そのしがめ顏に苦い笑を帶びて、かみさんを見あげた。かみさんは、膝を突いてのしあがりながら、そこで窺いてゐたのであ

る。かの女の心配さうな顔と渠の苦笑とがぶつかつた時、渠は別に手當ての仕やうがないと辯解する口調で訴へた。
『あたまの鉢が砕けて、病人の云ふ通り、腦味噌が外に出てるやうやさかい、なア――』
『えツ！』かみさんは、腰をぬかしたやうにべつたりと坐わつて、今更らの如く醫者の顔を見詰めた。
『矢張りそれか、なア』と、定さんには自分の想像してるところが事實らしくなつた。そしてしツかり目をつぶつたまま、初めて實際に自分を危篤だと考へた。そして、また、玉突のたツた三十點がいのち取りのゲームであつたかも知れないことばかりを悔みに悔まないわけに行かなかつた。『でも、人にただの水など飲ませて――こないなへぼ醫者の云ふことなどまだ分りやへん』と云ふ心頼みもあつた。そして、
『よう、まア、その間辛抱でけた、なア』と、醫者がてれ隱しに感心して見せたのが幽かに聽えた。すると、お菊の聲もした、
『きついぼんちや、なア。』
『わたいかて、男や』と、定さんは訴へかけても口には出なかつた。涙はほろ〳〵と枕の上にこぼれた。そして、それを隱す力もなく、――今しがたまでのあまい夢の、赤い色や親しいにほひの名殘りを思ひ浮べて見た。

『ぼんち』と、松さんが呼びかけて、『しツかりしてなはれや、大阪へ電信も引いたんやし、ええ醫者もおこすやうに云ふたさかい、なア。』

から力づけられた時には、もう土地の無方針な醫者もゐなかつた。多くの女中もゐなかつた。そしてそこにゐるかみさんや友人等の顏も見えないほど、定さんは『死にとむない』ばかりの痛みと後悔とにもだえて、おのれの愚かであつたことを責めた。

『馬鹿だ、なア』と電車の隅から、あの時聽えた東京辯が憎いほど思ひ出された。誰れに向つても助けを呼ぶことさへ、もう、手後れになつたと云ふやうな心細さに押し詰まつた。

そして、はたからなだめ賺すものがあるのをかまはないで、ただ、頻りに、

『早う、姉さん――おかアはん――お父さん』とばかり待ち受けてゐた。

――（四十五年七月）――

野田新兵

一

佐倉の師團へ編入せられた新兵のうちで、渠は東京芝區の米屋の息子なる得ちやんである。一般から云ふと、ここへ徵集せられて來たものの年輩としては、少しませ過ぎてゐるとして、面と向つて新兵仲間からよく

『君は却つて馬鹿か、うす野呂に見えるぞ』と云はれた。

『…………』渠は然し自分ではにた／＼笑つてるだけで、別に怒りもしなかつた。

女郎買ひの話も實地的に詳しく話して、聽いてるものをして或る程そんなものかと感心せしめたこともある。愛宕下の下等な酒場へ行つて、女を或場所へ引ッ張り出す樣子も話して聽かせた。そしてこッそりした室で女に接するきはどい眞似をも眞顏でやつて見せて、

『わッはッは』と皆を吹き出させるのが得意であつた。

或時など、そこにゐ合はせた同輩のいたづらが拔劍を士官のするやうに構へて、

『今一度やつて見い』と命令した。すると、渠は同じことを再びして見せた。
『畜生！』拔劍者は突然劍をもツとふりあげて、『まッぷたつに重ねて、切り殺ッぞ！』
『えッ』と、本統にびッくりして得ちやんは四ッ這ひになつてる自分のからだをはね起した。
『わッはッは』と、他のものらが笑つたので、然し、自分も亦冗談であるのが分つた。
休暇の日は、誰れでも先づ渠をつれて出ようとした。と云ふのは、渠が自分で知つてるところによれば、自分がゐれば酒を飲みに行つても渠らに餘ほど都合がいいのだ。自分は殆ど全く酒を飲まないので、同じ割前を出しながらも、他の一方が澤山飲めるし、自分の機嫌のいい時にはまた自分にすべての勘定を押し付けることもできた。自分は兎に角、日に四錢や五錢貰ふ給金を、他の人々のやうに眼中には置いてゐなかつた。そして
『野田新兵』とか、『おい、野田』とか呼ばれてゐるのが、米屋の子として近處隣りの娘ッ子どもから『得ちやん、得ちやん』などと云はれるよりも、多少の威嚴ある出世をしたものと思つてゐた。そして自分の屬する小隊長とか、分隊長とか云ふと、自分よりも餘ほどえらいものと見てゐるので、よく從順にさう云ふ少尉や軍曹の命令を聽いた。
入營早々から禁錮とか、重營倉とかを喰らつた仲間があるのを見て、
『この寒いのに馬鹿だ、なア、苟も帝國軍隊のおきてなどに反いたりして』と、自分はそれを人間に

あるまじきことのやうにした。その癖自分もすべての行動がぶよ〳〵したからだの爲めにはき〳〵行かないので、練兵の時やその他の時にいろんな落後や失敗ばかりして、叱られ通しであるのだ。

或朝の『右向け』『左向け』に、渠は動いてゐる隊列を突然かけ離れ、筑波おろしの吹きさらす練兵場の凍てついた土の上に尻持ちをつき、脊を丸めて、握り合はせた兩手の中へ口から白い息を吹き込んだ。

『どうした』と、小隊長はあわてて飛んで來た。

『手が凍つて仕方がないのであります』と、渠は平氣で答へた。

『この頓馬、しツかりせい』と、若い士官に横ツつらを一つ投ぐり付けられた。

さう云ふ時にも、忽ちにこ〳〵し出して、他の者のやうにあとまで憤慨もしなければ、悲觀もしない。

『どうだい、大將、けふの叱られ賃に一杯おごれ』などと仲間に云はれると、喜んでそれを承知した。分隊長の如きは、これを最もいい喰ひ物にしてゐた。練兵や行軍には、自分のお人好しなのを見込んでひどく叱りつけながら、かげでは、他のものがひそかに羨むほど大切にいたはつて呉れた。そして、軍曹が、

『おい、野田、また行こかい』と誘ふと、直ぐ、

『行こ〳〵』と答へて、軍隊を當て込みのあやしい料理屋へのぼつたり、印旛沼や成田不動を見に行

つたり、君、僕で失敬しながら、二三杯は酒も飲むことをおぼえるやうになつた。
そんな場合、至つて無器用な質で、歌を一つ歌ふこともできず、ただ大喰ひすることより外に能がない。
二人前分の牛鍋を最初から獨りでぺろりと喰ひ盡してしまつて、なほそのお代りのにも箸を出しかけた時、
『まア、お待ちなさいよ、こちらさんがあがる物がなくなるぢやアありませんか』と、軍曹の酌婦に云はれた。
『まア、いい、さ』と、軍曹は酌婦の言葉を押さへて、矢ッ張り、ちびり〳〵と酒の方をやつてゐた。
が、自分のやつたことは、何でもすべてその日から直ぐ仲間ぢうに云ひ廣められるので、ます〳〵一種の評判男になるばかりであつた。
『うどの大木』と云ふあり振れた仇名が付いたほどに、からだの肥えた而も脊の高い體格を持つてゐた。が、皮膚の色は自分が自分で見ても絹越し豆腐のやうに白かつか。
渠には、實際、入營した年に既に二歳になる女の子があつた。
その子をつれて、かみさんは、初めのうちは一週間に一回、必らず東京から面會にやつて來た。
その來ると云ふ日になると、面會が濟むまでは、渠は何となくそは〳〵してゐて、仲間がどこかへ

行かうと誘つても、いやだと答へて承知しないし、またほんの冗談を云ひかけても、不機嫌な樣子ばかりした。そして、

『何だ、また來やがるんだ、な』と云はれると、

『うん』と、ただ笑つてゐた。

『畜生、おめへばかりだぞ、いつもうめいことをしてやがるのア』と、仲間のものは少し燒けたやうに冷かした。

　面會室の外には、物好きな仲間が集つて來て、ひゆう〳〵吹く風をも厭はないで、がらす窓の枠によぢ登つたり、入り口の戸びらをちよツと明けたりして見るのであつた。渠はそれをも却つて得意にして、室內では赤いメリンスの衣物を着た子が、よち〳〵とあぶなツかしげにテーブルのまはりを步いてゐるのを、その母と共に椅子に腰かけて向ひ合ひながらながめ入つた。自分は自分の仲間に對してはこの可愛い妻や子を見よと云ふつもりであり、妻に向つてはまたあれらが皆自分の仲間だと云はぬばかりの自慢であつた。

『隊では皆藝者の寫眞や繪ハガキをいぢくツて喜んでるよ』と、自分はかの女に告げると、

『さうでしようか、ね、男ツて云ふのは皆――?』

　さう答へた妻が女の子を端手な絆纏でおんぶして、自分に送られながら出て來たのを見て、待ちか

『よう、奥さん、今日は！』
『お寒いのに、御苦勞だ、ね。』
『もう、御用は濟んだか、な？』
『今晩だけでもとまつて行きねい。』
『こないだは、おみやげをありがたう。』
などと、この一齊射撃の的になつたかの女は返事もできず、見向きもせず、ただ顔を眞ッ赤にして逃げるやうに行つてしまつた。
『…………』その背中の子が勝手の違ふ爲めに驚いて泣いてゐる聲が遠ざかつて行くのを聽きながら、自分はただにこ〳〵した顔を仲間に見せてゐた。
『どうでい、野田』と、一人が飛びあがるやうにして、こちらの肩を叩いた。
『おめへのかかアは不別嬪だ、なア』と、また一人が前から責め寄せた。
『…………』自分はかの女の色が黒く、平べッたい顔ににきびの澤山できてるのをさう云はれたのだと思つた。
『然し、野田には過ぎるよ。』

『門まで送つてやれ』と冷かしたものもある。

『こツそりおら達の部屋にとめてやればよかつた――』

『さうしたら、おら達もまた別に結構な而もあツたけいみやげにあり付いたかも知んねい』と笑ふのもあつた。

『……』何を云はれても、自分はにや／＼と受けながら、吹き去る風の中に得々と突ツ立つて、鼻のさきの赤くなつてるかと思はれるのを辛抱してゐた。

『おごれ、おごれ』とか、『こんなとこを見せつけられて、默つちやアゐられねい』とか、さまざまの誘惑をして、兵營内の酒保や外の料理屋へ引ツ張つて行かれるので、自分の妻がわざわざ皆に心して持つて來た土產も無駄になつてしまふし、また、自分の折角新らしい印象となつた妻や子の面影も、酒や酌婦の爲めに直ぐ薄らいでしまふ。

けれども、自分はお袋がその可愛い息子に度々女房や子供の顏を見せて置かないと、しまひには、どんなことをし出かすかも知れたものぢやアないと云つてるのにあまへ込んで、自分もさうして貰ふのをいつも待つてゐた。が、妻の方が皆に冷かされるのをつらいと云つて、兵營に來るのをいやがるやうになつた。そして初め頃の一週間が十日目になり、十日目がまた半月目になつた。と同時に、直

『いくら人の機嫌を取つて置かないと行けないからツて、さう〳〵無駄にお金は使はないやうにしてお呉んなさいよ』と云つた。『わたしがこッちへ來るにも相當の費用が入るのですから、ね。』

『それもさうだな、なア』と、自分も答へた、『これからそんな金でお初のおもちやでも買つてやらう。』

それからと云ふもの、渠は、自分の新らしい生活の初めを記念する爲めに買つた新らしいがま口の中を俄かに惜しむ氣が出たのである。

二

消燈喇叭が寒さうに鳴り出す前後には、同室者中て野田新兵がいつも一番さきに默つて寢臺の床にもぐり込んでゐた――せツせと手紙を書いてゐるものもあれば、私かに小隊長や軍曹の惡口を云ひ合つてるものもあるのに。そして、渠は晝間から寒い夜にかけての單調な仕事の疲れを目をつぶつて落ち付けながら、

『いつになつたら、あツたかくなつて呉れるのだらう――さうして妻の顏もあツたかさうに見えて來るのだらう』とばかり考へてゐた。すると、

『おい、野田』と、隅の方から聲がした。

『…………』

『早い、なア、もう眠つてしまやアがつたんかい？』

『うんにや』と、自分はその方へ寢返りして目を明けたが、氷のやうな空が幕のあがつたままになつてゐる窓を通して見えるばかりで、室はただ暗かつたので、再び目をつぶつた。

『この頃おめへの嬶アは一向やつて來ねいぢやねいか？』

『うん。』

『いい男でも他にできたんけい？』

『うん。』

『おめへのやうな野呂間は、いつ嬶アを人に盗まれるか知れやアしねいぜ。』

『うん。』

『なアんだ、何を云はれても、糞でもひり出してるやうにうん／＼云つてやがつて？』

『ひ、ひ、ひ、ひイ』と、自分はをかしかつたので突然に笑つた。

『あいつア、近頃、何だか、あやしいぜ。』第二の聲が反對の隅から起つた。『嬶アは、呼ばないせいか、

『こッそり色をんなでも拵らへてやがるんかも知んねい。』
『ちツぽけな米屋ぢやア』と、第三の聲だ、『さう金まはりもよくなからうから、なア。』
『本人は、それでも』と、第四の聲、『大きな米屋だと自慢してゐる。』
『そりやア、法螺、さ。』
『法螺でもいいから、もツとおごらせ、おごらせ。』
『あの鼻アを一度盜んでやりたいもんだ、なア。』
『あんなすべた女郎など、馬鹿な！』
『可哀さうに――あれでも可愛いから、子ができたんだ。』
『淫賣にだッて、子ができる時アできる。』
『矢ツ張り、可愛いからよ。』
『なアに、うどの大木にやア、あの作子に限るんだ。』
『さアちやん、さアちやん』と、不意に窓のそばから抱き付くやうな奇聲を放つたものがある。
『………』自分はかうやかましい聲々の眞ン中に包圍せられてゐながら、何も口を出さなかつたが、
この奇聲を聽いてこッそり吹き出した。自分の女房に限ると云つたり、自分の女房の名を呼んだりし

てゐるからだ。そして渠等の誰れにも知れないやうにして、きのふの日曜もお作に會つた思ひ出を、胸であツため直して、じイわりと味はつた。

宿屋でのひそやかな會見がまた毎週一回は必らずつゞけられることになつて、それが三四度も重なつた頃には、妻の顏に小さな吹き出物のぶつ〳〵したのも消えてしまつたし、皮膚の色にもまたどことなく艶を帶びて來た。不思議だと思つて、どうしたわけだらうと聽いて見ると、かの女が第二の兒を孕んだ爲めのからだの變化らしかつた。で、自分は戰爭もしないのに、もう、分取り品でも得たかのやうに喜んだ。そしてその日に限つてかの女を一しほ大事にした。

日曜であつたとは云ひながら、午前からの語り飽き、寢飽きに、渠は顏でも洗つて氣を改め、少し早い晚餐を共にしてから別れようと思ひ、そこ背戶の柳のもとを流れる幅一尺ばかりの小川へと出た。柳には靑い芽が萠え出してゐた頃で、人道を仕切る低い生垣にもやがていき〳〵した靑葉を繁らせるしるしを見せてゐた。

その垣根を越えて遠くまで、堀田氏の城あとを除いては、何の目ざはりもない田圃を見渡されるのが、東京の市中育ちの自分には、今更らのやうに珍らしい氣持ちを與へた。

『顏あらはツしやるか』と云つて、宿の主人のよぼ〳〵したのが、かな盥を持つて來たのをおほやうに受け取りながら、

『もう、春だ、な』と氣取つて云つた。そして雪のやうに白い兩腕にかぶさつた黑地の黃の大名縞の綿入銘仙の袖を兩手でかたみにまくしあげ、白縮の兵兒の結びさがつた尻のでッぷりしたのを後ろへ突き出し、盥を以つて流れの水をすくひ上げようとした。

　すると、突然、

『おい！　野田君』と聲をかけたものがある。

『おう！』と渠は聲でそれと知つて、からだを延ばした。同期兵の一人だけかと思つたら、二人ゐた。軍服で、垣そとの人道を橫切るこの小川に渡した石橋の上に立つてゐる。そしてこちらの顏を見るが早いか、輕蔑の目を向けて、

『何でい、寢てイたんけい？』

『うん――』

『お前の根據地アいつもここけい？』

『うん――うんにや。』

『嘘云へ――でれ〳〵したざまで――皆に云つてやるぞ。』

『それだきやア御免だ』と云つて、渠は兩手を顏の前で合はせた。

『ぢやア、一度おごるか？』

『うん、今度おごる。』

『よし／＼、おぼへてやがれよ』と云ひ殘して、その兵士どもは右の方へ過ぎ去つてしまつた。

渠はまたそれを自分の左りの方へ忘れてしまつたかのやうに獨りでほほゑみながら、顏を洗つてのツそりとまた二階へあがつた。

三

『おい、野田、ちよツと來い』と、一人の兵士が引ツ張つた。

『……』渠は上衣を脫いで、洗濯場で人の下ばきを洗つてゐたのだが、洗濯板の刻み目へ石鹼の泡だらけなのを押し付けてゐた手をぐツと力づくに引ツ張られたので、いや應なしに引かれて行きながら、『どうするんだ、どうするんだ？』

『おめへを審問するんだ』と、今一人ついて來たのが云つた。

『何も、審問されるやうなことアしやアしない』と、渠は踏みとどまつた。そして大きなからだの重みを後ろへ戾して、ただささへ無恰好な靴の、破れて靴下のはみ出てゐる爪さきを兩方とも突き出して。ふん張つた。足が大きいので人よりも早く靴が破れるのだ。

『馬鹿ぢからだ、なア』と、左りの手を引ツ張つてゐるのが、ちよツと息を繼いだ。

『來いと云つたら、來い』と、一方のも引張るのに加勢して渠の右の手を引き、くるりと渠を後ろ向きにしたので、渠は自分の尻の方から革帶によつて引かれて行つた。

廣庭の護謨の木のもとには、四五名の仲間が待つてゐた。

『こら、野田』と、最も待ち構へてゐたのが少しさきへ出た。『貴樣は馬鹿だと思つたら、なかなか喰へねい奴だぞ。偵察隊の報告があつた、白狀せい!』

『な、なにを、は、白狀するんだ』と、苦笑しながら、士官に叱られてゐる時のやうに、兩手を垂れて直立の姿勢を取つた。

『とぼけるねい! 太田屋旅館のでれ助はおめへであつたぢやアねいか?』

『そ、そりや實際僕だ』と、あたまを搔きながら、『でも、何も、でれたんぢやアない。』

『うそぬかせ』と、第二の兵士がまたおどしつけて、『和服に縮緬の兵兒帶、晝間から寢ぼけツ面のさまはなかつたと云ふぜ。』

『へ、へ、へ、へ!』

『何がをかしい?』

『君の文句の云ひまはしが、さ。』

『馬鹿にするねい』と、こちらの横ツ面を一ツ喰はせた。

『いたい！』渠は直ぐ手を、頰ツぺたへ持つて行き、自分の眼ではじツとその打ち手の顏を見詰めて、そんなことは僞なと云ふ風に口をとんがらかせた。
『一體、どんな女がゐるんだんべい』と、第三の兵士も口を出した。
『女なんかゐやアしない。』渠は自分の思つた通りに答へた。
『ゐないのに、なぜ行くんだ？』
『そりやゐると云やゐる、さ。』
『それ見い！』
『でも、主人のかみさんで』と、渠は心からの眞顏で、『五十四の婆さんだ。』
『わツはツは』と、あとのものが笑つた。
『そんなことを聽くんぢやアねいや。』
『ぢやア、何をよ？』
『こいつ、わざと惚けてゐやアがる』と、第一のも亦毆ぐらうとして、身がまへをした。
『もう、御免だ、御免だ』と、渠はからだをすくめて、二三歩跡ずさりした。
『だら、白狀しろ！　誰れに會ひに行くんだ？』
『そ、そりやア』と、またあたまへ手をやつて訥りながら、『お、おちさんが面會に來たから。』

『うそだんべい。』
『兄さんも來た。』
『貴樣ア兄はないと云つたぞ。』
『お、お父さんも、や、やつて來た。』
『それも、うそだらう?』
『お、お母さんも――』
『そんなに度々あすこへ行つたんかい?』
『うん――うんにや。』
『皆、うそツ鉢だ――さうだ、嘘だ――いツそやツつけろ、やツつけろ』などとまぜ返したものもある。
渠はその聲のする方から、一あしづつ、あツちへ寄つたり、こツちへすさつたりして、結局、仲間の前をまた二三歩跡ずさりした。
『さア、すツかり云つてしまはなけりやア承知しねいぞ――一體、別嬪か、不別嬪か?』
『別嬪でも、不別嬪でもない。』
『そこの酌婦か、娘か?』
『實は、矢ツ張り』と、また手をやつてあたまを搔き、目じりを下げて笑ひながら、許して呉れと云

はぬばかりに、『僕の嬶アが面會に來るんだ。』
『この野郎！』ばかりと、堅い拳骨が一つ、渠の横面へ這入つた。
『痛い！』今度は靴のかかとでくるりと後ろへ回轉すると同時に、頰かぶりをしたやうに兩手で顏を蔽つたが、そのまま、また向き直つて、口をとがらせながら半ば獨り言のやうに、『何も、ひどいことアしなくたツていいぢやアないか？』
『それで許してやる』と、拳骨の主は手がらさうに一段と嚴格な聲を出した。そして笑ひ出しながら、
『けれど、な、今度の日曜にやア、その太田屋でおれ等に御馳走でもしろ。』
『さうだ〳〵――皆にだぜ――おれにもだぜ、おぼえとれよ』などと冷かし半分にがや〳〵し初めた。
『うん』『うん』と、渠は不承々々に返事をして、再び洗濯場の方へ自分の足を向けた。が、氣が付くと、兩手は拭き取らなかつた石鹼の泡できし〳〵してゐるし、その手でまた度々あたまを掻いたり、顏を蔽つたりしたので、五分刈りの頭髮や頰ツぺたまでが石鹼臭くなつてゐた。
『今度の日曜日』が來た、太田屋旅館の天井も古びた二階には、野田の妻子と兵士仲間とが落ち合つた。渠はそれを得意がつて、自分の妻と仲間とを引き合はせた。
『僕は佐藤で、野田君と同期兵です。』
『僕は同室で寢起きするものです。』

『僕も――』
『僕も――』
かの女はたださへ不意を喰らつたところだから、まご／＼して挨拶をした。そしてその所天の命ずるままに、牛鍋の馳走を出したが、あとからまたぞろ／＼と、引ツ切りなしにあがつて來るものがあるのには困つてしまつた。が、黑繻子の襟をかけたお召に、一樂の前垂れを締めたかの女は兵士等に酌をした。
『よく釣り合つた御夫婦ですぜ』と、もう醉ひが出て來たのが一人、かの女に聲をたけた。野田はそれを聽くとにこ／＼して、あるじらしく猪口をその人にさした。
『野田にやア野田に似合つた嬶アが來るもんだ、なア。』また一人が酒を催促するやうに云つた。
『さう馬鹿にしたもんぢやなかんべい。』また一人が口を出して、『野田は子を拵へるのが上手だんべい。』
『今度のア、晝間の子だらう。』
『さうだ、晝間の而も二階で出來た子だんべいか？』
『まア、こッちへ來給へ。』一人がかの女の手を引ッ張つた。
『おらの方へも來給へ。』また別なのが他の一方の手を引いた。

『よして下さい、よして下さい』と云つて、かの女は後ろへ倒れかかつたのを、右の肱で疊にささへながら、眉を落した顏を訴へるやうに所天の方へ向けた。
『………』野田は自分でも困つたが、どうすることもできず、ただにやりにやりと見てゐた。
『なア、作ちやん』と云つて、また一人が前から倒れ込み、かの女のあぶなツかしく折つて横に出した膝の上に枕をした。
子供は父のそばからじツと見てゐたが、何事が起るかと思つた爲めだらう、わツと泣き出した。
『泣いたぞ、泣いたぞ。』
『許してやれ、許してやれ。』
かの女は握られた兩手を一生懸命にふり切つて子供と所天とのそばに來たり、髮のほつれを氣にしながら、眞ツ赤に怒つて、
『ひどいことをしちやア、困ります。』
『………』野田は自分でもさう云ひたかつたのである。
『本統にひどい』と、誰れか一人が不眞面目に云ふと、その他のものも捨てぜりふになつた、――
『うん、ひどい〳〵。』
『素的にひどい。』

『あやまれ、あやまれ。』
『なアに、どうせ、野田の婢アだんべい。』
かの女はゐたたまらなくなつて、子供を抱いて下におりた。そして所天をも呼びおろして、あんな亂暴な奴らと交際するものではないとたしなめた。
『だッて』と、野田は口をとがらせ、『あアさせて置かなけりやア、仕かたがない。』
『ぢやア、わたしは歸ります！』ぷりぷりして、かの女はその支度を初めた。
『………』渠は今から直ぐかの女に歸られては詰らないので、下の人々が見てゐるにも構はず、かの女の手を堅く握つて引きとめ、『もう少し待つてくれ、皆に歸つて貰ふから。』
『ぐづぐづしてゐちやア、わたしがどんな目に合ふかも知れやアしない。』斯う云つて、こちらの顏を恨めしさうに睨んだ。それがこちらに血の湧く物さわぎをおぼえさせた。が、やがて、かの女は氣を變へて、口をこちらの耳へ持つて來て、『ぢやア、ね、停車場の直ぐそばに、藤屋といふ宿屋が御座んすでしよう――わたし、よく見て置きました、わ。あすこに行つてますから、ね、早くあなたもいらッしやいましな。』
『うん、それがいい』と、思はず大きな聲であつた。自分の別れにくいだけ、かの女にもその氣があるのだと思へた。そして二階で歌ふ淫猥極まる歌に自分もそそられながら、自分はかの女が今、子供

を脊負つて、土間へ下り、軒に屋號の看板がかかつた、廣い間口の敷居をまたいで行くその時の白い脛をこちら向いて見せて呉れればいいと思つた。

四

渠は學問と云ふ學問が嫌ひで、別につとめて習ふことをしなかつた。字も碌に書けない。で、無筆どもの寄り合ひから手紙を書かせられる心配はなかつた。その代り、よごれ物の洗濯と云つたら、何でもかでも皆が渠の手へ持つて來た。

『さうできるもんか』と斷わつても、

『急いでやれ、急いで』と押し付けられた。

然しその相棒に、末島と云ふ同室者もあつた。素直で、氣質のすツきりした男だと、皆にも見られてゐた。これは多少の學問もあるので仲間中の秘書役を勤めさせられてゐたから、滅多に洗濯場の方へはまわつて來ない。が、末島が來たとなると、こちらはほく〳〵喜んで仕事を一緒にした。

酒も飮まず、冗談も云はず、人の財布を當てに遊びに行く手合でもないから、さう慣れ〳〵しくしてゐるのではないが、こちらから云へば、末島の家は自分の店の得意さきであつて、自分も米麥を自轉車で數年來よく運んで行つた。

渠が末島に敬服してゐるのは、無口でおとなしい爲めばかりではない。宮内省に勤めてゐたと云ふのがそのおもな原因だ。末島は同省の雇ひで、兵隊に徵集せられる少し前に給仕から昇進させて貰つたのだ。が、宮中に外國の御來賓があつたり、御慶事があつたり、その他の御儀式があつたりすると、その準備や現場は斯う〳〵斯う云ふありさまで、そのあとでは給仕の末島にまで下され物がある。などと云ふことを、渠は本人に代つて、曾て本人が渠に聽かせたと同じやうに重々しい口調で、仲間どもに話して聽かせたこともある。そして、

『そんなものか、なア。』

『末島はまたその雇ひになるんだんべい。』

『おらも行きてい、なア。』などと、皆が自分の言葉に感心してゐると。自分もわがことのやうに嬉しかつた。

自分はその末島と一緒にごし〳〵物を洗ひながら、他の洗濯者を羨やませるつもりで、いろんな話をした。

『君んとこは僕のうちのいい得意だぜ、米は餘り上等のを喰はないやうだが――』

『………』末島はそんなことは云ふなと云ふやうにこちらを見たが、自分は頓着しなかつた。

『人數が多いので澤山這入るし、また拂ひも綺麗だ。』

『さう、さ、ね』と、末島もしよげかけた氣を直したやうに、『母が几帳面な質だから。』
『さうだ、君のおッ母さんはいい人だ。お父さんもなか〳〵よくできた人だよ。』
『無論、惡い人ぢやアない。が、もう、老いぼれて來たよ。』
『たしか、通運會社の集金人だつた、なア。』
『さうだ。』
『集金人と云ふ奴ア、どうも信用がないとやれないものだから――』
『長い間、間違ひなくやつて來たばかり、さ。』
『それが六ケしいのだ。』斯う利いた風に云つて見た。
『おい、末島』と、別な仲間が洗濯の手をやすめた。『君に妹があるけい？』
『あゝ。』
『また、女のことかい』と、野田は笑つた。
『女のことでもよかんべい、おれに呉れんけい？』
『さうは行かん』と、渠が引き受けて、『電話の交換手をして、家の暮しを助けてるんだ――そのまた弟も銀行の給仕だ。』
『また入らないことを』と、末島はとめた。

『交換手だツて、一件はあるだんべい。』

『そりや、違ひない。』野田は釣り込まれてにたりとした。

『それさへ具れたら、こツちやアいいんだ。』

『野田のやうに』と、また別なのがごし〳〵やりながら、『嬶ア持ちと違ふから、なア。』

『ふ、ふ、ふ』と、野田は出て來た笑ひをとめようとしたが、半ばできなかつた。

渠は末島には多少遠慮を知つてゐた。が、自分の妻があの日曜のことに懲りてしまつて、うか〳〵出て來なくなつたし、又、身持ちになつたのだから、暫らく近よるなと母が云つたと云ふ手紙をよこした。その手紙を見せて、それに對する返事を書いて具れいと、末島に頼んだ。

無論、皆も大抵同室に引けてゐた時だ。

『おれにも見せろ〳〵』と飛んで來たものが二三名あつたが、末島が責任を負つて見せなかつた。

『どう云ふことを云つてやりたいのです?』

『そりやア、先づ氣候の挨拶を云つて――』

『生意氣なことを云やアがるねい』と、一人があたまから罵倒した。

『女房に氣候の挨拶など入るもんか』と、また別なのが。

『直ぐ用件を云へ、用件を。』

『足が立つとか、手が立つとか、さ。』
『あは、は、は！』
『諸君は少し默つてゐたまへよ』と末島は皆を制してから、『それを書いてあげるとして、用件を聽いて置かなけりやア――』
『用件は――先づ――親や子供が達者で結構だと云ふことに――』
『それから――』
『それからツと、』渠はにや〳〵してあたまを搔きながら、『お作、お前のからだは、大事な時だから、大切にせい――』
『馬鹿野郎！　置きやアがれ！』
『のろけてゐやアがる、なア。』
『畜生！　書いたるな、書いたるな！』
『ちやア』と、まご〳〵して野田は皆を見まはしながら、『どう書いたらいいんだ？』
『今どいつかが云うた手とか、足とかを書いとけや。』
『わツはツはツ』と、皆の笑ひになつた。
『成るほど、なア、それも簡單でいいかも知れん』と、渠は眞面目にさう聲にまで出した。そして自

分が若しこツそり書いて、こツそり自分の若い妻に見せるのなら、かの女を喜ばせさへすればいいのだからと思つた。そして、自分が小學校へ行つた時にいろんな落書きを教科書などにして、先生にひどく叱られた事を思ひ出した。

『成るほどとア、とぼけてるやアがる！』

『簡單でもねいぢやア、ねいか？』

『あは、は、は！　あは、は、は』と、結局は皆がこちらを馬鹿扱ひにしてしまつた。が、正直な末島はこちらの云つた通りに手紙を書いて、その文句を今一度讀んで聽かせて呉れた。そして他のもの等が詰らないからよせと反對するのにも頓着せず、上書きまで認めて封をして呉れた。

　その文句だけでは、何だか、自分の身に物足りないやうな氣がしつつ、こちらは切手を張つた手紙を兵營前の郵便箱にほうり込んだ。そしてその後、末島と二人ツ切りで宗五郎神社へ參詣した時、かう云ふことを人には云ふなと前置きして白狀した。

『仲間のものは皆馬鹿にするけれど、君でも一度持つて見給へ、自分の妻や子供と云ふものは可愛いものだ。』そして、實は自分の妻は自分の近處の下女であつたのを引ツかけて、孕ませたので止むを得ずうちへ入れることになつたのだが――と。

五

同室のものが初めて擔架卒の實習をする時であつた。

『あの圖う體の大きい野田を負傷者にして見ようぢやアないか』と云ふ皆の意見であつた。

『………』滑稽なことにかけてはこちらから進んで屢々して見せながらも、自分におぼえのない眞似をするやうな用意は自分の智慧にできてゐなかつたので、擔架を自分のそばに置かれても、それに乘つて見せる氣になれなかつた。

『僕ア負傷してゐやせん、負傷してゐやせん』と駄々を揑ねながら、自分を取ツつかまへようとする人々の手から逃げまはつた。

けれども、仲間どもは決して承知しなかつた。逃げまはる自分の手を取り、足を捕へて、面白半分、むやみ矢鱈に繃帶をかけた。

『これで、もう、十分榴霰彈でも浴びて、全身にその彈痕を受けた、實に立派な名譽の負傷兵のやうだ』と、一人が云つた。

『それでいい、それでいい』と云つて、また他のものがさうした自分をみんなと共になつて無造作に抱きあげ、ズツクを張つた擔架の上へ横長にほうり投げた。

その勢ひと重みとで、擔架の竹枠の一方がばりりとはじけた。が、皆そんなことに頓着しなかつた。
『ひどいぢやアないか』と、自分で起きあがらうとして、はじけた枠の方へ身を傾けたのを、
『まア、さうしてゐさへすりやアいいんだから』と、そのまゝ、前後を二人で擔いで、うんうんと運び出した。
『待つて呉れ、痛い！　待つて呉れ、痛い！』
『痛からう、さぞ痛からう。』ただ手ぶらでついて來る兵士の一人がいたはるやうに云つた。
『名譽の負傷だから、な、いづれ金鵄勳章が貰へらア。』
『…………』なんだ、人を！　冗談ぢやアない、『ほんとに尻を挾んで痛いんだ。』
『何でもかまん――後方にある病院へ行つてから直してやる、さ。』
『馬鹿を云ふなよ――ちよツと待つて呉れ！』ます〳〵眞がほになつてゐた。が、自分を思ひやつて呉れるものはなかつた。
『病人が贅澤を云ふもんぢやアねい。』うんしよい、うんしよいと、廣ツぱを擔ぎまはつて、元のところへ來てから、擔架は下に置かれた。
『おう、痛い』と、飛びあがつて、やツとそこを出たその場でズボンの前のボタンをはづし、ヅボンと下ばきとを引きおろして、獨りで實際の傷口を調べた。

すると、竹のはじけた間へ擔架のゆれる毎にはさまつた尻ツぺたの一部がひどく血ににじんでゐて、その部分の赤いのが皮膚の眞ツ白いのに對照して、紅花か何かのやうになつてゐた。

『あの奇麗な肌を見い。かかアが惚れるのは尤もぢや。」

『ひどいことをする、なア――痛い、痛い』と云ひながら、渠は自分でそこへつばきを付けた。

そのうち、日露戰爭が始まつて、佐倉の師團もいよ〱實戰地へ臨むこととなつた。が、旅順の一要塞を背面から攻擊した時、あはれにも殆ど言葉通りの全滅をしてしまつた。

その全滅前、而も遼東半島へ上陸してから始めての實戰の時、野田新兵は實際の負傷者になつた。敵彈が、木の株やごろ〱した石に氷が凍り付いてる外に何の遮ぎる物もない山腹を越えて來て、味方の頭上を飛ぶその下で、渠の小隊も『伏せ』の姿勢を取つてゐると、

『やられた！』渠は突然かう叫んで、自分の劍銃を投げ出したと同時に、仕かけ人形のやうにぴんと突ツ立つた。

『どこを、どこを』と、隊長の軍曹が飛んで來た。そしてよく調べて呉れたが、滿足なことを云つて呉れなかつた、『ほんの、右の足くびを擊ち拔かれただけだ。大丈夫だ、しツかりせい！』

『いや、死ぬ〱』と、渠は自分から、もう、その氣になつてゐた。全く失望してその場へばツたりと倒れた。そして後方へ擔がれて行つた時は夢中であつた。

の程度はひどくもなかつたが、腱の緊張がうまく整はず、その方の足が左りのと釣り合ふだけの直立力を失つた。

ちんばになつて戰地から歸つて來て、第一着にこちらから見舞ひに行つたのは、末島の留守宅であつた。

細い露地の入り口で車を下りると、自慢さうに脇杖を右の脇の下にかい込み、ここではきツと自分の負傷の手がら話をしんみりと聽いて吳れるだらうと勇みに勇んで、どん詰りの格子戶に向つてぴよんぴよこと步いて行つた。注文の米を持つて來たのではないから、臺所へはまはらなかつた。

ここのお袋を初め、ゐ合はせた末島の弟や妹も皆、戰地からの珍客を歡迎して、これまでには招じられたこともない座敷へあがらせて吳れた。

戰勝を祈る爲め床の間に太神宮の掛け軸をかけ、お造酒をあげてあるその前で、渠は自分の負傷物語りや佐倉師團全滅のうはさ等の見たこと聞いたことを人もするやうに誇張して語つて聽かせた。そしてここの息子が暫く音信がないと云ふのを知つたので、

『末島君も、お氣の毒でありますが、多分名譽の戰死でありましよう』と、士官に對して報告でもしてゐるやうに語つた。自分としては、斯う云ふ言葉づかひが士官以外の人に向つても出るのを――出

征前とは違つて——まじめになつたのだと思へた。で、それから、得意さうにまた言葉を繼ぎ、『僕はさいはひにも足のすぢだけの負傷でありまして、わが師團としては戰爭のとツ端に歸して貰ひましたので、さいはひにも無事でしたのであります。』

六

末島一雄の死骸は、翌年の一月末に、他の多くの生死不明者と共に二龍山の堅い雪の中から發見せられた。そしてその死骸は戰線中の最も危險な場處に突進して倒れてゐたと云ふので、渠を生前に可愛がつてゐた宮内省の官吏どもの奔走で金鵄勳章の一時金四百圓ばかりを貰ふことになつた。

その祝ひと云ふのか、記念にと云ふのか、兎に角、末島と共に出征して野田の負傷前後までに生き殘つた東京生れの仲間が四名、末島の家に集つた。渠も無論その席に加はつた。

すると、そのうちの一人が勝手の間から長い箒木を借りて來た。

『何をするんだ』と、別な一人が尋ねた。

『まア、見てゐ給へ——ぽと、ぽと、ぽと、ぽと——ぱら〳〵、ぱら〳〵』と、兩手で何かの飛んで來る形をしてゐる。

『何だ、機關砲彈のお化けかい？』

『伏せッ』と云つて、一方は命令通りの姿勢でばッたり倒れ、足を長く延ばし、箒木を銃に見せて顔のところでねらひを付けた。

『馬鹿な眞似アよせ』と、また別なのが叫んだ。

『實戰の再演をして見せて、末島の靈でも慰める氣だらう――は、は、は！』

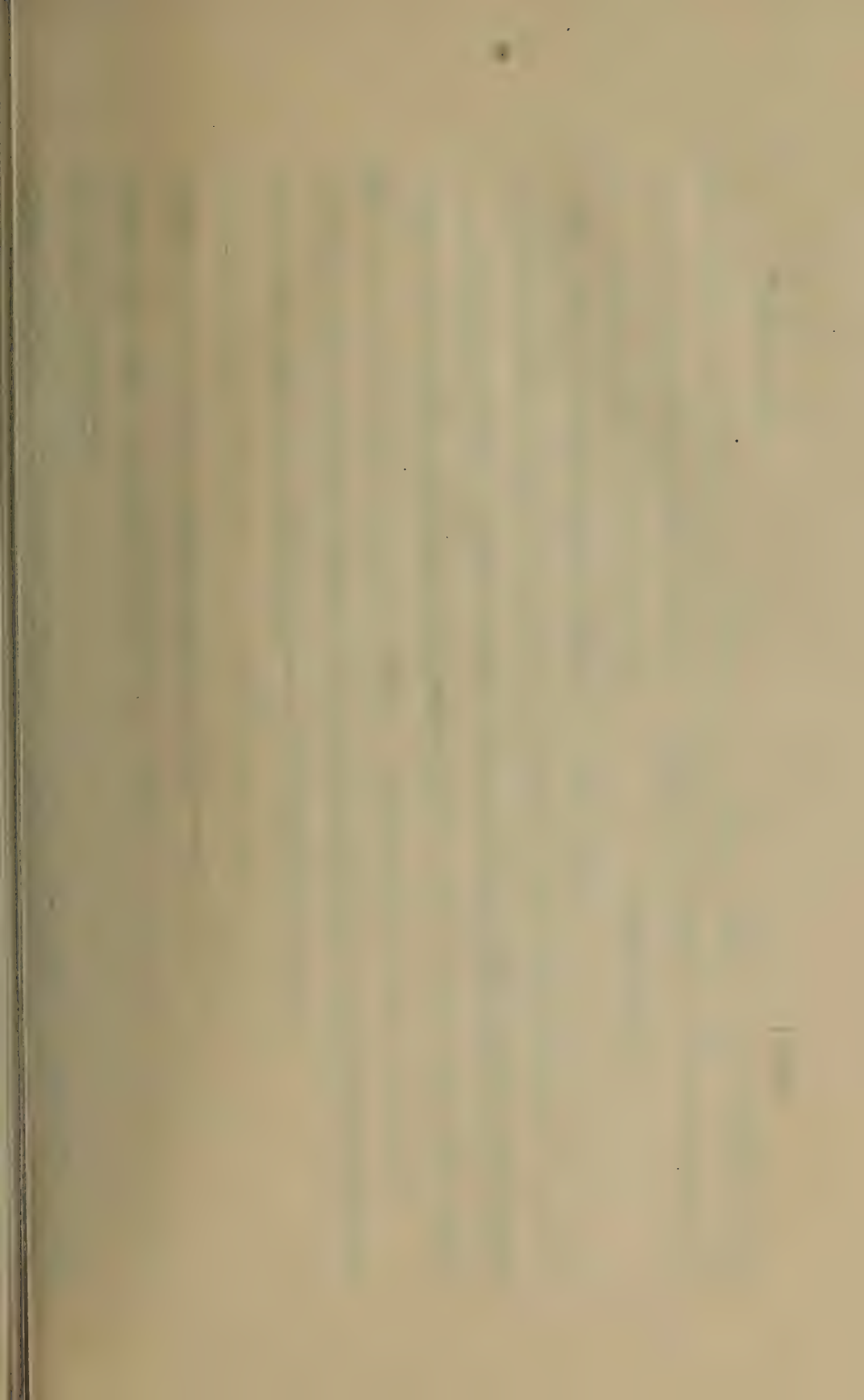
『二百五十メートル――撃て！』

『さうだ、わが小隊の最初の發砲は二百五十メートルであつた。』

『やられた！』から突然叫んで、箒木を投げ出して突ッ立つたのが、右の足をあげてその足頸を兩手で握つた。

『わッはッはッ』と笑つて、他の仲間は後ろへ兩手を突いた。

『………』野田はそれを見て、自分のことを芝居にしてゐるのだと分つたが、別に怒りもせず、ただ少し顏を赤らめて苦笑してゐた。そして自分の心では斯う考へてぞッとおぞげをふるつた、『あの時は、實際、もう、二度と再びお作や子供に會はれないと思つた』と。

――(四十五年八月)――

正美先生

『先生、何かいいことでも御座いまして』と、ステキ屋のかみさんが凍り附いたやうな井戸端で寒さうにおしめの洗濯をしながら、『大相にこ〱してらツしやるぢやありませんか？』

先生と呼ばれた男は今外から歸つて來て、四軒長屋共通の庭を仕切つた枳殼垣の四つ木戸のうち、一番とツ付きのをちよか〱と這入り、いつもむツつりした調子とは違ふ、景氣のいい、然しただ一言の挨拶をして、二軒目の自宅へ近づいた時、そのかみさんに呼び止められたのである。

くるりと振り向いて、にこ〱してゐる渠の骨張つた顏の眞ン中には、水ツ洟が垂れさうだ。こまかい絣の綿入れに、厚ぼツたさうな木綿の黑紋附きを着てゐても、襟や袖や黑手繻子の行燈袴の裾から、直に當る風が寒いので、少しからだをちぢこめて、胸の前で固く顫へる手には、剝き出しの竹の皮包みを持つてゐた。

『うん――』

『また、好物の馬肉ですか？』かみさんはかう云つて見たさのやうな冗談で――また喰ひに來いと云はせる催促のやうでも――あつたが、渠の返事はそれよりもなほいいことであつた。
『なアに、ね、おかみさん、これはほんの心祝ひに買つて來たんで――實は、僕は、今度、いよ〳〵先生の雅號の一字を貰ふことになつたよ。』
『へい――』かの女は兼てこちらから前ぶれをしてあつたのを知つてる筈だのに、意外さうに洗濯の手を休めて、こちらの顏を見上げた。
『けふから、僕は中村雨聲ぢやアない、中村正美だ。先生が正風だから、僕がその正の字を貰つて、正美と付けて貰つたんだ。』
『そりやア、結構でしたわ、ね。』
『名なんか、どうでもいいんだが、それでも先生のこころざしだから、ね――』
『さうですとも、ねえ！』かみさんはうまく調子を合はせたが、多少でも禮金を出してこちらに商賣上の畫をかいて貰つてることを忘れなかつた。『ぢやア、これからステツキにも正美と銘を打つて貰うんだ、ね。』
『うん、さうしよう。』渠は自分の鼻をうごめかしたが、ちよツと、その鼻のさきを、竹の皮包みを持つてる手の甲でハンケチ代りに拭き拂つた。

二

渠はそれでも三代つづいての畫かきで、渠の父の如きは、若くして先妻を失つたをしほに上州の高崎から東京に出て、所謂青雲の志をわが國の畫界に延べようとした。が、とても雅邦等――その時まだ渠等もさうえらくはなかつたが――と競爭はできないと覺つたので、東京で貰つた後妻を連れて、再びその生れ故郷へ引ッ込み、地方的畫家を以つて滿足してゐた。

『これからの畫かきは畫だけぢやアとても喰へねい。』かう云つて、父は田舍の得意さきから掛け軸や扇子の畫を受け負ひ、ながねんかかつて貯蓄した金で、多少の田地や家宅を買つた。そしてその先妻の子が父を見習つて畫が好きなのにも拘らず、畫かきにするのは不贊成で、百姓に等しい仕事ばかりをさせてゐた。

『そんなに親の命に從ひたくねいんなら、手前ひとりで勝手にしろ！』とう〳〵渠は勘當同樣に廢嫡せられ、腹違ひの妹を相續人にせられて、提燈屋兼から傘屋の養子になつたのは、十五を越えてからのことだ。重寶にも提燈の畫がかけるのは勿論、から傘にも牡丹にから獅子、竹に虎と云ふやうな物をかいて賣り出したので、

『新發明の傘屋』といへば、その家と分るやうになつた。そして渠はいつも、

『おやぢは馬鹿だ、俗物だ』と罵りながら、徴兵時を無事に過ぎてしまつた。

高崎並にその在の人々に渠自身が新發明のから傘屋で通るやうになり、また、さすが先生の子だと云はれるやうになつた時は、繪畫の周旋屋や經師屋とも對等の交際が出來るやうになつた。が、たださへ思ふやうに行かなくなつた家業をおろそかにしてまでも、渠は頻りに、

『このまま葬られたくねいものだ』と云ふ意見を人々に漏らした。人々も亦あの男をあのままにして置くのは惜しい、一つ東京に出して修業をさせたらと云ふやうになつた。

土地の新聞社に渠を紹介したものもあつた時、新聞の記事などには釣り合はない唐美人や、百合の花や、薄の穗などの木版畫が時々出た。

そのうち、父の弟子で或八百屋の主人が主となつて、渠の爲めに義捐金見たやうなものを集め、三年間東京に滯在して畫の修業をするだけの費用を月賦にして出して呉れることになつた。

『諸君の御好意には誓つて報います』と云つて、人々と共に祝盃をあげて別れたのは、まだ一ケ年と少し前のことである。某畫會の主領なる正風先生の手つだひをしたり、自分の畫いた物を見て貰つたりしてゐるうちに、この新米弟子が舊弟子等よりも立ち勝つて先生のお氣に入りになつた。と云ふのは、稽古に熱心なのを認められたばかりではない。先生が遊蕩費に行き詰まると、直ぐ一二幅の棄て書きをして、渠に渡した。すると、渠は自分のつての多い高崎地方へ持つて行つて、一幅に付き百圓か

ら二三百圓を得て來て、それをそツくり先生に與へ、自分は多少の口錢を貰つて滿足した。
最近の手柄と云へば、筆早な先生を連れて同じ地方を漫遊し、僅か二週間ばかりの執筆で先生の東京に於ける負債の殆ど半分までを消却せしめたことだ。それが、門下生中、破天荒の恩典として雅號の一字を貰つた最近の、そして最大の理由である。

三

『お歸りなさつたのですか?』
とツ付きから二軒目、反對からはステキ屋の隣りに當る二枚障子の破れから、これから正美の細君と云はれる筈の妻がのぞいて人並みよりも幅の狹い聲をかけた。
『ああ。』から、渠は輕く答へて、いそ〳〵と、自分の家の半間の格子に紙を張つた戸を明けて這入つた。
這入ると、直ぐ臺所の土間で、突き當りの障子を明けると、六疊敷きの居間だ。外に一つしかない三疊の間には、時子といふ二つになる兒が置き炬燵に煖められて、よく寢てゐた。そこから自分の妻が出て來たが、自分が立つたまま、勝手に近く切つたゐろりの側へ、竹の皮包みをぱたりと置いたのを見て、不平さうに、

『また馬肉ですか？』
『さう、さ。』
『さう毎日贅澤ばかりしてゐて、よう御座んすか？』
『まア、いい、さ。』じらせるつもりで、わざと落ち付き拂つて、袴をさばきながら、爐の向ふがはに坐わり、ちよツとかの女の顏を見あげた。が、その目を轉じて、ステキ屋との間を仕切る壁に立てかけて重ねてある自分の枠附き畫面――それには大きいのや小さいのや、出來あがつたのや出來かかりのやがある――を眺めながら、口をにこつかせて『おう、寒い、寒い』と、爐火にかかつた藥鑵の上で兩手をこすつた。
『この頃はひどいんですもの、晝頃でもかうでしよう』と云ひながら、かの女もその所天の向ふ側に坐わつた。
『冬、而も曇つてりやア寒いもの、さ。』
『そんなこと云つたツて』と、顏を見合はせて、『あなただツて、云ふちやア御座いませんか？』
『云つたツて、ね、云つたツて、ほんの、おもて向きの挨拶だけ、さ。』
『ぢやア、わたしだツて、ほんの、おもて向きの挨拶です、わ。』
『おい』と、わざと皮包みの方を見ないで、かの女の顏に向ひ、『早く喰はせて吳れろ――また出るか

ら。』
『先生のとこへ？』
『あゝ。』
『一體、せいびとはどんな字が附いたのですの？』かの女は、今、井戸端での話を聽いてたらしい。
『先生の正に美人の美だ――いいだらうが、ね？』
『そりやアいいでしよう――。』
『おい、早くしろよ――新らしい落款にうまい字の形を考へて置いて、ステッキ屋のおやぢを感心させてやらア、ね』と、手の平にいろ〳〵書いて見る。
『わたし、何だか』と、中腰になつて、『元の方がいいやうに思はれます、わ。』
『生意氣なことを云へ――おい、早く！』
『正美なんて』と、立ちあがつて、『當り前の人のやうです、わ。』
『ぢやア、先生のもをかしいぢやアねいか、子爵か何かに高崎正風とか云ふのがあらア、ね！』
『さうですか、ねえ』と、きまり惡さうに調子を高めて所天を見返つたが、勝手へ下りて、『おう、寒！　でも、讀み方でも違うんでせう。』
淺い松原の上を天人が飛んでゐる軸も、枠附きで、また出來かかりだ。天人などは細い輪廓だけで、

全くまた彩色を施してない。

その參考にすると云つて、相弟子の一人から貰つて來た三越の廣告美人畫は、爐のそばの茶棚の壁にかけてあるが、正美はこれを見詰めて自分で考へた、いつ見ても色取りが濃過ぎる、しつツこ過ぎると。

それから、また天人の方に向き直り、じツとそれを見守り、獨りで幾度も首をうなづかせながら、

『薄く――綺麗に――あツさりと、薄く――綺麗に――あツさりと。』

『丸でお念佛のやうです、ね』と云はれたので氣が付くと、妻は初めから適當に味噌と大根のいてふ切りと醬油をまぜた瀨戸引き鍋を用意して、疊の上へあがつて來たのである。

その聲がまた高かつたので、隣室の子供が聽きつけてむづかり出した。

『いつも頓狂な聲を出すなと云つてるぢやアねいか？』

『つい出たのですよ。』おも長の薄化粧をした顏に恥かしみを帶びて、かの女は所天のにらんだ目から目を反らし、坐わつて下を向いて、藥罐を取り除け、炭をつぎ足して、鍋を五德の上にかけた。

子供は段々高い聲を出して泣いてゐる。

『今行くよ、今行くよ。』

『どれ、おれが煮てやる。』正美はかの女の持つてる箸を奪ふやうに取つた。

『ぢやア、賴みますよ——さア、さア』と、かの女はかけ出しながら、胸をあけてゐた。
『親に似た子だ・ぎやア〳〵、ぎやア〳〵と。』かう云つて、皮包みを引きよせ、鍋の中へその包みの開いたのを傾けた。
『でも、あなたのはまた』と、隣室から、『格別低いのですもの——口の中でもが〳〵云ふやうなことがあつて、雨聲のは何を云つたのか、獨り言のやうで分らないと、叔父さんが云つてましたよ。』
『もう、雨聲ぢやァねい。』
『そりやア、さうでしようが——ほんとに、あなたは、ね、自分のことばかりくど〳〵しやべつて人の話は耳に這入つたか、どうだか分らないと云ふ評判ですよ。』
『人の話なんか』と、皮にくツ付いてる最後の一切れをはさみながら、『どうでもいいぢやアねいか、いい畫さへできりやア？』
『それが、あなた、上には上があるのですもの——相當な人の話は相當に聽いてゐなけりやア、ねえ。』
『聽いてるぢやアねいか？　書いたのを先生に見てもらつてくりやア澤山だ。』
『それがです、わ、畫のことは畫のこと、世間のことは世間のことでしよう——雨聲はどこかぼんやりしてるなんて、人が聽いても見ツともないぢやア御座いませんか？』
『天才だよ、何でも——そこを先生が見込んでるのぢやアねいか？』

『そりやア、どうか分りませんよ。先生だツて、口さきのうまい人だし、上州であんなに儲けてゐらツしやりながら、うちへの心づけツたら、見れば分ることでしやう。』

『それとこれとは問題が違ふ、さ。』

『さうおツしやればさうでしようが、柳橋をおごられたとか、新橋へ飲みにつれて行かれたとか云ふことは、あなたを出しにして先生が御自分の樂しみをしてゐるのです、わ。』

『でも、ね』と、泡立つてぷんとにほひがして來たのを一切れ箸につまんで、それを吹きさましつつ初めて口に入れた。そしてあとをかきまぜながら、『上州にはあんないい所はねい、さ。』

『ねいからツて、うちのものは相變らずぴい／＼してゐるぢやア御坐いませんか？』

『まア、もう、暫らくの辛抱だ。』また一切れを口にして、あついのを我慢しながら半ば嚙みしめたところで、『うめい、うめい！　喰べに來ねい。』

『煮えましたか』と云つて、かの女は顏を出しに來たとたん、渠は鍋の上に出した自分の鼻さきから、一しづく、ぽとりとしづくを落した。

かの女がまだ座に付く前のことで、渠は箸につまんだ肉切れの湯氣立つ汁を振り落したりふう／＼吹いたりしながら、畫の世界も忘れたやうに顏を突き出し、ぱツくり口をあいた時のことである。どうした拍子か、ぽつりと鼻汁が煮え立つ鍋の中に落ちた。

坐わつていやににツこりしたかの女の顏をちよッと見て、渠は笑ひもできず、顏を引き、つまんでゐた肉をもとへ返して、持つた箸を爐のふちに置いた。そしてむツつりした顏をかの女に向けて、

『うめいよ。』

『さうですか？』かの女は旣に見つけてゐたのか、わざとにイやりして見せた切り、『お香々でも出して來ましようよ』と、再びそこを立つて行つた。

『………』渠はかしこまつて坐わつたまま、じツと自分の鍋の中のぐつ〳〵煮え立つのを見て、殘念で溜らなかつた。そして折角うまく喰はうとしたものをと思ふと、自分ながら自分の失策に對して腹が立つて來た。

そツと左りの手を橫に疊の上に突いて、そツと勝手の方をのぞいて見るとたん、かの女がこちらを見返つた目に出くわしたので、すぐまた何も云はないでもとの通りに坐わり直した。向ふでは、出したつけ物をわざとぐずぐず洗つてる風をして、無理にをかしさをこらへながら、私かにくす〳〵笑つてるやうすだ。こちらとのあひの障子を明けツ放してあるので、ぬか味噌のにほひがして來た。それが爲めに一層むしやくしやして來たので、少し大きな聲で、『締めろ、寒い！』

『はい』と云ふと同時に、かの女は一つおほびらに吹き出した。それでも、こちらへやつて來るのかと思ふと、さうではなく、障子を締めてからまた向ふへ行つた。そしてちよき——ちよきと漬け物を

切る音がしてゐる。
『………』渠はそれを侮辱のやうに感じて、待たれなかつた。『おい、早く飯を出せ！』
『今――』向ふはまたくす〳〵と笑つた。
『何がをかしいんだ？』
『………』矢張り、くす〳〵笑つてゐる。
『早くしろ！』
『はい〳〵。』

四

漬け物と食膳とが正美のかたはらに置かれ、妻が盆を持つて給仕に出てからも、直ぐ渠は箸を取らうともしない。二十錢出して買つて來た馬肉を煮立たせた上でむざ〳〵棄てるのが惜しかつた。爐に向つたまま、かの女を見て、鍋の中を指さし、
『おたべ、うめいよ。』
『まア、あなたがおあがりなさい、な』と、かの女は澄ました樣子をしてゐる。
『もう、喰つた、さ。』

『さう――大相御遠慮です、ね。』
『けふは、さう喰ひたかアねい。』
『でも、あなたのおこころ祝ひでしよう？』
『そりやアさうだが――』向ふがこちらを馬鹿にしてゐるのだと思ふと、自分の立ち場を何とかして切りひらかなければならなかつた。止むを得ず、俄かに目を鋭くして、『なぜ、さうじろじろおれの顔を見るんだ？』
『別に、何も』と、膝の上で持つてゐた盆を少し横の方へ引いて、微笑しながら所天を見詰めて、『じろじろ見るわけぢやア御坐んせんが――』
『ぢやア』と、ちよつと鍋を見て、『喰へばいいぢやアねいか？』
『いやなこツてす、わ』と、からだを振つた、その拍子に盆は膝の上で二三度左右に動いた。
『何がいやだ？』
『いやですとも！』
『いやなわけアねい！』
『ありますとも！』
『おれが買つて來てやつたものを、喰はねい法があるものか？』

『あなたが買つて來たんですから』と、かの女も負けない氣になつたやうすだ、『あなたがおあがんなさいよ。』

『だから、おれは喰つた。』

『もツと御遠慮なくめしあがれ。』

『おれは、もう、喰ひたくねい。』

『わたしも、もう、結構です、わ。』

『人の眞似ばかり云やアがる！』から太い聲で叫んで、渠は手にちからこぶを入れた。

『眞似ぢやアありません！』口答へしながらも、かの女はこちらのにらんだ目の視線を避けるやうにして片手を後ろについた。

『眞似ぢやアねいか、人を馬鹿にして―』

『違ひます！　あなたを馬鹿になんぞ致しません！』

『何だ！』渠がこぶしを固めて立ちあがつたので、かの女も手に持つた物を持つたまま逃げかけた。

　その音におびえて、子供はまた泣き出した。

『御免なさい、御免なさい！』かの女が立ちすくんであやまりながら、二度ばかり擲ぐられた時、ステキ屋のかみさんが默つて驅けつけて來た。

『先生、どうしたんです、ね？』かみさんが裏庭の障子をがらりと明けた時には、渠は元のむツちりした顏の額にまだ靑筋を立ててゐるまま、元の座に坐わりかけてゐた。が、かみさんの顏を見ると、不斷機嫌を取つて置く必要があるのを忘れてゐないので、ちよツと笑がほになり、でも、重苦しい聲で、

『まア、お這入り。』

『喧嘩は、もう、やめにしようぢやア御座いませんかね』から云つて、かみさんはずん〱あがり框をあがり、障子を締めると『また、どうしたんです、ね』と云ひながら、うまさうにぐつ〱云つてる鍋の方をじろりと見て、その場に大きな腰をおろさうとした。

『こツちがいい』と、渠は爐ばたの空席をさし示めした。

『では、御免なさいよ。正美先生はまだ御飯前でしよう――ぐつ〱と、先生の大好物を煮え立たせて？』

『ああ、今食ふところだ』と、ひとりでお櫃を引きよせた。

『寒いこと、ね』と、目をまた同じ方にやりながら、かみさんは太い兩手をもんで坐わつた。そして鍋を見たことを心に申しわけするやうな微笑を見せて、『お給仕でも致しましようか、ね？』

『なに、いいよ。』

渠は無言で一杯を終り、二杯目に移つても漬け物ばかりをぼり／＼やつてゐて、肉に箸を着けない。鍋の中はぐつ／＼を通り越して、くた／＼と煮え立つばかりだ。が、いつもとは違ひ、渠はかみさんに向つて一緒に喰へと云へなかつた。そのわけを知らないので、かみさんは不平さうな顏をした。

『お給仕致しますよ』と、妻が子供を抱き、盆を持つて出て來た時、渠は三杯目をよそつてゐた。

『手めへなんかの世話にやアならねい。』

『………』かの女はもとのところへ坐わつてから、『うちぢやア、ね』と、その場のきまり惡さを取りつくろふやうにかみさんに向ひ、『いつも、つまらないことで怒るんで、困つてしまひます、わ。』

『何が詰らねいんだ？　困るのア、手めへが惡いんだ。』

『でも、そんなきたならしいものを――』

『何がきたならしい、馬肉ぢやアないか？』

『馬肉だツて、そんなきたならしい――』

『馬肉、結構ぢやアありませんか？』かみさんはこの香ばしいにほひに空しく喉を鳴してゐるのを隱し切れないやうすであつた。

『それア、ね』と、妻もかみさんの喰ひ辛棒なのは知つてる筈であつた。渠が私かに聽き取れば、丁度いいから、默つてかみさんにたべさせてやらうと云ふつもりらしく、『結構でないこともないのです

が、ねえ――』

『けふから正美先生だから、召しあがらないと云ふわけぢやアまさかないでしよう』と、かみさんのやうすはこちらの思ふ壺へいよいよ落ちて來た。『わざわざ心祝ひに買つて來て――さツきから、先生は少しもお箸をつけないぢやアありませんか？』

『それが、ね』と、渠は箸を置いて、からになつた茶碗に湯をつぎ、口だけをもぐもぐさせ相變らず半ばは不機嫌に、『けふは喰ひたくねいんだ。』

『どうしてでしよう――ぢやア、奧さんばかりを喜ばせようと云ふんでしよう？』

『まア、さう、云つたわけ、さ。』渠はただ微笑して見せるつもりが、俄かにくすツと笑ひ出しかけたので、それを無理に押さへた。

『わたしだツて、いやです、わ、ね、そんなもの！』

『…………』默つてをれと渠は自分の妻に目で知らせた。矢ツ張り、人の惡いのは自分ばかりであつたのだ。

『ぢやア』と、かみさんは待ち切れなくなつたやうに、『わたしが少し戴きましようか、ね？』

『うん――』こちらの返事ばかりは肉とは違つて煮え切れなかつたが、なほ默つてをれと云ふ目つきを渠は妻に向けてゐた。で、かの女もこちらの意味が分つたやうにこちらと顏を見合はせてにツと笑

つた。そして今まで喧嘩をしてゐたことなどは忘れてしまつたやうに。

『ぢやア、先生』と、かみさんはまた剛々しくも手の平を突き出し、『そのお箸をちよいと拜借』

『………』誰れも然しそれに應じて箸を取つてやらなかつた。

『行けませんの?』かみさんは俄かに身振ひして、氣まづいやうな、おこつたやうな顔つきをした。

五

『實は、ね――』

『………』渠は今一度云ふなと云ふ目つきをしたが、妻はこの命令に從はなかつた。

『それはきたないのですよ。』

『きたないことがあるものか?』また不機嫌にならないではゐられなかつた。

『きたないですとも!』かの女もまたその反抗をぶり返して來た。

『おかみさんにやアきたないか知らねいが――』

『おかみさんだツてわたしだツて、――』

『ごみでも這入つたんですかい』と、かみさんは、いつのまにか引ツ込めてた手を再び火の上に高くかざして笑ひにまぎらしてゐる。

『ごみ位なら、いいんですが、ね――』

『ごみよりやア、ずツと奇麗だよ。』

『どうしたんです、ねえ、全體』と、かみさんはここに僅かに逃げ道を得たやうに再び勢ひづいて、

『それが、何か、喧嘩のもとになつたのでしよう？』

『さうですよ』と、妻はにや〳〵笑つてゐる。

『何がをかしいんだ？』渠はまた、どうしても心が解けなくなつたので、からだをむづ〳〵させた。

『全てい、どうしたんです、ねえ、おふたりともをかしいぢやアありませんか？』

『………』

『ごみでもなけりやア、鼠のふんでも這入つたんですの？』

『そんなことなら、まだしも分つてますが、ね。』

『ぢやア、蟲でもゐたの？』かみさんは初めてぎよツとした。

『さうでも御座いませんの。』

『ぢやア、どうしたのよ？』

『實は、ね』と、妻は所天の顔いろを窺ふやうにしてたが、『白狀しますが、ね、うちで洟を垂らしたのですよ。』

『へい!』驚いたのか、それとも氣まり惡さを胡麻化したのか、かみさんは胸を反らせて、後ろへ肘手を突いた。そして胸わるさうにして、『それをわたしが戴いたら、どうでしたでしよう?』

『だから、おかみさんにやァ奬めやアしなかつた』と、渠はすツかりむツつり顏に返つた。

『わたしにたべろと云ふんですもの!』

『そりやア、奧さんだツておいやでしよう、さ、ね。』

『ほんとでしよう』と、妻は同情をかみさんに求めたが、渠自身には承知できなかつた。

『おかみさんはおかみさん、さ。おれのうちやアおれのうちだ——それぞれ家風があるものぢやァねいか?』

『そんなことに』と、妻は躍起になり『家風も何もあつたものですか?』

『そりやア、先生、御無理でさア、ね。』

『さうですとも!』

『ぢやア、何か』と、渠はわざと輕く受けたが、なほ反例を擧げるつもりで、『佛法信者の家へ嫁に來たものが、わたしやア耶蘇ですからツて、相變らずアーメンをやつてゐられると思ふか?』

『そんなことは存じませんが——それとこれとは違ひますもの。』

『違ふことアねい、さ。』

『ねいことはねいでしよう』と、かみさんは全く調子に乘つて來て、『お念佛と喰ふことは別だア、ね。』
『でも、ね』と、少し聲をやはらげ、『ステツキは喰へねいが、ステツキぢやア喰つてるものもある。』
『そりやア、おれんとこばかりでもないでしよう、先生だツて――？』
『だから、念佛を云ふんだツて、畫をかくのだツて、みんな喰ふ爲めのこと、さ。』
『それが先生の家風ですか、ね？』
『家風だツて、何風だツて、わたしやアあなたの洟を垂らした物なんぞ戴くのは御免です、わ、ね。』
『なアに、亭主のだ。』まじめに坐わつてるまま、なほ鍋の方をちよツと名ごり惜しく見た。そして女二人の吹き出したのが癪にさはつて溜らなかつた。
　渠は天人と廣告畫とを見比べ、口のうちでまた自分の書きたいことをぶつ付いてゐたが、やがておかみさんの方に向き、
『今度からステツキに面白い落款を入れるよ。』
『そりやア結構です、ね。』
『正美の美の最後に右へ引ツ張る線を右から上へまはし、ちよんちよんと打つその跡の點を左から上へはねて、その兩方の線で輪廓を拵らへるのだ、ね。』
『面白いです、ねえ――何でもいいから、ステツキを賣れるやうにして、先生の方でもわたし達でも、

『さうだ、ね。』
『あなた』と、妻はその話を途切れさせて、『どうしましよう、ね、これは？』
『どうせ喰はねいなら、犬にでもやつてしまへ。』
『畜生なら、構ひませんでしようが――でも、折角、お金を出して買つて來たものですから。』
『ちやア、どうしようと云ふのだ？』
『奥さん、思ひ切つてうツちやつておしまひなさいよ、そんな物。』
『でも、ねえ』と、妻はなほためらひながら、所天の顔を窺ひ、『あなたが召しあがるにやア差しつかへはないでしよう。』
『………』渠は默つて、自分の目の光をよけるやうにしてゐるかの女の顔を見つめてゐたが、ただ一喝大きな聲で、『馬鹿！』
『おいやですか？』と、まだ未練がありさうに。
『人にからかふ氣か？』
『からかふなんて、そんな氣で云ふのぢやア御座いませんが――餘り惜しいぢやア御座いませんか――』

『それほど惜しけりやア、自分で喰へばいい――亭主の、而も藝術家の喰ひ殘しだ。』
『だツて、亭主でも、藝術家でも、わたしやアどうしてもいやです、わ。』
『おれもいやだ！　話せねい、なア――太閤さんを見ろ、太閤秀吉を。大谷刑部少輔吉隆と云やア、一體何だと思ふ？』
『刑部少輔なら、刑部少輔でしようよ。』
『それが人の一生きらふ癩病やみだ。』
『いやな人なんです、ね。』
『ところが、ね、太閤はさすがにえれいものだ。茶の湯の席で、その癩病人がまはし飲みの濃い茶碗の中へ、血の膿のまじつた鼻じるを落し込んだのだ。』
『へい』と、妻は氣のない返事をして、笑ひながらかみさんと顏を見合はせた。『それから、どうしましたの？』
『大谷刑部と云やア』と、渠は少し威だけ高になつて、『太閤殿下の諸將中で、つまり、大將連のうちでだ、ね、えら物であるから、僅かこんな粗忽でほかの軍人に顏向けがならないやうなことがあつちやア、可哀さうだと思つて、その太閤は、その茶碗が次ぎの人にまはらないうちに、自分の方に取りあげて、この茶は湯加減がまづいから立て直すと云つて、自分がぐツと呑んでしまつた。おのれの女

房なら、たに頭らこれ位の愛情がなけれアならねいんだ』
『わたしは太閤さんでもなけりやア、あなたもそんなにえらい人ぢやアないんですもの。』
『おれを馬鹿にするな』と、にらみ付けた。
『うッちやつておしまひなさいよ、うッちやつて』と、かみさんは無雜作に云つて、『また夫婦喧嘩に芽が出ます、わ、ね。』
『でも、ねえ――』今度は妻ばかりが未練らしかつた。

六

けれども、渠は腹はできたし、約束の時間は迫まるしするので、元氣を取り直して自分の宅を出た。そしてゆふがたまた歸宅して見ると、妻の話で分つたのだが、さいぜんの馬肉は『うちの野郎に喰はしてやる』と云つて、かみさんが持つて行つたさうだ。
『きたないことは云はないで、ただ頂戴ものだと云つて置きやアいいッて』と、妻は爐ばたに兩手を突いて、ひそやかに語つたのである。
『へい、さうかい!』渠は自分の洟をもいとはぬものが世の中に一人でもあつたのを得意に思つた。
『おれにあやかつて、今に、おほがね持ちにでもならア、ね。』

『でも、いやです、ねえ』と、かの女はまた聲を低めて云つてから、突き出してゐた顏を引ッ込め、

『あんな人達とお仲間になつてゐるのは。』

『だから、こんな場末も住んで面白いのぢやアねいか？』

『何で面白いものですか、ね、馬肉は買へても、時子に着せてやる物さへ買ひに行けないぢやア御座んせんか？』

『買ひに出りやアいいぢやアねいか？』

『では、おかねは？』

『今に、畫會をして儲けてやらア、ね。』

『いつのことだか分るものですか？』

『手前なんぞア話せねい。』

こんな話で夫婦がうち解けてしまつた、翌日正美の留守に隣りのかみさんがお禮を云ひにやつて來て、

『うまく云つて、喰はせてやりましたよ、うめい、うめいだッて——へ、へ、へ、へッ』と笑つたさうだ。

ところが、正美が右隣りの方の主人と途中で一緒になり、何げなくこの話をしたのが、翌日ステキ

屋のおやぢの耳に這入つたと云つて、おやぢはそんなおぼえがないと怒鳴り込んで來て、勝手の中の突き當りに腰を据ゑた。

『困つたことになつた』と思ひながらも、正美は妻に代つて辯解し、實はおかみさんが持つて歸つたのだから、おかみさんに聽けば分ると告げた。すると、

『いえ、わたしもそんなことは知りません』と云つて、外に窺つてゐたらしいそのかみさんも飛び込んで來た。『人聽きが惡いにも、ほどがあります。』

『でも、現に、きのふ、お禮にまで來たと云ふぢやアねいか？』

『いえ、違ひます――お禮になんぞ來やアしねいや！』

『………』して見ると、これはかみさん自身が喰つてしまひながら、今になつて氣まり惡さうにうち消してゐるものとこちらに分つた。

『白ばツくれても、來たのア來たぢやア御座いませんか』と、妻も甲高い聲を出した。

『この尼までが何をぬかすんでい！』おやぢが怒るのは尤もであつた。『なんぼ畫かきがえれいかも知らねいが、くそ忌々しい鼻ツ垂れめ、手めへの鼻じるなんぞを喰はせられるステッキ屋ぢやアねい！』

『あなたは知らないからそんなことを云ふのですよ。』

『知るも知らねいも、馬肉なんてしみツたれた物ア喰つたおぼえがねいや！』

『ぢやア、誰れかがこッそり喰べてしまつたのでしよう』よと、妻も忌々しさうにかみさんを睨み付けた。

『いつ、わたしが喰べた？　さア、證據をお出しなさい、證據を』と、かみさんは左の足を勝手の地べたに踏ん張つて見せた。

『ふん』と、妻は横を向いて、『そんなことに證據なんて――』

『犬も喰はねい喧嘩の種ぢやアねいか？』かみさんは妻をなほ言葉の上で押さへつけようとした。

『よせよせ。』正美　この場を無事に濟ませようとあきらめて、『間違ひなら間違ひとして置く、さ。その代り、もう、君の方の仕事は御免だ。』

『おれの方でも眞ッ平でい』と、おやぢはこちらを尻目にかけて立ちあがつた。こちらがこの時初めて氣づいたのだが、おやぢはこちらの畫いたのを彫りかけてゐるステッキを握つてゐるのであつた。

『さア、來なよ』と、かみさんはおやぢの片手を引ッ張つた。『あんな畫かきなんぞアどこにでもころがつてらア、ね。』

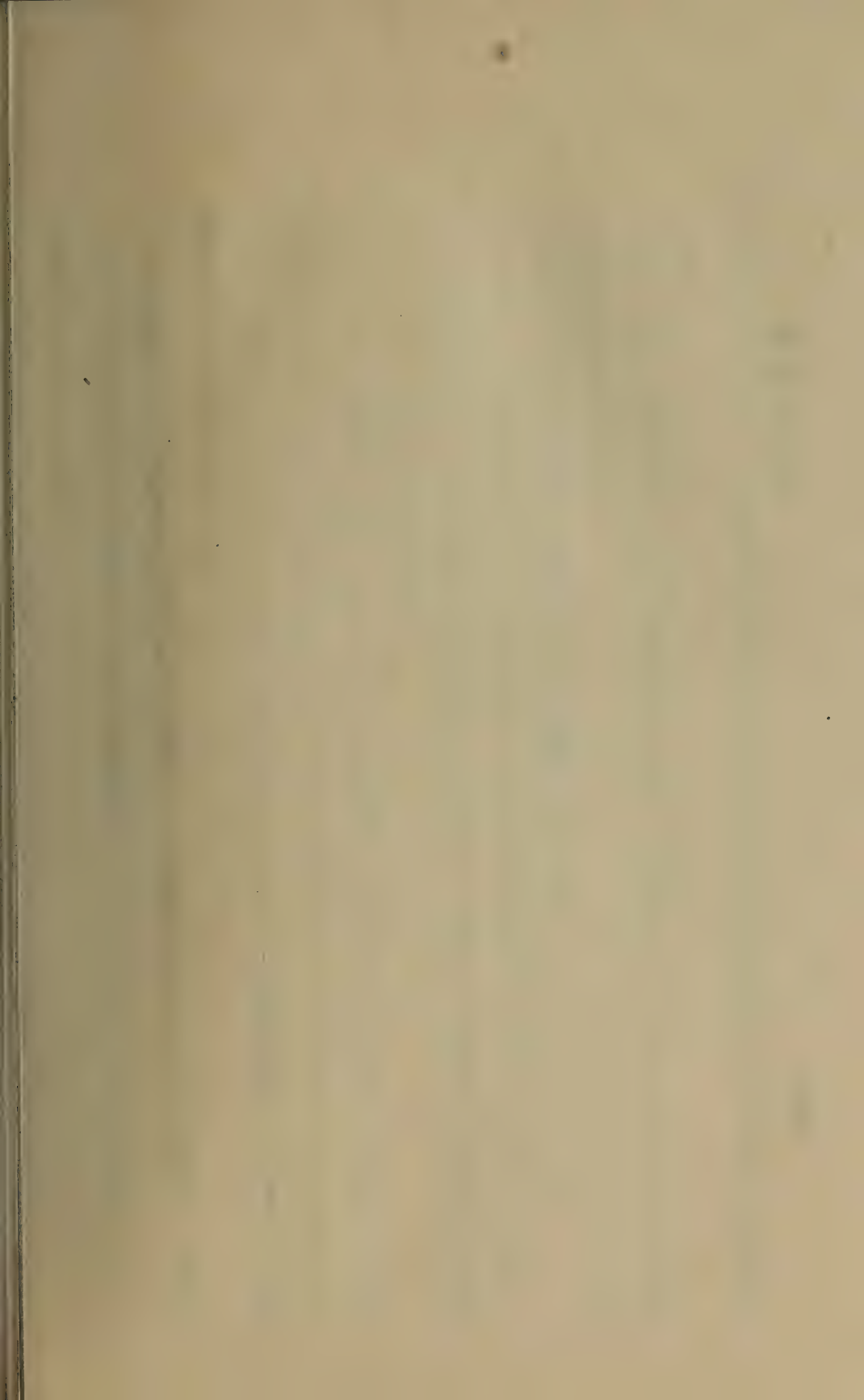
『さうとも、さ。』おやぢの聲は勝ち誇つたそれのやうであつた。

外へ出てからも、かみさんは正美の右隣りへ行き、勝手口から大きな聲で正美夫婦の惡くちを云つてゐた。

『なんて女でしよう、ね！』
『こんな下等な人間のゐるところア、もう、御免だ。』
から外敵に向つて一致した夫婦は、そのまた翌日、この根岸の住ひをおづおづ引き拂つて、市中へ轉居しなければならなくなつた。

――(大正元年十一月)――

店頭

一

　通りが市區改正と水道工事との爲めに掘り起されて、雨の降つた跡には、とてもうか〳〵しては通れない時だ。車一臺ぐらゐが僅かに通れるやうになつてゐる片かは路を、土くれや水溜りが餘り多いので、車から下りて、三四歲の子供をかかへながら、吾妻コートを着た婦人が行きかける。
『奧さん、奧さん！　まア、お這入りなさいませ』と、藥屋の店から呼びとめたものがある。
『どうも困ります、ねえ、かう道が惡くツちやア。』奧さんは慣れ〳〵しく這入つて行き、車を待たせて置いて、店さきの腰かけにかける。いま〳〵しさうに、半ば外を見ながら、『何んて云ふ道でしよう、ね？早くかたづけて呉れないぢやア、ね。』
『へい、どうも、いつまでもこれで置かれちやア、へい、商賣にも邪魔で御座いまして、へい――かうやつて見てゐましても、外を通つて行く人の樣子がまことに氣の毒でして、へい――まア、御一服如何です、へい。』主人は火鉢を少しつき出した。

『相變らず、へい〳〵屋のお愛相だ』と、かの女は高をくゝつたが、それでもその愛相が、ぷんとして來る藥のにほひと共に、いつものやうにやわらかにかの女を取りまきかけた。

子が一人でも出來るのを頻りに望んでゐるこの主人に、自分の子福性なのを羨まれるのが、この奧さんには一つの誇りである。

『坊ちやん。』主人は子供の方に顏をつき出して、『どこへいらッしやつたんです?』

『今、ね』と、奧さんが引き取つて、子供がはにかんで母の膝の上に腰かけてる顏をじツとのぞきながら、『ちよいと親類のところへ行つて來たんですよ。でも、どうも惡くなつて困るんですの。』

『また奧さんの十八番が出るのか』と、今度は主人の方が心で私かにさきを越したが、子供の自慢ばなしを聽かせられるのが、羨ましい、羨ましいの極、つひにねたましいやうな氣になるので――何となく、いやで〳〵溜らないのだが、子を欲しいの弱みから釣り込まれて、奧さんの話に聽き惚れてしまうのが常だ。

そして二人の會話はいつもだら〳〵と長引くのである。

『けふもをかしいんですよ、親類のところで、坐わると間もなく、お母さん、もう、お菓子が出さうなものだ、ねえ、と云ふんですもの――如何にも喰ひしん坊のやうで、また向ふへは氣の毒で、ねえ。』

『でも、お利口で、へい、お賴母しいです。――坊ちやん、いゝお子さんですこと』と、主人があや

すロ調と云ひ、樣子と云ひ、いつも、この奥さんには男と思へないほどやさしく、やわらかいのである。

子供はそろ／＼動き出して、火鉢の火を火ばしでいじくつてゐたが、二人の世間ばなしの長たらしいのに飽きが來て、もう、歸らうとせびり初めた。が、奥さんの腰は坐わつてしまつて、なか／＼動きさうでない。

『坊やはいゝ子だから、おとなしくしておいでなさい。それ、火をおいたしたらいけませんよ。それそれ、およしなさいよ。今に、ね、坊やの好きな狆が出て來ますよ。』

『狆がゐますよ』と、主人も口添へしてから、『時に、へい、奥さん、つかぬお話ですが、へい、あなたはこの頃大相お痩せになりました、ねえ。へい――昨日もうちの者と話しましたことですが、へい、こゝをお通りすがりの時お見受け申すたんびに、どうも、へい、段々おやつれになつて行かれるやうで、へい――また例の肺でもお惡くなつたのではと、へい――』

『いや、ね、肺なんかは、もう、よくなつたんですが――またどこか惡くなつてるんかも知れません、さ、うちの主人のことでさん／＼心配させられますから、ね。わたしだツても、御覽の通り、まだお婆アさんでもないんですが、ね、どうも、うちのが嫌つて寄りつかないんですよ。毎日々々、めかけのところへ入りびたつてゐて、ねえ、――何も燒き餅を燒くんぢやアないんですが、それでは家が治ま

りツこがないぢやア御座いませんか？』

『御もツともです、へい。それぢやア、へい、奥さんもお大抵ぢやア、へい――』

『實に困つてしまふんですの。』奥さんの目までがまた少しづゝ据わつて來た。

『もう、へい、お子さんも隨分おありになるのですし、へい、旦那さんも何御不足は御座りますまいに、へい、どうしたお氣の狂ひでしようか――うちでも、へい、薄々は聽いて存じてゐましたんで、へい。』

『さうでしようとも、ね！』

『あの、へい、齋藤さんでも、奥さんがお話しがあつたさうで、へい――』

『あすこでも知つてましよう、さ――別に、わたしがしやべつたわけでもないのですが。』

『そりやア、へい――』

『餘りいゝ氣になつてゐられちやア、家のものが困ります！』

『へい、へい――へい。』

ぐじや〳〵した片かは路を通つて行く人々のうちには、こゝの主人が叱り付けられてゐるのかと思つて、ちよツと立ちどまつて見るものもある。

奥で仕事をしてゐたおかみさんも、餘り見ツともよくないことだと思つて、茶を出すと同時に顏を

出した。
『いらツしやい――どちらへ？』
『ちよいと親類のところへ。』
『左樣ですか、まア、お茶でも。どうか――坊ちやん、お茶を召しあがれ。』から云つて、おかみさんは疊の上にあぐらをかいた子供の手を持ち添へて呑ましてやりながら、『奥さんはいゝお子持ちでいらツしやいます、ねえ――わたくしも少しあやかりたいもので御座いますが――ねえ、あなた』と、かの女は自分の亭主と顏を見合せた。
『さうだ、な』と、主人は受けて、子供の片手を接吻もしかねまじくいじりながら、
『かう云ふ子がひとりでもあつたら、なア。』
『なアに、いくら子供があつても、肝心の主人があんな道樂者ぢやア仕方がないです。子供は嫌ひだし、五人の子供の爲めに年を取つて來た家內は嫌ひだし、さうして方々をほつき歩いた末が、めかけの家に入りびたりなんですもの』と、奥さんは睑ある笑ひを見せたが、『わたしも子供さへなけりやア、まだどこへでもかたづかうと思やアかたづけます、わ。』
『それはよくありません、ねえ』と、おかみさんの言葉がすべつて出たが、それが奥さんの旦那さんのことを云つたのか、また奥さんの言葉をとがめたのか、自分ながらどちらにして跡をつゞけようと

あべこべに氣耻かしいやうな心持ちになつた。
そこへおほきな狆がちよこ／＼と出て來た。
『それ、坊や、狆だよ』と、母に注意せられて、子供はそれを嬉しさうにながめる。人々も亦た狆と子供との樣子に氣が取られる。
狆が店の飾り棚の片隅を嗅いでゐるあひだに、その後ろから、子供は指を以つてその尻をつツつかうとしにかゝると、この動物は子供の手の觸らないうちに振り返つて、くしや／＼した顏を子供に向け、ぺろりと赤い舌を出した。
『よく分るもんです、ねえ』と、奥さんが不思議さうに云ふと、
『いゝえ、ねえ、もう耄碌で仕方がないのですよ』と、おかみさんが答へた。
『可愛さうに――いくら狆でも、耄碌してゐるんなら、こんなに感じがいゝわけはないでしよう。わたしのうちの主人などこそ、あんまり勢ひがよ過ぎるから、少し耄碌して呉れた方がいゝんです、わ。』
『いゝえ、奥さん、へい、男が耄碌し出しちやア、へい、もう、へい、駄目ですぜ』と、主人は意味ありげに笑ひながら。

『第一、もう、へい、これも目が見えないのですから、へい。』
『へい』と、初めて氣が付いたやうに、『この狆は目が見えないんですか？』
『さうですよ』と、おかみさんが引き取り、『もう、疾から見えないのですが、感じが強いものですから、どなたにも目くらとは思はれません。』
『わたしも亦、けふまで、目が見えるとばかし思つてました、わ――でも、さういへば、目つきが變だとは思つてましたが。』
『何だツて、へい、もう、へい、うちへ來てから十一年になります。これが』と主人は笑つておかみさんを目つきでゆび指し、『子がないもんですから、へい、その代りによそから狆を養子にしたわけですが――』
『養子はいゝです、ね』と、奥さんも笑つた。
『それが、へい、もう、十一年、へい――犬の一年は人間の十年に當るさうですから、人間にしたら、百十歳の老年ですもの、へい。大隈伯の、へい、理想とか申す百二十五歳に、もう、へい、たツた、へい、十五年しか御座いません。目は、もう、へい、疾くに見えなくなりましたが、あの、へい、へい――女の方の、へい、おつき合ひも出來ません。』
主人がかう云つて微笑すると、女兩人は聲を擧げて笑つた。そして、その跡は此店のおかみさんが

『そりやア、奥さん、可笑しいんですよ。種犬としてつがはせに連れて行きますと、ね、いくら安くツても、一回五圓は貰へるのです。それに、これは種が良いのださうで、六圓にも七圓にもなります。』
『そんなに價があるものですか、ねえ、狆は？』
『さうで御座いますとも、狆は數が少いので、なか〳〵價値があるんですよ――所が、ねえ、奥さん』と、却つて亭主の方を見てにツとした。『それから、をかしいんですよ、これは』と、狆を膝の上で撫てやりながら、『耄碌して駄目です、の。自分の女御主人に會ひましても、もう、お役に立ちませんので、五圓が三圓、二圓、一圓でも貰へません、の！』
『おほ、ほ、ほ』と、女ふたりは笑ひに形を崩した。
子供は喫驚して二人の顏を見比べた。
『ぢやア、よツぽど意氣地無しです、ねえ。』奥さんはなほ笑ひの心持ちを續けて、『さうして見りやア、もう、生き甲斐のないおぢイさんです、わ、ね』と云つたが、急に苦笑ひして、『この狆も、ぢやア、道樂が出來た時の方がまだしも宜つたんでしよう。』
『へい、へい、子供を、へい、拵らへることが出來ないぢやア、へい、うちの婆アさんと好い取り組でさア、へい』と、主人はおかみさんの方を調弄半分に見た。

『調子にお乘なさんなよ』と、おかみさんは不平さうに、而も寂しさうに、『どッちが惡いんだか知れません、わ、ねえ、奥さん。』

『そりやア、さうです、ね。』奥さんはこの夫婦の裁判官であつたかのやうな誇りを見せて、『男と云ふものは勝手なもので、子供が出來れば子供の爲めに女を婆アさんになつたと嫌ふし、子が無ければ子が無いで、女の方ばかしを責めるんです。どうも、いけません、ねえ。』

わざとまた獨りで笑つて見せたが、それがまた苦笑ひであつた。奥さんの眼はいつの間にか自分の内部にばかり向つて居た。

女二人は、別々なことを思つてたが、何だか悄げた有様になつたのに引かへて、主人は獨り面白さうに言葉を續けた。

『そりやア、へい、一度、奥さんにもお見せ申したいやうに可笑しいです、へい。○○はせに行きますと、へい、牝といふものはをかしな奴ですから、どの牝でも乘り氣になつて來ます。これも、へい』と、狆を見て、『なか〳〵、へい、一生懸命になりますが、へい――』

『およしなさいよ、もう、そんないやなことは』と、おかみさんは亭主を制した。そして膝の上の動物をもツとしッかり抱いてやつて、『向ふのが氣違ひになるばかりでなく、こッちのも却つて病氣になるさうですから、もう、雇ひに來ても一切斷つてしまふので御座いますよ。何うせ、何度行つても、

可愛さうですし、ねえ。まア、無事に死ぬまではうちに置いてやるつもりで――』
『人間の百年以上も生きたと同前な譯なら、此處の御主人の三倍も四倍ものおぢイさんだから、ねえ。』
『ほんとに、さうで御座いますよ。今でも、お手洗では決して疊の上の粗々は致しませんが、何しろ目が見えないもんですから、そとへ出ると、うか／＼と人さまに付いて行きまして、二日も三日も歸らないことが御座います。どうせ藥屋の息子で御座いますから、人さまの藥に似たやうなにほひを嗅ぎそくなつて、目の見えない悲しさには、きツと、うツかりとついて行つてしまふんでしようよ。そのたんびに、方々心當りを探しまわつて、やツとのことでつれて歸るので御座います。』
『考へて見りやア、可哀さうなものです、ねえ』と、奥さんは何か頷きながら目をぱちくりさせた。
『いち度なんぞは、見てゐますと、さツさと書生さんについて行くんでしよう。跡を追ツかけて行きましたら、どうでしよう、その書生さんが淸心丹くさいぢやア御座いませんか？』
『まア、ねえ――』
『よツぽど衞生に用心深い書生さんだと思ひました、わ。』
『さうでしよう、ね』奥さんは思はず吹き出した。
『それでも、へい、この狆は、へい、一人前の仕事を濟ませた上ですから、へい、耄碌も、もう、仕

方御座いません。』
『でも、あなたはまだ』と、おかみさんはじッと亭主の顔を見て寂しく微笑しながら、『その一人前の仕事が出來てゐないのでしよう。』
『そりやア、お前が惡いんだらう。』
『ぢやア、誰れかを狆のやうに賴んで御覽なさい、な。』
『馬鹿ア云へ。』
『ほんとに、ねえ』と笑つて見たが、奥さんはこの夫婦の最後の應待をゾッとするほどいやアに感じた。そしてかの女自身の心眼に浮ぶ世間と云ふものを八方に悲觀する氣分になつて、そこ／＼歸り腰になつた。『子供がないのも因果なら、子供のあるのも因果ですよ。』
子供はおかみさんの膝の上に默つてゐる動物を、おもしろさうに、いじくつてゐた。が、しまひには飽きが來て、殘酷にも、その動物の見えない目をつッ突いた。
動物は怒つて子供の手を嚙んだ。
子供は泣き出した。
皆が驚いて子供の泣くのをなだめたが、嚙まれた指は大した疵でもないので、主人が店の藥を出して來て、申しわけにその齒の跡に塗り付けた。

『どうも、坊ちやん、濟みませんでした――この狆、馬鹿！　ちやいしておやんなさい。』主人が子供の手を持ち添へて打つ眞似をさせると、
『うウ――』と再び呻つた。子供はおぢけ切つてゐた。
『どうも、長話しをして、御迷惑でした』と、奥さんは子を抱いて立ちあがつた。
『うちでこそ、つい、氣が付きませんでして』と、おかみさんは氣の毒さうに――
『まア、奥さん』と、主人も元の場所に坐わつたまゝ見あげて、『さう旦那さんを、へい、惡く思ふものぢやア御座いません、へい――辛抱していらッしやいますれば、そのうち、へい、氣のかはる時が御座いますよ。』
『もう、そんな見込みはないんですよ。』
『なアに、そんなことを御心配になつてゐるうちに、へい、あなたがまた、へい、御病氣にでもおなりになつたら、つまりません、へい。』
『また病氣が出たツて、構ひません、わ――まア、御免下さい。』奥さんは骨立つた顏を横に向けて、子供と共に俥に乘つた。
『坊ちやんがうちの子であつたら、なア』と、主人はおかみさんを返り見た。
　そして狆は、おかみさん膝のの上につッ立ち、耳をあげて目くらの顏を往來の方に向けてゐた。

――（大正元年十二月）――

新聞記者

第一面のおほ組が出來て來たのを見て、如何にもまづいと怒り、編輯長自身が印刷部の方へ出かけて行つた跡で、その棄て置かれた大刷りを自分の前に引き寄せ、これをふくれた顏で見つめながら、年の若い助手が獨り言のやうに云つた。

『どこが惡いのだ、畜生！』

『惡いも、ええもない、さ。』隣りの椅子に腰かけた記者で、太い古びた洋服を着たのが、今受け取つた料理屋の附けを擴げたまま、これはまたその附けに見入りつつ、同情したやうに云つた。『東京にしたところで、この大阪にしたところで、新聞と云ふ物に變りはない。東京新聞の三面は大阪新聞の三面、また東京新聞の二面は大阪新聞の二面ぢや。僕が坊主の出ぢやから坊主臭いやうに、三面出の記者はいつも三面臭い。それが編輯長なんて、まア、云ふて見りやア潛越の沙汰ぢや。』

『そや、そや。』舞ひ子か何かの黄いろい口調を眞似て、合槌を打つたものがある。

『人格から云ふても』と、また別なのが、『編輯長の資格なんてないから、なア。』

『もツと反省さすのんには、君がをらんと困る、さ。』

『さうおだててもろてもちと迷惑ですが、な。』いつのまにか得意さうになつて、その方を見たが、『この頃の二面なんて、尤もこれは僕等にも不勉強の責めはありますが、な、全で成つてをらんやないか？』

『そこぢや、そこぢや！』二面受持ちの仲間からも贊成の聲が起つた。

『川田君に限る、川田君に限る！』

『いや、もう眞ツ平ぢや。こないだ不平騷ぎをしたお蔭が、乃ち、この』と、再び附けを兩手でおほぴらに擴げてながめながら、『堺卯の四拾圓足らずの拂ひや、僕がいさぎよく頸になつてしもた方が、社の爲めには、厄介拂ひでよかつただろが、僕が退社屆を出すと、丁度東京支局の〇〇君が出て來て、そないなことはせんでもええ、撤回せいと云ふて呉れた。で、編輯長を堺卯に招いて、〇〇君を初め、二三名の舊社員が僕の保證をして呉れて、以後決して不平がましいことは申させません——と平あやまりにあやまつたと云ふたやうなわけで、僕は、もう、前科者ぢやから、あかん。お蔭で、今月の俸給全部を棒に振りました、わい。』

『來月分も振らんやうにし給へ』と、むツつりした口調で云つたのは、經濟部の主任で、堺卯へ一緒に行つたものの一人であるから、さツきからの話をいやな顏して聽いてゐたのである。

これにじろりと顏を見られたので、川田は口をつぐんでしまつたが、その時編輯長が歸つて來た。

『こないなこツちや、あかん、あかん！』椅子にかけたまま、力を入れて後ろに胸をそらせた。そして前と同じく誰れに云ふともなく、『どうも、自業自得がわたしの病ひです。この病ひさへなけりや、僕だつて、三十五六にもなつて、平記者ではをりやせなんだ。』

『相變らず僞謙遜の、おほ自慢の、おほ得意かい――そんな淺慮薄志は聽きたくもない』と云はないばかりに、同じ長テブルを、筋向ふの椅子に倚つて、翌日の一面記事を書いてゐた墨川は、その書き終つた原稿を編輯長の前に置きに行つた。

特にこれを注意深い目で見てゐる川田には、いつもながら、墨川の態度が小憎らしく思へた。如何にも無雜作で、何も云はずにおツかぶせるやうな態度だ。東京では如何に有名な文士であつたにしろ、本社の社員となつた以上は、社員並みにしてゐればいい。毎日出勤もして來ないで、來れば、遲くからのツそりやつて來て、のツそりと早く歸つてしまう。

『あの態度を見い、僕等のいただく編輯長の威嚴をぶち毀してをる』と、私かに憤慨した。

墨川はそんなこととも知らず、わが席に返つたが、けふの用事は濟んだので、直ぐ硯箱をテブルの引き出しにしまひ、かたはらの中央公論を片手にして立ちあがつた。これでいやな大阪市中から離れられると思ふと、氣分がすツと輕くなつたので、つい、あたまに殘つてゐる今の人の氣焔話しに對し、からかつて見る氣になり、

『川田君。』渠は立つたまま聲をかけ、『その附けの中へ僕は御馳走に這入れなかつたのです、ね。』
『いや、どうも。』わざと笑つてちよツと云ひよどんだが、渠は編輯長が端の、皆を見通す席から、にこ〳〵笑つてるその顏を瞥見して、直ぐそれと墨川の言葉との間に何かの電氣でもかよつてはしないかと考へた。そして突然の發言者の冷やかさうな笑ひ顏を再び見た時は、自分のは眞顏になつてゐた。こんなに金を使つて、その折角の結果を、この人一人の爲めにぶち毀されたら、堪つたものではないと云ふことが胸に浮んだのである。『實は、あなたもお招きしたかつたのですが、御存じの通り薄給者のことですから』と、その跡を云ひかけたが、言葉に出ないであたまをさげた。
その樣子がおかしかつたので、見てゐたもの等はわツと笑つた。
『僕にもその御挨拶だけでも頂戴したかつたです、ね』と、別列のテブルを支配する新社會部長もからかつた。
『いや、どうも。』川田は片手を後頭部にかけ、後ろを向いてその方を見た。
『をしいことをしました、ね。』から輕く受け流した墨川に向ひ、編輯長はその時聲をかけ、渠の出した原稿中の不審を聽いた。渠はそのそばへ行つて、別に不審でも何でもない、その通りでいいのだと說明した。
『瀧さん。』川田は行かうとした墨川を呼びとめ、『わたしもお伴致しませうか？』

『ぢやア、御一緒に、どうせ、同じ道ですから。』

『けふは、わたしも早歸りのでける番ですから』と、編輯長を初め、皆にも、氣を兼るに及ばない日だと云ふことを注意させ、渠も急いで硯箱をしまつた。そして大きな風呂敷包みにした本をかかへて、急がしさうに立ちあがりながら、『おさしつかえがなければ、どうです、わたしの家で一つ、黑白の戰爭でもして下さつたら。』

『いや、そんな御心配をかけるつもりで云つたのぢやアないのですよ。』墨川は跡をも振り向かず編輯室をはしご段の方へ行つた。

社員どもは、いつもの通り、墨川の早歸りを羨ましさうに目をそば立ゐてゝた中を、川田は皆に云ひにくさうに挨拶をしてちよか／＼と歩き出し、編輯長のそばでは、特にあたまを下げた。すると、渠は、『おれも行きてい、なア』と、微笑した。

『僕等にばかりこないな氣兼をさせて』と思ふと、川田には社の改革以前の、勝手が出來た時の樂であつたことが思ひ出され、新らしい編輯長を初め、二三の東京下りが如何にも憎いのである。墨川の後について段を下だりながらも、考へた、『こないな奴よりや、おれの方が新聞記者としては數年の長者ではないか？』

何げなくふり返つた墨川は、川田のおもさうに、幅ツ廣くかかへてゐる風呂敷包みを見て、

『大きな物ぢやアありませんか？』
『全でポンチ畫でしやうが、な。』川田はふとつたからだを出口の石段の上につッ立たせ、洋服の腕と股とを擴げて見せた。
『書物らしいですが——？』と、墨川は右の手をふところ手して歩きながら。
『なんの、わたし共の讀むやうな物は碌な物ぢやありません。』
『何です？』
『大阪城史に老子講義なんて云ふものでして、お話しにやなりません。』
『大阪城史は絶版とかで、僕も先日調べることがあつて、社から某代議士の所有のを借りて貰ひました。』
『惜しい書物ですから、なア。わたしもこれは鹿田からちよッと借つて來たので、なか〳〵安月給取りではええ物が買へませんわい。』
『お互ひですよ。』
二人が社を出た時、入れちがひに社長が車で門を這入つた。
『どうも、をかしいです、な。』川田は小頸をかしげて、『この頃、社長の顏が青い——また、やり過ぎか、な？』

『僕は今氣が付きませんでした。』

『なんの、あの人も持つて生れた病ひか、至つて好きな方ですから、な。』

『さうですか、ね――僕は餘り話しをする機さへ拵らへたことがないのです。社に熱心なのか、熱心でないのか――あれぢやア、下で長く勤めやうとする人達にやア働き甲斐がないでせう。』

『如何にも、お說の通りで。わたし共のやうな雜兵は二面に屬してをりながら、一面にも、經濟面にも、こきつかはれて、その上、原稿を書きッぱなしも同前ですから、なア――もツとも、たまには、あれはどうであつた、これはかうだろと云ふても吳れますので、多少は雜兵どもの奬勵にはなりますが、な。』

『無論、俗物の注意は、あつても無くツてもいいやうな、俗受け專門の空談には向き易いから』と云つてやりたかつたのであるが、墨川はさう明らさまに出なかつた。そして相手が毎日得意になつて書きつづけてゐる寄せ集めの記事、『難波雲雀』をさしたつもりで、『君の第一面にお書きになつてるのは別ですよ。今日までの新聞の型から云へば、ああ云ふのは閑話として最も喜ばれますから、ね。』

『東京の事情は知りませんが、大阪では、まア、あんな物でせう、な――六ケしいことを云へと云ふなら、わたしも坊主のあがりですから、お經の講釋でも何でもやりますし、また經濟面專門に決めて吳れたら、それ一方の筆を執りますが、な、讀者と云ふお客さんがお客さんですから、なア――』

『然し』と云ひながら[illegible]
く經濟記事には、經濟的知識も觀察もまことに貧弱で困るとその方の部長がこぼしてゐたのを思ひ出した。それから僅かに言葉を改めて『然し、ね、僕は感じてゐますが、ね、諸君は大阪人若しくは大阪永住の人々でありながら、大阪人の根本精神を見てやらず、大阪人と云ふものを餘りにあたまから見くびツてやアしないでせうか？』

『なんの、矢張り、金と女です。昨日の紙上にあなたの一理ある御卓説もありましたが、大阪人士はとても金と女以外のことは分りません。その證據は、現に、わたしの書いてをります難波雲雀です。あないな拙いものですが、――拙いのは、無學文盲の情けないところで、止むを得ませんが、――會社、銀行の內幕から花柳社會のことまでを、おもしろをかしく雜話的に書いてさいをれば、雲雀は明日また何を書くだらうと云ふて待ち受けてをります。新聞の讀者などはあまいものです、なア。』

『然し、あまいと見るのも程度があると思ひますが――』

『そこで、たまには、漢詩や俳句の議論をして、ちよツとぴりりとしたところを見せてをりますが、この方がわたしの本職と云ふてもええわけですが――』

『成るほど、ね、君はさう云ふ方に大分御素養があるやうです、ね。』

『わたしなどは、あなたのやうに外國語はさツぱり分らん蠻的ですから、まア、せめても漢文がいの

『さうです、ね。』と答へた切り、墨川は口をつぐんで、車内のほこりだらけの空氣に眉をひそめた。
市內電車を箕有電軌會社の前で降り、郊外電車の構內に這入ると、とまつてゐる車臺はなかつた。
墨川は酒機嫌の男女五六名をさけて、切符賣り場の後ろにあたるプラトフオムをあちこちと步いてゐると、川田はそのそばに立つてゐて、
『けふ一日ぐらゐおさしつかえはないでせう。どうぞわたしの家へ來て下さい、久し振りで一番、勝負をやりませう。』
『然しけふは失敬しませう、直きに晚飯ですから。』
『飯ぐらゐの御心配には及びませんよ、總菜ですが、間に合はせます。』
『どう致しまして、また今度いい時間にお邪魔しませう。』
『なんの、御遠慮にや及びません、わい。』川田はおもたさうに本包みをかかへてる方の肩をゆすつて、
もう、相手が承知したものと思つた。
墨川は『時事』の夕刊が來たのを一枚買つてから、電車に乘つた。すると、向ふ側のシイトから二人に大阪言葉で挨拶したものがある。墨川はけふに限り、何だか特にいやな氣がした、如何に同じ社の人だとは云へ、自分の隣りにかけた川田などと同一の新聞記者であると思はれることを。
北野を過ぎ、新淀川の停留所に近づいた時、川田はさきに立つて、促した。

『さア、まゐりませう。』
『けふは失敬しませう。』墨川は動かなかつた。
『さうおッしやらないで、どうぞ――そのつもりで御同伴したのですから。』
『新淀川で御座います、お降りの方はどうぞお早く。』車掌がかう叫ぶと同時に、川田は墨川の手を取らないばかりにして、とう／＼渠を立ちあがらせた。
　電車が眞ッ直ぐに長い鐵橋の上にがう／＼と音を立て初めた頃、二人は踏み切りを渡つて、中土手の上を川上の方に向つた。左方の川中には、眞ン中に一直線の水路を殘して、青い草が一面に萠え出てゐるのが見える。その上に蓙や赤い白い毛布やを敷いて、二三組の、男女入りまじりの群れの、まだ遊び足りないのがわい／＼と騒いでゐる。
『あれが大阪の特色です。』川田は斷定的な口調で云つた。
『あんなことは東京にでもあります。』墨川は冷やかに笑ひながらかう答へて、向ふ島や上野の花盛り時を想像した。
『さうですか、なア――それにしても、どこか違たとこがありませんか？』
『さア。』墨川はちよツと云ひ淀んだ。と云ふのは、相手がまた例の『金と女』を云ひ出すつもりだらうと豫想したからである。わざとそら惚けてやれと思つて、『強ひて云へば、赤いふんどしを出して、け

ち臭い辨當持參のことでせうか？』

『それがです、な、』川田は待ち受けてゐたやうに、『矢張り、色ツぽいのと經濟的から來るのです。大阪の空氣は、すべての家庭の內部までも、女でなけりや金、色でなけりや喰ひ氣です、それが如何にも祕密的で、如何にもけち臭い。』

『そりやア大阪に限りますまい。』

『けれども』と、ます〳〵乘り氣になり、『から云ふ點は大阪が一番ひどい。』

『無論、ひどいでせう。いそがしい商都でもあり、生產地でもあるのだから、一方に經濟的な念が發達し、他の一方に手ツ取り早い歡樂を追ふ習慣が普及したのは、當然のことでせう。が、そんな空氣の中には、また一種の爛熟した、云はば、デカダン的な、內察的に云へば、最もいい、賴母しい精神が醱酵してゐる筈でせう。僕は思つてます、また昨日も書きましたが、君等は大阪の外形にばかりなづんでゐないで、から云ふ精神をよくおびき出してやる必要があるでせう。』

『お說も惡いことではないですが、實際は先づ駄目でせう、な――どうぞ、こちらへ。』

川田はさきに立つて、橋を渡つた。そして外堤防に添つて少し行くと、渠の家であつた。

下の二間のちらかつてるのを見通して二階へあがると、四疊半の一室だ。おもて窓の障子を明け放つと、中土手の靑い草に向ふ。

『いいところです、ね』と、墨川が無器用なお世辭を云つて、少しは心をやはらげた。
『これだけが御馳走です、な、それに、あなたのところよりも社に近いので。』
『僕も近頃』と、手すりによつて外をのぞきながら『今のところは空氣がいい代り、餘り遠いので、少しいやになつて來たのです。』
『けれども、あなたは毎日出社なさらんのですから。』
『それは當初の約束がさうなつてゐて、毎日は出社しないでもいいからと云ふのであつたのですから、ね。』から云つて、墨川は、川田等の不斷反對してゐると聽く自分の出勤問題を、それとなく、辯明するにいい時機を得たと思つた。『それにしても、住まひが遠いと、電車に乘りさへすりやア僅か三十分ですが、實際遠いと、なほ更ら億劫になつて、ね。』
『………』川田は何を云やがると云はないばかりにむツとして、ちよつと顏をほてらせた。そしてたださへ怠りがちな出勤を、如何に編輯長と私通的な特約があるからとて、自分のやうに毎日ちやんと午前十時から出て、午後六時まで殘る勉强家の前で、億劫とはどうしたと叫びたかつた。が、それをぴく／＼動く太肉の腕や膝に堪へて、窓のそばを離れ、『ちよッと失敬します、衣物に着かへますから。』
渠は心で『構ふものか』と言つて、無遠慮に洋服の上下を脱いだ。そしてそれを釘にかけてゐる時、

墨川も窓を離れ、出されてあつた座蒲團の上に坐わつた。そして見るともなく、主人が別な釘から綰入れを取りはづして、これを垢じみたメリヤスシャツや下ばきの上へあふつたのを見ては、何だかむさい空氣が自分の鼻を突くやうに思はれて、自然と、外の方を向かずにはゐられなかつた。

そこへ細君が茶を運んで來た。が、その所天よりもふけた姿を一見して、墨川は、心に、直ぐそれを再現する時、また、むさい空氣と下のちらかり方とを聯想した。

はしご段のところからは、鼻を垂らした子供が一人のぞいてゐた。子供嫌ひの墨川には、これも一しほいやであつた。

『あツちやへ行とれ、行とれ！』から、子供を叱り付けながら、川田は黑い兵兒帶を結び終はり、また萬筋の木綿羽織を引ツかけ、細君に『夕方になると、まだ寒い、なア』と云ひながら、客と相對した。そしてなほ羽織の編み紐の白いのを結びながら、『薄給者の住まひも一度御覽になつて置いてもええでせう、まア、かうしたものですから。』

『いや、どう致しまして？』と受けて見たが、墨川は、つく〴〵、こんな人と大して違ひのない俸給で、新聞社の内幕を知らなかつたのが落ち度とは云へ、東京からわざ〳〵やつて來たのを、如何にも自分の恥辱だと思へた。

川田は、先づ、うれしさうに、自分の持つて來た包みを明けた。

『大坂城史は御覧になつたのです、な。この佐藤楚材の老子講義六卷はまだわたしも讀んでをりませんから借つてまゐりましたが、ちよつとえゝと云ふ評判です。』
『さうですか、ね？』墨川は、手渡しせられた一冊を、ただおつき合ひに明けて見た。
『楚材は清朝史略をも書いてをりまして、ちよつと學者です。』
『僕は名を聽いたことがありませんでした。』
『さうでせう、な、あなたは外國語の方ですから。』
『然し老子や莊子などは、僕も一種の哲學としての方面から、多少は調べてゐます。』
『あなたはまださうでせうが、新たに東京から來られた○○君などは、英語雜誌の飜譯はでけるか知りませんが、この方は全く駄目です、な。』
『さあ、ね――』
『この肉蒲團はどうです？』一しほにこ〱して『社長にちよつとお上手を云ふて、貰て來たのですが、な、句點と圈點とを打つてから、社長に一遍見せよおもて、半分ばかりやつて見ました、わい。』
『そりやア、おもしろいでせう、僕も讀んだことは一度ありますが――』
『社長と來ては、またお話しにならんほど好きですから、な。』そこへ鹽せんべいを五六枚入れた菓子皿を持つて來た細君が、にやりと笑つたのを見て、『愚妻などは、社長と聽けば、仲間が來る度にこの

方の話ですから、顔も知らんのに何でもさうだとおもて、如何にも分りが早いのです。』
『そないなこと、おまへんが、な。』所天を上向きに見たが、お白粉のない痩せ顔の額に二三筋の太い年皺を見せた。せめて、薄い化粧でもしてゐればいゝのにと思はれて、墨川はこの夫人の所天にまでも一層同情がなくなつた。
が、川田はそんなことを夢にも推察が出來ず、
『と云ふても、わたしとても、女と金より外に樂しみはありません、生れは北陸ですが、もう、大阪人も同前ですから、なア。』
『君は石川縣の人ですと、ね。』
『さうですが、な――まア、一番初めませうか？　やがてまづい飯が出ますから。』
かう云つて川田は碁盤を持つて來て、二人の間に据ゑた。そして直ぐ黑の石をちやら／＼させながら、細君に向ひ、
『きのふの話は、なア、けふ〇〇さんに會ふて引き受けて來ました。』
『さよか？』
『お禮はなんぼや云ふたけれど、あなたのことですから、お禮なんぞ入りませんと云ふて置いたぞ――その實』と、墨川に向き直り、『こつちやは成るべく御出欲しいのですから、な。』

『そりやア、お互ひに、ね。』薬も細君の顔を見て微笑した。
『わたし共は内職をせんと、とても、社からいただく金だけでは暮しが立ちません。』
『僕でも、無論のことです。』
『さア』と、川田は右手に一つ石を取つたが、『けふは一つ白を取り返したいものです、なア』と云つて、坐つてはみ出さうに太い兩膝の上に兩手を置いて、盤を見つめた。
『なか〳〵渡しませんよ。』
黑一、白一――すてぜりふと共に進んだ。その間に、川田は計略深く、話しを編輯長の方へ持つて行つて、編輯長に對する墨川の惡口か弱點かをおびき出さうとしたが、墨川はその手には乘らなかつた。そして、最初は墨川の勝ちであつた。そして二回目に薬が負けた時、酒が出た。
『おもな肴が鹽鮭の煮たのでは、とてもお口に合ひますまいが、薄給者の身ですから、どうぞ惡からず』と、川田は斷つた。
『僕は喰ひ物にやア好き嫌ひがないのです。』から答へて、遠慮なく箸を運んだ墨川の正直な態度を、川田は却つて氣味惡く思ひ取つて、わざと當て付けにさうしてゐるのではないかと云ふまはり氣を起した。
で、猪口を交換し合つてる間にも、度々薄給者を繰り返した。これがまた正直な墨川の氣を惡くし

たので、早く酒を切りあげさせた。それに、どうせ勝負をするなら、勝つてやらうと云ふ考へもあつたので、二人とも醉つてしまはないやうに注意してゐた。

『それでは、飯に致しませうか』と云ふことになつたが、川田だけは飯の代りに餅の燒いたのへ鹽をかけ、それを湯づけにして喰つた。そしてその說明に據ると、渠は餅が好きであるのみならず、この方がうまく、且、この米の高い時にずつと經濟的だとのこと。

『そりやア僕も一度やつて見てもいゝです、ね』と、墨川は本氣で云つた。が、主人はそれを冷かしと見て、にが笑ひをして、

『あなた方には、とても、お口に合ひますまい。』

そして墨川が勝負に負かされて歸る時、

『今度は僕の方へ來給へ、かたきを打ちますから』と云ふと、川田はいやに堅くなり、

『實は、一度お伺ひする筈ですが、あなたと違ひ、電車賃が要りますので、な。』

『そりやア、どうして?』

『あなたのパスは全線通用のちやさうですが、わたしのはこゝまでのより出して呉れません。』

『どうした區別でせう、ね』と云ひながら、はしご段を降りた。

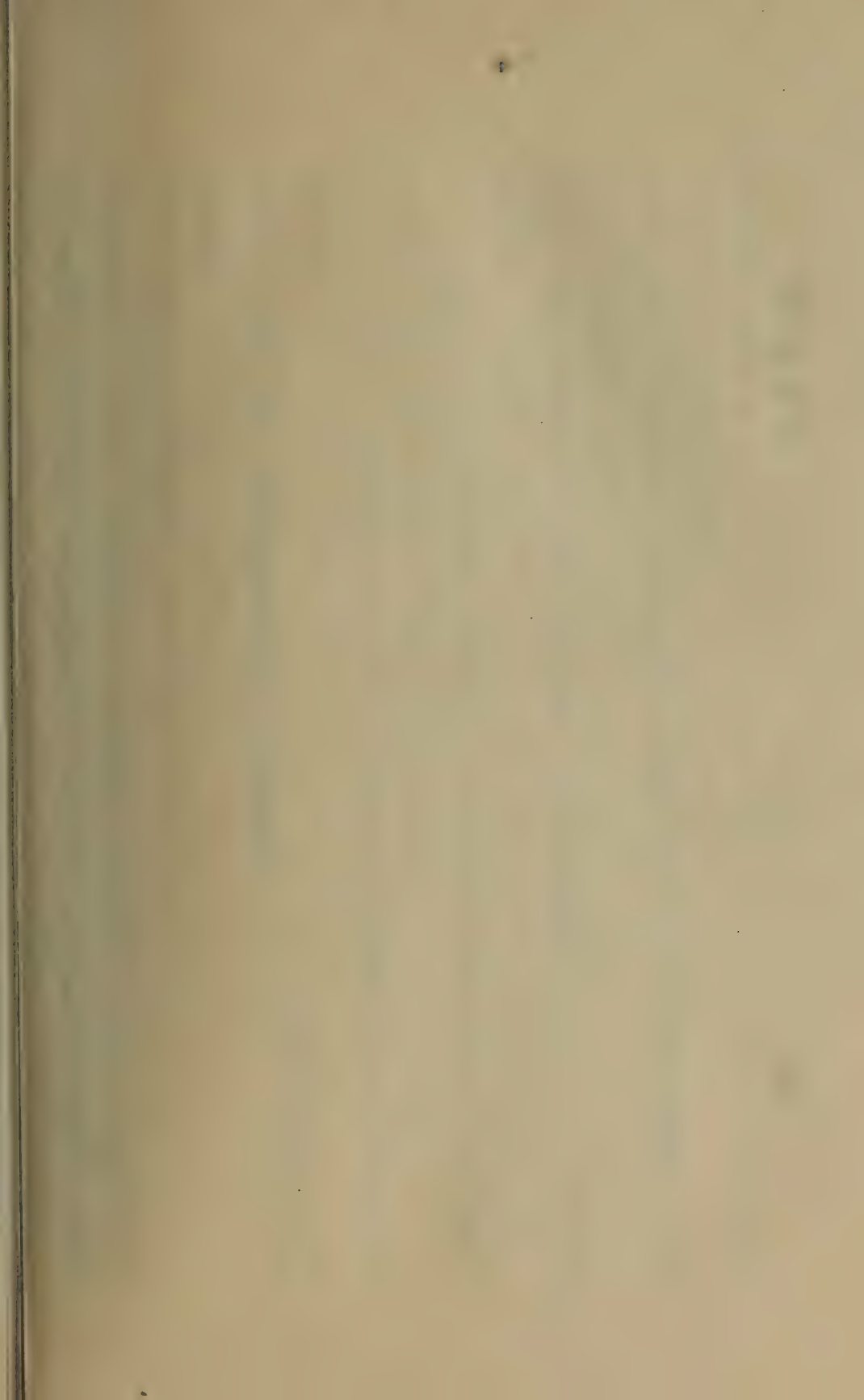
『暗うなりましたから、提燈をお貸し申しませう。』

『なアに、大丈夫です。まだ宵のうちですもの。』
『まア、持つてお行きやす、あぶのおまツさかひ、な。』細君の聲が下の次ぎの間から聞えた。
『實は、お返しするのが面倒ですから。』
『なんの、停留所から直きです。』
ふり切るやうにして、外の闇に出たのが、却つて墨川には、明るくても、何となくけち〳〵した座敷よりも、すツとした。渠が足さぐりで小川の方の土手に添つて四五歩進んだ時、川田は親切らしく追ツかけて行つて、無理に提燈を渡した。そして別れを告げるが早いか、後ろを向いてぺろりと舌でも出したいやうな氣になつた。
格子戸の輪鍵をおろして座敷にあがり、まだあがり口に立つてゐた細君に向ひ、うれしさうに、
『これで、もう、天下に恐るべきものはない。一度あゝして置けば、なア。』
『墨川〳〵と、〇〇はんなどが評判しやはる東京のお方は、あの人だツか？』
『ちよツと氣の知れん人や――わざとうまさうに鹽鮭を喰うてしもたけれど、いやなら殘して置いてもえゝやないか？　子供にでもやるのに。』
『あんたも行て、今度、御ツつオに呼ばれて來やはれ、な。』
『阿呆云ふな』飛んでもないことをと云ふ顏をして、『一度あゝして置いて、こツちやが行かなんだら、

二度と來やせんのや。』
『ほたら、こッちやが損や、なア。』
『僅かの損で、大けい得が行くのや。あれで墨川の機嫌は取つてあるし、二度とは交際費が入らん。』
『あんたも經濟上手や、なア。』
『あないな奴と年中交際したら溜らへんやないか？　この安い月給取りで、あいつのやうに東京の雜誌内職もでけんのに。』
『そやさかい、こッちやで仰山内職してお吳れやす――あのお方も、氣さくなやうやけれど、なア。』
『何で氣さくや――喰へるものか？　女子などに分りますかい？』
『もう、それでも』と、細君は遠くへ心をやつてゐる目付きをして、『停留所へ行きやはりましたかい、なア？』
『ふん』と、鼻で受けて、『電車にでも引かれて、死んでしもたらえゝ――提燈一つぐらゐは何でもない、さ。』
『ほんまに、けたいな人や、なア、あんたは！』細君はあきれたやう。
『おれはこれでも○○社中での策士やないか？』かう云つて、川田は奥へ足を運んだ。子供の床が取つてある室の、臺所の土間に添つた板の間に、まださつきの膳や二本の燗德利が置いてあるのを見て、

歸つた墨川その人に對するやうな實感が再發した。そして、いつも股火をするのを細君にいましめられる長火鉢のうへにあがり、四つ這ひになり、相も變らず、藥罐のかゝつてゐる上から股火をした。
そして、跡へ附いて來た細君の、
『またか』と云はないばかりの顏を橫に見あげて、
『見てゐなさい、今に、あいつを社から追ひ出してやるから。』

――(大正二年一月)――

小僧

二月十日・東京下目黑より。

——君。僕が大阪から歸住してから、もう、おほかた半歳になります。その間に、まだ大した仕事も致しませんが、無事だけは無事です。それに、あの『小僧』ですね、君も知つてゐる——あの犬もなか〱健在でした。近頃、ちよつとをかしくなつたまでは。

御存じの通り、あれは、僕が池田の寓居にゐた時、二三軒隣りの人の飼犬でしたが、僕のところへばかり來て、どうしても歸りませんでした。持ち主が取りに來たので返してやつても、また〱こちらへやつて來て歸りませんでした。僕の方でも、その都度可愛さが增して行くし、飼ひ犬を一匹失つてゐた時でしたから、とう〱持ち主に相談して、こちらへ貰つてしまふことにしたのです。

その當時は、ほんの、赤ん坊で、散歩に出る時について來ましても、猪名川土堤をかけあがることが出來ず。まだ、人の足並みに從ふだけの力もなく、途中でへたばツてしまつて、きやん〱泣いたことがあります。

それが段々發育して吠えることをおぼえてからは、家族以外のものには、誰れにでもよく吠え付きました。そして池田の新市街には一匹恐ろしい犬がゐるとまで云はれました。が、東京へ來てからは、さう／＼人に吠えません、目黑は、東京郊外のうちでも、古いまゝの田舍のありさまを最も多く保存してゐるところですが、それでも、池田の新市街のやうに閑靜ではありません。殊に、目黑不動と云ふ參詣所があつて、土曜、日曜には、隨分人が出ます。從つて、小僧も人を見慣れて來たのでしよう。つい、近頃までは、あつたかい日には、いつも、門のそとにゐて、門外の大通りを通る人々にも、門内に這入る人々にも、郵便屋――これに吠えつくのが缺點ですが――を除いては、決して無意味には吠えませんでした。

まだひどい目に會つたことがないと見え、どんな大きな同類に出會つても、しつ尾をさげたことがありません。そして少しでも向ふが壓迫的態度に出ると、夢中になつた腕白子供の如く一生懸命に奇聲を舉げて齒をむき出しますから、大抵の犬はびつくりして逃げてしまひます。てく／＼歩いてゐる後ろから石でも投げられますと、『うーツ』とうなつて振り返りますが、顏色を變へて逃げる子供を見ては、追つかけもせずに、また悠々と自分の道を行きます。また、多くのいたづらツ兒どもが遊んでゐる間から、石を投げられると、默つて先づその石のにほひをかいでから、おそろしい目を投げた方に向け、そのにほひをたよりにして投げたものに追ひかゝるやうです。

そんなことを見るに付け、うちの十五歳になる下女も『なか〳〵利口な犬だ』と云つて、小僧を可愛がるやうになりました。來た初めは、その癖、犬嫌ひであつたやうでしたが。そしてかの女は犬の名をもつとハイカラのにして吳れろと賴みます。近處には、エスとか、ポスとか、ジョンとか云ふのがゐるからでしよう。且、かの女が一度往來で『小僧、小僧』と犬を呼んだのを、そばを通つた酒屋が自分を呼んだのだと思つて怒つたさうです。

無論、犬に記憶力がなければ、一たび出た以上家へ歸つて來ることもありますまい。また、主人や家族を知つてることもありますまい。が、動物でも特別な場合をも記憶することが出來るものと見えます。或時、ぼんやりして道に落ちてゐる物をかいでゐた時、一丁ほど隔たつてゐる所の米屋の若い衆が米の袋を脊負つて自轉車で通りました。不意を喰らつてよけるひまもなかつたと見え、鼻さきを怪我させられました。すると、直ぐ『この野郞』と云つた風にどなつて飛びかゝりましたが、自轉車は速いので、その跡を一丁ばかりも吠えつゝ走りました。やがて、歸つて來て、鼻のさきの血をぺろぺろなめてゐました。が、それからと云ふものは、その若い衆がどんな違つた姿をしてゐても、見ると、きまつて非常な勢ひで嚙み付きに行きます。餘ほど癪にさわつたものと見えます。

近處に同じやうに小僧と呼ばれ、同じやうに茶色で、同じやうな大きさで同じ月に生れた同類がゐます。魚屋の飼ひ犬で、それと僕の小僧とは仲が惡いのです。仲が惡いと云ふよりも、向ふがこちら

に向つては珍らしいほどおとなしく、珍らしいほど弱いので、僕のがいゝ氣になつていぢめるのでしよう。ところが、向ふの小僧が或時二匹のブルドグ――これは管理者の不注意から、危険にもその家を逃げ出したのですが――に嚙み殺されかけた爲め、病院へつれて行かれました。その時、僕の小僧は、どう云ふつもりか、そばでわん／＼吠えてゐましたが、無事でした。僕がブルドグをあり合はせた眞木割りで撲りつけ、魚屋の小僧を助けたので、僕の小僧は一時その魚屋の店で歡迎せられてゐましたが、病人その物が直つて歸つて來ると、また喧嘩をしますから、矢張り、元の通り憎まれてゐます。

僕の小僧の日課を云ふと、第一は、何でも午前の五六時頃に牛乳の配達屋が來るのを待ち受けて、それと一緒に目黑附近をまはるやうです。朝早く、きツと一回はまはつて來ると近處の友人が云ふのも、牛乳屋と一緒に行くのでしよう。新聞屋が來ると、自己の防衞だなどと云つて石を投げますから、今でも吠え付くのがやみませんが、この牛乳屋には早くから馴れてゐます。何でも、時々パンを貰つたり、牛乳を少し飲ませて貰つたりするのです。でも、目黑坂の下までしかついて行きませんでした。ところが、いつのまにか渠は內職をおぼえ、その牛乳屋の車に綱で結はへ付けられ、その車をうんうん引ツ張つて行くのです。そして賣れ殘りの牛乳を甞めさせて貰つてゐるのが分りました。が、それでも、たまには、何も貰はないですツぽかされてゐるやうです。

その引ツ返して來る時も、方々のごみ溜めをあさりつゝ歸るのですが、歸ると、下女から朝飯を喰はせて貰ひます。それから、隣りの醫者のモクと遊びます。モクは右の目が見えません。これは、その藥局生が蚤を取つてやると云つてからだにリゾールとかをつけたのが、あやまつて目に這入つてつぶれてしまつたのです。小僧から云ふと、六七ケ月ばかりの若輩で、生れてまだ四ケ月にしかなりません。それを小僧は頻りにいぢめてましたが、この頃では、なか〳〵仲よしになつて、夜となく、晝となく、自分の寢床を分けてやつて、一緒に僕の家の緣の下で眠ります。モクも亦、その友情に感じてか、どうしてか分りませんが、僕等が小僧の頸輪の『警察署屆けズミ』と刻したのがはづれたのを直してなどゐるのでも、いぢめてゐるとでも思ふのだらう、はたからわん〳〵云つて怒ります。

それでも、食事となると、小僧は家の物を少しもモクに與へません。モクは止むを得ず、たゞそれを見てゐるだけで、隣りから飼ひ主の聲がかゝるのを待つて、そツちへ飛んで行きます。モクから見ると、小僧はそれ相應に大人じみてゐて――元は、赤ん坊の時から、君も知つてる通りのがつ〳〵屋であつたが――いつのまにか、おあづけを命ぜられたと同じ樣子をすることをおぼえました。食物をやる時でも、自分の皿に悉く移されてしまうまで、靜かにそばで待つてゐます。僕等もそれを不思議がつてゐましたが、僕等が知らない間に下女がさう仕つけたのださうです。

小僧は、まだちひさかつた時、池田の電車道のそばで、小猫を――小犬と思ひ違へたのでしようが

――丁寧になめてやつてゐるのを僕が見たことがあります。が、けふこの頃では、また、兎も見ても、決して追ッかけません。これは僕のばかりではなく、モクもさうです。隣りには、試驗用の爲め一匹の兎――脊の黑いの――を庭に放ち飼ひにしてあります。それをですが、との犬どもはそばで見ても、決して追ひません。おまけに、兎が人參の葉ツぱを喰はせて貰つてゐるのを見て犬どもまでが、それに習つてゐます。或日、下女の珍らしがつた注進によつて、井戸端にうッちやらかしてある人參葉を小僧が喰つたのを發見しましたが、その後またモクも喰ふのを發見し、それから類推して、最後に、兩犬とも兎の眞似をしてゐるのだと云ふことが分つたのです。尤も僕のは、去年の夏、葡萄の實を棄てゝ置けば喰ひませんでしたが、僕等が喰つてゐるのを見ると、一緒になつて甘さうに喰ひました。

或犬になると、紫の風呂敷を頸に結はへ付けられますと、直ぐてく〳〵歩いて、定つた牛肉屋へ行き、店に人が出てゐない時は、ちやんとかしこまつてわん〳〵と吠えます。そして出て來た人に風呂敷を取らせ、それに肉をつつんで、頸に結はへ返して貰ふと、またてく〳〵とわき目もふらず歸つて來て、そのお使ひ賃に、肉の數片を貰ふ事があります。が、僕等の家は忙しいので、そんなことどころか、ちん〳〵やおあづけでさへ敎へませんでした。が、小僧は、妙に、蜜蜂の巣箱を番することをおぼえました。

家族のものが巣箱のそばへ行つても何とも云ひませんが、見慣れない客がその巣門でものぞくと、

小僧は決して許しません。そして裏口から庭へ這入つて來るものに對しては、先づ巢箱を警戒致します。

大阪から僕が一人の少年を――養蜂のことを見習はせる爲め――つれて歸つたのは、君も御承知のことですが、あれが不良少年の一種であつたには困りました。うそを云ふことが平氣である上に、主人の命に反いて、家を拔け出し、市中を金もなしに夜中までぶらつき、公園のロハ臺で大膽にも夜を明かしたりなどしたのです。それが或夜午前二時頃に歸宅して來まして、裏木戶の錠前をこぢあけようとしました。僕の家では、その夜、渠を警戒してわざとそこへ錠をおろしたのです。餘りづう〳〵しい少年なので、叱りつけて翌日は歸國させることにしたのを、また拔けて出て十二時まで待つても歸らなかつたから。

小僧は氣狂ひのやうに吠えてゐますから、渠には少年の低い聲は聽えないやうでしたが、僕は小說の原稿に向つてまだ起きてゐましたので、渠が犬に向つて內證らしく何を云つてゐるかが分りました。

『小僧――小僧――おれだ――おれだ。』

けれども、小僧はなほ吠えつゞけました。可愛さうだと思つたので、僕は緣がはの戶を一枚あけて、『誰れだ』と聲をかけました。犬がちよこ〳〵と僕に近づくと同時に、下駄の音が逃げて行きました。

この少年が呼び寄せられて初めて池田の宅へ訪ねて來た時、僕が玄關の障子を明けると、渠は吠えつ

く小僧に臍の下あたりを嚙まれてゐるところでした。嚙むと云つても、無論小僧のは本統に嚙むのではありません。たゞおどしつける爲めのやうに、衣物を喰はへて引つ張るくらゐなことです。それが、こちらへまゐつてからは、下女でなければこの少年に、大抵、食物を出して貰ふのでしたから、馴れつこになつて、而も少しのろい動作の子であつたのに乘じて、正面から、その兩肩の上にまで小僧はよく飛び付きました。

『こら〳〵』と叱るものゝ、碌に機敏なはね付け方もしないので、少年の衣物はいつも泥だらけでした。渠は犬を餘り好きでもなかつたやうでしたが、小僧は誰れよりも一番に渠になついてゐました。

渠が歸國してからは、下女に最もよくなついてゐます。食物を與へる役目を受け持つてゐるからでしよう。また、この小い下女も、犬のいろんな動作を注意するに從ひ、『赤ん坊、赤ん坊』と云つて、また『小僧の大僧』と云つて、大きくなつたのを、可愛がつて相手にしてゐます。天下に、かの女の云ひたなり放題になるのは、この無邪氣な小僧だけでしようから。そして、毎日のやりに、かの女は犬に關する新らしい報告を僕等に致します。

次ぎに渠は僕の妻になついてゐます。かの女が湯に行かうとする時でも、ちやんと門の方へまはつて待つてゐて、前から飛びつかうと致します。すると、かの女は後ろを向きます。小僧はまた前へまわりますから、また後ろを向きます。こんなことを二三度して見せると、やがて渠はさきに立つて脇

けて行くさうです。僕も飛び付きかけられるとその手をやるやうになりましたが、僕には大抵飛び付きません。ひどく叱り付けますから。

それに、僕が手ぬぐひと石鹸箱とを持つて出る時、縁ばなでこちらを見るだけで、もう、ついて來ないやうになりました。が、マントを着て出ると渠は必らず庭を急いで出ます。そして僕に先立つて進みます。その進む時にも、順序があつて、きつと先づ、路ばたに落ちてゐる物を口に拾つてからそれを喰はへたまゝ、前足を二つ揃へて、面白さうに、ぴよん〳〵と跳んで行きます。その喰はへる物が木統に落ちてゐる棒切れとか、繩などであればいゝのですが、時には、隣りの米屋で出し忘れてゐる竹掃木などを運びます。『あれ〳〵』と云はれたり、僕も亦『こら〳〵』と叱り付けますと、それを放しますが、今度はまたお向ふの庭鳥を追ッかけます。それでも、近處に飼つてゐる鵞鳥だけは、恐れてか、それとも見慣れたのか、少しもいぢめようとはしません。喰はへるものがないと、それでも何かして見せなければ主人に濟まないと云ふかの如く、門外を流れる溝の水を飲んで見せます。

そして、僕を目黑坂上なる停車場まで送つて來ます。もとは、僕と一緒にそこの數多い石段を下だり、プラットフオムまでもついて來て、たまには電車の跡を影の見えなくなるまで追ッかけて來ることもありましたが、この頃では、深くても切符を買ふところ迄で、大抵は停車場の入り口まで來ると、けろりとした風で歸つて行きます。最も、僕等に對してばかりでなく、僕の家へ來たお客さんなら、

いつもこゝまで送つて行きます。或時など、音樂家の友人を獨りで送つて行く途中で、餘りはね步いた爲め、深い溝の中へ落ち込み、僅かに引きあげられて助かりました。

然し小い時、渠も君などと一緒に猪名川の網打ちに行つたので、水は少しも恐れないで、獨りででも川の中をぼちや／＼步いたり、泳いだりしてゐたのは君も御承知の通りです。こちらへ來てからも、暑かつた間は、よく家鴨を追つて目黑川を渡りました。遠くから、僕が何をしてゐるのかと見てゐるのに氣が付かず、彼が何もゐない川の中へ下りて行くのを僕は見たことがありますが、腹のつかるだけの深みへ出てから、ぺろ／＼と流れる水をなめてゐました。この犬だけは恐水病にはなるまいと思つてゐるのです。

この冬は彼に最初の冬でした。去年の暮に、人間にも意外と思はれるほど早く大雪が降りました。その降り初めに、晝も暗いほど曇つたおほ空から、白い物がひら／＼と至るところに落ちて來るのを見て、小僧は頻りに吠えてゐました。が、段々增して來た積雪と寒氣とに溜らなくなつたと見え、寢床に圓まつたまゝ、ぶる／＼顫えてどこへも出ませんでした。却つてちんころの方が『犬の足跡梅の花』とか云つて、よく雪の上を面白がつて跳び步くものです。小僧は非常な寒がりです。日あたりのいゝ緣の下に置いてあるにも拘らず、その寢床をいつのまにか外へ引き出します。その癖夜寒くなつても、引き入れることは知りませんので、その寒いまゝに寢てゐます。

犬の獨りで出歩く範圍は意外に廣いものです。僕の家から目黒不動までは三丁ばかりあります。その境内で小僧をたまに見付けることを驚いてゐましたところが、なかなかそれどころぢやアないのです。坂上を二十丁も市中へ這入つた町々の横丁を小僧がぶらついてゐたのを見た人もあります。それに、よく不慣れな道をたどり歸つたと思はれることがあります。

例の不良少年ですね、あれが裏木戸を明けようとして逃げた夜、その殘りの時間を不動のお堂内に眠つてゐたのださうです。僕は、彼が獨りで泥棒でもしたら困るし、また何々組など云ふ惡團體の仲間に這入つて惡いことをさせられるやうになつても可哀さうだと思つたから、その前々日に、警察署に訴へ、見付かり次第とめて置いて貰ふ手筈にしてありました。と云ふのはらそを云つて、一夜を淺草あたりの交番で眠らせて貰つたことがあると白狀してゐたからです。

ところが、朝早く、目黒駐在所の巡査が、渠を不動の境内からつれて來て呉れましたので、巡査と僕とで懇々說き聽かせて、直ぐ歸國させることにしました。それにしても、僕にも現金がなかつたので、僕が神田の或書店から受け取るべき原稿料のうちから、大阪までの旅費を前借りする手紙をつけて追ツ放しました。わざと電車賃も渡しませんでした。それまでにも、度々金なしに、一日一晩も廣い市中をぶらついたのですから。その代り、僕の手紙が役に立てば、もう、歸宅する必要はないから、直ぐ新橋へ行つて汽車に乘れと命じました。

『出る前に小僧をつないで置け』と注意しましたが、渠は――故意にでしよう――さう致してなかつたのです。跡で僕等が氣付いた時には、犬は影も形も見えませんでした。
『飽くまでふて腐つた少年だ』と云ひ合ひましても、跡の祭りで仕やうがなかつたのです。一方では、少年が汽車に乘れたか、どうかと云ふ心配がありました。他の一方では、小僧が神田の町の眞ン中で――少年は、金が取れたら、電車で新橋へ向つたに相違ないから――うツちやらかされて、歩いたこともない辻々をどうしてゐるだらうと云ふ懸念がありました。

家を午前十一時に、いづれも飯を喰はないで、出ました。少年の方は、いよ〳〵歸れることになれば、どうとも自分でやれるに定つてましたが、小僧の方は畜生です。幸ひ、拾ひあげて呉れる家でもあればいゝが、さもなくば野犬になつてしまうより仕かたがないかも知れませんでした。單純な田舍道なら知らず、込み入つた市中を二三里も迷ひ込んでは、とても、歸つて來られるものとは思はれませんでした。

殘された家族三人は、午後二三時頃まで、いろんな評議を空しく致してゐました。それから、僕も用事があつて、市中へ出ましたが、芝や銀座や丸の內を通つた時、電車の窓から注意して、小僧に會ひでもしないかとながめることを怠りませんでした。
『あの太い書生め、きツと僕等に對する復讐の爲めに、僕等の愛犬を誘拐して行つたのに相違ない』

と考へないわけに行かなかつたのです。そして、また金が受け取れたら、一度歸つて來て、それから出發させるやうに書生をして置かなかつたのが、何と云つても、こちらの落ち度だと殘念がつて見ました。

僕は、行つたさきで、込み入つた話の爲めに、犬のことなどは全く忘れてしまひましたが、夜の十時頃歸宅すると、それでも、幸ひに犬は歸つてゐました。

『小伜が歸つてますよ』と妻が出しぬけに嬉しさうな報告をしたので、僕もおのづから喜ばないわけに行かなかつた。妻と一緒に僕を出迎へた下女は、また、少し明いた雨戸のところへ行つて犬の寢床をのぞいた。今、飯をやつたところで、いつもの分量よりも澤山やつたに拘らず、なほ要求するやうな風をするので、また足してやると、それをもがつ〳〵、がつ〳〵喰つてしまつたさうです。

『餘ツぽどお腹が減つてたのでしようよ。』

『小伜、歸つたか』と、僕もそこの緣がはにしやがんだ。

渠は緣の下を飛び出し、片足を緣にかけて嬉しさうな樣子をしたが、心配をしつゞけて來た人間のやうに、その息づかひが烈しく整つてゐなかつた。

『餘ツぽど苦心して、たどつて來たに相違ない、さ。』かう云つた僕の心には東京市中にある辻々全體の、少くとも、その半數を、あわてふためいてにほつて步く一匹の犬の姿が浮んだ。

それは僕等の東京歸住後まだ一ヶ月ほどしか經たなかつた時のことでした。その時から、また小僧は大きくなりました。智慧も付きました。本年になつて警察署へ屆けました文面には、種類、洋犬、形狀、大、毛色、茶褐色、年齡明治四十五年四月生。特色としては、背中の毛が短く揃つてゐること。目が茶色で鋭いこと。ふさ〱した尾が天向きであること。鼻筋に少しばかり白い毛が通つて、鼻さきが黑いこと。耳が垂れてゐること。胸から腹並に尾の裏にかけて白い毛があること。足の爪がすべて黑いこと。などと擧げました。且、この頃では、毛色につやが出て、背中の毛が縮れて來たのは、獵犬の本性を現はして來たのださうです。

果は蜂の巢箱を番することをおぼえたばかりではなく井戸端の物を守ります。この井戸は僕の家と隣りの米屋とで使ふことになつてゐます。畜生の情けなさには、この區別が付かないので、何でも自分の家の物だと思ひ込み、隣りのかみさんが大根桶を洗つたのをさげて行かうとしても、吠えついて、なか〱渡しません。

それから、小僧は子供の時から、喰ひ殘しの肉や骨をしまつて置くことをしてゐました。もう、澤山と思ふ時は、今でも殘つた物をくわへて行つて、安全だと思ふところの土を堀つて、そこに埋めて置きます。そして舌で口をぬぐつて知らない顏をしてゐますが、それをそばで人でも犬でも見てゐると怒ります。隣りのモクがそれを遠くから見てゐた時などは、隱れてゐて、小僧が去つた跡でこツそ

りそこへ行つて、それでも、モクはおづ〳〵しながら喰べてしまひます。

モクは片目が見えないで視線が平均しないせいか、それともまだ世慣れないせいか、大變物に恐れます。小僧と一緒に僕に從つて來る時も、平地のはづれまでは來ますが、停車場のある高臺へかゝると、その坂を向ふから下りて來る人々を見て逃げます。それも一二度はやり過してからまたあがつて來ますが、再び人に逢ふと、今度は一目散にかけ降ります。そして坂下でこちらを羨ましさうにたゞ見あげてゐます。小僧はそれを來るか、來るかと待つてますが、一向に來ないので、うツちやらかして登つて行きます。

この頃、梅が――目黑は梅の咲くのが他の郊外より半ケ月は早いさうです――一二輪づゝ咲き出しましたので、蜂群はどの箱のも毎日のやうに出遊し出しました。モクはそれを見る毎に口を明いて嚙まうと致しますが、小僧は恐れて逃げるやうに、逃げるやうにと致します。と云ふのは、一度、巢箱の前であばれてゐた時、内から二三匹飛び出して來て、鼻さきをいやと云ふほど刺された經驗があるからです。その時の樣子は見てゐた僕等に如何にもをかしかつたのです。くしやみをしたり、兩手で鼻の上をこすつたりしてゐましたが、跡で見てやつたら、二ケ所ふくれあがつてゐました。

それからと云ふもの、小僧は巢箱の前を通らないで、いつも緣の下を拔けて裏口の方へ行きます。

『いやアい、いやアい、刺されたものだから』と、下女は可愛味を籠めて渠を冷かしたりします。僕

の家の縁は奥の[illegible]やうになりました。[illegible]

ゐる時など、あたまが縁の裏に當つて、その度毎にこつ〱音をさせてゐます。そしてそれが小僧のゐることを知る一つの合圖になつてゐます。

近處に晝間ぼやがあつて、これはそとに現はれずに濟んでしまひました。ランプを落して燃えあがつたのが、障子へ移つたくらゐで消えたのです。そのまた近處の蕎麥屋で一杯機嫌にやつてゐた消防夫の一人が、醉つたまぎれに、火事と聽いて、その實際も確めずに高い半鐘ばしごに登りまして、頻りにじやん〱鳴らせてゐました。下から、もう、濟んだからやめろと云つても一向に聞えませんでした。そこを僕の家の下女が小僧をつれて通りかゝりましたが、小僧は――これも亦『やめろ』と云ふやうに――上を向いて吠えてゐたさうです。その後は、半鐘が鳴る度に、渠はどこかと云ふ樣子をして吠えます。

或時など、所澤から試驗中の飛行船が飛んで來ました。そして空中に非常な音をさせてゐました。小僧は頻りに小首を傾げてゐましたが、その實物を見るが早いか、上を向いてわん〱叫び出したので、戸外に出てその飛行船を見てゐたものをすべて笑はせました。

畜生だと思つてゐればこそ、僕等は犬のちよツとした記憶をも、また僅かの智慧をも、何だか非常に意味があるやうに珍らしがるのでしようか？　それにしても、人間がとても及ぶことが出來ない

のは、犬の鋭敏な嗅覺と本能的直感でしよう。犬が闇夜にも目が見えると云ふのは、必らずしも視覺だけの働きとは云へないやうです。視覺・聽覺・嗅覺等が本能的に一つとなつて開らけるのではないかと思はれます。前に云つた米屋の若い衆ですね、あれが如何に小僧のかたきであつたにしたところが、二十間も三十間も離れたところから、闇の中を透かして見えるわけがないでしよう。それが、然し或夜、僕を驚かせたことがあります。

　如何にも暗い晩でした。僕が小僧をつれて坂の上の郵便箱へ原稿を出しに行つた時、渠は坂の中腹まで來ると、俄かに下の方を向いて非常なけはひで吠え出しました。僕は先づこれは尋常一樣の事件ではないと感づきました。下の方には、二十間餘も離れて一つ提灯の光が見えた。人の歩いてゐるにしては、餘りに速やかな進みで進んで來て、突然坂下でちよツと止まつたかと思ふと、直ぐまた上の方へその火が動いて來ます。すると、小僧は一層ひどい勢ひで吠えます。やがて自轉車を押して登つて來る人間であるのが分つた時、僕にも――まだ五七間はさきのところからだが――米屋のぬか臭いにほひがしたやうに思はれました。と同時に、犬の意味を僕も嗅ぎつけることが出來ました。そばまで來たので、小僧がその人に嚙み付かうとあせつてるのを叱りながら、僕は云ひました。

『君かいこの犬の鼻さきを二十日ほど以前に怪我させたと云ふのは？』

『へい』と、渠は正直におづ〳〵して答へた。

一ちやア、吠えられるのも仕方がないから[illegible]僕は現場を見てゐなかつたが吠えた[illegible]のは[illegible]
と、君は畜生だと思つて、わざとよけもしないで自轉車を走らせたさうだ。』
『以後は注意しますが、かう目のかたきにされては私もやり切れません。』
『そりやア、さうだらう。さーさァ、行き給へ』と云つて、僕は調子ッ外れにあせる犬を押さへてゐた。
米屋の若い衆が坂の上へ達して、ひらりとまた自轉車に乘つたのを見てから、僕は小僧を手放すと、わん〳〵〳〵とつゞけさまに吠えつゝ、その跡を追ツかけて行つた。
物好きな人があつて、夜中によく渠をからかひますので、垣根の中から向きになつて吠えますが、しまひには、えゝ！面倒だと云つたやうに、一聲調子ッぱづれの吠え方をして引ツ込みます。時によると、また、聲もせず、音もせず、ゐるかゐないか分らないことがあります。僕が小說の原稿に向つて夜を二三時頃まで起きてゐるのは珍らしくありませんが、一緒に起きて隣室にゐる妻に向つて、『今夜は小僧がゐないやうだ、ね』などゝ聲をかけますと、小僧は直ぐ聽きつけて、起きあがるのでしよう。あたまを緣の裏に當てる音がしまして、それから蚤でもかくのか、ちやら〳〵と金の頸輪の鳴るのが聞えます。そしてそれが聞えないと、僕等は何だか心寂しいやうな氣になります。
この小僧がです、ね、十日程前に、渠の一生を殆ど滅ぼすやうな粗相を致しました。前に申しまし

た別な小僧の方の家、乃ち、魚屋のかみさんのおやぢに噛み付いて、腿のあたりに牙齒の跡を二つ印したのです。それも無理はなかつたと辯解してやればやれないこともありません。その前夜、刺し身の三皿入れて來たおかもちを、おやぢが取りに來て、勝手口から出ようとするところへ、小僧が外から歸つて來たので、てツきり家の物をかツさらつて行く奴だと思ひ込んで、突然吠え付きました。人並みの人間なら、まだしも、大したこともなく追つ拂つたでしようが、おやぢと云ふのはよほど〳〵の足も碌に利かないぢイさんでしたから、ひツくり返つておかもちの中の皿をぶツ毀すと同時に、噛まれてしまつたのです。

それは、然し僕の方から醫者を賴んで手當を施したし、傷も何事もなく濟んでしまひました。ところが、その魚屋の小僧がまた人を噛んだと云つて訴へられ、そこの主人が呼び出された時、それはうちの犬ではありません、岩野さんの犬が實はこれ〳〵でと答へたさうです。で、僕の方のもその筋からよこした獸醫の診斷を受けました。そして幸ひに、『狂犬にあらず』の保證は付いたが、同時に『但し注意を要す』の附け加へが祟りとなり、僕も警察署まで呼び出されました。魚屋は五十錢の罰金に反抗したとかで、却つて三圓を取られたさうですが、僕はたゞ畜犬の拘束を命ぜられただけでした。

それでも小僧を永久同樣に鎖でつないで置くのは、人間にすれば、終身懲役と變はりはないのだから、さうまで苦める罪でもなからうとだけは抗議し、以後外出させる時は口輪をはめることにして、

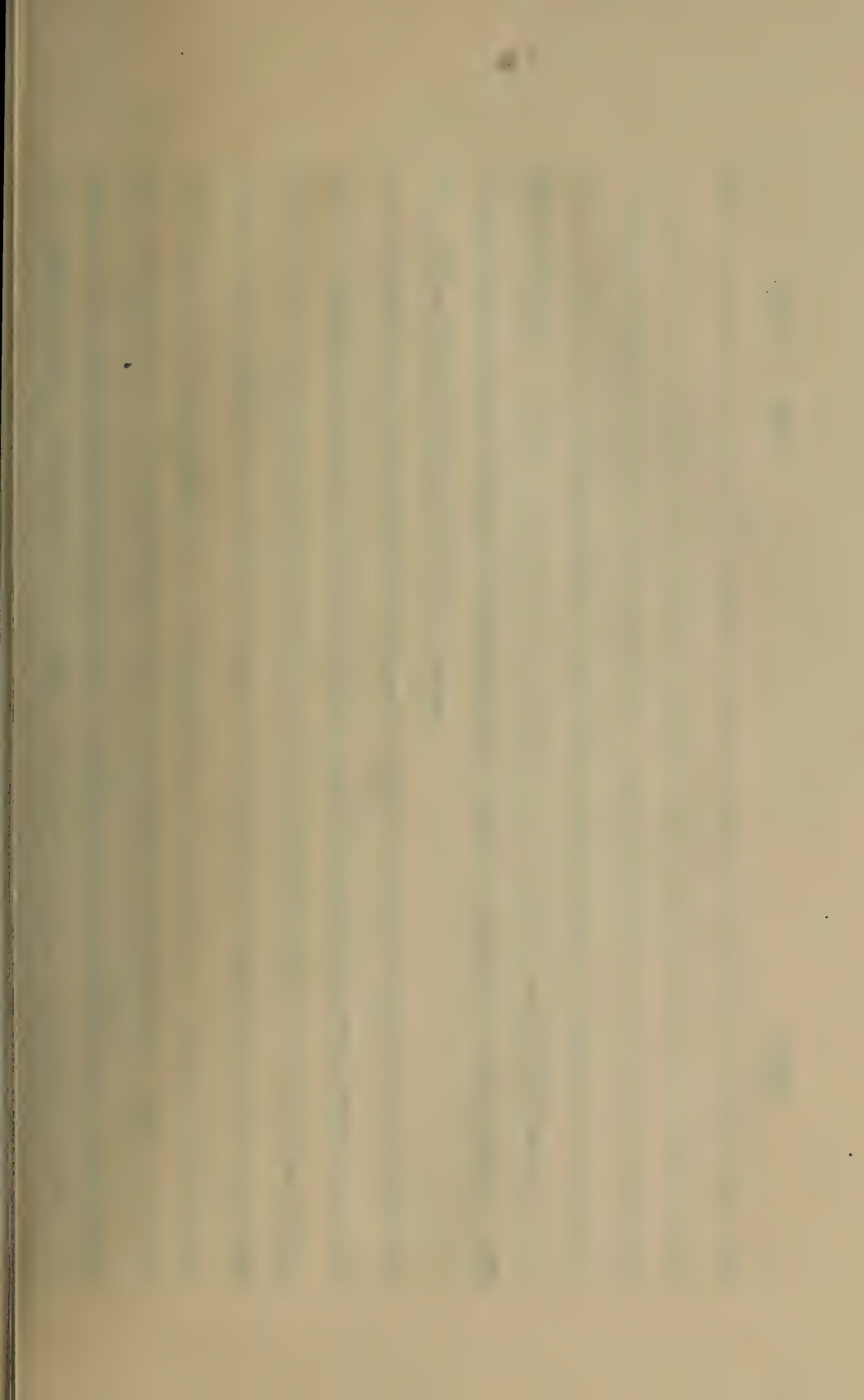
受け書を認めました。その前後からして、僕等も小僧の餘りに吠え過ぎるのが氣になつてゐたので犬小屋の古があつたのを一圓ばかりで買つて來て、それに成るべくつないで置くやうにしてゐたのですが、口輪をはめられたり、つながれたりするので、その當座はなに氣が荒くなり、小屋の入り口をがりがり嚙み崩してしまひました。

今でも、知つてる近處の子供に棒をふりあげられても、直ぐころりと横になつてあやまつてるのを見ると、まさか、狂犬になつたとは思はれません、それに口輪があれば嚙まうツたツて嚙めませんが、どうも、吠え付き方がをかしいやうにも思ふのです。去年狂犬が二匹出來、他の犬をまでも嚙んで狂犬にした歴史があつて、この近處は水に何かさうした黴菌(はいきん)でもゐるのぢやアないかと云ふ評判もあるので、僕等も無論小僧の狀態には注意してゐます。

もう、午前の三時で、十日が十一日になりましたが、昨夜から、渠は珍らしく一聲もしないで、寢てゐるやうです。

——(大正二年二月)——

政吉の被り物

一

『君等は一體』と、政吉はいやにひねくれたまなこを据えて、自分の身に涌き立つ血をおさへ切つた顏で、皆をにらんだ、『おれを歡迎會にかこつけて呼んで置いて、皆でなぶり物にする氣か？』

『そないなことあらへんが、な。』不思議さうにだが、この家の主人小池も怒りに受けて答へた。

『けれども、そんならなぜ皆でおれをいぢめるやうなことをするんだ？』

『何がいぢめるんや？』

『でも、おれの心持ちにまで干涉して、無理に、わざ〳〵おれの被り物を取れなんて、情けないこと云はんかてえいやないか？』

『室內で帽子を取るのんは當前や。』

『當前やない！』斯う、自分は云ひ切つてしまつた。

『君は妙な男になつた、なア。』杉本と云ふのがまだ常ならぬ赤みを顏に帶びて來て、『元はそないでも

なかつたやないか――二三年會はんうちに、どないしたんや、來る早々喧嘩をふッかけるなんぞ！』
『誰れが喧嘩をふッかけた？　誰れが妙な男になつた？――君等こそ、てんごうに、入らん干渉をするんやないか？』
『えらさうに云ひなはんな。』杉本はます〳〵負けない勢ひを見せて、『東京へ行て法律を勉強してたかて、そない友人をふみ付けにして貰はんでもえい！』
『誰れがふみ付けにした？　誰れが友人をふみ付けにした？』自分の人を睨む目も熱してゐるやうに思へた。
『玉非はん。』から優しくだが、別に遠慮のない聲で呼びかけたのは、先刻から、他の男連と一緒にこの云ひ合ひを見つめてゐた初野と云ふ女である。『そないおそろしい目せんかて、ようおまんが、な。』
『おそろしい目などはしたうもない、さ。』少し勢ひが挫けて、ちらとかの女の方を見たが、二三年前までのことを思ひ出して、その方に目をとどめるのが氣の毒のやうにもなり、また懷かしいやうにも思はれた。そして直ぐまた杉本に向ひ、訴へるやうな聲で、『君等が久し振りの歡迎會をして呉れると云ふのんで、僕は君等の友情にあまへ、喜んで出席したんやないか？』
『そやさかい』と、却つてこの方にうち解ける樣子も見えず、『先づ、君の帽子を取り給へ、禮を缺くやないか？』

『こりや今云ふ通り帽子やないぞ。』

『あたまに被つてるなら、帽子やないか？』

『帽子とは違とる。』

『無論、シルクハットや山高帽子ではない、さ――そないな茶人か宗匠はんの被るやうなもの！』

『ぷツ』と、初野はこらへ兼たと云ふ風で吹き出した。これが政吉の胸には何よりも情けなく響いて、張り詰めてゐた氣が全くゆるんでしまつた。そして樂しんで來た友情を語り合へるものは、この涼しい新座敷、――改築したと聽いただけで、今初めて招ぜられたこの廣い前栽の見える席――には、一人もゐないのだと云ふ覺悟を固めた。

茶人か宗匠はん！　そんなことを云はれるだけでも、自分の何たる變化であらう！　渠は遲まきながら、親の許可を得て、やツと年來の望みを實行することができて、東京にのぼり司法官になる目的て日本大學へ這入つた。思ひ思はれた初野と、こちらから進んで手を切つたのも、狹い田舍で親の八百屋の手傳ひをして、自分の若い血を朽ちて行かせるのがいやであつたからである。

それがもう直きに卒業と云ふところで、妙な病氣に罹つた。いつも行く床屋で散髮をして二三日立つてから、あたまのかゆいところを搔いてゐると、ぼろぼろと髪の毛が一時にかたまつて落ちた。その拔け跡へ指をやつて見ると、五厘錢大の禿げができてゐる。さア、大變なものに取ツつかれたのち

やアないかと心配して、醫者へも行き、藥　塗つた。けれども、藥も塗らない部分からして、毎日のやうに禿げて行つた。

ぽつり――ぽろり――さすがは、秋の木の葉の段々と枯れて落ちるやう。あの時の心細さは、今思ひ出しても、ぞッとする。

卒業後に對する若く燃え立つ望みは、その度、その度に、毛のかたまりとなつて拔けて行き、世間に向ける喜ばしかるべき顔は、時々刻々に、失望の影と變じて机の上の小鏡に寫つた。

いよいよ丸坊主になつてしまつた跡でも考へた。自分の罪でないとしても、故郷の父母、兄弟、友人等にどんな顔が合はされよう？　とうとう、それが爲めに、母の死に目にも會ひに歸らなかつた。

そして、妹から片言のやうな手紙を度々よこし、

『どうぞ、兄さん、歸つておくれやす。母が死なはつてから、お父さんが困つてやはりますさかい。』

などとあつたけれども、どうしても歸る氣になれず。その癖、學校へも出ず、下宿屋のわが室にばかりとぢ籠つてゐた。

ふと、それでも、歸郷する氣になつたのは、この被り物を被ることを思ひ付いたからである。醫者の云ふところに據れば、あたまの毛穴と云ふ毛穴が全くなくなつてしまへば、病菌も亦それでなくなつたわけだから、もう、このうへ坊主になりやうもないし、家族や友人に傳染する恐れもないと。そ

れをせめてもの心頼みとして世間へは顔出しをさせて貰へようし、被り物を被つてさへゐれば、さう見ツともないこともなからうと考へた。

その被り物を、今、友人どもはわざわざ取れと強ひるのである。

『おれが妙なあたまになつてゐるのは、皆知つてる筈やないか』と、初手は訴へて見たい氣でもあつた。東京から度々よこした友人への手紙には、明けツ放しにこのことをも語つて、『天無情、おれは禿頭病に犯された』とも、『とうとう臺灣坊主のおかみ削りを頂戴して、すツころ坊主になつたぞ』とも云つた。渠は、もう、これ以上の恥ぢはかきたくなかつた。

一座のものは皆氣まづさうに無言になつた。

『ほたら、おれは歸る！』政吉は突然立ちあがつて、廊下へ出た。それを後ろから追ツかけて來たのは初野である、――

『どこへ行きなはる、玉井はん？』

『どこもここもあるもんか、僕には落ちつく世界がないんだ。』

『まア、お坐わんなはれ』と、かの女はおし付けるやうに云つた。

『…………』渠はふり返つてかの女に恨めしさうな顏を向けてゐたが、かの女の目がうるみを帶びて來たのを見て、少し心が和らいだ。

『そないおこらんでもえいやないか、君の爲めに僕等は集つてるんやで。』杉本はかう云つて、やや落ち付いたやうすであつた。

『おこりやへんけれどなア――』渠も不承不承にほほゑみながら、氣を取り直した。

『久し振りの會合やないか』と、この家の主人も渠をなだめるやうに、『まア平和に進行したら、どうや？　ほて、また、君の留守に造りかへたこの前栽もよく見て貰ひたいのやさかい、なア。』

『僕もえい庭園がでけたとおもたけれど――けれど、なア――』

政吉は昔から友人の前ど親しみを表する爲めのしるしであるかのやう爲慣れてゐた通り、自分の手を持つてあたまを掻かうとしたが、直ぐ毛のないのに氣が付いて苦笑にまぎらせた。そしてまだぐづぐづして、座に返らうとしなかつた。

初野も立つたまま、そのあり樣をぢツと見てゐたが、

『まア、お坐わりやしな。』かの女が先づ元の通りに腰をおろして、『あんただけはようおまんが、な、帽――かぶり物取らんかて、――なア、小池はん。』

『そやそや、今晩の女王沼田孃の撤回意見に皆も同意しまツさ』と答へて、小池も政吉に向ひ、『兎も角も、撤回發議者のはたに坐わり給へ――てんで無關係であつた人でもおまへんが、な。』

『およしやす、小池はん！』かの女は晴ればれとした聲であつた。

『は、は、はア』と、默つてゐた仲間が笑つた。

『關係、無關係など云ふことはやめてもらを。』から眞面目腐つて語りながら、政吉は初野の後ろをまはつて、小池と他の男との間に腰をおろした。そしてかの女がこちらを見つめる視線を避けるやうにして、この隣りの室まで明けツ放した十疊の座敷の床の間に生けてある芍藥や、山水の掛け軸をちよツと見てから、庭の植ゑ込みの間に見える石燈籠に目を放つた。が、何となく自分の眼の筋が眼球の奥の方へ引ツ張られてゐる氣がした。でもツとうち解けるのが義務であると思つて、主人に向ひ、『えい庭ができた、なア――涼しいやないか？』

『うん、少しやようなつただろ。』小池は得意さうににこついて、『おやぢは何事にも無頓着やつたさかい、なア。』

『君のおやぢは、けれど、なかなか面白い人であつた、さ――極磊落で、なア。』

『あんた、よう知つてなはつたんだツか』と、初野は眞ツ直ぐに向いてこちらに話しかけた。

『そりや知るも知らんもない、さ。』渠はその方をじろりと見たが、それツ切り、また小池に、

『僕等は子供の時、一緒に、ようあたまを撫でてもろたやないか？』

『そや、なア――』と答へた小池が何となく行き詰まつてるやうすを、こちらは直ぐそれと感づいたので、

『おたまと云や』と、わざと平氣らしく、『僕がこないな病氣にとツつかれたんを見せたら、びツくりしただろに、なア。』
『何を云ふても、もう、死んでしもたものはあかん。』
『ほんまに、なア、この二三年の間に、君はおやぢを失ひ、僕は母を失うてしもた。』
『年寄りはをつても、邪魔になるばかりやさかい、なア。』
『そりやそうと、君の細君は達者か？』
『相變らず寢てて、なア。』
『君が達者過ぎるんやないか？』
『馬鹿な！』
『玉井君。』杉本は少し座を乘り出して、『僕も行きがかり上妙なことを云ふて失敬したが、跡に思ひの殘らんやうに申しわけしとく必要があると思ふ、僕は皆の代表者として君の怒りに觸れたんやさかい。』
『そないなこと、どうでもえいやないか――僕が惡かつた。あやまる！』から云つて、政吉は輕くあたまを下げて見せたが、杉本なんかどうでもいいと云ふ反感がこの家の主人ばかりの尊敬に變じて、小池が元の通りに自分をあしらつて吳れる嬉しさが、私かに、涙にまでにじみ出た。

『君にばかりそない云はれても困りまッさ。實は、この會の發起人は小池君と僕で、沼田孃を初め、皆に贊成してもろたんやけれど、君が今回は帽子――でなければ――被り物を取らんと云ふのが一問題になつたんや。』

『こりや僕の習慣やで。』

『まア、聽き給へ――習慣なら習慣でもえい、もう、沼田君に許されたんやさかい。けれど、なア、初めは、僕も君の爲めに心配をしたんやで――』

『そりや、濟まん、なア。』

『杉本君は實際』と、小池が口を添へて、『どないしよ知らん云ふてたのんや。』

『僕は考へたで、君は小池君が一家の主人になつてから初めての會見やさかい、主人とは友人の間やさかいまアどうでもえいとしても、ここのうちの人の氣を惡うしたらようないおもて、なア。』

『では』と、政吉はまた少し顏いろを變へて、『僕が來なんだらよかつたのんや。』

『そないなことあらへんけれど、なア、それで僕は小池君に相談して見たら、小池君も云ふには、婦人も一人來ることやし、皆の前で禮を缺くやうなことがあつては、交際上、君の將來の爲めにならんちうて、なア。』

『禮を缺くなんて、そないなお考へなら――』

『そやけど、なア——』
『僕もただそれだけの經過を述べて置くんだッせ——間違ひのないやうに。』
『そや〳〵』と、小池も皆の荒びた感情をもみ消すやうにして、杉本に、『もう、そろ〳〵初めよかい？』
『それがえい、なア。』
『僕も分つた、分つた』と、政吉は固くなつてゐたからだを強いてゆるめた。けれども、まだ氣になつて仕方がないので、てれ隱しに一つ坐わり直し『お客に呼ばれて、妙な喧嘩になりかけたのは實以つて僕が惡かつた。諸君もどうぞ氣を惡うせんやうに賴んます。』
『無論だッさ』と、別な男が一人で皆を代表したやうに答へた。
『けれど、何だて、被り物を家の中で被つてる例は仰山あるぞ——僕も、實は、茶人や宗匠のから思ひ付いたんやけど、な、西洋の婦人なんぞ、あの大けい奴を被つて、教會にも這入つて來るし、な、芝居なんぞでもそのままやで。』
『うん、そりやさうや、な』と、杉本が受けた。『例がないことやないさかい——』
『そないな話やめて、もう、ごッつオにしまほか？』初野はかう云つて、杉本と幹事らしい顏を見合

せた。

政吉は、この時、初めてかの女を横目ながらぢッと見る餘地ができた。そしてあの元とは違つたやうに大人びてさツぱりしたやうな、またどことなくべた／＼したやうな態度で、現在は、自分の代りに誰れを捕へてゐるのだらうかと云ふことを考へて、多少業が煮える感じをおぼえた。

この歡迎會はどこかの料理屋で、藝者をあげて景氣よくやらうと云ふことであつたのだが、初野が耶蘇教信者だからそんなところへは出席しないと拒んだ。で、小池はかの女の出席するのが、政吉の爲めには、何よりも『ごツつオ』であらうし、まだ皆が會ひたがつてるかの女を逸するのは面白くないと云ふ考へもあつたので、計畫を改めて、ここにしたのであると云ふことは、政吉も前日にきかされて知つてゐた。

さきの關係を小池は一番よく知つてる爲めであらう、こちらとかの女との仲が成るべく元の通りであるが如く取り扱ふやうに努めた。皆の膳が初野の手傳ひで、料理について來た女中一人とで運び出されてからも、正座の隣りへ初野を坐わらせようとして、いやがるのを無理に押して行つたが、かの女はそれを外して、末席の方へ逃げた。そして小池の席から次ぎへ杉本が並んだそのまた次ぎへ坐わつて、

『わしも冷事だツさ』と云つて、動かない。止むを得ないので、小池と杉本とは一席づつ繰りあがつ

になつた。

『小池はんも人が悪い』とむきになつて責めるやうな顔をした。

『………』その様子を見ただけにでも、政吉はまだ頼母しい友人がないでもないわいと云ふやうな心になつた。

酒が廻つて大分調子がついて來てから、義太夫をうなるものやら、やはり唄を歌ふものやらがあつた。風を呼ぶ扇子をそのまま使つて扇舞の眞似をしたものもある。政吉も、皆の席をまはりながら、東京でおぼえた唄などを得意になつて披露した。

『沼田先生、一つ隱し藝をどうぞ』と促したものがある。

『わたし、無藝大食の組だッさ。』

『でも、唱歌なら歌へましよう、學校の先生だッさかい』と、横合ひから一名頓狂に叫んだ。

『そないなもの、こないな席で歌へまツかいな?』

『こないな席とはけしからん。』小池は自家をけなされたと思つたのか、少しその不愉快を、強いて、笑ひにまぎらせながら立つて行つて、『まア、こツちやへおいでやす』と、かの女を後ろから抱き締め、こちらが歌つてるそばへつれて來た。

『………』その頃には、もウ、疾くに電燈がついてゐて、暗やみの中に光る青い木の葉や草葉のみづ

みづしい上から、如何にも涼しい風が這入つて來た。その風に生えぎはの長い後れ毛を靡かせて、ぱツちりした眼の、圓いその顏を政吉にちらと見ると、以前よりも肉が付いて、一しほ女らしいにほひがするやうだ。歌つてゐた端唄をわざと中途でぶツ切つてしまつて、何氣なくよそほつて、『お久しおまん、なア』と云つた。

『ほんまに、なア』と、かの女もはツきりした聲を出した。こちらが待ち受けたほど左ほどに恥かしさうでもない。それが自分には憎らしかつた。

『一杯さし給へな。』小池がかう云つて、からの杯を自分に持たせたのを取つて、自分はそのまま初野に渡した。

『………』初野は飲む眞似だけして、酒を杯洗にあけてから、政吉にもどした。

小池は銚子をこの二人に順番に持たせたのである。そして、

『さア、これで破鏡の歎が再び直つたやうなものや。』

『阿呆らしい！』かう叫んで、かの女は席に立ち返つた。

『僕ら阿呆らしい、なア』と、政吉は坐わつたまま、ふとまた自分の手をあたまへ持つて行きかけたが、中途からおろして、膝の上に兩手を揃へ、そこに力を入れて兩肩を張り、醉つたふりにまぎらせた。胸がかき亂れるやうであつた。自分では、昔の二三度許された肉感と今の弱點あるあたまとが及びも

つかない距離を有するやうに思はれて、新たに初戀の如き心持ちが湧き出て來たのであつた。

友人の間にあつて最もうち解けたやうすを見せる爲め、而も何か物足りない情があるのを私かに呼び招くやうに、自分はそツくりと、そこに仰向けに倒れたが、そのはづみに被り物がゆるくはづれた。で、急いでそれを兩手で押さへて、また起き直した。

その樣子がをかしかつたのだらう、皆は思はず、

『ふ、ふ、ふツ』と吹き出した。

『………』政吉はそれには少しも氣が付かなかつたかの如き振りをして、皆よりも一足さきにそこを出た。

二

夏の夜は、今、人出の盛りだつた。吳服橋の通りは、猪名川へ涼みに行くもの、行つて來たものの往き來で、こんなしみツたれた町にも似合はず、ちよツと賑かに見えた。見なれぬ若い衆どもは、どうせ碌な奴等ではあるまいが、浴衣がけにうちわなど持つて、得意さうに挨拶をかはしなどしてゐる。

道の左右には床几を出して涼んでゐる女も多い。が、そこの娘、ここの後家は誰れそれ、なにがしの持ち物であつたがと云ふやうな記憶が浮んで來た。以前よりはまた一段と妾の數がふえたなぞと、

今しがた、歡迎會の席上で聽いたのが、自分の故郷の不生産的に遊惰で、大して爲すこともなく荒れて行く證據だと思はれた。

『こんなところへ、死んでも、またと歸つて來るのやなかつた。』

政吉は、誰れか知り人に自分の顔を見られないやうにして、こそこそと家路に急いだ。

わが家に近づくに從ひ、僅か四五町のところが、道は段々ときは立つて寂しくなり、明るいのはところどころの氷屋の店だけだと云つてもいい。それがまた、不景氣にあかりが付いてるだけ、それだけ中の薄ぎたないのが目に立つて、喉のかわきを覺えてゐながら、這入つて見る氣になれなかつた。

あをあをした西瓜や胡瓜や、大きな靑唐がらしや菜ツ葉に、水をかけて店さきに並べてあるその奥へ飛び込むやうに這入つてから、林檎を二つ鷲づかみにした。大分老いぼれた父の代理にいつも店をしてゐる弟や、そのそばで何かおしやべりをしてゐた妹などが、あツけに取られて見てゐる横を通つて、何にも云はずばたばたと二階へあがつた。

まだ東京から歸りたてで、机もなく、僅かの書物の整理もできてゐないだだツ廣い二階の、家根裏に對したくすぼつた疊の上へ、渠はそれを自分の望まない運命を宣告したかたきででもあるかのやうに踏んまへて、自分の取り外した被り物をちから一杯に投げつけた。

被り物は堅いふちも張りもないので、ぐぢやぐぢやと疊の上に横たはつた。

そして梁に邪慳に獨坐して、二つの林檎を皮のまま、つづけざまにかぢつてしまつた。そして又下り口から下を向いて、

『お杉、店の葡萄酒を一本持て來い！』何だか、もツと醉つてやりたい。

『まだ飲むんだツか？』妹がから云ひながら、コロプ拔きを添へて持つて來たが、いまだに珍らしさうにじろじろ兄のあたまを見てゐるのが不愉快なので、自分は返事もせず、壜を奪ひ取つた。

『下へ行とれ、行とれ！』

『ほ、ほ、ほ』と笑つた聲が下から聽えた頃、自分は壜から口うつしにごぶごぶやつてゐた。なほ妹の聲で『おじゆツさんがおこらはつた。』

『…………』住職だツて――阿呆！　なかなか醉ひさうでないので、獨りで褥を取つて、蚊屋の中にあふのけになつた。暑苦しいのに追はれて心はまたおのづからあの今夜の明けッ放した座敷へ返つた。

小池はこちらをよこの方へ呼んで云つた。

『君さへ縒りをもどす氣なら、僕が仲に立つてやつてもえいぞ――その方が君も早う身が固まつて、土地の信用がつき易からうで、なア。』

『…………』

『ここは、一つ早うせんと、杉本もおぼし召しがあるやうやさかい。あないな奴に君の昔なじみを渡

さんかてえいやないか？きやつはこの席へも沼田を呼びたう無うたんやし、君に強う當つたのんも、實は、あの女を君に見られる不愉快の報いに外ならんのや。』

『お思召のある方へやつてしもたらえいやないか――僕は、もう、未練なんぞないで、なア』

『君がこの土地にゐ付くとしてもだツか？』

『勿論、なア』と、この場合、どうしても云はずにはゐられないやうな氣がした。

如何にもまづかつた――如何にもあツけないやうだ。仲介に頼むべきものであつたか知らん――？でも――棄てられた身でありながら、平氣でその棄てたものの歡迎會に列席するとは――こちらの姿を見てふき出したぞ――幹事でもないのに幹事氣取りで杉本と並んだのは、二人の仲を見せようとてか？　かの女のおとなびて來て、さツぱりしたやうな、あの樣子――元は、さうとも見えなかつたが――は、ひよツとすると、小池にだけ内心をうち明し、こちらの心を探つて貰つたのか？それにしては、小池の云ひ分が毒性過ぎた――迷つてるのか？こちらへも氣があるやうに優しくしたし、杉本へも亦愛嬌を送つてゐた――

それでも、耶蘇の信者だけに、義理を重んじてゐて――？が、かの女の迷ひの餘地は、もう無い――歸り途が同じ方向なのは、あの二名ばかりで――今夜にも、かの女とあいつの關係が附いてしまつた

て今更らの如く仕合せであつたと、而もほッと息をついたかも知れない。——皆と一緒に玄關まで送つて來た時も、自分はこれを最後の會見だらうとも思つて、皆の見る目も憚らず、ぢッと見あげて見た(多分、目うるんでゐた)にも拘はらず、かの女は皆と同じやうな樣子で、ただ世間並みの『左樣なら』を聽かせた。自分は、水でもあびせかけられたやうに、ぞッとしたのであつた。

『どうせ恥をかくなら、見ず知らずの他人の中がえい——なんでこないなとこへ舞ひもどつて來たのんや?』これぱかりを思ひつめてゐるかと思へば、いつのまにか、まだ初野の一段と肉づいた顏、手——などを自分の肌近く思ひ出してゐる。

自分がこの地でさきに敎會に行き出したのは、實は、初野の姿の出入りするのを見たからである。金曜日の祈禱會に、自分との外に誰れも來なかつた時が二人の話しの初めだ。それから直接に二三度往き來したあげくが、あの川向ふの——溫泉での——あの時から見ると、かの女のからだ付きにも、和らかい物の云ひ振りにも、しツかりした手ごたへが出來たやうで——あの男と手を取り合つて、また橋を渡つたのぢやアないか?——酒にゆるんだ二人の口——麥畑の中を、風に裾を吹かれて、向ふの山まで——溫泉——『あんた、ほんまに愛してて?』十八歲の町娘が、いつのまにか、小學敎員の檢定試驗を受けて、紫紺の行燈ばかまをはいてゐる——色をとこ然たる自分は、忽ち、町役場の戶籍

掛りに變つた――

『どうしても、あの杉本には、渡したくない。』――『まさか、そない俄かに――それとも、ひよツと――?』

刺戟に刺戟が重つた神經の遊離は、自分のつぶつた目の視力を、どこまでも見える底のないところへ運んで行つた。そして眠つたやうな、また眠らなかつたやうな自分のだらけた疲勞は、その實際の手を以つて、腹の上に丸まつたどてらと共に、更けて行く夜の寢苦しさをしツかりと抱いてゐた。

＊　　＊　　＊

『どうしても渡したくない!』この決心を以つて、翌朝はね起きた時に、どろ壁格子の間へ、かツかと照らす太陽の、高い日足の流れが隣りの家根から反射してゐた。

『お住寺さんが朝寢しやはつた』と云ふ妹の冷かしに早速また元氣をうち碎かれてしまつたが、けふは日曜日だと聽いたのを幸ひ、被り物の上にかうもり傘をさしかざして、初野の家を訪づれた。

女に對する昔の元氣や意氣込みは思ひ出にさへ出なかつた。しほしほとして、新町裏のしもた屋格子に手をかけた時は、ぶるぶると顫へた。

『どなた』と云つて、出て來たのはかの女だ。『まア、玉井はん、よんべは、なア――』

『いやこれから――』
『一番はなにわたしとこへ來て呉れはッたの？』
『はア。』
『さう』と、嬉しさうに目を見開いて、『まア、おあがりやし、な。』
政吉は自分の見おぼえがある奥の座敷へ通された。四疊半の間で、直ぐそとは板壁で圍はれた一坪半ほどの庭に、朝顔が四五本女竹にからまされてゐるのに臨んだところを、青い羅紗で蔽はれた小机が占めてゐて、その上には學校の圖書印らしい物が張りつけてある古びた『教育學』や『淑女畫報』が載つてゐる。
『よんべは、おもしろおました、なア。』
『はア、おもしろがした。』
『あれから、直ぐお歸りやして――寄り路せんと？』から云つて、意味ありさうに笑つた。
『無論。』自分は苦笑ひを以つて答へた。
『それでも、なア、あんたも唄が上手になつた。東の都でたんとお仕込みなはつたやろ。』
『そんなことでもせんと、なア。』自分は焼けになつて來たのを察して呉れと云はぬばかり。

『どうせ教會には行きやへんやろ、なア？』
『行たとて、何も役に立たん。』
『こツちやでも、牧師が信者の後家はんとくツつきやはつて、皆が騷動してからは、なア、あまりおもしろうないのだす。』
『然しあんたはまた好きなのがでけまへんか』と、自分は僅かに思ひ切つて聲に出した。
『阿呆らしい！』かの女は高い調子で、あたりかまはず、無邪氣らしく叫んだので、自分はまたしよげた氣味になつた。そして當座のまぎらしに、机の書物の方を見て、
『何を御勉强です？』
『わたし等の』と、かの女も同じ方に向いたが、『讀むのんは、碌なものやおまへんが、な――あんたこそどないおしやした「天下の名判官」は？』
『……………』
この破れた誓ひは、やがて又破れた望みであつた。かの女がこれを蜜の如くあまい口から口に受けた昔のことは忘れたやうに平氣で持ち出したのを、自分は皮肉とも見た。あざけりとも見た。且また、こちらに對する勝利の誇りとも見た。そして隣りの室からかの女の母――これもこちらの仕うちを怒つてるに違ひない――が何かことことやつてる音を聽くと、なほ更らいぢけてしまつて、かの女とさ

し向ひの爲めに私かにまた新らしい戀のほのぼか燃えあがつてゐた[illegible]
かれてしまつた。暫らく返事もできなかつた。
杉本と約束ができたか、どうかと云ふことを第一に確めるつもりであつたのも、そんな勇氣が出なかつた。
徒らに、をんな盛りになつたかの女を向き合つて見ただけで、その家を出たが、『あんたは妙におひねくれやした、なア』と云はれたのを思ひ出して、道々、自分の臺灣坊主が恨めしくて、恨めしくて——『小池はんにお會ひやしたら、よろしう』のことづても、傳へる氣にならないで、直ぐ自分の家へ引ツ歸した。
あんなに一旦きツぱり斷わつたのだから、今更ら小池に仲介を頼みたくもない。よしんば、仲介を頼んでも、たとへかの女が——まだ杉本と約束してないにせよ、——けふ、かの女は少しも杉本のことに云ひ及ばなかつたが、——この變つた人間に再び承諾を與へるか、どうか？まして、何をしていよいよ人間らしく自から獨立するか、まだその當ても付いてゐないとも悶え出した。

三

『また遊びに來てお呉れやす』と云つた言葉につけ込んで、翌日も亦、よささうな時を見計らつて、

初野を尋ねた。

『どうせ、ひまだツさかい、なア。』渠はから自分をも胡魔化して招じられるままにあがつて行つた。

『けふは、ちよツと引けが遲かつたのだツさ。』かの女は半ば解いたはかまの紐を引きずりながら、敷き物を出して、『ちよツと失禮』と引ッ込んだ。

『でも、あんたは仕事がきまつてよろしい。僕も、今度は、この土地の土になるより仕方が無うなつたんやさかい、早う何か見つけまツさ。』

『駄目だッせ、こないな土地』と、隣りの室から、『せめて大阪へでも出んとなア。』

『出たところで、僕のやうなものは、どないせい、駄目や。』

『えらう悲觀しやはる。』

『悲觀もしまツさ』と云つて、かの女の母親が入れ違ひにざるを持つて出て行つたのを思ひ出し、安心して特に哀れツぽく、『罪つくりやさかい、なア。』

『そりやあんたの自業自得や――杉本はんは神戸へ行く云うてやはる。』

『………』ぎツくり胸に來たが、目の前にかの女がゐないのを幸ひに、『あの人はよう來まツか、ここへ？』

『いいえ、ちよツとも。』

『でも、約束がでけたさうやおまへんか?』鎌をかけて見たのである。
『阿呆らしい、そないなこと!』
『へい』と、こちらは舌をぺろり出して喜んだ。
そのうちに、初野は白地の浴衣に着かへて、薄化粧までして出て來た。が、母親が歸つて來た樣子なので、自分はまた眞面目な話に返つた。そして何度でもここへ來られる口實を作る爲めに、準教員でもするから、口を調べて貰つて呉れろと賴んだ。が、心では、杉本の跡に坐わる運動をしようときめたのである。
直ぐその足で小池の家へ行くと、あがるが早いか、
『君はけしからんぞ』と云はれた。
『何がけしからん?』
『實は、今、杉本が歸つたとこやが、なア、君はきのふも、けふも、あの女のとこへ行てて、僕等のとこへは挨拶にも來ん云うて、あいつがぷりぷりおこつてたで。』
『そりや、僕も挨拶に來なんだんは惡かつた、さ――氣分が惡うて、そないな氣になれんのは、君にも察して貰ひたい、うちの妹にまで馬鹿にされるんやさかい、なア。』
『そりや察しるよ。』

『でも、あれのとこへ行たと誰れが云うた？』

『杉本、さ――けふも、あの前を通つたら、君の聲がした云うて、眞ツ赤い氣になつてやつて來たで――あいつも失敬な奴ぢや、君が歸つて來たのんをこはがつて、あの女と一緒にこの土地を逃げようとしてるで。』

『矢ツ張り、何か、なァ』と、思はず口に出たが、それツ切り口をつぐんだ。そして政吉自身の顏が俄かにほてつてゐた。

『君はあないにさツぱりしたこと云うたけれど、矢ツ張り、仲介を賴みに來たんやないか？もう、駄目やで、きまつてて。』

『そないな賴みやない。』かう答へたが、政吉は自分の胸がどぎまぎするのを押さへ切れなかつた。

『ほたら、なぜさう度々あそこへ行くのんや？』

『實は、教員の口があるかおもて、行て見たんや。』

『あないなへぼ教員のとこで分るもんかい？』

『ほたら、君、世話して吳れんか？』

『世話してやるとも！親の店をやらんとしたら、何がえいのんや？』

『實は、それで賴みに來たんやが、な、杉本が神戸へ行く云ふやないか？』

『うん、話がきまつたら、なア、池田町の女王と一緒に。』

『その跡はどうや？』ちよツと夢にも見てゐたことなのだ。

『うん、役場もよからう――もう、二三日できまるだろ、あいつ、急いでるから、なア。』

『賴むで、なア』と云つて、こちらは少し氣が輕くなつたが、一方では、初野と杉本との關係を今夜ぢうにも斷たせなけりやアと、ぢツとしてはゐられなくなつた。

　一杯やつて行けと云はれたのを無理にふり切つて、再び初野のところへ行つて見たが、母が出て、知らない人に對するやうな無愛想で、かの女の留守を告げた。

家で夕飯をやりながらも、ぐづぐづしてゐられないやうで――この一夜ぢうが、きツと、初野を取るか、取られるかの關の山だと思はれた。

落ち付きを失つたままに、また自家を出て、沼田の家へ向つた。が、再び留守を喰はせられるのを避けて、後ろの板壁の方へまはつた。その節穴から、昔もよく覗いた經驗があるのである。

『はア――はツちやん』などと合圖すると、初野は急いで身支度をして、外へ出た。そしてこちらの付いて行くのをわざと知らない風をして、川ぷちへ出で、あの假り橋を渡つて、川西の寂しいお宮の森の暗いかげで、二人は手を握り合つた。

　その人は今ゐさうでもない。

近處なる杉本へ遊びに行つてるのではないかと、そこの家のまはりをまはつて見たが、この友人も亦ゐさうでない。が、念の爲め案内を乞ひ、推測通りを確めてから、こないだの禮を傳へて貰ふやうに云ひ置いて、そとへ出た。

自分は、もう、自分の行きどころがないやうな氣がした。が、ふと思ひ出して、川西神社の森へ行つて見たが、やみにふくろふが鳴いてゐるのが聽えるばかりで、二人のかげも形も見えなかつた。

『ほツほツ、ほツほツ、ほツほツ』と聽える聲に自分の昔と今との恥辱を感じながら、また橋を渡り返して、初野の裏木戸に立ちどまつたり、杉本のまはりをうろついたりしてゐた。

が、とうとう會へなかつたので、政吉はその翌朝はやく、初野が近在の小學校へ通つて行く途中に待ち伏せした。近みちをする爲めに草むらや小笹の中をとほつて來たので、自分の肩から裾にかけて、露や茅の穗が一杯についてゐた。

『………』渠はかの女の道に立ち塞がつて、眞正面から瞰みつけて、『おれを病人と見て見限つた、な！』

『………』

『うそ云うて、この土地を拔けて出る氣か？』

『………』

『杉本のやうな人間にだまされて行くんだらう。』
『………』
『おれと一生ほんまの夫婦になりなはれ！』
『………』初野は、立ちどまつたまま、返事をしなかつた。何を仕出かすかも知れないと思つてか、こちらの目から暫らくかの女の目を離さなかつた。
『返事しなはれ！』
『へ――へんじ――今晩しまツさ。それに、なア』と、かの女は碎けて見せながら、『教員の口がありまッせ。』
『あんたの跡だらう――そないに輕い尻の跡なんぞ御免や。』
『まア、來なはれ、今晩、なア――』から云つて、かの女は幅一間ばかりの田舍路をおづおづ動いて、じりじりとこちらと入れ代つたが、こちらが別に手向ひをしようともしなかつたので、そのまま歩き初めた。そしてこちらにそこを動くなと命ずるやうに、後ろを見い見い、
『どうぞ、――今晩、――なア。』
默つて、自分はこれを見送つてゐたが、小學女教員の後ろ姿が見えなくなると、白地の浴衣に薄化粧の初野が自分の心に思ひ出された。

その晩にも見す〳〵はね付けられたので、直ぐまた人に託して熱心の意中をうち明ける手紙を持つて行かせたが、それも受け付けられなかつた。

その翌日、渠は初野の出勤する學校へ、町から一里半も出かけて行つたところが、もう辭職したと云はれたので、そこの校長に會つて、かの女の事をさんざん毒づいてやつた――以前は自分と關係してゐたのに、今回また池田町役場の杉本とくツついて逃げるのだ、その間にでもどんな男があつたか分らないと。

『さう云ふ女に大切な教育をまかせてをつたのは、校長としてわたくしの不明でした』とあやまらせたのをいい土産として、自分はその歸りに小池をその玄關まで訪問した。

いつも香氣に在宅してゐる主人は、式臺のはづれまで出て、こちらの得意に告げた報告を聽き、杉本の惡くちをも云つた。

『きのふ、あいつも役場を辭職してながら、僕のとこへは何とも云うて來ん――一言ぐらゐ知らせてもえいやないか、あとへ君を入れる都合もあるのんに、なア？』

『あいつアあんな奴ちや――卑怯にも、人の女をこツそり盜み腐つて。』

『そやそや――ほて、なア、僕が町長に會うて君を推薦しといたら、あいつがあとで直ぐ茶茶を入れたさうやで。』

『怪しからん、なア――きツと、あの會で君が初野を僕のはたへ押しつけたんを恨んでるのや。』

『勿論、それにきまつてる、さ――僕もあないな奴に女王を渡したうないさかい、君に早う取り返せ云ふたんや。』

『初野が阿呆や！』

『そや、なア――僕は、役場のあと釜は、今晩にも行て、町長はんにもう一遍頼んで見るが、なア、君、あの女をどないにでもしてあいつから取り返してやり給へ。他の土地へやるに及ばん――なぐさんでから、また棄てたかてえいやないか？』

『そりや、どうしたかて取り返す――どうしたかて、畜生！』と、政吉は獨りで力んで見せた。そしてどうしても自分の物にならないとすれば、一度でも二度でも小池の云ふやうになぐさんでやれと決心した。

そこへ丁度杉本が絽の紋つきなど着込んで門を這入つて來た。

『やア』と、小池はわけもなくにこにこし出した。『役場を辭職したさうやが、もう、きまつたんだッか？』

『實は、これから直ぐ行くんだす。』

『…………』目の色を變へて、ぢツと無言で見守つてゐた政吉は、身をふるはせて小池の方を見た。小

池が許すなら、ここでこの戀がたきを投ぐりつけてもいいと思つて。だが、相手は今までの話し振りに於けるやうな惡意など杉本に對して少しも持つてゐるとも見えなかつた。不斷の通りで、

『まア、行て來給へ——ほて、今度の日曜あたりに、ゆツくりやつて來給へ。一杯お別れに飲まう。』

『どないせい、もう一遍歸つて來んと、なア——俄か仕立ての挨拶では君に濟まんけれど、なア——』

『なアに、さ』と、ますます機嫌をよくして、『早う顏を見せて呉れさへすりや、僕の方は滿足や——例のも一緒か？』

『うん——』杉本がどツち付かずのやうな返事をしたのは、こちらに氣がねをした爲めらしかつた。政吉の五體は煮えくり返つて杉本をばかりでなく、兩方にいい加減なことを云ふ小池をも投ぐりたかつた。

杉本が行つてしまつてから、小池はこちらに向ひ、

『おい、出し拔かれたで。』

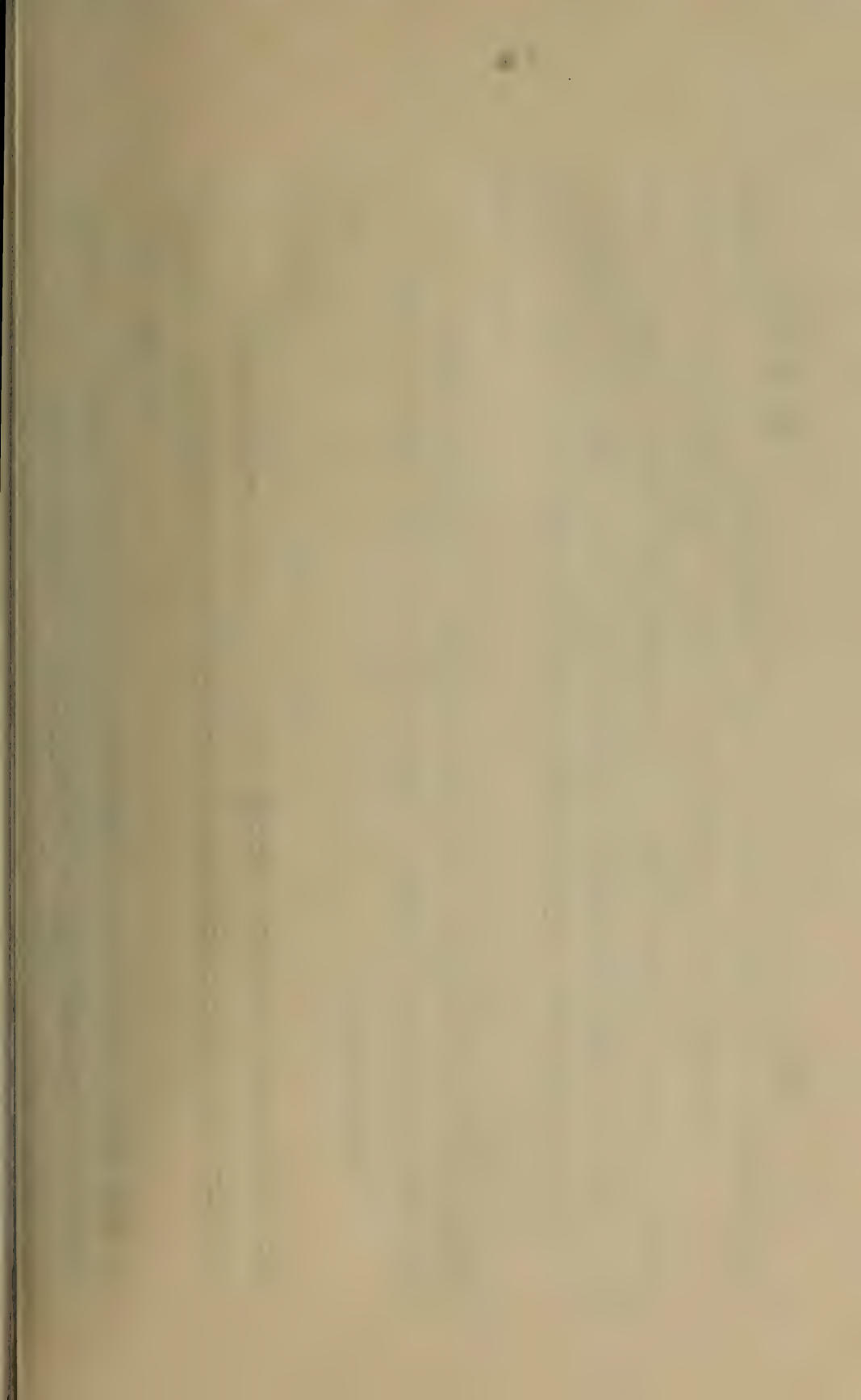
『許すもんか』と、政吉はそこの大きな玄關も響き渡るほどの聲を擧げた。そして、もう、すべての友人を見限つてしまつた。

薄暗くなつたので電氣の付き初めた場末の町を、政吉は一目散に二人の跡を追つた。そして途中か

ら外れて、青々した麥畑の間に隱れた。この時は自分ながら一生の緊張をおぼえた。

間もなく、二人の乘り込んだ電車が、畑の中の線路を横切つてる小川の手前まで來た時、突然、物にぶつかつて脫線した。

政吉が故意に障礙物を線路に置いてあつたのである。その場を逃げたけれども、やがて自分だと云ふことが分つて警察署へ連れて行かれた。そしてそこで渠は初めて自分の被り物を命令的に引ツぱがれたのである。

――(大正二年五月)――

靈魂の行くゑ

『あゝ、死んでしまはうか？――死んだ方がましだ。』道雄はかう心で叫んで、目をぱッちりと明けた。五燭の電燈の光がそのかさでさえ切られて、目の向つた天井は暗いかげばかりだ。

渠の兄の所藏する澤山の書物が、澤山の蜜柑箱や高野豆腐のあき箱に這入つて、假りにつみ重ねられたその裾の方だけは、仰向けに寢てゐる足もとの方にあかるく見えるが、殆ど全く勉强などする氣のないものには、それも見飽きた又考へ飽きた心とからだとの無限に高まる闇の麓のやうだ。

なぜ人間のやうな物がこの世界に生れて來たのだらう？　なぜまた生れて來た物が死んで行くのだらう？　自分を生んだ母は疾くにゐない。父もこの三四年前からあの世の人だ。ゐるのは、ただ手賴りにすれば出來るのは、兄ばかりではないか？　その兄はいつも自分に向ひ、父母の自分を育てゝ呉れた育て方が間違つてゐたと云つて、頻りに『自主獨立心を起せ、起せ』と聽かしてゐた。

然しその獨立心からではないか、自分も、自分の兄の『背水の陣』だと云つて、父の家宅を全く抵當に入れて北海道へ特別な、世間に對しても新らしい事業をしに行くのに一緒について行つたのは？

それは、然し失敗に終つた。が、自分は今でも、金さへあれば、――ちよツとしたリヨウマチの爲めに寢てゐると、僅かの俸給でも氣がねをしてゐなければならないやうな安月給取りは、何時でも、やめてしまつて……

渠の横の方に互ひ違ひに寢てゐるこの家の少い下女のいびきが氣になつて仕方がない。いびきばかりならまだしもだが、規則通りに、夜十時に褥につきさへすれば、直ぐぐう／＼眠つてしまつて、何か知らん寢ごとを云ふ。ゆふべはうちの飼犬エスのことを云つてゐたが、今夜はまた『おつ母さん、おつ母さん』などと云つた。毎晩のことだから、かの女が寢返りするたんびに、また何を云ふだらうと云ふことが待たれるやうになつて、いよ／＼眠られない。外の室へ寢かしてはどうだらうと云ひたいのだが、間數の少い家だから、さう明らさまに兄にも云ひ得ない。

……兄はまだ机に向つてゐるらしい、ペンを走らせる音がしてゐる。もう、二時頃だらうに……

さうだ、金さへあれば……然し兄の生活も氣の毒だ。慣れない事業をしたのが惡いとは云へ、北海道で失敗してからは、元の筆にこき使はれて、碌に人並みの家にも住めないで――父の家は人に取られ――手間取り同樣の下らない飜譯をして、僅かの原稿料で多くの借金を爲しくづしてゐる。でも、なぜ晝間書かないのだらう？　晝間は殆ど無駄同樣に遊んで暮らし、夜になると、泥棒か何かのやうにあくせくかせいでゐる。あの兎など飼つて、たとへ一生懸命になつてゐても、何ほどの金が儲からう？

『お前も役場が駄目になれば、これを仕事として手傳へ』と、兄は云つた。

『金になることなら』と、道雄は心であざ笑つて、おもてには反對の樣子を見せなかつた。すると、病氣の少しいゝ時は運動がてら緣がはに出て、兎の世話の仕方を見おぼえろと云ふ命令が下つた。

それが、だ――それが運動どころか、便所に行くのがやツとのことになつてしまつたではないか？今では、寢たまゝで――姉さんの世話になるのは氣の毒であるし、又いやだから――兄から直接に便の世話までして貰つてゐるのではないか？

獨立などを云ふにも時があらう――熱心にも事によらう……

『いやだア、いやだア――う、うん』と、下女がまくらをはづしたらしい。遠くでする犬の聲が途中で半ば凍りついたやうに聽える。段々歲の暮れも近くなつて行くのだと、道雄は考へながら、手や腰の痛みを辛抱してかけ蒲團を少し引きあげた。……とん、と兄が煙管をはたく音がする。

……『もう一度やつて見る氣はないのか、なア。』道雄はかう兄に訴へたつもりで、十勝の寂しい高原を思ひ浮べてゐた。

遠く、遠く見える山々の麓でなければ、矢張り、遠い、遠い海かとも見える灰色の雲のあなたにしか充分な飲料水がないとも云へば云へるだゞツ廣い高原！　からツと眞夏の日光が照れば、自分の帽子の小い蔭以外に何の蔭もなかつたと云つてもいゝ。何百年來切られたこともない槲のまばらな樹立

は、殆ど限りもなく、薄のべた生えの中につゞいてゐるが、まばらな上にいつまで經つてもあれ以上には大きくならないかのやうにこじれてゐるっ馬で碁盤飛びでも出來れば、どの木の頂上にもとどきさうだ。

その間を幅十間の國道――と云へば、なか〳〵立派なやうだが……

兄が戸を明けた――庭へ下りたやうだ――エスを叱つてゐる――

うるさい、なア、この眞夜中に、また兎のことか！　犬に喰ひ殺されでもした方が、あんな下らない仕事を！……何だツけ？……また、下女の寢ごとか？……宵から辛抱してゐた大便が催しをして來た。雨か雪かではないか知らん、外では何かの音がする。――それとも、風か、なア――寒い夜だ！

……こんなやくざなからだは、いツそのこと、死んでしまへば誰れにも厄介をかけないでいゝのだ！　もう、どうせ再び立てまい、こんな病氣に骨ツぷしを金しばりにされては――どうせ、あの仕事を回復する金もない――金さへあれば、兄にやる氣がなくとも、自分であの毛だ物のやうに忠實に働く爲吉夫婦と一緒にやつて見るのに……

兄がうちへ這入つたやうだ。もう、寢るのか、なア。寢るのなら、その前に便を取つて貰はうか知らん？　でも、毎度のことで――

……何だツけか……馬だ、馬だ！　幅十間もある國道と云つても、日に一回、昔流の飛脚が通るか通らないかであるから、草は茫々――一すぢか二すぢの間道のやうな道がついてゐる。その原野の低いまばらな濶葉樹林の間を、兄と共に乘つたこともない馬に乘つて行つたツけが――事業にも向ふ見ずの兄は、何ごとにも大膽であつた。子供の時に二三度乘ることを父におそはつてるから大丈夫だと云つて、ずん〳〵馬を進めた。自分はたゞかじり付くやうにして次ぎの馬に乘つてゐたが、腰が据はらないので何度も落ツこちさうになつた。

『少し待つて下さい』と云へば、

『待ツたつて同じことだ、一二度は落ツこちて見なけりやア、おれだツて乘り心地が分らないのだ！』から云つて　少しも手綱をゆるめなかつた。自分はこの時ほどぴツたりと、兄のいつも口さへきけば云ふ個人主義、自主獨立の觀念に出會したことがない。

それに勵まされて、何事も訴へずに進んだが、帶廣から一日路の間で、一度はわれながら小氣味よく落ちた。また一度は馬の立て髮にかじり付いてぶらさがつた。それからと云ふもの、多少、兄の云つた通り、乘り心地をおぼへたが、三日路を馬上で原野の一部なる野塚原野に着した時は、尻の骨が痛くて、痛くてたまらなかつた。湯に這入ると、しゆんで溜らなかつた。……

『兄さん』と、道雄はこらへ切れなくなつて、聲をかけた。すると、一緒にまだ起きてゐたかして、

姉さんの方が出て來た。

『今夜も寢られないの？』

『ちよツと兄さんに來て貰つて下さい。』

『大便？』

『えゝ。』

むツつりした兄はやつて來て、道雄に便器を當てゝ、また引ツ込んだ。道雄には、兄のます〳〵亡き父にそツくりになつて來たおもかげが殘つたが、ます〳〵父にそツくりなだけ、自分とは殆んど二むかしも年が違つてゐるのに思ひ及んで、電氣の光に映しても、兄の心は解しかねるのだらうと云ふあきらめも出た——必要のことの外は、何にも口にしないやうな兄だから。

どこかえらいやうな所もある。また、何となく薄情にも見える。……野塚の檞林では皆一緒になつて檞の皮を剝いた。そしてそれから澁を取つた。兄の手までが澁だらけになつて、東京へ歸つてまでも暫くそれが取れなかつたと云ふ。が、あの時でも、あんまり情がなさ過ぎると皆にかけでは惡く云はれた。自分は、血を分けたものだけに、それを聽かせられるのが如何にもつらかつたが、兄の身になつて見れば、一生懸命であつたのだらうから、忠告しよう、忠告しようと思ひながらも、とうとうその機がなかつた。

おろした資本の割り合に多くの金を擧げたが、それにも拘はらず、結局、失敗に終つたのは、兄が餘り一國ものであつたと云ふ精神的原因から、事業の統一が圓滿に進行しなかつた爲めだ――少くとも、自分はさう思ふ。事業其の物は決して拙いものではなかつた。

『君の兄さんは此の事業によく似合つてるよ、澁いつらで澁を取る』――うふ！――あの爲吉もがらに似合はない警句を吐いたツけ。そして不平を云ひながらも、主人は主人だからツて、夫婦もろともからだを粉にして働いた。使用人として、あんな便利な奴等はまたとあるまい。

……『出たかい？』……『まだです』と、道雄はいきんでゐた。……自分が遠慮してゐると、出る物までもいつも遠慮してなか〳〵出ない。……どうしたらいゝのだらう、情けない病氣だ！　いつそ氣狂ひにでも、馬鹿、白痴にでもなつて、からだだけの自由は利けて呉れた方がよかつた。每晩、每晩、寢られないで、下女のぐツすり寢込んでゐるいびきや寢ごとを聽くのも厭き〳〵してしまつた。

……

今頃は、爲吉夫婦はどうしてゐるだらう。兄は金策の爲めに帶廣へ出た――帶廣で行けなくつて、札幌へ出た――それからまた東京へ歸つた。が、東京を出るそも〳〵から無理をして出たのだから、歸つてもいゝことがあらう筈がなかつた。『ふところ手で再びそツちへ行つたところで、こちらまでがすべての機械と共にとりこになりに行くやうなものだから、行かぬ。そツちでどうかして歸つて來い。』

かう云ふ無責任と云へば云へる手紙を受け取つた時には、もう、爲吉夫婦は他の同業者に使はれる約束が出來てゐた。他の北海道で雇つた雇ひ人は、無論、その以前に解放したので、自分ばかりの處分をすればよかつたのであるが、あの時の心細さツたら、なかつた！

一里ばかり行つたところに小學校がある。そこへは二里も三里もさきから通つて來る生徒が五六十名ある。そこに教員の口があるかも知れないと云つて、かけ合つて呉れたものがある。その返事も分らないうちに雪が降り出した。一日置きに二三回降つたが、それから、もう、翌春まで解けない寢雪だと云ふことになつた。

電報で歸る旅費を兄に請求して――それも兄の出來かねた爲めか隨分長くかかつて送つて來たのを以つて、自分も兄の道を澁色の手をしたまゝ、追つたのである。馬にはもう多少慣れてはゐたが、來た時とは違つて、馬上をつれもない一人旅であつた。あの時は、東京もなかつた。兄もなかつた。あるのは、ただ、四足がさく／＼と踏む雪の音を早くのがれたい心ばかりであつたぢやアないか？　然しまたあの槲の疎林は名殘り惜しくなかつたでもなかつた。

……『まだかい？』

『兄のせツかちにも困る、なア。』かう心で語つて、道雄は『もう、よう御座います』と云はなければならないやうになつた――まだ氣持ちは悪いやうなのだけれども。

『さツき、犬がどうしたんですか？』

『なアに』と、無頓着に『また兎にからかつてゐたの、さ――餘りびつくりさせると、兎と云ふ奴はいじけ死にをするものだから、ね――氣の弱い奴は、畜生でも駄目だ。』

道雄はいやな顏をした。そしてお前もその白い動物のやうにいじけ死にをするならしろよと云ふ意味が、兄のいつもの寸鐵的敎訓としてその言中に這入つてゐるのではないかと云ふ觀念が橫切つた。が、なほ兄に何か物を云はないではすまない氣がして――渠の直接な感謝を表するやうな言葉は、喉もとまでは迫つて來ても、どうも、わざとらしいやうで、そのわざとらしいのをいつも兄は排斥して來たのを知つてるから、口に出し切れない――

『ぢやア、犬の方を棄てたらいいでしよう。』

『さうも行かん、さ、飼ひ馴れて見ると。』

これ以上の問答は出來なかつた。そしてあんなに畜生などを可愛がるのなら、もッと弟を大切にして呉れてもよからうにと思つた。

……『よく、世間では、人の妻や兄弟の妻を自分の妻のやうにこき使はうとするものがあるが、おれの家では、そんなことはさせない。おれの家はまた妻の家だから、そのつもりでやつて呉れ』とはここへころげ込んだそもく〳〵に申し渡されたことだ。

その時は道雄もまだこの病氣に慣れてゐなかつた。自分のただじれてゐたところから姉さんの仕うちをまどろッこしいと思ふ結果、よく下女に手ひどく當つた。

『お蔦が泣いてますから、餘りつけ〳〵云ふことはよして下さいよ』と、姉さんは和らかい調子で告げた。

『お前はここの主人ぢやアないから』と、兄はまた强い言葉であつた、『下女を叱る權利はない――ただささへ下女の拂底してゐるこの頃、もし出て行くと云つたら、どうする？　お前はその代りにやアなれまい！』

『へい――』と、その場はそれで濟んでしまつたが、その後病氣は一層重くなつて、全く床の中を出られなくなつた。そして兄夫婦は看護婦がはりに一人の老婆を雇つてくれたが、どうも耳が遠くて、夜中に呼び起しても聽えなかつたり、何だかきたならしい氣がしたりして面白くないのが元で、それをゐられないやうにしてしまつた。

自分の惡いのであることは重々承知してゐるが、それが必らずしも兄の攻擊するやうに、『父にあまやかされて育つた』結果ばかりとは云へまい――そりやア、兄は二十歳前後から父の世話にならずに獨立でやつて來た――自分のからだも精神も兄ほどにはしッかりしてゐない上に、今回のやうな嘗て望みも承知もしない病ひに取りつかれてゐるのではないか？　病ひが云はせ、病ひがさせることは、

少し大目に見て呉れてもよからう。

が、兄の主義から云へば、そんな弱い氣を起すのも無責任の一部だ。――ああ、自分は畜生よりも可愛がられてゐないのか？　そして自分の現在は、兄の目には、下女代りにも價へしないのである！……

『ありがたう。』道雄はかう云つて――僅かに口へ出たのだが――今、自分の跡始末をして呉れた物を大きく新聞紙につゝんで立ちあがつた兄の顏を、電燈のかげに見た時、如何にも面倒臭さうで、また如何にもとツつき場がないやうであつた。――父がよく第二の母を叱りつけてゐた顏！　癇癖の間にどことなく威嚴が滿ちてゐた。勿體ないやうで――自分さへいやなことを兄にして貰ふにつけても、この半身不隨がつらくツて、つらくツて。

……第二の母と云へば……自分は今なほ兄に手賴る外はないと思つてゐたが、こんな自分のやうな人間にも、手賴つてゐるものがあつた。が、その母は父の死後逃げるやうにして里へ歸つた。兄の氣に合はないのも一つの原因であつたらうが、母の方でも兄の先妻――一年前に去られた――のことでは、永年隨分意地の惡いことをしてゐたやうだから、今更ら、父を離れては、代の改たまつた家にゐる顏がなかつたのだらう。

……それにしても、あれが今ゐれば、自分の看護ぐらゐは充分するものがあつてよかつただらう

に、なア……
兄がまたやつて來た。
『もう、おれも寢るが、ね、今夜は隨分寒いから、その上に風でも引かないやうにしなよ。』
『ええ――』道雄は、もう涙を浮べてゐた。そして兄の引ツ込む姿を追ツかけるやうに、あたまを枕からあげて、『もう、北海道の方はしないのですか！』
『するも、しないもない、さ、こんなに失敗してゐちやア。』
その失敗の狀態は、もう、丁度丸一年以前から――さきの姉さんが去つてから――のことだ！ 失敗をいいしほにして、兄は多年嫌つてた妻を出した。あれを出す爲めには、兄もいろんな馬鹿な眞似をした――なけ無しの金で藝者を受け出したり、妾を置いたり――そんなことをする手間で疾くにさきの姉さんを追ひ出せばわけもなかつたのに、――兄は女だけには弱いのだ。
自分を見ろ。三年間約束してゐたあれを、とても喰へるやうになる見込みが付かないから、斷然ことわつてしまつたぢやアないか？ それも北海道にゐる間に、手をまわして、東京へ手紙をやつてだ。女や家のことを全く忘れて、今一度兄の事業を回復させてやりたいと思つたからである。
……十勝の原野には、もう、去年の寢雪が再び舞ひもどつてゐるだらう……爲吉……爲吉夫婦……槲の疎林……灰色の空に對して眞ツ白の地上！……三尺も雪の凍りついた上を、焚き木を拾つて、あ

でも、兄は氣違ひだ——精神的氣違ひだ——あたりかまはずの個人主義だ。そッちがそッちなら、こッちはこッちで自分身づからを處分するより仕方がない。どうせ、外來の藥など飮んでゐたつて直りさうでもない。自分は自分の精神でこの病氣を直すか？　それとも、この病氣にたのんで早く殺して貰ふか？　肺病を藥も用ゐないで自分自身のからだと精神との持ちやうで直したと云ふ兄とは、この自分はどうせ比べ物にならない。兄から氣が弱い、意氣地がないと云はれるのは、どうせ止むを得ない持ち前だ。

兄はあの事業の失敗でやうやく精神が蘇み返つたと云つてるが、この自分はあの事業の爲め、あの兄の爲めに、十勝で死んだものと思へばいゝ——たとへ一時の腰かけだツて、村役場の役員なんか、何も進んでやつてゐたくはない。

自分の方針が間違つてゐたのだ。父の生きてゐた時に、素直にあの學校を出て置けばよかつたのだ。あの女と一緒に家を持ちたかつたばかりに、もう一年と云ふところで退學してしまつた。學校の關係者等はそれが爲めに世話もしてくれないし、兄にはまた馬鹿にされるのも當り前かも知れない。

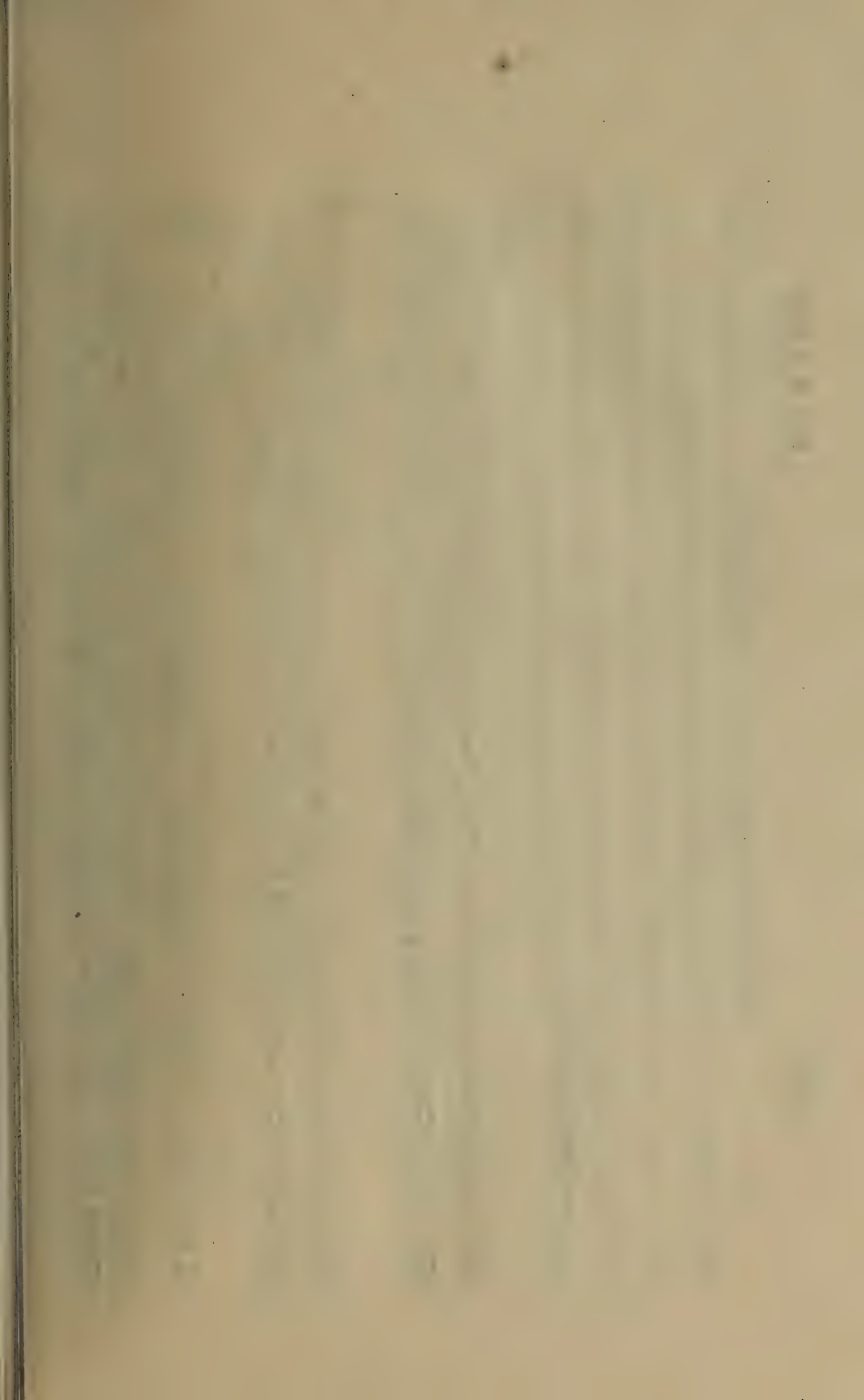
『どうせお前は勉强しないから、行くつもりなら、おれと一緒に行つて、雇ひ人同樣に働いてもいゝ——雇ひ人同樣としてだよ、弟としてではないぞ』と、わざ〳〵、北海道へ出發の間ぎはにも念を押した。

兄はいつも、かう云ふ風に、兄自身に對しては何となく氣高い考へを持つてゐて、たとへ兄弟にさへ一歩も假借しないのだ。だから、この自分はその兄の失敗に對して殉死したと思へば、まだしもこのやくさなからだの名義は立たう。この病氣だツて、去年十勝の雪にその用意もなく出あつた時のみやげかも知れない。

これでも何か今一度事業をして見たい考へはありながら、金がないばかりか、このざまで寢てゐるのも、兄の思ふやうな、容易なことではない。毎晩、氣が立つて、眠られないのも大抵なことではない。

「ああ、樂に死ねないものか、なア」と、道雄は痛む兩腕を兩のわき腹に押さへ付けた。そして自分が死ねば、その靈魂なるものは北海道へ行くだらうか、それとも兄のもとにとどまるだらうかと考へぜ見た。

――(大正二年五月)――

脛の肉

小國を出てから、十三峠にさしかゝつた時は、暑い太陽の餘勢がまだかツかと岩角に反射して、その光の中をおほきな赤蜂が二三匹ぶん〳〵云つて飛んでゐたと記憶してゐる。

藤吉が思ひ出すのは、それからのことだ。この暑さに、如何に新道が平坦だと云つても、おほきな呉服の荷を脊負つて、一里半も二里も遠まはりをしたくない。どうせ、初めて通るのはどちらも同じことだからと思つて、舊道の方に登つて行つた。

稀れにらしいが、人の足が當つた跡がついてゐるのに安心して、ずん〳〵進んで行つたのだが、どこまで行つても山や谷ばかりで、目ざす道へは降りられさうでない。

一里ばかりを引ッ返して見たが、それがまた今しがた通つた道ではなかつた。足が勞れて來るし、腹は減つたし――そこいらにあつた岩の上に、脊中の荷をつけたまゝ腰をおろし、顏や胸の汗をふき、暫く氣を落ちつけて考へては見たが、あたりには、もう、道案内の片端にもならうと云ふ蜂一匹もゐない。長い日が暮れかゝつてゐる。

『かうしてはゐられない』と立ちあがると、意地の惡いことには、不斷なら、少しは辛抱も出來る腹の蟲が直ぐにも飯を喰はせろと騷ぎ出す。

心に落ち付きが無くなつて來たと共に、疲れの爲めに氣はぼうッとなつて來て、それがうす暗い夕暮と區別がつかない眼の前には、熱火のやうになつてゐた赤蜂の姿がたゞ眞ッ黑に浮ぶ。

『あいつが今となつては憎い惡魔だ――おれをこんなところへ迷ひ込ましやアがつた！』から考へながら、渠はまた別な道をたどつていつた。

腹の蟲は遠慮なくぐう／＼叫ぶので、途中で、毒か何か分りもしない湧き水を度々飲ましてやつた。やがて眞ッ暗なほど夜の氣をかぶつた山あひを通りぬける時向ふの高いところにあかりが一つ見えた。

『もう、占めた』と、そこを目ざして登つて行つたが、木樵のゐるやうな藁葺き小屋だ。然し安心したせいかがツかりして、そこのがらんとした土間さきの敷居をまたぐのが人の足を持ち上げてやるやうであつた。

奥の方では、壁ひとへを隔てゝ、じう／＼云はせて魚を燒いてゐるらしい、鰶か鰯などの燒けてるやうなにほひがするので藤吉の腹の中は直ぐその方に吸ひ込まれて行く。

『誰れだかい』と、險相な誰何をしたのは、男の濁つた聲だ。

上に古い竹の雁木におほ鍋がかゝつて、蓋が取れてるので見えるが、野菜と共に所謂猪らしい肉がくたくた云つてる。鍋の下あたりには、また、その肉の切れを長い竹ぐしにさして火の上へ傾けて、幾本も突きさしてある。じう〳〵云つて油づよいにほひを立てゝゐるのはそれであつた。

おやぢは土間から突き當りの座に腰かけてゐるので、藤吉はその右のかはにかけた。煮物と燒き肉とのけむりが涼しい夜風にあふられて、藤吉の鼻さきをかすめるのである。渠は汗の引くに從つて、いよ〳〵腹の空しいのを感じた。

おやぢは茶碗に殘つた酒を一息にぐッと喉を鳴らして飮み乾し、その明きを藤吉にさし出して、

『まア、一杯飮んだがいゝ。』

『ありがたう。』受けて、どぶろくをついで貰つたが、それを遠慮してちよッと一口喉へ通すと、自分もおやぢのやうにぐびりと喉が鳴つた。

『お前さま、猪を喰つたことがあんめいが――?』

『いえ――まだ――』から躊躇しながら、藤吉はおやぢの顏を避けるやうにして見た。その時は、既に、手の茶碗をどうしていゝかと云ふ風にそッと脇へ置いたあとだ。そしてふと心に浮んで來たのは、見ず知らずの旅人をどうしてかう歡迎するのだらう? ひよッとすると、よく昔ばなしにある通り、人を酒に醉はして置いて、殺すつもりなのではなからうか? と云ふのは、今しがたこの家へ這入つ

た時に[illegible]
らである。色は割合に白いが、角張つた顏の額には、垢じみた深い皺が澤山寄つた、その下からいやに笑ひをつくろひながらじツと見あげた眼の光は、下まぶたの爛れて赤いのに映じて燃えてゐるやうだ。

『だすけに、さア』と、おやぢは然し案外心置きのない調子で、

『喰つて見なせい――うめいが。』

『は、ありがたう――』

『喰つて見さツせい。』

『は――』

『遠慮しねいで、さア!』

このせツかちに押しつけるやうな親切か強迫かには、藤吉は手を出さないでは濟まされない氣がした。

『ぢやア、一つ頂戴致します――大相うまいのは、人の話に聽いてをりますが』と云ひながら、竹の箸筒の中のすゝけた箸を取つて、おづ〳〵鍋の中のを一切れはさみ上げ、手の平に受けてからそれを口に入れる。

おやぢはじツと見つめてゐたが、微笑を漏らして、
『どうだかい――うめいが、うめいが？』
『なるほど』と、腹の蟲がぐう〳〵云ふのを中止させるのが惜しいやうな氣になつて、口をもぐ〳〵させながら、『結構です、なア――しこ〳〵して、油ツこいところなどは。』
『油の乘り時だんが――もツと喰つてくれや、燒いたんも、さア。』
『どうも、迷ひ子になつて來まして、飛んだ御馳走になります、なア。』
『まア、たんと喰つてくれや――おれは、もう、十分だんが。』
『濟みません、なア』と、藤吉が一串灰の中から取りあげ、燒いた肉を左りの指さきで拔き取り、それを口に入れて嚙み味はつた時、煮たのも少しすツぱ味があつたが、燒いたのも矢張りさうだと思つた。そしてそれが猪に持ち前の味だらうと見たのである。そして又渠のすき腹は渠にもツと大膽に喰へよと催促した。
　おやぢは別な茶碗で酒をがぶ〳〵やりながら、藤吉の運び、口の動きをじろ〳〵と見てゐるのだが、藤吉は世間ばなしにまぎらせて腹の饑ゑを癒してゐた。
『あなたはこの山中で何を稼業にしてをられます？』
『おれは無職業だんが。』

『でも、お獨りでは――』

『かかアが炭燒きをしてゐたんだが、間男をして、ゆふべ、逃げて行きやアがつただすけに、さア――』

『それはまた――』

『まア、聽いて見さツせい。』おやぢは少しもつれ舌になつて、

『間男をしたがアに、おれをこんげな處へ置き去りにして、さア。あすから、どうして飯を喰へと云ふんだかい？』

　飯と云はれて、藤吉は今更ら自分の意地ぎたなさをおぼえて持ちつゞけてゐた箸を下に置いた。そして舌を閉ぢさうに油ツこくなつた口を、飮みさしの酒にひたしてから、押しぬぐつた。

『どうも御馳走さまでした。』

『うめいが――もツと喰つてくれや』と云つて、おやぢはまた酒をもついで吳れた。

『いえ、――もう、結構です。』藤吉は喉がかはくのを感ずるので、おもて向きはあたまを下げて辭退しながらも、もツと飮みたかつたのである。それをまきらせるやうにして、『間男とは――まア――ねえ――』

『まア、聽いてくれや、おれは柏崎のものだんが、五泉に住んでゐたんで――五泉は住みいいわや――

こんげな處へ來うすと云ふつもりやアなかつたがアに――。炭燒きで暮しが付く見込みが付きやア、錢金だけ送つて貰つてよ、おれはもとの五泉でのらくら遊んでゐらア。――かかアは盆に一度歸つて來りやアいい。越後は女が働いて呉れるだすけに、毎年、盆前にやア、十三峠の新道から荒川筋にかけて、さア、お前さま、かかアの炭燒きどもがぞろ〳〵行列して歸つて行くだんが。』

『そんなに賑やかですか、なア？』

『だすけに、さア、みな亭主に抱かれに行くだんが。』

『は、は、はア！』藤吉は愛相笑ひをして見せた。

『それを、お前ツた』と、おやぢは赤い眼をぎら付かせながら、

『こんげな山奥へ呼んで置きやアがつて、さア――おれはどうすることも出來無いわや。』

『さぞお困りでしよう、た。』

『おれは炭燒きやア出來ねい――かかアの手傳へぐれゐやつてたんだが、ひとりで炭ア燒けねい。おれはかかアに逃げられて心ア燒けようが、さア、炭ア燒けねいんだすけに。』

藤吉は、男と女との仕事が丸で顚倒してゐる考へがをかしいので、吹き出したくなつたのだが、それを口の中で抑へてしまう爲めにまた酒の茶碗を取りあげ、口へ持つて行つた。すると、口の中へ這入つた酒が笑ひと共に吹き出されてしまつた。

『まア、ゆッくり飲んでくれや、おれの話しやア長いんだすけに、さア。』

『へい――どうせそんな女なら、逃げたのが結句こちらの仕合せぢやアありませんか？』から云つて、腹が出來て來ただけに心の落ち付きも出來たのが分つた。そして吹き出した酒のしぶきが鍋の中へも少しは這入つたやうだが、自分が喰ふ分には少しもさし支へないと考へた。

『どうして仕合せだかい』と、おやぢは聲まで怒らせて、『おらア業が煮えて、業が煮えて――向ふ脛さんだして、いけツ面ふんごくつてやりたかつた！　あすから、おんのとこは喰ふ米もねいわや！』

『なアに』と、やわらかに受けて、『そんな御心配にやア及びますまいて。この稼業がおいやなら、一緒に町へ出ようぢやア御座いませんか？』

『町へ出てどうする？　町へ出てよ？』

『またいい女がありましようて』と、笑つた。

『おれは、もう、女に養はれるんなんかアいやになつたがアに！』おやぢは藤吉の輕い氣分を受け取れないで、がん張つてゐる。

『ぢやア、あなたがしツかり御自分でおかせぎに――』

『うんにや、おれは自分でかせぐなんかアなほ更いやだアに。』

『そりやア、困りました、なア』と、藤吉は笑ひながら片手をあたまへあげた。

おやぢははだけた兩膝の上に、兩手の握りこぶしをしッかり載せてゐるが、穢いかすりの上に締めた鼠色の女の細帶に、突き出した胸の底の動悸が大きく當つて、それが呼吸と緒ひのぼつて鼻から出るその勢ひが如何にも烈しい。そしてじッとこちらを見するゐる眼のふちの爛れ色が、二つの火を吹いてるかと藤吉には思はれた。

氣が付くと、おやぢの顏が見る〳〵青くなつて行くのである。青くなつて、そして息苦しさに反抗してゐるやうにからだが顫えてゐる。

『こいつ、酒亂か癲癇だ、な』と云ふ考へがあたまを横切つたが、こちらも少し醉ひがまわつたので、さう顫えて見えるのかとも思ひ返し、目を下に向けるとたん、見てぎよッとしたのは兩膝の間から現はれてゐる左の脛の血だ。古い布を繃帶のやうに幾重にも卷きつけてはあるが、血は澤山そこをにじみ出てゐる。思はず頓狂な聲が出た『あなた、猪に嚙まれたのですか？』

『なアに、さア』と、おやぢは言葉には力も勢ひもあつたが、血だらけの方の足を空にあけて、ばッたり横倒しになつた。そして顏をしがめ『おれは――もう――この世がいやになつたがアに！』

『それはまた弱いことを――』藤吉は、おやぢの意久地なさに對する侮蔑とこの突然の事態に對する輕い同情とから、つい、こんな言葉を發したのであるが、これがまた一つの失敗であつた。

『どうして弱いだか？』機嫌を損じたやうに、おやぢは片ひぢを突いて半ば身を起した『どうして弱

いだか？』
『弱いと云ふわけでもありませんが、なア――』
『おれがこの世を』と、起きあがつて『いやになつただすけに、いやになつたと云ふんだんが――どうして弱いだか？』
『いや、それはわたくしの云ひ違ひでした。』かう答へて、何だか物相らしく思へて來たこの場を、もう、いゝ加減に切り拔けようと考へた。
『お前ツた、何もらツちやないがんだに、さア』と、おやぢは元の通りがん張つて、『そんけなことをぬかすんだんが――お前さま、人殺しをしたことがあんめいがよ？』
『ありません、な。』
『さられ見なせい！　おれもなかつたんだんが、人間一匹オ殺すのァ強い奴だすけ。おれはその強い奴になつて見たかつたんだんが。』
『………』藤吉は自分を殺すと云ひ出すのだと思つたので、聲も出ないでおやぢの顏を見つめたが、自分のからだを顫はせて思はず腰を浮かせた。
『お前さまも人間だんが、おれも人間だア。人間が人間を殺すにやア、おんの身を殺しても弱いとア云ふめいがアに。』

『そりやア――』聲も顫えて出にくゝなつてゐる。
『おれは燒けくそだすけに、さア、强いことをして死にていだんが。』
『と――申し――ますと――？』
『その人殺しオ――』
『あア――』藤吉はそこを逃げ出した。
『待たツせい、待たツせい！』おやぢは片足を引きずりながらも、足早やに奥の入り口の外まで追ツかけて出て、『お前さまを殺すと云ふんぢやアねいだんが。』
　その言葉の調子には言葉通りの樣子も聽えるので、藤吉は第一の入り口の外で足を踏みとどめた。道入りがけには氣が付かなかつた炭燒き釜らしいものが直ぐ左りの方に見えた。そして落ち込んだ谷合ひ道を隔てゝ、高く繁つた樹木が多くの暗い影をこちらへ反映させてゐる。晴れた夜天の上へ逃げるのではない以上は、たとへ逃げても、とても、ゐすくめられないではゐまいと云ふやうな氣分を、藤吉はこの周圍からも受けたのである。
　同時に、また、置き去りにしかけた荷物のことを思ひ出したので、何かの魔力に引きつけられたやうに、わけもなく再び敷居を跨ぎ返し、荷物のところまで行つて、それに手をかけたが、腰の力がどこへやら行つてしまつたやうにからだがぐら〳〵する。

『安心してゐなせい、安心してゐなせい』と云ひながら、また元の方へ導いて行くおやぢに從はないでは行けないやうな氣になつた。が、ぽたり、ぽたり、落ちた血の滴りが、おやぢの今往復した道を二重に跡づけてゐるのが釣ランプの光で見えるにつけても、元の氣分や落ち付きを回復することは出來なかつた。

『お前さまこそ弱い奴だんが。』おやぢはかう云つて、藤吉が腰を輕くおろし、兩手を膝のさきに置いてるのを見た。

『わたくしは、また』と、少し顏色を和らげて『あなたがわたくしを殺すとおッしやつたのかと思ひましたから。』

『は、は!』物足りなさゝうに笑つたが、火の上を見て、『まア、もッと喰ひなせい、まだたんとあるがアに— おれは十分だア。これで、もう、死ぬばかりだすけに。』

『………』藤吉にはまた何だか勝手が違つて來た。

『おれは』と、苦いやうな微笑を見せて、『おんの身を殺したんだすけに、この酒の醉ひが醒めりやア死んでゐるんだんが。』

『それはまたどうしたわけで御座りましよう?』

『だすけに、さア、かゝアに逃げられちやア、どうすることも出來ねいだんが。錢かねはみたかッ淩

つて行つたし、殘つた僅かの炭ア、けふ、賣り飛ばして、このどぶろくにしてしまつたんだすけに、おれは、もう、業が煮えて、業が煮えて――えゝどうでもいゝわや――おんの腹は燒けて、燒けて、炭よりやア眞ツ黑だんが。』

『お氣の毒です、な。では、どうでしよう、わたくしが何とか致してあげては?』

『旅の人でも、お前さまは親切だんが――どうせ、これが初會のお別れだすけに、もツとゝんの話お相手になつてくれや。』

『お話相手になれますればいくらでもなりますが』と、藤吉はわれ知らず涙を浮べて、『わたくしは只今五圓ばかり持つてゐると思ひますが、それをさし上げますから――』

『うんにや、錢ア入らねいだすけに、さア、おれはお前さまに末期の酒をついで貰ひていだんが。』おやぢは茶碗をあげた。藤吉は云はれるまゝに默つてそれにどぶろくを注いだ。前者はぐツと飲み欲してから、『錢を貰つても、また同じことだすけ。おれをなまけ者だとかかアが云つてたんだが、な。おれは働くのアきらひだすけ。かかアが喰はせてゐりやア、おれも生きてゐてやるんだんが、自分でかせぐ位なら、生きてゐても仕やうがねいわや。』

『それも御尤もですが――』

『まア、聽かツせい。おれはかかアに忠義立てをしただんが、かかアはおれを置き去りにしやアがつ

ただすけ。』

『ひどいです、な。』

『今から考へて見りやア、あいつ、間男を何遍やりやアがつたか、らッちやねい。五泉にゐた時から、おれをたゞ留守番や小使同様にしてよ、あいつばかりやア勝手な眞似をしやアがつてたんだんが。越後の女はよくかせぐだすけに、一番いゝ女はめかけをするがんだ。二番目ぐれゐのア娼妓になるがんだ。娼妓にもなんねい奴ア地獄になるがんだ。それにもなんねいのア炭燒きだんが。おんのかかアが五泉で旦那取りや地獄をやるツて云つてたんは皆うそだ――きッと皆あいつの樂しみをしてゐやアがつたがんだに！』

『へえ、そんなことを――』藤吉はわざとびツくりしたやうに胸をそらせたが、眼には始終おやぢの足の血が氣になつて仕方がなかつた。猪に嚙まれたには違ひなからうが、おやぢがそれを左ほど痛がりもしないのは、どれだけ澤山飲んだ酒だか、兎に角、その酒の爲めだと信じてゐた。そして顏の眞ツ靑になつたのも、時々顏をしかめるのも、亦、酒の爲めだと信じてゐた。

が、藤吉が胸をそらせて向ふの顏を見た時に近づいた程、おやぢのからだの顫えが烈しくなつて、これも亦血の足の方を氣にばかりするやうになつた。で、矢張り、痛むのをおぼえるのだ、な、と、藤吉にも思へたので、云ひ後れた傷の見舞をも何とか云はなければならなくなつたが、おやぢの引ツ

きりなしの辯にさえぎられてゐた。

『五泉にもゐられなくなつて――』聲までが一しほ烈しく顫えて來て、目が飛び出たのを目でその場に追ツ捕へたと云ふ風に上を向いてすツくりと立ちあがつた。

『どうもお痛いやうですが、な――』

『なアに、さア――こいつア』と、血の方を足踏みして見せて、

『かかアのからだと思つて、喰ひ殺してやつたんだがアに。――五泉にもゐられなくなつて、こんげな處へ這入つて來やアがつたんだんが、また逃げやアがつて、さア、――下の物品販賣所のおばばに、おんのことをなまけ者だと惡口云やアがつて、どん百姓で、おんの子供ほど若い奴とつツ走つてしまやアがつたがんだに、さア！』

『それにしても、お痛いでしようが――？』

『なアに、さア――おれは、もう、女と云ふものにやア愛想が盡きたわや！　あの、どん百姓の野郎も、業が煮えて、業が煮えて！』

『ほんとに、痛くはないんですか？』

『痛くも、痛くねいも』と、燒けに足踏みして、『親切なお前さまに遺言だんが。これでおれが死ぬるものならよ。若し助かつたら、血を分けた兄弟だんが。おれとお前さまとア、かかアの身の代りに、

おんの身の脹らッ脛を喰つたわや！』
『ふくらッ脛？』何だかをかしい云ひ樣だと思つて、藤吉はまさかと考へながら、念を押した。『何のです――猪のことを、越後では、オンノミと申しますか？』
『何もらッちやねいお前さまがんだに』と、おやぢはいら〳〵しく少し輕蔑の調子に振えながら、『おんの身とはおんの身だがアに！』
『へえ――』藤吉は仰天するほどびツくりした。おやぢの苦い微笑と得意氣とを以つて突き出す足を見向きも出來なかつた。じツとおやぢと目そを見合はせたが、既に飲み下した物の油切つたにほひと味とが俄かにどん底から込みあげる胸を手で押さへながら、『あなたの足の肉でしたか?!』
『だすけに、さア』と、おやぢはまた氣の張りを失つたやうにがツくりした物腰になつて、腰を下した。『おんの血は半分減つたんだんが。』
藤吉は自分もおやぢほど眞ッ青になつたやうな氣持ちがして無言でまた外へ飛び出した。
『畜生！ 逃げても駄目だア』と云ふ、初め通り濁つて險相な聲が聞えて、おもて土間へ倒れた樣子であつたが、その時、藤吉は外の炭やき釜の壁土につかまつて、げろ〳〵やつてゐた。なほ、幽かだが強さうな言葉が聞えた。『訴へるなら、訴へて見るがいい！ 人の肉を喰つたのァお前ッただぞァに！ おれは勝手におんのふくらッ脛を喰つたんだがアに！』

――(大正二年八月)――

明巣ねらひ

急ぎの原稿を書くので、僕はゆふべも徹夜をしたが、それでも書き終へることが出來なかつた。朝飯を喰つたが、一向に進まない。いつも、三度の飯のうちで一番うまく喰へる朝飯だが、好きな味噌汁のにほひでさへ食慾を進めて吳れない。

中途で箸を置いて、まだよくもわかない湯に這入り、それから、妻が暑氣除けにと買つてある懷中ヰスキで勢ひを付け、再び机に向つた。が、書いてゐることが夢でも見てゐるやうで、われながら不安心になつて來た。

『ゆふべは、珍らしく犬が餘り吠えなかつたが――』

から徹夜ばかりしてゐれば、たとへ犬はゐないでも、大丈夫に通過することが出來やうと云ふことなどがあたまに浮んだ。

僕等は近頃夜盜の豫期に襲はれてゐるのである。裏庭の竹垣根を越えて、一反ばかりの茄子畑の向ふに見える退職官吏の家では、下女が釜をしまひ忘れて置いたところ、朝になつてそれが無くなつて

ゐたので、飯を焚くのに困つたと云ふ。一空地を隔てたおほ屋さんでは、ふた朝つづけて、二階の屋根瓦に草履かわらじかの跡がついてるのを發見した。うちでも亦、横手にある里芋畑の中に、大きな足の接近した跡がついた。隣りの若夫婦は枕もとにかな盥を置いて寢ると聽いて、うちの小い女中もそれをまじないか何かのやうに習ひ初めた。

僕の家には、實際、盜まれて困るやうな物は、女房を除いては、大してないのだが、庭の箱にをさまつてゐる蜂蜜は取られたくない。然し、それが爲めには大きな犬を馴らしてあつて、なか〳〵注意深くそれを保護するやうになつてゐる。

その上の徹夜だから、夜盜には大丈夫だが、僕の書き物に對する不安が生じて來ては、犬やかな盥の保證では落ち付きを得しめることにならない。

『どこかで護摩を焚くから、二十錢寄附しろと云つて來ましたよ』と、妻が告げに來たので、

『なに！』僕は冴え疲れてゐる神經に觸れて、『寄附金を向ふから指定して來る奴があるか？』

『ことわつても、ぐづ〳〵云つてるから――』

『ぢやア、おれが出てやる。』

僕が追ツ拂つたのは職人體の男であつた。近所の高木と云ふ棟領で、あやしい者ではないと云つて行つた。隣りへは、同時に別な男が來たが、主人が雜誌社へ出かけるところへぶつかつたので、うる

さいから默つて云はれただけをポケトから出して與へたと、そこの妻君が僕の家の女中に話してゐるのが聽えた。
『また、こなひだのかたりと同じ手かも知れやアしない！』
『さうです、ね――やつてちやア、ほうづがありませんわ。』
『さうだとも！』昂奮が少しをさまると、少し眠くなつて來たので、『ちよツと休むから』と云つて、茶の間に横になつたのが、ぐツすり寢込んでしまつた。そして呼び起された時は、もう、正午を過ぎてゐた。が、僕は晝飯を喰はない習慣なので、けふのやうに早く朝飯を濟ましたのでも、矢張り、腹が喰ひたいとは云はなかつた。
『もう、直きおだんごが來ますから』と、告げるのを聽き流して、また湯に這入つた。しツとりとしとつてゐたからだ中の汗が加減のいゝ湯に解けて行くに從つて、押し迫つた重荷のことなどは殆ど全く忘れてゐた。
からだを拭いてる頃、女中がかけ込むやうに這入つて來て、
『奥さん、奥さん！』
『何だ、ねえ、きよとうに！』妻はその室から出て來て待ちかまへてゐた物を受け取らうとした。
『あの』と、息せき切つて買つた物を渡しながら、『今、をかしな奴がゐましたよ。』

『また齋藤君ぢやアないのか？』僕はから冷かした。三四日前、變な男が門外からのぞいてゐたのを女中が發見すると、主人はゐるかと聽いた。主人はゐないが、どなただと問ひ返すと、名も云はないで去つてしまつた。窓から妻が見てゐたが、帽子もかぶらない、はき古したやうな女下駄をはいた、太つた男であつた。

『あいつかも知れませんよ、こなひだ、夜、島田さん（退職官吏）のところへ二度目に這入つて、書生さんに追ツかけられた大男は――島田さんでしくじつたから、この近處をどこへ這入らうかと探しまわつてゐるのでしよう』と、女中がのべつにしやべつてゐた。

それがきのふ再び訪問して來たが、齋藤と云ふ、近處に住んでゐる某新聞の文藝欄記者であつた。

『違ひます！』かの女は少し怒つて、『旦那さんは直きに人を冷かすけれど、若し泥棒であつたらどうします？　お隣りはお留守で、ちよツと出て來るから頼むと奥さんに云はれてゐるんですから。』

『まア、早くお茶を入れてお呉れ。』妻はちやぶ臺に向つて竹の皮づゝみをあけた。

『お前は誰れを見ても泥棒か追ひ剝ぎだから、ね』と云ひながら、僕は湯殿を出て、衣物を引ツかけた。茄子畑からは涼しい風が吹いて來て、垣根の裏からあたまを出してゐる唐もろこしの葉もさらさらと鳴つた。

『違ひますよ』と訴へるやうに答へたのが、急須に湯をつぎながら、『あたしが出て行く時にも、津山

さん（隣家）の横手の枳殼垣根のそばで、何だかぶつ〳〵、ぶつ〳〵獨り言を言ひながら技師の持つやうな卷き物さしで寸方を測るやうな眞似をしてゐたから、あと戻りをして奥さんに云はうかと思つたんですが、――今、歸つて來た時も、向ふの畑の角で』と、前のとは細い通り道を一つ隔てたもろこし畑の方をゆびさして、『矢ツ張り、しやがんで、ぶつ〳〵、ぶつ〳〵、ぶつ〳〵云ひながら、寸方を取つてゐた――それが本統に取つてゐるんならまだしもだけれど、ほんの、うはの空で――こんな顏をして』と、わざとらしく目を細くし、頰骨の上へ皺を集めて、あごを横に持ちあげた。

妻はだんごの串を持つたまゝ吹き出した。

女中自身も吹き出したが、また一生懸命な口調で、

『人の方を見て、あツちの方へ』と、山の手線路をさして『行つてしまひました、わ。』

『もう、行つてしまつたんか？』僕はかう云つて、二度目の串に手をつけた。

茶を持つて來たのも、三串ばかり貰つて、

『ありがたう――でも、あやしいぢやアありませんか？』

『どんな風をしてゐたんだ？』

『職人のやうなしるし絆纏を着て、細い筋のついた股引きで、兵隊さんの靴をはいてました、わ。』

『電燈會社のしるしじやアなかつたか？』

『背中に大きくまアるいしるしはあつたけれど、字は何だかわからない、あたし、そいつの顏を、行きにも返りにも、じいツと見てやつたら、向ふも矢ツ張りじいツと見てゐました、わ。面倒臭い奴がゐやアがると、向ふでも思つたでしよう、ね。あたし、憎まれて、どこかでかたきを打たれやアしないかしらん?』

『行つてしまつたら、もう、いゝぢやアないか』と、僕は茶をすゝつた。

『それが、然し、行きにもゐて、また歸りにもゐたんですもの――また、返つて來るか知れません、わ。わたしが、もう、外へ出ないだらうと見て。』

女中は臺どころの入り口へ出て腰をかがめ、目かくしの付いた仕切りの裾から、隣りのおもての方を見て、また戻つて來て、

『今、誰れも見えないけれど――あたし、おそろしくなつて來た、わ。』

僕はかの女のいつものおしやべりに氣を取られて、實は、空想のやうに聽いてゐたのであるが、津山の一家が本當に留守で、そのまはりをうろついてゐたものがあつたと云ふ實際の事實に考へがぶつかつた時、棄てゝ置けないやうになつた。

『あいつぢやアないでせうか』と、女中は思ひ付いたやうに、『そら、けさ、護摩を焚くから二十錢呉れいツて云つて來たでしやう――あの時、お隣りへは別な男であつたさうだけれど、旦那さんが出が

けでうるさへからツて、ポケトから出してやつたさうだから――旦那さんが出て留守だと知つてるから、げさからねらつていたんでしよう。いやな男だと云ふから、今のもそれに似てゐたと云へば云へます、わ。』

『しやべつてゐるよりやア、見て來なよ。』

『あたし、おそろしい、わ』と、かの女は默つてゐる僕の妻の方を見た。

『何がおそろしいんだ』と、僕は力を與へて、『うちの庭からのぞいて見りやア知れらア、ね。どうせ玄關から御免なさいと這入つて來る明き巣ねらひはないから。』

『ちやア見て來やう。』

かの女はこは〳〵椽がはから下りて行つたが、直ぐ『どろ棒』と頓狂な聲をあげた。そしてかけ込んで來て、『大變です、戸を一つはづしてあります!』

僕は手に持つただんごを投げ棄てゝ臺どころ口へ飛び出した。下駄を引ツかけながら、『犬を放せ』と命じたまゝ、井戸端への出入り口から隣りの庭へ這入り、若しもう逃げ出したら直ぐ跡を追ふつもりで先づ玄關の方へまはつたが、何の姿も見えなかつた。更らに急ぎ進んで、向ふから横手へまわり、便所口のそばに天秤棒があつたのを引ツつかんで、袖垣から裏を窺ふと、果してそこに近い戸ぶくろから二枚目の戸がはづれて、横の方に立てかけられてある。逃げるひまはなかつたと思

つたので、
『もう、占めたぞ』と、僕の妻へ聽へるやうに叫んで、口笛を吹いた。そして僕は眼を、いつ泥棒がをどり出して來るかも知れない戸のあきの方から離さなかつた。そしてまた玄關の格子戸を內からあけてゐないかと注意した。が、一向に人の氣はひがしさうでない。
『向ふへお行きよ、向ふへ』と、妻の聲が僕の家の庭から聽える。ほどかれた犬はあッちでふざけてゐるらしいので、僕は再び口笛を吹いた。
すると、畜生は兩家の仕切りの裾をぬけて、一直線にいちごの葉がさかえてゐる上を飛んでやつて來たが、僕の前にしやがんだ切り、つくねんと僕の顏を見あげた。氣が付くと、僕は天秤棒を大きく地に突いて、がん張つてゐたのだ。水蜜桃の葉がさら〳〵鳴つてゐる。
もう一匹の犬も亦やつて來た。
『小僧、しッかりしろよ』と、僕はさきの犬の方へ云つた。この時は、既に張り詰めてゐた心はゆるんでゐて、われながら僕は僕の時期を失したのが些か滑稽にも見えた。
『ゐますんか』と、妻がゆつくり步いて、反對の橫手から出て來たので、
『ゐないとしても、こッちがまた明き巢ねらひの眞似も出來ないし、ね——まア、こゝはいゝから、うちの方を番してゐなさい。』

女中は、素ばしこくおほ屋へかけ付けたかして、そこの女中と共に、息を切つてやつて來た。そして、

『逃げたんです、わ、こゝに靴が脱いであつたのに』と云つた。

『さう』と云ひながら、おほ屋の女中があがりかけたので、僕はまア待て、この人が歸つて來るまでと制した。そして二人にそこを預けて、僕は棒をもとの所に返し、低い垣根の外を見ると、靴のかかとの跡やもろこしの根を踏み崩した跡がついてゐる。遠く眼を放つて、逃げたらしい方を見ると、どこもかも、赤や白の毛を拂子のやうに吐いた禾本科の廣葉ばかりでふさがつてゐる。

さら〳〵と渡つて來る風を受けて、僕は喰ひ殘しのだんごを思ひ出した。元の道を通つて一先づ家へ這入つたが、ちやぶ臺の上には、もう、目的の皿はなかつた。

『こゝでも明き巣ねらひがあつた、ね』と云ひながら、僕はもう一度湯に飛び込んだ。折角洗つたからだを、たツた僅かのから騷ぎで、もとの通り油あせにしてゐたのだ。

隣りが賑やかになつたやうなので、湯を出ると直ぐまた行つて見た。おほ屋の細君が二三人の子供をつれて來てゐたのであつた。

『大分取られたやうですよ』と、かの女は椽の上から僕に向つて、『まア、あがつて見て御覽なさい。』

『まだ歸つてゐないんですか――隨分のん氣です、ね』と云ひながら、僕も先例が出來たので多少心

を安んじてあがつて見だ。僕の家から一番離れてゐる四疊半の室にある箪笥の引き出しは、二つほど明け放たれて、殆どがらんどうのあり様である。

『この通りですから、ねえ』と、おほ屋の細君は氣の毒さうな様子をした。『でも、こツちの箪笥は、釘でこぢあけようとしただけのやうです。』

かう云つて導くかの女について、かの女の子供と共に、僕は玄關の二疊を通つて茶の間へ行つて見た。おほきな釘が一本うツちやらかしてあるところに、土足の跡が澤山ついてゐる。

『して見ると、ふたアりで這入つたのだらうか――一方は靴をぬいであつたさうですから？』

『へえ――』

そこへ顔色を換へて這入つて來た細君が家中を調べて見たが、別に何も取られた物はないと云ふことであつた。

『まア、それぢやアよかつた』と、おほ屋の細君が云つた。

『兎に角、公番へ届けるのです、ね。』僕もかう注意しながら、庭へ出た。そしてかの女と相談して、兩方の女中がそこにおしやべりをしてゐたのを一緒に公番のあるところまでやることにした。誰もどこの公番へ行くべきのか知らないのだ。

犬が二つとも、おもての明き地で、何事もなかつたやうに追ツかけ合ひをしてゐるのを見て、僕は

かの女と別れた、そして、茶の間から妻の室に聲をかけた、
『取られたものはないさうだよ。』
『さうですか』と云ふ返事がした。
妻もさし迫つた青韜の原稿を書いてるのを僕は知つてゐたから、その机に向つた樣子を見向きもしないで、僕の書齋へ引ツ込んだ。そして僕は、何か手柄でもした跡のやうな勢ひを以つて、書きかけの稿をつゞけた。

――(大正二年八月)――

獨り者

『下宿生活にも飽いた、飽いた』と云つてる藤島健吉は、矢ツ張り、下宿屋から足を洗ふことが出來ない。どうせ身うちのものがあるのではなし――女房を貰ふつもりでもなし――それに、宿の拂ひが後から、後から借金になつて行くので。

『あなた、少し御酒を召しあがるのをおよしになつたらどうです、ね、それが一番あなたのお爲めに惡いんですから』と、障子ぎはに立つたままのおかみから忠告じみたまた卑しめられたやうな言葉を受けたこともある。

そんな時に、渠は決してかの女の面前で反抗はしない。酒を飲み過ぎるが爲めに、拂ひもいつとなくとどこほり勝ちになるのだから。

『それもさうぢやが、なア――』から云つて、かの女にお酌でもして呉れないかと云ふやうな顏つきを見せた。それが、然し、われながら、恨みを帶びてゐるだらうと思はれた。來た當座はちやほや云つてこちらからさした盃をも一度や二度は受けたものが、この頃では、部屋の中へ片足も入れようと

夜をぶらついて遲く歸つた時、いきなり帳場にすわり込んで酒臭い息をつくと、おかみは優しい顏を話しに來てゐた若い衆の方からふり向けて、
『藤島さんは、お酒さへあがらなけりやア、いい人なんだけれど、ねえ』と云つた。
渠は宿の取り扱ひを、若いおかみさんを中心として、恨んで見たり、懷かしんで見たり――さうして、また、自分の部屋にゐると、いつも同じ結論に達した、
『酒をやめたからツて、おれの品格が一文の價値もあがるわけではない！』

過ぎ去つた時代を返り見ると、つい、こないだのやうにも思へるが、短歌界では、唯一の勇壯な歌人、壯烈な男子と隨喜せられて、時の青年には大いに持ててゐた。そして時が過ぎても、その勇壯と壯烈との特色を、短歌にも、隨筆にも、失ひたくなかつた。けれども、同人や後輩はずん／＼文界一般の變遷につれて、推移して行つて、渠ばかりが置き去りのやうになつた。これに憤慨して超然氣を生じ暫くは歌作を絕ち、二三の學生雜誌の選や豪傑物の著述やに專らとなつた。そして渠の雅號『泣花』が一部青年の間に忘れられてゐないのを、まだしもの心賴みにしてゐた。
『然しおれの熱情はそんな仕事に滿足してはをらん。』これを見ろと云はないばかりで、たまに歌の新

作十數首を集めて、關係ある雜誌に發表すると、『今更らあんな時代後れのものを』と、他の雜誌の投書家連中にまでも嘲けられた。『輕佻浮薄の弊害が今の文壇には充ち滿ちてをるんだ！』かう云ふ反動心が渠をしてます〳〵時をかまはぬ酒に親しませた。

出來心の生じた時には、月末を待たないで短歌や短文の選料を受け取り、それを以つて曖昧な家へ出かけた。そば屋へもあがつた。度々繩のれんもくぐつた。が、大した金でもないその金さへ、臨時拂ひは本人の身に付かないで、無駄に使はせるやうなものだと云ふ編輯者等の考への爲めに、今ではなか〳〵融通が利かなくなつてゐる。

『おい木山、酒を飮ませろ——飮ませんなら、金を貸せ！』かう云ふことをも、醉つた勢ひで、よく云つてまはつたものだが、もう、通用しなくなつた。

『また藤島の豪傑張りかい——よせ』などと、どんな親しい友人でも取り合はないのである。醉へば、また白粉くさいものを求めたくなつても、渠と一緒には、誰れも新宿へも吉原へも行かうとは云はない。

一昨夜は、某新聞社の記者で、餘り親しくはないが、突然氣が合つた人の宅に歡迎せられ、夜ッぴ

て飲みつづけた。ゆふべも亦同じ記者の宅を、醉ひに乘じて、夜中の一時頃に叩き起した。そして寢まきのままで目をこすり〳〵出て來た主人に向つて、

『おい、兄貴、もッと——飲ませろ！』

『えらい勢ひぢや、なア。』

『まだ足らん——お前と——一緒に——飲まう。』

『それも面白からうが、何もないぞ。』

『何も入らん——奥さアん、奥さアん！　何も——御馳走は——入らん。兄貴と一緒——に——酒を——飲むんだ！』

『おい、酒だとよ』と友人は座敷にあぐらをかいて、奥の方に向つて聲をかけた。

細君もつくろはない姿のまま出て來た時、健吉はかの女の所天を、

『おれの兄貴ぢや——親友ぢや』と云つて、その頸に抱き付いたりして見せた。

渠に抱き付かれた主人も、少しもいやな顏はしないで、細君を寢かしたあとで、

『飲み給へ——大いに飲み給へ』など云つて、おのれも一緒に飽くことを知らなかつた。

夜があけてから別れたのだが、渠にはそれが如何にも痛快で、痛快で——主人がこちらを最もよく了解してゐると思はれるので、けさも亦起きると直ぐ、素顏でだが、出かけて行つた。ところが、丸

で調子が變つてゐた。
『さう〳〵君のおつき合ひは出來ないよ――けさ、僕は細君におこられた。』
『僕も』と、出し拔けに自己をいつはる本意なさをおぼえながら、『酒を――飲みに――來たのぢや――ない――うちにをつても、寂――しいので。』
『そりやア、僕も知つてる、さ。然し僕は自由な君と違つて人に傭はれてをるからだで――けふは、今から、一二ケ所よそへまはつて來る用がある――社の命令で、な。』
『そん――なら、一緒に――出よう。』渠はあぐらから突然立ちあがつた。
主人は、落ち付いて、渠を見あげながら、
『君と出たところで仕方がない。飮むなら、飮むで、また晩にして貰つて、――まア、もう少しはええから、話して行き給へ。』
『僕ア――話が――ないから、なア』と、僅かに正直なわれに返つた心地になつた。
が、確かに醉ひに醒めたと思ふのに、なほ猪口を持つ時のやうに手が顫へた。からだが顫へた。そして、また、同じ時のやうに口がどもつた。
渠は濟まないと云ふ意を十分に籠めて主人を見つめてゐた。
『まア、もう少しええぢやないか？』

『…………』

『ちよツと坐わり給へ。』

『坐わつてもええが――君の――用の――邪魔をしても――…濟まんから。』

『ぢやア、晩に來給へ。』

『うん――』

主人が落ちついてゐただけ、健吉の心は反對にしどろもどろになつてゐた。

そこを出た時は、かの記者に對する反感に驅られて、今一人、小說家の某の家を訪ねようと思つたが、『どうせ、おれは自分以外のものとは反りが合はん』のだからと、どうも氣が進まなくなつた。その癖足は刻み足になつてあたりに何があつたかも氣付かないで、〇〇病院の廣告柱ある橫丁から大塚の電車通りを橫切り、天祖神社の境内に來た。

狹いながらも、杉や榎の木やいてふなどの古木が生ひ繁つて、かツかと照る太陽の光線を高い空中で防いでゐるところだ。そこへ片隅の小笹の小徑から這入つて、日光の直射を免れたのが、今友人から受けた恥辱の汗を拂ひ得たやうで、少しは氣が落ちついた。

何の願ひがあるのか、古びた宮の階段をのぼりつめて、頻りに拜んでゐる年增の姿を見た。身成が小さツぱりしてゐるので、

『顏も美人だらうか』と聯想した。『おれも今一度若い女にまじつて、神に祈禱をさゝげるやうな氣分になつて見たい。――何の願ひも報いも入らん、ただ祈る氣になつて見たい。――無垢で、無邪氣で、希望に滿ち、あんな瑞々しい心になつて見たい。――金曜日――讚美歌――說教――會員の感話――懺悔――天にまします父よ』と、渠はいつのまにか自分の今しがたの失敗を神にでも取り消して貰ひたかつた。そして『ん』と變挺な口つきをして胡麻化し笑ひを身づからしたのを、誰れかに見られはしなかつたかと、あたりを見まはした。

と同時に、今はゐない薄情な妻のことが思ひ出せた。

『女はすべて惡魔ぢや！　僞善者ぢや！　淫賣ぢや！　結局、金のあるところへころげ込むのぢや！うはべでは、如何に優しい聲を出して、主よ、主よなどと歌つても、根本にしツかりした愛がない！貞操がない！　確信がない！　ましてあんな偶像信者が、多分、無意味な家內安穩ぐらゐを祈つてるのだらう。

ぱち〳〵と手を叩く音がした。そしてかの女は合はせた手と共にあたまを下げた。
また、ぱち〳〵と手を叩いた。そしてあたまを下げた。

直ぐまた手を叩き終はると、立ちあがつて、裾をととのへながらこちらを向いた。然しその顏は美人でも何でもなかつた。

『畜生！』渠はいま〳〵しさうにかう默言(もくげん)して、横を向いてしまつた。

渠がゆるやかに足をまはして、からだを向き直した時、女は取り澄まして、渠のそばを、敷き石に從つて、鳥居の方に歩いて行つた。

渠もぶら〳〵と歩いて、境内で、宮のまはりや神樂堂をまはつて見てから、神樂堂と十歩も隔たつて向き合つたいてふのもとへ行つた。そして、また、そのまはりをまはつた。大きな根が地上にでこぼこと起伏してゐる、その一つに知りつつふと躓(つまづ)いて、すんでのことでころびかけた。兩手をひろげて全身の釣り合ひを持ち直したはずみで、寢不足の爲めに半ばとろりとしてゐる精神が引き立つて來た。

木の幹はおほかた五かかへはあらうと思はれた。殆ど一面に青苔が蒸して、手のとどきさうなところのうろに宿り木が一つ育つてゐる。

その宿り木の枝へ渠は飛びついて見たが、とどかなかつた。

今一度この大木をまはつて見てから、じツとその幹に近より、根の脈と脈との間の、足場(あしば)がいいところを選んで、背中を幹にもたせかけた。

境内全體の樹かげが渠を中心に包んで吳れたやうで、ひイやりした感じが渠の背中にも傳はつた。
『忘られしおほ木の幹………千万年の努力の結果………苔皮の下なる脈搏………わが血をどよます』などと、渠の歌想はいつもの通りに湧いて來た。が、これが有形の歌になつて發表せられると、舊い、舊いと批評せられるので、わが身でわが身の心までいまく\しくなつた。そして從前のやうには素早く鉛筆と手帳とを取り出せない。
『白紙の手帳など死も同樣ぢやないか』と叫ぶ聲が、どこか高いところでしたのが、渠の精神へ聽えたやうだ。思はずおもい目蓋をあげると、頭上に輕く動いてゐる枝には、投扇興の的形のやうな靑葉が他の葉かげからもれる光にきらく\してゐる。
『僕だツて、ああ云ふ光のひらめきがないではない』と考へ込んだ。
うちに向ふとも、外に向ふとも付かない渠の目の中へ、竹ざをのさきに紙袋をつけた蟬取りが四五名列を成して順番に反映した。そして順番に渠の前をよぎるものも、よぎるものも、怪しみの目付きを投げてこちらを返り見、返り見して行つてしまつた。そして、お宮の後の方で、
『すりだよ。』
『乞食だい。』
『狐にばかされてるんだらう。』などと云ふ聲が聽えた。

『馬鹿にしてゐやアがる！』渠は子供にまで無邪氣な同情を惜しんでゐるのであつた。どうして自分がすりに見える、乞食に見えると、渠も亦ふと自分自身を返り見た。

アルパカの夏外套で隱して出た紺がすりの泥のよごれ跡に氣が付くと、けさの夜あけにあの友人の家を出て、一旦宿へ歸つた時のことが浮んだ。渠は友人と別れるのが情婦などと別れる思ひであつた程、酒の輿に乘つてゐたのであつたが、ふら〳〵といい心持で步いてるうちに、横たへた材木にぶつかつて、水氣のある地べたへぶツ倒れたのであつた。

この、渠には手がらなる事件とその證據なる負傷とを報告するのが、けふまた友人を訪問した理由の一つでもあつた。が、この鼻ツぱしらを折られて、それを報告する氣分になれなかつたのなど、あれやこれやの凡てが今更の如く自分の愚を示すのだと思はれ、自分なるものが全く社會から見離されたもの丶やうだ。

『あア、あア』とばかり口のうちで叫んで見たり、『ふ、ふん』と鼻で笑つて見たりしてゐる人間に、いつのまにか、なつてるのを發見した時は、『え丶、ま丶よ、失敗などは忘れてをりさへすればい丶んだ。』から自分の心をふり起して、いてふの根もとを離れた。

再び電車通りへ出ると、暑い光に照らされた周圍の雜踏の音や色や形やが段々遠方へあとずさりして行つて、自分のあたまもふうわりと稀薄になつて行つて、自分の足は夢の世界を踏んでるやうだ。

『おれは眠たいのだ、な』と云ふ暗示を得てから、宿へ急いだ。

渠が考へて見ると、かれこれ六七時間はぐツすり寢たんだらう。目がさめると、もう、あかりが付いてゐた。直ぐ『飮むなら、また、晩にして貰つて』と云ふ友人の言葉を思ひ出したが、『ふん、もう、永久に行かんでもえゝ』と獨りごちながら、置きツ放しの膳に向つた。が、燗德利のゐないのが寂しいので、箸を置いて手を叩き、女中に一本賴むと命じた。

『一本だけですよ』と云つて、女中が燗をしたのを持つて來た。が、それだけでは足りさうでもなかつた。ちびり〳〵といゝ加減手酌をしたあとの德利を耳もとでふつて見て、

『どうも――二合這入つてゐないのは當然だらうが――一合五勺もないやうだ。』

渠はまた手を叩いた。

『へ――い』と答へて、廊下を通つてゐたのが顏を出したが、渠が膳に向つてゐるのを見て、他の女中と同じやうないやな樣子をした。

『もう、一本なァ。』渠はそれでもかの女の氣をそこなはないやうにして、『おかみさんにさう賴んで。』

『可けませんよ、あなた。』あまへるやうに眉にわざと皺をよせて、『あがるなら、一本ときまつてるんぢやア御座いませんか？』

『そこを、お前の働きで、なア』と、渠は微笑して見せた。

女は行つてしまつたが、待つてゐる品は來さうでもなかつた。

『けちなおかみだ、なア。』かう低語してから、さて、飯を喰はうかどうか考へて見たが、どうも飯びつの蓋をあける氣になれない。で、立ちあがつて兵見帶を締め直し、板の間をわざとがたツぴし云はせて外へ出た。

渠が毎晩のやうにぶらつくのは電車通りであるが、今夜も習慣通りに足がそこへ向いた。大塚終點乘り場の赤い電燈のもとに立つて、ほんのりとは醉つて來たらしい心持を夜風になぶらせてゐると、洋服や法被の男、年增や若い娘などが、入れかはり立ち代り乘つて行く。それが自分に直接な交渉がないだけに、直接な交渉があつた人々よりも、何だか懷かしい。語り合ひさへして見れば——盃の交換さへして見れば——直ぐにも意氣投合が出來るものがあるやうな氣がする。

かう云ふ人々は——おれを見棄てたこともない——そら、丸髷の女の白い足が見えた。

おれに喧嘩をふツかけたこともない——今、仕事師らしいのが乘つた。

おれに下らない忠告をしたこともない——あれはどこの學生だらう？

却つて學問などしない奴の方が、正直で、素直で、小理窟は云はん——あの勞働者の體格のよさ！

しッかり働け！

おれに好きな酒を飲ませて肝膽相照して置いて、そのあとでおれを馬鹿にして、つッ放すこともしなからう——ああ、あのいやな、近處の、○○雜誌の編輯者が行く。手に持つたのは、ゆすりの種にする原稿ぐらゐだらう。

提灯を消してからにしようか、しまいかとまごついてゐる、あのお婆アさんの足もとがあぶなッかしい。

然しお婆アさんはよぼ〳〵しながら、提灯を吹き消して乘つた。

そのあとには、どこかの娘さんだ。が、おれには料理屋かそば屋の女中以外は用がない。

ふん！優しい姿に薄情を隱したやうなもの！どいつでも、橫ッつらを張り倒してやれ！

『大塚も盛んになつたものぢや——ええ加減に發車すればよからうに、なア。』

『お乘りぢやアないのですか』と云ふ車掌の聲がして、邪慳に鈴の音がチン〳〵と鳴つた。

『何ぢや、馬鹿らしい！』渠はぷいと步き出した。が、別にさして行くところもないので、並んでゐる店をぶらり、ぶらりと見て步いた。氷屋——煙草屋——疊屋——バケツ、ざる、蚊やり香、釘等が飾つてある荒物屋——赤いトマト、靑いきうり、茄子、唐茄子、梨、西瓜等の八百屋——いり豆や南京豆の店——二三度這入つたこともあるそば屋——金がなければ這入れない鳥料理屋の門——すべて

が今の渠には何等の關係もない。そして曲り角に立つてゐる○○病院の廣告柱の字を暫く立つて讀んでゐた。

『内科——婦人科——花柳病科——梅毒、痳病、痔。』

『おれの知つたことぢやない』と云つて、向ふ側に轉じた。

角のすし屋の酢のにほひがぷんと鼻をついたが、渠は直ぐ心でふところ錢を勘定した。そしてこれは月末まで役に立たせねば困るものだと念を押して、通り過ぎた。

酒屋——荒物屋——どら燒き屋——煮豆屋——床屋——藥屋——播摩大椽と云ふ古風な名の菓子屋——下駄屋——八百屋——氷屋——洋酒販賣——建築中の三階料理屋。そこに店は盡きて山の手線の停車場道だ。そしてそこは眞ッ暗だ。

また渠はあと戻りをしかけた時、電車が終點へついて、五六名の男女が順ぐりに降りた。知つた人でもゐないかと、立ちどまつてじツと見てゐると、一人の細君らしい女は渠を四五年前に見棄てて去つた妻によく似てゐた。

『おれも酒と不勉强の爲めに家を持ち切れなかつたのは事實ぢやが、あいつも薄情な奴であつた——大阪へ歸つて、またよそへ片づいてるさうぢやが——』

かう考へながら、何氣なく、それに似た女のあとをついて行きかけた。すると、よこあひから、聽きおぼえのある強い聲がした、

『おい、藤島君！』

『おう』と、健吉はふり向いて、向ふの強い一聲にその人の強い人格までを思ひ出し、殆ど全く忘れてゐた反感をまのあたり再現したが、同時にまた當座の氣分はこれを懷かしまないではゐられなかつた。つッ立つて來るのを待つてゐる人の方に進み行き、『戸崎君！久し――振りだ――なア。』

『どうしてるんだ？』

『うん――』と、少しひるみ氣味になつて、『まア相變らずぢや。』

『相變らず飲んでるんだらう。』

『まア、そんなことしか――僕にや――樂しみが――ないから、なア。』

『どうせ君ア飲まないでゐられないんだが、この頃ア何をしてゐる？』

『大したこともせん――まア、どこかで――一つ飲まう。』

『僕アちよッと友人を尋ねた歸りだが、金もないから、ね。』

『僕ア持つてるよ』と、健吉は片手で戸崎の肩を押さへてゐた。

『いつも貧乏な君とは知つてるから、ね――』

『さう——云ふな、まア、——お互ひだ。』と、歩き出した。

『もう、酒臭いぢやアないか？』

『僕アもツと飲みたいのだ。』

『それが君の惡い癖、さ。』

『惡く——ても、よくても、——僕アどうせ——駄目ぢや——このそば屋——で許——して呉れよ』と、健吉はさきに這入つて、二階へあがらうとした。

『ここでいいぢやアないか』と、戸崎は下の間の疊へ土間から腰をかけて、『用があるので、ゆツくりしちやアゐられないんだから。』

『まア、暫くつき合うて呉れ——姉さん、酒を持つて來い、酒を』と云ひながら、健吉も腰をかけた。

『君、何をやる？』

『飮みたけりやア、酒だけでいいぢやアないか？』

『でも、君は寂し——からう。』

『ぢやア、盛りでいい、さ——どうせ僕ア喰ひたくない。』

『ぢやア、姉さん、盛り二つ！——酒を早く——持つて來いよ。——今度、金のある——時うんと——おごるよ。』

『君におごられないでも――どうしてるんだ、一向來ないぢやアないか、酒ぐらゐは飲ませるのに?』

『うん』と、云ひよどんで、健吉は思ひ浮べてゐた、この人から曾て貧弱な歌人だからもツと眞面目に修養しろと云ふ激烈な忠告を受け、一時の發奮からこの人をナイフで切り殺さうと出かけて行つたことを。その時、この人もそれと悟つて一層大膽に渠をあしらつたので、渠は手を出せなかつた。且、大した恨みも惡感も殘さないで歸つたが、その後敷居が高くなつて、ここ三四年はうと〳〵しくなつてゐるのだ。『尋ねなけりや惡いんだが、なア。』

『來たくなけりやア來なくつてもいゝが、來たからつて損はないよ。』

『そりやさうだ。』運ばれた酒を酌しながら、『一遍行くよ。然し君が――歌をやめてからの――活動振りには、僕は感心してをる――君の――特色ある歌を――やめたのも――惜しいが、なア。』

『いくら特色があつたからツて、作れなくなつたらそれツ切りぢやアないか――君のやうに若い熱がなくなつてもなほ熱のあるらしいことを歌はうとするのもよし惡しだ。』

『だから、僕もやめた――もう、やめた。』

『して、今、何をしてゐるんだ、ね?』

『僕ア駄目ぢや――まア、飲み給へ。』かう云つて、健吉は愉快に盃を重ねた。

『君は酒が弱い癖に飲みたがるからいけない。』

『どうして！この頃飮める——やうに——なつたぞ。』
『でも、もうぐた〳〵してゐるんぢやアないか？』
『うちでも——飮んで——來たんぢや——をとゝひの晩から——飮み——つゞ——けぢや。』
『それでも、飮める間は、まア、いいさ。』
『君は、な——おれの——ことを——頸でもくゝつて——死んだら、死に甲斐があるだらう——云ふた——さうぢや、な。』
『うん、云つた』と笑ひながら、『そんな勇氣が出るかい？』
『いや』と、健吉も醉つて目の釣つて來た顏に微笑を見せて、——それが鼻すぢが通つただけにすごい——『おれは——そんな死に方はせん。然し、な』と、片手を出して戸崎の言を押へるやうにして、
『おれは酒で——死んで——見せる。』
『それもよからう——君としては、ね。』
『まア、飮み給へ。』酒を相手にもついでやつて『然し君はえらい。僕ア駄目ぢや。』
『たとへ、さ、君が駄目で、僕がえらいとしても、僕のことは君が僕のところへ來た時に云はう。君自身が君自身をどうしてさう駄目にしてしまつたんだ？それが分つてるか？』
『分つてるよ、君はえらい——僕ア駄目ぢや。』

『…………………………………』

『僕ア駄目ぢやー―おゝ』と、思ひ出して、おもい眼をあけ、相手を見たが、直ぐからだをぐたりとさせながら、『今年の――正月の――〇〇新報を――見たか、〇〇新報を?』

『見なかった。』

『おれア書いたよ、過去の――歌壇を。』

『見なかつた、ね。』

『一度――見て呉れよ――君はこれ、さ』と、右の手を肩ほどあげて、左の手をその一尺ほど下に持つて行きながら、『Tがこれ、さ。』それから、右の手をおろして、左りのまた一尺ほど下へ置いて、『Pがこれ、さ。』から渠は手眞似までして、自分も新らしい歌のことは分らないではないぞと云ふ意を示めしたかつたのだが、あたりがぼうつと暗くなるやうになつてしまつた。

『見なかつた、ね。』

『さうか、なア』と云つて、横に倒れた時、左の手をぐにやりとおつゆの德利に當てたので、低い德利もひつくり返つた。健吉は横に起きあがつて、それを直しながら、『君、來てをるぞ、喰ひ給へ。』

『僕アさう喰ひたくない。』

『然し、なア』と、元の通り起きて、『僕も――仕事は――してゐるよ、今の青年間――には――まだ

勢力がある——から、なア。』
『けれども、選者なんか下らないぢやアないか？』
『選者ばかりぢやない、豪傑の傳記物を書いてをる。』
『…………………………』
『それも下らん、——さ——どうせ——世の——中の——ことは』と、口までたるませて、『皆下らん！好きな——ことして——死んでしまへばえゝんぢや。』
『君にやア死ねもしまい。』
『さうだ、死ねん——まだ世間の酒を——飲みたい。』
『それはさうとして、今夜はこれで別れようぢやアないか？ちよつと君も知つてるA君を訪ねる必要があるんだから。』
『まア、えゝ——まア、えゝ』と、あわてゝ押しとゞめ、『久し振りで愉快ぢや。矢つ張り、もとの——友人は——えゝ、なア。もつと飲み給へ、僕ア君を——惡く——思つてはをらん。君は——僕の——眞からの——友人ぢや。』
『無論、君が僕を惡く思ふ理由はない筈だ。僕も君に友人として出來るだけのことは盡した。』
『さうだ。さうだ。僕は心で感謝してをる。』

『然し、もう、引きあげようぢやアないか、大分君も醉つてゐるよ。』

『いや、まだ醉つてをらん。』德利をふつて見て、『姉さん、もう、一本。』

『もう、いゝよ、さう飮めないのだから。』

『まア、さう云ふな、――姉さん。』

『よしなよ、姉さん、この樣子だから、ね。』

『君アいかん、――醉へば醉ふほど――愉快ぢやないか？』

『君ア愉快だらうが、僕アまだ用がある。』

『まア、えゝさ』と云つたが、納得して兩手を膝の上に重ねて、からだのぐらつくのををさへ、『讀んで呉れた、な、〇〇新報を？』

『讀まなかつたよ。』

『君が一等えらいの、さ。』『また同じやうな手眞似をして、『その次ぎがTさ。それから、下がPさ。』

『さう云へるやうになつただけ、君が多少でも冷靜に考へて來たんだらう。』

『そりや僕も考へた。然し、なア、Tは――それを讀んで、あれだけ自分で惡口――云ふてをつた――Pのところへおだてに――行つた。さうして、なア、TはPを味方にして――おれの原稿を――採用せん――やうになつたぞ。』

『今更そんなことア、まさか、ねえ――』

『なアに、あいつ等ア馬鹿野郎ぢや――世の中のものア皆馬鹿野郎ぢや。然し君だけはえらい。――詩人戸崎、小説家戸崎！』

『は、は、はア』と戸崎は笑つた。

『おれは』と云ひかけて、ふら／＼と倒れようとしたのをまた自分で僅かにささへて、『眞面目ぢやぞ、いくら――醉うて――をつても。ぢやア、讀んでくれたな、その――あの――』

『まだ讀まないよ。』

『さうか』と云つて、横に倒れた。

『おい、ここで寢ちやア困るぞ、起き給へ。』

『うん、ちやア起きる。』健吉は起きて懷中を探つて、がま口を取り出した。そして五十錢銀貨を疊の上へ投げた。

『姉さん』と、戸崎はそばから、『つり。』

『失敬した、な、今度またゆツくり――飲まう。然し、な』と、健吉は相手の方にすり寄るやうにして、

『おれもまだ青年に――勢力が――ある。傳記物を書いてをれば――藤島――先生ぢやぞ。』

『それも結構だらう。』

『然し、君ほど——えらくは——なれん、さ。おれア——酒で死ぬ。』

『どうせ、誰れも彼れも何かで死ぬだらう、さ。』

女の持つて來たつりを健吉は、それでも、勘定してがま口へ入れた。そしてそのがま口を懷中しようとして疊の端に落した。

『失敬した、な』と、云ひながら、その手は落した物を直ぐ再び拾つて懷ろに入れた。『愉快だ！愉快だ！久し振りで愉快であつた。』

『さア、出よう』と、戸崎は立ちあがつた。

『さうか』と云つて、健吉も立つた。

健吉がさきに立つてそば屋の暖簾を出た時、

『まだこれからどこかへまはるのか』と云ふ同じ强い聲が聽えた。

『なアに、もう歸る！』渠はかう云はなければならないやうな反感をまたおぼえ初めた。

『ぢやア、失敬するよ』と云つて、戸崎が電車の方へ驅けつける後ろ姿へ、今一度目を放つたが、直ぐあたまがふら〳〵したので、ちよツとまぶたを閉ぢた。そして千鳥足に進みながら、もとの獨りぼツちになるのがどうもいやであつた。

『おい、戸崎、またやつて來いよ。』

『君もやつて來給へ。』

『おい、戸崎！』

『おい、何だ？』

『おい、戸崎！』

『まだ用があるか？』

『おい戸崎！』

『…………』

『戸崎！』

『…………』

『戸崎！』

『…………』

健吉は戸崎の乘つた電車が行つてしまつたのを知らないで、頻りに聲をかけてゐた。

『あぶない！』

突然の聲に氣が付いてあとずさりした前を、別な電車が進み出た。そして『馬鹿』と投げつけるや

うに叱りつけたものがある。

渠はそれと反對な方へ歩いて、戸崎と出くわすに至つたところへ來た。そしてあの時見た女はどこの誰れであつたらうと云ふ考へにばかり耽つた。

醉つた目はあいてゐることが出來なかつた。

――（大正二年九月）――

醜婦

弟の友人が二階で二三名、興に乘じておほ聲で頻りに何か話し合つてゐるのを聽きながら、京子は茶の間の火鉢のふちに兩肱をつき、招き猫のやうな手つきの上に腭を載せて、餘ほど鋭敏に耳をそば立ててゐた。

弟は、いつのまに勉強したかと思はれるほど詳しく、音樂のことを話してゐた。すると、また、小說のことに移つて、今の作家のうちで誰れはどうの、彼れはかうのと云ひ出した。

それを反駁する聲も聽えるし、賛成するのもあるが、どちらが高濱さんで、どちらが增野さんなのか、自分には見當がつき兼ねた。

弟の友人が訪ねて來ると、二階へあがつて行く後ろ影を、きツと、障子のすき間や破れからのぞいて見るので、それがたび重なるに從つて、その顏や姓名ぐらゐはおぼえてゐるやうになつたが、そんな男の人とも直接に話して見る勇氣も出なければ、また機會もない。

「女はさう、お政のやうにお客さんの中へ出しやばるものではない」と、母はいつも嚴格にこちらを

たしなめて來た。こちらは　また　たしなめられるまでもなく、われから、どうしても、男の人と顏を合はせるのが恥かしくツて溜らないのである。現在自分の弟に對してでさへ、弟が女狂ひをするやうになつてから、また續いて今の妻を貰つてからは、何となく面と向つて話しをすることが恥かしい。

『ねえさんのやうな變人は、世間にあまりないです』と、弟はよくふくれツ面をするが、それに對して一度も直接に申しわけをしたり、强情を張つたりしたことはない。そして頼むことでもあれば、必らず母の口をとほして云ふ。

『お京、お銚子が出來過ぎるといけないから、ね。』母は弟の嫁に頼まれて、臺所の方で香の物を切りながら注意した。

『ええ。』煮え切らない返事をして、銅壺の中から、それを出さうとした。熱くツて、ちかには持てなかつたので、布巾で以つて猫板の上に移した。

なげしに古ぼけた槍が二本——それの下で、臺所につづく隅に、火鉢が置かれてある。かの女は今臺どころの方に向つてゐる。

その脊中に當つた壁に添つて、舊新兩樣の簞笥が二棹あつて、その比較的に新らしい方ので、鏡臺が載つてるのの前には、蓙にたたんだ京子の衣物が這入つてゐる。そしてかの女はそれをあす着て出ることばかり考へてゐるのだ、弟が許してくれるだらうか、それとも今回は許して吳れないだらうか

と。

かの女の父がまだ存生の時、たッた一人の男の子が家代々の家業なる國學の系統を繼ぐことを嫌ひ、經濟學を專修する爲めに或私立大學へ這入つたのを、父は一生の遺憾とした。その代り、京子を師範學校に入れ、同時に國文や漢學を敎へ込んだので、かの女は立派に小學敎員になれる免狀をも持つてゐる。また、それを得た當初は、半ケ年ばかり、日本橋區の或小學校で正敎員を勤めてゐた。

これを、突然勝手にやめてしまつたので、こちらをばかり愛して吳れてる母でさへ怒つたのだもの、當時僅かに或會社へ出た弟は、戸主としての負擔がそれだけ重くなるのを默つてはゐなかつた。が、――

『ねえさん、お燗が出來て？』弟の妻が二階をとん／＼下りて、障子を明けるが早いか、つか／＼這入つて來て、かう聽いたので、京子はうは目にその顏を見ながら、あげてあつた銚子を渡した。そして向ふが兩手に香の物と銚子とを持つて行つてしまうまでも、言葉は發しなかつた。

『女だてらに、男と一緒にお酒など飮んで』と、心のうちで、『あの赤い顏！　よく何ともないことだ、不斷は、賤業婦か何かのやうにお白粉ばかり塗つてるのに！』

『お客さんが飮ませるから仕方がない』と、あの女は能く云つてゐる。何かと云ふと、『お客さんが』とか、『所天の命令だから』とか云ふ。あの女には、全く見識がないのだらうか？　弟は男だ、男の云

[illegible]男の品行の直る時はない。弟のだらしなさの改まる時はない。
かう云ふことを注意したこともあるが、すると、直ぐ弟の耳に這入つて、渠はひどく怒つた。
『ねえさんなんかが何もぐずぐず云ふには及びません、わたしの女房のことはわたしが引受けてゐますから！』
『姉に向つて、さうつけつけ云ふものぢやない』と、その時、母が仲へ這入つた。
京子は結婚する時の用意にとて、今は方づいてる妹にも劣らず、父のゐる時からいろんな物を拵へて貰つた。自分の所有に屬するものとしては、立派な桐の箪笥もある。——比較的に新らしいのがそれだ——長持ちもある。鏡臺もある。なかなか高價な衣物やその附屬品もある。が、ただ惜しいので、曾て身に着けたことがない。——その間には、段々流行に後れて行くのもかまはないで。——俸給を取つてた間でも、別にまた價うちの安いのを買つて、出勤の時の服裝にした。その服裝でさへ、今は入らないので、箪笥の引き出しにしまひ込んである。
たまには、それを出して、自慢さうに弟の妻に見せたこともある。
『ねえさんはこんなにいい物を持つていらッしやるのですから、これを着て少し外へ出たらいいぢやアありませんか、おめかしでもして？』
『わたし、おめかしは嫌ひだ。』かの女はお湯にさへ一週間も二週間も這入りに行かない。

自分の持つてる金を使ふのがいやなのだらうと思つてか、弟は湯錢をもきめて、毎月呉れるのは呉れるが、それと髮い錢とはそツくりそのままに母に頼んで郵便局へ貯金して貰つてゐる。

晝間はどうも晴れがましくツて、そとへ出たくない習慣が嵩じて、夜になつても、おツくうだとか、熱いから寒いからとか云つて、家にばかりゐて、妹ばかりを相手にしてゐた。その妹は、父の昔の同僚であつた人の息子で、房州の可なり資産があるものの家へ、近頃片づいて行つた。

かの女が珍らしく而も度々外出する氣になつたのも、そこへ訪ねて行くのが目的である。『姉さん、姉さん』と、うちで皆に云はれてゐるのは何だか親しみが薄いやうであつたのが、妹の新らしい緣家へ行つてさう云はれるのは、尊ばれ、敬まはれ、親しまれて、どことなく自分からも氣が許され、その家の人々には勿論、妹の所天にまでも、自分は妹よりも丁寧にされ、妹よりも多く情愛を向けられてゐるやうに思はれる。

『もしあの人と二人ツ切りでさし向ひになるをりがあれば、もツと情愛を見せて呉れるだらうに——妹がこツちへ出て來るあとへ、入れちがひにでも、若しわたしが向ふへ行くと云ふやうなことがあれば』などと空想して見た。

けふも、弟の機嫌のいい時間を見て、あす向ふへ遊びに行く許しを母から頼んで貰ふことになつてゐたが、晝つ間はをりがなかつたので、それを樂しみに、まだ寢床へも這入らないで、母と共にお客の歸

のを待つてゐるのである。

二階は暫らくひツそりしたかと思ふと、俄かに弟の妻のあまへるやうな言葉が聽えた。

『いやですよ――もう、わたしは飮めません、わ。』

『まア、もう一杯』と、誰れかの聲だ。

『それよりやア、早くねえさんを呼んでおあげなさいよ。』

『……』京子はわれ知らず身をすくめた。そして入らないさし出口をきいてると思つた。

『お政も』と、あの聲にぢツと耳を傾けてゐた母は、火鉢を中にさし向ひながら云つた、『酒だけはよせばいいのに。女が醉つてるのは、見ツともないものだ。』

『信さんが飮めと云ふんですツて。』

『お客やをつとが飮ませるからツて――そりやア、信にも困る。お父さんによく似てゐて、酒が好きで、女が好きで――それに、又、來るお客も、來るお客も、おほ酒飮みばかりで――今度のお勝の亭主も信とはいい相ひ棒のやうだ。お前だけは飮み手のところへやりたくない。』

『……』京子は、母の毎度の云ひ分だから、別に返事もしなかつた。が、妹の亭主のやうな人なら、飮んだツてかまやアしないと思つた。妹にばかりでなく、自分に向つても、親切で――丁寧で――よく氣がついて――時々おどけたことも云つて――

『高が土臭い百姓ぢやアないか、敎育もあまりないやうな――』

『さう馬鹿にするのはひどい』と、京子は曾てそれを聽いて私かに辯解した。『いい人だのに可哀さうだ、では、妹をやらなければよかつたのに！』そして今や、田舍の舊家の嚴丈なかぶき門を見てゐた。それを這入ると、四角い石が大きな敷石が眞ッ直に十枚も十二三枚も並んで、それから黑びかりのする大きな玄關だ。廣い土間――幅のひろい敷臺――一間の長方形に切つた圍爐裏――よく艶の出た雁木にかかつたおほ鐵瓶――十間四方もあると云ふ臺どころ――池や築山の見える座敷――そのまた奧のしんとした座敷で、勝子は今頃をつとどうしてゐるだらうと考へると、こちらのあたまはねたましさでぼうッとのぼせて來る。

妹の亭主と比べると、いやであつたのは日本橋の小學校の敎員どもで――こちらへは命令や用事の外は滅多に口も聽かない癖に、新米の女敎員のことを、かげでは美人、美人と呼んで、實際の名は云はず、ぢかに會ふ時は、また華族のお姬さまでも取り扱ふやうに馬鹿丁寧を見せてゐた。信でもそんな男なのだらうか、お政さんにばかりいい物を買つてやつてゐて？

『いい加減に歸つたらよささうなものだに』と、母は氣の勝つた顏になつて二階をにらんだ。『信も信だ。隨分あんなに交際が廣いのだから、誰れかひとりお前に釣り合ふ人を見つけて來ればいいに、ねー―わたしだッて、もう、いつまで生きてゐられるか知れやアしないし――』

―……』また返事はしなかつた。が、京子は別に結婚に反對したことはないので、二三度貰ひた
い、やつてもいいと云ふ話はあつて、自分自身もその氣になつたが、向ふからこの近處へ取り調べの
人をよこした結果とかの爲めに、どれもこれも、その都度、沙汰止みになつてしまつた。
　その後、或ところで弟が父の舊い弟子に會つて姉の事情を話したところ、それぢやア氣の毒だから
貰ひたい、丁度妻を失つた場合だからとあつた。弟は喜んで早速これを姉に語つた。こちらは異存を
云はなかつたが、今度は母が怒つて一言のもとにはね付けてしまつた。そしてこちらもそれを尤もだ
として、それにも異存は唱へなかつた。
『うちの弟子がうちの娘を貰うのか？　身分が違ふ！　以つての外だ！』
『ぢやア、勝手におしなさい』と、弟は怒つて、『もう、わたしはねえさんのことに口は出しません。』
『うん出さないがいい、そんな不倫（ふりん）なことをさせるやうな！』
『弟もまだ考へが足りなかつた』と、京子は平氣で考へた。
　その後は、然し、母も遠慮して、年中母が心配ばかりしてゐるこちらの緣談さがしになると、はツ
きりした相談や依賴はしないで、ほんの、なぞのやうに云つてゐる。そして弟はそれをただ鼻であし
らつてゐる。こちらはそれを弟の薄情なのに歸してゐるのだが、直接に何も訴へたことはない。
『ああ、うるさい、うるさい！』かう云つて、政子がまじなひの箒木に手拭をかぶせてゐるのを見て、

母もこちらと共に笑つた。『今一邊、お向ふの鳥を取つて來いッて、もう、鳥屋だッて寢てゐます、わ。』

『主人の信からしてあと引きだから困る！』

『さうですよ――よせばいいのに、自分から、もう一本、もう一本ッて！』

『そりやア、ね、早く二人ッ切りになつた方が――』

『お前は默つておいで』と、母はこちらを制した。

政子はつんとしてしまつて、姉の方を見ないで、これも火鉢のそばに坐わつた。

『姉さん、姉さん！　一度いらッしやつたら、どうです、ね？』かう云つて、客がはしご段を下りて來るやうすだ。

『あなた』と、京子はあわてて、『入らないこと云つたの、ね。』

『わたしぢやアありません。うちのです』と、政子は答へたが、これもあわてて箒木を取り、これをどうしようと思つたやうにつッ立つてまご／＼してゐるところへ、客は二人まで這入つて來た。

『やア、奥さん。』

『ほ、ほ、ほ！』うちのものは皆笑つた。

『は、はア、僕等に早く歸れと云ふのです、ね？』

『さうぢやアないのですよ』と、政子が――『別に少しおまじなひをしたいの。』
『まア』と、母もお愛想らしく、『御ゆツくりなさいまし。』
『おツ母さん、ちよツとねえさんを借りて行きますよ。』
『お易い御用です。』
『さア、ねえさん』と、こちらが曾て政子に男振りがいいと語つた方の高濱さんが云つて、こちらの坐わつてる手を引ツ張つた。
『いいでしよう、ね、おツ母さん』と、また別なのが――。
『えへへ』と、母がただ笑ひ顔をしたのをじろりと見て、京子は心細いほどすくんでしまつた。
『いや――いやで御坐います』と、つい聲に出し、堅くなつて逃げようとするのを、醉つてる人々は無造作にかつぎあげた。こちらは空にもがきながら、『御免下さい、御免下さい』とつづけざまに云つてるのを、無理に二階へ運んで行つた。
弟は食卓に向つてあぐらをかき、にこ〳〵笑つて手で猪口を口に持つて行くのが見えたが、京子は眞ツ晝間に外へ出たと同じやうな晴れがましさを感じて、下に置かれるが早いか、逃げようとした。が、弟も意地が惡さうに言葉でとどめて少し怒つた調子で、
『まア、いいでしよう、ねえさん！』

『まア、ねえさん、僕等は信一君の親友で、さア。』
『さア、一杯お飲みなさい。』
さし向けられた猪口から顏をそむけ、引ツ張られてゐる手をふり拂ひ、
『どうぞ御免を』と云ひ放つて、僅かに逃げ出した。
『あれぢやア、君の困るのも尤もだ』と云ふひそやかな聲が聽えた。
ふくれツ面をして下に來たり、曾て一度見合ひをしたあとの嬉しかつたやうな、情けなかつたやうな心持ちを思ひ出しながら、つけ〳〵と政子に當つた。
『あなたがねえさんを呼べなど云ふから、こんな恥かしい目に會ふのだ！』
『ねえさんは人を見ると恥かしがつていらツしやるけれど、わたし、そんなものぢやアないと思ふわ。』
『お轉婆だから――わたしのつかまへられて行くのを、とめもしないで笑つてゐて！』
『お政もあまり亭主にあまへ過ぎるが、お京もお京で、もツと人の前に出られるやうにならなければ困る。』
『わたし、人の前なんかへ出ないでもいい――』
から反對してから、今夜に限り、母の手を煩はさないで、この座敷へ獨りで蒲團を引き出し、獨り

でもぐり込んだ。それでも、早くお客のかたがついて、母が弟に自分の房州行きを話して呉れればいいのにとばかりは忘れなかつた。

やがて二階のもの等が下りて來るので、また這入つて來るのかと身をとこの中にすくませたが、玄關のはうの障子をあけた樣子だ。

『もう、お歸りですか』と云つて、政子は嬉しさうな調子で飛び出した。

『はい、奥さんのおまじなひが利いたかして。

『…………』あれは高濱さんらしい。

『違ひますよ、高濱さん！』

『…………』それ、さうだ。

『恨んでゐますよ』と、增野さんの聲だ『僕等をまじなひで追ツ拂つて。』

『またいらしツたらおよろしいぢやア御坐いませんか？』

『これはとこ急ぎで、ね――は、は、はア』と、弟はおとならしくその耻かしさをも知らなさゝうに笑つて、『ぢやア、失敬。』

『今度いらしツたら、仲直りを致しましようよ。』

『奥さん、さやうなら。』

『お靜かに。』

『ねえさんは、もう、寢たんですか？』弟の聲は不平さうであつた。

『かう毎晩、毎晩起きてられるものか、ね？』母はしツかりした聲で、『あれだツてねむたからう――今しがた、十二時を打つた。』

『寢るのが行けないと云ふのぢやアありません！　實際、あれぢやア鼻持ちがならんぢやないか？』

『いやと云ふものを呼ばせたり、かつぎ上げたりする方が惡いだらう。』

『そんなことを云つてやしません！　第一、ねえさんのからだの垢じみたにほひが分りませんか？　おツ母さんにしろ、ねえさんにしろ、それが爲めに湯錢もちやんと渡してあるのに、滅多に湯に行つたことがない。二階へ來ると、わたしにやア直ぐぷんと、いやなにほひが鼻についた。――ねえさんのことにやア口を出さないつもりでしたが、ふと今夜その話が出たら、高濱がそれぢやア一つ心當りを當つて見ようかと云ふので、兎に角、一度本人を見て置いて貰はうと思つたのに、をかしな風つきをして逃げ出して行くし、そのあとにはいやなにほひを殘すし――』

かの女はみんなに脊を向けて寢てゐるので、そツと寢まきの胸をあけて、自分の乳と乳との間あたりを嗅いで見たが、人間のにほひだと思つてるもののほかは、何も特別にくさいやうではなかつた。

『それでも、そのお錢を無駄なお化粧や何かに使つてしまうのぢやアなし――』

『それが行けないのです！　おッ母さんはそんなことばかりお云ひですが、女が身相當のお化粧をするのが何で無駄でしよう？』

『お錢さへ溜めて置けば、いつでも、しようと思ふ時に出來るぢやアないか？』

『そんな考へはちツともよくはありません！　女は不斷からのたしなみが必要です。』

『そのたしなみは心にあるので、お父さんのゐる時から、さう敎へ込んである筈だ。』

『そりやア、おッ母さん』と、政子が口を出した、『今の世に通りません、わ。』

『お前は默つてな！』から弟は政子を叱り付けた。そしてまた母に、『あなたが娘に目がないのも人情でしようが――』

『ちよツとお待ち。わたしは娘に目がないやうなことはしてゐないよ。お父さんが亡くなられてからと云ふものア、お父さんに代つて、わたしが娘を仕つけてゐます！』

『仕つけ方にもいろ／＼あります。あなたは時勢の變遷が分らないから――』

『ぢやア、女房にあまいのが當世と云ふのか？』

『ふん――』

『お父さんなどは、如何に女好きであつても、女をあまやかせるやうなことはなかつた。』

『わたしだツて』と、政子はかん走つた聲で、『何もあまやかされちやアゐません、わ。』

『默つてなと云ふに！　――わたしやアわたしの考へがありますから、そんなことに御心配は御無用です。』
『ぢやア、お京のことにも口出しをしないがいい！』
『ぢやア、ああして雨ふりあげくの犬のやうに、くさいからだでごろッちやらさせて置けばいいでしよう。』
『……』ひどいことを云ふ、ねえと、京子も心で怒つたが、肝腎の話がこれが爲めに話されずに終りはしないかとはら〳〵した。
『ねえさんも少し氣を付けて身のまはりを綺麗にしなすつたら、こんな云ひ合ひも起らないのですが、ねえ。』
『何を云つてるんだ』と、後ろ向きのまま、京子は政子の言葉に枕の上から無言のねたみを投げた。
『二階を掃除しろ』と、この時、弟は腰を浮かせたらしい。
『おッ母さんもお休みなさい』と云つて、政子がさきに立つたやうすだ。
『ちよッと待つておくれ、信。』
『わたしは知らない、知らない！　二階がわたし達の世界だ。』から云つて、政子は例のつんけんの樣子を言葉の上にも見せた。そして、また、こちらの身うちのものばかりで何か相談するのかと云ふ僻

みを起したかのやうに、障子をぴしやりとしめて、とん〳〵、とん〳〵とわざとらしくはしご段を踏んで行く音に向つて、京子はこちらで私かににやりと笑ひたがら、口の中で、

『あなたのことぢやアなくツてよ』と云つてやつた。そして母の聲がらツて變つて和らいでゐたので、まア、嬉しいと、自分はこツそりだが、顔を赤らめながら、耳をそば立てた。

『何か御用ですか？』弟の聲はいやに落ち付いてゐる。

『實は、ね、あれが、あす、房州へ行つて來たいと云ふのだが――』

『またですか？』

『お京だツて、可哀さうだから、ね――別に――ほかに行くところもないし。』

『行つてはいけません。』

『………』困るわ、困るわと、こちらが泣きたい氣になつてると、二階ではまたわざとらしく皿小鉢がかちや〳〵云はせられてる。

『どうしてだ、ね？ お前の手もとが今不自由なら、わたしが立てかへて置いてもいいのだが――』

『行けません――向ふから、わたしの手もとへ、今後あまりよこして呉れるなと云つて來てるんですから。』

『誰れから――お勝からか、え？』

『さうです――おツ母さんやねえさんには云つて呉れるなとありますが――』
『………』こちらはいよ〳〵泣き出しさうになつた。
『そりやア、また』と、母は行き詰つたやうだ。
『云はないぢやア、いつまでもわけが分りますまいから申しますが、ねえさんが度度行くのを向ふぢやア大變迷惑がつてゐます。』
『………』そんな筈はないのに！
『兄弟が訪ねて行くのに、お勝も何が迷惑だらう？』
『それがです、ただ行くだけの迷惑なら、お勝にしろ、勝の亭主にしろ、何もこんなお互ひにいや氣のさすやうなことは云つて來ますまいが――』
『何が――ぢやア、お京が何か粗相でもしたのかい？』
『まア、お聽きなさい。世間にやアないこともないことで、たとへば、或家庭でそこの亭主が女房の姉とか妹とかに手を出すことがあります。』
『………』そんなことは房州のあの人にやアなかつたのに！
『ふん――』
『またこの反對に、たとへば、わたしの妻の姉があつて、それが若しわたしに手を出さうとしたら、

『そんなことはしない！』顫へる半身が急にとこの上に起きあがつた。そしてくやしさに大きな聲を出した、『そんなことはしたおぼえはない！』
『夢中でゐるねえさん自身にやア』と、特別に強くなつたその聲のぬしがこちらの涙の間に見えた、
『却つて分りません！』
『まさか、ねえ――』と、母は少し當惑の樣子だ。これを知つた京子は、ただ一人の頼りなる母にも見はなされた氣がして、わッと泣き出してしまつた。
『何か證據でも見たものがあるのか』と、母はつづけた。
『いろ戀に證據よばはりなんざア無用です！』
『でも、そんなことがありよう筈がないぢやアないか、ね、お勝とお京とは嫁入りしない前から一番の仲よしであつたから――？』
『仲よしであらうが無からうが、淺薄な女同士のことなど當てになるものですか？』
『淺薄と云つてしまやア、お政だッてさうだらう――？』
『そんなことを云つてやしません！』弟は母の煙管を取つておもむろに煙草をつめ初めた。
手早く寢卷きだけをぬいで、京子は、けさから、母とも相談してあす着て行くことにしてあつたそ

の衣服を揃へてある蓙を開らいた。

老人の好むやうなぼて／＼した綿入れの胴着――これは母と相談して發明したのだ――のすゐからもんぱの赤と黑との縞がある腰卷きをまとつてゐるうへへ、五六年前にあてのない結婚を豫想して拵らへた、少し時代後れとは承知してゐる小紋縮緬のよそ行きを着た。そしてこれに黑繻子の丸帶を締めた。

母が默つてぢツと見てゐる視線の一端で、かの女はちよツと自分の簞笥の上にある姿見に向つたが、脊中が圓まる氣味になるのをちよツと直して見てから、これでいいと思つて、涙を拂ひながら、つかつかと障子へ行つた。

『ふん！』弟は馬鹿にしたやうな鼻ごゑを出した。

障子をあけたとたん、政子が便所に下りて來たのと顏を見合はせたが、ただ耻かしさに聲はかけなかつた。もう、こちらの心の秘密まで知れてるのかと思つて。

『お京！』

『……』踏みとまつたが、母の呼びには答へなかつた。

『信の許しもまだ得ないのに、默つて行くことはならん！信はお前の弟でも、今ぢやア、島村家の主人だぞよ。』

』一二歩あと戻りして、立つたまま母に向ひ、すすり上げながら、『もう、――房州――なんかへ――行き――たかア――ありません！』

『ぢやア、どこへ行く？――どいつも、こいつも、親不孝なものばかりで！』

『ねえさんが何も親不孝と云ふわけでもないでしよう――が、もツと自分で自分のことを考へて見て貰ひたいのです。』

『わたし、馬鹿だから――どうせ――お政さんのやうに――美人で、利口ぢやア――ない！』その場にうつぶしに泣き倒れて、袖口を嚙みながら、『お勝にこんな恥かしいことを云はれて――わ、わたし、もう死、死んぢまう！』

『死ぬなら、死ね！』母は、いつになく、お父さんが母を叱つたやうな調子になつた。『お前はお勝の姉だよ。妹を敎へて意見してもやらなけりやアならない身でありながら、あべこべに、妹から意見されるやうなことをするとア――本當に、そんな馬鹿々々しいおぼえがありやア、弟の手前もあることだ、どうでもしろ！』

『お、おぼえは――ない！』父もその場にゐるかのやうにおろ〳〵して、『おぼ、おぼえ――は――ない！』

『おう、寒い、寒い』と云つて、小きざみに、廊下をとほつて行く政子の足おとがした。そして京子

は、ちよツ、聽いてゐなけりやアいいのにと思つた。

『何も、さう、度々行くにやア當らないでしよう――お勝の亭主なざア鼻で笑つてるので、却つてお勝が身を切られるやうに恥かしいと書いてもあるです。あいつを初め、向ふのものは皆迷惑がつてる樣子だし、ねえさんだツて、それを知つたら行けたものぢやアないでしよう。』

『もう、あなた』と、はしごの中途から聲がして、『直き一時になりますよ。』

『一時でも、二時でもいい！』弟は政子を叱り付けた。

『お前がそんなつもりぢやア』と、母が――『お勝の迷惑がるのも尤もだ。』

『そんな――つもりぢや――ない！』無理にも、斯う云はねばならなかつた。

『房州は、ね、ねえさん、お勝がかたづいて行つたところで、あなたが行つたのぢやアありませんよ。』

『………』

『なんぼ世間を知らないからツて、苟くもかたづいて行つた妹の亭主を――』

『そんな――こ、ことは――し、しない！　みな、お勝が』と、またすすり上げて、『ひ、人の――わ、惡い――こ、ことを――云ふのです！』

『武士と學者の家系にかけて、きツと、しないか？』

『し、しません――わ、わア』と、こらへ堪へてゐた感情が一時に溢れ出た。

『しないなら、しないで――ちやア』と、母はきツと向き直り、『今一度お父さんのお位牌に誓つて、信の前で誓言するがいい。』

間を置いて、涙を兩袖でふきながら身を起し、ちやんと坐わつて、弟を見ることは爲し得ないままに、壁をふるはせた、

『きツと――い、致しません！』

『あのやうに詫びてるから、これで許してやつてお呉れ、――その代り、もう、わたしもきツと房州へ行くことはさせないから、ね。』

『よう御座いましよう』と、弟の言葉も碎けて來て、『ねえさんの心持ちアわたしにも分つてゐます、さ。うちぢやアおツ母さんの外に相ひ手にするものはないし――尤も、これはねえさんの方から僻み僻みしてゐるからのことですが――お勝が行つてからは、兄弟のほかにやア、友人とする女も男もないし。つまり、世間知らずに寂しいばかりのところへ持つて來て、房州へ行きやア、お勝の姉だと云ふのでみんなにちやほや云はれたのを、自分ばかりが歡迎されてるやうに思つたんでしよう――？輕く云つて見りやア、無邪氣なんでしようが、ね、お勝の亭主があなたをお勝と同じやうに、または、お勝よりも以上に大事にすると思つたのは、あなたが向ふに氣が有つたことになりますよ。』

『…………』

『そりやア、まア、さう、さ、ね』と、母も弟の肩を持つた。

『云ひついでに、よく分るやうに云つて置きますが、ねえさんは今のありさまぢやア——これは少し失禮ですが、ね——たとへば、わたしが他人であなたを貰ひたいと云つてても、實際のことを知つちやア、直ぐいや氣がさしてしまうでしよう。どんなに顏が惡いからツて、世間にやア、顏ばかりで細君を貰ふ人ばかりもないのですが——年中、髮はへたくそな束髮で、湯には月に一度、多くツても二度ぐらゐと云ふやうぢやア、精神までがむさ苦しくなつてしまひます、さ。おツ母さんは、もう、年寄りだから、まだしもいいとして置いても、あなたまでが今からお婆アさんの眞似をしてゐるんぢやア、どんなしみツたれな男でも、見ただけで、——鼻でかいだだけで、——愛想が盡きてしまひます。』

『それもさうだ、ね——お前、これから、少し信の云ふやうにおしよ。』

『……』初めてしみ〴〵分つた氣がしてうなづいた。

『その癖、——わたしはねえさんの圖星をさしますが、——あなたは結婚したいんです。』

『そんなこと——』と、弟に對してはそれをうち消すやうにからだをゆすつて、母の方を見た。

『あなた』と、また二階から、『もう、夜番が二度も通るぢやアありませんか？』

『うるさい奴だ』と、弟も立ちあがつて、『それで、もう分つたでしようから——これから、毎日でも湯にお這入りなさい、お化粧も奮發おしなさい。いい着物を着て、晝間も、そとへお出かけなさい。

さうして、少し活き〳〵した氣分をお養ひなさい。けちくさい金ばかり溜めてゐるのが何も人間の生活でもありませんから。』

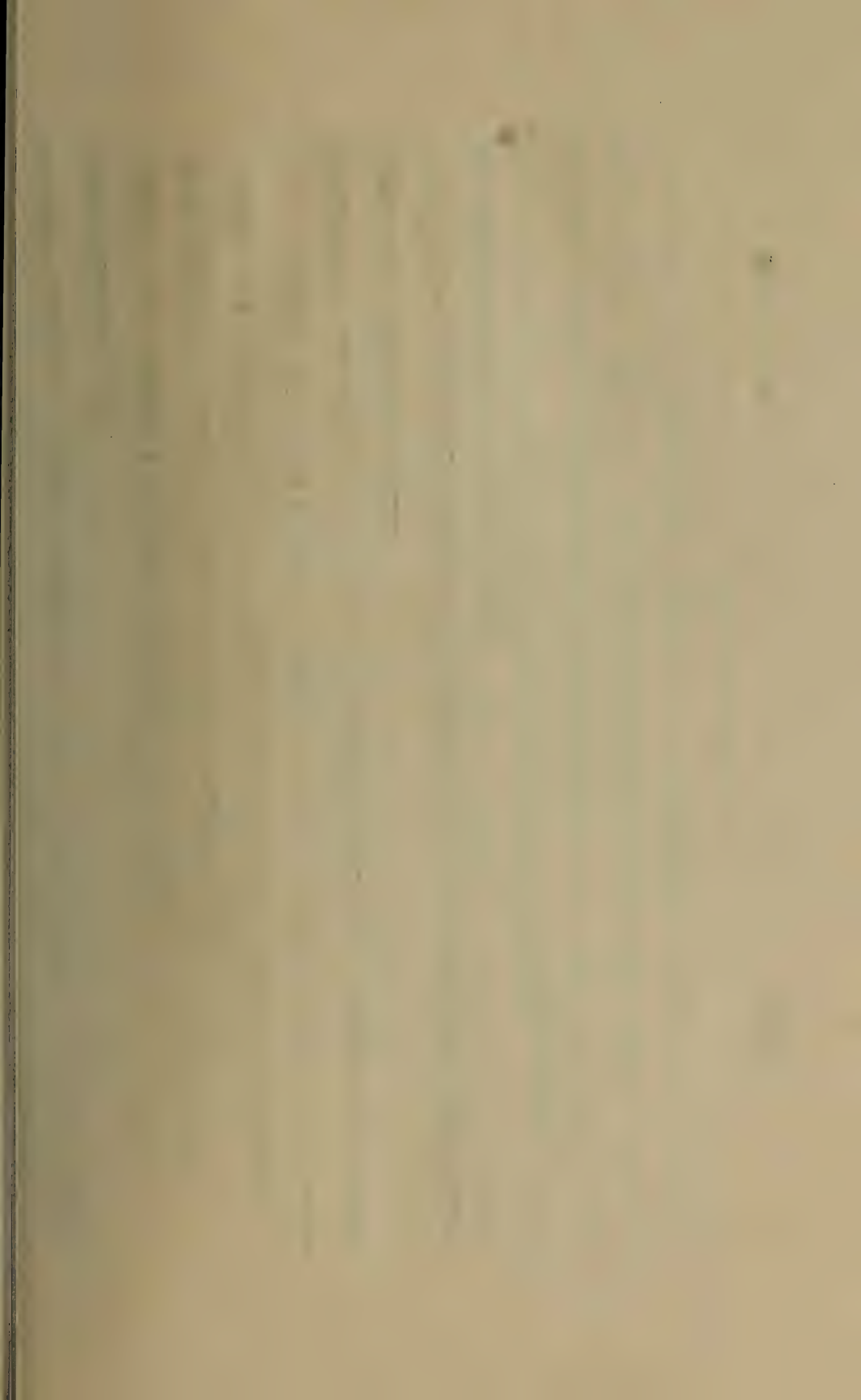
『ぢやア、ゆツくりお休み』と、母はこちらにも代つて云つて呉れた。

『は、お休みなさい。』から云つて、弟はこちらふたりとその夜を別れた。

まだ默つて考へ込んでゐるこちらにも、母は休めと慰めて呉れながら、母自身のとこを敷いた。

『………』京子は、然しどう考へて見ても、お勝がうそを云つて、その亭主と自分とを仲よくさせまいとしてゐるとしきャ思はれない。このくやしさの方を知つて呉れないで、弟夫婦はただこちらの惡い噂をし合つてゐるのだらうが――

かの女は頻りに二階の方ばかりを氣にして、お勝に對する恨みを今や手ぢかの政子に向けながら、自分の帶を解き初めるのさへも妬ましかつた。

――(大正二年十月)――

人か熊か

『お竹、お竹！』

民藏は磯の香がする寢どことを拔けて出た女房に向つて、優しみを帶びた然し底ぢからのある聲をかけ、自分も飛び出した。二人とも晝も夜も同じ筒袖の綿入れを着てゐる。そしてかの女が下駄をひツかけて外へ出ようとするに追ひすがり、押しつけるやうに、『なぜそんなに逃げるのでい』と云つて、かの女の太くはち切れさうな手を取つて引ツ張つた。が、その大きなからだはがんとして巖のやうに動かなかつた。

くすぶつたランプの光に、渠は自分の眼が燃えてゐるやうに思へた。これを見た爲めであらう、お竹はからだにも似合はない優しい見えをして、

『でも、不斷とは違つたからだぢやアねえか、ね？』

『旦那のだらう？』

『またそんなこと！』

『ぢやア、來い』と、にらみつけて、再び片手でぐいと引ッ張つたが、同じやうにその力がこたへなかつた。改めて兩手をかけようとした時、

『こんなに氣分が惡いのに』と云ふ顫え聲になつてその亭主を突ッ放した。渠は一間ばかり砂土間をよろめいて、壁代用の板圍ひにどんとぶつかつた。小柄だが、これも巖丈な男のぶつかつた勢ひで、その圍ひ板の外からざッとうちつけた釘がゆるんで、その板のうちの一枚の末が外の方へはじけ出た。渠はそこへ丁度はさまつて尻餅をついたのであつたが、待ち受けてゐたやうに吹き込む樺太海岸の寒い空氣には氣が付かなかつたほど怒りに熱してゐた。

『畜生！ この尼！』から叫んで立ちあがるが早いか、そばに積んである干し蟹を一つ兩手に取つて投げつけた。まだよく乾いてゐない蟹は兩わきの足を全體にひらいて、六尺四方もあるおほ蜘蛛か何かのやうに飛びかかつたが、お竹はこれをそらしてしまつた。そして口をとんがらかせて、

『旦那に知れたら、おこられるぢやアねいか？』

『なに、くそ！』今一つうまく投げたと渠は思つたが、かの女はこれを片手ではねのけた。その拍子にばりりと甲良が碎けた音が聽えた。かの女はなほ訴へるやうに、

『そんなことをして、さ！』

『かまうもんけい！』また一つ投げて置いて、渠は鐵の蒸籠のかさなつてゐるそばの、出齒庖丁が五

六個集つてるところへ急いだ。

お竹はふるへ上つて、手ばやく入り口の輪かぎをはづし、戸をあけて外へ飛び出した。

民藏もそれを追ッかけて行つたが、手に持つた庖丁の刄よりも鋭い月の光が、砂地にひねこびて生えた灌木の間を照らしてゐる。そしてその光までがからッ風となつて吹きまくつてゐるのかと思はれた。

蟹の罐詰めを製造するかたはら試みに干し蟹をやつて見ようと云ふ林田旦那の考へに從ひ、蟹を干し初めたのは、つい、三四日前からのことだ。ところが、きのふの晩、この地では山のおやぢと云つてる熊が出て來て、この小い製造場のまわりをうろつき、外に干して置いた蟹をみんな喰つてしまつた。

技師の林田旦那でも、まだ東京に殘つてる資本主の代理で來てゐる勇さんでも、その他の手つだひ人でも、すべてけさになつて、これを聽いただけでさへふるえあがつたのだもの！　うすッぺらな板一枚の圍ひで、假製造場の家と云ふ家でもない中で、實際に、人間の赤ん坊じみた啼き聲とぼり／＼蟹を甲良ごと喰ふ音とを聽いてゐた時の怖ろしさ！　息を殺して二人でひや汗をかいてゐた。

外の喰ひ物が盡きても、なほ夜明けに近づかなかつたら、熊は人間のにほひをかぎ付けて、強盜の

やうに戸を破つて這入つて來たのかも知れない。

この恐れを抱き合つた二人は互ひに胸の動悸の烈しくなつてゐるのをおぼえながら、互ひに物が云へなかつた。

『夜が明けてるぢやアねいか』と云つて、お竹が頸をそらせて手をゆるめた時は、生き返つたやうな嬉しさではね起きた。そして戸をあけると、海上から襲つて來てゐるガスの爲めに、周圍は殆ど全く見えないが、板圍ひの根もとに列べてあつた干し蟹が全く無くなつてゐるばかりでなく、生蟹（たま）むき殼（から）やがて燒かれて肥料灰（ひれうばひ）になるのまでが隨分目に立つほど減つてゐた。

『みな喰つて行きやアがつたぞ』と、民藏が後ろへふり返つた時にお竹も直ぐあとへ出て來てゐた。

『ひどい奴ぢやアねいか？』かう云つたかの女は、まだ怖ろしいものがあるかのやうに、こわ〴〵そとをのぞいた。

『もう、大丈夫（だいぢやうぶ）でい。』

『さうか、ね？』

『こら、足のあとがあらア。』

『え、え』と聲を顫はせて、お竹は逃げようとした。

『馬鹿野郎！　おめいは弱い馬と同じだア、足あとに竦（すく）んで――足あとに口があるけい？　爪（つめ）がある

けい?!』
『そりやアさうだが——まだ近處をうろついてるか知れやアしねい。』
『見ろよ』と、下を向いてゆび指しながら、『砂の掘れてるのを。』
『あ、ここにもある!』お竹も腰をかがめた。そして『ここにも、あすこにも』と、跡を追ひ初めた時は、その聲をばかり濃く立ち込めたガスの中に聽きながら、民藏はかの女より二三間山手の方へ行つてゐた。
『味を占めて、また今夜來やアがるぞ。』かう云つてあと戻りしかけたが、頻りに熊の足あとを一つ一つ追つてこちらへ近づくぼツとした女房の影の、身幅の狹い裾がひらけたところから太つた足くびの方がはツきりと渠の目に映つたので、ふと全身の血が涌いたのをどうしようと立ちどまつた。
兎に角今一度一寢入りしなければ、民藏はけふの仕事が——このガスの樣子では、海はきツと午前八九時頃から穩やかに晴れるから、忙しくなるのを——できないと思つた。そしてねむい目を無理に精神で明けてゐながら、あツたか味の殘つてる塒へ這入つたが、從つて來たお竹がどうもいつものやうに從順でなくなつたのに腹が立つた。その前夜(嚴密に云へば、もう前々夜)は徹夜して他の人々とも一緒に蟹の皮をむいたので、喧嘩と云つても、いつもの通り、ただ仕事を急がせる上のことであつたが、前々夜(實は前々々夜)も矢張りけさと同じやうな狀態であつたのに思ひ及んだ。そして自

分の女房は自分以外のものの種を宿したのぢやアないかと疑つてぶつたり、蹴たり、泣かせたりして
ゐるうちに、旦那と勇さんとに戸を叩かれた。

お竹は、渠等主人筋に對して濟まないことをしたと云ふやうに詫びあわてて、戸を明けた。渠は直ぐ半身を起したが、その時は、もう、近海(きんかい)にガスが晴れたのだらう、眞ツ赤な太陽が山から海の上にまぼしくない光を投げてるのが見えた。

『さう朝寢をしちやア困るぢやアないか』と、旦那はどちらへとも附かずに叱つた。

『それ、御覽!』お竹は亭主が褥の上につツ立つてゐるのをふり返つて、ブリキや罐をのせた棚に手でからだを支へながら、『だから、わたしが早く御飯を焚かなけりやアと――』

『默(だま)れ!』民藏はいきなりかの女の枕をつかんで、『この尼』と、かの女に投げつけた。

『よせ』と、旦那は、もう、奥の方へ進んでゐたが、その時兩手でうまくそれを受けとめて、『朝ツぱらから夫婦喧嘩などア!』

『畜生! おのればかりがいい兒にならうとして!』

『全體、お竹があんまりがさつに口やかましいからよくない。それに、姙娠(にんしん)してから、氣分が違つたせいか、一層やかましくなつてるんだ。』

『それを、旦那』と、かの女はむきになつて、訴へるやうに、『うちのがあんまり下らねいことを云ふ

ぢやア御座いませんか――旦那の種だらうなんて？』
『默れ、冗談でい！』民藏はあわてて、恥かしさうに顏を赤くした。
『冗談なら冗談で、人を蹴たり、ぶつたりしねいでもいいぢやァねいか？』
『おのれが不埒だからでい！』
『何オ不埒だと云ふんだ？』旦那もちよツとむツとして、『自分達で子供を拵へて置きながら、おれのせいにするなんて、蟲のいいことア眞ッ平だぜ。如何におれが女好きでも、まだお竹のやうなおかめにやア手を出したことアない。』
『しどい、わ、旦那も』と、かの女は仕方なしのやうに笑つた。
『それ見ろ、誰れにでも手めへなんぞアおかめの表本でい。』
『ぢやア、そツちはひよツとこだらう。』
『ぶんなぐるぞ！』
『よせと云やアよせ』と、旦那は民藏のはだしで驅け出しかけたのを取り押さへて、『何と云つてもお前は女房のおほ力にやアかなはないんだから。』
　民藏には、旦那を初め、他の人々からいつもさう云はれてゐるのが男の恥辱だと思はれた。で、人のゐる前では、一層、女房に對して目に立つやうに殘酷な言葉を浴びせかけたり、刄物三昧をして見

せたりした、そしてお竹がそれを本氣に受けてへらず口を聽くのが一層こちらの癪にさわつた。
『けれども、どツちも正直者だから』と云つて、旦那や勇さんも信用して呉れ、夫婦も亦、『この人々の爲めなら』と、不斷は一生懸命に働いた。

おそろしい夜中を過したことも、民藏は自分の口から一つの手柄をでもしたやうに語つて聽かせた。お竹も急いで、大きな蒸し釜のつぎにできてゐる、石と土とで圍まれた釜の中を焚きつけながら、亭主に負けない調子で熊の話をした。

旦那や勇さんが身ぶるひしたのは、その時である。

その日は果して大漁であつた。

晝少し過ぎまでに、漁夫の船々は孰れも背中の甲良(かうら)だけ剝き取つたおほ蟹を澤山海岸へ運んで來た。月夜には如何に大きな蟹でも、身が痩せて半分ばかりしきやないやうになるが、船に釣りあげてもそのままに活かして置くと、どうしたものか、刻々に中身(なかみ)がそげて行く工合が、その月夜の痩せと同樣で、みんなに秋の戀ひ路の處女の姿を偲ばせたので、

『身を切る思ひにやア何だツて痩せて行かア、ね』と、民藏は洒落を云つた。

『氣の利いたことを云やアがる』と、隨分おしやべりな旦那も機先(きせん)を制せられて、その時二の句が出

ないで蒸し釜の湯の加減を見た。

鑵詰めの事業には技師として十年の經驗を持つ林田の旦那さへしツかりしてゐれば、この製造場は如何にちツぽけでも、樺太一の仕事ができると、關係者等は皆信じてゐた。渠は經濟上の考へが乏しかつたので、たとへば、毎日二百匹の蟹があれば手一杯だのに、その倍も買ひ込んで、半分は腐らせてしまつた。資本家の代理として來てゐる勇さんはこれに氣が付いて注意を與へたが、年が若いので相手にせられなかつた。尤も、干し蟹をもやつて見ようとし出したのは、勇さんの注意があつてからのことではあるけれども――。

『旦那は腕と氣まへがえい』と云ふ二つの評判を兼ね備へてゐたので、林田さんは事があるたんびに仕あがつた鑵詰めを方々へ贈り物にした。

兎に角、體に多少の相違はあるが、大小をつきまぜて、平均一匹に付き、マオカに出れば二十錢以上もするのを、八錢で數へた。その數へ役はいつもお竹で、製造場へ運ぶのが民藏のつとめだ。それを旦那や勇さんが手つだつた上で、今度はいつもの通り、十數名の手傳ひ男女と製造場の責任者等とが一緒になつて手足の皮をむいた。そして片ツぱしから蟹の肉を圓い鑵に詰め、それを鐵の蒸籠にのせて、百五十度にも煮え立つた蒸し釜に入れた。

六ケしいのは、旦那が一手でするガス拔きの手加減だが、それも見てゐれば段々とおぼえて行つた

ので、民藏はわけの無いものだと思つてゐるのだ。そのあとはガスを拔いた穴をハンダでふさぎ、鑵の銹びどめにニスをぬればいい。

　旦那ができた品物を船に乘せて、七里さきのマオカの問屋へ行つた留守などに、渠はよく勇さんと話し合つたものだ。

『もう、林田さんがこのオタトモにゐなくツても、われ〳〵ばかりでやれますぜ。』

『そりやア、今少し經驗したら、ねえ』と、勇さんも答へた。

　この仕事さへおぼえて置けば、まかり間違つても、この樺太三界ででも喰ひはぐれはないと云ふつもりで、民藏は女房と共にけふも一心に働いたので、百五十箇ばかりの鑵詰めが午後の七時頃までに仕上つた。

　別目的の爲めに取り殘した生乾の蟹を、

『またおやぢに喰はれちやアつまらないから』と、すべて場內へ入れさせてから、旦那は手傳ひの男女を解散した。それから、內輪のものばかりで慰勞の酒を汲みかはして別れた。

　それまでは、民藏も女房のことなどは忘れてゐたのである。

　今、月の光に吹きさらされながら、民藏が目を据ゑて自分の女房を追ツかけるその心のうちには、つはりの爲めにからだの工合が違つてるのだと云ふかの女の申しわけなどは受け取れなかつた。

『なぜこんなに俄かにおれを嫌ふのだらう？　おれを嫌ふばかりでなく、なぜこんなに熊のやうに黒ツぽい夜中をかうしておれから逃げるのだらう？』この疑ひは渠を導いて、『てッきり別に男があるに違へ無い』と云ふことに燃え立たしめた。『五年も一緒に添つてゐながら、欲しい〳〵と云つてた子供がなかつたぢやアねいか？　どうせ、もう、子供がねいんだらう、どこかで一人貰つて來ようかとまで云つてたぢやアねいか？　東京で、一人可愛らしいのがあつたから、それとなくかけ合つて見たら、魚屋なんかへやるのはいやだと云はれたとぬかしたぢやアねいか？　それに、畜生！　こんな寒いところへ來て、厚い氷を叩き割つて製造場の土臺を据ゑた時から、おのればかりが働きもののやうに口やかましく意張りくさつて、へん、子供！　畜生——畜生！』

こんなことを考へたのは、走つてゐる間の一瞬間であつた。渠はあたまばかりが走つてるやうに蹶起となつて走つてるたが、若しおやぢが今夜も來るとすれば、もう、その時だと氣が付いた。すると、自分の身ばかりではなく、お竹のからだをかけがひのない大事な品物だと思ひ出した。

女郎屋もなく飲み場もなく、村中の家を九軒數へて見ても女の數よりは男の數の方がずツと多いこのオタトモで、今、女房が喰ひ殺されでもしてしまつては、わざ〳〵苦勞をしに來た甲斐がないやうだと、ぴたりと足の驅けりをとめた。そしてお竹に優しい聲をかけて呼び戻さうとした。が、かの女がなほ一生懸命に驅けてゐるのを見ると、どうも胸の怒りが一層承知しなくなつた。

その時、渠は或濕地の眞ン中に來てゐた。澤山のあやめが、晝間なら濃い紫に見えるに相違ないその花を咲き揃はせて、いばらの間にすツすと立つてゆらいでゐる。それを一直線に踏み越えて、お竹は、もう、向ふの山路へさしかかつた。

『畜生！』またむか〱して來たので、渠も向ふ脛がとげに引ツかきむしられてひり〱するのをも構はず、矢鱈にずん〱進んで行つた。

が、どうも怖ろしいものがやつて來るやうな氣がしてならないので、それを自分並びにかの女から避ける爲め、『畜生、畜生』を聲に出し初めた。と云ふのは、喇叭代りのつもりだ。聽いたところに依れば、こないだ、樺太廳の警邏船に乘つて、第一部長がこの西海岸を巡視するついでに、アラコイの山奥へ入り込み、その山林を露領時代に濫伐したその跡を見た時、熊よけの爲めに、汽船の汽笛に故障があつた時の代用喇叭を持つて行つて吹かせたさうだから。熊は人のけはひを知れば向ふから逃げるものだ。

谷あひの道は道と云ふ形もなく、矢張り、一面に濕地ばかりだ。民藏が見おぼえのある草には、先づ、花はあぢさゐの如く葉は芍藥の如きニヲ、アイノの食料になるサクや百合、アッシの纖緯を供するいら草並びに誰が袖、蝦夷菊、金ぼうげなどらしいのに觸れた。なほ進むと、泥柳、いたどりなどがゆらいでゐるのが見えた。

しよツちう、同じもので邪魔をするのは、地べた殆ど一面に生えてゐる木賊だが、それのさきや根もとが渠の脛に觸れてむづがゆくまた痛いので、渠は片手でその痛いところを撫で〻見た。ぬるぬるしたものが手に感じたので、その手を立ちどまつてゐる自分の顏の近くへ持つて行つた。が、あたりに自分の脊よりも高い欵冬や水芭蕉の蔭がさして、ただ黑かつた。けれども、その蔭をよけて、月の光にぢかに照らして見ると、自分の血であつた。

ぎよツとして、ただささへひるみかけた心が一層ひるんでしまつた。

『おい、いい加減にして來い、來い』と、つい、口に出たのに對して、おほ欵冬の澤山立ちふさがつた間から、女房の姿は見えないで、息詰んでゐるやうな聲ばかりがした。

『いやだい！』

『ぢやア、勝手にしやアがれ！』

渠はこの棄てぜりふで歸り途へ向いたが、これと同時に、かの女に害を與へる氣がないのを知らせる爲め、手に握りつめた庖丁を成るべく音のしさうな方を選んで投げ棄てた。その庖丁はかたはらの欵冬の葉の一つの上にばさりと乘つて輝いたが、その葉の一方がかた向いて、輝くもの〻見えなくなると、またその下の葉でばさりと云つた。そしてそのあとには、特別な音や聲は何ものからもしなかつた。

今更らの如くおぢけ付き、寒け付いて、民藏は歸途を夢中で濕地やすな地を渡つた。
製造場が見え出した時、その裏手に何か黑い影がかすかにあるのでぎよツとして足を踏みとめた。
そして息を殺して、そツとすかして見てから、
『なアに――』と安心した。井戸がはに置かれた大きな石であるのを思ひ出した。
自分達がこの場所をきめた時、先づ第一に必要な飲み水を吸みあげる井戸を掘らなければならなかつた。初めからをとこ氣を出して味方になつて吳れ、今でも旦那や勇さんを寢とまりだけさせてる番屋の家は遠い。つい、拾數間ばかり隣りに同業者の製造場はあるが、けちな根性から、その井戸を共同にさせることを拒絕した。こちらは業腹の餘り、みんなで力を合せて、これ見よがしに氷の上を掘つた。幸ひにして、五六尺掘りさげただけでいい水が出たが、井戸がはなどは、ほんの小い石を集めて圍つただけにした。あんまりあッ氣ないからと云つて、旦那の云ひ付けに從ひ、近い山路から一つおほきな石を皆でころがして來て、物を置く臺に、井戸のふちへ据ゑた。
『その石を熊と見たのは、おれも餘ほどゆふべから意久地なしになつてゐやアがる！』とう身づからあざけりながらも、月の光の中にどこからか黑い物が見えて來さうで仕方がない。
去年の今頃なら、東京では、もう『ああ、暑い〳〵』と云つてるところを、どうだ此の寒い風は！

渠はからだにおぼえる顫えを夜中の寒さのせいにしてしまつて、薄氣味惡い周圍を見なかつた。急いで片足の裾をまくしあげて、その方の足を草履のまま石の上にのせた。そして繩つるべで水を汲んで、ざアとその膝から下にかけた。ひりぴりとしゆんで、一面に痛かつた。

それを二三度ふつて水を切り、また次ぎの足を洗つてから、兩手で裾を持ちあげながら、明けッ放してあつた戸口へ這入り、ぴしやりと音がするほど強く戸を締めた――女房が、もう、近くまで戻つて來て、この音を聽いたに相違ないと思つた。

『明けてお呉れ――明けてお呉れ』と云ふやうな聲が渠の心の中にしてゐた。が、渠は、人の横ッつらを張り倒すやうな勢ひで、板壁の手ぬぐひ掛けにかけてある手ぬぐひを二つとも右の手にかッ浚つた。そして今しがた女房を目がけて投げた干し蟹の一つをわざと遠慮なく踏みつぶして、寢どこのはじの床板に行つて、腰をかけた。ここばかりは、粗末だが板を張つて、その上に蓙を敷いてある。

つい、ほんの、そこだが、――云つて見れば、濱邊から直ぐつづきのところだが――渠は、樺太の山と云へば、きツと長い一の字を思ひ出すのだ。一つには、どんなところだらうと云ふ好奇心に驅られて東京から連れて來られたのだが、宗谷海峽を過ぎて、陸が見え出してからと云ふもの、船は一直線に北へ、北へと向つて進むに拘はらず、マオカに達するまで、樺太の山は低い、細い、黑い線を引いて附いて來たに過ぎなかつた。而もマオカからなほ北へ露西亞領まで行つても、ずツとこの通りだ

と云ふ。
『莫迦に長い一の字ぢやアねいか』と、渠は上陸する時女房を返り見て笑つた。
その一の字の一部なる山の空氣を少しでも吸つて來たせいか、不斷はあまり氣にとめなかつたにほひを鼻のさきで嗅ぎ分けることができた。冷たく磯くさいのは干し蟹のそれだ。ぬくいやうに生ぐさいのは蒸し釜や蒸籠のそれだ。それらにまじつて、渠は兩方の足の脛からぶつ／＼と吹き出る血のにほひを嗅いだ。
『ひどいことをさせやアがつた、な』と、獨りでぷり／＼怒りながら、兩足のひどいところを各々手拭ひでしばつてから、渠は褥の中へその身を投げ入れてあふ向けになつた。
すると、さツきから氣にしないでもなかつた腰のあたりも、矢張り、ひり／＼してゐる。手を持つて行つて見ると、矢張り、血が出てゐる。お竹が渠をつき飛ばしたあのときに、かこひ板が一枚はづれたのであつたから、拔けた釘のさきで引ツかいたのにきまつてゐると思つた。けれども、結局、いつも自分の鼻からにじんで出る血が足と腰とから出るに過ぎない。釘やいばらの傷ぐらゐは渠自身に取つて何でもなかつた。それに、自分がこれほどなら、自分の女房は一層血だらけになつて歸つて來るだらうと想像せられた。それが自分の今の氣ぶんには却つてよく釣り合つて――
血は拭いてもやらう。嘗めてもやらう――それにしても、『あけてお吳れ』が一向にやつて來ない。

ゆふべ、足跡を殘した熊に對して二人でしたやうに、じツと息を靜めて、そとに人の足音が聽えはしないかと聽き澄ましてゐると、神經は月夜のやうに冴えて、目の前にちらつくのはただ暗い影だ。ところが、渠の考へとは反對の、太陽が――輝く物ではなく、血の塊りのやうにただあかい玉が――沈む方向を、海が遠く轟々と鳴つてゐる。買ひ込む蟹の數とは違ひ、もう、何度數へても數へ切れないほど多數の牡熊が、たツた一匹の強い牝熊を取りツこして、かみ合ひ、呻り合つてゐるやうに、あとへあとへと追ひ重なつて、ゆるいけれども絶え間のない響きだ。

聽いてゐると、渠の寂しい心も根底からぐらついて亂れた。そしてその遠鳴りの響きは段々と近い地べたを傳つて來て、ついには渠の體内の蒸し釜へ這入つた。すると、渠には煮え立つやうに荒れ狂ふ男性の力がみなぎつて、あら削づりの板家根の家根裏がランプの光に動悸を打つてゐる。

如何に小いとは云へ、男一匹には餘り狹くもないこの製造場が、渠の息をするにも苦しいほどぼうツとのぼせてゐた。

『もう、二度と再び喧嘩なんかしないで、可愛がつてやるぞ』と、渠はその時ばかりは決心した。

何だか襟もとがむづ／＼して來たので、手をやつて見ると、毛じらみに似て、まだ腹が大きくなつてゐないダニが一匹つかまつた。芥子粒の周圍に足が生えたやうな物だ。

『こん畜生』と云はないばかりに、渠はこれを力強く捻りながら、女房の箱枕のころがつてたのを引き寄せ、それを横にしてその上で爪で押しつぶした。ぴちと云つたのが小氣味よかつた。

考へて見ると、山で『畜生、畜生』と云つてる一時、渠の顏のおもてへぱらぱらと何だか小い物が落ちて來た。その時仰ぎ見たら、丁度あたまの上に椴松（とどまつ）の枝がさし出てゐた。あれもダニであつた。

ダニはおもに椴松の枝などにわいてゐて、血に饑ゑてゐるので、動物くさいものがその下を通ると、それを目がけてきツとぱら／＼と落ちる。それが風の都合で款冬の葉やいたどりの根に落ちて、そこでも亦、動物の血を待つと聽いてゐる。

『山に行くなら、鹽を嘗めて行け』と云ふまじなひじみたことが樺太（からふと）や北海道にはあつて、それでもなほ取りつく以上は、必らず裾から這入つて、からだの上へ／＼と這ひのぼり、最初に行き當つた毛穴に喰ひ込むのだ。が、股引きやシヤツのおもてをのぼるものは、すべて頸すぢへ出て來るさうだ。

この話を聽いて知つてる民藏は、總身の毛穴がすべてそんなものに見舞はれてゐるかのやうに感じられて、眞ツぱだかになつてしまつた。そして先づその直肌（ぢかはだ）を砂の上ではたいた。それから、冷氣に顫えながら、シヤツと股引きとの裏おもてを調べて見た。

『こんな物にも、をすめすがある！』比較的に大きなめすが一匹と小柄のをすが一匹と發見せられた。

これで大丈夫だとは思はれたが、渠は再びそれを身につける必要を感じなかつた。よく振つて、衣物

だけを着て、もとの通り仰向けにころがつた。
雨傘(あまがさ)にすればできるほど大きな款冬(ふき)の廣葉(ひろは)と太い柄とがかさなり合つてる山のことを思ひ浮べなが
ら、
『まだうろついてるのか、なア』と、渠は小言らしい獨り言を云つた。そしてマオカ、ラクマカ、オタトモ、ノダサン、クシュンナイ、トマリオロなどと、樺太の珍らしい地名を暗誦(あんしよう)してゐたが、ふと、また、おやぢのことが氣になつた。

まさか、つづけざまにも來やアしまい。と云つても、北海道では、喰ひ物がない時は、二三十里もさきから平氣で海岸へ出て來て、夜の明けないうちにもとの穴へ歸ると云ふ。そんな勢ひぢやア溜つたものではない。

この長いばかりの島では、西海岸のオタトモから東海岸まで、直徑たツた十里内外だと云ふではないか？　おやぢの足では、この兩海岸を一晩中に二度も三度も襲つて來ることができよう。

『お竹もお竹だ、餘り大膽過ぎる――いい加減に歸りやアいいのに、なア！』

渠の心では、待ち受けるものが二つあるやうな氣になつた。

かの女(ひと)さへゐれば、たとへおやぢは來ても、もう、ゆふべのやうにはいぢけてゐない。今度さくり、さくりと云ふ足音がすりやア、どこかの節あなから、二人で一緒にこツそりのぞいて、どんなに大き

な奴か見てやらう。
　それにしても、お竹のおそいのはどうした？
『あんまりじらせ過ぎらア！　あんまりまわしを取り過ぎらア！　へヽ』と、獨りで笑つて、品川か吉原かでのふられた夜のことになぞらへて見たが、實際は、渠の息詰まるやうな氣持ちは直せなかつた。
『外に行くところはない、きつと林田旦那のところだ！』かう云ふ疑ひが過ぎ行く刹那毎に確かめられて行つた。
　おのれのかみさんは連れて來ないで、人の女房を盜みやアがるのか？
　あんな旦那は旦那としても、そのそばについてる番屋のおや方や勇さんが、なぜまた一言の注意もこちらへして呉れない？
　あの尼がまた業腹だい——近頃いやアに人に突ツかかつて、度々喧嘩を吹ツかけてゐたのは、今夜のやうなことをしほに、あッちへとまりに行く手であつたのだらう。
　どいつも、こいつも、おれの敵だ！　おれのかたきだ！　おれをわざ〳〵樺太三界まで連れ出して來て、こんな不自由な目に會はしやアがる！

『よし、怒鳴り込んでやらう』と起きあがつて見たが、渠の兩足は、ちんばを引かなければならないほど、こわばつて痛みをおぼえ出した。

『畜生！』から叫んで、わが身でわが身を投げて、褥の上に不格恰なあぐらをかいた。そのとたん、家の中をのぞいてゐるものがあるのぢやアないか知らんと、渠は怪しんだ目つきで板圍ひを見まわした。

『お竹は歸つてゐるのだ！　歸つてゐても、おれを恐れて中へ這入れないのだ！　さうなのだらう、さうなのだらう』と云ふ風な心の聲にそそられて、また氣を換へた。そしてこツそり戸口へ出て行き、こツそり戸をあけて見た。そして戸口の左右をうかがつたが、なんにもゐない。

おれの出る氣はひを知つて、隱れたのぢやア――と、ひどく痛い方の足を引きずりながら、おづおづと空しく製造場の周圍を一まわりした。

無念の爲めに、渠の心は一しほ煮えくり返つた。

井戸端で拾つた石を以つて、例の、外れた圍ひ板の釘を――さツきから氣になつてゐたので――打ちつけることをしたのはしたが、これと同時に、渠の殘つてた母が去年死んだ時のことが浮んだ。

お竹を生んだ父親と渠の叔父とがやつて來て、萬事の世話をして呉れた。――死亡屆のことやら、火葬場のかけ合ひやら、墓地の選定やら、お寺さまの依賴やら、金のことまでも。――その晩に遲く

なつて、いよ〳〵母の死骸を入れた棺桶の蓋に釘を打つたが、あたりがしんと寢靜まつた中で、かな槌の音ばかりが何だかいやアに物凄く響いた。渠はそれと似た感じをこんなところへ來て聽かうとは思ひも寄らなかつた。

何だか思ひ切つて來た東京が、再びなつかしくなつて來たので、母の幽靈か何かが迎へに來てゐるのではないか知らんと考へられた。と同時に、山のおやぢの恐ろしさが見えない影か形かになつて、この近處を通つてゐるやうな氣がした。そして靜かにしてゐれば、無事にどこか他の方へそれて行つて吳れるものを、この音の爲めに、わざわざこちらへ呼び寄せはしないかと思ふと、男性として張り詰めた怒りの勢ひも段々いぢけてしまつた。

とん〳〵！　とん〳〵、とん！　初めは何の氣なしにやつたものが、終りに近づくに從つて逃げ出すかまへになり、そして最後のとん〳〵を渠は半ば夢中で終はらせて、目をふさぐやうにしてうちへかけ込んだ。

『ふて腐り尼！　けだ物にでも喰はれてしまへ！』から、ぶつ付きながら、渠は旦那と勇さんとから預かつてゐる酒に行つた。そして樽口から直にがぶ〳〵と滿足するだけ飮んで、無理に眠つてしまつた。

………どこの海でだか分らないが、初さん、条さんなど云ふ漁夫と共に自分も月夜に蟹を釣つてゐる。

月夜だが、蟹の身は痩せてもゐない。そしていづれも一丈半もあるおほ蟹で――而も仕事にめんどうな甲良が附いてゐないのだ。

『こんなに大きい、而もそれでゐて仕事に便利な奴なら、マオカまで行かないでも、二十錢から二十五錢にやア買つて貰へようが――』と、初さんか条さんかが云つた。

『まア、さう云ふなよ、オタトモでの相場はオタトモでの相場ぢやアねいか』と、自分は笑ひながら渠等をなだめるやうに云つた。『それにしても、甲良のない便利な蟹はどこにゐるのだらう？』

『おれの生れた北海道には、まアをらん、なア』と、初さんは答へた。

『樺太でも』と、条さんは眞面目に、『おれは見たことがない。』

『ちやア、ここはどこの海か、なア？』から自分が聽き返した時、向ふの方に英國かどこかの白い軍艦の碇泊してゐるのが見えた。左右には、いろんな形の蒸汽や帆前がゐた。そして自分等も大きな汽船に乘つてゐる。――横濱のはと場が見える。

『おい、民さん。』から云ふのは、自分等を見送りに來た勇さんの兄さんであつた。『しツかり頼むよ。林田や勇吉は私の身うちだが、君に行つて貰ふのは餘ほど君の働きを買つてるのだから、ねえ。』

『そりやア、旦那』と、自分は手くびの裏で鼻を撫であげて、『見てゐて貰ひましよう、人一倍働いて見せます。』

『わたしがついてる以上は』と、お竹も口を出した、『決してなまけさせませんです。』

ふうわりと世界が持ち上げられたかと思ふと、樺太が一の字に浮いてゐる。やがて日本海賊が露西亞人を分取りする根據地であつたと云ふ海馬島が見えて來た。矢張り蟹の鑵詰のさき驅けなる禮文島、利尻島が見えて來た。やがてまた小樽の港があつた。

不思議だ、なア――これでは跡もどりをしてゐるのだ……と思ふとたん、横ツ腹がひどくかゆかつたので目がさめた。

『おい、おい！』旦那がきのふのやうに意張つた聲をして戸を叩いてゐる。

『畜生！』民藏はかう低い聲を出したが、これが旦那に向つて云つたのか、それとも、また、自分の身を喰つてゐた虫に云つたのか、自分でもはツきり分らなかつた。兎に角、自分が思はずその横ツ腹から爪のさきに引ツかけたのは、小指のさきほどに圓くなつてるダニであつた。

『畜生！』また、かう云つて、そのダニをお竹のまくらの底で床の端へ押しつぶした。

その時、旦那は戸を蹴破つて這入つて來たが、あとに從つて來るおとなしい勇さんまでがふくれツ面を見せてゐた。

『お前等は、どうして、かう』と、旦那は怒つて早口に、『毎朝、毎朝、なまけるやうになつたのだ？
——こんなに蟹を踏み付けなどして！』

『へん、蟹などア何でもねいや』と、民藏は褥の上にあぐらのまま、横向きに鼻であしらつた。『どうしても、かうしても、そツちの胸に聽いて見りやア分る！』

『何だと？』

『…………』民藏は一思ひに刄物三昧をしてやらうかと云ふ怒氣を押さへて、默つて旦那をにらみ付けた。

『そのけだ物のやうな目つきは何だい？』

『こツちがけだ物ならそツちもけだ物でい！』

『全體、どうしたと云ふんだい？』

『…………』民藏は旦那の餘りに落ちついてゐるのを一層ねたましくなつて、前後を忘れかけるほど氣が込みあげた。『す、す、直ぐ、によ、によ、女房を返せ！』

『お前の女房がどうしたと云ふんだ？』

『お、おれに聽くまでもねいや。』

『ぢやア、お竹がゐないのか？』

『し、知れたこツていゝ！』民藏は横向きに力を入れてからだをふつたが、旦那を旦那として見れば、控へ目の自分が半ば訴へるやうな氣持ちになつた。そして大つぶの涙が二三滴走り出た。そして、わツと泣き聲をあげて、横にあふ向けの兩眼を、外見もかまはず、頑固に握つた拳の手くびの裏で押し拭つた。

『馬鹿だ、なア――それで、あんな男のやうな、でぶ／＼女をおれが引ツ込んでゐたと云ふのか？きのふ云つた通り、如何におれだツて――』と旦那が笑つて勇さんを返り見たのを、民藏がまたちよツと仰ぎ見て、多少の安心なしるしを與へられた。そして、

『ぢやア、外にどこにゐるんだらう』と云ふ疑ひに轉じた。

林田を初め、勇さん、民藏、この三名の責任者は別々に手わけをして、心當りを探したが、お竹はどこへも行つた樣子がない。

『きツと、山で喰はれたのだらう』と云ふことになつた。これが捜索の爲めに集つて來たものには、初さんと云ふこの製造場專屬の漁夫親子もあつた。番屋の親かたや下働きもあつた。デメン取りの男どももあつた。初さんが長い櫂を持つて來て笑はれた外は、みんな手に手に銃か、棒か、庖丁か、大きなナイフか、アイノの持つマキリかを用意してゐた。

『、、、おやぢは晝間出てをらん筈ぢやが、若し出會ふたら、なア、みんなで取りまけよ。して、なア、あいつは人に飛びかかる前に、一度立ちあがるものぢやで、その時がつけ込みどころぢや』と、番屋の親かたはアイノ氣取りで皆に注意を與へた。

『そりやア、出會はないとも限らないから、ね』と、林田旦那は親方の言葉をやわらげた。

『しかし』と、初さんが受けて、『熊を退じるのはわれ〳〵の目的ぢやない。さし當り、お竹さんを探し出せばえいのだらう。』

『どうも皆さんに濟みませんが、ぢやア、民藏が案内致しますから。』旦那はかう云つて、民藏をさきに立つて進ましめた。

勇さんとデメン取り數名とは、腹の減つた時の用意に、皆の食料として、製造場で仕あげた鑵詰めを澤山運んだ。

やがて熊の跡を發見したと叫んだものがあるので、民藏もあと戻りして見たが、あやめやいばらの押しひしがれたばかりで、これは自分がゆふべ倒れた時に殘した跡であるらしかつた。

水芭蕉が二三本、根から折れてゐるところで、皆はまた立ちどまつたが、そのあたりにも別にそのしるしらしい足あとはなかつた。

民藏はゆふべのダニが落ちたところを認めながら、そこを默つて通り越してしまつた。

『ロスケの奴らはひどいことをしてをつたのぢや、なア』と云つて、切り倒したままになつてる多くの椴松や蝦夷松の枯れ木のことを云つてるらしかつたのは、番屋の親方である。

『でも、さすがに』と、旦那が答へた。『タモや、アカダモや、白カンバのやうな、いい木材は切つてない。』

『ロスケの斧にや手に合はなかつたんだろ』と、デメンの一人が應じた。

『全體、道と云ふ道は附いてゐない。』

『そりや無論、おやぢか栗鼠か貂か小鳥の外に、通る必要がないから、さ。』

『さう云や、トマリオロからマオカへ歸つて來た人の話に、おやぢが栗鼠を追ひかけて、椴松の幹をかけあがつた爪の跡を見て來たさうぢや。』

『あすこでは、今、石炭運搬の輕便鐵道を敷く爲めに、山道を切り開らいてる筈ぢや。』

『石炭も儲からうけれど、大きな熊の皮を一つ欲しいな。』

『こないだ、樺太廳の役人がナヤシのロスケから大きな奴を四十兩で二枚買うたさうぢや。』

『そりや、まだ本當に製してない奴だらう。』

『ナヤシでは、熊の皮よりやア貂の皮の取り引きが盛んだ』と、番屋は語り出した。『毎年、冬になると露領から、――アレキサンドルあたりからも、――貂取りのロスケや皮商人がやつて來て、何枚で

も買うて行かア、な。その時は露國の貨幣が安くなる時節で、一ルーブルは實際一圓十錢の價うちがあるのだが、それがたツた九十錢で通用する。函館へ持つて行きやア、少くとも一圓八錢には交換して吳れる。さうしてナヤシでは、ビールが今頃では三十錢ぢやが、越年期になると、七八十錢に騰貴する。』

『えい商賣ぢやないか』と、漁夫の初さんは答へた。『少し元金がありやア、ビールを持つて行つて、その交換をやつたら。』

『けれども、正月頃になると、ビールの壜がぽんぽん破れてしまうんぢや、この邊よりやアずツと寒さがきついから。』

『そりや閉口ぢや。』

『たアに』と、旦那が笑ひ聲を出した、『親かたはいつもあんなことを云つてるが、うまく人をおだててゐるの、さ。さア、やつて見ろと云はれちやア、逃げる方だらうて。』

『は、は、はツ!』多くの人々が聲を揃へて笑つた。

民藏はそれを聽きながらも、話の仲間に這入らなかつた。あんなことばかり話し合つて、皆はそもそも何しに進んでゐるのだと責めてやりたかつた。それから、一番さきに立つて、一言も口を出さず、獨りで頻りに左右を探索しながら、雜草の間をかき分けた。

鶯が方々で鳴いてゐる。あかはらと云ふ鳥が鈴蘭の花を喰はへて飛び出した。

アイノが箭にぬり付ける毒を根から取ると云ふブシ（とりかぶと）の花が、如何にも毒々しいむらさき色を以つてあちら、こちらに咲き揃つてゐる。當り前の山百合は勿論、また小い黒百合の花もところどころに見える。

もう、疾くに濕地は盡きて、渠は地盤のぼく〳〵した山林の間にあつた。內地の山に於けるやうな、眞土の如きは全く見られない。そしてロスケが無制限に木を伐り取つた結果、あたりに相持ちの木がなくなつて、風の爲めに、幹の弱い部分が折れてゐるのもあるし、そツくり根から拔け倒れてゐるのもある。根が淺い上に、地面がぼく〳〵してゐるからだらうと思はれた。

『樺太だツて、どこだツて、同じやうにできたんだらうが、なぜかう大きな木がないのだらう』と、旦那の聲がする。

『もツと奥に行きやあるさうぢや』と、番屋は答へた。『それにしても、何邊も大きな山火事があつてそれが而も二年も三年もつづいたのもあつたさうぢやで、——何にせい、雪の下をぶす〳〵燃えて、火事がその翌年にまで渡るのぢやから堪らん。松が燃え盡きた跡へ白カンバが生える。白カンバが燒けたら、熊笹が出る。熊笹と來ちや、もう、木は生えん。それにこの頃ぢや、安く拂ひ下げて貰ふ爲めに、わざと火をつけるものまで出て來た。かうしてしまひにや、この樺太も全く禿山になつてしま

うだらう、さ。』

『切れるだけ切らせばいいぢやァないか？』

『それ、さ――鰊や秋鯵だッて、さうぢや。下らん制限や規則なぞやめて、取り盡せるだけ取り盡させて呉れりやいいのぢや。』

『蟹にやァまだ規則がない。』

『やがてできるだらうよ、けち臭い役人どもだから、なア。』

『あ、栗鼠ぢや、栗鼠ぢや』と叫んで、デメンの子が一人、民藏よりもさきへかけ出した時は、民藏は松のまばらに生えた、あまり雜草もない傾斜地を踏んでゐた。

『鰊なんかどうでもいい！　蟹もどうでもいい！』かう心に云はせて、渠はお竹の姿ばかりを思ひ浮べてゐた。そして何千年か以前からの木の葉や枝や枯れ木などが積み重なり、積み重なつて、ほんの、腐つたばかりのやうで、まだ固まつてゐない地盤の底から、ひよッこりとかの女がにこついて出て來るいたづらではないのか？　海を離れて、今度は、山が自分に生きて來た。

　渠は山を踏んでゐるのか、山が渠のからだに添つてゐるのか、どッちとも分らなくなつた。睡眠不足のあたまがふら〳〵と熱しあげて來て、ぽく〳〵した地盤が見えない女の力で自分をふうわりと空にはね返すやうだ。

それが而も手のやうに、足のやうにあツたかい力であつて、自分をその熱に包んだ。ふと、きなくさい氣がした。渠は今の話を心で繰り返して、

『火事だ！　火事だ』と叫びたくなつた。このあたりの地盤の底には、今でも、去年からの雪や氷の下を這つて來た奇妙な山火事が、一面に火の手をまわしてゐるやうだ。

『おい、民さん。』旦那の呼ぶ聲である。『さうずんずん進んだツて仕やうがないぢやアないか？　少しは皆さんに休んでもいただかなきやア――』

『………』民藏は無言で後ろを向いたが、棒のやうにつッ立つた。そのかたはらにブシと何だか分らない草との花が咲いてゐた。雇ひのちよか〳〵した子は、直ぐかけ付けて、奇麗なブシの花へは手を觸れないで、分らない草の黃花をむしり取つた。

『何だか氣持ちがよくなつたやうだぜ』と、旦那は云つた。

『もう、この邊でも』と、番屋は知つた振りで、『オゾンの臭ひがします、わい。』

『山の氣とでも云ふんだらうか、ね？』

『まア、さうぢや、な――内地なら、深山の樹木が吐く濃い酸素ぢやさうだ。』

『まア、諸君、休んで吳れ給へ』と、旦那が云つた時は、旦那も番屋も既に谷合ひを見おろせるところの地べたに腰をおろしてゐた。

獨りで無言な民藏も、オゾンとやらを吸ふ爲めだらう、心の筋肉までにぴん／＼と元氣が付いて來たのをおぼえたが、既に已に張り詰めてゐた胸は一しほそれが爲めに息苦しく、蒸し苦しくなつた。
『どうした、民さん』と、初さんは煙草入れを腰から拔き取りながら、渠が下の方で皆の方を向いて立つてゐるのを見た。『さツぱり元氣がないぢやないか？』
『さすがに』と、番屋は、自分のそばにゐる下働きの肩からオペラグラスを外しながら、『オタトモ一等の瓢輕ものでも、なア――』
『女房がゐないので、しよげ切つてらア』と、旦那は無雜作に笑つた。
民藏はちよツと皆の方へ目をあげて微笑したが、『は、は、は』と、小い連中にまで笑はれたので、直ぐまた下を向いた。
『こりやア、どう考へても、喰はれてしまつたんだぜ。』
『骨だけでも見えないか、なア』と云ひながら、番屋の親方は目鏡を當てて方々を見まわした。
民藏は、然し、そんなことをして見ても見えるわけがないと思つた。女房は、もう、渠の心中にばかりあつた。
自分で用意して來た握り食を喰ひ初めたものがある。
煙草ばかり吹かしてゐるものもある。

なげその上の方へ探しに行つたものもある。
林田旦那が勇さんと民藏とに命じてひらかせた鑵詰めを、皆が半ば以上も喰つてしまつた時、『皆來い、皆來い』と、上から頓狂に叫ぶ聲がしたので、いづれも緊張した氣を振ひ起して驅けあがつて行つた。

低い雜草の踏み敷かれたところがあつた。熊の足跡もあつた。

人間の足が一本、ひどくいばらにひツかかれた跡の血がこびり付いた儘、つんと、うは向きに突き出て、あとのからだは地下に埋められてゐた。

『ひどいことをしやアがるおやぢだ、なア』と、番屋は少からずこちらの女房をあはれむやうに叫んだ。『人間を馬か何ぞに思やがつて！』

『どうしてこんなことをしたんだらう？』

『北海道では、よく馬が斯うされる――假りに埋めて置いて、今夜また取りに來るつもりぢや。』

『して見ると、民さんの夫婦喧嘩は夜あけに近かつたんだ、な。』

『太陽の光はありがたいものぢや』と、感心したやうに初さんは云つた。『畜生までが惡いことを中止するのぢや。』

『なアに、ほうつて置けば、また夜になつて取りに來らア、な。』

『貰いやうでも、馬鹿ぢや、なア。どうせ自分が穴まで歸るついでなら、持つて行きやアいいのに。』

『そこがまだしも仕合せであつたのだらう、さ。』

おやぢと云つても、まだアンコのやうなものであつたらう、如何におほ女だからッて、お竹一人ぐらゐを思ひ切つて運んで行けなかつたのは、などと云ふ評議が足のまわりを取り卷いたもの等の間に行なはれたが、氣持ち惡がつて誰れ一人としてそれに手を掛けるものはなかつた。

『…………』民藏ばかりは天に向つて向き出しの足をじッと見入つて『こんなに肥えてゐたのか、なア』と思つた。直ぐそれを逆に土の中から引き出さうとしてちよッと自分の手をかけた。そして自分ばかりはこの四五日前から、殊におとといから、止むを得ずこらへ／＼てゐた鬱忿がさきに立つた。

『…………』はたのものらの不思議さうに、こちらを默つて見てゐるのが、渠には邪魔であつた。

『みな歸れ』と、渠はわれながら俄かに憤りをおぼえて、威猛高に命令した。

『どうして歸るんだい』と、暫らく經つて旦那は皆に氣がねしたやうにこちらを叱つた。『親方を初め、初さんや皆にわざ／＼探してもらつて置いて！』

『どうしてでもいい、歸れ！』

「お前はこの二三日どうかしてイるぜ――けさだツて、おれにつけ／＼當りやアがつて！」

『……』旦那はおとなしくからだを引いて、『せめて今夜だけでも、みなにお通夜をして貰はなけり
やアならないのに――？』
『お通夜もくそも入るもんけい！』
『そんな可哀さうなことア、おれがさせない。』
『おれの女房はおれの女房でい、おれが勝手にすらア。』
暫らく二人は云ひ合ひをしたが、番屋の親方が仲に這入つて呉れた。
『民さんとしては、女房がどんなになつてるか分らないところを人に見られたくないのぢやらうから』
と云つて。で、皆があとでまた一緒になつてお竹を一先づ海岸まで運んで歸つて呉れることにして、
兎に角、暫らくの間、こちらの云ふ通り、皆はこゝを遠ざかることになつた。
民藏は獨りになつてお竹を土から引き出してからも、臆病（おくびやう）などろ棒のやうな目つきをして、先づき
よろ〱と、皆が見えぬところまで行つてしまつたか、どうかを注意して見た。

再び皆がそこに集まつた時には、民藏はお竹の死體を仰向けに衣物の裾も整（とゝの）へて、佛さまのやうに
橫たはらせてあつた。

氣丈（きぢやう）な女が敵と大分に格鬪したかして、額の皮をひツかきむしられて赤い肉がうら返しに出てゐる

し、兩方の手もひどい傷で血だらけだ。

『可哀さうに、なア』と云つて、旦那はその肩から胸のあたりに殘つてゐるぼそ〳〵した土をふり拂つて呉れた。

『ひとり死んだのがふたり分ぢやから、なア』と、親方も銃を肩にしたまま悲しみを見せた。

『どう云ふ風に引ツかいたのだらうか、あの額は』と、勇さんは眞面目に聽いてゐた。

『おやぢもおツそろしいもの、さ、な』と、初さんはじツと見つめてゐた。

『亭主を嫌つた報いだァ、ね。』民藏はかう云つて、もう顏いろが和らいでゐた。いつもの冗談まで云ひながら、死體を自分の肩にかついで皆と一緒に山を下だつた。そして道々、『道理でゆふべの夢見がよくなかつた』などとも語つた。

ラクマカまで坊さんを呼びにやつても、どうせ間に合はないことが分つてるので、知り人が集まつて互ひに念佛をそれ〳〵に唱へることになつた。

二人の寢る場所であつた床の上に死人を寢かせ、その枕もとにビール箱をひツくり返して臺となし、その上に蠟燭やら線香やらを置いた。

樒の代りに、泥柳の葉やイタヤもみぢの枝を取つて來て、ビール壜にさした。

そして或人がお經を讀むのが上手なおかみさんをつれて來たので、それに讀んで貰ふことにした。かの女は死人の枕もとに坐わり、どんぶりの中へ灰を盛つて線香のけむりを立てさせてあるその前に向つて、坊さんのするやうに手を度々合はせ、暫らく口のうちでもが／＼と何か云つてゐた。そのそばに民藏はちやんと坐わつて、膝に兩手を置いて頸を垂れた。そして考へた、自分が殺したも同前だが、海であんまり蟹の甲良を剝がせるのが祟つて、自分のかはりに女房が山で額を剝がれるやうになつたのではないかと。

そんな緣喜をかつぎ初めると、今までさうでも無かつた風がそれが爲めに急に吹き初めたやうで、海の遠鳴りがどこか、から、暗い影のちらつくところへ、自分を大きなはさみでさいなみに引ツ込んで行く氣がする。

ひよツとすると、お竹が見た熊とは、何千匹かの集つたおほ蟹の幽靈ではなかつたらうか？　渠は自分の手にかけた鑵詰めやら干し蟹やらのありかを思ひ浮べて、自分の周圍にも、もう、そのおそろしい影がさしてゐるやうであつた。

その時、渠は經讀み女のなか／＼上手な阿彌陀經に釣り込まれてゐたのだ。

どうした拍子にか、あまり澤山イタヤを盛つてあつた壜が倒れた。それを、床の端に腰かけてゐた人が元の通りに立て直して吳れたが、死人が少しもびつくりしなかつた樣子を見て、民藏は俄かにむ

せび泣いた。

『もツともだア、ね――もツともだア、ね』と、をんな連は言葉に出して同情して吳れた。

『まア、一杯飮めよ。もう、泣いても、わめいても、駄目ぢやで、なア。』こんなことを云つて、をとこ連の間から、茶碗をあけて渠にさしたものがある。初さんであつた。そして民藏が片手で淚を拂ひながら受けた茶碗へ、勇さんはなみ〳〵と酒をついで吳れた。

渠のほかの飮み手は皆、鑵づめの蟹をさかなに、段々醉ひがまわつてゐた。

『泣くだけ泣いてやるのもいい、さ。』旦那は主人らしい態度を皆に見せて、『民藏も、これまで、さんざん女房をいぢめ拔いたから、ねえ。』

『なアに』と、番屋の親方が應じて、『民さんのいぢめるのは可愛がつてをつたのぢや。』

『そんな可愛がられ方ちや、女が困る、なア』と、同性仲間を返り見た婆アさんがある。

民藏も多少醉つて來たので、冗談半分にきのふのダニのことをおほ袈裟に吹聽して皆を笑はせたり、死人のさん〴〵な惡口を云つて、そんなことはけふだけでも云ふなと戒められたりした。

他の二ケ所の製造所の人々も、けふの仕事を終つて、ちよツと顏を出した。そしてけふも大漁であつたことを旦那に自慢らしく話してるのを聽いて、渠は旦那に向つて、

『惜しいことをした』と口に出した。

『仕かたがない、さ』と、旦那も負け惜みを表する顏つきをして答へた。

夜がふけてから、人の顏は大分入れ代つたが、お通夜をしようとする人數は晝間よりも増してゐた。けれども、民藏は再び熱い男性の力をばかりおぼえ初めた。そして皆にまた何と云はれても構はず、先づ經讀み女に歸つて貰つた。

それから、關係の薄い男女を歸した。

殘つたのは旦那と勇さんと番屋の親方と漁夫の初さんとであつたが、かう云ふ人々にも亦命令的に歸れと告げた。初さんの外は、『またか』と云ふ顏つきはしたものの、異議は唱へなかつた。

初さんは醉ッ拂つて居た。管々と同じやうなことを繰り返して、いつもの馬鹿正直一方から、隨分世話になつたお竹さんだに依つて、今夜だけはどうしてもお通夜しなければならないと頑張つた。『民さんには民さんの思はくもあるのだらうから』と、旦那や親方がこれをつれ出さうとしても、なか〳〵承知しなかつた。

『歸れと云ふに、この野郎!』

目をけはしくして怒つてた民藏は、この正直者を床の上から引きずり下ろした。

『ぢやア、歸る! 歸る!』これも怒つて草履を穿かうとするのを、民藏は待つてやる暇も我慢でき

なくなつてゐた。そして渠はからだ中にみなぎつて來る蠻力にまかせて初さんをぐん〳〵戸の外へ突き出した。

——(大正二年十月)——

毒藥女

一

『おい、あの婆アさんが靈感を得て來たやうだぜ。』
『れいかんツて――?』
『云つて見りやア、まア、神さまのお告げを感づく力、さ。』
『そんな阿呆らしいことツて、ない。』
『けれど、ね、さうでも云はなけりやア、お前達のやうな者にやア分らない。――どうせ、神なんて、耶蘇教で云ふやうな存在としてはあるものぢやアない。從つて、神のお告げなどもないのだから、さう云つたところで、人間がその奧ぶかいところに持つてる一種の不思議な力だ。』
『そんなものがあるものか?』
『ないとも限らないぢやア、ね、お前は原田の家族にでもここにゐることをしやべつたのか?』
『あたい、しやべりやせん――云ふてもえいおもたけれど、自分のうちへ知れたら困るとおもて。』

『でも、あいつは、もう、知つてるぞ、森のある近所と云ふだけのことは。』
『森なら、どこにでもある。』
『さうだ、ねえ』と受けて、義雄はそれ以上の心配はお鳥に語らなかつた。無論、千代子が或形式を以つて實際お鳥を呪ひ殺さうとしてゐるらしいことも、お鳥には知らしてない。たださへ神經家であるのに、その上神經を惱ましめると、面倒が殖えるばかりだと思つてゐるからだ。

が、お鳥も段々薄氣味が惡くなつたと見え、日の經つに從つて、義雄の話を忘れるどころか、ありありと思ひ出すやうになつたかして、つひにはまた引ッ越しをしようと云ひ出した。もし知られると、今までにでも、云はないでいい人にまで目かけだとか、恩知らずだとか、呪ひ殺してやるだとか云つてゐるあいつのことだから、わざと近所隣りへいろんな面倒臭いことをしやべり立てるだらうからと云ふのである。

然し、この頃お鳥はおもいかぜを引いてとこに這入つてゐた。近所の醫者を呼んで毎日見て貰うと、非常に神經のつよい婦人だから、並み以上の熱を持ち、それがまた並み以上に引き去らないのだと說明した。その上、牛込の病院に行けないので、一方の痛みも亦大變ぶり返して來た。

かの女は氣が氣でなくなつたと見え、獨りでもがいて、義雄にも聽えるやうに、
『何て因果な身になつたんだらう』と、三疊の部屋で寢込みながら、忍び泣きに泣いた。おもての方

の廣い、然し向ふ側の森から投げる蔭をかぶつた室――六疊――には、憲兵が三人で自炊する樣になつてゐた。

義雄は同じ家にゐる憲兵等に物も云ひかはさなかつたが、毎日、晝間からお鳥の看護に努めた。同時に、自分もひどい痔に惱んだ。

重吉からの返電は來ず、東京に殘つてゐる重吉の女房に問ひ合はせると、北海道の方をまわつてゐると云ふのであつた。義雄はまだ鑵詰事業の手初めも出來ないのが、無聊の感に堪へなかつた。

丁度、その時、我善坊の方へいいハガキが屆いた。

『龍土會例會――一、時日――一場所――一、會費――右御出席の有無○○區○○町○○番地○○○方へ御一報を乞ふ――年月日――幹事――』と、印刷摺りにしてある中へ、それぞれ必要な文字を入れたハガキであつた。

龍土會と云ふのは、おもに自然主義派と云はれる文學者連を中心としての會合で、大抵毎月一同晩餐の例會を開くことになつてゐる。幹事は二名づつのまはり持ちで、この月には田島秋夢と今一名渠と同じ新聞社にゐる人の名が出てゐた。

義雄はこの會の最も忠實な常連の一人でもあるし、友人どもの顏も暫く見ないし、印刷を終つた自著『新自然主義』がいよいよ世間に出た當座の意氣込みもあつたことだし、喜んで出席することにし

た。そしてお鳥が、その日になつても、こちらの痔が惡くなるにきまつてるから止めて呉れろと賴むだのも承知しなかつた。

中の町から檜町の高臺にあがると、麻布の龍土町である。そこの第一聯隊と第三聯隊との間に龍土軒と云ふ佛蘭西料理屋がある。そこが龍土會の會場であつた。

義雄はそこに一番近いので、午後六時にはかツきり行つた。が、まだ誰れも來てゐない。ボーイを相手に玉を突いてゐるうちに、人がぽつり〳〵集まつて來た。そのうちの一人が玉場へ飛び込んで來て、

『どうだ、久し振りで負かさうか？』かう云つて直ぐキユウを取つた。例の歌詠みから株屋の番頭に轉じた男だ。『然し、ねえ』と、かの永夢軒に於ける義雄の失敗を持ち出して來て、『また電球をぶち毀わすのは眞ツ平だぜ。』

『あれはどこの玉屋へ行つてもおほ評判ですぜ』と、そばにゐたそこの主人が少しおほ袈裟に笑つた。

『もう、大丈夫だよ。』まじめ腐つて答へながら、義雄も臺に向つたが、いろんなことが氣にかかつて、もろく勝負に負けた。

『よせ〳〵』と呼びに來たものもあつて、義雄も二階にあがつた。

渠を見るのは近頃珍らしいので、皆が話をしかけた。
『君の著書をありがたう』と挨拶するものもある。
『あんな短い紹介だが、取り敢ず新刊紹介欄に載せて置いたよ』と云ふものもある。
『耽溺はどうなるのだらう』と、こちらが現代小說にやつた作のことを云ふものもある。
『君の女はどうした』と、ぶしつけに聽くものもある。
『顏の色が惡いが、過ぎるのだらう』と、穿つたつもりでからかふものもある。
『また痔が惡くツて、ね、閉口してゐるのだ。』
『ぢやア、酒はやれまい』と、慰め顏に質問するものもある。が、渠はかた一方の耳がまだよくないので、左りの方から云はれた言葉を度々聽き返したり、聽き落したりした。
やがて椅子が定まつて、日本酒の德利がまわつた。
秋夢は幹事だから末席にゐる。渠は鋭い皮肉な短篇小說で名を出した人だが、外に、『破戒』を書いた藤庵がゐる。『生』を書いた花村がゐる。劇場のマネジヤーを以つて任ずる山內がゐる。また外國新作物の愛讀者で、司法省の參事官をしてゐる西がゐる。その西が紹介した農商務省の山本といふ法學士がゐる。株屋の番頭がゐる。工學士の中里がゐる。麴町の詩人がゐる。琴の師匠の笛村がゐる。漫畫で知られる樣になつた杉田がゐる。或出版店の顧問、雜誌の編者等もゐる。

から云ふ人々の中にあつて、いつも渠等の談話を賑はすのは田邊獨步であつたが、今年の六月に肺病で死んでしまつた。餘り出席はしなかつたが、矢張り、會員であつた眉山は、獨步の死ぬ少し前に自殺した。

眉山の自殺してから間もなく、茅ケ崎海岸の獨步の病室で、

『この龍土會の會員の中で、誰れが眉山の次ぎに死ぬだらう』と云ふ話しが出た。

『無論、田村の狂死、さ』と、毒舌家の病人は笑つて、『あいつが生きてるうちに、おれは死にたくない。』

さう言はれるほど、義雄も隨分毒舌の方であるし、それをあとで聽いた渠は曾て獨步の思想をまだ舊式だと批評したことがあるのを思ひ出したりしたが、今夜は甚だ勢ひがない。酒は平氣で人並みに飮んでゐたが、持病のむづがゆく且痛むのを頻りにこらへてゐた。

花村は『鳥の腹』と云ふのを文藝俱樂部に出した男を捕へて、あの小說は描寫でない、下手な說明だ。きはどいところがあるのは構はないが、說明的だから、それを人に强いるやうになつてゐる。挑發的だと云つて、發賣禁止になつたのも止むを得まい、などといぢめてゐた。

藤庵は、或新聞記者に向つて、謙遜らしく、人生の形式的方面をどう處分してゐればいいのだらうと云ふやうなことを質問してゐた。

西は內山や中里と共に頻りにイプセンやメタリンクやストリンドベルヒの脚本を批評し合つてゐた。

から云ふ別々な話がいつまでも別々になつてゐないで、互ひに相まじはり、長い食卓のあちらからも、こちらからも、機の梭が行きかう樣になつた時、義雄はその意味を取り違へたり、ただやかましい燥音が聽えたりする瞬間もあつた。それが如何にも殘念で、この耳だけに關して云つても、もう、これ等の人々と自由に話し合ふ資格がなくなつたのかとまで思つた。

『田村が乙に澄ましてゐやアがるので、今夜は少し賑やかでない、なア』と、株屋の番頭の云ふのが聽えた『色をんなを持つと、ああおとなしくなるものか、なア？』

『けふは、何と云はれても、しやべる氣になれないのだ。』から云つて、義雄は笑つたが、自分のいつも特別に注意を引く から〳〵笑ひも、それと好一對になつてゐる麴町の詩人の羅漢笑ひと云はれるのに壓倒された。

そして、花村の耳も鼻も目も內臟も、どこもかも健全で、而も巖丈な體格が何よりも羨ましくなつたと同時に、獨步の死んだ時、茅ケ崎へ集まつた席で、義雄は自分が花村に向つて、君は僕等すべての死んだあと始末をして、誰れよりもあとで死ぬ人だと云つたことを思ひ出した。

次の忘年會大會の幹事を義雄も引き受けた龍土會の歸りには、おも立つた人々よりも一時代あとの若手連が二三名、麹町の詩人と共に付いて來た。が、中の町の隱れ家へは連れ込むことをしたくなかつた。と云ふのは、自分の痔が果して酒の爲めに非常に不氣分になつた上に、お鳥がうん／＼呻つて寢てゐるのを思つたからで、而もそれがたツた三疊のきたない部屋だもの――自分等の辨當を運ぶ辨當屋のある角で、渠等と無理に右と左りにわかれた。

例のどぶを渡つて、戸を明けると、今夜は斷わつてあつたので締りはしてなかつたが、醉つてゐるのと早く横になりたいとの爲めの荒ぢからで、自分の引き明けた戸はがらりと大きな音を立てた。

『お歸りですか』と、下のかみさんが、炬燵をしてある奥の方から聲をかけた。

『あ、只今』と答へて、渠は自分で戸締りをしてから、あがり段をあがつた。

あたまの上には、無學、無趣味、無作法、卑俗で、話と云へば、賤業婦の噂ばかりの憲兵連がゐるのを思ひ出した。

上にも下にも、こんな毛だ物同樣の野蠻人種が籠つてゐるほら穴より外に、義雄は自分の眠るところもない今の狀態を考へて見た。

『吾人の頭腦は銀河に浴し、吾人の兩足は地獄のゆかを踏む』と云ふエマソンの警句が浮んだ。が、若しこのおほ袈裟な口調で自分の考へを發表すれば、地獄のゆかをも踏み破つて、而も天上に須佐之

男の暴威の雄たけびをやつて見たいほど絶望的だ。

『こんな腐つたからだ！　こんな死獸のたいを借りたやうなからだ！　こんな多くの惡病氣の問屋をしてゐるやうなからだ！　ひよツとすると、耳や鼻や痔は何物かの梅毒から來てゐはしないかと疑はれるからだ！　えゝツ！　こんなからだはどうでもなれ』と、義雄は二階へあがつてから、自分で自分を投げ出した。

『どうしたの』と、お鳥はその重たさうな首を枕からもたげた。『お酒が惡かつたのだろ――だから、あんなに行くなと云ふたのに。』

渠は默つて返事もしなかつたが、ほツこりと迫つて來る女のにほひを嗅いだ。渠には、鼻も亦右の方しか役に立つてゐないのだが、一方で僅かに嗅ぎ分けるこのにほひが、今のところ、たツた一つの慰めだ。この頃は、外のどぶの惡臭も氣にならなくなつた。この部屋へあがつて來るまでの陰氣臭いことも、さう神經を惱ませなくなつた。その代り、お鳥のこの臭ひがどう嗅ぎ直して見ても、義雄には穢多臭くなつた。そのくせ、別にわき香か何かのやうにいやな感じを伴つてゐるのではないが――。

それでも、なほ、千代子の瘦せて冷たさうなところよりも、夜は、梅が香を包んでゐるやうに、此あツたかい臭ひのするところがいいのである。渠はこの臭ひがしないと、却つて寂しい、寂しい氣持ちになつた。

お鳥がまた別にかぜの醫者を呼んでゐるのに、義雄がまた耳に通ふほかに他の醫院を訪ふのは、自分で我慢してゐた。そして、隔日に行く學校へは缺勤屆を出した。が、堪へ切れなくなつて、或る肛門病院へ行つた。そして注射をして貰つたのが、藥の利き目でか、一層不氣分を增した。

『あたいにこんな二重の苦しみをさせるから、その罰で自分もうへした二重の病氣になつたのだ。』

『そりやア、さうかも知れない――許して呉れ』と云つて、義雄はそれをお鳥の氣休めに供し、その實、自分が苦しいのにかの女の看護までをしてやらなければならない面倒を少しでも避けるやうにした。

二

『おかアさん！ おかアさん！』

義雄はぎよツとしてあたまを持ちあげた。お鳥が死んだ母親を呼んでゐるのである。

病人を見ると、あふ向いて、目をつぶつたまま、久し振りの優しい微笑を浮べてゐる。

炬燵の火も消えた眞夜中、しんとして、鼠一匹騷ぎがない。消し忘れた置きランプの光りに、時計のちくたくばかりが明らかに響く。

その時計のこまかい確かな刻み――それが渠の痛みを全身に傳へる血脈にめぐつて、刻一刻、快樂

と思へた夢が羽ばたきをして過ぎ行くのがあり〳〵と見える。

ふと、その過ぎ行く快樂の夢を米國の浪漫的詩人アランポーが歌つた『おほがらす』の姿にして見た。レノアと云ふ世に亡き乙女を戀して、

『あはれ、　冴やかに　吾れは　覺ゆ　寒き　師走の　夜中　なり、
炭の　燃えさし　離れ離れ　床に　その影　落としてき。
吾は　頻りに　朝を　待ちつ、　無駄に　求めて　わが書　より
借らん　と　せしは　憂さ　の　晴らし』であつたところへ、『何を痩せ魂、鄙び魂の不吉怖鳥、古鳥』の鳥類の惡魔か分らないやうな眞ッ黑なおほ鴉が闇の外から飛んで來て、書齋に備へつけられたパラス彫像の肩にとまつた。そして愛婦の今と同樣ノーモーア、『またもなし』と語つた。

それは失戀と云ふ物を地上に引き据ゑて見たのだが、英國の畫家詩人ロセチの『昇天聖女』に、

『昇天　聖女　の　身を　傾けて
恁りしは　黃金の　天津橫木。
まなこは　深みて、　一しほ、　海の
平らに　靜める　それに　勝り。
その手に　持ちしは　小百合を　三個、

髪なる　きら星　數は　七つ。』

とあるのも、つまり、これは失戀を天上に祭りあげたに過ぎない。

ワルツホイトマンにも同じ系統の『揺り籠から』があり、義雄自身にも長い詩篇『三界獨白』中の『常盤の泉』があつて、矢ツ張り、若々しい戀の失敗を地上なり、天上なりに引き据ゑ、祭りあげてゐたのが思ひ出された。

然し現在の狀態はどうだ？

空想のでも、天女や戀人なら、まだしも――架空のでも、おほ鴉やアラバマから來たと云ふ鳥ならまだしも――義雄は身づから穢多だと思ふものを介抱してゐるのである。

無論、世に神聖な戀愛などはない――あつても、ただの空想で、現世に活動する人間の糧にはならない。が、曾ては聖愛などを――その時から、肉的に見てだが――歌つたことがある渠は、今更らのやうに今昔の感無しにはゐられなくなつた。

穢多の熱病人に、殆んどあらゆる病氣の問屋！　渠は、かう思つて、ます〳〵絶望的な蠻勇氣を出した。

『死にたくはない――今、一度、この女を完全なからだに返して、その全身の愛を本統に自分に捧げさせて見ないぢやア置かないぞ。それからなら、自分が死んでもいい、また、破れ草履を棄てるやう

に、この女をすツぱりおツぽり出してもいい。』

から考へて、渠は片手で自分の痛みの個所を押しこらへながら、熱に疲れてよく眠つてゐるかの女の二つの病氣の、直つた上の樂みを想像した。

しんとした、そとには何物かが窺つてゐるやうだ。渠はこツそり罪惡でも犯してゐるやうにまたぎよツとした。

『おかアさん！』と、輪廓のぼやけた一と聲に、この僅か三ヶ月間に痩せの見えて來た顏の微笑がまだ浮んでゐる。

また、夢を見てゐるのらしい――この飽くまでも見飽きぬ妖態！

試みに、そのあツたかい胸から、渠は自分の一方の腕をのせてゐたのをやはらかに外すと、かの女は逃げるものを追ふやうに、兩の手を空しくさし延べた。が、直ぐそれを引ツ込めたかと思ふと、やがて、

『あア、ア、ア――！』賴りなげに又苦しさうにもがいたあげく、半身をがばりともたげた。が、あたりをじろ〳〵見渡して、『畜生！殺すぞ』と云ひながら、再び枕に就いた。

ひどい熱になやんだあとの疲れで、眠りはまだこの恨みの深い人を纒つてゐると見えた。直ぐいび

きをかき出した。そして、そのぐう／＼云ふ響きが、おもて座敷の憲兵どもの何の遠慮もなく競爭を初めた。

みじめな人生の裏家住ひ――かう云ふことが義雄のあたまに浮んだ。こちらのいびき家は、然し、相變らずうなされてゐると同時に、からだの筋肉が痙攣を引き起す前のやうにびく／＼動いてゐる。

『鳥ちやん――鳥ちやん！』

靜かに呼んで見たが覺めようともしない。あふ向けに吐く白い息と横向きに吐く白い息とが交叉した。渠は考へた、呼び起して、覺めた自分と同じやうに苦痛を感じさせるよりも、いツそのこと、死ぬまで斯うしてゐさせる方がまだしも功德かも知れない。且、自分に對しても、やき／＼面倒を訴へないでいいと。

若しこちらが昔の人のやうに十五六歳で結婚をしてゐたら、これくらゐの總領娘があつたかも知れない。無病息災であつたときのふは、駄々も捏ねたし、泣いて無理も云つた。が、その可愛さは、もう、なくなつた。

過ぎ去つた快樂は現在の自分を滿足させるに足りないのに、矢ツ張り、こんなところにこびり付いてゐるのは、宿無し犬が掃き溜めの汚物に飢えをつなぐと同樣、ここに自分の苦痛の必然な餌じきを求めてゐるのだ。

から思ふと、渠には女の方も亦さうではないかと云ふ考へが起つた。この頃、かの女は非常に愛着を增した。少しでも男を自分のそばから離れさせまいとする。が、それは男を先づそとに見えない心臟や肺のあたりからがつ〳〵とかじつて、ついにはその全身をかの女の病熱と衰弱との喰ひ物にしてしまうのではなからうか？

自分の戀も純潔でなければ、お鳥のも亦利害を混濁してゐると見ながら、ランプの光りに獸性が目覺めて、二つの肉その物の腐爛して行く姿を心のまなこに見詰めてゐる。そしてこちらの手あしに女の存在を知らせるのは、こちらがかの女に相分つた毒血のあツたかみである。

このまま死んで、腐つて、骨になつたら――？さうだ、その時は、

『二つのしやりかうべ！』恨みもない、執着もない、全く關係のないあかの他人だと渠は考へた――そして、また他人の寢ごとは却つてはツきり聽えるものだと誰れかが云つたことを。

寢てゐる病人はまたうなされ出したが、今度は何かの怨靈が盤石の重りを以つて息の根を押し止めようとしてゐるのを、四苦八苦のもがきで逃げようとするやうなありさまがあり〳〵と見えた。兩うでを空に開らいて、

『あアー！　あアーア、ア、アー！』と叫んだ時は、怨敵の姿も見えたかのやうに、義雄は三たびぎよツとした。かの女は目をきよろりと明けてこちらの驚いた顏を見た。

『何か云ふた？』ぼんやりとほほ笑んでる。

『うなされてゐたよ。』

『さう――夢を見て、苦しかつた。』

『………』義雄はただかの女の顔を冷やかにのぞき込んで、この寒い深夜のどこかそとを想像して見た、千代子が神社か大木の蔭で藁人形の釘を打つてゐたのではないか知らんと。

三

『熱の方は大分えいやうになつた。依つて、あすからでも、また牛込の病院へゆこか？』

『無理をしても惡いが、なア――おれも然し痔の方は少し辛抱出來るやうになつたから、また耳の療治にせツせとかよはうかと思つてるのだ。』

『こんな二人までも苦しい目に會ふのはをかしい――あたいの寫眞が一つ我善坊に置いてあるから、自分の寫眞と一つにして、あいつがそれを五寸釘でも打つてやせんだろか？』

『まさか、ねえ』と、こちらは何げなく見せて、『よしんば、そんなことをしたところで、お前とあいつとの間に無線電信でもかかつてゐなけりやア、通じる筈がない、さ。』

『でも、さうして人を呪ひ殺した奴が田邊に一人あつた。』

『そりやア、自分を呪つてると云ふことを傳へぎきでもしたから、神經に負けて、われとわが身を殺したの、さ。』

『でも、自分はあいつに靈感が出て來たと云ふたぢやないか？』

『それはちよッとさう思つただけで——きッとそれだとは思つてゐない。』

『では、若し感づいて、ここへやつて來たらどうする？』

『今まで來なけりやア、もう、大丈夫分りッこはないの、さ。』

かう云ふ話があつた時は、義雄とお鳥とが大工の家を體よく斷わられて、假りにその隣りの辯護士のおやぢとその妾とがその間に出來た一人の子と共にゐる家の二階へ移つてゐた。同じ間取りの、同じ裏二階の三疊敷だ。

そこの細君が矢ッ張り女房のある人と一緒になつてゐると云ふ事實は、同じやうな事情にあるお鳥をして少しその神經を休めさせた。

『隣りの人が云ふてたが、もとはあのおやぢさんの息子の家で下女をしてをつて、おやぢさんの子を孕んだのださうや——見ッともない女だろうが？』

『見ッともないとしても、からだは無病息災だ。』斯う義雄が答へたのには自分の持ち物の方には面倒くさい病氣がとッ付いてゐると云ふ不平も含めた。

『自分が悪いのぢやないか？』とお鳥はこちらを睨み付けた。

そこのおやぢと云ふのは、自分の息子が辯護士の若手として羽振りがいいのを自慢した後、義雄と同國だと分つた嬉しさに、

『わたしも、同じやうな事情で、息子と同居してをる婆アさんがやかましいのに困つてをりますので、あなたのことも兼て人ごとには思ふてをりませんでした』と云つた。

『なアに、あり勝ちのことですから』と、こちらは笑つて輕く受けたが、こんな死にぞくないのおやぢなんかの同情は少しもありがたくないと思つた。

義雄の耳は一向にはか〴〵しくないのもまどろッこしくて溜らないのだが、痔の方がよくなつて來たので、學校の冬期試驗をやりにも行くし、段々氣力も恢復した。

すると、自分の身に纏ひ付いたすべての面倒を早く振り切つて、早く樺太の事業に對する計劃に直進したくなつた。

自分の耳も面倒だ。いとこの重吉が此の方からこちらの電報に對してまだ便りのないのも面倒だ。病人のお鳥も面倒だ。然し最も面倒なのは、夫婦に關する法律の規定と父の遺言とを楯に取り、我善坊の家にがん張つてゐるヒステリ女である。

『人を呪へば穴二つだ――早くあの千代子がくたばつて來れりやア』と云ふ願ひが、義雄の胸を絶えず往來してゐた。ところが、意外にも、死んで呉れたのは千代子でなく、かの女が里にやつてあつたのを取り返した赤ん坊だ。

龍土會の忘年會が、義雄と長谷天香といふ批評家との幹事で、午後五時から烏森の湖月であると云ふ日の晝過ぎであつた。渠が本郷の耳科醫院へ行つた歸りに、中の町の中通りを耳ばかり氣にして通り過ぎてしまひ、裏通りの隅にある例の辨當屋と反對になつたかどから出ると、今その辨當屋から出た千代子の姿が目に這入つた。

目は落ち込んで、頰はずツとこけて、顏全體に血の色とては少しも見えず、五六間を隔てて見たところでは全く憂ひと呪ひのおも影であつた。

たツた僅かのあひだ見ないうちに、身體までが實際にあんなに影の薄い怨靈になつてしまつたのかと思はれた。

羽織りや着物は不斷着のままで、こちらには氣が付かず、下向き勝ちに歩いて、そのかどをお鳥のゐる方へ曲つた。

『とう〳〵嗅ぎ付きやアがつた』と思ひながら、直ぐ義雄はインバネスの袖で頰をこするふりをして、向ふの横町へ逃げ込んだ。

義雄は千代子を避けたのを誰れにも知られたくなかつた。その足で辻ぐるまに乘り、龍土軒の玉突き場へ行つた。

が、氣になつて、玉が當らないので、二階へ移つて洋食を二皿ばかりやりながら、曾てここへお鳥を連れて來たことを思ひ出した。

『洋食などいやぢや。』から云つて、お鳥がわざとらしく兩手を袖の中へしまつてゐるのを見てこちらは喰ひ方を知らないのだと推察した。そして、そばに來てゐたおかみさんの手前もあることだから、こんな田舍者をいい氣に可愛がつてゐると思はれないやうに、

『まア、いやでも喰べさせてやるぞ』と、向ふの皿の肉を自分のナイフで切つてやりながら、『こいつは好き嫌ひが多くッて困るのですよ』と云つた。

何ぼくど〳〵しい千代子でも、もう、歸つてしまつただらうと思はれる頃、義雄はそこを出て、中の町へ向つた。然しまだ闇に野犬のしッぽを踏みはしないかと云ふやうな氣持ちで、おそる〳〵假寓のどぶをまたいだ。

すると、直ぐ下の女が出て來て、鬼の首を取つた手がらばなしをでもして聽かせるやうな待ち受けた樣子で、

『今しがた、奥さんが見えましたよ。』

『さうですか』と、わざと平氣ではしご段をあがらうとした。

『何だか、お子さんがヂフテリヤで危篤だから――』

『えッ！』渠ははしごの第一段にかた足をかけたまま踏みとまつた。

下の女は言葉を續けて、

『芝の慈惠病院の隣りの東京病院へ直ぐ來て下さいとおツしやつて、お歸りになりました。』

『さうですか、ありがたう』と答へて、渠はお鳥の藥り臭い寢どこへ行つた。

『來たよ』と、かの女は半身を枕からもたげて、こちらを恨めしさうに見た。

『何が？』

『あいつが、さ。』

『さうか？』枕もとに坐わつて、そ知らぬ風はして見たが、心のうちはかき亂されてゐた。第一、どうしてここを嗅ぎ付けただらう？　靈感などと云つても當てになつたものぢやアない。さきに、森のある近所などととぼけたのも、誰れかに聽いて知つてゐたのかも知れない。或は、また、先月の龍土會の歸りに麹町の詩人がそばまで來たから、あの男から大體の見當を聽いて來たのだらう。また、あんなに影が薄かつたのは病兒の看護に疲れたのに相違ない。それにしても、自分自身で出て來たのを見

ると、子供はたとへ危篤だとしても、こちらが全く可愛がつてもゐないので、向ふも焼けを起して來たのだらう。

かう考へると、千代子の身の周圍を可なり興味づよく纏ひ付いてゐたこちらの不思議な幻影(げんえい)や、可なりおそろしく想像してゐた呪ひの魔力(まりき)や、罵倒しながらもかの女の子煩惱を取り柄として子供のことは委せ切りにしてあつた安心、などは全く消えてしまつた。が、きツと、かの女とお鳥とはまた云ひ合つてゐたのだと思つたので――それでわざと三時間ほどもよそへまわつてゐたのだが――その面倒くさい報告を聽かせられるのがいやであつた。

『また喧嘩したのだらう?』

『喧嘩などしやせん。』

『ぢやア、あがらなかつたのか?』

『さう、さ。』

『………』それぢやア、まだしもよかつたと、義雄は多少氣を落ち付けた。

『でも』と、かの女は言葉を續け、『隣り近所へ入らないことまでしやべつて行つた。見ツともなくて、もう、ここにもをられませんぢやないか?』

『どんなことを云つたのだ?』

『どんなことツて――』お鳥がふくれツつらをして語つたのに據ると、千代子は先づ辨當屋に當りを付けて這入り込み、そこでこちらのゐどころを確かめ、そこを出てからお鳥のもとゐた大工に行き、またその隣りの蒲團屋にまでも行つて、お鳥に關することを洗ひざらひしやべり立てたのである。お鳥は、また、下の女から、それを聽かせられ、氣になつて溜らないので、寢床から飛び起きて、千代子のまわつたさきを自分も一々まわり歩いて、自分の辯護をすると同時に、向ふの惡口も吹き立てて來たさうだ。

『どいつも、こいつも仕やうのない女どもだ、なア。』

『でも、皆がをかしな人だ、目ばかりきよと〳〵させて、聽きたくもないことをわざ〳〵しやべりに來て、と云ふてゐた。』

『お前も行つたのぢやアないか？』

『あたいのはあとのことぢや――然し』と、お鳥は餘ほど讓歩してやると云ふ態度で、『子供が病氣なのは可哀さうだから、行つておやり。』

『そりやア、行くが、ね――』考へて見ると、第一子（女であつた）もヂフテリヤの苦しみに枕もとの小ランプを攫まうとしながら死んだ。第三子（男であつた）も同じ病氣であつたが、母に抱かれながら、なぜこんな苦しい目に會はせるのかと云ふやうな目附きを殘して死んだ。第一子の時は初めて

の子でもあるし、二年二ヶ月も生きた記念があるので、殘念に思つたが、第三子は自分からの子として二度目の死でもあるし、たツた九ヶ月をさう抱きもしなかつたから、惜しくはなかつた。今回の赤ん坊に至つては、見たことさへ稀れな上に、どうせまた死ぬのだらうと思ふと、全く愛着が起らない。

それでも、子が死んだら、またその死骸の處分はしなければならないし、今夜は龍土會もあることだし、お鳥が成るべく早く歸つて來て吳れろと賴むにも拘らず、

『今夜はどうか分らない』と云つて、義雄は二階を下りた。そして下でそれとなく聽いて見ると、千代子は大變な權幕で、意張つて上り込まうとしたのだが、お鳥の病氣で寢てゐると云ふのをかこ付けに、下の人が氣を利かせてあがらせなかつたので、

『わたしも、そんな病人なんか相手にしても詰りませんから、では、歸ります』と、千代子は飽くまでも負け惜しみを云つたさうだ。

それに、入院したのは赤ん坊一人と思つてゐたら、さうでなく生き殘つてる四人の子供をたツた一人除いたあとのすべてがその病院の厄介になつてゐるのだと分つた。

車を驅けらした時は、もう、四時過ぎで、どこでもあかりをつけてゐた。

東京病院の受け附けに驅けつけて聽くと、赤ん坊は既に息を引取つたと告げられた。そして、次女の富美子は普通の病室に、三男の知春は隔離室に這入つてゐることが分つた。

義雄は、弟の馨に桐ケ谷の火葬場へ行くつもりで、直ぐ支度をして來いと云ふ使ひを出してから、先づ知春の室に行つた。すると、千代子が一人附き添つてゐて、所天を責めるに最もいい口實を得たと云はぬばかりの權幕だ。かの女は自分の混亂した忿激と愁傷とをまぶたの落ち窪んだ目に漲ぎらせ、而も自分は亡兒の魂に從つて既に地獄か墓の底までも檢閱して來たやうなつよい暗い光りを顏ぢうに現はして、

『あなたのおかげで、わたしも兒どもの死に目に逢へなかつたぢやアありませんか？』

『そりやア、知れ切つてらア、ね。』義雄はかの女に毒々しく見せたほどわる度胸をきめ込み、睨み付けながら、『おれの隣り近處へまでも、わざ〳〵入らざらんおしやべりをしてゐやアがつたからだ。』

『おしやべりをしないで、どうします？　あんな女のことは、一切合切しやべり立てて、隣り近處へ、顏向けの出來ないまでにしてやるんだ。』その聲で、眠つてゐた兒が目を覺した。そして、父が一方の枕もとにゐるのを見て、びツくりしたやうに身をのり出し、他の一方にゐる母の膝にしがみ付いた。

『それもよからう、さ――また引ツ越させるだけのことだ。』

『どこへ逃げたツて』と、かの女は兒にそのまま蒲團をかけてやりながら、『このわたしの前ぢやア隱

れをうせませんよ。』

『現在、けふ、あの辨當屋から貴さまが出たのをおれは見たのだ。面倒だからはづしてしまつたのだ。』

『さう――』千代子は意外だと云つたやうにぽかんとした。が、負けてゐないで、また語を繼ぎ、『然し、淸水の居どころは當たつたぢやアありませんか？』

『原田かどこかで云つてもらやア、當たるのは當り前だ。』

『いいえ、そんなことア――あすこへは云つてなかつたぢやアありませんか？』

『ぢやア、麹町で聽いたのだらうよ。』

『あの方だッて、知りやアしません。』

『貴樣がロどめされてるの、さ。』

『あんなこと！　あなたは餘ツぽど疑ぐりツぽいの、ねえ。』

『そんなことアどうでもいい』と、義雄は千代子の强情を押し付けたつもりになつた。が、今の應對で以つて見ると、かの女は中の町であんなおしやべりをして歩いたやうに、どこへでもこちらの知り合ひでかの女も會つたことがある人のところへは、この狂態を以つて吹聽しに行くらしい。原田へ度度行くのは勿論のこと、もう、麹町の詩人へも行つた樣子だ。

思ひ出すと、かの麹町の詩人が我善坊の家へ遊びに來た時、千代子はこちらのゐる前でこちらの不行狀を詩人に訴へた。然し、

『そりやア、然し、男子のことだから』と、かう麹町が答へたので、

『あなたまでがそんなことを』と叫んで、かの女は詩人をいきなり突き飛ばした。すると、同じやうに神經質の詩人は非常に氣を惡くして歸つた。

それを見ても、誰れも千代子をまじめには相ひ手にしまいが、意地惡くでも出て、こんな狂人じみた女のおほ袈裟な言葉を釣り出し、それを根據にまたこちら自身の平生を人が世間に廣告しては甚だ以つておほ迷惑だ。

『質に困つた女だ――その歩いたあとをお鳥がまた云ひ消して廻つたのも尤もだ』と、渠は考へて見た。

『わたしは、どうしても』と、千代子はなほその言葉をさし控へようとはしない。『どうしても、この神さまの力で、あなたの不身持ちが直るまでは、あなたと淸水とがどこへまた隱れたツて、その隱れ場所を探し出してゐないぢやア置きません。あなたがたに隱れをうせる氣があるなら、わたしにも探

『さうなら、さうとして置け――だが、今回も葬式に宗教上の儀式は使はせないぞ。』
『そんなことア御勝手におしなさい――また、さう云ふだらうと思つてたんですから。』
義雄はもと耶蘇教信者であつた。そして、その教へを脱する頃になつて、千代子の方が信者になつた。が、かの女も今では變挺な陰陽學に凝つてしまつた。今年の父の葬式は父の信仰に從ひ佛式でやつたし、一と昔以上前の第一子の時は、千代子の望みにまかせて耶蘇教式であつた。が、第三子の時は滋賀縣の大津で無式で濟ませた。その次ぎが今回のだが、渠としては死んだものは既に無も同前だから、ただそのまま土から土、闇から闇へ葬つてしまうつもりだ。
『死んだものなんか、掃き溜めへほうり投げて置いてもいい位のものだ。』
『どうせあなたが死ぬ、死ぬと云つてたから、あの子もその通り死んだのでしようし、うちには誰れも人情にあつい人がゐないのだから――あなたは色をんなのところばかりへ入り浸りになつてるし。馨さんは馨さんで、人の賴んだこともして吳れないで、勉强もしずに、どこかほつき歩いてばかりゐるし。おッ母さんはおッ母さんで、まだお父アさんの一周忌も來ないうちに、娘の方へ逃げて行つた癖に、よこした手紙には、五尺も雪が降るところで寒いから、また歸りたい！も、ないものだ。』
こんな繰り言を千代子が云ふのを、義雄は聽くやうな、聽かないやうな振りで、自分の心には、どうせ死ぬなら、何も分らない空體の時に死ぬ方がいい。人生の味はひが分つて、悲痛に悲痛を重ねて

來ると、却つて未練が多くなるものだ。と云ふやうなことを考へてゐると、にこにこした看護婦が病院の命令を受けてやつて來て、早く死體を引きとつて貰ひたいと云つた。

『今に人が來ますから、それまで待つて下さい』と、義雄は素直に答へた。が、さツきから病院の人人の死者並びにその家族に冷淡なのを怒つてゐたところだから、『どうせ傳染病は家へ引き取ることが出來ないのでしよう』と、からかつて見た。そして、その看護婦に賴んで、會をやつてる潮月へ少し遲くなるからと云ふ理由の電話をかけて貰つた。

『まア、兎も角、死んだ兒の顏でも見納めに見ておいでなさいよ。』かう千代子が勸めたのにも意地を張つて、義雄は何か反抗の意味を云ひ返さないではゐられなかつた。

『血の氣のなくなつた顏などア、手めへのを見てゐりやア充分だ――手めへマイナス氣ちがひイクオル死だ。子供は目をつぶつて、口に締りがなく、土色をして固くなつてるだらうが、そんなものも、もう、何度も見飽きてらア。』

千代子の妹がそのふまで來てゐたが、家の方の世話が忙しいので、代りに專門の看護婦を雇つて附き切らせてあると云ふ富美子の病室へは、義雄は行く必要がないと思つた。

富美子のはその祖父の死因と等しく腎臟が惡いのであつて、ヂフテリヤではなかつた。が、知春を

まだ小さいだけに死んだ子のが殆んど同時に移つたのである。義雄は、若し自分に梅毒氣味があるとすればその時に於いて父のを遺傳したと思つてゐるし、富美子は又その祖父の胃臟を受けたし、知春は又その兄弟の病氣に傳染したのだ。然しこの知春のは手後れでなかつたから、注射が利いて、——まだ熱は去らないが、——咽喉のひゆう〱云ふのは直つてゐた。

『もし生の悲痛に堪へるだけの活氣がないとすれば、こいつも今のうちに死んだ方がましだのに』と考へながら、義雄は知春の隔離されてるその室で、千代子から死んだおぢィさんからして後妻の姉に手を出しかけた程だから、その惡い報いが子や孫にまでも來たのだと云ふやうな繰り言を聽かせられながらも、それを聽き流してゐた。かの女は病兒の無理をなだめて眠らせるやうにしながら、切りもなくいろんな不平を漏らしてゐた。

やがて義雄の弟がやつて來たので、死骸に付き添つて桐ヶ谷へ行かせることにし、今夜はそこの火葬場の茶屋へとめて貰ひ、あすの朝、骨拾ひをして歸るやうに命じた。

『とめて吳れるか知らん』と、馨はいやさうな顔をした。

『おれが前に經驗があるから、云ふのだ。』

『では』と、しぶ〱承知したので、義雄は渠に火葬の手續き證の出來てゐたのなどを渡した。

人夫の代りに呼んだ車夫も來たと云ふので、知春の室には看護婦を殘し、千代子もしぶ〱として、

入院してゐる二名の子も死ね、さうしたら、最も冷たい雪や氷の中へでも、自由自在に自分の事業をしに行けると。

『さうだ。どうしても、わが國の極北へ行かなければならない——でないと、あいつ、意志が弱いのだ、爲る／＼と吹聽ばかりして、何も着手しない、と、云ふ友人間のそしりを脱する事が出來ない。』

千代子の言葉に據れば、一昨日、重吉も樺太から歸つて來て義雄に會ひたいと云つてるさうだ。渠には、いよ／＼この自分の事業により、やがて、自分のこれまでの失敗と不評判とを取り返して自分の同時にまた全人的發展なるところの社會的發展をも實現することが出來ると云ふ希望が輝いた。

『今晩は歸つて來なさるでしよう、ね。』から千代子が聽いたのを振り向きもせず、渠は自分が幹事の忘年會が湖月で多くの藝者などをまじへて賑やかに飲んでゐるありさまを想像しながら、

『どうか分らない』と、乃ち、お鳥にも告げて來たのと同じ言葉を繰り返して、電車の乘り場へ急いだ。

渠はそれほど、萬事を投げ出してまでも、友人仲間に孤立してゐる自分の意氣込みを發表したかつたのである。

四

よそほつてまで見せるいつものむツつりとは少し違つた氣分で、義雄は自分の物だが、最も好かない家へ出かけて行つた。然し下宿屋田村の玄關をあがると、直ぐ女房の千代子に出くわしたので、いつもの通りまたむツつりした氣が起つて、物を云ひかけたくも無かつたが、強いて顏を和らげた時は、棒立ちに立ちどまつてゐた。

千代子も立ちどまつて、冷やかな笑みを示めした目をじツと所天に投げた。そしていきなり、

『珍らしくにこ〳〵してらツしやいますが、何か面白いことでもありますか、ね？』

『……』これで、もう、渠は素直に出られなくなつてしまつた。腹のどん底に用意してゐた聲を腹一杯に出して、『金が入るんだ——三圓だ！』

『へい——』かの女はきよとんとして、所天の突然な太い大きな聲を出した顏を見守つてゐたが、飛び出たやうな眼をわざとらしく横に反らして、『お金なんかありません！』

『何！　こないだ渡したのが、もう、無くなつたわけは無い！』

『あれは』と、また向き合つて、『うちの暮しに入ります——お客さんが立て換へて呉れいと云つても直ぐ困るぢやアありませんか？』

『下宿人に金を立て換へるときまつてやアしない！』
『あなたは御自分のうちの商賣を御存じないのですよ。』
『商賣はお前が勝手にしてゐるのた、おれは別におれの仕事がある！』
『ぢやア、あんな目かけなどに夢中にならないで、せツせとその仕事をすればいいでしよう――下宿屋は、ね、亡くなられたお父アさんが、やめてしまうのも惜しいからわたしにしろとおツしやつたのですよ！』
『だから、勝手にするがいい、さ。おれは兎に角、今、音樂會に行く金が入るんだ。』
『ふン』と、かの女は鼻で受けて、横を向き、『きのふの新聞に在つた音樂倶樂部でしよう――ありません！』
『よし！』から云つて、渠は鳥うち帽をかぶつた儘、つか〳〵と、家族の居間へ這入つて行つた。
『あなたは』と、かの女はついて來て、『泥棒して行く氣です、ね。ぢやア、お待ちなさい、わたしが出しますから。』
『おれのうちの物を』と、つツ立つて勢ひを見せ、『おれが出すのに、何が泥棒だ？』
『だツて』と、一生懸命な口答へをするやうに口をとんがらかして、『簞笥をこわされるだけでも詰りませんから、ね、この家だツて、もう、抵當に這入つてゐますよ。』

『知れたことだ、今度の樺太の事業の爲めにやア、家どころか、家族やおれ自身をも犧牲にするかも
知れないんだ。』
『あの女におだてられてでしよう――』
『手めへにおれの心が分るものか？』
『分つてますとも！』
『ぐづ〱云はないで、出せ！』
『樺太の事業だつて、成功するか、しないか、分るものぢやアない――きのふだツて、二百圓よこせ
の電報が來たのを屆けたのに、どうするんだらう？』
『どうするも、かうするも、おれの考へだ。』
『あなたはおれ〱とお云ひなさいますが、ね、若し失敗したら、うちのものをみんなどうする氣で
す――かつえさせても構はないのでしよう』などと云ひながら、千代子は引き出しをあけて、札を三
枚出した。『ほんとに馬鹿々々しい！』
『出せ』と、引ッたくつて、『うちなんざアどうでもいいんだ！』
『そんなにあの女が――』
『いつも云ふ通り、ね』と、あごを突き出して、『おれは女の爲めに狂つてるんぢやアない！』

『狂つてるぢやアありませんか？ちツともうちにゐつかないで――』

『おりやア手前をいやなんだ！』

『いやでもなんでも、家内は家内ぢやアありませんか？』

『だから、早く自決しろと云ふんだ！』

三人の子供はおづ／＼しながら、一緒に家をのぞいてゐるので、女房のくど／＼云ふのを相手にしないで、義雄は飛び出すやうに家を出てしまつた。

その頃、義雄は、芝公園に接する或片側道の粗末な二軒長屋の一方の二階へ、お鳥を移してゐた。一度も二度も居場所を隱して歩いたが、魔のさすやうに發見せられるので、とう／＼大膽になつてしまつた。樺太から事業上の電報などがいつやつて來るかも知れず、また、新聞雜誌の寄稿依賴者があつた場合――これが本來の職業であるから――ゐどころが分らないのも困ると思つて、自分の家に近いここに決めたのである。

お鳥は最初これを非常に反對した。

『また、やつて來て人に恥ぢをかかすのぢや。』

『もう、決してなどり込まないと誓はせてあるのだから。』

『分るもんか、あの氣違ひが！』
『來たら、蹴倒すだけのこと、さ。』
時々、皿におかづやら、一人前のおはちに五もく飯やらを、子供が好意らしく屆けて來ることがあるが、お島は口に入れたことがない。
『毒が這入つてるかも知れへん。』
『まさか――』
『まさかと云ふたツて』と、かの女は口びるを左右に引き張り、齒の間に少しつばををどらせ、『それだけまだ向ふを信じてるんぢや。』
『信じるも、信じないもないぢやアないか』と、微笑しながら、『死ねばもろともだア。』
『あたい、まだ』と、眞面目くさつて、皮がたるんでくしや〳〵した顏の中から男を見詰めて、『あんな婆々アに殺されたうはない。』
『おれも死にたかアない。』から、からかひ半分にあしらひながら、義雄は、家から屆けて來たものがあると、いつもみんな自分獨りで平らげた。かの女には、それがおのれを馬鹿にしてゐるとしきや思はれないやうであつた。
かの女は一日物を云はないことがある。義雄はまたそれをいいしほにして、急ぎの原稿を書きつゞ

けた。

障子をあけると、向ふは、もう、公園の一部で、烏が澤山集まるので烏山と名の付いた森が見える。この森と家の建つてる側との間の道幅は廣いが、少し傾斜があつて、上では直角に曲つて、水道溜め場のある方に導く。その角を曲つて來る人の姿が見えると、『旦那さまや奥さまや、お助けでございます』をやり出す乞食が、こもを敷いて毎日のやうに、丁度、この二階の正面に出てゐる。

『また云ふてる』と云つゝ、お鳥はよく障子のあはひからのぞいた。親子はいかにも哀れみを乞ふやうな樣子で往來の男女を拜んでゐるが、人通りがちよツとでも絕えると、子は、

『何かたべたい、なア』と云つて、足を投げ出し、横になつて天をながめたりする。

『それ、それ』と親に注意されると、急に拜みの卑劣な姿勢に返つて、向ふから見え出したものを見ない振りで見ながら、再び物乞ひの聲を張りあげる。

『あの子面白い子だ——あたいも何かたべたい、なア——』

『ぢやア、またあすこのあんころかい?』

かう云はれてかの女が機嫌を直すこともあつた。義雄はそれにお付き合ひしながらも、執筆を絕つたことはない。その乞食親子とこの書齋代用の二階とを舞臺にして、自分の事ではないが、自分が先驅者の一人であつたと思ふ詩界に於て、落伍者となつた架空の一詩人を點出し、その無自覺な努力をし

てゐるところを以つて、或る方面に對する諷刺をした小說が出來たのも、この叫びである。去年、苦心して書いた長編『耽溺』が今年の二月に或雜誌で發表せられてから、渠は小說を書かうと云ふ確信が强くなつてゐたのだ。でも、いろんな雜誌や新聞から依賴して來るのは、多くは評論の方で、それに次いでは、まだ、渠としては、もう、興が去つてしまつた詩である。かう云ふ依賴を渠はすべてこの二階で受けた。

『お助けでございます』が初まると、お鳥はきツと障子のそばへ行つた。そして御成門の電車停留所の方から傾斜をのぼつて來る男があると、どの男を見ても、先づ義雄の客ではないかと思つた。

『逢てた』と、失望した樣子で、『うちへ來るんかおもたら。』

『東京にやア、人は多くゐるから、ね。』

『でも、きのふ、あの加集に似た人が通つた。』

『お前あいつを好きだ、ね――？』

『誰れがそんなこと云ふた！』かの女は足ぶみして怒つた。机に向つてる男を見おろして、『あんな輕薄な奴、あたい嫌ひぢや！』

『おれも嫌いだが、ね、小學時代の友人でもあるし、いろんな口聽きとして役に立つやうだから――』

『そりや自分の勝手やないか――あたい知らん！』

かの女は、それでも、頻りに獨りで鏡に向ひ、自分の顏をいろんな風に映して見る日がつゞいた。

『大分乘り氣になつて來た、な』とは考へながら、義雄は後ろ向きにそ知らぬ風をして、友人なる有名な背景畫家の大野がいつか云つたことを思ひ出した。

『あいつァ馬鹿だぜ――少し足りないぜ。』

『そりやア、君のやうに藝者や苦勞人ばかり見て來た目にやア、ね――ありやア、まだほんの、田舍ものだ。土のにほひが拔けてないのだ。』

この問答があつたのは、大野が義雄とお鳥とを招待した或るうなぎ屋の二階で、お鳥が便所に立つた留守の時だ。かの女が澄ましてもとの座に返つたところで、大野は醉眼でかの女を小娘か何かのやうにのぞき込みながら、

『可愛い、ねえ。』

『ふん』と、かの女は自分の顏をしやくつて、眼を横に反らせた。これはかの女が誰れに對しても冷かされる時などにする表情だ、が、自分は餘ほど得意でゐるのだな、と義雄はいつも推察が出來た。けれども、こんな時ほど女の顏の缺點をさらけ出す時はないと渠には見えてゐるので――兎角、太い横じわが三筋寄り勝ちの額の下に、青みがかつた眼の玉が動き、あまり高くない鼻が廣がつて、その下で大きな口が一文字に引ける。意地の惡い表情の變化が豐富に出來ると思はれるのは、ただこの口

かある爲めにだけだ。
『それにしても、もツと都會馴れなけりやア、ねえ――』
『田舍ものなら、田舍ものになれる――では、女優にしておくれ』と、かの女が云つたのは、それからまた二三日あとのことだ。
　女優學校へ傍聽生とでも云つたやうな入學の交渉は、校長が旅興行にまはつてゐるので、返事はそれで歸るまで得られないのであつた。
　その校長がわが國では有名な女優であつて、年中どんな忙しい生活をしてゐるのかも知らないお鳥は、不在で分らないと云ふ返事を聞いただけで、それが體のいい斷りではないかとあやうんだ。
『そんなに心配するなよ、どうせ何事も手筈が延び／＼して來たのぢやアないか？』
『だから、早う何かさせて呉れたらえいぢやないか？』じツと、また、睨むやうにして、『樺太のことと云ふたら、――何でも自分のことは――火の付くやうに騷いでる癖に、あたいの事となつたら、いつでも平氣でぐづ／＼させて置く！』
『ぢやア、下のお婆アさんに先づ三味線でも習つてゐるがいい、さ。』
『そんなら、早う賴んでくれたらえいぢやないか？』
『さう意地惡く云ふなよ。』義雄は、かの女が餘ほど情の籠つた時の外はおだやかに出ず、どことなく

皮肉なやうな、いぢけたやうな物の云ひ振りをするのを、社會一般から見て不自然な狀態に置かれてゐるのを忘れない僞だと受取つてゐる。渠は、どうせ、今の妻は離別する時があると思つてゐるので、お鳥に對しても、時には『やがておれは女房が無くなるのだが』とも語つた。さうかと云つて、いづれ來るべき本妻離別の時となつて、お鳥のやうな女を正式の妻に直さうとは夢にも考へてゐない。『本妻にして吳れ、して吳れ』が、子供が母に何かをねだるのを見てゐるのと同じやうに、渠にはうるさかつた。

それには、每日かの女のあたまを何か一つのきまつたことに占領させて置く必要から、さきには、義雄が何年か以前に使つたヴイオリンを持つて來た。すると、かの女は獨りでどうやらかうやら調子に辿り付いて、田舍で歌を聞きおぼえたストライキ節などを云はせるやうになつた。で、三味線も行けないことはなからうと云ふことが分つてゐた。

義雄は自分の家から、繼母が殘して逃げて行つた古い三味線を、千代子の反對を受けたにも拘らず、ひツたくつて來たのである。それが每日一度は、渠の坐わつてる下から、ぺこん、ぺこんと聞えた。同時に、またかの女は近所のちよツとした踊りの師匠へ通つたので、二階の片隅では、しよツちう、五十錢であつらへて貰つたとか云ふ花やかなあふぎが廣げられたり、閉ぢられたりした。

「淸水さん、お稽古をしましよう。」から本當のお師匠さんらしく呼びかけられて、お鳥が三味線を持つて下りて行つた時、義雄は客の加集泰助に對して二百金の周旋を賴んでゐた。

渠はこの客に對して信用を置かなくなつた。と云ふのは、不斷から輕薄な性質であるばかりか、その内職のやうにやつてる周旋が一向依賴通りに運んだことがない。家を抵當にするからと云つて、去年から賴んであつた事業費引出しの件も、とう／＼意外の方面から突然に出來た。去年の歳末に迫つて子供が三人揃つて入院し、一人は死んだ騷ぎの時も、加集はとう／＼工面し切れなかつたので、義雄は自分の足かけ七年間勤めた商業學校の英語教師を、どうせ辭職するのであつた豫定よりも、三ケ月早く辭職し、その退職金を十二月三十一日と云ふ日に受け取つたので、僅かに年を越えることが出來た。

けれども、今回は、もう、二進も三進も行かなくなつたので、またこの加集を呼び寄せたのである。柄でもないと云はれる事業に於ける兵站部を勤める爲めに、技師や弟以下に後れてまだ居殘つてゐる義雄ではあるが、かう早く金の追求が來るとは豫期しなかつた。もつとも、その用意としては、地方の或都會の水道建設費二百萬圓を外資に仰がせることにして、渠の先輩で今コンミシヨンマチヤントをしてゐる人に話し込み、市の責任者の依賴狀を待つことにまで運ばせたが、これは勸業銀行が出すから外資を仰ぐなと云ふことになつて、渠の奔走は無駄になつてしまつた。

また、渠の玉突き仲間なる或鑵詰問屋の主人へかけ込んでも見たが、少くとも第一回の製品を見ないうちは、商賣の法則として、金の融通が出來ないと云はれた。

家を二重抵當にするか、餘ほど好意ある人から信用貸しを仰ぐか、この二つの道しきやなかつたのを、この客は今度は、どこをどう甘く立ちまはつたのか、信用で借りられさうだと云ふ話を持つて來た。

『ぢやア、賴む。』

『然し金のことだから、君も十分に責任を負ふて吳れんと――』

『そりや、無論、約束する期限までにやア――』

『おい』と、今まで何となく下へ氣を取られてゐた加集が、俄かに『下手くそぢや、なア。』

『ふ、ふん。』義雄も客について又苦笑ひをした。

お鳥は『今も昔は』を習つてるが、三味線がびつこのやうに歩いてるらしい。

『まだ聲を出せないのか？』

『出せば出せるだらうが、下の婆アさんを半分馬鹿にしてゐるから、いけないの、さ。』

『無論、あの婆アさんかて』と、時々、加集に關西辯が出るのはお鳥と同じやうで、『上手だと云へん。それに、五十づらをさげて、薄化粧をして、若い亭主に燒き餅を燒く奴だから、なア。』

『淸水に聞いたのだらう――けれども、ね、如何に緣日商人だからツて』と、義雄は額の廣い、頰のこけた顏に、鋭い眼を眼鏡の裏から光らせながら、『さう馬鹿にするものぢやアない、さ――お互ひに好き合つてゐるのだから。』

『よく夫婦喧嘩をすると云ふぢやないか？』

『そりやア、また、出來心からだらう、さ。』

『君等と反對だぜ、女が五十で、男が三十四では。』

『僕はさう年を取つてやしないぢやアないか？』

『いや、さ、年の割合ひがよ――あいつは二十二ぢやさうぢやないか？』

『欲しけりやアやるよ、僕が樺太へ行つちまやァ。』實際、義雄はその金を窑鑵材料に換へ、それを持つてあつちへ行かなければならないのだ。そしてその後のお鳥は、都合によれば、どうなつてもいいと思はないこともない、かう金の融通に困つてる時は、殊に。

『君の病氣の身がはりなんて』と、加集は反抗の樣子を見せようとしたが、顏に多少の釣り込まれた色が見えたのを、義雄は私かに、『馬鹿な野郞だ』と認めた。

『聲をお出しなさいよ、聲を！』下の婆ァさんの年に似合はない凉しい聲がした。

『出さないぢやア、いつまでも出ませんよ。』

『ナダイムスメノー』低く、然し氣取つてるやうな――

『やつてる、やつてる！』加集は背廣の洋服に圓まつて、その場にわざとらしくひツ繰り返つた。

『義雄が音樂倶樂部の入場費を自家から強奪したのはその日で、――渠が不愉快な心持ちで戻つて來た時、お鳥が同倶樂部へ伴はれて行く用意を濟まして、義雄の机に横ずわりにもたれ、むろ咲きのにほひ菫を頻りに鼻に當ててゐた。渠の友人なるアメリカ歸りの或客がかの女へ贈り物に持つて來た小鉢で、『あの人はなかなかハイカラだ』と云つて、かの女はその客が歸つたあとまでも喜んだ物だ。そして義雄の想像では、かの女がこれまでに餘ほど得意に感じたことはたツた三つだ――第一は、かの女の寢物語りから知つたことだが、さきの所天なる小學教員に、紀州でまだほんの同僚であつた時、自分の寫眞を要求せられたことだ。第二は去年の夏、義雄に伴はれて甲州へ行つて、初めて温泉のお客さまとなつたことだ。そして第三が、乃ち、この贈り物を受けたことだ。

『あたい、あの人好ツきや』と、かの女はぢらし半分に云つた。

『でも、ね、お前のお望み通りの獨身者ぢやアないよ。』

『獨身者でなかつたかて』と、負け惜しみに、『自分のやうなおぢいさんではない。』

今も亦じらしてゐるのだと思はれるので、義雄はそんな興には乘りたくなかつた。坐わらないで、そしてかの女の正面には向つてゐるが、暫く物を云はなかつた。そして長く反り返つたうは鬚をいじく

りながら、曾てかの女が怒つて、その鬚をひツ張つた時の痛さを思ひ出してゐた――まだ痛みが殘つてるやうだ。

かの女はこれでもか、これでもかと云はないばかりに、紫の花の上に自分の鼻を突ツ込み、ふんふん、ふんく嗅いで見せてゐた。が、根負けをしてか、目だけで見あげて微笑した。

『さア、行から。』

『でけた』と、疑問的にくびを優しく動かしてから、いきなり訴へるやうに、『あの加集の奴、好かん！』

『……………』

『あたいに、こないだから、いやらしいことばツかり云ふて！』

『いいぢやアないか』と、とぼけた振りで、『向ふがお前を好いて呉れりやア？』

『では』と、花の鉢を兩手で持つて、すわり直した膝の上に置き、男の顏をうは向きに正視して、『あたいを取られてもえいか？』

『うん。』ふと、さうして呉れりやア、こんな面倒はなくなると云ふ氣が出て、『それもお前の決心一つだ。』

五

『念の爲めに聞いて置きますが、な。』音樂倶樂部の幹事の一人杉本博士の聲だ。『この會では、正當な婦人でなければ出入りさせないことになつてゐますが、君はあの婦人に關係はないでしよう、な？』

『關係！』義雄は、同倶樂部の演劇研究部へ鶴子と云ふ女をモデルに入れる爲め紹介しにつれて行つた時のことを思ひ出してゐた。無論關係はなかつたが、その時考への中にあつた痛いところを突かれたので、それを隱す爲めにわざとらしく胸をそらせた。

こんな思ひ出に冷汗をかく氣がして、義雄は今夜の演奏會を小さくなつて見渡すと、あの夜、あの女や渠と共に、三味線につれて新工風の國風舞踏の一なる『木曾の御嶽さん』を稽古し、トコセ、キナヨ、ドン／＼と云ふかけ聲などを擧げたりした連中は、すべてあちらこちらの椅子に陣取つてゐる。渠の早く目に付いたのは、博士――某銀行の頭取り――某富豪の息子で、義太夫に上手なもの――常任幹事の細君――踊りのモデルなる濱野孃――。

義雄は、演奏藝術に對する純粹な感興によりも、寧ろ周圍の人々との關係に醉つてしまひながら、有樂座の下の眞ン中ごろで、通り道に接する椅子を、自分と並んで占領してゐる女が、さきに演劇のモデル志願を他の或理由でたッた一日で斷念したあの女のやうな美人でないのを、且田舍ものじみてゐるのを、誰れにも見られたくなかつた。が、いづれも美しい女連が先づ見のがさなかつた。

『田村さん、田村さん！』常任幹事の細君が廊下で義雄を捕へて、『あなた、今晩は、奥さんと御一緒？』
『えー――』
『嘘でしよう』と、濱野孃は、細君と目くばせしながら、踊りの時のやうにからだをしなやかに動かせた。『それで、この頃は不勉强、ね――トコセキナヨも、富本も。』
『…………』どうしておれの女房でないのを知つてるだらうと思つた時、ふと千代子が曾て、同倶樂部の素人試演會があつた時、――その時、けふも來てゐる理學士が硏究の爲めに習つてる踊りのうちに『保名の狂亂』を踊つたが、――義雄の紹介も待たないで、いつもの出しや張り根性で、勝手に杉本博士に面會し、うちのがいつも御厄介になりましてなどと入らざらん挨拶をしたのに思ひ及んだ。あの時見てゐたに相違ないと氣が付いたが、ただ二人の美しい衣物の着こなしや、からだのしなやかさにいい感じを與へられながら、何げなく、『どうせ僕にやアどッちも駄目ですから、ね。』
『駄目ツて』と、細君があまへるやうに品をして、『稽古おしなさいよ――あたし大分富本が進みました、わ。』
『あすからでも、つづけて入らツしやいよ。』
『もう、僕にやア興味がなくなつたのでしよう。』から云つて、渠は樺太に於ける事業に對する誇りを私かに胸に踊らせた。

『どうです、田村君、あの歌澤は？』番組の第四が終つてから、博士は義雄に立ち話しをした。『富士の白雪などは最も面白いぢアありませんか？』

『ちよツとひねくれて、含蓄があるやうなところが、ね、お宅で初めて聽いた時から面白い物だと思ひました。』

『さうでした、な、君は歌澤再興者の一人です。』博士のかうした自信を交へた誇張的な挨拶も、この流派の再びあたまをあげて來た當時であつたから、義雄には不愉快ではなかつた。

番組第五の長唄『綱館』が六左衞門等の絃で進行中、伊十郎が例の通り自慢らしく大きな音を立てて鼻をかんだのが、つい癪になつた爲め、氣を變へようとして席を立つた。すると、義雄は出口に近い一番後ろの、誰れもゐない一列の椅子の一つに腰かけて、黑い羽二重の羽織を着た千代子が、痩せこけた顏から兩の眼を飛び出させるやうにぎろ〳〵させて、こちらを見てゐるのに出くわした。

『こいつだ、な、お鳥を何かの手段で呪つてると云ふのは！』直ぐにもなぐり付けたかつた。が、あたりにこの會の内輪に屬する連中がゐるので、からだ中にみなぎる怒りの顫えを微笑にまぎらせ、そツとその前の椅子に行きながら、成るべく小さな聲で、『お前も來たのか？』

『お目出たうございます！』

『………』渠は吹き出したかつたが、かの女の多少は遠慮してゐるらしい聲が、持ち前の癇性を運ん

で、ぴんと靜かな聽衆の耳に響いたと思はれたので、この演奏會のレコード破りをやつたやうな申しわけ無さを感じた。
『あなたばかりがいゝことをして』と、こちらばかりに恨めしさうな目を注いで、
『うちのものはどうするんです？』
狩野孃や常任幹事の細君がじろ〳〵こちらを見てゐた。義雄は腰をかけたでもなくかけないでもなく、かの女に向つて椅子の脊にもたれてゐるのに氣が付いた。
なほいつものやうな事を千代子が云つてるので、義雄は默つて廊下へ出てしまつた。が、かの女はついても來なかつた。
ふら〳〵歩きながら、暫く氣を落ちつけて見ようとしたが、どうしても義雄の怒りと不面目な氣とが直らなかつた。
『千代子が來てゐるから、きツと面倒が起る。直ぐ歸れ』と、名刺の裏へ鉛筆で書き付け、案内の女に托したら、『隣りのお方が取つてしまひました』と云つて、歸つて來た。
渠が扉に付いてるがらす窓の羅紗をあげて、のぞいて見ると、渠の席へちやんと黑い羽二重の紋付きがかけて、メリンス無地の牡丹色の被布と並んでゐる。そこばかりが見すぼらしいやうに感はれて、お鳥をつれて來るのではなかつたと後悔された。迫めて被布が道行きで、道行きがメリンスなどでな

く、且、都會じみた柄であつたらいゝのに――かの女がいゝ氣になつて着てゐるのを幸ひに、何も新調してやらないのも、あんな下らない病氣の爲めに、かの女の病院通ひの入費がかさんだ爲めだ。

『馬鹿々々しい！』渠は自分で自分を批難しながら、別な扉から這入り、夫婦で來てゐる大野のそばに行き、渠に廊下へ出て貰ふやうに頼んだ。

『僕もさツきから』と、大野は酒くさい息を吹きながら、『何か事件が起るぞと云つてたのだ。困つた、ねえ。』

『兎に角、君が行つて何とかこの場だけは無事に濟ませて呉れ給へ。』

『何でも君の細君を一先づ外へ出して、なだめるんだ、ねえ。』

『ぢやア、頼む！』

義雄はまた扉の窓からのぞくと、新式な洋服を着た紳士然たる友人が聲をひそめるやうに千代子の顏に近づいてゐると、かの女は何か云つて、つんけん〳〵と顎をあげてゐるのが見える。氣違ひ聲がこゝまで聽えるやうだ。

『やがて大野は出て來たが、『駄目、駄目！』首をふりながら、『相變らず分らない、ねえ。おれの云ふことなんか、田村の友人だから、信じないツて。』

『困る、なア。』

『今夜こそ逃がさないで、方をつけると云つて、――ちやんと片手で』と、大野は口を結び、目を据ゑ、ちかく強く握つた右の手を出して見せ、『向ふの袂をやつてゐるよ。』
『仕やうのない奴ぢやアないか？』
『それもいいとして、さ、一方も亦大膽ぢやアないか？ 見ッともなく袂を握られながら、どうせ來たのだから、わたしもおしまひまでゐましようッて。』
『おい、君！』義雄は堪らなくなつて、『今一度二人を呼び出して呉れ給へ――どんなことが起るか知れないから。』
『いやな役割だが、ねえ』と云ひながら、大野はまた這入つて行つたが、ぷり〳〵怒つて出て來た。
『もうほうッとけ、ほうッとけ――バーに行かう。』

六

東洋軒の二階でビールを飲みながら、大野は義雄を冷かしたり、慰めたりしたが、義雄の耳にはそれが碌に這入らない程であつた。
そのうち、長唄が濟んだかして、がやがやと食堂へ這入つて來たものがある。その間に常任幹事もまじつて來て、心配さうに二人に聽いた。

『どうしたのです？』
『實は、ねえ』と、大野が受けて、手短かにこのことのわけを話したので、義雄はそれにつづいて、
『どうもあなたに濟まないやうなことがあつてはと思つて――どうだ、大野君、幹事の權利であの二人を追ひ出して貰はうか？』
『それにも及ばない、さ、おしまひまで聽きたいと云つてるし、僕からもこの場では必らず間違ひをすなと云つてあるから。』
『云つたツて、氣違ひが分りやアしない。』
『心配するにやア及ぶまい、あの樣子ぢやア、一方が惡く云やア、圖々しいから、無事に受けてるよ。』
最後は呂昇の柳だが、義雄は勿論、大野もそれを聽く氣にならなかつた。が、ビールに飽いた頃、もう終りが近からうと見に行つて見ると、『必らず草木成佛』のところで、語り手の一特色なるほがらかなラ行音が直ぐ義雄の耳に這入つた。
渠は大野夫婦の席の後ろの方から、お鳥と千代子との樣子を私かに注意してゐたが、はねをばかりが急がれる神經のいら〳〵する奧には、どうでもなれ、あの二人がどんな芝居をするか見てやらうと云ふやうな落ち付きもあつた。
『自分だけが早く出てしまへばわけアないぢやアありませんか』と、どこからとなく無言の聲が注意

して見れた。それが正面の二重舞臺の、敷きつめた赤い毛布の色が背後の金屏風に反射してゐる、その中央に据わつた赤い房が二つ下つた見臺のあたりからであつたやうにも聽えた。
『どッせ燒ツ腹だ』と、渠も亦無言で答へた。そして花でも降つて來さうな音樂に滿ちた空氣を、最後に於て、出來るだけ澤山吸ひ込んで置かうと努めた。
大野の細君の靜子がちよツと振り返つてこちらを見た。その所天と同じやうに役者じみた所があつて、ちよツと微笑して見せるのにも、その圓く肉づいた頰ツぺたにまで表情が溢れてゐる。この女だ――姉よりも妹の方が眞面目だと義雄が批評したのを人づてに聽いて、曾て、わざ〳〵『不眞面目生』と稱して愛嬌ある手紙を渠によこしたのは。それから親しく行き來するやうになつたが、渠は、かの女の妹の眞面目腐つて田舍じみた傾向あるに反し、靜子は藝人じみても可なり垢ぬけした精神があるのを好みして、かの女を自分等の集まる或詩人會へつれて行つたこともある。
あれはかの女が大野と結婚する一二年前のことであつた。世間では、大野より以前に義雄はかの女と關係があつたと云つてる。それでさへ詰らないと思つてるのに、この男女がいよ〳〵結婚するとなつて、大野が先妻を虐待すると云ふごたごたの時、義雄が大野の先妻に同情したところから、またそれにもきたない關係があつたと大野がはの友人等に云はれた。靜子からは、また、かの女と大野との間を圓滿に成立させる責任があるやうに頻りに云つてよこして、義雄に訴へるやうな又渠の態度に抗議

するやうな言葉があつた。

實際、大野と靜子との手を握らせたのは――洋畫家たる大野の或特別な畫にかの女自身をして適當なモデルを供せしめる爲め――義雄の所爲である。

『僕に、然し、結婚しろと云つて紹介したのではなかつた。』から、義雄は靜子に語つたことがある。それは、然し、甚だ未練らしい言葉だと、渠自身も思つた。その時であつた――渠は、かの女と大野とが關係の途中で中たがひをしたのを仲裁する爲め、大野を日比谷公園の松本樓に待たせて置いて、靜子をそこへつれて行つたのは。

大野は既に大分醉つてゐた。その上また義雄とビールやキスキを重ねてから、そこを出ると、電燈のちらつく樹かげで大野はふら〳〵と倒れかけた。靜子は、

『あぶない』と叫んで、抱きとめようとしたのを、

『大丈夫です』と、身づから踏みとまつて、大野は太い樹の幹に片手を支へた。義雄はこれを見て、

『相變らず芝居をやる男だ』と思つた。

靜子をまかされた義雄は、かの女と共に急いで赤電車に乘つたが、車中から窓の外へ今喰つた物を吐いた。渠の脊中をかの女はさすつてゐた。そしてかの女は電車から下りると、藥屋を叩き起して寶丹を買つた。

靜子姉妹は新派に屬する日本畫家で、女二人の腕でその母と靜子の先夫の子とを養つてゐた。
義雄は寶丹を飲ませられ、暫時その家に寢かせられた。やがて車が來て、それに乘つた時、またへどを吐いた。

こんな記憶の間から『母の柳』が引かれて行く後ろ姿を義雄はまざ〱と見た。すると、

『田村さアん、田村さアん』と云ふ女の聲が青山あたりの電車の窓から聽える。

さうだ、あれは、義雄の友人なる某漢詩人が有名な事件で殺されたその葬式の掛り員として、義雄等が人力車を列ねて青山に向ふ途中のことであつた。靜子が妹と一緒に九段行きに乘つてゐて叫んだのださうだが、義雄は後にかの女から、

『すまアし込んでゐて、一向氣が付かないんだもの』と、聽かせられた。かの女がまだ大野との間に親しみも何もなかつた時のことだとは云へ、その場の情熱に燃えると、前後もかまはず、

『何て向ふ見ずの女だツたらう』と渠は思ひ出して、獨り微笑をもらした。

そして段々と自分の神經が舞臺の氣分に一致して來たと思ふ時、惜しいやうに幕が下がつた。

どや〱と聽衆が出て行くあとから、廊下の外の石段の上で、義雄と靜子とお鳥と千代子とが落ち合つた。

千代子はお鳥の袂を片手でしツかり握つてゐる。

『見ッともないから、よせ？』と、義雄はあたりへ聽えないやうに云つた。

『よう御座います』と、これはまた皆にも聽えるやうに、『わたしの勝手です！』

お鳥は何も云はないで、微笑にまぎらせてゐようとしてゐる。

『うちのはどうしたんでしよう、ねえ』と、靜子は首を延ばして方々を見まわした。

『僕が見て來ます。』義雄は殆んどがらんどうになつた聽衆席をのぞいて見たり、廊下をあちらこちら行つたりした後、便所のそとのところで大野が巡査と何か云ひ合つてゐるのに出くわした。

『そんな誤解をされちやア、僕は實に迷惑します。』

『誤解ぢやアない、實際ではありませんか？』

『馬鹿なことを！』

『馬鹿とは何だ？』

『どうしたんだ、君？』義雄はそこへ口を出した。

『なアに、ね』と、大野はふり向いて、怒りの爲めに聲まで顫はせて、『僕が君の細君に接吻をしてゐたと云ふんだ。』

『そりやア間違ひです――實は、ちよツとした事件の爲めに――』

『まア、君、云はないでも濟むことは云はないでもいいんだ――野暮くさい誤解を解きやア。』

『何が野暮くさい？』巡査が赤い顏をしてゐるのは、息の臭ひで、義雄には、酒を飮んでゐると思はれた。

『まア、君』と、巡査をなだめるやうに、『僕が僕の妻に用があつて言づてを賴んだので――そんな野暮は云ひ給ふな――君は酒を飮んでるぢやアないか？』

『おれは決して醉つてをらん？』

『醉つてないかも知れないが、飮んでるのは事實でしよう、顏に現はれてるから。』

『おれだツて、茶の代りに酒ぐらゐは飮む。』

『飮むのは御勝手ですが、それが爲めに云ひがかりを云はれちやア――』

『何が云ひがかりだ？』

『實際、僕がこの友人に對してすまないことになるのですから。』

『風俗壞亂だ――兎に角、警察署まで行つて貰はう。』

『何が風俗壞亂だ――馬鹿々々しい！』大野はかう云つて、巡査をにらみ付けた。

靜子がいつのまにか後ろへ來てゐたが、

『あなたの爲めに』と、泣き出しさうな顏をして義雄に向ひ、『こんな詰らない目に會ふのだ、わ。――さア、行きましよう。』と、大野の上衣の末を引ツ張つた。

『また風俗壞亂だぞ』と、大野は押さへた聲で叫んだ。

『馬鹿なことを云ふにも程があるぢやアないか』と、義雄は巡査にも聽えるやうに靜子に云つて、皆と共に建て物の外へ出た。

晴れた夜で、夜ふけの寒い風が星々の光をちらつかせてゐた。

『事件は何でもないのですから』と云ひながら、倶樂部の常任幹事もついて來て、當の巡査をなだめてゐたやうであつたが、義雄は巡査がなほうるさく從つて來るのを見て、

『もう、あなたがついて來るにやア及びますまい。』

『何だ、警察まで來なけりやならん。』

『馬鹿を云ふな！』大野もまたむきになつた。『貴さまは醉つてるんだぞ！』

『貴さまとは警官に向つて無禮だぞ！』巡査も少し身がまへをして『おれをそんなに馬鹿にする氣なら、鐵拳を喰らはせて見せる！』

『う、う、う、なぐるなら、なぐつて見ろ！　醉ッ拂ひの警官に、人民をなぐる權利があるなら、なぐつて見ろ！』

『手出しをすりやア、おれも承知しないぞ！』義雄も大野の勢ひにつり込まれて、腕がむづ〳〵してゐた。

『まア、さう手荒いことは云はないでも』と、幹事が云つてるところへ、別な巡査がやつて來て、この二人で兩方を引き分けた。

巡査が去つてから、幹事は云つた、

『有樂座で歡待しないからと云つて、あの巡査がその鬱忿をこちらへ漏らすのだから、たまりません。』

『不都合極まる』と、まだ大野は納まらなかつた。

『いろんなことが起つて、すみませんでした』と、義雄は幹事に詫びたが、あらゆる面目を失つてしまつた氣がした。

見まわしたが、三名の女はいづれもそこにゐなかつた。

數寄屋橋から日比谷公園に至る道で、女どもの後ろに追ツ付いたが、靜子が昂奮した口調で早口にお鳥に物を云つてるのが聽えた。

『だから、ね、早く田村さんと別れるやうにおしなさい――どうせ、いつか、棄てられるにきまつてますから。』

『…………』

『ね』と、のぞき込むやうにして、『分りましたか？』

『…………』お鳥が高いあたまを少し頷かせるのが見えた。

『あなたも』と、靜子はちよこ〱千代子のかはにまわり、『あんまりひどいでしよう?』

『何がひどいのです!』千代子はその方へ向いて、顎に力を入れながら、『わたしが頼みもしないことを持つて來て、大野さんがぐづ〱云つたのです。』

『馬鹿を云ふな!』義雄も默つてゐられなくなり、つか〱と出て行つて、妻と、それから今の巡査とに對して押さへてゐた忿怒を一緒にして、この言葉と同時に、かの女の横ツつらを思ひ切りなぐつた。

『そんな野蠻なことを――』靜子はとめようとした。

『おれが貴さまを追ツ拂ふやうに大野君に頼んだのだ!』

『おほきなお世話です――かうしてつかまへてる以上は、うちまで引ツ張つて行つて處分を付けます。警察へでも、どこへでも突き出してやる!』

『あなたも少しお考へなさいよ、田村さんの――』

『考へた上のことですから、ね!』

『わたし、もう、知らん!――田村さんは女をみんなおもちやにしてしまはうとするのです』と、靜子は立ちどまつて泣き出した。すすり上げながら、『そんな人でもなかつたのに!』

義雄は引き入れられるやうな感じがして、かの女の姉妹と直接に行き來してゐた時のことを今一度

親しく思ひ浮べさせられた。そばへ行つて、

『兎に角、ねえ、奥さん、これから大野君の家へ行つて、あいつによく以後こんなことをしないやうに話して貰ふつもりですから。』

『兎に角、奥さん』と、大野も千代子をなだめるやうに、『これから僕の家へいらツしやい。』

『わたし、不贊成です！』靜子はからだを振つて、その所天から一歩を退いた。

『田村さんのやうな人は、もう、來て貰ひたくありません！』

『貴さまにそんなことを云ふ』と、大野はおもくしい聲を出して、『權利があるか？』

『わたしだツて、大野さんのところなどへちツとも行きたかアありません！』

『默れ！』義雄は妻の言葉を制してから、友人に向ひ、『君まで夫婦喧嘩をしちやア困るぢやアないか！』

『あいつが獨り勝手な横暴なことを云やアがるから！』

『ぢやア、わたしはあなたの家庭をおいとま致します。』

『勝手にしやアがれ！』

『そんなことを云ふなよ、君。』

『なアに』と、大野はまた巡査に向つた時のやうに怒りの聲を顫はせて、力づよく、『生意氣なことを

云やァがる！』

お鳥はただ默つて、何かの機を見てゐたのだらう。この時、さきを握られてゐる自分の袂を兩手で攫んで、うんーうんーうんと云ふやうに、左右に三度振つたかと思ふと、それが千代子の手から離れた。

『あんなことをしましたよ』と、千代子は甘へるやうに義雄を見あげたので、渠はいやで〳〵ならない妻がまだこツちに賴る氣があるのだと知つて、自分も逃げ出したくなつた。

靜子はその家路とは反對の電車に乘つた——曾て義雄がかの女と一緒にそこから乘るが早いか、恋からへどを吐いた方角へだ。

お鳥はその脊高い眞ツ直ぐなからだをそと輪に運んで、靜子とは反對の方へずん〳〵行つてしまう。その步き方は持ち前だが、これを後ろから見るたびに、かの女のまだ本當に直らない下の病ひを義雄は思ひ出さずにはゐられないのであつた。

『今夜は、おいやでしようが、ね、どうしても離れませんよ』と云つて、千代子は渠がかの女から綿服主義にさせられてゐるそのごつ〳〵した羽織の袂を握つた。

『今、僕が逃げたら』と、言葉を英語に換へて、『こいつが君の重荷だから、ね——君、先づ電車に乘り給へ。』

『君ア色をとこだよ。まア、やさしくついて行つてやり給へ。――僕はもツと醉ひのさめるまで散歩する。』

『ぢやア』と、邦語に返つた、『失敬するよ。』

『僕のワイフは、實際、飯田町へ歸つたのか、なア?』

『大丈夫、君の方へまわつて行つたの、さ――どいつも、こいつも、をどかしやアがつて!』

『わたしは一生懸命です、をどかすの、をどかさないのなど云ふさわぎぢやアありません!』

『默れ! 人をさわがせたぢやアないか?』

『まア、奥さん、お靜かに』と、大野は少しうつ向きになり、兩手をうは向きに、低く廣げて、一歩を退いた。

『また芝居をしてゐる。』義雄はかう思ひながら、『ぢやア、失敬するよ。』

『おれは獨りぽツちだ、なア。』

大野は投げ出すやうに云つて、力なささうにつツ立つた。多くの街燈から落ちる光が混亂して、渠の姿を舞臺の脚燈が反對にうへから照らして、明暗の光をそれに集めたやうに見えた。そして電車の響さへ丁度途切れて、相變はらず外套が欲しいやうな寒い風が吹いてゐた。

『失敬』と、今一度義雄は大野の方に向いたまま云はなければならなかつた。

大野は軍人のやうな直立の姿勢に直り、右の手を横顏のところまであげ、ゆツくりした、低い、沈んだ調子で、同じく、

『失敬』と云つて、靴の底で少しつま立つと同時に、首を前方へ傾むけた。

七

義雄は千代子に引かれて、電車通りを、公園のふちに添つて歩いてゐたが、あの鶴子の爲めに遠のくやうになつた倶樂部の連中に、またこんなことがあつた爲め、又と再び會はせる顏がないかのやうな恥辱に滿ちて、一言も口を聽かなかつた。

かの女も亦胸が張り詰めてゐるのを、その息づかひに現はした。かの女が月が滿ちた時に、よく苦しさうな息づかひをしたが、そのやうに肩で息をしてゐるのが、義雄によく分つた。

公園を外れようとするところにある交番の前へ來ると、かの女はその方をじろ〳〵見ながら、獨り手に巡査の立つてる方へ義雄を引ツ張つてゐるのであつた。

義雄は踏みとまつた。それが渠の袂の長さ一杯にかの女をこちらへ引いたわけになつたので、その手ごたへでかの女は氣がついたやうだ。

『わたしはどうかしてゐるやうだ。』から、かの女は獨り言を云つた。

『訴たへてどうなるんだ』と、義雄は極さけずんだ意味を心ばかりで叫んだ。この氣違ひ女め！　何を仕出かすかも知れやァしない！　が、撒いてしまう折もうまく見つからない。人通りは少いが、少くとも、一人や二人は絶えなかつた。

橋を渡つて芝區へ這入(はい)ると、直ぐ友人なる辯護士(べんごし)の家があるので、そこへ立ち寄つて話をつけ、今夜はおだやかに別れようかとも考へた。が、大野に迷惑をかけたのを思ふと、重ねて友人を騷がせるでもなかつた。

成るべく人通りの少い横丁などをえらんで引ツ張られて行つたが、

『きやツ』とか『恨めしや』とか、今にもこの女が變化(へんげ)になつてしまひはしないかと云ふ氣持ちが、渠のかの女を度々いじめて來た記憶から、おそろしいほどに浮んで來た。不斷憎み飽きて、投ぐり飽きて、またと見たくはない顏を見て、一度でもいやな氣を重ねるでもないと、渠(かれ)は出來るだけそツぽうを向いてゐた。

『年うへなばかりに増長して――』これは、もう、思ひ出したくもない。今の結婚法が改正せられ、男女どちらかの申し立てを裁判所で受理(じゆり)して、兎も角も訴訟を成立させることが、當分、望めるやうにならないとすれば、ただ〳〵この、自分には既に死骸(しがい)の、女を早くどこかの闇(やみ)へ方づけさせて呉れる願ひばかりだ。

愛宕下の通りを横切り、櫻川町の大きな溝わきを歩いてる時、物好きにその中の黒い水たまりを人の門燈の光にのぞいて見た。そして、ふと、死んだ實母があか金の足つきだらひに向ひ、おはぐろを付けてゐるのを、自分はそのわきで見てゐたことがあたまに浮んだ。きたないやうだが、身に滲み込むやうなにほひで、黒い物から出るのか、それとも、吐き出されたそれを受けるあか金から出るのか、分らなかつた。

　ここのはただの溝のにほひに違ひないが、おどんですえ腐つた物の發散する分子がぷんと鼻さきへにほつて來ると、何だかかな臭い氣がして、母が新らしく生き返つて來さうに見える。

『All or nothing ――生でなけりやア、死だ！』

　この間に讓歩はない！　妥協はない！　人間その物の破壞は本當の改造だ――改造はそして新建設だ。ぶツ倒されるか、ぶツ倒すか――そこに本當の新らしい自己が生れてゐる！　渠はかう答へながら、面倒な物を引きずつてゐるにやア及ばない――いツそのこと、握られた袂を、あの、柔術を習つたと云ふお鳥の手を試みて、わけもなくふり切り、千代子を轉がし込む氣になつてゐた。

　溝の黒い水のおもてが暗くなつた。――そのまたうへが闇になつた。――自己の周圍がすべて眞ツ暗になつて――自己も、尖つた嗅覺のさきにおどみの垢がくツ付き、からだ中がひやりとしたと思つた。すると、反對に手ごたへがあつて、

『どうするつもりです、わたしを！』

『………』渠の身ゝ毛は全體によ立つてゐた。

『なァんだ、夫婦喧嘩かい！』かう云つて、黑い影が他方の路ばたを通り過ぎた。もう 十二時を越えたと思はれるのに、矢ツ張り、人通りが絕えない。

『………』かの女は、さツさと、反對の側へ引ツ張つて道を進みながら、

『人を水に投げ込まうたツて、そんな手は喰ひませんよ。』

『………』

『それこそ馬鹿げ切つてる！』

『………』渠が逃げようとして、ちよツと踏みとまると、かの女も直ぐ電氣に觸れたやうに手の握りを固めて、こちらをふり向いた。

『殺さうたツて、逃げようたツて、駄目ですよ、直ぐおほ聲をあげて、誰れにでも追ツかけて貰ひますから、ね！』

渠は答へもしないで步いた。

「避けて來た交番だが、西の久保通りの、廣町角にあるのは、どうしてもその前を――而も挨拶して――通らなければならないのであつた。父の生きてた時、家へも來て、いつも顏を見おぼえてる巡査

がゐる交番だ。

千代子がここで本當に出來心でも起したら大變なので、その交番の手前で義雄はおのれの袂をふり切つた。

『おまはりさん！』かの女は實際に甲高い聲を出した。

義雄は自分が水をあびせかけられたと思つて、つツ立つた。幸ひに人力車の響きが通つた爲め、向ふへは聽えなかつたやうだが、渠は再び袂を握られてゐた。

何げないふりをして通る二人を、顏を知らない巡査がゐて、怪しさうに見詰めてゐた。

若し今の聲が聽えてゐても、こちらが發したのだと思はせない爲めにと、義雄は、ふと、その向ふ側のそば屋へ這入る氣になつた。千代子もあとからはしご段をあがつて來た。

『こんなところで喰べるくらゐなら、いツそ今一つ向ふの、いつもうちで取るとこへ行けばいいのに。』

もう、自分の物だと思つたのか、かの女の聲は以前よりも落ち付いてゐた。が、義雄は一層いや氣がさして、無言でぐん／＼まづい酒をあふつた。

二三杯ででも赤くなると云はれる酒が、例外に飮んだ今夜に限り、大して顏に出たとは思はれなかつた。

家に歸ると、直ぐ、千代子の母――もう、褥に這入つてゐた――を書齋に呼びつけ、

『不都合極まる女だから、千代子をけふ限り引き取つて行くやうにして下さい！』

『義雄さんはいつもさう云ふことをおツしやいます、が、ね、子供があるのにそんなことは出來ますまい？』

『子供などアどうでもいいんです――そんな呑氣なことぢやアありません！』

『またどう云ふことがあつたのか、聽かないぢやア分りませんが、ね――』

『みんなあなたのことから起つたのぢやアありませんか？』千代子も傍へ來て、いやな眼をぎろつかせる。

『貴さまなどの出しや張る幕ぢやアない！』今まで默つて押さへてゐた心中のもや〳〵が一時に、こゝだと云はないばかりに逆つて來た儘に、渠はおのれの妻か裏棚のかかアか何かのやうに、燒けぼツ杭じみた行爲に出た不埓を述べた。苟も表面だけはまだ亭主たる者を――そしておだやかに離婚しやうと云つても、分らないで、承知しない癖に――その亭主を多くの公衆の前で侮辱したのだ！　分つた母なら、この申しわけに、直ぐ娘をつれて出て行くべきである！　精神的には、もう、どツちからも、夫婦でないと云ふことを證據立つたことになつてゐる。

『さうおツしやると、あなたに濟まないやうですが、ね――この娘がこの頃何だかいら〳〵してゐる

のは、云つて見れば、まァ、病氣なんですから、ね。』
『そんな氣違ひ病人は、母として、直ぐ引き取つて行かなけりやァなりますまい！』
『そんなことも出來ません、わ。』
『出來ますとも！　巣鴨へでも、どこへでも、つれてゆきさへすりやァいいのです――あとの始末は
ゆツくりお母さんとわたしとで出來ることです。』
『困つたことになりました、ねえ』と、母は娘の方へふり向いて、『この娘もあんまりわさ〳〵して、
落ち付かないからいけないのですが――』
『でも、ね』と、千代子は母に頓着せず、『あなたが好きで、わたしを一緒に車に乘せてここへつれて
來たのぢやァ御座いませんか？』
あれはまだ二人乘りの人力車が澤山あつた時代だ。そしてこの女も二十四五の若盛りであつた。或
友人の紹介で尋ねて行つたのが緣となり、間もなく、とう〳〵約束までしてしまつたが、その友人が
あとで義雄に向つて、『結婚しろと云つて紹介したのではなかつた』と云つたのを思ひ出すと、丁度、
義雄が大野の今の細君に向つて云つた同じやうな言葉と意味は違はなかつたのだ。
かの女は小石川の方で、人の二階を借り、自炊をしながら、晝は小學の敎員を勤め、夜は或音樂講
習所の生徒であつた。今の狀態とは違つて、おも長の上品に艶々しい顏に、姉のやうた優しみを帶び

て、その着物の着こなしさへ、他の田舍出の女學生などとは違ひ、如何にもしなやかな姿に義雄は引かれた。そして三つ下の義雄ではあるが、渠が當時他の一人の女を思ひ思つてはね付けられた失望を全く取り返すことが出來た。

渠は芝の我善坊から、毎夜のやうに、電車もなかつた丸の內の寂しい道をてく〳〵歩いて、江戶のほとりまで通つた。そしてそこから、直ぐ、築地の或西洋人のところへ、日本語を敎へに且讃美歌改正の補助に——それが渠の每日の仕事であつたに——出かけたこともある。

『深川の叔父さんが、あす、わたしを引き取つて行くさうですよ』と、女があわてて告げたその晩に、義雄は非常手段として女を車に乘せ、かの驚きながらも寛大であつた父の家へつれて來たのである。

『そんなことは十五年も、二十年も昔のことだい！』

それから、妻子をつれて田舍の中學教師にもなつた。文學專念の爲めに、東京の場末で貧乏な暮らしをつづけたこともある。子供は六人も出來て、三人は死んだ。去年父が亡くなつたので、父の家業を千代子に引きつがせたが、その年末にはいろんなことで非常な困窮をした。

『みんなあなたのせいですよ、色氣違ひのあなたのせいですよ』と疊みかけて、千代子はあまり喜びもせず、かの退職金——大晦日に都合して貰つた——三分の二を手にした。

義雄はその他の三分の一を以て、お鳥と共に、氷川の森かげに於て、新年を籠城したのであつた。

けれども千代子はなほ自分へ義雄の愛が返ると思つてゐるのか、かう云つて叫んだ——
『昔のことだツて、今のことだツて、このわたしにやア、變りはないのです！』
『現に』と、渠は坐わつた膝にまで力を入れて『婆々アになつたぢやァないか？』
『そりやア五人も六人も子供を產んだのですもの！』
母は當り前のことを云つてると云ふやうな顏つきをしてゐた。
『何かと云やア子供、子供と云ふ！それよりも自分自身のことをもツと忠實に考へて見ろ！今の女の心持ちも知りやアがらんで！』
『ぢやア、あんな清水鳥のやうなものが今樣美人ですか？』
『清水などア本當の問題ぢやアない！人のことなどにやア口出ししないで、手前のさまを見ろ！』
『どうせ、あなたの云ふ若々しいものにやア、今更らなれません、さ。』
『手前は、お母さんと同樣、ずツと時代に後れたうじ蟲だから、さう思へ！』
『これでも、武士の——』
『またか、よせ！——武士の娘だらうが、なからうが、活き〳〵した女の精神が死んでゐらア！』
うじ蟲と云はれたのを母も怒つたのかして、

『わたしもあなたの御厄介にはなつてゐますが、ね、まさか、そんな物ぢやアないつもりですよ。』

『どうせ分らないのだ！　分らないものがゐるところにやア、おれの家もないのだ――勝手にしろ！』

　われを忘れたやうに叫んでゐたので、俄かに醉ひが發して來た。義雄はそこへ倒れた。隣りの寺の庭にある池から、時々緋鯉のはねる水音がして、急に靜まつた深夜の靜けさを破るのが聞えた。そして渠は、子供の時、あの鯉を釣つて、寺の和尙と自分の父とにひどく叱られたことがあるのを思ひ出してゐた。

　阿彌陀經を借りに行つたら、直ぐそれを坊さんになりたいのだと思つて、何なら增上寺の管長へも紹介しやうと云つた、あの世間知らずの、然し柔和な和尙も死んだ。これと親友であつて、いろんな世間話を共にした父も、和尙年來の素志であつた本堂新築の工事の音を羨ましさうに聽きながら死んだ。自分の子供も、前後三人まで死んだ。女房も自分には死んで、もう、形骸ばかりだ。お鳥なるものも、その本體の半分か、四半分しきや自分に活きてゐない。

『自分を去るものはすべて形骸だ、否、死だ！』

　そして自分自身も亦死ぬ時があらうと云ふ考へに及んだ。既に已に過ぎ去つた自分の半生が、その死と同樣に空であつた。――虛であつた。――無であつた。――理想とか、運命とか云ふ形式的概念、外存的思想などが出て來る餘地さへもない。今、この身に具體してゐる慾望ばかりが、闇夜に於ける

燈臺の光のやうに僅かに唯一のいのちだ。

今や義雄には樺太の事業に全心全力を注ぐのがそのいのちである。早く、もツと金が欲しい！　同時に、また、よく自分を理解して呉れる女が欲しい！

ぞく／＼と寒く、そして息詰るこの醉ひの苦しみはやがて又この現在の煩悶の苦しみであつた。

ぱちり！　ぱちり！

水面に踊りあがる大きな緋鯉の姿が、締め切つた室に倒れた渠の肉眼に見えて來て、渠のつき詰めた思想に正しい合の手を添へて呉れるやうだ。

『おれは兎に角生きてゐる！』

『また、何か』と云はれたので、渠は千代子がまだそこにゐたのに氣付いた。『考へ込んでるんでしよう――さツき逃げて行つた清水のことでも？』

『…………』無に歸したことを再び思ひ起させられるのがいやさに、起きあがつて『下らないことは云ふな』と、眞面目に叱り付けたかつたが、からだが利かなかつた。

千代子の何かにのぼせて來たやうな息使ひが烈しくなつてゐる樣子が、ちらりと見えただけである。

『以後は、ね、義雄さん』と、母もまたゐたのであつた。『かう云ふことのないやうにわたしからも云つて聽かせますから、けふのところは、あなたも、どうか、勘辨してやつて下さいませ――久し振り

のお歸りぢやア御座いませんか？』こんなことを云ひながら、母は、押し入れから、渠の何ヶ月か觸れたこともない蒲團を出して、洋書の背皮文字が金色や銀色に輝いてる二つの大きな書棚の前に廣げた。

然し、その夜も、それツ切りで、義雄は、暫く經つて障子をあけに來た千代子を、一步も、この昔から書齋兼用の寢室であつたところへは入れなかつた。

八

末の男の子は、父と云へば、恐れて少しも獨りでは近よらない。

うへの子二名は、父のことを母がいつも馬鹿だ、馬鹿だと話してゐるのを聽いてゐるので、父のそばへ來ても何にも云はず、半ば下げずむやうな目を見張つてゐる。義雄はもとからこれを知つてゐた。

で、翌朝、遲く起ると、直ぐ、何にも云はず、その家を出た。

お鳥は二階の眞ン中で、だらりと足を投げ出し、そツぽうを向いて肱まくらをしてゐた。

不手腐つてる、な、と義雄は思つたが、今までおさらひをしてたかして、三味線がそのわきに横たはつてゐる。

かの女が挨拶しないので、渠も默つてその後ろの方に坐つた。圓いニツケルの置き時計ばかりがち

やき／＼云つて、五分か六分を過ぎた。

『もう、別れさせて貰ふ！』かの女は半身を起して、こちらにねぢ向け、目で義雄をにらみ、足は投げ出したままだ。『相當の手續をして呉れ！』

『手つづきも何も入るものか？』渠はわざとゆツくりして、『別れるなら、直ぐにも別れよう、さ。』

『では、病氣を直ぐ直せ！』

『そりやア、仕かたがないと諦める、さ、これまで隨分金をかけてもまだ直らないんだから、ね。』

『誰れがもとぢや――お前の外にありやせん！』

『今更らそんなことア云つても駄目だ――お前の好きなやうにするがいい！』

『でも、ええ氣になつて、引ツ張られて往たぢやないか？』

『いい氣でもなかつたの、さ。』

『迫めて――けさ――早くでも』と、また例の荒い息使ひになつて、『歸りやええのに！』

『おれが寢坊なのはお前も知つてるぢやアないか？』

『場合が違ふ！――ふん！あたいが紀州を出て來たのが惡かつたんや』と云つて、再び向ふ向きにぶツ倒れた。そして渠の豫期通りにすすり泣きになつた。

出出しも同樣な辭に、紀州を出て來たのが惡いのは、義雄は初めからさう思つた、無論のことだと。

さきの亭主――それも本當の亭主であつたか、どうだか、分らないが――に棄てられたか、若しくは本人の云ふ通り自分からそれを見限つたかして、もツといい人に引ツかからうと云ふ野心から、東京へ出たのだ。そして碌でもない炭屋の亭主――義雄の家の筋向ふだ――にくツ付いて見たり、神田にゐる國のものだと云ふ人の、そしてちよツと同居した家の細君に疑はれて追ひ出されて來たり――それでゐて、こツちの本妻に立ち直らうとするなどとは以つての外だ。

若し女優になれるとしたら、それだけででも仕合はせを與へられたのではないか？　多少ぬけたやうなところがあるのに――その癖、神經が過敏で――ちよツと熱でも出ると、直ぐうは言を云ふ。

『お母さん、お母さん、あア、ア、アーアツ』などと云つて、目をさますことは氷川の方にゐた時は一番烈しかつたと思はれたが、この頃では、またその習慣が回復して來て、夢に見た母の姿を、枕もとに起きあがつてまでも見まわす樣子をする。

『おい、何をしてゐるんだ』と、義雄が注意するのに初めて氣が付き、

『また、何か云ふた？　お母さんが來た筈ぢやのに』と、眞面目くさつて微笑してゐる。

義雄はそんな時に、度々、わざとではないかと疑つて見た。が、あかりの蔭に横たはつたかの女の、地肌のなめらかな白い顔が、引き締つて、青いやうに、緑りのやうに、また紫のやうに見える時は、穢多でないかと云ふ疑ひを初めて起したのを今でも忘れないに拘らず、虛僞か眞面目かのやうな問題

はいつも〳〵消えてしまつた。そして朝になつて、かの女のまづいたるんだ顔を見る度に、自分は廣い野原の眞ン中に狐からすツぽかされたやうな不興に落ちた。

『死んだと云ふものが二度と再び出て來るものか、ね』と、たま〳〵云つたことがある。『よくお前のおやぢが出て來ないものだ！』

『親こへ生きてて呉れたら、あたいもこんなことになりやアせん。』

『無論だらうが、ね、それでも本人の心がしッかりしてイないと――』

『だから』と、からだを振り、『あいつを追ひ出せと云ふてる！』

『そりやアお前のある無しにやア關係しないでも、ね。』義雄は成るべくうそを云はないで通りぬけたかつた。

それがかの女には藥の煮え切らない證據に見えるので、そんな時に泣いて藥を威し付けようとしたこともある。そしてその末には、さきの亭主が去年一度歸つて來て呉れと云ふ手紙をよこしたに對し、返事をやらなかつたのを悔い、國であのつらかつた別れをしたあとで、まさかの時はこちらも死ぬつもりで、醫者なる兄の藥局からアヒサンを一服盜んで來てゐることを白狀した。

時には、義雄もこの神經がつよい女がどんなことを仕出かすまいものでもないと心配した。かの女は今も、泣き倒れてゐながら、

『あいつを追ひ出さなければ、あたいは死んでしまう』と云つた。そんな時には渠はかの女に仕込んでやる仕事の話でもして、氣を轉じさせる外はないと思つた。

が、けふはまだ起きツぱなしであるので、

『兎に角、おれは飯を喰ひたい、ねえ。』

『まだ喰べないの――?!』かの女は俄かにまた半身を起した。そして面倒臭さうに顔をしかめてこちらをじツとながめてゐたが、『今下の人が、もう直きお晝だと云ふてたのに――なんにも無いよ』と云つた時は、全くその顔がやわらいでゐた。

かの女は渠の食鹽に茶づけの給仕をしながら、ゆふべ、大野の細君が義雄の惡口を澤山云つたのを、かの女自身の耻辱であつたかのやうに訴へた。が、渠はそれを少しも氣にかけなかつた。

烏山にからすがガア〳〵云つてる聲にまじつて、櫻の咲いてゐる道ばたから、例の乞食の『お助けで御座います』が聽えてゐる。

その日、お鳥が踊りの稽古に出ると、義雄は或新聞の日曜附錄に頼まれた論文を書きあげてしまつた。それから義雄が外出したあとへ、加集泰助が尋ねて來たが、あがつてかの女と話しながら、暫く待つてゐた後、また來ると云つて出たさうだ。

義雄は愛宕下町の大野の家へ行つて見たのであつた。が、主人はゐなかつた。何だか、不斷のやうにづか〳〵あがつて行きにくいやうな氣がして、細君を呼んで貰つた。

なか〳〵出て來なかつた。それでも出て來た時は相變らずにこ〳〵してゐた。が、どこか澄ましてゐるやうなところが渠の目に付いた。

『今お稽古をしてあげてるのよ。』

『さうでしよう、ね』と、先づ渠は云ふより外に仕かたがなかつた。この夫人も、畫を教へてゐるばかりに、矢張り、自分の女房のやうに、教員然たる、云ひ換へれば、人に對して誰れにでも子供あつかひをする風が滲みて來たのを、渠は發見したのである。『ゆうべは、どうも、失敬しました。』

『あなたの奥さんも隨分、ねえ――?』

『あいつア、もう仕やうがないのです。』

『あなただツて、さうでしよう――もう、いや』と、つツ立つたまま、からだを振つて、『あなたのやうな人が來るのは!』

『さう云はれるだらうと思つたのです』と、渠は苦笑しながら、『ですが、ねえ、まア、そんなことは云ひツこなし、さ――どうせ、大野君がゐなけりやア歸りますから。』

『さう――失禮、ね。』から云つて、かの女は障子をしめにかかつた。

―畜生！』と云ふやうな淺い憤慨心を抱いて、義雄は、ついその近處の玉突屋へ行つた。渠とも長らくこの遊びの仲間になつてゐる有名な金貸しが來てゐた。この人は、もと、歐米へまでも出かけて宗教の腐敗してゐるのを、實見して歸り、一種の自己發明の耶蘇教を傳へるには、外國人の補助などを仰いでゐるちやア駄目だ、先づその費用たる金を自分で拵らへなけりやアと云ふ考へを以つて、金貸しになつた。この動機が丁度、義雄の唯一の先輩たる人がコンミツションマチヤントになつたと同じなので、渠は初めのうちは多少の尊敬を以つて接してゐた。が、義雄の別な友人なる辯護士や會社員と大きな花を引いたり、惡辣な高利貸しとなつてゐるのを知るに至つて、もう、既に金ばかり欲しがるあり勝ちな平凡人に過ぎなくなつてゐると侮辱するやうになつた。さきに家を抵當に資本を貸せと交渉して見たのも、――どうせ出來なかつたが、――義雄は向ふに一つも同情などは乞はないで、あり振れたアイスとしてであつた。けれども、丁度この人が獨り來合はせてゐたので、

『どうだ、負かしてやらうか、ね』と、義雄はキュウを取つた。

『今ちよツと途中で電話をかけに來たのだから。』かう云つて、渠は袖さきのカフスを直し、手袋をはめ初めた。

『さうか――こないだの連勝をどうして呉れるのだ？』

『また、今度だ。』

『わたしとやりましよう』と云つて、ボーイが出たが、どうも義雄は氣が乘らなかつた。いつもなら、出ると直ぐ親しい感じを起す青羅紗の玉臺や、こち〳〵云ふ紅白象牙の玉などが、渠の目にもあたまにも、散らけて遠いところにあるやうに感じられた。

三度に勝負まけしをて、渠はキユウを置いた。

『どうも、晝間は氣が締まらないで駄目だ。』

そしてお島の二階へ歸ると、やがて大野正則がやつて來た。

『もう、醉つてるのか？』

『例の、ね、書き割りの監督に行つてたの、さ——いつまで寒いと云ふのだらう？』

『君と一緒に濱町で目がさめると、意外のおほ雪であつたのも、こんな時候であつたよ。』

『さうだ、なア』と云ひながら、大野は少し離れて座わつてるお島を見て、『どうだ、御機嫌はいいか、ね？』

かの女はほほ笑んだが、横を向いた。

『君の細君も無事のやうぢやアないか？』斯う義雄が受けた。

『だが、ね、君の細君にかぶれて、僕のもゆふべから變だよ——君にも何かいや味を云つたさうだが、

『まア、いい、さ、僕の事情のやうなものぢやアないんだから——僕も』と笑ひながら、『けさ、やッと逃げて來たよ。』

『君が惡いんだよ』と、大野は片手を下向きに火鉢の少し上に浮けて、それを上下すると同時に幾度も首を小刻みに動かした。

『役者のやうな眞似ばかりする』と云つて、お鳥は渠を初めから嫌つてゐるのである。今もこの様子を、憎しみを帶びて見詰めてゐるのに氣が付き、

『いや』と、渠は恐れ入りましたと云ふやうなお辭儀をして、『お鳥さんがいらせられたのでした、な。』

『ふん』と、また横を向いて。

大野は話題を轉じて、畫家の社會、殊に劇場の書き割り畫家の社會に、卑劣な人物が多いことなどを憤慨し初めた。

『畫家社會ばかりぢやアあるまいよ』と、義雄は答へた。『形式家のまだ勢力ある現代では、どの社會にでも、新しい思想を體現し得るものを除いちやア、みんな僞善者でなけりやア卑劣家ばかり、さ。』

『大きにさうだ——君も蟹の鑵詰めなどに熱心するのをやめて、お互ひにしツかり戰つて行かうよ。君は詩人、僕は畫家ぢやアないか？』

『さうだ、ね』と、義雄も答へた。が、戰ふのは自分一個の力にあるので、如何に親友でも、自分と共に自分の自覺するだけのことを實行するものはないのだと思つた。落ち付いて、腹の底から出る聲で、
『然し、僕は、この場合、どうしても、あの事業をやらなければならない——背水の陣を張つてる樣なものだから、ね。』
『それもさう、さ、な。』
『あたい、行て來る、わ』と、お鳥は立ちあがつた。
『ぢやア、勝手にしなよ！』義雄はつツ放すやうに答へた。もと、二人で二階を借りてゐた氷川の家の細君——と云つても、一老人に對する下女あがりの妾——が手紙をよこした。前にかの女が勝手に賴んで置いた勤めの口だとは云つてるが、何か渠に對する反逆をたくらんでゐるのかも知れないと思つたので、その手紙を見せろと迫つたのは今しがたのことだが、どうしても見せようとしなかつた。見せないのはこれまでにも度々あつたことで、身うちからのらしいのもさうしてどこかへ隱してゐた。『叔母さん、うちのお父さんはどこにゐるのでしよう』と、義雄自身の子が云ひさうな子供のハガキも、義雄はかの女の留守にこツそり机の引き出しを探した時に、ふと發見したのであつたが——
『どこへいらせられますか、奧さんは？』

『なんでもええ！』お鳥はぷり〳〵して階段を下りて行つた。

格子戸の明く音がしてから、大野は障子のあはひから外をのぞいた。再び座に着いてから、

『よせよ、おい、あんな女！』

『僕だツて――その時機を見てゐるんだ』と云つて、義雄はゆふべのさまを思ひ出した。逃げよう、逃げようとして、とう〳〵いやな巣まで引ツ張つて行かれた。お鳥の關係に於ても、あのかな臭い溝をのぞき込むやうな場合にまで立ち至つたこともある。

『僕が今度は君の眞似言を言つて、しツぺい返しをする樣だが、ね』と、大野も靜子と結婚する、しないの騷ぎに、義雄が一時大野のもとの細君の方に肩を持つた時の言葉を持ち出して來て、『よツぽど細君の方がいゝぢやアないか？』

『情けないことを云ふなよ。僕はもツと〳〵新らしい生活をやりたいんだ。』

『それも君の說だから惡い事もなからうが――まア、あんなへたなラシヤメンじみた女はペケ〳〵！』

『だから、どうせ兩方ともやめ、さ。』

大野は、それから、芝居の興業と脚本作者の立ち場とを妥協的に論じ、座の方はどこへでも關係をつけるから今日の見物に分る程度の新らしい脚本を書けと、頻りに義雄に勸めた。

が、義雄はいづれ脚本は書くが、そんな妥協的態度で、とても、自分等の考へるやうないい物は書けるものぢやアないと答へた。

義雄は、大野につれられてビールを飲みに行き、暗くなつて歸つて見ると、加集が來て、下の老細君と二人で話をしてゐる。

渠等二人が二階へあがると、加集は云つた、

『あの婆アさんは話し好ツきヤぜ。』

『さうだらう、亭主がいつも遲くでなけりやア仕事から歸らないから、その間は獨りでぽつねんとしてゐるんだ。』

『田村さんは淸水さんにばかりくツついてて、一向下りて來ませんと云ふてたぜ。』

『まさか、そんなお相手も出來ないぢやアないか？――そして、君にお鳥を貰へと云はなかつたか、ね？』

『………』加集はちよツと赤い顏をしたが、『そんなこと云やせん。』

『それぢやア、僕も安心だが、ね』と、義雄はわざと冷かしを云つて見た。

『誰れに聽いた？』
『淸水にも、我善坊でも。』
『よせ、下らない！』から云つて、義雄はこんな男に詳しいことも、短いことも聽かせるに及ばないと思つた。しやべる奴もしやべる奴なら、聽いた奴も、面白さうにここから又我善坊へ出かけるには及ぶまい！　これも、自分に兩方の女に對する若しくはどちらかに對する眞實の愛がないからだらう――若しそれがあらば、こんなぐら／＼した、ふた股膏藥じみた男の出入は禁止する！『肝腎の用はどうしたい、きのふの――？』
『二三度行て見たが、いつも留守でまだ會へん。』
『ぢやア、その方をもツと熱心にやつて呉れたらいいのに。』
『やるよ、心配しないでも』と、笑つてゐる。
『何の爲めにぶら／＼してゐるんだ』と云つてやりたかつた。
格子が明いて、締まつたやうだ――
『淸水さんですか』と云ふ婆アさんの聲がした。
二人の眼は、見えない階下の方へばかり向いてゐた。
『ええ。』

障子が靜かに明いた――

『寒かつたでしよう――？』

障子が靜かにしまつた――

『そんなに寒いことも――へ。』

はしご段が靜かにとん、とん、とん――義雄の耳には、お鳥のいつも人前ではなか／＼をかしい程氣取つてるその樣子までが聽えて來る。

去年の暮れに買つてやつた細長い鶴の毛ショールを二つに折つて、これを片手に持つたかの女が現はれた。

いつもにないほど、にこ／＼、にこ／＼してゐる。

『やア、女優さんのお歸りか？』かう、あぐらをかいて見あげてゐた加集が云つた。

『馬鹿！』忽ち恥かしさうに顏を赤くしてにらみ付け、坐りもしないで『馬鹿！――早う往んで呉れ！』

『そないに』と、ちよツと口をとがらせたが、加集のます／＼輕薄笑ひの心を加へたのが義雄に讀めた、『おこらんでもええぢやないか？』

そして義雄はこのありさまを見て、却つてかの女の外出事件に違つたこともなかつたのを感づいた。

九

とンと強く叩きつける煙管の音がして、
『わたしを何だと思つてるんだよ！』
『………』
『假りのおめかけや、たまに旦那に來て貰ふ圍ひ者ぢやアないかよ！』
『………』
『お前の女房だ位は分らない野郎でもあるまい！』
『分つてらア、な。』
『それに何だツて、うちを明けるのだよ？』
義雄は朝飯をしまつてから、机に向つてゐたのだが、下のこの怒鳴り聲に耳が引ツ張られてゐた。
また一騒ぎあるだらうとは、婆アさんのゆふべの心配しかたで豫期してゐた。お鳥はけさも何だか慰めを云つて聽かせてゐるやうであつたのに――
『仲間のつき合ひだから、仕かたがねい、さ。』
『つき合ひ、つき合ひツて、幾度あるのか、ね？　そんなつき合ひは斷つてしまひなさいと云つたぢ

やアないか？　碌にかせぎもしないで！』

『うへの先生でもやつてることだア、な。』

『先生がお手本なら、直ぐ、けふ限り、わたしが斷つてしまうよ。』

『斷わるなら、斷わるがいいが、ね。』

『生意氣をお云ひでない！』

　義雄は自分の女房より一段どころか、二段も三段もうへを行く女もあるのだと思つてゐるのだ。

『何が生意氣でい――これでも貴さまを年中喰はせてやつてらア！』

『喰はせるだけなら、ね、犬でも喰はせるよ！　米の御飯が南京米になり、南京米が麥になり――』

『何だ、この婆々ア！　見ツともねいことを云やアがつて！』

『なぐるなら、なぐつて見ろ！　働きもない癖に！』

　取ツ組み合つて、あツちの障子に當り、こツちのから紙にぶつかりしてゐるやうであつたが、大きな女のからだが疊の上に投げ飛ばされるやうな音がした。

『婆々ア女郎め！』

『殺してやるから、さう思へ！』

　臺どころの方でがた〳〵云はせてゐたが、またとツ組み合が初まつたらしい。

「おい、行つて見ろよ」と、義雄はお鳥に云つたが、

「あたい、おそろしい」と、ちいさくなつた。

渠が下りて見ると、婆アさんをねち倒して、そのさか手に持つてゐる出齒庖丁を亭主がもぎ取つたところであつた。

「どうしたと云ふんです、ね？」

「あの野郎がまだ目をさまさないから」と、婆アさんはからだを起し、「今、根性をつけてやらうとして。」

「どツちが」と、立つたまま荒い息をして、「腐つた根性でい？」

「手前に――きまつて――らア、ね」と、これも息を三度につきながら、立ちあがり、長火鉢の座に行つた。そして義雄に、「どうか――火の方へ――お近く。」

亭主は、庖丁を臺所の方へ投げてから、婆アさんとさし向ひの座についた。そして、

「あり勝ちの夫婦喧嘩ですから、どうか惡からず」と云つて、若いが、こんな場合だけに血の氣の失せたやうな顔で笑つた。

義雄には、この男がこんな老母のやうな女を女房と思つてゐられるのが不思議なほどであつた。ずツと若い時からのくツつき物なら知らず、まだこの二三年來の慣れ合ひだと聽いてるので、ただいろ

んな好き〳〵もあるものだと思つた。

『まア、喧嘩をするにも及ばないでしよう。』

『濟んで見りやア』と、眞面目な顏つきで亭主を見ながら、『馬鹿々々しいことですが、ねえ。』

『あは、は』と、亭主は笑つて見せた。

『女と云ふものは思ひ詰めりやア、われながらおそろしいものですから、ね――まア、先生も御用心なさいましよ。』

『十分用心が必要です、ね』と、ただほほえんでゐた。

『わたしが先生の奥さんなら、をどり込んで殺してしまひますが、ね――まだあなたのは、教育もおあんなさるでしようから、おとなしく控へてゐらッしやるんです、わ。』

『さうでもないのだが――』かう云ふ人々が望む教育なるものが、今日のやうぢやア、これを與へるものの方針に非常に間違つたところのあるのを、義雄はどこかで訴へたくッてならないのである。『斯うすべからず』の消極概念が殆ど教育界全部を占領し、『斯うすべし』がまた、ほんの形式にばかりとどまつてゐて、有識者と云はれるものが凡て、如何に嚴格でも、また如何に熱心らしくあつても、空に他を教へようとして、少しも自己の實行如何を反省しない！　何のことはない、法律と教育とで以つてわが國人は自由なるべき人間本能の誠實を、わざ〳〵、無意義に制限せられてゐるばかりだ！

たとへば、結婚と云ふ形その物が道徳でも實質でもない。實質が既に違つた以上は、その形の破れて新たまるのを認める法律が必要だ。同時に、また、婦人から云つて見れば、くツ付き物が離れた場合にそこに獨立する精神や生活法がいつも具備してゐるところの教育を、不斷から、與へられてゐなければならない。お鳥のやうなものやこの婆アさんのやうな、身を棄てて低い生活に安んじられるものは、寧ろどんな教育でも入りはしないとしても、中流生活の婦人が無教育ではない癖に獨立生活的教育の素養がないのは、わが國の發展を害する最も大なる缺陷の一つで、自分が千代子に苦しめられてゐるのもそれが爲めだと思つた。

『どうせこんなことを云つたツて分らない』のだから、義雄は再び『もう喧嘩はしツこなし、さ』と云つて、二階へあがつた。

晩春も、もう、過ぎようとする或日の正午前のこと、お鳥は小さい聲で歌ひながら、三味線を獨りざらひしてゐた。

義雄は机に向ひ、鳥の啼き聲も乞食の哀訴も聽えなかつた。

が、ふと、自分の耳を疑はせるやうなことを叫んでるものがある。女のやうだ――否、自分の妻のやうだ――

『あなた、少しうちへ歸つて下さらないと困るぢやアありませんか？　うちばかり明けて――うちがどうなつても構はないと云ふのですか？　子供だツて、云ふことを聽かないで――あなたがゐないぢやア、どうすることも出來ないぢやアありませんか？』

『馬鹿！』渠は私かに應じて立ちあがつた。そして肉眼の力をふさいでゐたいやうな豫期をしながら、障子のすき間から下をのぞいて見た。

道ばたに並んでる櫻の枝々からは、昨夜の雨に打たれた殘りの花びらが、まだおもたさうにひらり、ひらりと落ちてゐる。その中を、かの女のあふ向いた顏だけ見えたが、段々あとずさりして下の方まで姿を現はしながら、なほ叫びつづけてゐる――

『困りますから、早く歸つて下さいよ。子供が云ふことを聽きません！　どうか　お願ひですから、歸つて下さい！　ほんとに、おねが――！』

がツくりと倒れかけた――櫻の一つの根もとに敷かれた乞食のこもの端に、はき物のかかとが引ツかかつたのだ。

『お助け』をやめて、ぼんやり仰いでながめてゐた親子が、『あは、は』と笑つた。

が、それをじろりと一瞥して、かの女は僅かにからだを踏みこたへた――

『お願ひだから、ちよツとでも歸つて下さい！』

『阿呆ぢや、なア』と毒々しく云つて、いつのまにか後ろへ來てゐるお鳥の手が、義雄の背中にとまつて渠に顫えを傳へてゐた。

『旦那、見ツともないぢやアありませんか？』下の婆アさんもいやな顏をしてあがつて來て、かう云つた。

『なアに』と、婆アさんを叱り付けるやうに、『うッちやつて置け、置け！』

『あなたはいいとしても、わたしのうちで困ります、わ。』

『あなた、聽えませんか？』

『また、云ふてる！』お鳥は婆アさんにどうしようと云ふやうな樣子を見せた。

『わたしが兎も角下へ通して置きましようか？』

『さうです、な、――どうか』と、お鳥の聲も息詰つてるやうだ。

『あなた――あなた――ゐないのですか？』

又覗いて見ると、『聽えませんか、ゐないのですか』とおめいてるその前を、職人體の男と女學生とどこかの夫人が別々にじろ〳〵見返りながら通つて行く。

乞食の哀訴はそれらに對してしなかつたやうである。

がらりと格子戸が明いた――

『奥さん』と、婆アさんの激昂してゐるやうな強い聲がして、『まア、こちらへお這入りになつたらどうです、ね。』

『ほんとに、困つてしまう！』千代子はづかづかとこちらへ歩き出した。

『あたい、知らん！』から云ひ放つて、お鳥は裏の方へ向つた窓ぎはへ行き、横向きに窓の眞ン中の柱に身をもたせかけた。

義雄は、おもて窓に向つた自分の机に對して、坐わつた。

格子戸が、かたりと荒々しく締つた――玄關の障子がまた荒々しく締つた――

『二階でしよう。』

『へい――』

どた〳〵、どたと荒い音があがつて來た。

『どうしたんです、ね、あなた！』

『…………』

『子供達が云ふことを聽かないで、仕やうがないぢやア御座いませんか？』

『…………』

『聽えないのですか？』

『………』

『つんぼですか？』

『………』義雄が、ふと、惡かつた一方の耳も先づ直つたらしいのを思ひ出してゐると、かの女はつゞけて、

『たとへかた〳〵の耳はまだ直らないとしても、一方は聽えるでしよう？』

『………』

『返事をおしなさい！子供が――』

『默れ！子供は、ほんの、かこつけで、貴さま自身がだらう？』

『………』千代子は、所天が突然ふり向いて睨む鋭い眼の力を受けて、灰色じみた顏色をちよツと赤くした。

義雄は、かの女が小指一本ででもさわれば倒れさうな足もとで、段をあがつたところからこちらを見詰めてつツ立つてゐるのを、一歩でも近よらせないと云ふ勢ひを見せて、

『して、子供のことぐらゐを處分出來ない女だから、馬鹿なんだ！』

『さうは行きませんよ――』

『よせ！』
『父親があるのに留守ばかりちやア――』
『おれは、ね』と、分らせるやうに念を押して、『手前のゐるやうな家にやア父でもない！所天でもない！』
『馬鹿をお云ひなさんな！』
『分らず屋！』義雄はそれツ切り横を向いて、そ知らぬふりになつて考へた――おれは、妻に對してもこんなことをこれで三度もやらせて置くだけが、まだ弱い――妻も矢ツ張り、その後ろに來てゐる婆アさんと同様、全く自分の成謂無教育無自覺だと。けれども心のうちで『若し少しでもあいつに理解力があつたら、それを糸口にして、おだやかにあの狀態を改造して行かせるのに！』
『どツちが分らず屋だ』とつぶやきながら、かの女は二三歩お鳥の方へ行つて、
『あなたもあなたでしよう、うちが困るぐらゐのことは氣が付かないことアないだらう！』
『……………』
『自業自得で因業な病氣にかかつて、さ、入らないおかねまでつかはせたんですよ！――その衣物だツて、拵らへて貰つたんだらう！――あすこに掛つてる白い首巻きだツて、買つて貰つたんだらう！圍ひ者氣取りで、三味線など彈いて！』

『……』
『さア、わたしの出るところへお出なさい！』
『何をする！』と、お鳥が云つた。
義雄が胸おもく張り詰めてゐる怒りを動かして急にふり向くと、お鳥の廣島銘仙の袂を千代子が取り攫んだのを、攫まれた方がふり切るところであつた。同時に、お鳥は訴へるやうな目をこちらに向けてゐた。
『どこへ出るんだ！』渠は飛び込んで行つて、『この氣違ひ婆々ア！』
『婆々アでも、何でも、出るところへ出たら、分ります！』
『自分で行て』と、お鳥も負けない氣で、『巡査のやうなものに笑はれて來い！』
『笑はれるのはお前さんですよ！――あなたも』と、千代子は義雄を返り見たが、鋭いにらみを避けるやうにして、『こんな見すぼらしいとこにゐないだツていいでしよう？』
『何をぬかす！』渠は思ふさま千代子の横つらをぶつた。
『そんな手荒いことは』と、婆アさんがとめようとした時は、千代子は既に横ざまに倒れてゐた。
『ぶつなら、いくらでも御ぶちなさい』と、案外けふはおとなしく起きあがつて、
『警察へ出れば分るのですから。』

『そんなことを、奥さん、云ふものぢやアありませんよ。あなたも恥ぢなら、旦那さんにも恥ぢでしよう？』

『恥も何もかまふものですか？』

『さう無茶苦茶になつちやア、あなた――まア、下へ來て、氣を落ち付けなさいよ、旦那さんや清水さんには、わたしからまたよく申しますから。』

義雄もお鳥も他の二人の樣子をばかり見つめてゐた。

婆アさんの片手に脊中を押されて段を下りかけた千代子が、こちらをちよツと恨めしさうにふり向いて見た時、かの女の少し前に反つた大きな前齒に血が付いてるのが見えた。

『早く引ツ越すんだ！』から云ひ放つて、渠はどうせ行くべき北へ行くことを思つたのだが、お鳥はさうとは知らず、

『それがええにきまつてる、さ。』

一〇

毎日のやうにやつて來る加集だが、その引き受けた要件を一向はか取らせて呉れないので、義雄も亦棄て身になつて、よく方々の玉突屋へ通つた。

耶蘇教あがりの高利貸しとも勝負した。友人の辯護士や會社員やアメリカ歸りの無職者とも勝負した。さう親しくもない官吏や年若い銀行員等とも勝つたり、負けたりした。
多少でも名の知れてゐる文學者と云ふので、知らない人々までが面白半分に、渠の周圍にはいつも集つて來た。
『田村さん、蟹の罐詰とかはうまく儲かりますか』など云はれて、義雄は一生懸命にやつてゐる勝負の腰を折られたこともあるが、
『まだその時節にはならないのです』と答へながら、遠く離れたキン玉を力一杯出して取らうとしたが、一方のに當つて一たびコシンに這入り、それから自分の玉は縱に二たび往來して、なほその餘力がフロクになつた。
『あは、は、は！』見てゐるものは一切に笑つた。
『でも』と、義雄も微笑しながら、『當つたのは當つたのだらう。』
『さうきつく突いちやア、象牙の玉でもこわれますよ』と、女ボーイも口を出した。
『こわれたら、辨償するだけのこと、さ。』
『然し當ることは善く當る！』から感心したやうにささやくものもあつた。
こんな時には、義雄も額を油ぎらせるほど調子づいてゐるのである。そして夢中になつた時突きか

たが普通の正しい姿勢と違ふので、それがおのづから渠の一特色となつて他人への愛嬌の種となつた。渠はこれを別に頓着しなかつた。

或をんな友人が西洋料理を計劃しかけた時、

『田村さんなら、實費で通すから常連をつれて來て下さい、ね』と云つた。

『そりやアよからう――あなたの爲なら、廣告屋の代りにもならう』と、渠は冗談半分に答へた。この計劃は立ち消えとなつた。

ところが、今回加集が一人の、玉突屋を開業したいと云ふ人――これが金を貸さうと云ふのだ――に紹介して置くと云つて、義雄を京橋へつれて行つた。

『おれに常連を賴むは、眞ツ平だぜ。』

『ええぢやないか、二百圓が出來さへすりや？』

この人は義雄も知つてる或文學者の弟で、新らしく手を出した出版業をこの頃大抵に見限り、築地橋のそばの或家の二階を借りて、年うへの、何だか分らない女と同棲してゐるのであつた。よく〳〵おなじやうな人間にぶつかるものだと、義雄は考へた。

『僕も大切な金で』と、主人がおも〳〵しい氣分になつたのを義雄は見とめて、おのれもその氣分を解したと思つたが、『加集君の紹介でもあるし』が、渠に聽かされては、力のぬけた言葉であつた。『ま

た、これから君にも交際して貰ひたいので、加集君にも話した通り、現金が近々戻つて來さへすれば君の爲めになるのなら、融通してあげてもよいのです。』
『無論、僕の事業費に追加が必要なのですから。』
『それは加集君からよくうかがつてゐますし、君の事業の有望なのも分つてますが――この急場さへ切りぬけたら、あとはどうでもええと云ふやうな――』
『そんな無責任はしません！』
『無論、君のことだから――然し信用貸しですから、念の爲めに申して置くのです。』
義雄はあツちの季候では、この頃やうやく蟹が取れ出すので、六七月となつて收獲の絕頂に達し、八月の半頃までで一先づおしまひになるのだから、先づ九月一杯に返却する約束なら、決して苦しいことはないことなどを說明した。
『然し僕は君の兄さんの文學には反對で、よく攻擊の矢も向けたが――それに關係を及ぼして貰つちやア困りますが、ね――』
『第一、兄とは別に關係のない金ですから――』
『さうなら實に結構です。』
三人はそれから近所の玉屋へ行つたが、義雄は他の二人の數へ手であつた。

渠は玉を突きに出さへすれば、どうしても夜の十一時か十二時でなければ歸らなかつた。

お鳥はこれを怒つて、いつもさきに褥へ這入つてゐた。

『おい、お孃さん、どうしたい』などと、一杯機嫌でそのそばへ坐わると、向ふを向いてるまゝ、ゐら寢をしてゐることもある。そして突然こちらを向いて、

『あたいを大事にしないからぢやないか？』

渠は、ランプの光が直接にかの女の顏に當らないやうに、その方へ、原稿紙の半切れを笠に張つて目隱しをしたその蔭を向けるのであつた。

『閨中美人！』そして穢多ぢやアないかの疑ひは、もう、ほんの、形式的に、渠のあたまにくツ付いてゐた。

或夜、風の氣味だからいつもより早く、九時頃に義雄が歸つて來たら、女はちよツと出て來るからと云つただけで、明るいうちに外出したまゝださうだ。

『どこへいらしツたんでしよう、ね？』

『さア――』

『もう、お歸りなさいませんでは、ねえ――』

『さア――』
『女おひとりぢやア、この頃ア物騒ですから。』
『なアに、あいつのことだから、また引ツかきむしるなんかして――』
『うふ』と、婆アさんは笑つた。きのふ、女房にしろ、しないと云ふ喧嘩をして、義雄が首ツ玉のところをかきむしられたのを、かの女は思ひ出したらしい。『あのお方も氣のきついお方です、ね――今どきの若い方ですから――でも、まだあなたの奥さんのはうが餘ツぽどいいぢやア御座いませんか？』
『さうですか、ね？』いい加減にあしらつてから、長火鉢のそばを離れ、二階にあがるが早いか、あかりを付けて戸棚をあけて見た。渠が心配したやうなことではなく、女の荷物はそのまま殘つてゐる。
その代り、またそれ以上の心配がわれ知らず浮んだ。
『まさか――』と、打ち消しながらも、あの時を――あの、千代子がここへ踊り込んで來た時を――思ひ出さずにはゐられなかつた。千代子が歸つてから、女はまたあいつを早く追ひ出せとせがんだ。義雄はさう容易に法律が許さないと云つて聽かせた。――お鳥は、すると、負けゐるからぢやないかと突ツかかつた。いや、さうぢやアないと押さへ付けた。――そのあげく、女はむツとしてしまつて、何も云はないで出て行つた。義雄はせい／＼したつもりで、散歩に出た。長くも留守にしてゐられない用があつたので、何げなく、烏山へ登つて見ようと云ふ氣を起した。毎日、毎日、障子をあけ

さへすれば差し向ひになる山だが、これまで登つたこともなかつたのだ。

すると、この山の、あツち側の急傾斜に瀕したところで、女がこツちの來たのも知らず、松の枝に自分の細帶を結びつけ、その出來た輪につかまつて、今にも首をかけようとしてゐた。

渠はそのそばへ驅けて行つて、憎々しいほどに怒罵の聲をかけた、

『何をする！』

『死ぬ！　死！』女は渠の手をふり切らうとした。そして泣き聲になつて、『どうせ――みなに――こんなに恥ぢをかかされて――お母さんにも、兄さんにも濟まん！』

『何も死ぬにやア及ぶまい――』どうせ、こツちに對しちやア、もう、半ば死んでゐるのだから、ね、とまでも云ひたかつた。また一方には、申しわけに死ぬのは、申しわけをしなかつたと同樣ではないか？　生にばかり執着する渠には、これほど無責任なことはなかつた。さう云ふ心のうちで、『馬鹿だ、なア！』

『實際、死ぬ氣であつたのか』と、義雄はあとになつて尋ねて見た。

『さう、さ！』

『ぢやア、なぜ兄から盜んで來てゐると云ふそのアヒサンで死なない――もう、棄てたのか？』

『あれはもツと大事な場合でなけりやア――』

『二度も三度も死ねる氣かい――うそを云つてらア。』
かう云ふ對話もあつたのを思ふと、然し、また、今夜は、うちにゐないだけ、何も事件がありさうでない――まさか外で毒藥を服用しようとは！
渠は風邪の熱を出さうとして、水を大きなコツプに三四杯飲み、獨りで寢どこを敷いて、そこへもぐり込んだ。
寢苦しいので、右を向いたり、左を向いたり、うつ伏しになつたりしながら、渠は女の歸りを待つた。――
お鳥は、おれに身をまかせる前に、ちよツと朝鮮人へ目見へに行つたことがあるぞ！　然しあれは仲働きの候補で、いやだから一日でよしたと云つた。
質屋の隱居のめかけでいいなら、十圓の口があると、桂庵から聽いて來たこともあるさうだ。
おれのところへ來てから、病院通ひの外は、さう獨りで出歩いたことはない。
『どうせ、あたいは日かげの身だ――恥かしうて、うか／＼外へも出られん』と云つてゐた。――
渠は苦しいので左りを向いた。
『けれども、どうせこんな身分でゐるときまつたら、お前のやうな貧乏人は相手にしやせん。』――ひよツとすると、ああ云ふつもりで、何かの野心を起したのぢやアなからうか？

あの氷川(ひかは)の森かげの下女細君、あれがそんな風な口をかけてゐるのぢやアないか知らん？　一度手紙が來てから、よくあすこへ行きくする。――

渠は右を向いた。

今夜も亦あすこなら、高が知れてゐる――が、――あいつは、二三軒の口入れ屋を歩いた經驗がある。いざとならば、今度は大膽にその暖簾(のれん)をくぐれよう――？

現に、この隣りの桂庵婆アさんも、こないだ、變ななぞをかけたと云つた。あの婆アさんは、おれのおやぢの生きてる代から、おれのうちへ出入してゐたのが分つた。して見ると、今は逃げて去つた繼母がまだゐる時、繼母がお鳥を第一に紹介した口入れ屋はこの隣りであつたらう。

『下らないことを――』と自分で云つて、また寢返りした。

繼母を愛してゐた父は死んだ――その葬式はまだその時生きてゐた隣りの和尙さんに賴んだが、おれはどんな形式で以つてでも宗教家の手で葬られたくない。これはおれの主義だ――まさかの時の爲めに、おれは千代子にも、お鳥にも云つて聽かせた、おれがおれを去る時は、決しておれの主義を恥かしめるなと。

宗敎――形骸ではないか？　たとへ宗敎心――はあるとしても、却つて宗敎その物にはない。生その物に執着する努力を宗敎心と云ふなら、刹那刹那の實生活がそれだ。今のおれの苦悶が乃ち宗敎心

だ。——

いつのまにか、渠は、仙臺の耶蘇教學校にゐる時、松島へ行つて度々獨禪をしたことや、中學教師をしてゐる時、毎土曜日から日曜日にかけて比叡山へ登り、いろんな經文を調べたことなどを思ひ出してゐた。すると、自分の義兄の幼時からの遊び仲間であつて、自分の尊敬してゐた比叡山の僧で、十五年も山中の業をしたものが、業を終へて下山すると直ぐ、村の女の爲めに墮落したと云ふ記憶が伴つた。

『然し實際は墮落ではない、人間として當り前になつたのだ！』——

渠はうつ伏しになつた。

何だか、から——寂しいやうな——身輕になつたやうな——さツぱりしたやうな——足かけ二年を初めて獨り寢をしてゐるのであつた。

どこかの嚴肅な教會で讚美歌の聲とオルガンの音とがよく揃つて、その中へ惡念や惡物が何もかも消えて行くやうな——どこかの靜寂な本堂で蠟燭の光が眞ツ直ぐに燃えて、永劫の聲が聽えるやうな——そんな氣分にもなつた。

今一度女や事業を遠ざけて、世外の人になつても見たい——が、——或山の荒廢した堂内で一夜を明かした時、おれは狸でも狐でも出て來て呉れた方がいいと思つた。周圍の山林を吹きまくる風が唯

一の頼母しい物であつた。が――その――その風は何だ?、矢ツ張り、今感じた永劫の聲だ――讃美の歌だ!

『形を以つて形を追つてゐたのだ。』まだ〳〵そんな低級な自分ではない――自分には少くとも一種の哲想がある。否、その哲想を自由に具體化した生活がある。これはいつかは小說にも表現して見なければならないと思ふと、直ぐ又ほんの筆さき專門の作家や世の雜輩連の雜評に對して、今から用意した侮蔑の念が浮んだ――渠等は哲想のテツの字も分らないのだ、まして哲想を自由に具體化した人物の描寫をやと。

渠は又あふ向けになつたが、左右には觸れるべきやわらか味の物はなかつた。そして自分のからだ中があせばんでゐるばかりが感じられた。然しこの病氣に苦しみ、女に苦しみ、事業に苦しみ、自分自身に苦しむ自分その物の熱とあせの臭みとが、この場合、一番懷かしかつた。

がら〳〵と車の音がした。

下の障子や格子戸があいて、婆アさんが外へ出た樣子だ。

義雄も知つてる通り、かの女は、亭主が十一時から十二時までに歸りさへすれば、緣日商人の職業上當り前なので、喜んで出迎へるのである。そして、丁度可なりの傾斜を登つて來なければならない

ので、坂の中途まで行き、一緒になつてその荷車を押すのだ。

『今夜はどうだ、ね？』

『あんまりいいこともねい――もう、締めても――』

『まだ清水さんが歸らないんだよ。』

『へい――珍らしいことだ、なア。』

燗酒のにほひが實際にして來た。

錢勘定の音がちやら〳〵するにつれて、婆アさんが一心に銀貨と銅貨と、二錢銅と一錢銅とをより分けてゐるのが見えるやうだ。

渠は熱苦しくなつたからだをまたうつ伏しにして、

『あれでも渠等は滿足して生活して行けるのだが――』と考へてゐた。

直ぐこの隣りが切り開かれて、電車道になるのだが、まだ手がつけられてゐないので、電車の響きは遠くにばかり聽えてゐる。が、下では、もう、あかりを吹き消すけはひがした。

神田から御成門までの切符代が無かつたのか、惜しまれたのかして、曾ては、その間を歩いて、夜中の一時半頃に我善坊へ歸つて來たこともある女だが、一緒になつてからは、こんなに遲くまで留守にしたことはない――と、かう思ひながら、渠は額を枕の切れに當てて、油あせを拭きつけた。

嫉妬のほむらがからだ中にみなぎつてゐたのであつて、闇の中にも、壁に垂れた鬱金木綿の三味線胴や、衣紋竹にお鳥のぬけ出した不斷着などが見えるのがいやさに、堅く目をつぶつてその目を枕に押し伏せた。

『けふも、おれの留守に來やアがつたと云ふ加集の奴、とう〳〵物にしたのぢやアないか？』

渠はもツと早くかの女を斷つ筈であつたのだと悔んだ。

二

女優志願の件も、本人の柄が向くまいと云ふことで、話の緣は切れたのだが、義雄はこれをお鳥にはツきりとは告げなかつた。告げると直ぐ、また裁縫學校へ入れて呉れがうるさいにきまつてゐた。學校に入れるどころではない、お鳥共物とも、どうせ手を切つてしまうのだと、義雄は思つた――その時期は、樺太へ出發する時で、その後は、こちらに治療の責任ある例の病氣その他に就いて何と云つてよこしても、もう、返事をしなければいい。ただ可哀さうだから、返してやりたいのは、あの質物で――事業の先發隊に用意の金をすべて持つて行かせたあとで、直ぐ、なほ追加の密鑛材料を送つた時、金に困つてゐたのを見て、案外にも、お鳥は自分の所有物を提供して多少の手助けをして呉れた。その所有物の中には、母のかたみだと云ふ桐に鳳凰か何かの縫ひをした玉子色の繻子の帶や、

水淺黄の奉書紬の裾に浪千鳥の縫ひある衣物などもある。この衣物、この帶を締めて、今年の一月元旦に、かの女は自分と共に並んで寫眞を取つたが、如何にも野暮臭い花嫁が現はれた。

『兎に角、あの品だけは、どうしても、出してやるよ』と、義雄は時々念を押した。

『あたいをさへ可愛がりやア、あんな物はやる、さ』と、お鳥は、不斷その品ばかりを心配してゐるにも拘はらず、平氣で云つたことがある。

『まだ、ね』と、輕く受けて、『おれの一身を田舍婆々アのかたみ位でふん縛ることは勿體ないよ。』

『では、直ぐに質屋から出して來い』と、かの女は怒つた。

あれを出してやらうか、それとも暗に手切れ金のつもりで新らしい衣物を一つ買つてやらうか、どッちを撰ばうかと考へる日が義雄に來た。

『おい、何か衣物を欲しいことはないか、ね？』

『買うて呉れる』と、かの女は急に喜んでやわらかに首をかしげたが、『では、セルが欲しい。』

その日、義雄は不時に這入つた原稿料をふところにして、かの女と共に白木屋へ行つた。二階は棚浚ひの爲めに賑はつてゐて、かの女は一方の端から他方の端まで熱心に見て歩いても、買ひたい物が澤山あつて、豫定額の中をどれで滿たせばいいのか分らなくなつた。

『どれにしよ』と、のぼせ加減にかの女はあとについて來た義雄を返り見たが、渠はかうして別れる

ことばかり考へてゐたので、ただ腫れ物をそツとして置くやうな氣で返事をした、

『どれでも好きなものを買へばいいだらう。』

『……』かの女は、渠をふり棄てるやうにして、反對の側に足を運ばせたので、渠は椅子に腰かけて、圓テブルの上のマチを取りあげた。

そして去年の暮の大晦日に、粗末なのだが、蒲團を一組買ひに出た時のことを思ひ出してゐた。案外安く買へたのが愉快であつたので、その餘勢で麻布箪笥町の通りを赤坂の新町まで古道具屋や夜店などをひやかして歩き、古物の火鉢を約束したり、火ばしや餅あみを買つたり、――そしてそれがまかつたり、添へ物をさせたりするのが面白さに、入らない物まで値切つて見た。

『そんなに使たら、あとで困るぢやないか』と、お鳥の方から注意をした。が、それでもたほ、自分には、いろんなこざ〳〵した物を買ひながら、店から店を渡る興味が盡きなかつた。

そして自分どお鳥とは、共に兩方の手に持ち切れないほど、日常の必要物や化粧品や食物の皮包を持つてゐた。

『けふの氣分は、然し、丸で違ふ』と、義雄はわざとゆツくり煙を吹きながら、お鳥を初め、多くの婦人連がちよこ〳〵と屈んでは歩み、歩んでは屈み、順ぐりに同じ切れをいじつては行く樣子を傍觀してゐた。

『ちよツと來てな』と、お鳥はあわただしく顏をしかめて呼びに來た。そして義雄が立ちあがると、あたりに人がゐるのも構はず、渠の袂をぐツと引ツ張つて、『ちツとも一緒に見て呉れへん――人に買はれてしもたらどうする！』

かの女は急いで白羽二重の夏帶地ばかりかかつてゐるところへ行き、その一つの端を攫んだと思ふと、一人の女の後ろを越えて、また向ふにある一つの端を取つた。そして引き締つた笑がほで、

『どツちがええだろ？』

中に圍まれた女は、直ぐその下からくぐり出て、お鳥にちよツといやな目付きを投げた。

義雄は、かの女をしてぐづ〳〵と人の邪魔をさせて置くにも及ぶまいと思つたので、わけも無く自分の方のあごを以て示めし、

『これがいいだらう』と、尤もらしく答へた。で、かの女は他方のを放したが、かの女の手に殘つたのには、竹に雀の墨繪が書いてあつた。

『では、これと下で見たセルとにしよか？』

『ぢやア、さうしなよ。』

渠はこの二つの品に半襟を一つ加へてやり、これが代金を拂つてから、食堂で木原店の汁粉を取り寄せた。

二

お島が最終電車に間に合はないほどの時刻に歸つて來たことが、今一回あつた。そして矢ツ張り、前回と同じやうに、氷川の森蔭の細君のところへ行つてゐたのだ。そしてあの人がいろんなおどけた話をして歸さなかつたものだから、つい、また遲くなつたと申しわけをした。そしてまた、あの人がこツちを引きとめてゐたのは、亭主の留守が寂しいからであつたのだから、あのいやな白髮ぢぢイが歸つて來ると、人を直ぐ出て行けと云はないばかりにあしらつたと、訴へるやうに報告した。

けふ、初めて縫ひ上つたセルを着てゐるのをちらと見て、義雄はかの女がこれを見せびらかしに行つたのだ、な、と分つた。が、前回に於て、既に女の夜遊びを懇々戒めて置いた言葉を破つたのを憤り切つてゐたので、何等の返事をもする氣にならなかつた。

かの女が義雄の枕もとに坐わり、不斷通りの笑がほを見せたのを、渠は枕の上から瞰み付け、おほきな聲を――下への遠慮の爲め――押しつぶすやうにして、

『馬鹿』と一喝した。『あんな女の相手をしてイて、うちをどうするんだ！』

『………』見る〳〵顏色を變へて、『うちなどありやアせんやないか？――そんなに可愛けりやア、早うあいつを追ひ出して、あたいを本妻にせい！』かう云つて、かの女は力一杯に義雄を蒲團の上から

兩手で突きのめした。

『……』義雄は返事をしないで、あふ向いたまゝ、目をつぶつた。そしてこの女も駄目だ。かの千代子も駄目だ。また、父の遺產をすべて投げうつた事業も、あと僅か二百金の出來ない爲めに、すツかり時期を逸してしまうかも知れないと思つた時、寂しい、寂しい氣持ちが胸に迫つて、熱い涙が一滴自分の頰に傳つたのをおぼえた。

あかりを吹き消した音がしてから、直ぐだ――

『妻にして吳れ、妻にして吳れ』と、いつに無くこわ張つたからだを、幾度も、かの女は義雄に投げつけた。『して吳れんと、殺すぞ』とも威かした。

それでも義雄は目を明けず、口も開かなかつた。うと〳〵と眠りに入りかけた頃、蒲團の一端が引ツ張れたのに氣が付いて、目をあけると、――いつのまにか枕もとに置いたランプがともされてゐて、――お鳥は褥をぬけ出で、蒲團の裾に當る押し入れの、膳やまな板を入れてある方の唐紙を靜かにあけた。

光があたまで遮ぎられてゐるのを幸ひ、見ない振りで、細目に目をあけて、かの女の橫顏を見ると、かげのせいか、低い鼻まで鼻筋がくツきり通つてゐるやうに目を据ゑて、押入れの中をのぞき、右の手に出齒庖丁を取り出した。

一度はぎよツとした爲めに、ねむ氣は全くさめてしまつたが、
『なに、くそ！』再び目をつぶつた。そして子供の時、空想的に望んで見たことが、今、多少の事實となつて來たと考へた。自分を『ぼんさん、ぼんさん』と云つて、よく菓子を吳れたり、下駄の鼻緒を直して吳れたりした、あの船乘りのかみさんだ。他に土方の男が出來た爲めに、亭主をくびり殺さうとした時、亭主が氣が附いてはね起ると、枕もとに出齒庖丁もあつた。その翌晚は船が大阪にとまる順番であつた。そしてその翌々晚に、歸つて來て、渠は前々夜に何事もなかつたかのやうに、毒婦の室に入つた。義雄はこんな大膽なおやぢになつて見たいと、おぼろげにだが、思つたことがある。
『手切れの口實にはいい機會が來た』と覺悟して、渠は出來るだけ息をゆるやかにしてゐた。
お鳥はそツと坐わつたやうだ。その裾の下から押し出された空氣が、生あツたかく鼻を掠めて、一種のにほひがあつたのに、義雄は今更らのやうな氣がした。
自分には、これがかの女をいやになる心の條件の一大原因であるとも思はれた。
蒲團がめくれたかと思ふと、やがてひイやりした物が輕く、義雄の左りから右の方へ、その喉の上を橫切つた。
『さうだらう、威かしに過ぎない』とは口に出さないで、するりと顏をかの女の方から遠ざけて起き上り、『なによウする！』

『殺してやる！殺してやる！』
その時は、もう、出齒は義雄の手に在つた。そして暫く、二人は無言で、睨み合つてゐた。
お鳥は下へおりて行つた。下の臺所へ他人の刄物をでも取りに行つたのかと心配してゐると、便所の戸を明ける音がした。
義雄は明けツ放しの押し入れから鰹節削りの小刀を取り出し、机の上のナイフと持つてゐた庖丁とを合はせて、自分の寢てゐた側の敷蒲團の下に隱した。そしてかの女と入れかはりに便所に行くふりをして下におり、臺所を探して見ると、下の人の使ふ庖丁はあつたので、これをいつもの位置とは違つてちよツと氣がつき難いところに置いた。渠があがつて來たら、かの女は渠の机のあたりにまごまごしてゐたが、また押し入れへ行つて、頻りに何かを探し初めた。
『ナイフも小刀もあるものかい』と、心に語りながら、義雄は堅い物を脇腹の横に避けて、それでもこれを少し押さへるやうにして、もとの通りに横たはつた。
渠がその翌朝の十時頃に目をさますと、平生の通り飯の仕度は出來てゐた。が、二人は無言で食事を終つた。
それからも、義雄は無言で新聞を讀み、便所に下り、また衣物を着かへた。そして書き終りかけの長編評論の原稿と共に、四五冊の參考書をすツかり引きまとめて、風呂敷に包まうとしてゐると、お

鳥は離れた方の窓下で足を投げ出し、片肱を突いて自分の裾から出た桃色ネルの端とこちらとを見比べながら、少しも小だはりの無い聲で云つた、

『どこへ行くの！』

『…………』義雄は、もう、これツ切りこの座敷へあがる必要はないと決心してゐたので、返事もしたくなかつた。

『ええ、どこへ行くの？』その聲は一段と優しくなつてゐた。

『…………』

『默つて行くなら、あたいも行く』と、異樣な顫えをさへ帶びて來た。

『來たツて仕やうがない、さ』と、止むを得ずこれに應じて、うそは云ひたくなかつたが、『原稿料を取りに行くのだから、ね。』

かう云つて包みをかツ浚ふやうにしてこれをかかへるが早いか、立ち上つてはしご段の下り口まで行つた。

『ちよツと待つて』と、お鳥は息をはづませて起きあがつて來て、義雄の袖を握つた。そしてそツと段の下の方をのぞいて見てから、もとの窓ぎはの方へ義雄を無言でぐんぐん引ツ張つて行き、蹲んで青みがかつた眼で、じツと力強く命令するやうに渠の顏を見詰め、かの女は先づその白い幅ツたい顏

をのぼせさせてゐた。

一三

『向ふの愛情が熱して來ただけに、却つて始末に終へ難いのだ』と、義雄はその日加集の宿にかけ込んで、お鳥のことを訴へるやうに語つた。そしてかの女と手を切る爲めの奔走をして貰ふやうに頼んだ。――質物は金が出來次第出してやること、病氣は直るまで改めて治療させてやること、この二ケ條を條件として。

加集は喜んで引き受けた。そして直ぐお鳥のところへ出かけた。もう、くツ付くなり、何となりしろと、義雄は心を落ち着けて、渠の留守二階で、渠の自炊兼用の机に向ひ原稿の續きを書いてゐた。

すると渠は間もなく歸つて來た。手には馬肉の新聞紙包みを持つてゐたが、

『えらいおこりやうだで、なア』と云ひながら、その包みを投げ出し、また脊廣のポケトから正宗の二瓶を出して、義雄のそばにあぐらをかいた。

『また馬肉かい？』

『うん――うまいぢやないか？』

義雄は去年痳病で苦しんだ頃、この肉が藥になると聽いて頻りに喰つたことがある。

そして加集は能くそのお相伴をしたのであつた。

『おこつてるツて?』

『丸ツ切り、あいつア氣違ひぢや、なア。』

『おこつたツて、仕かたがないぢやアないか?』

『おれに、お前のやうなものは仲へ立つて貰はん云やがつたぜ。』

『ぢやア、どうすると云ふのだ?』

『直接に話を着ける云ふた——おれのうちに隱れてるに違ひない云ふて、こわい顏でにらみ腐つた。』

『ここを知る筈アなからう——?』

『無論だ——自分で自分のからだをひツかいたり、君の雜誌を引裂いたり、あのさまを君に見せたかつたよ。』

『うツちやつて置く、さ。』

『歸りに下の婆アさんにさう云ふたら、あいつも失敬なやツちや、丁度いいからおれに貰つてやれと、さ。』笑ひながら、『馬鹿にしてやがる!』

『………』義雄はちよツと加集の顏色を見たら、何だか得意さうであつた。『どうともさせて置くがいい、さ、——おれだツて、もう、二度と再び喉を出しちやアゐられないから、ね。』

『今度こそ、見つかつたら、ひどい目に會ふぞ。』
『ふ、ふん』と、義雄も心配さうに笑つた。
『然しやつて來る氣づかひは無いし、なア』と、加集は立ちあがりながら、『まア、一杯やろか――久し振りだ。』
この時、がらりと下の格子戸が明いて、女の聲がした。義雄は身の毛がよだつた。
加集は拔き足して行つて、下り口から下をのぞいてゐたが、
『なんぢやい』と、棄てぜりふで云つて、にこ〳〵戻つて來て、『廣告摺りを取りに來たんぢや――美人やで。』
義雄はちツぽけな一私人の印刷屋の二階にゐるのに氣が附いて、ふと窓の外に目を送り、家根から通りへ傾いてゐる大きな横看板の裏を見た。そしてこんな家の主人を相手に何か共同の發展をしようとしてゐる友人の、大して望みありさうでもない努力を戒める氣になつた。
『晩飯にやア早過ぎるが』と云ひながらも、二人は自分等で拵らへた食事を初めようとしてゐる時、加集への訪問客があつた。
『鶴田君ぢやで』と、加集は肩をすくめて義雄を見た。そして低い聲で、『あの金が出來たんなら、う

まいが、なア。』

飛び下りるやうにして迎へに行き、加集はこの鶴田と云ふ築地橋そばの人をも仲間に加へた。

『お約束の金は』と、鶴田はちよツと義雄に改まつて云つた、いよ〳〵近々戻つて來ますから。』

『さうすれば、僕も』と、義雄の心では、その嬉しさよりも、寧ろお鳥の追跡を避けることが出來るのを、この場合、一番の幸ひだとして、『出發が直ぐにも出來るのです。』

食事が終つてから、三人は玉突きに出かけた。そしてその夜は、義雄は加集と共に加集の二階へ歸つて來て、二人で一組の蒲團を引ツ張り合つて眠つた。

翌朝義雄が目を覺ました時、もう、加集は昨夜斷つてゐた通り、外出してゐなかつた。そして下の時計が十時を打つのを數へたが、自分は起きる氣にならなかつた——若し人間が人間を忘れ、自分が自分をどうでもいいとならば、家が人のであらうが、仕事が自分に迫つてゐようが、このまま斯うして、自分が寢飽きるか、人が追ツ拂ふかするまで、ぐツすり寢つづけてゐたいものだと。

渠は仰向けにからだを延ばして見た時、これまであくせくと考へたり、働いたりして來たことの結果をすべて吐き出すやうなあくびを一つした。そして自分が持つて來た書物を坐蒲團で卷いた枕の方へ無意味に兩眼を流れ出で、兩方のもみあげのあたりを傳ふ、生ぬるい涙じるを手の平で押しぬぐつた。

また、うと〳〵して見たが、直ぐまた目が覺めた。下の印刷屋の格子戸が度々明いたり、締つたりする忙しさは、自分のあたまで通つて來た之までの忙しさと同じやうだと思つた時、今度格子戸を明けるのが若しお鳥であつたらどうだ？　うか〳〵してゐて、なまなか柔術知りの女に寢込みでも襲はれたら？

兎に角、渠は思ひ切つてはね起きた。さうして下で顏を洗つてから、近所の牛乳屋へ新聞を讀みに行つた。樺太のカラの字だけにでも注意を集めるやうになつてゐる渠は、或新聞に、あちらの罐詰め製造の景氣が今年はよかりさうだと書いてあつたのを見ては、微笑しないではゐられなかつたが、誰れもかれもと小資本の製造所が出來て、その競爭の結果、原料なる蟹の價段があがるばかりだとあつたのには、少なからず心配の念をいだいた。もう五月の半ばを過ぎたのだ、これから大切な六月一杯にかけて、早く效果を擧げさせなければ――

午後の五時頃まで待つてゐると、

『暑い、たア』と云つて、編集は歸つて來た。『二千五百圓の宅地をあの〇〇に』と、國から出た先輩の名を擧げ、『買はせようとしてるけれど、なか〳〵買はんて――ついでに、またあいつのとこへ寄つて來たが、なア、ゐなかつたで。おれのうちを探してるのぢや、なア。ゆふべもおそくまで留守にして、歸つて來ると、直ぐ君のヴアイオリンも三味線も皆たたき毀わしたさうぢや。』

『いツそのこと、あいつのからだもたたき毀われたら、肩拔けがすらア、ね。』

『きつう、おこつてるんぢやで――おツそろしいぞ、あいつのことだから――鼻にえらい皺を寄せて、きのふも殺す云ふてたから、なア。』

この時、下の格子戸が明いたやうであつたが、

『加集さんはをりますか』と、靜かに氣取つた聲がしたのは、確かにお鳥だ。

『とう〳〵來やアがつた』と、義雄は低語したが、その調子が引き締つてゐたのを身づからもおぼえた。それから少しのぼせたやうに調子がぐらついて、『どうして分つたらう？』

『加集さん、お客さんですよ』と、下のかみさんがうは付いた聲をかけた。

『へ――さア』と立ちあがつたが、義雄の方をふり返り、『不思議ぢやが、――君は、まア、早く歸れよ。』

義雄も急いで、机の原稿とそばの書物とをまとめて、風呂敷に包んでゐる時、お鳥は加集のあとからあがつて來た。

とツつきの三疊の間から、おもての六疊へ這入つたところに突ツ立ち、悲しみを忍ぶやうな、そして又憤りを堪へ切れないやうな顏をして、かの女は義雄を睨み下ろした。

『どうして、また、分つたのだ？』義雄は頰のぴく〳〵し出した顏にわざと笑ひを湛へさせて、下から見あげた。疊の縱の長さほどは距離があつたが、若し飛びかかつてでも來たらと云ふ用意に、右の方を立て膝にしてゐた。

『畜生！』かの女は斯う一言して、全身の力を籠めたやうにからだを振つた。

『さう、さ——お前も畜生なら、おれも畜生、さ、然し、ね』と、向ふを荒立たせないつもりで言葉を優しくして、『おれの方はよく分つた條件を加集君まで持ち出してあるのだぞ！』

『あんな者の云ふことなど聽かん！』

『ふ、ふん』と、加集はかの女の正面に當るところにあぐらの片膝を抱いて、にやりにやり笑つてゐた。

『逃げないでも、直接に話をきめる！』

『こんな場合に、お前とおれとでかたを付けるなんて、出來るものか？——兎に角、おれは加集君にまかせてあるから、ね。』ちよツと加集を見て立ちあがりながら、『僕は失敬するよ。』

『では、おれがあとでよく云ふから心配すな。』

『逃げないでもええ！　云ふことがある！』まだ睨みつづけてゐて、かの女の息は迫つてゐた。

『おれは、もう、二度とお前の命令じみたことは受けないよ。』から云つて、次の間へ行かうとした時、

かの女は忍び切れなくなつて、兩手を固めて飛びかかつて來た。

『何をする！』義雄は本包みをかかへない右の方の手でかの女の左の手くびを握りとめた。見れば、方式通り、母指を中にして他の指でそれを固めてゐるが、こんな用意をしたにも似合はず、少しも力が這入つてゐなかつたので、『まだおれに手賴る氣でゐる、な』と感じた。そして強くふり放せば倒れさうなのを加減して、形ばかり勢ひよくふり放した時、自分の手と女の手とが逆につるりとすべり合つたので、その肌のすべツこさが惜めた。が、時の勢ひがあと戻りをさせなかつた。全く未練の無いやうな強さを見せて、障子を締め切り、ずんずん下へ下りた。

自分の締めた障子が明くのを恐れたが、そんなけはひは無かつた。

釆女町と木挽町四丁目と相對してゐる通りで、ここの印刷屋の横丁を拔けると、直ぐ木挽橋へ出られた。義雄は通りの方を歸つて行くのを、二階から加集に見られるのもあんまり體裁のいいものではないと思つて、直ぐこの横丁の細い溝板を渡つて、三十間堀のふちへ出た。

あとからお鳥が追ツかけて來はしないかと云ふ恐れにばかり追はれて、おづおづと急いで橋の袂までは來たが、いよ／＼これを渡らうとする時になつて、どうしても足が進まなかつた。追ツかけて來るものが無いだけ、寂しいやうな氣がして、二足三足戻つても見た。が、思ひ切つてまた一二歩歸り

路の方へ進んで、ぴたりと立ちどまつた。この時は、もう、加集に對する嫉妬の念が胸一杯に滿ち滿ちて、あたまがぼうとまでしてゐた。

『若しや、けふ、あいつが立ち寄つた時、お鳥にこと更らに自分の住所を知らせて置いて、直ぐあとからやつて來いと云つて置いたのではなからうか？』堪らないほどもや〳〵して來た胸を押さへて、渠は跡もどりをした。

印刷屋の格子をあけて締めた時には、自分の女房を寢取られてる現場を見た心持ちも斯うだらうと思へる程、義雄のあたまに血がのぼつてゐたのをおぼえた。

印刷機械の一部や印刷紙などを積み重ねてある間のはしご段を、づか〳〵とあがつて行つて、三疊と六疊との間の障子をすツと明けた。注意したつもりのが、あまり勢ひよく明いて、柱にぴたりとあたつた。

『どうした』と、加集も多少びツくりして眉根をあげたのが、左右に引ツ張れて、ゆるい八の字に見えた。が、先刻と同じところに、同じやうな坐わり方をしてゐた。

お鳥は、然し、横になつて、加集が車に乘る時に使ふ膝かけをその上にかけてゐた。

『燒けになつて、愼しみを失つたのか』と云つてやりたかつた。『いや、おれと別れたら、直ぐ困るこ

とは知れ切つてるから、加集の意を迎へるつもりだらう』とも思つた。

かうなれば、もう、嫉妬よりも侮蔑の氣が勝つて來て、義雄は多少心を落ち付けた。

『なアに、ね』と坐わり込み、『矢張り、僕が直接に、おだやかに、云つて聽かせた方がいいと考へ直したから――』

『もう、云ふて入らん』と、お鳥の上の膝かけが動いた。

『お鳥さんも大分わかつたやうだから、今少し氣を落ち付けさせる爲め、――少し――休むやうに僕が云ふたんぢや――僕も君の友人だから、君の爲めになるやうに計るによつて、なア、心配するな。』

『ぢやア、矢張り君に賴んで置くとしよう』と云つて、また立ちあがつた。もう、渠はどちらにも未練らしく言葉をつづけたくなかつた。

そこを出て、再び溝板の横丁を通り拔け、木挽橋を渡り、竹川町で品川行きの電車に乘つた。多少すツとして輕い氣持ちになつた時、さツきから左の腕にかかへてゐる書物の重さをおぼえた。

『どこへ行つて仕事をするつもりだ？』かう云つて、自問自答をして見たが、どうしても自分の我善坊の家へ歸る氣にはなれなかつた。

宇田川町で電車を下り、御成門の方へ一直線に急ぎ、またの電車線を橫切つて、自分がきのふまで陣取つてゐたところに行つて見た。が、そこへもあがる氣がしないので、格子を這入つたところの疊

に腰かけて、それと無くお島の昨夜來の樣子を聽いた。

婆アさんが迷惑がつた顏つきをして、昨夜のあり樣を――加集にも同じ調子で語つたと思はれるやうに――語り、

『ゆふべ初めて分つたのですが、ね、あんなおそろしい方は、もう、眞ツ平です、わ――燒けになつていつこの家へ火付けをされないものでも無いのですから、ねえ――わたしも夜おそくまでたツた獨りでゐるものですもの、いざと云ふ場合にやア、女一人でどうすることも出來ません、わ、ね。』

『まさか、そんなことも――』

『いいえ、あなた、どうして――淸水さんもまだあなたに未練があるやうですが、あなたもまだ思ひ切れないのでしよう？』

『僕は、もう、大丈夫ですよ。』

『尤もそれが奧さんの爲めです、わ、ね――淸水さんのやうな方は、あなたもさんざんもて遊んだのでしよう、もう、あの、加集さんにくツ付けておやんなさいよ、大した代物でもないぢやアありませんか、ね？』

『どうとも勝手にさせますとも！』

間代は既に今月中拂つてあるので、それ以後自分の責任は無いからと云つて、義雄が立ちかけると、

婆アさんは思ひ出したやうに、ゆふべ、我善坊の千代子がやつて來て、相變らずやき〳〵云ひながら、弟が病氣で入院したと云ふ樺太からの電報を見せたことを告げた。

それでも渠はこの坂を向ふへ越える氣になれないで、再び御成門の方へ引ッ返した。

『自分の家が無くなつたのだ！そして例の金が揃はないぢやア、弟の生命もどうなることか分らない！』

から心に叫んで、久しく行き絶えてゐた濱町の怪しい家へこの夜を明しに行くと決心した、そこで小仕事に短い原稿を書いて、本夜の費用にすればいいからと。

一四

翌朝、獨りになつてからまた一寢入りしたが、起きて近處の錢湯に行つて歸つて見ると、ゆふべから賴んで置いた使ひが歸つてゐて、或雜誌社からの稿料が來てゐた。費川を拂つて、なほ大分に殘りがあつた。

電車に乘る前に、朝晝兼帶のちよッとした食事を濟ませ、竹川町で下車して畑集のところへ行つて見ると、渠は外出してゐなかつた。

また電車に乘つて三田の薩摩ッ原で降りた。渠は、鑵詰製造に必要なので釜を拵らへさせたところ

を思ひ出したからである。
あの時、鑄釜なら、價段も安くて、どこにでもあつた。然し時によると熱湯の勢ひで破裂することがあると云ふので、鐵をうち鍛へさせることにした。
大人の手でも殆ど二かかへもあらうと云ふ圓みの、その高さは脊延びをして中をのぞくほどの釜であつた。その鐵蓋は密閉して熱湯の壓力をしツかり押さへるだけの強さがあり。釜の横へ出して、また、その壓力測量機がついてゐた。
いよ〳〵出來あがつたと云ふので、湯の代りに水を一杯に滿たせ、強力なポンプを以つてその上にまた水を送ると、壓力測量機の針がくる〳〵とまわつた。その機械の根を締めて、また一段の力を與へると、今度は釜と蓋との密閉部から、水が多くの細い線となつて吹き出し、あたりにゐる人々の顏となく、胴となく、裾となく、ちよツとの間にずぶ濡れにしてしまつた。あまり廣くもないおもて庭を逃げまどつた人々でも、こちらでポンプの手をゆるめた後までも、飛ばツ尻を喰つてゐた。
沸騰點以上なほ四五十度の熱と同樣の壓力をかけたのであつたが、これではまだ行けないと云ふことになり、密閉部の工合をもツと緻密に直させた。
そんな釜を厚い鐵板から鍛ひあげさせたのである。それを、自分の身が形作られて行くやうな氣で、鐵工所へ見に行くのを義雄は毎日の樂しみにしてゐた。

とんかち！とんかち！とんかち！そして赤くなつた鐵が段々に延びて行く。そして又延びて行くと同時に、半圓形になつて行く。

これを見て、初めて、渠は實際にどんな形の物であるかを想像し得たが、二つの半圓形の厚板がまだ全圓に合はされないうちのこと、自分はお島の二階に歸つて、晝間の工場であまりに目を見疲れさせた爲めに早寢をしたことがある。そして自分が熱鐵の板輪に圍まれて、ぐん〳〵と締め上げられた苦しみの夢を見た。

とんかち！とんかち！とんかち！と云ふ音が遠く聽える氣がして每朝目をさまし、食事が濟むと直ぐまた出かけた。

やがて兩半圓は會合した。そしてその會合部は、上から下まで、多くの大きな鋲を以て固められた。そして又その鋲の個所々々も、一たび熱せられて、打たれて、そして鍜へられて、釜の本體と一緒になつてしまつた。

それに底が出來た。また、蓋が出來た。そして渠はアミーバがその母體を離れたやうにとんかちの音に別れた。

が、その音は今や自分の中にも微かに響いてゐた。

とんかち！とんかち！鐵工所の門前に近づくほど、足の步みが急がれて、その音が段々

と明らかになつた。

門が見えると、渠は飛び込んだ。すると、また同じやうな釜が一つ出來あがつてゐた。

『そりやアどこ行きか、ね？』

『これですか』と、知り合ひの職工が答へた、『これは蟹の方ぢやアごわせん――どこか東京近在の注文です。』

『何に使ふのだらう、ね？』

『さア――旦那も、どうです、今一つ發展しちやア？』

『うまく行きやア、ね』と、義雄は微笑した。あちらがうまく行けば、この秋から朝鮮へ行つて、すつぽんの鑵詰をやる計劃と研究とも出來てゐた。

そこを出てから、また行く先に迷つた。

愛宕町の大野を思ひ出したが、あの有樂座以來何だか興がさめてゐて、行く氣にならなかつた。で、佐久間町の辯護士なる友人を久し振りで尋ね、玉突やら晩餐やらを一緒にしてから、再び加集のところへ行つて見た。が、午前からあの女と一緒に出た切りまだ歸宅しないと云ふ下のおかみさんの話なので、ぢやア、ゆふべはとまつたのかと聽くと、さうだと答へた。

ゐなければ待つてゐようともしてゐたのだが、果して案のじやうなるこの事實が分つたので、待つ

の馬鹿々々しくなつた。

時計を出して見ると、もう十時に近かつた。これからは、もう、ゆふべのところへ行くより仕方が無かつた。

その翌朝、また水天宮前から電車に乘り、竹川町で下りて、性懲りもなくまた行つて見ると、幸ひに加集はゐたが、義雄を見て不安さうな顏つきをした。義雄はわざとお鳥のことは聽かずに、直ぐ金の話をした。

『どうだい、鶴田君は至急運ばせて吳れないか、ねえ？』

『さう迫いても仕やうがありやへん――外へ融通してあるのが、今月末に返る云ふてるのやさかい、なア。』

『ぢやア、そツちで少し都合が惡いから、今一ケ月待つて吳れいとでも云つて來られりやア、鶴田もそれツ切りだらう――？』

『そんなことは無い筈ぢや――それよりや、君の方が九月一杯に返せんと、僕までが面目ないで。』

『おれの方は大丈夫だよ――然し大丈夫と云やア』と、義雄は少しどぎまぎするのをさう見せないやうにして、『あいつを物にしたのかい？』から云つて、この點を突きとめさへすれば、もう、お鳥との

手切れ條件の一つなる治療條件は御免を被らうと云ふ下心があつた。
『そんなことがあるもんか』と、輕く反らせようとした加集の顏には、どこかぼんやりしたやうな、とぼけたところが見えたと、義雄には思はれた。義雄がわざとらしくにや〳〵してゐるのに對抗したやうに、『そないに疑ふなら、今度轉宿させるところへ行て見よか？』
『行かうとも！』
『では、早う行かんとかち合ふで――けふの午後二時頃に移つて行く筈ぢや。』
『どこだい？』
『八丁堀の電車通りの裏手ぢや。』
『さア、行かう』と、義雄は立ちあがつた。『おれも二度とは直接に會ひたくないから、ねえ。』
『會ふてたまるもんかい、僕の君に對する奔走が無駄になつてしまうぢやないか？』
治療代はこツちで出し、本人はそツちで占領する――そんな都合のいい計算は人間その物の十露盤上には無いぞと、義雄は云つてやりたかつた。
加集が道々話したに依ると、お鳥が渠の居どころを知つたのは渠が義雄に紹介した或書生のヘガキが殘つてゐたからであつて、かの女はその書生を尋ねて、加集のところを知つたのだ。
二人は櫻橋で電車を下り、堀に添つて東へ入り、右へ曲つた通りへ來た。

一間ほどの窓格子の眞ン中に、一尺四方ばかりの額ぶちがかかつてゐて、その中に桃太郎や天狗やあかんべいなどの繪が書いてあつて、そのまた右に『百面相』と云ふ横長の看板が出たところがあつた。その格子に『明間あり』の紙札が張つてあつたのを、加集はいきなり破り取つた。そして義雄を返り見て、低い聲で、

『ここぢや——失敬な奴ぢやないか、まだ札をはがしとりやへんのや、手附け金を取つてる癖に！』

『………』義雄は默つてちよツと苦笑ひしたが、その金だツて、こちらがお鳥に自分等二人の日常費として來月十五日までの分を渡してある、その中から出したにきまつてると思つた。

この百面相の窓格子のはづれと、どこかの倉との間に、一間四方あまりの空地があつた。そこにけち臭い氷屋の屋臺店が張つてあつた。そのよし簀のかげに這入り、

『今日は』と、加集は聲をかけた。そして窓の奥から婆アさんが一人、横の濡れ椽のところへ出て來たのに向つて、『まだ來ませんか？』

『ええ、まだ——』

『もう、おツつけ來るでしよう——君、この二階だよ』と、屋臺店の奥を高くゆび指した。

下は物置きになつてゐるが、雨ざらしの大工ばしごを登つて見ると、六疊敷の座敷があつた。壁や天井裏はすべて新聞紙を張りまわしてあり。大きな大黒を書いた去年の柱ごよみと、石版摺りの美人

給とが壁に向ひ合つてゐる。通りに向つた方は、家に付いてあがり口を取つたあとが一杯に窓で、そのそとに二三の盆栽を並べた臺が、日よけの爲めに掛け垂らしたよし簀から透いて見える。
その簀の一端をあげて、義雄はそとへ出もしなささうなつばをしようとしたら、その下に氷り店のあんこが伏せてあるがらす蓋が目にとまつた。で、渠は顏を引ツ込めて、奥の片隅の高い小窓のそとは何であらうかと思つてのぞいて見ると、隣りの押し迫つた家根の上であつた。
『わざ〳〵ひどい所を探したものだ、ねえ。』
『でも、安いよつて、なア――いくらだと思ふ?』
『いくらだツて、もう、おれア――』
そこへ二十四五の小綺麗なかみさんが茶を持つてあがつて來た。
『御主人はゐますか』と、加集はかの女に聲をかけた。
『けふは、○○の宮さんのとこへ招待されまして、つい、先刻出ましたが――』
『百面相ツて』と、義雄はまだ何のことか分らなかつたので、『どんなことをするのです?』
『をかしい藝人で』と、かの女は愛想笑ひをしながら『ほんの、道樂が高じてこんな商賣をすることになつたのださうです。』
『きのふ、本人が』と、加集は得意さうな顏つきで、『どこか呼んでくれる宴會でもあつたら、世話し

て呉れと云ふてた。』

『そりやア何だか面白さうな仕事でしよう、ね』と、義雄は笑ひながら。

『いえ、ほんの、道樂で――』

『藝が面白いよりや』と、加集が受けて、『本人が面白さうな人間ぢやて。』

『さうだらう、ね――そして氷の方もあなたのうちで――？』

『へい――』

『おい、一つやろか？』

『さア――』と、義雄は應じ兼ねた。喉が渇いてゐて、こんな應對をしてゐるのさへ舌がくツ付き氣味であつたのだが、第一に何だかきたならしいやうな氣がした。第二に、また、ここにぐづ〳〵してゐられなかつた。『來ないうちに出ようぢやアないか？』

『では、おかみさん。』加集も立ちあがつて、『來たら、よろしう賴んます。』

それから電車通りへ出て、二人は氷を飮んで別れた。

一五

義雄はかかへてゐる長篇評論の結末を書かなければ、自分自身のその日、その日をささへる金にさ

へ困るにきまつてるのだが、落ち着いて書く場所がなかつた。
この原稿を依頼した社へでも遊びに行つて見ようかと考へたが、まだ書きあげないのを持つて遊びに行つたとて、無責任としか見られないのにきまつてゐた。
渠はふと大野を訪ふて見たくなつた。そしてその細君とも話しをして、いよいよ清水と手を切つたことを報告したくなつた。
で、愛宕の塔下へ訪ねて行つたが、生憎、大野は留守であつた。細君はゐるとのことだが、子供達がぎやア〳〵云つてゐるのが聽えたので、――子供と云ふものはその聲だけでも聽くさへ、義雄にはいやなので――あがる氣にはなれなかつた。
轉じて四谷へ行き、或婦人の獨身者を訪問した。この婦人は渠を冷かし半分で、『なぜあたしを口說いて見なかつたの』と云つたことがある。『どうせ口說いたツて、物にならうとは思へない人だから、ね』と、渠は眞面目に答へた。そして今日まで二人の交際は少しの氣まづさも無く續いて來た。渠には、今更らの如く、かう云ふ交際が却つて無事で而も懷かしみもあるものであつたことが分つて來た。
かの女が某華族の夫人と共に催した或慈善音樂會に於て、渠は一場の演說をしたこともあつた。かの女の家でかの女と婦人論を爭つて、その母親に喧嘩してゐるのではないかと思はせたこともある。

かの女の紹介で、何物であるかまだかの女にも分らない或美人――實際の美人であつた――を訪ねて行つて、その生活の樣子を探つて見たこともある。かの女が玉突屋兼業のレストランをやつて見ようと云ふ出來心を起した時、無駄であつたが、いろんな助力を與へたこともある。

そんな關係で、渠が清水鳥と云ふ女に熱心になつてゐたことも、かの女は渠から聽いてよく知つてゐた。が、渠がいよ〳〵樺太へ出發する折は、そのお鳥を預つて呉れないかと賴んで見た時、これは三ケ月ほど前のことだが、

『そんなきたならしい病氣の人なんて、あたしいやです、わ』と、かの女は半ば怒つて、はね付けた。

それでも渠はこの婦人には當り前の返事だと思つて、惡い氣はしなかつた。

『もう、この婦人しか無い、今の自分の心持ちを持つて行きどころは――その、いつもの忠告通り、女と手を切つたことをうち明け、叱られて、笑はれて、半ば同情の言葉を得て、二三時間だけでも、自分の落ち付きどころを借りて見よう』と、玄關の格子戸を明けたのであつたが、母親なる人が出て來て、ここも亦あての人の留守であるのを報じた。そしてこの老母が先づ旅の話を持ち出して、

『いつ、あなたはお立ちになりますか、ね？』

『もう、四五日中だと思ひます』と、義雄はわけもないやうに答へた。

人や自轉車の行きかふ間をよけながら、渠は全く途方に暮れた。

あまり好きでも無い酒を呼ぶ爲めに、肉屋やバーに這入る氣もなかつた。
『今一度お鳥の新居へ行つて見よう！』から云ふむほん氣が確かに渠の心を占領したのは、渠が四谷見附けを這入り、麹町八丁目近くまで歩いた頃であつた。

渠がまた八丁堀へ行つた時は、もうお鳥は例の六疊敷をかたづけて、角火鉢にかけたゆき平の下を吹いてゐた。
渠は、先刻の若いかみさんが氷をかいてゐるのにちよッと挨拶して、はしごをあがつて行き、半ばそのからだを現はした時、自分はこわい顏をしてゐる筈であつたが、つい、笑みを漏らした。
かの女も亦こちらを返り見て、にツこりとした。そして常にでさへ珍らしかつたほどの優しみと嬉しみとを籠めた目付きで、こちらを見つづけた。
『このざまはどうだ！』から、平生と違はない態度で云つて、渠はかの女の大きな廂髪の上にたかつた灰を指のさきで輕く拂つてやつた。それからそのそばにあぐらをかいて、『どうだ、御機嫌は？』
『知らん！』から云つて、かの女は渠のからだを兩手で突き飛ばした。片手を後ろに突いた渠が、何とも云へなくなつて、眞面目な顏であぐらに直つたのを、かの女は前とは丸で違つた顏でにらみ付けて、

『衣物を買うて呉れたおもたら、手切れの爲めやなんて、加集に云ふて――死んでお呉れ、あたいも死ぬさかい！』
『うん』と、横へ向いてはづしながら、『死ぬのは、いつでも死ねるよ。おれなどア、どうして生きて行くかが眞底からの問題だ。』
『お前だけ生きたら、ええのだろ――あたいをどうするつもりや？』
『棄てる神があれば、ね』と、渠は今度はかの女を冷やかに見て、『また拾ふ神もあり、さ。』
『神などありやアせん』と、かの女は目で渠を遠ざかるやうな色を見せた。
『ぢやア、加集をどうしたんだ、あの晩にとまつて――また、その次ぎのゆふべもだらう？』
『そんなことはない！』熱心にこちらを睨んで、訴へるやうに『ゆふべうちで寢よとしたら、あの婆アがあがつて來て早く立ちのいて呉れ云ふた位ちやないか？どうせ出るにきまつてゐたさかい、さう云ふてやつたら、變な顔をしたけれど――人を棄てたり、人に恥ぢをかかせたりして！』情けなさうにべそをかいた。
『そりやア、お前が分らないから、さ。』
『そッちやが分らないのぢや――誰れが、いつまでも、めかけなどになつてゐるもんか？』
『さうして、何かい、加集の足かけなどになつたのか？』

『そんなことは無い！』かの女は怒つたやうに膝に力を入れて疊にぶつけ、顏を皺くちやにして見せた。

『その顏が、お前の見え透いたうその手だよ——もう、ちやんと、おれにやア分つてるのだから、ね。』

『…………』かの女は眞顏になつて目を少し落して、義雄の强みを藏する視線を避けたが、また見あげてあまへるやうに、『そんなら、何で來た？歸つて貰ふ！』

『ふん——こんな詰らない部屋でも、ね、もう、前金を拂つたに相違ない以上は、おれが借り主だらうぜ。』

『では』と、かの女は尋常な顏になつて、『人を棄てたりせんでもええぢやないか？』

『然し、ね』と、義雄はわざと落ち付き拂つて、卷煙草を袂から出しながら、『お前とおれとは、もう、もとの通りにやア行かないよ。』

『どうして、さ？』かの女は、不思議さうに。

『二人の間には、第一、出齒庖丁が這入つた。』

『…………』

『それから、加集が這入つた。』

『そんなことは無い』と、また顏をしがめた。

ゆき平がぷう〱吹いてゐたので、かの女はその盞を取つた。飯が煮えたのだ。

『誰れの爲めに焚けたのだか、ね――おさしつかえは御座いますまいか？』

『丁度ええとこぢやさかい』と、かの女は渠の冷かしには頓着せず、ゆき平をおろして、『何か買うて來か？』

『さうだ、ねえ――』と、義雄は手を懷ろに入れかけた。

『お金はこッちにもある――けふも、あんまり癪にさわつたさかい、あの婆々アから間代の五日分だけ取り返して來てやつた。』から云つて、かの女は喜んでゐた。

かの女は正宗一本とかれいを一尾と買つて來て、膳ごしらへが出來た頃、加集が案内もせずあがつて來た。

『來てるのか、君』と、渠は間の惡いやうな顏をして立つた。

『ああ。』義雄は、食膳代用の机に向つたまま、惡びれずに返事をした。『おれにやア、行くところも、ゐるところも無いのだ。――まア、一緒に一杯やらう――坐わり給へ。』

『僕も一本あるぞ』と苦笑しながら、ポケットから取り出したのをしほに、義雄と相對して腰をおろ

した。そしてからだを横にして、瓶を女の方につき出し、『お鳥さん、これもついでにつけてお呉れ。』
『………』かの女はちよツとふり返つたが、取り合はなかつた。
『あれから、なア、また○○の』と、先輩の名を擧げて、『どこへ行て來たんぢや——銀行家なんて、なか／＼けちんぼで、なア。』
『二千五百圓の宅地とかでかい——まア、つがう』と、義雄は加集と自分との猪口に出來た酒を注いだ。
渠はお鳥に命じて、加集の持つて來た正宗をも燗しろと云つたが、かの女はそれに手をつけようともしなかつた。
『まア、さう嫌はんで』と、加集はかの女のつんとそツぽうを向いてる横顔を見た。渠の目には、これまでに見せたこともない劍があつたと、義雄は讀んだ。
『ぢやア、おれが燗をしてやる、さ。』義雄はかう語つて、火鉢へ行つた。
渠は半ば加集に後ろを向けてゐたが、加集がじろ／＼とお鳥を見て、かの女の顏色を讀まうとしてゐる樣子が、自分の近眼鏡の裏に寫つた。
その夜、加集もいろんな世間話をして、いつまでたつても歸らうとはしなかつた。
義雄はまた、このいきさつがどうなることだと、心を据ゑて、半ば傍觀氣を起してゐた。

お鳥だけはじれ〴〵してゐて、加集に歸れと云ふ素振りばかりを見せた。

『もう、締めますが――』下からかみさんの聲がかかつた。

『ちやア、締めてもよう御座います』と、義雄は答へた。

お鳥はこらへ切れなくなつたと見え、

『歸つて呉れ』と、加集につけ〴〵云つた。

『歸るなら、歸るやうに話をつけて行く。』から、加集は強いことを云ひ出したが、その割りに聲が顫えてゐた。見ると、渠の顏は、義雄には、如何にも恨みある悲しみを表してゐるやうであつた。

『こツちの範圍内に立ち入らせたのが惡かつたのだ』と、義雄は私かに、多少、同情の念が起つた。

『まア、一緒に寢よう、さ――僕も醉つてるから、ね。』

お鳥は物も云はないで、自分だけの褥を敷いてゐた。

義雄は下の濡椽をあがつて、奧の便所へ行つて、またはしごを登つて來た時、立ちあがつてゐる加集がこれも立つてゐるお鳥に突きのけられて、壁の大黑ごよみにぶつかつたところであつた。

『喧嘩なんかするな！僕がこの場にゐる以上は、ね。』から云つて、義雄は、一方に片よせて敷いた褥の上から、上の蒲團一枚を剝いで、加集に與へ、『仕やうがない――君はこれにくるまつて寢て貰はう。』

『かしわ餅かい？』加集は愛想らしく笑つた。

『さう、さ、ね――それでも女は女だ』と、義雄は自分の寢まきに着かへながら、『ヷイオリンなどはぶち毀わしても、衣物はこんな下らないのでも、何かの足しになると思つて、持つて來てゐらア。』

『それも』と、お鳥はもう這入つてる褥の中から、『燒いたろかおもたんぢや。』

『あの婆アさんが』と、加集も少しゆツたりした聲になつて、『火事でも出されるのを心配してたのは尤もぢや、なア。』

『ほんとに、さう、さ、ね――然しここは、また』と、義雄は今見て來た締りを思ひ出して、『どうしたのだらう、ね、下の庭に戸締りも何もしてないぜ。ただよし簀を立て廣げて、細い横木で押さへてあるだけだ。』此時はもう女と並んでた。

『そりや僕も知らなんだ、なア。』加集は心配さうに蒲團から顏を出して、『用心が惡いやないか？』

『惡くツたツて仕かたが無い、さ――君がわざ〲こんなところを見付けてやつたのだから。』

『そんなことまで僕も氣が付きやせん、さ。』

『然し萬事よく釣り合つてらア、ね。』義雄のこの言葉を聽いて、お鳥は無言でだが怒つて、渠の横腹をきつく突いた。

義雄も默つてしまつたが、こッそりかの女の手を引き寄せ、
『どッちが好きだ』と、指さきで書くと、
『おまへ』と、かの女は書き返した。

翌朝、遲くあさ飯を一緒に喰つてしまつた頃、加集は言葉を置き〳〵、から云ひ出した、――
『僕は――これから――時間があつて――出るが、なア――一體、この話は――どうなるんや？』
『どうなるツて』と、義雄もむッとして、『もう、濟んだやうな物、さ。』
『まだ濟みやせんぢやないか？』加集は眉根を引ッ釣らせて、『君は僕に依賴して、僕は君とあの女との手を切る奔走をしたんや。』
『そりやア、さうだが、ね、今となつちやア、もう、取り消されたのだ。僕自身でこれと僕との間は、切れるなり、またくッ付くなりする、さ。』
『でも、まだ君は取り消してない。』
『ぢやア、今僕が取り消すが、君の二三日來の奔走は實にありがたかつた。』から云つて、一つあたまを無器用に下げた。
『如何に友人間でも、君はおれを馬鹿にしてるよ――僕だッて、一日をほかのことで奔走すりや、そ

れだけ金になるからだを、君の爲めだおもて、この二三日棒に振つてるやないか？』

『然し君はその報酬は得てゐると思ふが、どうだ？』

『さう云はれると、なほ――』加集は言葉を中止して、お鳥が二人を少し離れて後ろ向きになつてゐるのを横目に見た。

『あれは、たとへ』と、義雄はかの女を見ずに、『何も分らない無智同様の田舍者としたところが、兎に角まだ娼婦や何かでは無い。それを――』

『さう云はれると、僕も――然し君の爲めに手を切らせる一つの手段としては！』

『いいや、そんなことは、今更ら、意味もない申しわけだ。僕は、だから、何も君のこの二三日のことを責めるのぢアない！』

『然し――』

『それとも、友人間のことを金にする氣かい？』

『…………』加集は暫らく默つてゐたが、決心の色を見せて、『どうせ、君がそんな不都合をするなら、金にしたる！』

『よし』と、義雄も坐わり直して、『いくらの口錢を出せばいいのだ？その代り、またあの女にも要求があるだらうから、ね。』

『………………』

『僕は豫め云つて置くが、あの女をまたこれまで通りにするか、それとも矢ツ張り手を切るか、それは君にもあの女にも受け合はれないのだ。が、あいつの處分はどツちとも僕自身がすることにきめたのだ。』

『さう云はれると、――僕も――實に――心――苦しい。』加集はその背を壁にもたせて、女と義雄とをどツちにも横目で見るやうにして、『實は、もう――僕のうちへもとまつたし、大森の砂風呂へも一緒に行たし、――』

義雄はこれを聽いて、くわツとのぼせた。想像と推斷とでは、既に分つてゐたことだが、本人の口からから當てつけられて云はれると、あたまにのぼせて、からだがひイやりしてしまつた。そして今までのがん張り方が馬鹿々々しくなると同時に、この女をわれからかばうのが、女にも笑ひの種になつてはすまいかと思はれた。ゆうべのありさまだツて、自分がただいい氣になつてゐたに過ぎないのかも知れず、女が加集にむごく當つたのも却つて反對の意味があつて、加集が馬鹿の爲めにこれを理解し得なかつたのだとも取れ出した。

『おいちよツとこツちを向け！』から、義雄はお鳥に叫んだ。が、かの女は向きも返事もしなかつた。

『おれが若しお前を處分するとしても、今加集が云つた事を土臺にすれば、おれの方はずツと責任が

軽くなるのだ――返事をしろ、お前の口からも事實だと！』

『…………』かの女は矢張り無言で、少し仰向き加減にそツぽうを見てゐるらしく、然しからだは全體に顫えてゐるのが見えた。

義雄はこれを見て、あの烏山でかの女が縊死しかけた時のありさまを思ひ合はせ、如何に憎い女でも、再びあんな眞似はさせたくなかつた。

渠はどう自分の身を處していいか、ちよツと度を失つた時、加集は勝ち味な聲で、

『兎も角、僕が一時あの女を預かるのが順當ぢや！』

『預かれるなら、預かつて見ろ！』まだ實際の好意があるのをかの女にも分らせる爲めに、『君が預かるのは、どうせおもちやにする爲めだらう――？』

『うんにや――』加集は義雄のこわい目を避けて、かの女の方に向き『僕だつて、男ぢや――君ぐらゐの世話はする！』

『これまでの僕ほどでは、もう、行かないよ――今のさし迫つた問題は、あの女を生かすか、殺すかの問題だ。君が本氣で獨り者だから、少くとも、一生愛してやるか、僕が本氣な同情でかたをつけてやるか？　如何に馬鹿だツて、あいつも、もう、そこまで突き詰めてゐる樣子だから、ね。』

『そんなことを君に受け合ふ必要はない！』
『君は途中から逃げようと云ふのだらう――？』
『…………』加集はたゞじツと、半ば横目で、義雄を見つめてゐた。
『さア、もう僕はどツちでもいい！』義雄は決心した樣子で他の兩人を見まわして、『僕はこの場合愁情は拔きだから、あの女の意向一つにまかせるが――その前に、一つ、僕がしツかりと事實の念を押して置く必要がある。――おい』と、またお鳥を呼び、『加集との關係を白狀しろ！』
『…………』
『返事しろ！』
『…………』
『どうしてもしないと云ふのなら、今一つ聽くが、ね、お前は一時おれに來るつもりか、または加集に行く氣か、どツちだ？』
『…………』
『顫えてゐるのは、自分のしたことを後悔してゐるのかい？それとも、おれを恐ろしいのかい？』
『…………』
『うそを云つてたから、返事が出來ないのだらう――面倒だから、今一度だけ聽くが、ね、これで僕

は永久にお前と會はないことになるかも知れないのだぞ！』から云つて、義雄は言葉を切り、お鳥の前をわざと荒々しく通つて、原稿の包みを手に取りあげ、もとの坐に來て立つたまま、『返事が出來ないなら、返事をしない方で聽くが、ね——加集がおれに代つて、お前をおもちやにしようとするのだが、その方がよければ返事をしないがいい！』

『…………』

返事が無いので、義雄は、自分のかの女に對するこれまでの待遇に對して、かの女からゆふべとけさとに全くしツぺい返しを喰はせられたものと見た。そしてまた一段とくわツとなつた。

『加集！ちやア、君にまかせた』と云つた聲さへ、耳からでも出たやうになつて、一度期に忿懣の情が顏に燃えあがつた。

渠がからだの中心を失ひかけたほどそそくさと下り口まで行つた時、

『まア、待つて』と云ふ聲がして、自分の袂が引ツ張れたが、今や加集に語つた言葉に面じても、女女しく再び坐わりも出來ない氣がして、

『放せ、もう、これツ切りだい！』握られた袂をふり拂つた。さうして女が足もとにばツたり倒れた音を耳にとどめて、はしごをそと向きに急ぎ下だり、下駄を引ツかけるが早いか、屋臺の後ろからかみさんが驚きの目を見張つてゐるのにちよツと間の惡い挨拶をして外に飛び出した。

一六

『まア、待つて』が氣になつてはゐたが、待つてやつて、拜み倒されてもそれまでのことだ。『お前』の代りに、『あなたには』などと初めて改まつた言葉を使つて、これまで大相世話にはなつたが、今となつては、加集にも義理がある――ぶつなり、蹴るなりして、思ふ充分に意趣は晴らして貰ふ代り、あの條件通りを行なつて吳れい！　こんな工合に向ふが出まいものでもなかつたらう――結局、馬鹿を見るところであつた。

『幸ひにも、けふと云ふけふこそ、下だらない責任をのがれたのだ――この結果は早く誰れかに發表しなければ』と云ふやうな氣がしながら、義雄はふら〳〵と我善坊の家に歸つた。

生垣の間から隣りの寺の緋鯉の池が見える室に入り、ヅックの旅行革鞄を出して、その中へまだ手のあツたか味が殘つてる原稿や書物を初め、その他に、今の原稿が終れば、直ぐ何かあとを書く爲めの參考書をあれやこれやとえらび入れてゐた。

『あなた、どこをぶらついてたのです、ねえ。』『千代子の無作法な步みの足音も聽えて來て、『あツちから電報が來たことは聽いたでしよう！』

『聽いたから、あせつてるのだ！』渠はかの女を睨むやうにしてちらと見たが、かの女は敷居のそと

に立つて、おづ〳〵と相變らずの氣違ひづらをしてゐた。渠は私かに、『こいつには氣違ひ責めにせられ、あいつには刄物責めにせられ、もとはと云へば、たとへおれの仕出かしたことにしろ、たまるものかい』と考へた。

『それならいいでしようが――あなたは旅行なさるんですか、また自慢さうにあんな女を連れて――！』

『淸水とは、ね』と、義雄は飽くまで念を押してやるつもりで、あごを堅く突き出してわざとらしくあけ下げして、『とツくに手を切つたのだ！』

から云つた時、渠はふと自分自身を返り見ると、この千代子にかぶれて、自分までが氣違ひじみた空氣を呼吸してゐた。

ここにだツて、渠は一刻もとどまる氣は出なかつた。

『それは初めから當り前のことでさア、ね――喧嘩か何かしたのでしよう？若しあなたの弟があツちで病死でもして御覧なさいな、あの人をあなたがあの女のために殺したも同前ですよ！あなたが、ね――あなたがですよ！』

『うるさい！死ぬやつァ、どうしたツて死ぬんだ！』渠はから叫んで、『若しやあのお鳥も――』と云ふやうな疑惧の念が浮んだ。

渠の精神はからだ中に顫えあがつた。そして八丁堀の堀端を歸る時氣になつたかの女の最後の一言が、今やまた耳の記憶から繰り返されて、あはれツぽく渠の胸に傳はつた。

『氣味がよかつた』と、私かに渠は自分を辯護し、かの『不如歸』劇で泣かせられるもの等のと同樣な安ツぽいあはれみの心などは踏みにじつてしまへと決心して、書物を七八冊ねじ込んだ革鞄を提げて立ちあがつた。

『車を呼べ、車を！』

『車なんか來ませんよ！』

『なんだと！』

『あなたはちツとも御存じないのですが、ね、呼びに行ツたツて、向ふが、お前さんのとこは信用が出來ないからツて、ね――』

『………』義雄はじろりとかの女を見詰めて、言葉が出なかつた。

『それほどまでにあなたのうちが困つてるのに』と、かの女は半ば哀訴の口調になつて、『あなたはちツともふり向きもしない氣ですか？』

『無論、さ！』力の拔けた聲だが、渠はなほ反抗せずにゐられなかつた。『おれにやア妻もない！家もない！あの事業が失敗すりやア、おれ自身も無いか知れないのだ！』

『そんな無謀なことを云ひなすつたツて』なとと云ひながら、かの女はあとを廊下のはづれまで追つて來たが、渠は自分で荷物をひッ提げて出た。

我善坊を下つて西の久保の通りに出で、やツと辻ぐるまを見付けて、渠は手に提げた革鞄を車の蹴込みへ投げ込んだ。

顏や脇の下の汗を拭き〳〵、くわツくわと照る太陽の下を走らせると、すツと輕くなつた自分の世界は却つて自分の世界でないやうに思へた。日は輝いてゐても、この數ケ月來、滅多に心の晴天を仰いだこともなかつた渠には、あんまり明るい光の中を半ば自分が失はれて、取りとめも付かない。

先づ心から落ち付けようと、自分のからだの住ひを車上で正して見た。すると目の前を橫切つた一人の男の子が自分の總領息子の年輩であつた。

『かいるが鳴くから、かアいる』と云ひながら、ゆう方よく外から歸つて來たものだが、或時自分の今乘つてるやうな車に敷かれて、手と足とを怪我した。若しあの時頸か胸かをでもやられたのであつたら――渠は自分の身になつて、ぞツとして目をつぶつた。

すると、その子等の母がわさ〳〵と落ち着きもなく、しやりからうべにまで瘦せこけて、子供を叱つたり、幕しのことを心配したりするあり樣が見えて來た。あの婆々アじみて――こんなことは、もう、

考へたくもないので、日を明けた。

若い婦人がからだの曲線を衣物のいい着こなしに表はして、顏を蝙蝠傘で隱して行く。すると、お鳥はあれからどうしたらう――自分は、もう、全く傍觀的にだが、今一度行つて見てやらうか知らんと考へられた。

これに、また『まア、待つて』がからみ付いて來て、かの女の死んだざまが見たくなつた。若し死んででもゐて呉れりやア、自分も自分の關係を憚らず天下にさらけ出し、かの女のどうせ死ぬべきものであつたこと、並に自分がどの點まで責めを負ふべきかを公表して、あとは誰れにでも勝手な判斷をさせてやる！

『然し、死ぬなんて――まさか――』あの加集さへあの場にゐなかつたら、かの女も手を廣げてもツと芝居をしただらう。自分も亦もツとかの女の心をえぐれただらう。

若い女を飽くまで試みるのも面白かつただらうにと云ふ氣になると、あの時滔々としやべつたことが前後の取りとめさへ無かつたことを思へて來た。

『二十歳をたツた二つばかり越えたに過ぎない女の爲めに、――おれもどうかしてゐたのだ！やり直しだぞ、お鳥！待つてゐろ』と、力を入れて心に叫んだ。『お鳥――お鳥！お鳥、お鳥、お鳥！』

『さう足を踏みしめては困ります』と、車夫は走りながら後ろをふり返つた。まだあの女に迷つてゐ

るのかと云はれたほど、義雄は顔を赤くして澄まし込んだ。
新橋停車場前の或休憩所に車を降り、荷物をそこに預けて置いて、電車に乗つた。
氣が引けながらも、加集がゐたらいよ〳〵一喧嘩をする覺悟で行つて見ると、下の主人が今お島の室から出て、はしごを下りるところであつた。
『こいつ、また、おれ達の遺利を奪ふ氣ででも――』義雄はむかツとした時、
『おゝ、旦那』と、主人は嬉しさうに下り立つて、『今、あなたのお宅へ使ひを出しましたのですが、な――どうも、本人の云ふことがはツきり分りませんので――』
『どうかしましたか？』義雄はうツて變つて自分の世界が開らけたので肩身が廣くなつた氣がしたが、同時に『やツ付けた、な』と合點して、俄かに胸さわぎがし出したのである。
『まア、どうぞこちらへ――只今、やツとお休みになれましたから。』
かう云つて主人が導くままに、義雄は百面相の客間へ通つた。
『アヒサンをやつたのぢやアありませんか？』
『えツ、そんな毒藥を！』主人はびツくりした聲を擧げると同時に、胸を反らせて左の手を輕く後ろの壁へ突き、そツちへ引ツ張れたやうに眼と口とを傾けた。そして下くちびるを少し受け口にして見せ

たが、直ぐもとの顏に直つて、『わたしは、また、御酒をめしあがり過ぎたのかと思ひましたが――』
『まだ醫者に見せませんか？』義雄は氣が氣で無かつた。
『いや』と、主人は渠の樣子を見て、わざとらしい落ち着きを見せて、『御心配にやア及びませんもう、一時間も前に來ましたから。然し、そばに一升德利が出てゐたので――』
『ありやア、醬油入れでした。』
『それに、大相吐きましたから、な――多分、酒を飲み過ぎたのだらうツて、醫者は下劑をかけて歸りました。』
『そ、やア、丁度いい思ひ付きでしたらう。』義雄はから云つて、この、想像には描いてゐたが、いよいよ事實と聽いては一たび突然に驚かれた事件を、まだ物足りないやうな氣がした。
これまでにも、かの女の留守、留守に、度々かの女の荷物を探して見た。一つは、他の男からの手紙でも來てゐはしないかと思つてだが、次ぎに、それよりも重大な理由は、國を出る時から用意してゐると云ふこの毒藥の有無であつた。どうしても見付からないので、うそを云つてるのだとも思つた。また知り合ひの醫者などに、それと無く、これを飲むとどんなきき目があるか、どんな結果を呈するか、など云ふことを聽いてゐたのだ。
『分量が多過ぎて、却つて吐いてしまつたから、助かつたのでしよう。あの藥は死ぬにも度合があつ

使用するものがあつて――たとへば、宴會とか舞踏會とかへ行きます、ね、少しづゝやつてゐると、そのききめがいつか現はれて、ぼうッとその顏がほんのり櫻色になるさうです。』

『道理で』と、主人は、はたと膝を打ち、『眞ッ赤にのぼせてゐました。酒の醉ひだと思ひ違へたのも、無理はないでしよう。妻が氷をかいてゐましたら、どんと倒れたやうな音がして、二階でうん／＼うめく聲がしたと御らうじろ。わたしがあがつて見ると、それでしよう――うちのものまでが皆七顚八倒でしたぜ。』

『そりやア』と、義雄は微笑にまぎらせて、『おさわがせしました、ね。』

『全體、あのお方はどうした人です』と、主人に尋ねられ、『實は』これ／＼と、義雄はそこの老母も出て來た前でありの儘をぶちまけ、『かうなつちやア、僕が少くともそれが直るまでは、看てやらなけりやアなりますまいよ。』

『人助けでさア、ね。』主人はまた胸を反らすやうにした。『加集さんには御名刺は戴きましたが、何だかちやらちやらツぽこばかり云つて――あんな人は』と、鼻をつまむ眞似をして顏をしかめた。

『いや、さうまで薄情でも無いでしようが、ね。』

『それが、あなた』と、うち消すやうに首を一つ和らかにまわして、襟を抜け衣紋にして、『御失敗の

もとぢやアありませんか？』
その様子も聲も、丸で、女がお客にあまへてゐるやうだ。
『なアに、失敗と云ふわけでもないのでしよう、ね、ただ僕がまだあの子に愛情が殘つてゐて、思ひ切れなかつたのが惡いのでした。』
『それもさうでしようが、な、女なんかいくらもありまさア――わたしのうちのでも、抛り出しさへすりやア、直ぐあとが二人も三人も待つてまさア。』
『これは惡くもない家柄ですが、ねえ』と、老母がそばから、『道樂の爲めに、好きで、こんな商買をしてゐますんで――』
『百面相ツて、どう云ふことをするのです？』
『なアに、わけアないもんですが、な。』から云つて、主人は次ぎの間から古行李を引きずつて來て、その中からいろんな面やら道具やらを見せ、何でも手早く早變りをして、一人でいろんな人物になつて見せるのが藝だなどと說明する間にも、素顏にちよツと物を當てると、ひよツとこになつたり、おかめになつたりした。
『ただの鼠ぢやアあるめい』と、いつの間にか男之助になつたかと思ふと、面をちよツと裏返して、

そして
『これが〇〇の宮さん、〇〇〇の宮さんのお氣に入りだから、ありがてい——どうか、あなたも御吹聽を願ひます。』
馬鹿にされたやうな氣をして、その室を出て、義雄は二階へ行くと、お鳥はあたまだけ、枕の上に、こちらに向けて、氣だるさうに、
『來たの』と云つた。
『とう／＼やツつけた、ね！』
『……………』かの女は顔をそむけた。涙聲で、『どうせ生きてゐられへん！』
『おれに棄てられてか？』渠は冷然とそのそばに坐わつた。
『……………』向ふ向きにただ頷いた。
『そして又加集に棄てられてだらう——？』
『……………』何の返事もなかつた。が、やがて獨り言のやうに、『死にさへすりやえゝのぢや！』
『さうだ、死にさへすりやア、おれが加集をも呼び付けて、墓地の奔走をさせ、おれも尋常に見送つてやつたのだが、ね、死にそくなつちやアまた問題が起るぞ。』

『起るも起らんも無い――あいつは、あたいが、わざと、世話が出けるか云ふて念を押してやつたら、返事が出けなかつたさかい、追ひ返してやつた。』

『それ見ろ――誰れにだツて見限られらア、ね。』渠はかの女の精神が、もう、大丈夫正氣になつてゐることを認めた。で、語法を一歩進めて、『おれだツて、もう、友人の手を付けたものを、二度とは、可愛がれないよ――たとへ、お前の決心は精神に於てお前を潔めたものと許してやつても、ね。』

『可愛がつてなど貰はんでもええ！』

『うん、さう諦めてゐさへすりやア、おれはまた一肌拔いで、お前の處分を付けてやつてから出發するよ。』

かの女は向ふを向きツ切りであつた。なんにも喰べたくないと云ふ上に、からだの自由が利かなかつた。

渠はかの女の便器を求めに行つたり、自分の食物を用意したりして、ゆふ方になつた頃、加集がのツそりやつて來た。

『また君ア來てるか？』ぶりりとして立つてゐる。

『君こそ來るに及ばないんだらう！』義雄は、火鉢にかけた物の下をあふぎながら、横ざまにねめ付

『君も男子だらう――あれだけはツきりと僕に委托して置いて！』
『そりやアおれから云ふことだぞ――どうして君アおれのその委托を正直に實行しない？この本人の樣子を見ろ！』義雄は顎でお鳥の方を示めして『毒をあふいで死にそくなつてるぢやアないか？』
『……』加集もかの女の寢姿を見やつて、ぎツくりと來たやうであつたが、見る／＼惡人のやうな相を顏に描いて、立つてるからだを固めた。『貴さまアこれツ切りおれをあの女に近よせないつもりだ、な？』
『さうだ――君自身がその權利を、けさ、拋棄したのだ！』
『おれだツて、若しやとおもてやつて來たのぢや、人情は持つてらア――この二三日、大事な時間を棒にふらせやがつて！』
『口錢が欲しけりやア金でやる――友人呼ばはりはすな！』
『畜生！』から叫んで、加集は義雄の横ツ腹を蹴つた。
『なに、くそ！』義雄は立あがつて、加集を力一杯に壁の美人へ突き飛ばした。みしりと云つて、張り子板の音がしたので渠は下の人々に氣兼ねする氣になり、――また横たはつてゐる女の爲めをも思つた。
で、勢ひを盛り返して來た加集の爲めに、義雄は組み敷かれて、また二三度方方を蹴られた。が、

こちらの手出しはさし控へた。

『壯士を二三人つれて來て、おれは貴さまとあの女とにあやまらせてやるぞ！待つてやがれ！』

加集はこちらを尻目にかけて、はしごを下り初めた時、義雄は言葉で追ッかけた、――

『貴さまのやうな奴が、ね、自分の色女をおしまひにやア賣り飛ばすのだぞ！』

『賣り飛ばされるやうな女ぢや！』

『…………』

『弱虫！』かう云つて、お鳥は加集が行つてしまつてから、顏だけをこちらに向けた。『あたいが起きてたら、あいつを締めあげてやるのに！』

『…………』お前の爲めを思つて負けてゐたのだとは、心で云つたが、義雄には正直に發言出來なかつた。

一七

心配してゐるほどでも無く、加集は押し寄せても來なかつた。然し義雄は下の家族にも注意を與へて再び渠が來ても、あがらせるなと命じた。

室の入り口なる半間のひらき戸へ、うち側から輪かぎがかかるやうにして、義雄は毎日、毎夜、かの女の看護をした。そしてその傍らで書きかけの原稿を書き終つたし、また或新聞社へ行つて、樺太

ならおちらの通信をすることを引き受ける相談をも整へた。

二三日のうちに、お島のからだも段々自由が利くやうになつて、これまでとは打つて變り、義雄に對する情が忠實でこまやかになつた。そして、質物を出す話を湛がし出した時、

『あんな物はいつでもええ』と云つた。

義雄はまたかの女に對して、まだ望みありさうにそツとして置いたかの女優志願は、その實駄目であつたのだからとうち明け、かの女が近頃になつて寫眞屋になりたいと云ひ出した志望を容れ、その方の學校へ入れてやる手續きなどをした。

『これで、兎に角、お前との最初の約束は實行出來る、ね。』

『學校がきまつても、金がつづかにや駄目ぢや――』かの女は下のかみさんを思ひ出したかして、『下のは、な、色女であつたのが、かみさんを追ひ出して這入つたんやさうや。』

『お前も、どこか、そんないい口を見付けろよ。』

『あたい、そんなことせんでもええ?』

『獨りで立つて行けるかい?』

『その學校さへ卒業すりや――』

『あやしいもの、さ、ね。』

その月の末日になつて、加集がまたやつて來たが、今度は、いよ〳〵鶴田から借りる金が出來たと云ふ報告をしに來たのであつた。

義雄と鶴田とは、後者の家で、加集の立ち會ひで、貸借の手續きを完了し、その歸りに、義雄は立會人に正式以上の口錢をやつて、

『以後淸水のゐるところへ往つてはならないぞ』と命じた。

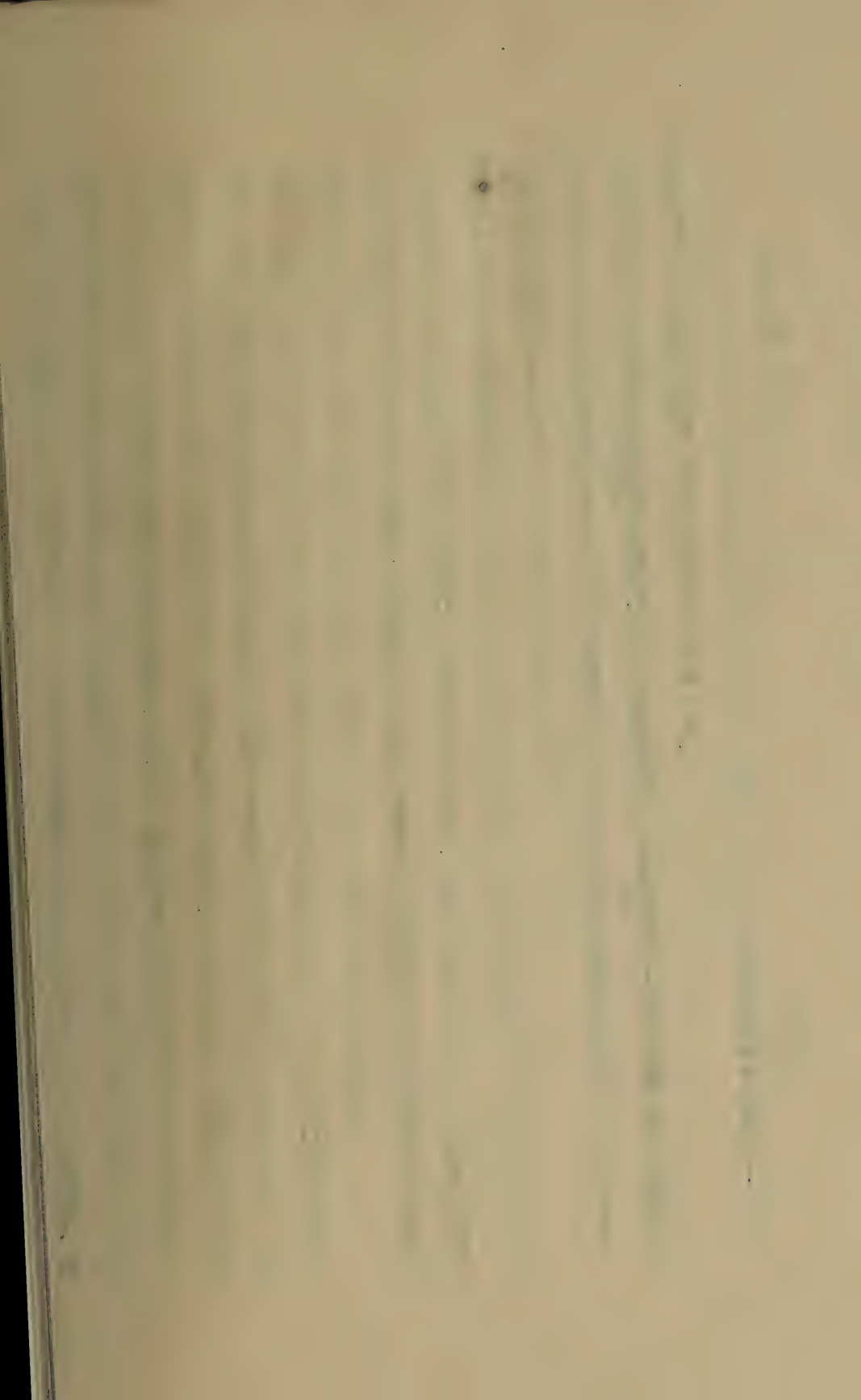
『君のいつか云ふた通り、あいつは夜になると美人に見えるが、なァ――僕だツて、あんな臭い女はいやぢや』と、加集は答へた。

このたツた一つの返事が、義雄のまだのぼせてゐた心とからだとに、ずツぷりと冷水をあびせかけた。

『アスタツマテ』と云ふ電報を、入院中だと云ふ弟をもはげますつもりで、樺太へ打つたのは、六月の一日であつた。そしてお鳥へは渠の歸京まで豫定三ケ月の維持費を渡した。

二日の正午頃、お鳥だけが義雄を上野へ見送りに來た。かの女は、手切れの用意とはその時夢にも知らずに買つて貰つたかのセルの衣物に、竹に雀を書いた羽二重の夏帶を締めてゐた。考へ込んでばかりゐて、口數を聽かなかつた。

いよ／＼乘り込むとなつて、停車場のプラトフオムを人通りのちよツと絶えたところへ來た時、かの女は低い聲で、とぎれとぎれに、
『あたい、もう、あんたばかりおもてます依つて、な、早う歸つて來てよ。』
『ああ――』と返事はしたが、義雄の心には、音信不通になるなら、これが一番いい時機だと云ふ考へが往來してゐた。そしてその方がかの女將來の一轉化にも爲めにならう、と。
　然し窓のうちそとで向ひ合つてから、渠は右の手をかの女にさし延ばした。かの女は自分の左の方にゐる人々の樣子をじろりと見てから、目を下に向けて、そツと自分も右の手を出した。
『三ケ月素直に待つてゐられる女だらうか知らん』と疑ひながら、渠は握つた手を一つ振つてから、それを放した。そして、『あの八丁堀の家は、おれの云つた通り、きツとよすだらう、ね、加集に知れないやうに』と、念を押した。
『そんな心配は入らん！』
　この優しいやうな、また強いやうな反抗の言葉が、この二十二の女の誠意に出たのか、それともこちらをいつも通り頼りない所帶持ちあつかひにした意なのか、――孰れとも義雄の胸で取れたり、うち消されたりしてゐる間に、汽車出發の汽笛が鳴つた。

――（大正二年十一月）――

お仙

おやちは、大きな銀ぎせるの雁首を煙草盆の竹筒へ叩き付けながら、からだにも似合はない優しさを以つていつも病氣の樣子を聽いて吳れる。

けれども、お仙には、とん〳〵云ふきせるの音が枕もとに響いて、それを默つて忍ぶのが一番面倒くさかつた。

『よしやアがればいいのに！』とは、心で思つても、眼では努めて愛嬌を見せるやうにしてゐた。『どうも濟みません、何から何までこんなにお世話になつて――わたし、死んでも忘れません、わ。』

『なに、さ――なに、さ。心配するな』と、おやちはほく〳〵して、『安心してをつてもいいわ、や、病氣はすツかりおれの念力だけでも直るにきまつてらア、な。』

『ほんとに、ねえ、たとへ近い道ちやと申しても、小樽の往來を病院まで、毎日毎日、負ふて行つて戴くだけでも――』

『なアに、それでも、わけァないことちやが、な。』

『男たる親方を人に笑はせて――』
『なに、さ。おれもお前に惚れた以上は、そんなことア朝めし前ぢや。馬鹿な奴等は云ふてらア、な――あの博奕打ちやア、喧嘩にかけりてア小樽一ぢやが、あの女の爲めにやア猫のやうにおとなしくなつてると、なア。かうなつちやア、これも一つの意地ぢや、――おりやアきツとお前の病氣を直して見せる！』
『ありがたう御座います。』
『その代り』と、また聽きたくもないのに、『何ぢや――お前が直つたら、おれのかかアぢや。』
『………』お仙は、このぢぢイめ、こツちと同じ年恰好の娘さへあるのにと思ひながらも、おもて向きでは、指さきに絲だこの付いた手を出して、拜んで見せた。
かの女は寢ながら、何度も思ひ浮べたことをまた思ひ浮べてゐた。
自業自得だと云はば云へ、樺太へ流れ込んだそのそも〳〵から、この病氣はきざしてゐたのだ。どうせ漁師や鰊取りなどが相手だもの、碌なことないと思つた。が、稚内で藝者として失敗したあげくが、燒けツ腹の鼻のさきへ――實際、つい、鼻のさきへ見える――新らしい占領島が心を引いた。
『ええツ、遠ツ走りをしてやれ！』かう云ふ氣になつてあツちへ渡つたのだが、人の云ふやうに宗谷

海峽もさうおそろしいものではなかつた。

マオカへ上陸して、自分で自分の身を賣らうとしたが、もツと年が少いと――へん、今、ここで二十四ででも通つてゐるのに、――さう云つて、いい料理屋では百五十圓しきや出さうと云はなかつた。それも燒けで、こツちから斷わり、同じ價段を詰らない蕎麥屋で約束してしまつた。

『仙はわたしの名で、本姓は津田と申します』などとここのおやぢには出鱈目を云つて置いたが――蕎麥屋のお仙で、立派に税をも拂ひ、また立派な家の抱へ藝者とも競爭して、いつも負けを取つたことはなかつた。あれは鰊漁期の初めで、ラクマカの親方、クシュンナイの親方、トマリオロの親方などが皆、マオカに集り、今年の初會見をやつた時であつた――丸子、綾子、梅代など云ふ腕利きをもすべて自分は壓倒したではないか？

『あんたを抱へて置けばよかつた。』あの有明樓のおかみがいや味ツたらしく云つた。

『御緣がなかつたのでしよう、ねえ』と自分はわざと殘念さうな顏を見せてやつた。

『姉さん、姉さん』と云つて、皆が機嫌を取つて、お座敷をこツちへまかせた。

役割りを振る時でも、あの人はいやだ、この人ならなど云ふ好き嫌ひをうまく納めたのは自分で――それを皆納めて置いて、自分はさう云ふ奴等の旦那をすべてその一と晩に先づ受けてやつた。

『お仙にやア馬鹿にされた』と、その翌朝になつて、親方連は云つた。

『わたし達も、ねえ』と、仲間も顏を見合はせた。
『そんなことがあるものか』と、自分は知らない風をして、笑つてやつた。
おもな番屋の親方が同じやうに同じ病氣にかかつてると、漁の盛りに、諸方から人づてに聽いた時は、自分も病氣がおもい方になつてゐたが、氣が隨分せいせいして、その日だけは直つたも同樣に心が輕くなつてゐた。
『思ふ男に傳染されてこツちまでが棄てられたその種だ——萬人の男をこれでのろはんでは』と云ふ思ひが、少しでも、達したのであつた。
『さア、またおぶさる時間が來たぞ』と云ひながら、おやぢは枕もとにしやがんで、巖丈に太つた背中を向けた。
『この御恩は一生忘れません。』泣き聲を聽かせて、かの女は渠の背に這ひあがるのであつた。
『なアに』と、ふり向きもせず、『可愛い女房だと思へばこそ、なア——』
また、褥の中で同じことがかの女の思ひに繰り返された——困つたのは、その後、ぱつたり、藝以外のあがりがなくなつたことだ。
『お仙さんはこの社會の體面よごしぢや』と、若い子等が私かに云つてるのが、自分の耳にも這入つた。

『體面もくそもあるかい！』どいつも、こいつも、どうせ、しまひにやア、同じ穴のやうなところへ同じ治療をしに行くのだ。

そのうち、果して、綾子と云ふ子で、顏に於いては自分と競爭者であつたのが入院した。

あの院長も、碌でなしの藪醫者の癖に、檢黴をする權利があるのを威かしにして、藝者と娼妓とからして金や品物でない税を徴收してゐた。女房もあるのに、梅代を獨り占めにして――あの子も亦馬鹿であつた、あんな安ツぽい先生に獨占されてゐたのは！

『岡内さん、岡内さん！』などと云つてやれば、直ぐ助平ツつらをして見せて――ふん、あの、亭主は留萌で巡査をしてゐたが、詐僞で牢へ這入つてるとか云ふ子持ちの看護婦にも手をつけて――それに、まだ二三年前の占領當時、逃げ後れたロスケ夫婦が、食ひ物がなくなつて、夜、山からこツそり出て來て畑の物を盜んでゐたのを見つけそれを銃殺して葬つたのを、この岡内が聽き知つて、あばき出し、骨ばかりにして、札幌の農學校とか、どことかへ高い價段で賣り飛ばしたさうだ。

ああ、考へるだけでも、いやだ！　いやだ！　あんなところに、半歲でも、よく住み込んでゐられたものだ！

――蕎麥のいいにほひがして來た。――つる〳〵とうどんを吸ひ込むお客の助平ツつらが見える。

『わたしは給仕女ぢやアありませんよ』と云つて、自分は、藝者を呼ばうともしない見ず知らずの客

をおこらせたこともある。
　ほう〲の體でその人が逃げ歸つた跡で、『お前は』と、おかみさんがとぼけたふりで、『うちの商賣を邪魔しに來たのぢやないが、な。』
『わしもうどんの給仕をしに來たのぢやない！』
『では、もツとかせいで吳れりやえい……。』給仕には娘を出せばいいので――こツちは云はれないでも、かせぐつもりだが、呼び手がなくなつて來たのぢやアないか？
『不手腐れ藝者！』
『なんだ、おたんちん！　早く顏でも洗つて來やアがれ！』
　こんなことを云つて、每朝、よくそこの若い淫賣娘のお勝と睨み合つた。が、どこか拔けたやうな樣子をしてゐる而も自分よりは七つも八つも年したな子と爭つたとて、こツちがおとなげないばかりであつた。
　いら〲する氣を一時でも納めようとして、稚內(わつかない)で失敗したと同じ氣を再び起し、局に預けてある金を資本にして、八々に手を出した。
　土地の人々がこツちの味方であつた時は、まだしもよかつた――

有明樓の主人と旅館山本の主人と自分との三人が、ホンドマリの親かたやアラコイ第百七十九號とかの髯だらけの親かたの取り卷きであつた。

有明の主人は料理代と席料とを、山本の主人は親かたのやつて來る度每の泊り賃と茶代とを、自分はまたその時間だけのお座敷は貰はれるので、親かた連の爲めになるやうに、爲めになるやうにと仕向けた。

親かた連は、また、今年の不漁を見込んで、半分は燒け氣味に遊んだ。目ざす敵は丸一じるしの吳服屋であつた。その本店は京都にあつて、支店は函館にあつたと云ふ。自分も、思ひ出せば、その支店で物を買つたことがあるのだが、こツちから少しもそんな氣ぶりは見せなかつた。

『おい、お仙、をるか――直ぐやつて來いよ』と云ふぞんざいな口調の電話が、山本の主人からかかると、ひまな自分は直ぐ有明へかけ込んだ。三味線を彈くよりは、ずツと面倒はなかつた。

あの一番奧の室で、四人なり、五人なりが圓く並んで、四角い絹ぶとんの上で大きな勝負をした。一貫一圓がせり上つて、五圓になり、十圓になり、二十圓になり、また五十圓にもなつた。そしてこの五十圓になつた夜などには、吳服屋さんのあたまからぽツぽと湯氣が立ちあがるやうに見えた。

あまり可哀さうになつたので、自分はあの人に向ひ、

『もう往生おしなさいよ、丸一さん』と忠告がましく云つた。すると、山本の主人が叱り付けて、

戰爭中には、小樽から小さい漁船を漕いで、マオカより北の方面までも海賊を運んだこの船頭さんの、弱いくせに鼻息が荒いのを、自分は頼母しいやうな又いやなやうな目を以つて迎へた。

『お仙も、そんなこと云や、負かしてしまうぞ』と、有明の主人も云ひ添へた。

『負かして御覧なさいな、もと手のあるだけは、ね。』

『ぢやア、そのもと手をおれに貸せ』と、ホンドマリも透きのない顏をしてゐた。

その前日に、有明が思ひ切つたずるをして、ホンドマリに貳百四十五圓ばかりを勝たせた。有明がビキに當る札を一つ前へうつして置いて、中に當るホンドマリに雨入り四光を拵らへなどさせたのだ。相手に知れないやうに、ちよツとした符牒で示めし合ふなどのことは、あいつ等にありがちなので、自分も大體は知つてゐたが――

そしてそのお金はホンドマリへ渡るのではなく、有明樓の物になつた。と云ふのは、ホンドマリにいろんな散財費の拂ひ殘りがあつたからで――負けた丸一はその度毎に、現金の代はりに、有明樓主人宛の借金證文を書かせられた。

つぎの日もさうで――あまりに見兼ねた爲め、丸一さんにそれとなく『往生おしなさいよ』と云つたのが、一番も下りないで戰ふホンドマリにおそろしい顏で見詰められた。あの時ほど、皆の顏もお

そろしいほど眞劍であつたことはなかつた。丸一も前日のずるを少しは感づいたのかして、なか／＼油斷をしないで、目を見張つてゐたが、最初の景氣に引き引き換へて、とう／＼また負けつづけの體になり、總計六百參拾四圓ばかりの借金になつた。

丸一が、その妾のやうにしてゐたお多福藝者の丸子に注意せられて、多少は目がさめて來た頃には、自分もあの本職のやうに强慾な八々屋等に早や局の通ひ帳をゼロにされてゐた。

その後、黑い馬に乘つて、漁場へ歸つて行くホンドマリに途中で出會つたので、

『ひどい人よ、親かたは』と云つてやると、

『勝負ぢやから仕かたがないわや。』

にこ／＼してゐるだけが憎々しかつた。

お仙は病院に來て、手術を受けてゐる間にも、花で二度までも失敗したことを悔やまないではゐられなかつた――あんな失敗さへしなかつたら、こんな三ぴん野郎の背におぶさつて、病院入りをするやうな恥さらしはしないでもよかつたのである。

いろんなにほひの中から、ヨードのにほひだけが特別に鼻に付いて、もう飽き飽きして來た。

『こんなからだはどうなつても構はん』と、よくよく世の中がいやになることもある。けれども、本

人よりもこのおやぢの方が心配して、
『この分ぢやア、こいつの腰も近いうちに立つやうになりますか、な？』
『さうだ、ね』と、醫者は小首をかしげて、『もう近いうちにやア。』
『さう云ふて下さると、わたしも樂しみで、な――仙臺侯に對しても、わたしの體面が立つと云ふもので。』
『さうです、なア。』
『………』馬鹿な奴だと、かの女は私かに笑つた――自分は仙臺さんの落し子で、惡い男に引ツかかつて身を賣られ、などと月並みを並べたのだ。無論、樺太へまごついて行つたことなどはおくびにも出してないのである。
『さア、歸るのぢや。』
『どうも濟み――』と、同じとこを同じ氣持ちで口に出さうとすると、もう馬鹿馬鹿しいやうで――あくびが出さうなのをかみ締めて、おやぢの背中におぶさつた。が、渠の首すぢのあたりの垢くさいのが如何にも氣になつて、氣になつて、――鼻さきを左りか右の方へ向けて、背につツ伏しながら、小樽の有名な石ころの、でこぼこ道を見て通つた。
雨の降つた翌日などは、それが而もひどいぬかるみになつて、なか〳〵繁華な往來に人力や荷車の

立ち往生してゐることが何度も見られた。

　その間を――いやなことには――おやぢは得意さうに歩くのだが、時には、足駄を引ツくり返して、泥の中へ足をつツ込んでしまつたこともある。

『畜生！』かう叫んで、よろけながら、泥まみれになつた足を以つて泥まみれの下駄を泥の中に探した。

『親かた、えらう御苦勞だ、なア』と、立ちどまつて、同情でもありげに見てゐる人に向つて、おやぢは直ぐまたお說教をした。

『あの、田中の主人め、一等旅館などと看板を出して置きやアがつて、とまつた客の病氣も世話しやがらん！　たツた五日や七日の間を、ただ喰はれるのがいやさに、人間一匹を虐待して、なア。』

『そりやさうぢや――親かたがゐなかつたら、一人の女の爲めに小樽が一體に北海道中の笑ひ物になつたかも知れやせん。』

『さうとも！』かう云つて、おやぢはおのれの男氣を出したのを自慢さうに吹聽した。

　ぬかつた足を足駄のおもてからすべらさないやうにひよこり〳〵と踏みしめて歩く様子を、默つて、冷笑して過ぎる人々もあつた。

　時には、おやぢよりもうは手のものらしい人に呼びとめられ、

『直さん、えらういい女を手に入れたぢやないか』などと云はれた。
『うん』と、おやぢはそッちの方に向いて、さも嬉しさうな聲で、『仙臺侯の落し子で、なア――おれが義俠心を以つて助けてやつてるのぢや。』
『そりや結構なことぢや。』
『小樽の體面にも關するから、なア。』
そんな時は、お仙はいつも目をつぶつてゐた。
褥に返ると、矢ツ張り、北の方が恨まれてならない――毎年例のやうになつてると云ふ樺太廳何々部長の巡回が二人もあつて、二度も歡迎會が開かれたあとが八月半ばとなると、もう、鰊は取れず、秋鯵の收穫も許されなくなるので、段々と建て網の親かた連は引きあげて來た。雜漁者どもも引きあげて來た。鑵詰めの製造家等も引きあげて來た。
この時期を外せば、越年用意のものばかりになり、もう、火の消えるやうに樺太一體が寂しくなると云ふのであつた。そして北海道にもないほどの雪が――氷が――おう、いやだと思はれた。たださへ寒けと痛さとをこらへてゐる自分は、これを聽くだけでも身の毛がよだつた。
いろんなお座敷でする親方連の話に據ると、
『おれは五萬兩の仕事をして來た』と自慢したものもある。

『日本領の方で四萬圓、露領の分が三萬圓、先づざッと七萬兩の純益だわや』と見つもつたものもある。

それは、然し、いづれも、番屋〱の鹽倉へ——一度見て來たことがあるが——人足の土足で踏み付けながら吐いたつば雜りの鹽に積み重ねた鱒と秋鯵や、この夏どし〱取れた鰊の一度べた一面に、濱の砂に乾したのをしまつてあるのに對する見積りだ。それを、もう現金がわがふところへ這入つたやうなおほきな氣になつて、この年の別れだと云つて、飲むは——騷ぐは——よく喰ふは！

『然し、なんだらう、な』と、西海岸漁業組合事務員の一人が、或席で、まだ素がほであつた時に、その相手の客に語つてゐた、『今年の不漁は殊にひどかつたから恐らく本當に儲けたものはあるまい。若しあるとすりや、アンベッかトマリオロか、なア。』

この男は人のふる舞ひ酒にあり付くことばかり考へてゐて、醉ふと、亂暴をする奴であつた。郵便局長と山本旅館で玉突きをして、おのれが負けたと云つて怒り出し、玉を以つて局長の額をぶッ裂いた。自分はその仲へ這入つて飛ばッちりを喰つたやうなわけであつたが、それには臆しもしないで、腕によりをかけてゐるつもりであつた。

が、ほかの子に比べては、思ふやうな實入りもなく、『あんな梅毒藝者なんぞ』と、正面から冷かされもして、儲けたものは矢ッ張り、皆八々ですつてしまつた。

『えゝツ、かまうもんか！　雪が降つて、凍つて、マオカの海べを十丁でも、二十丁でも、固めた時、その海の氷の上に仰向けの大の字になつて死んでやる！』

からも決心して見た。

あす、北の方から、最後の引き上げ人をまとめながら、大禮丸がやつて來ると云ふその晩であつた――うちの向ふ側の小料理屋へ、トマリオロの福井さんが這入つたと聽いて、こいつア逃がすものかと覺悟した。そして電話をかけて、

『親方』と、そのまだ三十代の若盛りの顏を思ひ浮べながら、『お仙ですが、ね、うちへも來て下さいますか？』

『いやだい！』

『どうして、さ？』

『またお前のが――』

『およしなさい』と、そのあとは云はせないで、『ぢやア、ね、まゐりますよ。』

『勝手にしろ！　おい〳〵、何期だ、何期だ？』

『知りませんよ、そんなこと！　ぢやア、ね――』もう切れてゐた。

髮は櫛巻きのまま行つて見ると、『もう三ケ所目ぢや』と云ふでツぷりと太つたその人がいい色に醉

ひを顔へ出して、清香さんを前に引きすゑて、

『どうだ、おれにこの子を世話しないか？』

『ええ〳〵、お安いことです、わ、ねえ』と云ひながら、こちらはその子のそばに坐わつた。が、その子は迷惑さうな顔をしてゐた。

時間は十二時近かつた。

こちらは、どうせ今夜は福井さんを自分の物にしてやらうと云ふ考へがあつたので、清香の樣子を却つてこツちには幸ひだと見て、暫らく何つかずの話をしてゐると、果してその子の貰ひがかかつた。

福井さんは、ぼんやりして、段のおり口の方ばかり見て、

『逃げて行つたぢやないか？』

『…………』こちらは清香の行つてしまつたのを聽き澄ましてから、『あんな子なんかどうでもいいぢやないか、ね？』かう云つて、親方の方へ膝を詰め寄せ、口で笑つて、目で睨み付け、

『さう二三ケ所もほつき歩いて、わたしをどこへも呼んで吳れなかつたの？』

『…………』締りのなくなつた顔をただにこ〳〵させて、こちらの手を取らうとしたのを、こちらはわざと兩手を引ツ込めて、

『どうせ、こないだから來てゐたんだらうに、ねえ、この人は！』

『いいぢやないか』と云つて、また手を出した。
『薄情もの！』ぱちりと、思ふさまその手をぶつてやつた。
『痛い！』
『ほ、ほ』と、こちらも笑ひに砕けて、『ほんとに、なぜ呼んで吳れなかつたのよ！』
『でも、なア』と、兩手でこちらの兩手を取つて引ッ張りながら、『お前にやア、ひどい目に會つたよ。』
『何が、さ？』
『とぼけるな――クシュンナイも、ナヤシも』と、段々北の方の番屋を引き出して、『やられたさうだぜ。』
『うそだよ！』
『うそなもんか？』
『そして、もう、直つたの？』
『うん――まだそんなことでへこたれるおれぢやない、さ。』
いつのまにか、兩方から兩の手を引ッ張りッこして前の方へ傾いたり、また後ろの方へ傾いたりして――二人の膝はひとりでに突き合つてゐた。
『歌ひましようか？』

『もう、いやだ！』

『では、もツとお飮みよ。』

『おい、お仙』と、こちらをゆすつて、『いいのを周旋して呉れ。』

『周旋してあげますとも！』

『ぢやア、もツと飮まう』と云ひ出した。

手をたたいてお銚子を催促してから、ふと、こちらはこの人を、あす、見送りがてら、この島を逃げてしまはうと思ひ付いた。が、そんな氣色は見せないで、一番のろ馬のぽん太をおツ付けてやらうと考へ、それを呼んでやれと勸めた。

が、聽かれなかつた。と云ふのは、親方の若い番頭があまり生眞面目で、酒さへ碌に飮めないので、今夜ぽん太に懸賞をかけて、ぽん太が番頭に一と晩抱かれたら、百圓やらうときめたのであつた。

その結果は翌日船の上で聽いたのだが、あのぽん太は玉突きやら、お汁粉屋やら、番頭さんの行きさうなところを方々と夜中まで探してまわり、もう、てツきり、宿の敷島屋で寢てゐると思つた。その宿の裏木戸から這入り、いつもわざと明くやうにしてある一方の雨戸を明け、緣づたひに第十七番と思ふ室に這ひ込んだ。

『何をしやがる』と、やみ雲におこつて起きあがつた人は、違つたお客で、どろ棒と思つたのであつ

た。

十七番と十六番とを取り違へたので——而も肝腎の人は、その晩、よそへ行つてたのだ。

こちらは、然し、醉ひつぶれた親方をうちへ連れ込んで、明け船の丸子をあしらつてやつた。——山本旅館で丸一じるしが待ちぼけを喰つた顏が見たかつた。

『親かたにわざ／＼とまつて貰つたお禮に、けふは、わたしがうちを代表して見送りして來ます』と云つて家を出た。

あすこへ來てから出來たものは、うちや有明に對する借金と不愉快な氣分とだけであつて、こツそり持つて去りたいやうなものはなかつた。それでも、身に着けられるだけの物は殘して置いてやらなかつた。せめて髮でも結ふてとは思つたが、段々地が薄くなつて來たのを人並みに結ふのも業腹なので、やめた。

午前八時から九時の間で、可なりガスが籠めてゐて——支廳通りを自分が海岸通りへ出る時、自分とあの丸子とは兩方から出しぬけのやうに出會つた。

『幽靈のやうに見えて來た、わ。』

『わたしも』と、こちらは向ふの澄まし方が癪にさわつたけれども、これツ切りだと思ふのでさうは

見せないで答へた、『さう思つた、わ。』

はと場には、行く人と見送りとの人數が隨分多く集つた。そのうちで、奥島の親方の見送りが一番景氣がよかつた。あの人は、アイノ仲間に威勢を見せる爲めだと云つて、昔から顏中に長いひげを生やしてるのださうだが、あご髯などは坐わると膝に達してゐる。番屋がマオカに一番近いアラコイにあるので、漁期中でも、ちよく／＼遊びに出て來た。

有明樓は別にはしけを仕立てて毛布を敷き詰め、主人とおかみと抱への子どもすべてと、明け船の抱へ四名とそのおかみと、山本旅館の主人と、當の親方とを乘せた。おもな人々は、どいつも、こいつも、博奕打ちだから、證據さへあれば一と網に出來たのに！

憎々しいほど勇み立つて、三味や太鼓で海の上をどんちやん、どんちやん賑はせた。

こちらは、どうせ、この島を足蹴にして行くのだから、成るべく人目に立たないやうにして、酒くさい福井の親方の蔭になつて、親方と一緒の船に乘つたのであつた。

『えらい景氣ぢや、なア』と、福井の親方は、然し、向ふのに乘ればよかつたと云ふ樣子をした。

『何が嬉しいのだ、馬鹿々々しい！』から云つて、こちらは、この親方のそばで、他のいろんな乘り合ひ客の方を返り見て、會釋した。

『ほんとに、なア、こツちやアこれから板子一枚の心配ぢやのに。』

『あいつらア騒ぎ足りないので、水の上でまでじたばたしやアがる。』

こんなことを云ひ合つてゐるものもあつた。これは地味な商人と鑵詰屋でもありさうな人であつた。こちらは船には平氣だが、ガスを通して紅色に照らして來る太陽の薄びかりにも目まひがしさうで――餘ほどからだが惡いのをこれまで辛抱してゐたのだと分つた。

そのうち、向ふの船がこちらの船から十四五間も離れたかと思ふと、ガスの中へ見えなくなつた。そして三味や太鼓の音ばかりがわざとらしく賑やかに聽える。

お坐敷を退け物にせられて、何だか――から――自分ばかりが薄ぐらい――獨りぼッちの――下坐敷に考へ込んでゐた時のやうな氣になつた。そして自分の乘つてる船だけが、氣おもく浪の底へ沈んで行くやうだ。

荷たりのやうに幅廣く窪んだ大きな船を七人も八人もの船頭さんが漕いでゐるのだが、行くさきに木船も見えず後ろの方に山も陸も見えない中を一向に前へ進んでるとは思はれないほどだ。

一人の音頭取りがエヤホー、ホラホー、ホラヘー、ヘヤホー、ヘヤヘーなどと音にいろんな高低をつけて繰り返すと、他の船頭さんは皆揃つてエンヤラヘーと唱へる。

エヤホーー

エンヤラヘーー

ホラホー！

　エンヤラヘー！

ホラヘー！

　エンヤラヘー！

ヘヤホー！

　エンヤラヘー！

ヘヤヘー！

　エンヤラヘー！

聽いてゐると、それに引ツ込まれて心丈夫なやうだが、いづれその聲ともろ共にすツかり――どうしても――沈んで行くのだとしきやおぼえられなかつた。

本船へ着くと、直ぐこツそり甲板へあがつて、二等室の明きへ隱れて一と安心したものの、あれだけ多かつた見送り人のうちから、ただの一人も自分を數へて見て吳れるものがないのか知らんと、がツかりもした。

が、船の中の騷ぎが少し落ち付いた時、海の上から徒らに誰れかが三味を無器用にじやん／＼鳴ら

せ、誰れかが太鼓を無器用にどん〱叩くと、『わは、は、は』と云ふ大勢の笑ひが聽えたので、窓か
らそッとのぞいて見ようとして、いきなりガラスに額をぶち付けた。むッと自分で自分が癪にさわつた勢ひで、窓の丸い蓋を明けてから云つてやつた、

『二枚鑑札の樺太藝者ども！　こッちの足蹴にした土でも甞めてゐろ！』

けれども、間拔けな奴らは皆氣が付かなかつたらしい。

その時、もう、ガスは晴れ氣味になつてゐた。

びッびイと汽笛が勇ましく鳴つて、船の底からことこと、こと〱動き初めた。

さア、占めたと室を出て、一等室の並んでゐるところへ行き、『福井樣』と表札を打つたドアをこつこつと叩いた。そして返事を待たないで、ドアを明けると、

『お！』びツくりした顏を向けて、『船が出たぜ。』

『知れたこと、さ。』

『ふ、ふん』と、安心したやうににこ付き出して、

『逃げやがつた、な。』

『………』こちらも笑ひながら、親方が洋服を脫いで、不斷着に着かへてゐるそのそばのシイトへ、
俄かに痛みをおぼえるやうになつた腰をおろし、顏をしがめてその痛みをこらへ、『つれてッてお吳れ

よ。』

『ひどい奴ぢや、なア。』

『………』こちらは多分借金を踏み倒してと云ふ心だらうと考へたので、『うちのはたツた五十圓、さ――有明樓のなんか、お花を引いた負けだ。』

『その上に、おれに船賃を持たす氣だらう。』

『その位は盡してもいいぢやないか、ね――ゆふべも、好きなのを取り持つて貰つて、さ？』

『うん――あいつア、な――』締りのないほど呑氣な顔をして、親方は、こちらの思つた通り、果して男の喜ぶ通りになる丸子ののろけを云つた。番屋の親方連中では、いいおほやうな人で、こちらは一番好きな人であつた。

一等室は隣りに湯殿が付いてゐた。親方がぢかに衣物を引ツかけて、そこへ行かうとした時、

『わたしも行くの』と聽いて見たら、

『もう眞ツ平ぢや』と手を合はせる眞似をした。

この人に相ひ手にされないやうでは、こちらも、もう、駄目だとあきらめた。

湯を出て、一しほ寛濶なすがたになつた人は、そのそばにかけたこちらの手を引き寄せて、酒臭い息を横から吹きかけながら、たわいもないことを云つてゐた。

そこへ、どこの馬の骨か分らないやうな男が、——どうせ三等客だと見えた——ヒヤ酒を半分ばかり置いて行つた。一緒に飲む氣であつたのが、こちらがゐたので遠慮したらしい。仲のいい眞似をしてゐさへすりやア直ぐわけがあるものと思ふ野暮漢だらう。

『あいつ、おれから資本を引き出さうとしてやがるのぢや。』

『さう——』かう、こちらはわざと白ばツくれて、『そんな詰らないお金がありやアわたしの功德におしよ。』

『さう、さ——この梅毒お仙にやるよ。』

『ぢやア、頂戴』と、兩手を上向きに重ねて、あとは目で物を云はせた。

けれども、親かたが話に飽いて、こちらの肩に手をかけたまゝふな壁にもたれ、ぐう〳〵いびきをかいてゐた時には、こちらは今しがた來た男でもいいから話し相ひ手にやつて來ればいいのにと思はれた。

上陸すると、その足で福井さんとアラコイの親方とは札幌へ行き、三日間つゞけて東京相撲を見ようと云ふ約束が出來てゐた。そしてそれが濟むと、二人とも函館へ歸るのであつた。

お仙はさう云ふ人々と小樽のはと場で別れてから、自分としては取り敢へず一等旅館の田中へ宿を

取つた。

手にあるものと云つては、福井さんに別れる時に貰つた五圓札一枚ばかりで――たツたこれだけで、自分はわれながらどうする氣だらうと考へ込んでしまつた。

出鱈目に宿帳へ自分も直ぐ忘れてしまつたやうな住所、姓名、用向きを書きつけたあとで、そのまま黑檀の机に向つて、備へつけの卷き紙へ、いつのまにか『福井樣』、『福井さま』、『ふくゐ樣』、『ふくゐさま』などと書き投つてゐた。

あすは、札幌へ行き、今一度あの人に會つて、身のふり方を本氣で相談して見ようかとも考へた。が、積り積つた氣の張りが、殊に、船に乘る前晩から、碌々眠りもしなかつたので、一時にゆるんで來て、腰のあたりの痛さが俄かにこたへられないやうになつた。

『惡どい病氣め！　年中つき纒つてゐて――勝手にしやアがれ！』人ごとのやうに叱り附けた。

晝御飯に向つて見たが、ちよツと手を附けただけで――ふと、キスキを一本あけて貰ふ氣になつた。

給仕の女中を相ひ手によも山の話をしながら、いい心持ちに醉つたと思ふと、それつ切り腰が立たなくなつた。

初めはキスキの爲めだと見えたので、女中に助けられて便所に行き、それからぐツすり寢込んでし

まつた。そして夜中になつて目をさました時は、醫者や注射の大さわぎであつた。

『ヰスキの爲めなんて、そんな簡單なものではない――梅毒が、もう、餘ほど進んで來た』と、醫者は云つた。

今の、おやぢが尋ねて來たのは、それから一週間目で――

『わしはこの小樽では知られた俠客ぢやが、旅びとの大病人を宿屋で虐待すると云ふ新聞を見たので、やつて來た。どうぢや――このわしの義俠心に免じてあんたのからだをまかせて呉れるか、な?』

から出しぬけに出られては、いかなお仙も面喰らはないわけに行かなかつた。見ず知らずの他人に一夜をまかせるのは、金づくのことだから、まだしも遠慮も心配も入らない。が、金を離れてのからだの取り引きは、まだしたおぼえがなかつた。

『さア――』と、長い間考へてゐたが、向ふがわざ〳〵やつて來た顏を立てさせて呉れろと、しつこく云ふので、『どうせこんな腐つたからだです――そんなら燒くなり、棄てるなり、御勝手にして戴きましよう。』

『安心しなされ――ぢやア、わしがあんたをあづかつた。』

かうしてこの家へつれて來られ、毎日病院へ背負はれて行くやうになつた。その最初のうちは、如何にも氣の毒で、その親切の如何にも至つてゐるのを神か佛かとまで嬉しかつた。そしてこの人の爲

めには、もうこの自分の一生をもまかせてしまはうとまで決心して見た。
けれども、やがて、人前でその『義俠心、義俠心』と云ふのが、ヨードホルムと同じやうに、鼻に付くやうになつて――そんなら、それで、人のゐないところでも面倒くさい取り引きを持ち出さなければいいのだ、『病氣が直つたら、おれの女房になつて吳れ』などと。
かみさんは無論ゐないのだ。が、その大きな娘がおやぢを馬鹿にして、半ば燒き持ちらしく笑つてゐる樣子もいやになつてしまうし、おやぢがまた博奕に負けたとかで時々おほ喧嘩をして、自慢さうに歸つて來るのも、氣が利かない男立てだと思はれた。

いつのまにか亭主氣取りで、おれと云ひ、お前と云つて――
『わしも女房が出來りやア』と、おんなじことを何遍もがお仙にはうるさくなつた、『娘の肩も輕くならうし、なア――まア、お前も近頃のやうにいいやうぢやアあり難い。』
『この分では』と、かの女は仰向けのままにツこりして、『もう、直るのに間も御座いますまい。』
『おれの念力が屆いたのぢや、なア、お米。』
『年よりの念力では、どうぢやか、な』と、娘は取り合はないで、臺どころ仕事を急いでゐた。
お仙が獨り目をさまして、少しのんびりした氣持ちで部屋中を見まわせるやうになつた時、

『なんて、きたならしい暮しをしてるんだらう』と思はれた。マオカでさへ電燈が引けるのに、今どき薄ぼんやりのランプを用ゐて、而もそのあかりで、おやぢのあか染みたシャツや股引きが壁にかかつてるのが見える。『これぢやア、たとへわたしが承知しても、わたしの顏が承知しない。』

函館へ！　函館へ！

から云ふ反逆心がむく／＼と持ちあがつて來たのはこの家に二ケ月半も寢飽きた頃であつた。

自分は出の衣物の裾をはしよつて、鐵道みちを懸命にかけてゐる。ナラやカシワの紅葉したのが、道の兩がはに、どこまでも遠く見渡たされた。

紫で形を置いた縮緬の蹴出しが、どうも、足にまとひ付いて仕かたがない。

鐵橋を渡りかけると、後ろから、黑い烟を吐いて汽車が追ッかけて來た。

『あれい』と叫んで、ふり返つて見ると、眞ツさきの汽關車だと思つたのは、人間の顏で、十勝一等の口利きであつた。

『逃げるなら、お前の腕一本と脛一本とを、置いて行け！』

『わたしぢやありませんが、ね』と、自分はうツて變つたやうにくつろいだ返事を出した。

『お前でなけりや誰れだい、おれに三百兩で受け出されたのア？』

『ふ、ふ、ふ、ふッ』と笑つた聲で目がさめると、自分はお米の隣りで寢てゐるのであつた。そして十勝は帶廣の末廣屋に住み込んでゐた時朋輩であつた、あの吉松さんのことを夢見てゐたのだと分つた。

『藥り代ぢやア藝者は受け出されないぞ！』から云ふつもりで、お仙もこの頃逃げる時機が來るのを待つてゐるやうになつた。そしてちよツとあたまを持ちあげてお米のまた隣りにすや〳〵寢てゐるおやぢを見て、『あんな間拔けづらをして、よくも、まア、このわたしを女房にしようなんて！』

『大分重たくなつたぜ――もう、占めたもんぢや。』から云つて、女を背中に運ぶおやぢの眞から嬉しさうな樣子が、お仙には却つて『馬鹿な男だ』とあざけられた。

『まだ、どうも――まだ、どうも』と云ひ云ひ、かの女は逃げ出す時機を見てゐたのだが、或夜、簞笥の小ひらきが明いたまゝになつてゐたのに氣が付いた。

お米が締め忘れたにはきまつてゐるが、あの中に這入つたのも、きのふ、徹夜したと云ふ勝負に、けさ、おやぢが勝ち誇つて持つて來た金だ。今夜もまた勝つ積りでおやぢが出て行つたのを幸ひ、『御免

を被つてやれ』と、そツと起き出でて探して見ると、たッた參拾貳圓と五十錢とが、札と銀貨とで這入つてゐた。

この二三日、わざと病院行きの衣物のまゝ、寒いからと云つて寢てゐたので、黑縮緬の羽織りだけを引ッかけるだけの手間であつた。

盗んだものをそッくり帶にはさみ、お米の仰向いて口をあけた顏に、うへからそッと『あばよ』と云つて、外へ出た。

自分では餘ほど落ち付いてゐたつもりだが、ぼたぼたと雪が降つてる向ふから、から車の來たのを見て呼びとめ、まだ函館行きの汽車はあるだらうと聽くのを、つい『福井行き』と云ひ違へて、車屋をあやしませた。

——(大正二年十一月)——

トンネル狂

夏期休暇の時節を以つて、よく、官吏は官費若しくは公費で旅行するものだ。僕のやうな特別傭ひの身分でも、上官のおぼえがよかつたのだらう、やつてゐる警察部英語敎師の職に關する取り調べを名として、――その時分にだが、――一週間ばかりの保養旅行を許された。

京都の七條ステーションを立つて、先づ名古屋へ向つた。そして名古屋で、その到着日の午後を縣廳で送つてから、友人なる耶蘇敎傳道師を訪問し、その家にとまつた。

その翌日、汽車で米原まで引ツ返し、そこで北陸線に乘り換へて、金澤に向ふのであつた。暑い日で、洋服の下着は汗だらけになつてゐるやうにおぼえられた。

三等客車に這入ると、直ぐ出發の汽笛が鳴つたやうなさわぎであつた。僕は僅かに坐席を得たばかりで、何よりもさきに扇子を使つた。が、膝の上に氣が付くと、われながらをかしいやうに――持てあましてゐたのは、東海道線に乘つてた間に買つて、一つか二つかを試みたあとは喰ひ殘した饅頭の包みであつた。

『誰れかにやつてしまはう。』斯う考へても、まだ暑い方にばかり氣が取られてゐるうちに、汽車は長濱を過ぎ、また姉川の鐵橋をも渡つた。

僕の前がはに一組の夫婦がゐて、その三四歳らしい男の子は、目まぐるしいほどに動きまわり、母の手から父の手へ、また父の手から母の手へ、いく度もいく度も渡り歩いてるのだ。

僕はその子がその母の膝へ一時落ち付いたところを見て、皮包みを包み直し、微笑しながら、

『あげましよう』と、その子にさし出した。

子はその母の顔を見あげた。母はまたその所天のけしきを伺つた。そして僕はまた一旦見せた微笑を引ツ込めにくいやうになつた。

『………』男はその濃くて長いうは鬚を撫でながら、何だか毒でもあるか分らないと云ふやうな顔つきをして、おも〳〵しく云つた、『いや、よろしいです。』

『………』僕は、この時、さし出してゐた物を、一つ横仕切りを越えた方から欲しさうに見てゐた子に向けた。『ぢやア、あなたにあげましよう。』

『それはありがたう』と、その子の父が僕から受けて子に渡した。

もとの子は憤つたやうにその母をぶつた。そして自分にも何か與れろとねだつたので、女は袂から煎餅を出して與へた。

『却つて失禮致しました。』

『いえ――』女は挨拶に困つたやうに下を向いた。そしてその僅かに惜しんで出したやうな聲には、どことなく、胸にあまる思ひでもあるらしい餘韻を引いた。

僕がそれで思ひ出したのは、或時、或人の細君がその所天のことを、あはれツぽく僕に訴へたことだ。あの時、僕が手を出せば、きツとかの女は僕に落ちたのであらうと云ふことが考へられるほど、今では、僕もずう〳〵しくなつてゐた。

それとなく、女の横がほを見ると、二十四五と見える肥えて色は白いが、眼の据ゑかたが全體を、どうしても、憂ひがほに見せてゐる。

僕はかの女をどこまでかの話し相手にしようと思つた。が、うは鬚の男は、頻りにその鬚を撫でながら、僕の方を見詰めた。見詰めたと云つても、無論、つづけざまにではない。眼を轉じては自分の妻を熟視し、また轉じては窓か外を眺め、それから再び僕の顏に返るのだ。いかめしい顏つきをして向ふので、三度に一度は、僕もわざとこわい顏をして渠に無言の返禮をした。

『暑いです、ね』と、僕は女に云つた。

『はア――』ちよツとうは目にこちらを見たが、直ぐまた下を向いだ。子供が車内の仕切りにつかまつて、僕から云へば、正面の方の幾仕切りかに這入つてる多くのにぎやかな人々を見てゐるのを抱い

面に見えた。かの女はその度毎に、無言で、膝を整へた。

高月に停車した時、男はふと思ひ出したやうに革鞄をあけ、一冊の革表紙の金ぶち書を出し、口を動かしながら、默讀し初めた。

渠がその書に向つてからの謹嚴な樣子で、僕には、中を見ないでも、耶蘇教の聖書であることが分つた。

『どこまでお乘りですか？』

『金澤まで――』女の聲も樣子も、今度は、豫期したよりもうち解けてゐた。

『わたくしも金澤へ行きますが――』

『……』かの女は、賴母しく思つたのか、ちよツとその顏に光を見せた。

『何ですか――キリスト教に關しての御旅行ですか？』

『えゝ。』

『何派でいらツしやいます？』

『メソヂスト。』

この時は、もう、下を向いて返事してゐた。

『メソヂストと云つても、派によれば、わたくしにも知り合の人々がありますが――』

『……………』女は返事がなかつた。

『エスキリストはまことに有り難いお方で――』と、男はおもむろに語り出した。多分、僕に向つて云つてるのだらうと思はれた。『わたくしどもの願ひを――すべて聽き入れ給ひまして、――わたくしどもは今回――また――金澤の、信仰上の故郷に歸ります。』

女は横を向いてゐる。

『それは結構です、ね』と、僕は微笑して見た。あたりの人々は、默つてたものも、話し合つてたものも、一切に僕等の方に注意した。

僕も、その數年前までなら、公衆の前で熱心に耶蘇敎を說明するのを憚らなかつたものだが、この信仰を脫してからは、實は、傳道師を見るのさへ馬鹿々々しい感じがするのだ。そこへ持つて來て、この男は誰れに物を云つてるのか分らなかつた。僕の方へは向いてるが、對話か獨語かどツちとも分らないやうな低い口調で、而もうは目をして語つてるのだ。

『わたくしは神さまの味方となつて、熱心に信仰を說きました。石井よし子と云ふ婦人と共に、熱心に神さまの爲めに傳道をしました。然し敎會の會員はみな惡魔のわなに落ちてしまつて、わたくしどもの云ふことが分りません。わたくしどもが神さまのお引き合せで、信仰の爲めに夫婦になつたのを

たくしどもは形勢を見てをりました。石井よし子さんは熱心な婦人で、その婦人の祈禱に神さまのおしるしがあつて、再び金澤へ歸ることになり、けふ出發して來ました。よし子さんは誠に親切な人です。二人は今度歸りましたら、直ぐ敎會から反對者どもを放逐して、眞の敎會に建て直します。』

僕は、もう、渠を相手にしてゐなかつた。が、ちよッと思ひ當りが出來たので、それを聽いて見ようと、女の樣子をうかがつてゐた。

かの女がこちらを見たのをしほに、

『あなたがたは濱松からお乘りになつたのですか？』

『えゝ。』不思議さうにかの女がこちらを見直したので、僕もさう性急に聽くのではなかつたと思つた。

ゆふべ、名吉屋の友人のところで、友人は語つた。今夜濱松で送別會があるので行く筈であつたが、行かないでよかつたと。これは僕が出しぬけに行つたことを歡迎する言葉であつたのだが、その送別會の目あてはこの夫婦の爲めであつたらしい。その數年前に、金澤耶蘇敎徒の一部に一種のリヷイバルが起つた時、一番熱心な主導者であつた傳道師の、柳井直次郎と云ふ人がその熱心と戀愛との混亂の爲めに氣違ひになつた。そして敎會を追ひ出されたが、その敎會員や他の特志家連の寄附金で、濱松に靜養してゐたところ、近頃多少人並みになつたので、同所を引き上げさせて、もとの敎會の小使

ひにすることになつたと云ふことであつた。

　その柳井とはこの男に相違ないと思ふと、僕は一層馬鹿々々しくなると同時に、細君の胸のうちが最も氣の毒になつた。沈みがちに見えたのも最もだ、男が人に物を云ひ出すとかの女が横を向くのもそれが爲めだと。

　氣が付くと、かの女の腹も大きいやうだ。そして立つてるいたづらッ兒はかの女の膝と膝とを、矢ッ張り、度々割つてゐる。そしてまた子がかの女の頰に接吻して行く時などは、かの女の下の方は兎角おろそかになる。

　さきに生れた子は熱心家の種であつただらうが、今度生れようとしてゐるのは氣違ひの兒ではないか？

　柳井氏なる人が自分の妻を石井よし子さんと呼ぶのは、まだ籍が這入つてゐないのか、それとも以前からの習慣をつゞけた尊敬のしるしか、どちらとも分らないが、僕もかの女を石井よし子——而も孃——に返して考へたくなつた。

　僕は、初めは、少なからず男の方に遠慮してゐたが、もう、その心配はなくなつたやうな氣で、

『金澤までは、では、御一緒に行けます、ね。』

話して行くうちに、木の本、中の郷を過ぎて、柳ケ瀬トンネルに入つた。その第一洞を通り抜けると、男はぼんやりと口をあいてからだを傾むけ、目を以つて過ぎた方を追つた。

　そのうちに、第二洞に入り、また第三洞を過ぎた。渠は坐を立つて、左右の各々一つの窓を締めた。そして第四洞を出ると、また立つて、からだを後ろの仕切りの上に乗り出させ、手を延ばして、左右兩方で四つの窓を締めた。その時、渠は自分の手や袖が人のあたまに觸れようが、肩に當らうが、そんなことは少しも返り見なかつた。が、渠の威嚴らしい顔つきと無遠慮の態度とに恐れを懐いたと見え、皆はただ默してゐた。

『暑い、暑い』と叫んで、然し、わざとらしく扇子をぱた〳〵させたものがある。

『トンネルは暫らく來ません！』はツきりと云つて、商人風のかた肌ぬぎがそのそばの窓を一つあけた。

　男はその方を――と云つても、あいた窓を――ジツと見詰めてゐたが、やがて、顔には似合はないぬるい聲で、

『トンネルが來ます。』

『…………』誰れも應じなかつた。が、また一つの窓をあけた者がある。

『トンネルが來ます。』

『……』また、一つの窓があいた。

疋田を過ぎて、敦賀に停車した頃は、燒き付けられるやうな暑さなので、方々で暑い〳〵と云ふ聲がするし、あッちでもこッちでも扇子を使ふ音が烈しく響いた。脛をまくつて腰かけに坐わるものもある。兩はだをぬいで煙草を吹くものもある。そして仕切りを二つ三つ隔てた一群の旅商人らしいもの等まで、頻りに僕等の方をふり向きふり向きしてゐた。

僕の目は、然し、兎角、例の子供の足の立場に行つたので、時々、女の裾の方から赤い縮緬の切れが出るのを見たが、かの女も暑さに惱んでゐて、そんなことに氣が付かない時もあつた。僕はそれを見て見ないふりをしながら、かの女と耶蘇教社會の人々の名を擧げて語り合ひ、どこからかかの女等の生活の內容を少しでも引き出して見ようとしたが、かの女はさう云ふ方面には少しも返事をしなかつた。

それに、まさか、もとの傳道師がもとの教會へ小使をしに歸るとは、見知らない僕には、云へなかつたらう。

汽車が敦賀を發して、昔、新田義貞の立て籠つたと云はれる山々のつゞきにかかると、いよ〳〵また金ケ崎トンネルだ。

『よろしいでは御座いませんか』と、女は低い聲で訴へるやうにとめたが、渠は耳にもかけなかつたらしい。

『トンネルが來ます。』斯う一心になつて、自分の背に當つてゐた仕切りを跨ぎ越えて行つた。

かの女は見ぬ振りになつて、かの父につれて、つツ立つて、

『トンネル――トンネル』と、おもしろさうに云つてる子を、膝の上に引きおろして、身持ちで廣がり氣味になつてる胸のあたりにしツかりと抱き締めた。そして伏し目がちに涙を浮べたその樣子を見て、僕もほろりとなりかけたので、目を横にそらせた。

十一ケ所のトンネルのうち、山中トンネルの如きは、通過するに少くとも五六分時はかかつた。

『トンネルが來ます。トンネルが來ます』と云つて、渠は二つも三つもの仕切りのさきまでも行き、あちらの窓を締めたり、こちらのを押さへたり――前のを上げたり、後ろのを引いたり――烟が這入つて來ると、それ見よと云はないばかりに獨りで立ち働くのだが、トンネルをぬけてあかるくなると、直ぐまたその窓々のがらす戸は他の人々の爲めに遠慮なく引き落された。

それでも、渠は一層いこぢになつて、

『トンネルが來ます。トンネルが來ます』と心配して働らいた。

『氣違ひだぜ。』

『なアんのこッたい！』

『は、は、はッ！』

『初めて分つたと見え、渠のいこぢに對する皆々のいこぢも張り合ひがなくなつたので、中心點を有しない社會のやうに、話しがまち／＼になつて來た。

　それでも、窓が締まると、またそれを直ぐあとからあけた。

　渠も往生してしまつたのだらう、いくつもの仕切りを這ふやうに越えて、自分の席へ歸つて來た。

『まるで、牛見たいだ。』

『さう、さ、遠慮も知らん畜生ぢや。』

『なアに、夜這ひの稽古だらう。』

『は、は、は、はッ！』

　皆はわざとらしく笑つた。

　僕は斯うなると、渠をも氣の毒になつた。從つて、渠の細君には一層同情の念が起つた。或トンネルを出ると、突然僕等はちよッと外では見られない美觀、壯觀の上を通つてゐた。高いところを走る

り、海には今や沈まうとするゆふ日が大きな眞ツ赤の玉の如く、ぽつねんと浮んでゐた。きら〳〵とその光線の柱が海のおもてから樹立の上へのしあがつて來るやうに見えた。

『あゝ、えゝ景色ぢや』と叫んだものもある。

『御覧なさい――あれを』と、僕は下向きになつてるかの女に注意した。

かの女も一目は見たが寂しいゑみを僕に見せた切りで、また子供に目を落した。

『トンネルが來ます――トンネルが』と、男は、自分の席に返つてからも、ふり向いて皆に注意してゐた。

『トンネルは、もう、來ません。』斯う、僕のとなりにゐた人がその正面の渠に告げた時、渠はその人にふり返つて、

『さうですかア』と、疑はしさうに聲をのろく引いて、口をあけてゐた。

この時、僕は氣付いたのだが、渠の瞳子の力はその向いた方の物にしツかり集つてゐないやうであつた。

『トンネルが――トンネルが』と、渠はまた思ひ出したやうに、時々、あたりを見まはした。

もう、然し、皆のものは渠を忘れた如く、外の話をして、なかには金澤に着くと十二時頃だから、宿を取らないで女郎屋に行く方が一擧兩得だなどとしやべつてるものもあつた。

然し僕の心は寧ろ僕の正面にゐる一婦人の胸中を思つて、そこにそそられてゐた。それに久し振りで、ゆふべ一晩を旅に寢たゆるみが、もう、毎日の勤めや、かの慣れツこになつた自分の妻子などのことは半ば忘れさせて、

『どこまでもこの色の白い女について行つたら、きツとこの氣違ひなどは見棄てさせることが出來るのだが――』と云ふやうな空想に僕を遊ばせてゐた。

『……』かの女も、言葉はなか〳〵聽かないが、僕が窓でも眺めてゐると、僕の横がほをそツとうかがつてるほどの淡い親しみは持ち出した。夜に這入つて、月が涼しく僕等を一つ窓から照らし初めてからのことだ、かの女は心細さうに、向ふから初めて、僕に言葉をかけた、『十二時にもなりますでしようか、――向ふへつきますのは？』

『さうでしよう、ね』と、僕は答へて、旅行案内をひらいた。そして北陸線の時間割りのところをあけて、かの女の手に渡した。『十一時二十五分とありますが、この汽車はよく後れるさうですから。』

『左やうで御座いますか、ね？』じッと表を見てゐたが、『ありがたう』と、さし出したその手が顫えてゐるのが見えた。

『ステーションへ着くまでのお近づきでした、ね。』斯う云ひながら、僕は案内を受け取つた。

男は僕とかの女との顏を見くらべてゐた。

『…………』かの女はにが笑ひをしてから、男の顔を見た。

『この男さへ無ければ』と云ふやうなことが、僕には考へられた。『あなたがたは、然し、お宅かお知り合ひが待つてゐるのでしよう――』

『えゝ――』何だか曖昧な返事であつた――男と顔を見合はせて。

『わたくしなどは、どうしても、寢てゐるところを叩き起しても、宿はきめなければならないのですから――』

『わたし達もどうなりましよう』と、かの女は男に相談するやうであつた。

『向ふへ着いてからの樣子だ。』男はもツたいらしく云つた。

僕は、何だか、この汽車がこのまゝいつまでもとまつてればいい、またはいつまでも金澤に着かないやうに走つてればいい――さうすれば、やがてこの女は僕の物にならうにと思つた。

いよ〳〵目的地に近づいた時は、他の人々も言葉少なになつた。そして荷物を棚からおろしたり、帶を締め直したり、客車中がわさ〳〵とし出した。

この男と女とも直ぐ出られるやうに支度をあせつて、人のことなどは忘れてしまつたやうだ。そして僕が手がるに客車を出る時、別れの言葉を云つたが、氣が付かなかつたやうだ。

昔、知らない娘のあとをつけて、途中でその影を見失つたことがある――その時の心持ちのやうな

寂しみを帶びて、僕は十二時少し過ぎに、とツ付きの宿屋へ這入つて、二階の一室に案內された。どうせ食事は濟んでゐるのだから、寢るばかりのことにして、直ぐ寢どこを取らせ、寢まきに着かへてから、獨りで行燈——その時瓦斯も電氣も同市にはなかつたやうだ——の光のもとで卷煙草を一本吹かしてゐた。

すると、ちよこ〳〵と僕の室內に這入つて來たのは、例の男だ。脊をかがめて近づいて來て、行燈のかげから僕のかほをのぞいたが、何とも云はないでまたちよこ〳〵とあと戾りして行つた。

僕も、渠が室を間違へたのだらうと思つたから、ただそのままにした。

『こちらです』と、女中の注意がきこえた。

やがて隣室に、けふ一日聞き慣れた子供の聲がした。若し子どもが泣き出されでもしたら、僕の神經には一大禁物だから、さきへ眠るに如かずと思つて、僕は床の中へもぐり込んだ。

『わたくし』と云ふ低いぼやけた聲が、暫くすると、ふと、ふすま一重を隔てた室から、僕の枕もとにつたつて來た、『腦病でしたら、あなた大變親切にして吳れました。』

『はい』と、簡單に、小いが然し情の籠つた返事だ。僕は直ぐかの女の五六ケ月になつた大きい腹のことを思ひ浮べた。

『然し、もう、よろしい。これから、また、一緒に神の道を傳へます。』

『はいっ』
それツきりしんとして、話し聲は二階のどこからも聽えて來なかつた。
僕も勞れてゐたので、いつの間にか眠りに入つてしまつた。
翌朝起きてからはツきりと考へると、渠の病氣がまだ直つてゐないのを知つてるのは渠の妻だけらしい。そしてその病氣が氣違ひ病であることは、渠自身は初めから知つてゐないらしい。小使ひになる身でありながら、きのふは餘ほど確信あるやうに『反對者等を追ひ出してしまう』と語つた。ゆふべはまた『一緒に神の道を傳へる』と云つてた。そして渠は汽車の進行中トンネル狂であつた。
僕は隣室よりも後れて朝飯を喰ひながらも、矢ツ張り、その細君の胸中が思ひ切れなかつた。
いよ／＼出發となつて、渠等は下へおりて行つたので、僕は二階からそツとのぞいてゐると、二臺の人力車で、さきのに男は無器用にぼんやりしたからだを乘せ、あとからのに肉づきのいい白い女が相變らず憂ひを帶びて從つて行く。
僕はかの女だけを呼とめて、何だか、しんみりと心からの慰めと別な生活に入る手立てとを與へてやりたい氣がした。が、自分も矢ツ張り小使ひと大して違ひのない、一府廳の傭ひの身であるのに思ひ付いて、そんな考へを即坐に斷念したと同時に、またいつものやうに世の中がいやになつた。
――（大正二年）――

泡鳴全集　第三卷　終

大正十年二月十五日印刷
大正十年二月二十日發行

泡鳴全集第三卷

（非賣品）

著作權所有

著作者　岩野美衞

國民圖書株式會社代表者
發行者　中塚榮次郎
東京市麴町區內幸町一丁目六番地

印刷者　井波修次郎
東京市神田區三崎町二丁目三番地

發行所
東京市麴町區內幸町一丁目六番地
國民圖書株式會社
電話新橋一二七番
振替東京五二二九八番

印刷所　國民圖書株式會社印刷所

（製本　佃製本所）